



平成23年度

第59回

全国私学教育研究集会

群馬大会 研究集録

日本の未来を拓く私学教育

※本報告書中に幾つかの画像を掲載しておりますが、生徒が特定できる画像については省略させていただきましたのでご了承ください。

目 次

C O N T E N T S

発刊のことば	1
実施概要	3
大会役員等一覧	4
全体集会	5
開会式	7
報告	1 4
記念講演	2 5
部 会	3 8
私学経営部会	3 8
教育課程部会	9 8
法人管理事務運営部会	1 5 6
進路指導部会	2 0 6
国際理解教育部会	2 6 3
特色教育部会	3 1 5
参加者数	3 6 7
開催地・研究目標一覧	3 6 8
編集後記	3 7 0

発刊のことば

財団法人日本私学教育研究所所長 中 川 武 夫

平成23年10月27日・28日の2日間、群馬県高崎市の群馬音楽センター、ホテルメトロポリタン高崎並びにエテルナ高崎において、全国から約500名の教職員の皆様にご参加いただき、第59回全国私学教育研究集会群馬大会が、「日本の未来を拓く私学教育」を研究目標に開催されました。

本大会は、財団法人私学研修福祉会の主催、群馬県、高崎市並びに日本私立中学高等学校連合会の後援で、多くの関係団体のご支援、ご協力をいただき、群馬県私立中学高等学校協会、関東地区私立中学高等学校協議会並びに財団法人日本私学教育研究所が実施いたしました。

初日の開会式では当研究所の吉田 晋理事長の挨拶に始まり、本大会実行委員長の関東地区私立中学高等学校協議会・堀井基章会長、群馬県私立中学高等学校協会・小茂田恵三会長のご挨拶、さらに、公務ご多忙中にもかかわらず、群馬県知事の大澤正明様、高崎市長の富岡賢治様にもご臨席の上、ご祝辞を賜りました。

開会式後の全体会は2部構成で行われ、第1部では、日本私立中学高等学校連合会・吉田 晋会長より「私学教育への取り組みについて」と題して、「就学支援金」や「東日本大震災による被災地への政府の対応」、「学校での ICT の活用」などに視点を置いて、現状をご報告いただきました。第2部では、「“音楽のある街・高崎”からのメッセージ“音楽の力で育む子供の心と豊かな未来”」をテーマとして、財団法人群馬交響楽団常務理事の五十嵐靖男先生に、「音楽による情操教育の向上と普及～県民とともに歩む群馬交響楽団～」を演題にご講演をいただき、さらに、講演後には群馬交響楽団のご厚意により、オーケストラの演奏も行われ、ご参加の方々から好評を得ることができました。

2日目からは、私学経営部会、教育課程部会、法人管理事務運営部会、進路指導部会、国際理解教育部会、特色教育部会の6つの部会に分かれ、それぞれのテーマの下、講演、研究発表等を中心に活発な情報交換も行われ、多大な成果を収めることができました。

この度、上記の研究成果等を集録に纏めました。各学校の今後の教育活動のお役に立ていただければ幸いに存じます。

最後に、本大会開催にご尽力いただきました講師・研究発表者の方々、また司会・記録並びに運営に携わっていただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

なお、次年度の第60回全国私学教育研究集会は、平成24年10月11日・12日の2日間、新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会、社団法人岩手県私学協会並びに財団法人日本私学教育研究所の実施により、岩手県盛岡市・ホテルメトロポリタン盛岡NEW WINGにて、「未来を拓く私学教育 一人間力を養い人格の完成を目指す」を研究目標に、6部会で開催が予定されております。新潟県・東北6県私学関係の皆様のご健闘を期待するとともに、全国から多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

実 施 概 要

研究目標 日本未来を拓く私学教育

会 期 平成23年10月27日（木）・28日（金）の2日間

会 場 全体会場 群馬音楽センター
部 会 ホテルメトロポリタン高崎／エテルナ高崎 会議室

参加人員 437名

基本日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
第1日 10月27日 (木)				45 受 付	45 開 会 式	45 報 告	30 全 体 会 報 告 記 念 講 演 講 演	30 演 奏	移 動	教 育 懇 談 会
第2日 10月28日 (金)	受 付	開 会 式	部 会	昼 食	部 会	閉 会 式				

研修内容

第1部 報 告 「私学教育への取り組みについて」

日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋
財団法人日本私学教育研究所 理事長

第2部 “音楽のある街・高崎”からのメッセージ「音楽の力で育む子供の心と豊かな未来」

記念講演 「音楽による情操教育の向上と普及～県民とともに歩む群馬交響楽団～」

講 師 財団法人群馬交響楽団 常務理事 五十嵐 靖 男

群馬交響楽団演奏

演 目 「管弦楽のためのラプソディー」(外山雄三 作曲)

「夏の思い出」(中田喜直 作曲) 他

指揮者 上 野 正 博

- 部 会
- ① 私学経営部会：私学経営の活性化と次世代リーダーの育成
 - ② 教育課程部会：次代の私学教育を見通した教育課程と評価について
 - ③ 法人管理事務運営部会：事務室が変われば、学校も変わる
 - ④ 進路指導部会：個性を伸ばし夢をかなえる進路指導の実践
 - ⑤ 国際理解教育部会：グローバルな視点を養う教育を目指して
 - ⑥ 特色教育部会：建学の精神 原点に立ち返る

大会役員等一覧

1. 大会役員（順不同）

増田 壽男	（財団法人私学研修福祉会 法政大	理事長（総長）
吉田 晋	（財団法人日本私学教育研究所 富士見丘中学高等学校	理事長（校長）
實吉 幹夫	（財団法人日本私学教育研究所 東京女子学園中学高等学校	副理事長・全国集会総括責任者 理事長（校長）
山中 幸平	（財団法人日本私学教育研究所 学校法人山中学園	副理事長（理事長）
中川 武夫	（財団法人日本私学教育研究所 淑徳巣鴨中学高等学校	所長（校長）
鈴木 康之	（財団法人日本私学教育研究所 水戸女子高等学校	全国集会副総括責任者 理事長（校長）

2. 実行委員（順不同）

委員長 堀井 基章	（関東地区私立中学高等学校協議会 学校法人堀井学園	会 事 長
副委員長 小茂田 惠三	（群馬県私立中学高等学校協会 前橋育英高等学校	会 長
委 員 廣瀬 和喜	（茨城県私学協会 学校法人東洋大学	会 事 長
船 田 元	（栃木県私立中学高等学校連合会 作新学院中等部高等学校	会 長 理事長・中等部校長
小 川 義男	（社団法人埼玉県私立中学高等学校協会 狭山ヶ丘高等学校	会 長
大 羽 克弘	（社団法人千葉県私立中学高等学校協会 千葉英和高等学校	会 事 長・校長
工 藤 誠一	（一般財団法人神奈川県私立中学高等学校協会 聖光学院中学高等学校	理 事 長 理事長（校長）
森 本 純生	（群馬県私立中学高等学校協会 高崎商科大学附属高等学校	顧 問 理事長（校長）

全 体 集 会

- 1 日 時 平成23年10月27日（木） 12時45分～17時00分
- 2 会 場 群馬音楽センター
- 3 開 会 式 12時45分～13時45分
 - (1) 開会のことば
全国私学教育研究集会群馬大会 全体集会運営委員長 野 口 秀 樹
 - (2) 主催者挨拶
財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋
 - (3) 実行委員長挨拶
関東地区私立中学高等学校協議会 会長 堀 井 基 章
 - (4) 歓迎のことば
群馬県私立中学高等学校協会 会長 小茂田 惠 三
 - (5) 来賓祝辞
群 馬 県 知 事 大 澤 正 明 様
高 崎 市 長 富 岡 賢 治 様
 - (6) 次期開催地代表挨拶
新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会 会長 千 葉 満
 - (7) 次期開催県代表挨拶
社団法人岩手県私学協会 会長 小田島 順 造
 - (8) 閉会のことば
全国私学教育研究集会群馬大会 全体集会運営委員 森 本 純 生
- 4 全 体 会 13時45分～17時00分
 - 第 1 部 報 告
「私学教育への取り組みについて」
日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋
財団法人日本私学教育研究所 理 事 長
 - 第 2 部 “音楽のある街・高崎” からのメッセージ
「音楽の力で育む子供の心と豊かな未来」
 - (1) 記念講演
演 題 「音楽による情操教育の向上と普及 ～県民とともに歩む群馬交響楽団～」
講 師 財 団 法 人 群 馬 交 響 楽 団 常 務 理 事 五十嵐 靖 男
 - (2) 群馬交響楽団演奏
演 目 「管弦楽のためのラブソディー」（外山雄三 作曲）
「夏の思い出」（中田喜直 作曲） 他
指揮者 上 野 正 博

5 全体集会運営委員（順不同）

委員長	野口秀樹	（樹徳中学校 理事長・校長）
副委員長	小茂田恵三	（前橋育英高等学校 校長）
委員	大川義	（共愛学園中学高等学校 校長）
	森本純生	（高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長）
	松本兼太郎	（東京農業大学第二高等学校 校長）
	市川賢太郎	（高崎健康福祉大学高崎高等学校 副校長）
	高山幸索	（常磐高等学校 校長）
	市川平治	（新島学園中学高等学校 校長）
	佐々木克典	（学校法人白根開善学校 理事長・学園長）
	狩野紀憲	（関東学園大学附属高等学校 副校長）
	嶋村孝	（明和県央高等学校 教諭）
	中村博志	（桐生第一高等学校 教諭）

全体集会

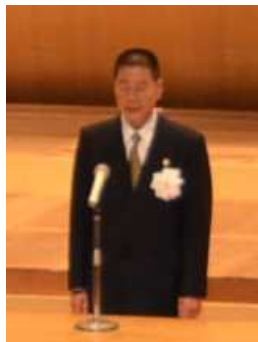
開 会 式



開会の言葉

全国私学教育研究集会群馬大会

全体集会運営委員長 野口 秀 樹



皆様、ご苦勞様でございます。

群馬大会開会に先がけまして、去る3月11日発生いたしました東日本大震災によりお亡くなりになられた多くの方々に哀悼の意を表し、黙禱を捧

げたいと存じます。恐れ入りますが、ご起立をお願いいたします。

黙禱。〔黙禱〕

お直りください。有り難うございました。どうぞご着席ください。

改めまして、本日は、全国各地より多くの先生方にご参加をいただきまして、まことに有り難うございます。この大会が実り多きものになりますよう努めてまいりますので、よろしくをお願いいたします。

それでは、ただいまより、平成23年度第59回全国私学教育研究集会群馬大会の開会式を執り行います。

主催者挨拶

財団法人日本私学教育研究所 理事長

吉 田 晋



皆様、こんにちは。本日は第59回全国私学教育研究集会、北は北海道から、南は九州、沖縄まで、多くの先生方にご参加いただきまして本当に有り難うございます。

また、本日は、公務ご多用のなか、群馬県大澤知事、そして高崎市富岡市長にもご臨席いただきまして開会できますこと、日本私学教育研究所、そして全国の私立中高を代表いたしまして、改めて感謝申し上げます。本当に有り難うございます。

今年の大会は、2年前から群馬県にお願いをいたしまして、関東ブロックの先生方、堀井会長を中心に皆さんでご協議いただき、群馬県がお引き受けいただくということで、当時の会長でいらっしゃいました森本先生が快くお引き受けいただき、それを現会長の小茂田先生に、お引き受けいただき、このようなすばらしい会場でこの大会が開催されることになりました。今

年は、先ほど黙祷を捧げさせていただきましたけれども、3月11日に、本当に我々には想像できない災害を受けて、私立学校の生徒、教職員も10数名の方が被害にあわれました。

ご家族の問題やその他様々な問題、また現実には福島第一原子力発電所のあの事故によって、今、放射線における汚染という非常に怖い状況が続いているのも事実だと思います。

しかし、そういう中で、こうして全国の私学の先生方が集まって一つになって、何を考えているか、それは、今回のテーマでもございます「日本の未来を拓く私学教育」、私は、「未来を拓く」ももちろんですが、今までのこの日本の教育、特に中等教育、初等教育の担ってきた私立学校の役割というのは大きなものがあると思っています。

そういう意味では、私立学校があつてこそ、この日本の教育を支えてきたんだ、そういう気持ちを忘れずに、皆様で一つになってこの大会を運営し、そしてそれが21世紀を担う子ども達に良い教育を授けられるものとなるものと信じております。

そういう意味では、今日、大澤知事もご出席でいらっしゃいますので、一つだけお願いをさせていただきますと、全国からこうやって私学が一つになって集まっております。それは実は、群馬県の来年度の私学助成の増額を要求しに集まらせていただいております。ぜひ知事には、もう本当に財政が厳しいのは十分理解しておりますが、群馬県の私学も厳しく、また全国の私学のためにも、ぜひ頑張ってくださいようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

本日は、有り難うございました。

実行委員長挨拶

関東地区私立中学高等学校協議会 会長
堀 井 基 章

本大会の実行委員長を務めさせていただいております堀井でございます。一言ご挨拶と御礼を申し上げたいと存じます。



まずは、先ほどからのお話のように、3月11日の東日本大震災、そして原子力発電所の事故、復旧、復興ということを願っているわけですが、本当にどこまでやれるのか、やってくれるのか、

我々はどこまでその力添えができるのかというのは、大変心配でなりません。一日も早く復興されることを願っているところであります。

何しろ本日は、本当に公務ご多用のところ、知事様、市長様がこの大会にご出席をいただきまして、本当に有り難うございます。

第59回の全国私学教育研究集会は、関東地区が当番ということで、関東の各県が協力してやっていこうということでありますが、実質的には群馬県の私立中学高等学校協会が中心となって企画、運営していただいているわけでありまして。その上に日本私学教育研究所と連携をとりながら、内容の濃いプログラムを作成し、皆様方に参加をしていただく、ということでありまして。

その中で、ご案内をいたしておりますように、今回の一つの特徴といたしましては、先生方もよくご存知のように、こちら高崎市、群馬県は、音楽による情操教育の向上と普及ということを掲げていらっしゃいます。この群馬交響楽団というのは、1945年、昭和20年に創設されたと同っております。そういう交響楽団の今回は演奏と講演ということで、そのコラボレーションという試みをこの大会で我々にお示しいただけるということでありまして。一つの私学ならではの記念講演だろうと思いますので、このあと行われると思いますが、私もそのあたりをひとつ注目したいと思います。もちろん各部会の研修、皆様方がご参加されて活発な研修をしていただければ何よりであります。

いつも言われることですが、私立学校も公教育の一端を担っているわけですが、どうも公立、私立というものの学費の格差をはじ

め、いろいろな格差もありますし、私学の抱える問題もたくさんあるわけであります。ぜひこの全国大会においてそんな話も皆様同士で意見交換するなりして、各県にお持ち帰りをいただき、そして各県の事情にあわせて、いろいろと私学同士、あるいは対県に対していろいろな形で私学としての活動をされることも一つの手だろうと思います。

そうやって研修されたことと、この大会のもう一つの意義と考えますのは、全国からいらっしゃっているわけですので、同じ県の先生方とはいつもお会いになっていらっしゃるのだらうと思います。他県の先生方とはなかなかお会いできないし、お話しする機会がないわけでありまして、こういう機会に、いろいろな部会とか、あるいは懇親会、こういう席で他県の先生ともよくお話をいただき、本当に知り合いになっていただき、この大会が終っても、あとで、「ああ、あの先生にもう一回あのことを聞いてみよう」というような、そういう輪を広げられるのもこの大会の一つの意義になるのだらうと思いますので、名刺交換等をされながら、そういうものも得ていただければ何よりかなと思います。

本日と明日、2日間の研修でございます。先生方がこの大会に参加して良かったなと思われるよう期待するところであります。今後さらなる私学の発展ということを祈念し、参加をいただきました先生方に重ねて厚く御礼を申し上げます。どうも有り難うございました。

歓迎のことば

群馬県私立中学高等学校協会 会長

小茂田 恵 三

皆様、こんにちは。群馬県私立中学高等学校協会会長の小茂田でございます。

本日は、ようこそ群馬へお越しいただきました。そしてようこそ、ここ高崎市へお越しいただきました。秋も深まってまいりまして、上毛の山並みが色鮮やかな紅葉に染まり始めまし

た。本日ここに、第59回全国私学教育研究集会群馬大会を開催しましたところ、全国各地より多くの皆様のご参加をいただき、誠に有り難うございます。

また、公務ご多用のなか、群馬県知事・大澤正明様、高崎市長・富岡賢治様にご臨席を賜り、衷心より感謝申し上げます。有り難うございます。

本大会は、財団法人日本私学教育研究所、私学研修福祉会の主催、群馬県、高崎市、日本私立中学高等学校連合会の後援で、群馬県私立中学高等学校協会並びに関東地区私立中学高等学校協議会が実施をいたしますが、この大会実施に至るまでには多くの関係団体のご支援、ご協力をいただきましたこと、改めて御礼を申し上げます。

さて、このたびの東日本大震災は、戦後世代の私達にとって未曾有の体験です。同時に、今、私達一人ひとりが、何ができるかを真剣に問い、行動していかなければならないという思いを新たにいたします。

今、時代は、大きな転換期を迎えています。震災により明らかになった諸問題への取り組みは、国をあげての改革へとつながっていくものと考えられます。先行きの不透明感はぬぐえないまま、時代は刻々と変化していきます。

このような中、学校教育の場においても、教育の質の向上、学校の質の向上が、どの学校にも求められています。とりわけ私ども私立学校は、それぞれの建学の精神を体して次の世代を担う人材の育成をその使命とするところであります。このような時代だからこそ、自主自立の精神を持った私学人が我が国を背負って立つものと確信しております。

さて、この群馬の地は、関東平野の北端にある地域で、赤城山、榛名山の裾野が緩やかに広がり、山岳地帯からの水流は利根川に集約されて関東平野を流れています。中山道や三国街道



が交差し、新しくは関越道、上信越道、北関東道も整備され、東北地方や上信越地方と緊密につながっております。様々な人々が行き交い、文化が交流してきた地域であります。

今回、このような群馬の自然環境や歴史、文化の一端にも触れていただき、大いに研修を重ねながら、明日の私学教育のさらなる発展への一助となれば幸いです。今後ますますの発展を祈念して歓迎のことばといたします。本日は誠に有り難うございます。

来賓祝辞

群馬県知事 大澤 正明 様



皆様、こんにちは。群馬県知事の大澤でございます。

冒頭から吉田会長さんから要望をいただきました。群馬県は、今年から第14次の群馬県総合計画「はばたけ群馬プラン」をスタートさせるところであります。その中の重要施策の一つに、人づくりを掲げております。今、私学団体ともしっかり連携して、群馬県は、全国でもトップクラスの補助体制をとっておりますので、会長さんにはどうぞご安心をいただければと思っております。

それでは、一言ご挨拶申し上げます。

本日、第59回全国私学教育研究集会群馬大会が、全国から多くの皆様方をお迎えいたしまして、ここ群馬県で盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに、皆様方のご来県を200万の県民とともに心より歓迎申し上げます。

皆様方には、日ごろから私学教育の振興のために格別なご尽力を賜っておりますことに、心より深く感謝申し上げます。

今日、教育を取り巻く環境は、急激な少子・高齢化の進行、グローバル化、価値観、ライフスタイルの多様化等、大きく変化をしております。こうした中、全国から私立学校関係者およ

び教職員の皆様が、このように一堂に会され、「日本の未来を拓く私学教育」をテーマとして、2日間にわたりまして研究集会を開催されますことは、誠に意義深いことであり、その成果が今後の私学振興のさらなる発展に大きく寄与することを期待申し上げるところでございます。

私は、県政を推進するにあたりましては、まず人づくりが重要と考えております。地域が輝くためには、そこに暮らして、その地域の未来を担う子ども達が夢と希望を持って成長できるよう育てていくことが必要であり、このことがまさに教育の力であると考えております。

本県も、未来を担う子ども達のために教育の充実と発展、そして私学振興のために全力で取り組んでおるところでございます。どうか皆様方におかれましても、それぞれの地域で今までと変わらぬお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、開催にあたりご尽力をいただきました関係の皆様方に、重ねて感謝申し上げますとともに、本日ご出席の皆様方のご健勝、ご活躍を心よりご祈念申し上げ、お祝いのことばとさせていただきます。本日は大変おめでとうございます。

来賓祝辞

高崎市長 富岡 賢治 様



第59回全国私学教育研究集会を群馬県高崎市で開いていただきまして、まことに有り難うございます。ようこそいらっしゃいました。

高崎は、よくご存知の方ばかりではないと思いますが、きわめて開放的な市でございまして、江戸時代から常に交通の要地ということで、中山道とか、東山道とか、日光例幣使街道、利根川の船運の起点だということで、全国から異文化が集まってまいりまして、開放型の社会をつくってきたという特色がございます。商業の町

ということで、江戸時代から商都、商業の都という特色を持っておりまして、それが未だにそういう特色を持っておりまして、高崎は割合商業が盛んな町でございます。

昨日お泊まりいただき、また今日、もしお泊まりいただくとしたら、もし足を延ばしていただくのでしたら、温泉が、伊香保温泉、草津温泉がございますが、これは高崎市ではありませんので、なるべく高崎市に泊まっていただきまして、お泊まりならずにすぐお帰りになるようでしたら、せめて夕食は高崎で食べていただきたいと思うわけでございます。

では、何がおいしいのかということになりますと、高崎というのは、もともと群馬というのは、「こなごの文化」といいまして、要するに、うどんやそばが特色のところでございます、さらに野菜が非常においしい。近郊野菜から高原野菜。この野菜がおいしいというのは割合に全国的にも評価が定まっております。それから豚とか牛肉とか、なかなかいいものがございますので、お泊まりにならなかったら、せめて夕飯だけでも高崎市で食べていっていただきたいということをお願いいたすわけでございます。

ちょっと2分ほど時間をいただきますが、私、市長になります前は、すぐそばの地域の公立の大学と女子大学の学長しておりまして、その前はずっと長く文部省、今の文部科学省で仕事をしております、私学関係者の方々とは大変深いおつきあいをさせていただきました。ぜひ一つだけご紹介したい私の業績がございます。

国立教育研究所の所長というのをやっております、そのときに、日本の最大の教育問題は何かという問題意識を持っておりまして、これは学力低下だとよくいわれますが、学力低下というのは、ご存知のように、OECD の調査がありますが、あれが低下しているかどうかというのは評価が分かれるところでございます。この辺は議論が分かりますが、確実に日本の子どもが低下している、世界最低の水準にあることが一つあるわけでございます。

要するに、日本の子どもは、学習意欲がない。

要するに勉強する意欲が世界でダントツに低いというのは、これだけははっきりした数字になっているわけでございます。私自身はそういう問題意識を持ちまして研究をいたしました。10年前の国立教育研究所の研究なんていうのは、どんな良い研究でも、大体今の文部科学省は一切見ません。大体役所というのは、5年前くらいの研究資料なんていうのは、どんなに良くても見ないものですが、ましてや10年前の研究でございますから、研究所をあげて研究いたしまして、参考までに申し上げたいのですが、学習意欲がない日本の子どもにどういうきっかけがあったら勉強する気になるのだろうかという調査をやったことがございます。

東京と岐阜県の子ども1万人近くに、子どもとその親とその担任の先生、全部にアンケートとヒアリングなどをいたしました。どういうきっかけで勉強する気になるのだろうか。4分の3くらいはNo 回答です。なぜかといったら、勉強する意欲を持ったことが一度もないという子が4分の3いるわけです。

あとの4分の1はどういうきっかけで勉強する気になったのだろうかと聞きましたら、三つあることがわかったのです。

一つは、「親か、先生か、とにかく一応信頼している人間から本気で褒めてもらおうと、やる気になる」という。褒めて育てるということだと思います。

二つ目が、驚くことに、「学校の授業がわかる状態が続くこと」というのがありました。毎日つまらない授業を聞いていると勉強する気なくなるというのは当然のことです。

三つ目が、「何か朝、日の出を遠くに見たり、夜、満点の星を見たりすると、やる気になる」という。

新聞にも大きく出ましたが、そういう調査を私はやったことございます。高崎市と関係ない話で恐縮でございますが、まだインターネットで引きますと、ございます。「児童生徒学習意欲の調査」でございます。私学の関係者の方にお集まりいただいたときにそういう話をさせて

いただいたことを思い出しながら、今日は、私、昔のお仲間のようなつもりでおります。高崎市に来ていただきまして、顔を会わせていただきまして大変幸せでございます。

どうぞ研究集会が実りありまして、また高崎を気に入って帰っていただきますようお願いいたしまして、ちょっと長くなって恐縮ですが、ご挨拶といたします。有り難うございました。

次期開催地代表挨拶

新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会



会長 千葉 満

新潟県・東北6県私立
中学高等学校協会協議会
の会長をさせていただ
いております青森県私立中
学高等学校長協会の千葉
と申します。

本日は、全国各地から
たくさんのお仲間である

先生方をお迎えいたしまして、平成23年度第59
回全国私学教育集会が盛大に開会されますこと
を心からお喜び申し上げるものでございます。

この本日の資料の中にも速報で入っていると
存じますが、次回、第60回大会は、新潟県・東
北6県が担当いたしまして、岩手県盛岡市にお
いて開催されることになっておりますが、担当
地区を代表させていただきまして一言ご挨拶を
申し上げます。

はじめに、去る3月11日の東日本大震災によ
って被災された多くの方々に心からお見舞いを
申し上げます。東北は、青森県、岩手県、宮城
県、福島県が地震と津波によって大変大きな被
害を受けました。瓦礫の撤去とか避難生活から
仮設住宅へ引っ越す、そういうことがありまし
て、すでに半年余りが経過したこのごろ、よう
やく少しずつ復旧・復興が進んでおります。こ
の災害に際しまして、各私学協会あるいは中高
連を通して、全国の皆様方から本当に心温まる
お見舞いや励ましをちょうだいいたしました。このことにつきまして、この場をお借りい

たしまして深く感謝を申し上げますものでござい
ます。

大震災の影響で様々な問題が山積しておりま
す。特に原子力発電所の事故によって家へ帰れ
ない、その帰られる可能性はまだまだ先のこと
である、あるいは岩手、宮城、福島の3県から
他県へ転校していった幼・小・中・高の生徒は
1万4000人を上回る、この方々を今後どうする
のか、定住地をどのように定めていくのか、生
活の再建と道のりはまだまだ遠いのでございま
す。

このような中での大会の開催でございますの
で、何かと行き届かないこともあるかとは存じ
ますが、今回の群馬大会でいろいろと学ばせて
いただきまして、新潟県・東北各県が協力しな
がら、岩手大会を盛り上げてまいりたいと思っ
ております。

本日は、岩手県の私学協会長である小田島先
生に大会の内容等についてご紹介いただくとい
うことにさせていただきたいと思えます。

本日ご参加の先生方におかれましては、来年
は力強く復興をみせる東北をぜひお訪ねくださ
り、岩手大会に多数参加くださいますことを伏
してお願い申し上げ、開催地の代表として一言
ご挨拶させていただきました。どうぞよろしく
お願いを申し上げます。

次期開催地代表挨拶

社団法人岩手県私学協会 会長

小田島 順 造



皆様、こんにちは。岩
手県の小田島でございま
す。どうかよろしくお願い
いたします。

本日は、第59回全国私
学教育研究集会群馬大会、
小茂田会長のもとに、す
ばらしい開会を目の当た
りにいたしまして、心から関係各位に感謝申し
上げたいと、そのように思います。

今、新潟・東北地区会長の千葉先生からご挨拶

拶をいただきましたが、来年は岩手県で開会することになりました。今、東北は、皆様ご存知のとおり、3月11日、マグニチュード9という未曾有の大震災によって1000年に1度といわれるような大津波の影響を受けまして、混乱極めるなかで大変な被害を受けました。

そのなかで宮城県、福島県、岩手県は、その被害は甚大でありました。特に福島県におきましては、地震、津波、そして原発という極めて難しい、計り知れない被害を受けております。以来、もう7カ月の月日が経過いたしました。

今、我々の願うことは、早く復旧・復興が整うことを願うものでございます。皆様方からその間、各県の私学関係者から多大なるご寄付、あるいはボランティア支援等々いただきました。先般、中高連を介しまして義援金もたくさんいただき、本当に力強く感謝を申し上げるところでございます。改めて皆様方に感謝と御礼を申し上げたいと思います。有り難うございました。

さて、来年度は、岩手県が担当するということになっておりますが、もうすでにパンフレット等々で中身についてはもうおわかりかと思いますが、「未来を拓く私学教育」をメインテーマとして進めたいと考えております。今、日本私学教育研究所の方々のご指導をいただきながら進めておるところでございますが、本日は、本県の実行委員20名ほどのメンバーで、研修、そして視察を含めてまいっております。

どうか皆様方のご指導を賜りたいと思っております。そして、被害に受けたご恩に対して誠意をもって素晴らしい大会にしたいものと、このように願っておるところでございます。

私事になりますが、私、西日本にちょっと出向いたときに、「どこから来たんですか」というお話をいただいたので、「岩手県から」というお話をしたら、岩手県がどこにあるかということをたまたまその人はわからなかったのですが、あえてここで申し上げますが、岩手県は、本州の最北端、地図でいうと、青森県の下のところの太平洋側にあるところが岩手県でござい

ます。

岩手県は、ご存知のとおり、四国4県の面積を有する大きな県でございます。産業といえば、第一次産業、農林水産業が主であります。しかし、文化人にも宮沢賢治とか、石川啄木とか、新渡戸稲造とか、たくさんの偉人を輩出している県でございます。今年6月には平泉中尊寺が、浄土思想が認められて世界文化遺産に登録されております。

どうかそういう歴史のある県でもございますので、来年度はぜひ皆様方、本県にお越しいただきまして、素晴らしい研修ができることを期待いたします。

以上、申し上げまして、次年度開催地の挨拶とさせていただきます。有り難うございました。

閉会の言葉

全国私学教育研究集会群馬大会

全体集会運営委員 森 本 純 生



私ども群馬県がこの大会をお受けしましてから約2年間の間、準備をしまいにしました。その間、群馬県、また高崎市、中高連の後援を受けまして、そして県下各私立学校の先生方の応援をいただき、また今日は、大勢の各校のご父兄の方にもここにおいでをいただきまして、盛大に全体集会の開会式を開催できました。心より感謝を申し上げます。

それでは、これをもちまして、第59回全国私学教育研究集会群馬大会の開会式を閉じさせていただきます。本当に有り難うございました。

「今後の私学教育への取り組みについて」

財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋
日本私立中学高等学校連合会 会 長



改めまして、こんにちは。先ほどご挨拶させていただきまして、最初にお断り申し上げておきますが、群馬県の皆様におかれましては、私の余計な発言によって、補助金が増える増えないの問題にならなければいいと思っております。因みに今一度確認したいのですが、群馬県は確かに全国レベルで非常に高く、高等学校が、全国平均が32万7,507円のところ34万6,345円で、全国3位でございます。これは本当にすばらしい数字でございます、知事がおっしゃるように努力していらっしゃると思います。

ただ、私が言いたいのは、それだけじゃ足りないということなんです。今日は、保護者の皆さんも多数お越し頂いておりますので、あえてそれをお話しさせていただきたい。今日、私学の情勢ということいろいろ考えてきたのですが、実際に、保護者の皆さんも含めて、就学支援金、高校無償化というものが始まって、いったい今どういう状況だろうかということなんです。

保護者の皆さんにとっては、確かに年間11万

8,800円、授業料の負担が減りました。これは私も良いことだと思います。これは本当はもっと負担が減らなければいけないと思います。

ただ、実際に私立学校にとって、学校というのは私立も公立も同じことだと思いますが、運営するには当然費用がかかります。それは学校という土地、建物、そしてそれを動かす光熱費とかの固定費、そして何といたっても学校にとって財産は教員なのです。先生一人ひとりが、それぞれの学校の教育目標に合わせた、より良き教育をする仲間としていかに働いてくれるか。ですから、今、お母様達もご存知だと思いますが、公立学校で、教員の質が悪いとか、いろいろなことをいわれます。

民主党政権になりまして、教員の資質向上といって、いろいろやり方を変えて、教員免許状の方法を変えようとか、いろいろなことを言っているのです。ただ、私立学校というのは一校一校なのです。一法人一法人なのです。そうすると、それぞれの学校が、自分達の教育の目標を定めて、うちの学校はこういう教育をします、うちの学校はこういう教育をします、それを保護者の皆さんと受験生の皆さんが選んで、うちの子どもにはこういう教育がいいと、選んで入ってくるのが私立学校ですよね。

公立学校はどうかといったら、もともとが、まず義務教育の小学校、中学校というのは、これは義務教育ですから、当然、お父様、お母様達は子どもに義務教育を受けさせる義務がある。子どもに教育を受けさせないのは親の責任である。ですから、義務教育で準備されている。

つまり、それは、一律の同じレベルの教育を広く国民に与えようというのが義務教育です。

そして高等学校はどうかといたら、義務教育ではありません。そうでないところに公立学校というのができました。それは戦後たくさん数が増えました。それは、アメリカの GHQ の支配下において教育力を上げよう、それで地域の学校が必要だということで、旧ナンバースクールではなくて、公立の義務教育、小中学校終わったあとにいく学校というのを、その地域に根ざした学区というものをつくって、その中で教育を受けさせて、そして日本人の総体の教育力を上げようという、ある意味で画一的な教育をしようということが、学区制ということであったわけです。

それが、私立学校は、そういう中で、先ほど言いましたように、保護者の皆さんと子ども達を選んで、自分の子どもにはこういう教育が合っているといって行くようになって、そうすると、私立学校が飛び抜けているみたいに受け取る人が出てきた。では、私立学校はどうかといたら、東大や京大に何人入れたというのがいい学校か。私立学校はそんなこと一つも思っていないのです。ただ、悔しいかな、日本の社会制度というか、お役所というか、東大や京大を出た人が世の中を牛耳っているようになっている。そういう学校にいった人が何かエリートみたいになっている。そういう学校にたくさん入れた学校がいい学校だというように世の中が流れている。

ところが、私立学校は決してそういう学校だけではない。逆にいえば、もっと下のほうの、公立学校に入れない人も入って、その子達に良い教育をやっている学校だってあります。それだけ幅広いのですが、それぞれ一つひとつの学校なわけです。この学校がいかにかそれぞれいい教育をしているか。そのために教育の仲間としての教員というのは大切なのです。

ですから、だめな教員がいたら、その学校の教育は成り立たないです。先生というのは、我々にとっては学校の中で最も大事な財産なので

す。資産なのです。ですから、その教員がよくなければ良い教育ができないということで、みんな必死にやっている。

ところが、片や公立は、1回就職して、そこにいたらそのまま給料が上がって、嫌だったら他の学校に移って、転校し、ただ定年まで過ぎて、昔、「デモシカ先生」という言葉があったのですが、そういう人達が蔓延ってしまったために悪くなった。それを一緒にされてしまうのでは、我々は困る。ということで今いろいろな動きをしています。

話が全然ずれてしまっていて申しわけないのですが、ですから、我々は、教育にとって何が必要かといわれたときに、やはり何といっても、安定性と継続性というものを考えていかなければいけない。それがここ数年、政権が交替して、政治情勢によってところどころ変わってきていることのひとつが、今言った教員免許状の話なのかもしれません。

それだけではありません。いろいろなことがどんどん変わってきています。高校無償化もそうです。最初に高校無償化のことを申し上げたのも、実は、公立の義務教育でもない高等学校が無料になりました。私学では、保護者の方が負担する額が減りました。

ただ、ここに大きな違いがあるのは、公立学校の教育というのは、すべての教育費が、県なり都道府県なり市町村なり、もしくは国からのお金、つまり税金で賄われている。私立学校の場合には、皆さんご承知の授業料と学納金、そうした皆さんに負担していただく費用と補助金といわれている国や都道府県からの補助、それによって運営されている。

ですから、先ほど群馬県が全国で3位と言いました。でも、その額だって40万円っていいわけです。保護者の皆さんが負担している額を考えれば、半分にも満たない。つまり、よりよい教育をするためにはお金がかかるけれども、その少ししか補助金が出てないのでは、良い教育ができないのです。そして良い教育を受けさせたい保護者の皆さんがたくさんお金を出

さなければいけないのです。そんなばかな話ないじゃないですか。だから、補助金は増やしてもらわなければいけない。

知事は「人」ということをおっしゃっていました。本当に人づくりです。そしてこの21世紀という社会を担ってもらえるのは、今のこの若い世代、今、教育を受けている子達。この子達が将来大人になって、今度自分が子どもを産むときに、そういう生活の不安とかを考えたら、子育てなんかできるわけじゃないですよ。子どもの数、人口なんて増えるわけじゃないです。一步間違えたら、今の子ども達は、大人になって1人で2人も3人ものお年寄りを養わなければならないになってしまうのです。そんな夢もなにもない国に生活させていったらどうなるか。今の大学生はどうでしょう、今の高校生はどうでしょう。

実際に、もう就職なんか真剣にしようとしなくなってしまう。逆に就職しようとしたら、大学生なんて3年生で就職活動していなかったら就職なんかできない。高校生に至ってはもっと就職できない。自分達の夢や希望だって、実現されないと思ってしまう。やる気なくなってしまう。

そんなことしていいたら、この国終わってしまうわけですよ。それを変えていくのが教育なのです。それを今の政府に望みたいわけです。

ですから、我々は、やはり今の子ども達にあったより良い教育をするために何が必要か。文部科学省の皆さんにもお願いしたいのは、我々私立学校というのは、実は高等教育局という大学を中心とした教育をやっているところの中にあります。そして、初等中等教育局という、これは義務教育の小学校、中学校、公立学校を運営している。教育課程などはそこでやります。そしてもう一つ最近絡んできているのは、専修各種学校を担当している生涯学習局です。この三つの局があるわけですが、我々が何かやる。例えば今の無償化の話、お金のことは高等教育局です。だけど、システムに関しては初等中等教育局、これは高校無償化の絡みです。それからカリキュラムのことも然りです。

そうやっていろいろなところを横断しているのですが、横断しているわりに、きちんとした結果をもらえないという印象があります。

そこで、私達私学には自由が確保されているからこそ、この私学教育が充実発展するのだという、公教育全体の健全性が維持されるということを考えなければ、私学はやっていけないのです。

よく私学は自主性を重んじて、そしてそういう中で私学が自由な教育をやっている、私学はずるいことをやっている、というようなことを考えられる人がいます。決してそんなことないのです。つまり、私学の自由なんていうのは決して無限大ではないわけです。

ご承知のように、私達には、例えば教育課程なら学習指導要領という一つの柱があります。その柱をしっかりと持って、その柱をいかにその時その場にいる子ども達に合わせた良いバランスで教育を行っていくかというのが、我々の教育です。その結果が何かというと、例えば中高一貫校もそうです。それから帰国子女に対する教育もそうです。英語教育の特区制もそうです。数え上げたらキリがないですが、私立学校が長年にわたって、子ども達に合った、良いと思った教育をそのまま文部科学省のほうで、「コピーする」といったら言い方が変ですが、それを持ってきて、そして公立に当てはめている。

そうすると、中等教育学校というのができました。中等教育学校というのができたら、私立の中高一貫校なんて中等教育ではないという。別々の法人では連携もだめだし。ちゃんとした基礎でつくって、中学、高等学校を一緒にして中等教育学校にしないとか、いろいろなことを言うわけです。

ただ、その前から中高一貫校を我々はやっているのに、どこがいけないのか。中学と高校の先生を全部一緒にして、みんなで一人の子どもを育てている。一言でいったら、中等教育というのはそれが一番ではないですか。それで良い結果が出ているから良い社会人ができている。

にもかかわらず、今度それをそういう公立で

自分達でつくると、杓子定規でいろいろなものに嵌め込んでくるわけです。最終的にかわいそうなのは誰かという、子どもなのです。子ども達が迷子になっていってしまうのです。

ですから、私学の自由の内容とか、自由の限界の判断というのは、責任は、原則として各私学に委ねられているわけであって、同時にそれは、私学に課せられた社会的責任であって、社会から避難されるような自由を主張してしまうとすれば、逆に社会から我々が抑えつけられることになってしまうわけです。

ですから、社会に阿る必要はもちろんありませんが、反社会的姿勢をとることも好ましいことではありませんし、私学の多様な人間が様々な価値を競い合う人間社会の中の一員として日々評価の対象とされているわけですから、不自然な形ではなく、ありのままの評価、それをしてもらわなければいけない。

逆にいえば、我々は常に評価を受けている。その評価は何かといえば、生徒の増減がそうですね。入学試験を受けて入ってくるわけですから。良くない学校には生徒は来ないわけです。公立学校の学校評価をやらなければいけないとか、そういうのと全然違うんですよ。常に評価されている。

ただ、それに阿っていたら、私立学校の本当の良さはなくなってしまう。ですから、我々は自分達のしっかりとした教育というものを持っていかなければいけない。そうすると今度そこで、今回の震災を含めて、お母様方も皆様も思っていらっしゃると思いますが、私学の施設設備はいったいどうなっているのか。公共性については、はっきりいって全く変わらないと思うのです。公立学校も、私立学校も、実際には公教育の器の修復をしなければいけない。国公立を問わず国が本来やるべきだと思います。ただ、そうはいっても、実際にはそうならない。

そこには、先ほど来申し上げているように、私立学校は個のものであって自由があるんだから、建物とか、そんなものを100%してしまったら、自由がなくなってしまう。つまり、お金

を出してしまうと口を出さざるを得なくなるんだよということを言いたいのかもかもしれません。ただ、実際にそうなんでしょうか。

良い教育をやっているところに、全く公と変わらずきちっとした教育をやっているところだったら、同じ扱いしても何の間違いもないと思います。にもかかわらず、全く違う。

私は、今回の震災で最も怒っていることは、国、政府の動きの遅さ。特に子ども達に対する遅さです。ご承知のように、除染の問題もありました。すぐそこに何ミリシーベルトという土があるにもかかわらず、それを取り払うのを国も県もやらない。私学、やっていいですよ、やったら2分の1だけお金を出してあげます、2分の1、自分達でやりなさい、と。では、やったとして、その土をどこに持って行ってどう捨てたらいいのか。わからないからとりあえず置いておきなさい、と。子ども達、こっちで遊んでいる。許されるのでしょうか。

ここにいらっしゃる方はほとんどの方が40歳を過ぎていらっしゃると思いますから、もし何かあったとしても、ここ数年の寿命が縮まるだけだと思いますので、あんまり私は気にしないでいいのではないかと。失礼ですけど。ただ、子ども達は本当にこれからがあるんです。

特に女の子なんて、子どもを産まなければいけないとか、いろいろあるわけです。その子達に目がいつているのかどうか。そしてそれが、はっきり言って、公立の子、私立の子と壁をつくってお金の補助が違うなんて、そんなこと言っていたら、もうこの国、終わります。それを私は、今の政府に何とか変わってほしいなと思います。そうしなければ、もっともっとすべてにおいて遅れてきてしまう。もしこれが遅れてきてしまったら、大変なことになるのではないのでしょうか。

今回、第三次補正予算というのが出まして、何とか被災3県については少しずつ手厚くなってきました。しかし、被災は3県だけではないと思います。それ以外にどうやって広めていくか。それがこれからの我々の課せられた課題で

はないかと思うのです。

そういう中で、ちょっと施設設備ということで、今日、特に皆さんにお話ししたいことを1点申し上げさせていただきますと、学校の施設設備は日々変わっています。これ、どういう意味で変わってきているかといったら、ご承知のように、世の中の流れが世界的に瞬時に情報がみられるインターネットとか、ICT 化がどんどん進んできたわけです。今から10年前を考えてもまったく違ったと思いますし、そのもう10年前だったらもっと違うかもしれません。

我々が情報教育で使うツールとしての、道具としての、ハードもそうだしソフトもそうですが、まったく変わってきました。ですから、IT教育というのを森総理のときに始めて、公立学校に1校1台コンピュータが配置されました。そのときに我々、公立学校に1台だったら私立にもみんな1校1台出せといったら、得意の定番ですよ、「私的な学校である私立学校の資産になるのだから、2分の1しか補助できない」と、2分の1しか補助してくれない。残りの2分の1は、最初に保護者の皆さんにお話しした授業料の部分で我々は使うしかない。

それがだんだん進歩して、1教室、今では公立では生徒1人、1校1台。我々、2分の1しか補助をもらえない。1人1台なんていません。うまく回して使えばいいのですから。そうしたら、100人に50台。つまり半分の台数をくれればそれでいいです。それだって2分の1補助ではないかというのですが、本体のことを考えると、100%補助になるからだめだということです。そうやってみんなで遅れていくわけです。

そういう中でも私学はみんなそれを買って、それを良い教育に使っていこうというわけです。

それをやっているうちに、子ども達も家庭のほうで、今ほとんどの子ども達の家にはパソコンがないということはなくなっているのではないのでしょうか。かなり安くもなってきましたし、お父様、お母様達が、特にお母様達がインターネットに興味を持たれているし、ないとこ

ろはないのではないかと思います。

そういうふうになってきた中で、逆に瞬時に情報が見れるということによって、子ども達が外に出ていかない。そういう流れもあるのは事実です。

そういうことで、今、国として新たな方策というものが考えられていまして、例えば、来年度の予算の中に、文部科学省は、グローバル人材育成推進のための初等中等教育の充実ということで、世界に雄飛する人材の育成ということで、中高で15億、そして大学で409億ほど補助金をとっています。これは、日本再生重点化措置ということなのですが、これは、高校生の海外留学や外国人高校生の招致を推進して、英語力の向上、検証、そしてインターナショナルバカロレアを取らせようとか、いろいろなことを考えて、子ども達をもっともっと外に向けようというんですね。

ただ、これ、外に向けよう、向けようといっていますが、最初にちょっとお話ししたように、日本の世の中の流れが変わらないかぎり不可能です。例えば大学が今何をいつているかといったら、我々が高校で、例えば英語教育をもっと変えたい、今までの日本の受験英語では無理だ、あんな英語を使っていたってどうしようもないではないか、世界で通用しない。ただ、あの英語も大事なところもあるわけです。文法とか、そういうのをしっかりしなかったら、将来、論文なども書けないだろうし、単語知っていると、そういうことでもいいことがあるのです。だけど、それと並行して、コミュニケーション能力のツールとしての英会話というか、英語能力ですね。そうすると、少なくとも TOEFL だなんだと必要になってくる。

では、今度、そういうものを一生懸命やって、例えば TOEFL で800点取った。そうしたら、大学入試、英語は免除しますよくらいの形に大学がなくなれないかぎり、子ども達がそちらを勉強している余裕がない。そして今度、そういうことばかりやっていると、大学からすれば、高校生、学力が落ちるから困る、今の子ども達

は学力が落ちているからと文句言ってくるわけです。

それで入試も、AO 入試とかで早くから採っておきながら、学力がないという。今度、大学に入る。大学に入って海外に留学したいとか考えても、3年生で1年間行ったりしたら、まず大学で就職活動が遅れる。留学してきても決してプラスではないのです。企業のほうも、英語のできる連中がほしいとかいっているけれども、それだったら、海外から来た人達を採ってしまうとか、そういうことになる。

今、悪循環なのです。グローバル化人材を育成しようというのだったら、そこをまず変えていかなければいけない。今ようやく道筋が出てきましたが、そういう意味で、国がグローバル化の人材を育成しようという方向になってきた。そこに合わせて出てくるのが、今度は教育の情報化ビジョン。

情報化というのは何かと云ったら、教育をもっとグローバル化社会に合わせて、目で見て触れてというような感覚で広げていこうではないか、と。実際に今、ICT が始まってきている。

電子黒板というものもだいぶ普及してきました。今、先がけて、東京都は、各私立学校、学年2台プラス1、つまり、中学校に7台、高等学校に7台という2分の1補助を出してくれるシステムができました。だけど、これも東京都でも2分の1なのです。

今、国のほうの ICT も今度また新たに増えて3分の1とかいっていますが、そういう中で、私立学校がそういう機械を入れたとしたら、どうでしょう。公立はタダで1台入ったとします。誰も使わずにそのままの1台が残っている。私立学校は、入れた以上は絶対それを生かそうとする。それはお互いに、学校の経営もちろんですが、先生方の意思のもとに買っているから、そういうふうになる。

それを動かしていることによって、何とかそれもリーダーシップを取っていくことができる。ただ、それがこのままいくと、またこれが最初の話に戻ってしまうのですが、高等学校の



無償化が始まったおかげで私立学校は授業料等が上げられないとなれば、こういう新しい教育、例えば電子教科書とか、そういう問題も出てきます。そのときも、2分の1は学校というか父兄に負担してもらわなければならないとなるのだったら、私学は置いていかれてしまうのです。

ですから、我々は、そういう意欲はあるんだけれども、それをどう生かしていけるようなバックグラウンドをつくってもらえるかというのがこれからの状況の大切なところでございまして、私学の情勢云々というお話だったわけですが、私学は今こういうところから、文部科学省と一緒に財務省のあの2分の1という壁を破って、そして私立学校の独自性をしっかり残して、そしてそこで新たな教育をしっかりとできるような環境づくりをしていかないと乗り遅れてしまうということなのです。

ここで、大変申しわけないのですが、今日皆さんのお手元に「なぜ ICT を学校で使うのか」という資料が入っています。この世界の流れと日本の方向性ということです。実は本来ここにオーバーヘッドプロジェクターを使うなりパワーポイントで本当は映し出したかったんですね。そうすると、それだけするために費用がかかるものですから、申しわけないのですが、紙で済まさせていただいたのですが。日本マイクロソフトの文教ソリューション本部の滝田さんという、今、現場で学校の ICT とかをよく知っている方ですが、この方にまず今の日本の現状、その辺のところを話していただいて、先生方に、私が具体的なことをいうよりも、現場の声を知っている方に話してもらったほうがいいだろうということで、今日お呼びしています。

では、ちょっとその辺の事情を、滝田さん、お願いします。

「何故、ICTを学校で使うのか」

～世界の流れと日本の方向性～

日本マイクロソフト株式会社文教ソリューション本部シニアインダストリーマネージャー

滝田 裕三

こんにちは。今、ご紹介いただきました日本マイクロソフトの滝田と申します。よろしくお願いいたします。

私は、マイクロソフトの中で学校を担当している部署にありまして、その中で新しいソリューションを企画する立場にあります。マイクロソフトは、世界の100カ国以上でビジネスをしていまして、その中の政府とか学校様といろいろなビジネスをさせていただいているものですから、日本にいる私のところにもいろいろな国の事例といいますか、事情が伝わってまいります。ですから、今日は、「何故 ICT を学校で使うのか～世界の流れと日本の方向性～」というお話させていただきたいと思っています。

あと、余談ですが、私自身、私立の高校を卒業しました。社会人経験は20年くらいになりますが、一時期、日能研という学習塾に勤めたことがあります。そのときにいろいろな私学様のほうにも訪問したことがありますし、そういった意味では比較的私立の学校さんの教育に関して知っているほうかなと思っています。

では、本題にいきたいと思います。

「何故 ICT を学校で使うのか」。前段のお話もありましたように、日本の中でも学校で ICT

を使いましょうという流れはきています。まず、スライドの2枚目になっていますが、まず日本でいわれるのは、学校にパソコンとかプロジェクターを入れるときに、まず学力に役に立つのか、効果があるのかということをいわれることが多々あります。



目的は学力向上ですか？

スライド2

「確かな学力」の向上につながるICT活用

平成18年度文部科学省委託事業「教育の情報化の推進に資する研究」によるICT活用の教育効果の検証結果より

*独立行政法人メディア教育開発センター

http://www.tokushima-ec.ed.jp/ict_support/ict/pdf/pamphlet.pdf#search

	ICT活用無し	ICTを活用	差
小学校 算数	76.2	82.1	+5.9
小学校 社会	66.6	73.3	+6.7
小学校 理科	82.1	86.8	+4.7
中・高校 数学	72.9	78.8	+5.9
中・高校 社会	61.4	71.9	+10.5

ICT活用は授業後の客観テストの結果が高い

ただ、ここに関しては、文部科学省でもすでに実証されていて、スライド2にありますように、平成18年に「ICT 活用は授業後の客観テストの結果が高い」という結果が出ております。

次に、学力向上に役に立つのか。そのときに聞かれるのは、今度、先生方にパソコンを使ってくださいといったときに、今度いわれるのは、校務の効率化にそれは役に立つのかと聞かれることがよくあります。

それが今度スライド3になるのですが、これも、文部科学省のほうで実証研究されていて、結果が出ています。熊本県の事例になるのですが、ここでは、先生方の事務的な時間が効率化されて、指導の時間が1日当たり20分増加したというようなことで、その分、生徒さんの指導に使えるということが出てきたということです。あと、事務量が1校当たり5人分削減されたということで実証結果が出ております。

目的は校務の効率化ですか？

スライド3

http://www.kknews.co.jp/wb/archives/2009/10/20_23.html

(教育家庭新聞社のKKSブログより)

校務の効率化推進により指導時間が20分増加～熊本県 (2009年10月23日)

熊本県教育委員会は、文部科学省の「先導的教育情報化推進プログラム」の委託を受け、平成19年度から21年度まで、県立学校5校をモデル校として、校務の情報化に関する調査研究事業を実施している。

この事業により、教員1人1台の校務用PCを整備し、資産管理システム等を用いて全体管理することで学校の負担を軽減。また、校務分掌や役割分担の在り方など校務の見直し図られる。

さらに、モデル校での検証を重ねながら、校務支援システム(ゆうnet)を開発し、平成20年度から運用を開始した。

調査研究2年目の成果としては、教員の児童生徒への指導の時間が1日あたり20分増加し、校務支援システム導入により情報セキュリティが向上。また、事務職員が行う給与・手当や事務処理、旅費、情報連絡等の事務量が1校あたり0.5人分程度削減されるなど、具体的な数字として成果が現れている。

今、日本の現状をみますと、日本ではパソコンもしくはITを学校に入れる中で、学力に役に立つのかとか、校務の効率化につながるのか

とか、そういった議論が多いのかなと思っています。ただ、世界の状況をみますと、ちょっと様子が違うということがあります。それを少しお話ししたいと思います。

世界の流れは違う観点に注目しています。

スライド5、6ですが、21世紀型スキルについて少しご紹介させてください。

Microsoft
Partners in Learning
School Research

21世紀型スキルの背景 (1)

現在、大学3年生になる私の娘の例でお話ししましょう。彼女は数年後に就職し、2060年に退職を迎えます。経済学者は、これから退職までの約50年間、「15種類以上」の仕事に就くだろうが、それらの仕事は「現在存在しない職種」と述べています。同様に、現在米国で需要のある職種のうちトップ10に入っているものはどれも、2004年には存在しなかった仕事でした。

経済の革新が進む中で、仕事の内容や職種も常に変化してきている、今後、どのような種類の仕事が生まれるのか、そしてどのようなスキルが必要とされるのかを予測するのは、なかなか難しいことです。

(ページ・ジョンソン：インテルコーポレーション)

ス
ラ
イ
ド
5

これはインテルコーポレーションのページ・ジョンソンという方の話なのですが、自分の娘さんがこれから退職するまでの期間の中で就くだろうという仕事はどんどん変わっていくだろうというふうにいってしまして、実際、今ある職種のトップ10が2004年には存在しなかったということをいっています。

これから経済の革新とともに、仕事の内容や職種も常に変化してきている、それに対応するスキルはどういったものか予測するのは難しい、といっています。実際マイクロソフトも比較的な新しい会社ですし、最近ですと、グーグルさんですか、フェイスブックとか、本当につい最近出てきた会社があります。そういったなかで、企業もどんどん新しく出てきて、そのなかで求められるスキルは常に変化してきているということが今、現状として、事実としてあります。

それからスライド6を見ていただきますと、「反復的な作業」「基礎知識のみが必要な作業」「肉体労働系の作業」等の労働は、機械の利用や開発途上国へのアウトソースといったことが出てくるでしょう、というふうになっています。

その中で自分の所属する社会がより良く繁栄

するために、子ども達は新しい「21世紀型スキル」を身に付けなければならないということで、世界中でそういった動きがあるということをお伝えしたいと思っています。

Microsoft
Partners in Learning
School Research

21世紀型スキルの背景 (2)

ただし「反復的な作業」「基礎知識のみが必要な作業」「肉体労働系の作業」等の労働は、機械の利用や開発途上国へのアウトソースといった形で、急速に低コスト化が進んでいくだろうと、産業界も経済学者たちも同一の見解を示しています。

このような背景を踏まえて、今後の社会がより良く繁栄するために、子どもたちは新しい「21世紀型スキル」を身に付けなければならないと考えています。

(ページ・ジョンソン：インテルコーポレーション)

ス
ラ
イ
ド
6

では、その21世紀型スキルがどんなものかということですが、スライド7です。21世紀型スキルというのは、オーストラリアの大学の先生を中心に、いろいろなアカデミックの方、企業等も入って、いろいろ議論していくなかでできたものでして、英語の訳は決まったものがありますが、日本語訳はまだ確実に統一されたものがなくて、今日は、東大の山内先生の訳をお持ちしております。

Microsoft
Partners in Learning
School Research

21世紀型スキルとは

* 東京大学大学院 情報学環 山内祐平准教授 訳

- ① 批判的思考力 (批評精神を持って考える力)
- ② 問題解決能力
- ③ コミュニケーション能力
- ④ コラボレーション能力
- ⑤ 自律的に学習する力
- ⑥ ICT (情報通信テクノロジー) を確実に扱うことのできる能力・スキル
- ⑦ グローバルな認識と社会市民としての意識
- ⑧ 金融・経済に対する教養
- ⑨ 数学、科学、工学、言語や芸術といった分野への理解を深めること
- ⑩ 創造性

今のPISAに入っている項目

ス
ラ
イ
ド
7

この中には、1番から10番までありますが、①批判的思考力、②問題解決能力、③コミュニケーション能力、④コラボレーション能力、⑤自律的に学習する力、⑥ ICT (情報通信テクノロジー) を確実に扱うことのできる能力、スキル、⑦ グローバルな認識と社会市民としての意識、⑧ 金融・経済に対する教養、⑨ 数学、科学、工学、言語や芸術といった分野への理解を深め

ること、⑩創造性。

OECD の PISA の中に入っている項目は、この中の1番、2番、9番が、現状で図られているというようなところです。

ただし、この PISA のテストの内容も変わってきていまして、6番の ICT といったものも加味されています。ですから、少し前と現状では、特に社会で役に立つ、活躍するといったことを考えたときに、必要なスキル性といったものを見直す必要があるということで議論がされているということです。



それを受けまして、では、他の国ではどうしているかということですが、スライド8です。

すでに児童生徒1人1台、パソコンを配るいうところに進んできています。

ですから、日本と違うのは、入れたら効果があるかないかという話ではなくて、もう必要なものだというようなところになってきているといったことになります。

例えばイギリスですと、21世紀型スキルを身に付けるために、全員が ICT に触れることが必要で、そのとき、所得格差があるものですから、それを防ぐために税金を一部入れて、児童・生徒1人に1台行き渡るようにしましょうということです。

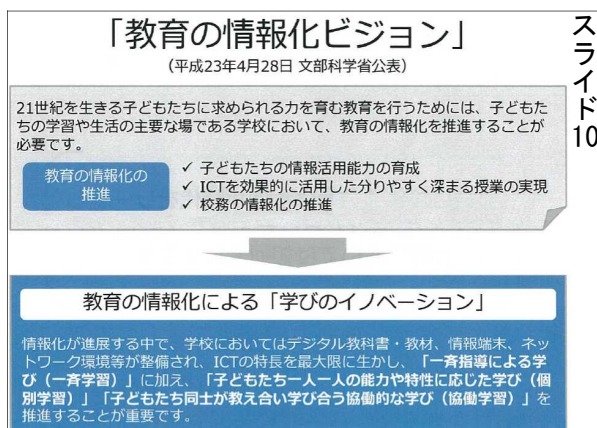
シンガポールでも、言葉は若干違いますが、「Teach Less, Learn More」ということで、子ども達は一人ひとり自主的に学習するような形にしろということで進めております。そのなかで、Future School というようなところでは、1人1台 PC 環境を実証しているというような国

もあります。

それから隣の韓国ですと、2015年までにすべての小・中・高にデジタル教科書を導入予定ということで、そこまで進んできています。

こういった形で、学力に役に立つ、校務の効率化、その先にいって社会で役に立つ、そういう子ども達になってもらうために ICT は必要だということで進んできているというふうにご理解いただきたいと思います。

それから次が「日本の方向性」です。



文部科学省でも日本の方向性ということで「教育の情報化ビジョン」を4月に発表しております。このなかでは、教育の情報化の推進ということで、情報活用能力の育成、ICT を効果的に活用したわかりやすく深まる授業の実現ということになっています。

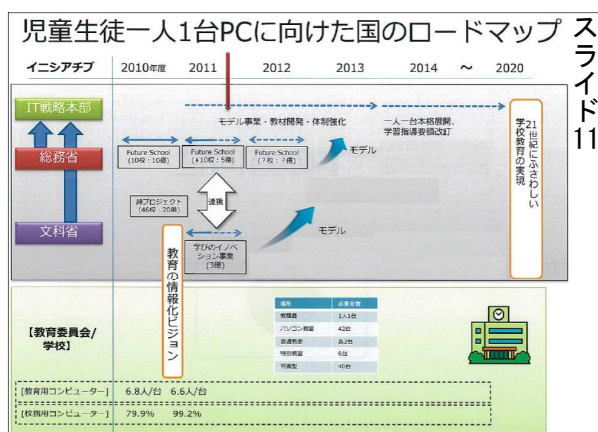
この先に、教育の情報化による「学びのイノベーション」ということで、この中では、自主性学習だけではなく、個別学習、共同学習に活用させていきたいと思います。

実際にロードマップといったところが、一番最後のページに書いております。

成長戦略の中には、2020年までに21世紀にふさわしい学校教育の実現ということで目標が定められておりまして、この中にデジタル教科書ですとか、1人1台情報端末、もしくはそれに合わせた学習指導要領改訂といったところが予定されているということでもあります。

昨年度から3年間かけてロードマップの実証をして、それが正しい方向かどうか確認しようということで、Future School というプロジェク

トが走っております。



スライド11

残念ながら、ここも公立の学校が中心になっておりまして、小学校10校、中学校8校、各種学校2校が入っています。そういった中で、1人1台、タブレット PC といったものを使って、どういう教育ができるかということを今、国のほうで実証しています。

それと合わせまして、教育の情報化ビジョンということで、普通教室、パソコン教室といったところで IT 計画も一緒に進んでいるということです。これは、どうしても公立のほうになってしまうのですが、公立のほうでもここまで動いてきているといったところがありまして、その世界の状況から、日本のほうでもこれから取り組んでいかなければいけないことで、徐々に動いてきているということです。

日本における教育は私学が時代をリードしていると思っておりますが、「ICT」の分野においては如何でしょうか？

その中で、私立ではどうかといったときに、私自身、私立の学校にいき、学習塾にもおりましたが、その中で私学が教育をリードしていると思っています。私自身も、高校時代を振り返ると、学校が私自身を伸ばしてくれたとすごく

思っていますし、今でもすごく学校には感謝しています。その中で、今ある教育の中で、今、ICTが重要になってきているといったことをお考えいただいて、学校の中で、21世紀に学校の子も達がどういうふうに学ぶかということを踏まえてご検討いただければと思います。

以上

有り難うございました。おわかりいただけましたでしょうか。ということで、今のお話等からしまして、最後にありました「日本における教育は私学が時代をリードしていると思っていますが、『ICT』の分野においては如何でしょうか」という言葉があります。

私は、ICT の分野でも絶対に私学はできると思っています。ただ、そこには、先ほど来お話ししておりますが、実際に学校教育に関わる設備の情報化のシステム化は多額の費用を要する。そして私立学校独自ではとても対応ができないというのが事実ではないかなと思っています。ですからこの情報化システム化が公教育の基礎的要件だとすれば、これについても、やはり国公私立という学校設置者の違いを越えた、国が国民の教育に責任を負うという立場で支援してくれる体制、それをつくっていかなければ、新たな時代の教育はできないと思っています。

先ほどもありましたように、韓国では再来年には電子教科書が始まるとか、いろいろなことがあるわけです。

そういうことで、せっかく彼が無償で来てくれた関係でちょっと宣伝だけさせていただきますが、今日、皆さんのところにマイクロソフトのプロジェクトスクールアグリーメントのご案内が入っています。これはようやくこぎつけたのですが、マイクロソフトのほうでも、私学がリードできるかどうか、費用が大変だということもわかってきているわけです。いろいろなソフトを学校団体でやれば15%オフしてくれるというアグリーメントがようやく研究所で頑張っ

これはたくさん入ってくれば、15%よりもっと引けるようになってくると思いますので、ぜひ皆さんご利用いただければ非常に便利だと思いますのであえて入れさせていただいております。

そういうことで、やはり私は、この私学が教育をリードしているという気持ちはいつの時代も変わらないのではないかな、と。そういう意味でいえば、我々がこれから先、この大切な子ども達を教育していくなかで、何が必要で、何をしなければいけないか、やはり考えていかなければいけないだろう。そして国民の教育を受ける権利をどう実現していくのか、そして誰が子どもを教育すべきなのか、教育費は誰がどのような役割で負担すべきなのか、そして私学の教育行政の所管はどうすべきなのか等々、学校教育に携わる誰もが口にしながらも、意識しながらも解決できていない問題というのはたくさんあると思います。それをこれから皆さんと

ともにしっかりとしていかなければいけないのではないかな。

そして今回の東北の大きな震災を教訓として、今後こういうことが起こったときにどういうふうに対応できるのか、それを我々自体もしっかりと学んでいかなければいけないですし、それをしっかりと備えて、今後こういうことが起こってはいけない、しかし、起こったときにはきちっとできる、そういう体制づくりも考えてやっていかなければいけないと思っておりますので、どうかよろしく願い申し上げます。

本当に話が支離滅裂で大変申しわけなかったと思いますが、これからも皆さんとともに、私学の振興、そして私学が日本の教育を担っているというその気持ちを忘れずにやっていかなければいけないのではないかなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

本当に本日、長時間お時間をいただきまして有り難うございました。

全体会

記念講演

「音楽による情操教育の向上と普及 ～県民とともに歩む群馬交響楽団～」

財団法人群馬交響楽団 常務理事 五十嵐 靖 男



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、群馬交響楽団の常務理事の五十嵐でございます。本日はよろしくお願いいたします。

また、本日は、群馬交響楽団をご利用いただきまして大変ありがとうございます。これから時間をいただきまして、演奏の前に群馬交響楽団のいろいろな取り組み等につきましてお話をしたいと思います。

本日、お手元にお配りしてある、こちらのプログラムがございます。それを1枚めくっていただきますと、本日のレジュメとなっております。私は、こちらを使いましてお話をさせていただきます。まずは、オーケストラとはどんなものなのかというようなお話をさせていただいて、続いて群馬交響楽団の活動、それから文化について話を進めさせていただきます。

I 全国のオーケストラについて

まず最初にオーケストラのことです。全国にオーケストラはいろいろありますが、日本オーケストラ連盟に所属しておりますプロ

のオーケストラは、31団体ございます。一覧となってお示ししてあるとおりでございますが、大きく分けて、首都圏オーケストラ、地方オーケストラに分かれます。首都圏オーケストラは11団体、残りの20団体が地方オーケストラとなります。

地方オーケストラは、概ね政令指定都市に一つあるようなイメージでございます。特に高崎市のような地方都市でオーケストラを抱えているのは、珍しいところでございます。

一番右の欄の類型をご覧になっていただければと思いますが、オーケストラの設立の形態は非常に多種多様になっています。地方公共団体、放送局、新聞社などのマスコミ、それから自主運営のオーケストラということで主に演奏料収入で自立的にやっているところ、あるいはホールが抱えているオーケストラといったところがあります。

群馬交響楽団の場合は、ちょっと変わっております。音楽仲間が集まってつくったオーケストラで、設立の主体が県民、あるいは市民というところでございます。群馬県、あるいは高崎市等から出資を受けておらないというところでございます。

そのようなプロのオーケストラが31あるわけですが、そこに楽員、演奏者が何人くらいいるかということですが、全国で約2,000名の楽員がおります。いったん入団すると、定年退職までお辞めにならないため、欠員があまり出ません。

I 全国のオーケストラについて

出典：オーケストラ年鑑2010

	オーケストラ名	創立年	公演数	区分・類型
1	NHK交響楽団	1926	104	首都・マスコミ
2	オーケストラ・アンサンブル金沢	1988	122	地方・ホール
3	大阪シンフォニカー交響楽団	1980	113	地方・自主
4	大阪センチュリー交響楽団	1989	96	地方・自治体
5	大阪フィルハーモニー交響楽団	1947	108	地方・自主
6	神奈川フィルハーモニー管弦楽団	1970	126	首都・自治体
7	関西フィルハーモニー管弦楽団	1982	114	地方・自主
8	九州交響楽団	1953	109	地方・官民共同
9	京都市交響楽団	1956	97	地方・自治体
10	群馬交響楽団	1945	143	地方・県民
11	札幌交響楽団	1961	128	地方・官民共同
12	新日本フィルハーモニー交響楽団	1972	139	首都・自主
13	仙台フィルハーモニー管弦楽団	1978	108	地方・自治体
14	セントラル愛知交響楽団	1983	82	地方・自主
15	東京交響楽団	1946	175	首都・自主
16	東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	1975	103	首都・自主
17	東京都交響楽団	1965	161	首都・自治体
18	東京フィルハーモニー交響楽団	1911	335	首都・自主
19	名古屋フィルハーモニー交響楽団	1966	116	地方・官民共同
20	日本フィルハーモニー交響楽団	1956	148	首都・自主
21	兵庫芸術文化センター管弦楽団	2005	109	地方・ホール
22	広島交響楽団	1972	111	地方・官民共同
23	山形交響楽団	1972	153	地方・官民共同
24	読売日本交響楽団	1962	91	首都・マスコミ
25	京都フィルハーモニー室内合奏団	1972	128	地方・自主
26	ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団	1988	25	地方・大学
27	静岡交響楽団	1988	19	地方・自主
28	中部フィルハーモニー交響楽団	2000	59	地方・自主
29	東京ニューシティ管弦楽団	1990	150	首都・自主
30	東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団	1973	79	首都・自主
31	ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉	1985	101	地方・自治体

● 1～24番は正会員、25番以下は準会員

● 公演数はアンサンブル、小編成の公演を除く回数

ということで、オーディションをしますと、大体何十倍もの競争倍率になって非常に厳しい競争となるということでございます。群馬交響楽団の場合ですと、全国どこからも人が集められるわけですから、群馬出身の楽団員は一人しかいないというような状況です。そういう厳しいオーディションを受けてもすぐ採用ということではなくて、試用期間というのがありまして、

音がうまく出せない、合わせられないというようなことであれば、本採用にはならないという非常に厳しい状況になっております。

そんな状況でございますので、なるのも大変ですが、なるまでもまた大変です。個人でいえば、小さいころからレッスン代を負担をする、さらに音楽大学の学費も非常に高いということで、かなり投資をしている形になろうかと思ひ

ます。さらに楽器も自分持ちで、なかには家1軒建つくらいの楽器を持っている楽団員もうちにはおります。さらに消耗品ということで、弓とか弦の毛替え、あるいはリード代、こういうものについても、一部助成はあるのですが、自己負担ということでございます。

ふだんオーケストラで演奏なり、あるいは自宅なりでおさらいをするほかは、フリーな時間はどんなことをしているかといいますと、ほかのオーケストラにいつてエキストラで出演をしたり、個人の子弟をレッスンしたり、高校、大学にいつて指導をしたり、という形で地域とつながって活動しています。

皆さん、職人的な性格で、プライドがあり、地域の文化を担っていくという気持ちで生活をされています。

そういう職人の集団をまとめていくのが指揮者ですが、指揮者は、5分くらい振れば、その力量、あるいは人間性というものが演奏にすぐ出てくるということでございます。優秀な指揮者であれば、オーケストラの持っている様々な音楽の感性を引き出してくれる。力量がちよつと足りなければ、楽員をまとめ切れずに演奏がバラバラになってしまうということで、指揮者の役割は非常に重要です。

II 群馬交響楽団について

そんな楽員と指揮者で成り立つオーケストラでございますが、わが群馬交響楽団はどんなオーケストラかと申し上げますと、群馬交響楽団は、終戦直後の1945年に、高崎市民オーケストラとして誕生しまして、今年でちょうど66年になるということで、地方オーケストラでは一番古い、草分け的存在になっております。おらが町のオーケストラとして地域に馴染んでおり、地域に一番愛されているオーケストラではないかと自負しております。

群馬県は、江戸時代、北の守りの位置にあり、大きな大名が長い期間統治をすることがございませんでしたので、当時、文化は、なかなか育ちにくいという要素がございました。そんなこ

ともありまして、群馬交響楽団は、文化における群馬県の最大の発信媒体にもなっております。さらには、県民の大きな誇りであり、県民のよりどころという位置づけもされております。

「群馬県の誇る三つの宝」がありますが、その中に群馬交響楽団が入っています。三つの宝というのは、尾瀬、上毛かるた、群馬交響楽団ですが、群馬県の子どもであれば、尾瀬学校で必ず尾瀬に行きます。そして上毛かるたを子どものときに習って、群馬交響楽団を聞いて育つということです。そういう形で群馬県人になっていくということです。ですから、群馬県人のアイデンティティの醸成にわが群馬交響楽団も貢献しているというところでございます。

III 群馬交響楽団の歴史について

群馬交響楽団の歴史でございますが、戦後の混乱から生まれたわけですが、非常に苦難の中から出発をして、新しい挑戦ですとか、幸運、あるいは周囲の支えによりましてこれまでやってくることができました。

大きくいくつかに分けられるのですが、まず誕生から昭和30年代までの時期を第1期とすれば、これは苦難の時期でありました。

終戦の年に創設されて、2年後にプロ化を目指したのですが、当時、地方都市でオーケストラが成功すれば日本の奇跡だというような言われ方をするなかで、無謀にもプロ化を図ったという経緯がございます。

当然、地方都市では演奏する機会がございませんで、食べていくということがなかなかできないというようなことから、学校をめぐって演奏を子どもたちに聞いていただくという、前例のない移動音楽教室を始めたという経緯があります。しばらく食うや食わずの状態が続きましたが大変だったのですが、幸運にも群馬交響楽団を扱う映画化の話が舞い込んでまいりました。

「ここに泉あり」という映画が昭和30年2月に封切りになりました。この映画は、地方文化のあり方、あるいは音楽を追求する真摯な楽員

の姿を扱う映画でございまして、全国で300万 す。この作品によって、群馬交響楽団が世に出
人ご覧になられて大ヒットした作品でございま たことになります。

Ⅲ 群馬交響楽団の歴史について

- ・群馬交響楽団は、苦難の中から出発し「新しいことへの挑戦」「幸運」「周囲の支え」により存続・発展してきた。

区分	年月	群響のできごと
第 1 期 (創立から昭和30年代) 苦難の時期	昭和20年 11月 昭和21年 3月 5月 昭和22年 3月 5月 昭和30年 2月 昭和31年 6月 昭和36年 7月 昭和38年 7月	「高崎市民オーケストラ」が創設 第1回定期演奏会開催 「群馬フィルハーモニーオーケストラ」と改称 プロとして再発足 移動音楽教室開始 映画「ここに泉あり」が公開、全国的に注目 群馬県が文部省から「音楽モデル県」に指定 群馬音楽センター完成 「財団法人群馬交響楽団」と改称
第 2 期 (昭和40年から25年間) 多彩な活動をより多く繰り広げ、対外的にオーケストラが認められていった時期	昭和52年 4月 昭和53年 5月 昭和55年 8月 昭和56年 4月 昭和57年 4月	財団法人関信越音楽協会設立 野外コンサート「森とオーケストラ」開催 草津夏期国際音楽アカデミー開催 豊田耕児 音楽監督に就任 群馬県知事 理事長に就任、県職員の派遣、賛助会員制度の導入などにより全県の支援体制が確立 高校音楽教室スタート
第 3 期 (平成以降現在まで) 演奏技術が一層向上するとともに、県外公演の拡大、東京公演の定着、初の海外公演の実現、楽団の若返りなど新時代を迎えた時期	平成 3年 2月 平成 3年 3月 平成 5年 1月 平成 6年 5月 10月 平成 6年 平成15年 10月 平成16年 11月 平成17年 1月 平成21年 10月 平成22年 1月 平成22年 4月	群馬シンフォニーホール完成 群馬交響楽団合唱団結成 高関健 音楽監督に就任 「プラハの春国際音楽祭」、「ウィーン芸術週間」に出演、初の海外公演を実現 創立50周年ベートーヴェン交響曲連続演奏会の開催、50周年記念委嘱作品「オーケストラのための遠景Ⅱ」(細川俊夫作曲)を東京・群馬で初演、高い評価を得る 定年退職制度導入 NHKテレビ番組「プロジェクトX〜挑戦者たち〜」で楽団の草創期が紹介され、全国から注目 天皇皇后両陛下、デンマーク国女王陛下同王配殿下をお迎えしての移動音楽教室開催 NHK 連続テレビ小説「ファイト」のテーマ曲を録音・出演 文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に参加 移動音楽教室の児童生徒延べ600万人突破 沼尻竜典 首席指揮者兼芸術アドバイザー就任 継続雇用制度導入
第 4 期 (平成23年以降) 組織体制、活動拠点が変わるなど大変革が迫られる時期	平成23年 3月 平成23年 6月 平成25年 4月 平成27年頃	群馬交響楽団中期ビジョン策定 群響発展戦略アクションプラン策定 公益財団法人へ移行(予定) 新拠点ホール完成(予定)

その後、活動の拠点がございましたので、こちらの群馬音楽センターの建設に向けた取り組みを始めました。

当時は、財政的にも余裕がなかったということで、市民運動として寄付を集めたという経緯がございます。そして昭和36年7月にこのホールができあがったということでございます。したがって、まず群馬交響楽団があって、そのあとに建物ができた、ソフトが先行している点では、非常に先進的であったと思います。さらに市民がお金を出し合ってつくったということで、市民の情熱、期待、地域の誇り、そういった思いがこの建物の中に入っているということでございます。

今年、この音楽センターは50周年ということで、ちょうどできて50歳でございます。今では市民の心の文化財という位置づけになっております。

もう一つ、アントニン・レーモンドという、日本の建築家に非常に大きな影響を与えた建築家が設計をしております、ドコモジャパンから、日本の近代建築20選に選ばれております、建築の世界でもこの建物はかなり有名でございます。

昭和40年から平成に入るまでの25年間で第2期といたしますと、この時期は群馬交響楽団が多様な活動によって対外的にオーケストラとして認められてくる時期でございます。

昭和56年に、豊田耕児さん、ベルリン芸術大学の教授であった方を音楽監督に招きました。それで群馬交響楽団の演奏レベルがアップした。さらに世界的な奏者との演奏、あるいは録音によって、国内外から大きな評価を得るということで、一地方のオーケストラから脱皮を図ることができた時代であります。

あわせて、同じ年の昭和56年、群馬県知事が理事長に就任をしたことで、全県的な支援体制が整って発展をした経過もございます。

平成に入って現在までが第3期ということになります。演奏技術がかなり上達しまして、県外公演もかなり定着をした時期です。特に平成

6年、海外公演としてヨーロッパ公演を実施しました。その結果、群馬交響楽団の演奏がスケール感を増しレベルアップが図られました。

海外公演を区切りに、定年制度を導入して、楽員が大きく入れ替わっております。同時に国際化も進んで、外国人の奏者もかなり増えています。現在、6名の外国人の楽員を抱えております。

プログラムに関しては、交響曲とか、あるいは協奏曲といった器楽曲が中心ですが、それにとどまることなく、現代音楽であったり、あるいはオペラであったり、バレエであったり、合唱つきの演奏の曲目をしたりということで、今では広範なレパートリーで対応させていただいております。

さて、これから先ということになると、今の時期がちょうど第4期に入る時期になっているということでございます。実は群馬交響楽団は、これから公益財団法人化の手続きを進めておるのですが、さらに今、高崎市のほうで拠点となる新しいホールの建設が予定をされている。ということで、かなり演奏の環境が変わってくると考えられます。

その一方で、少子・高齢化が進んで、だんだん集客が大変になってくるという面もあるため、今が楽団が発展できるかどうかという正念場と考えています。群馬交響楽団は、これから発展をめざす方向で中期ビジョンをつくったり、あるいは発展戦略アクションプランをつくって、今、改革を進めている状況でございます。

IV 群馬交響楽団の活動等について

次は、群馬交響楽団の活動についてでございますが、昨年、首席指揮者兼芸術アドバイザーとして、沼尻竜典さんを迎えております。新しい体制で演奏していくということでございます。

音楽上の方針としては、やはり地方にあっても、地方の枠にとらわれないオーケストラを目指すべきであろうということで、グローバル・スタンダードなオーケストラとして発展を目指

すということでございます。

首都圏のオーケストラとも対抗して、さらなるレベルアップを図っていくということで、どんどん新しいことに挑戦をしていこうではないかということで、新しいプログラムに挑戦をしている状況でございます。

演奏活動は、定期演奏会からアンサンブル事業までいろいろ各種やっております。全体としては年間に約145公演、人数でいきますと12万人くらいの方に群馬交響楽団の生の音楽を聴いていただいているということでございます。

IV 群馬交響楽団の活動等について

音楽監督等			音楽上の方針	
○首席指揮者兼芸術アドバイザー ・H22から群響の新たな顔として沼尻竜典氏を首席指揮者兼芸術アドバイザーとして起用、コンマス2名(女性+全国最年少コンマス)との新体制発足			・恵まれた環境(群響を大切に思う県民の姿勢・心意気)に安住することなく、常に新しいことに挑戦し、レベルアップを図る。 ・もう一度原点に戻り、スタンダードな曲で評価を得る。 ・古今東西の名曲を取り上げる一方、海外の新しい指揮者やソリストを起用	
演奏活動(平成22年度実績)				
自主演奏会	1 定期演奏会	9公演	13,057人	
	2 東毛定期演奏	2公演	1,406人	
	3 東京公演	1公演	1,116人	
	4 巡回公演	3公演	2,580人	
	5 移動音楽教室	62公演	43,216人(320校)	
	6 高校音楽教室	24公演	17,043人(25校)	
	7 特別演奏会	11公演	8,486人	
	8 依頼演奏会	33公演	32,872人	
	9 楽器セミナー		1,028人(72校)	
	10 アンサンブル	2公演		
楽員の状況(平成23年9月1日現在)				
弦楽器 43人	コンサートマスター ヴァイオリン ヴィオラ チェロ コントラバス	2人 20人 8人 7人 6人	・一回の演奏は70～80人。不足する場合はエキストラ対応。 ・各パートはローテーションで回している。 ・練習日数は定期演奏会の場合3～4日。その他の演奏会は1日か2日。 ・譜読みは各自で行い、練習会場はシンフォニーホールで実施。	
木管楽器 11人	フルート オーボエ クラリネット ファゴット	3人 3人 2人 3人		
金管楽器 13人	ホルン トランペット トロンボーン・バス・トロンボーン チューバ	5人 4人 3人 1人		
打楽器	パーカッション	3人		
	計	70人		

特に青少年の情操教育としての移動音楽教室、高校音楽教室はあわせまして86公演ほどあります。公演全体の6割くらいを占めておりまして、ほかのオーケストラと比較して、青少年に対しての情操教育活動の割合が非常に高いことが特色になっております。

楽員の状況でございますが、23年9月1日現在で70名で、曲目にもよりますが、70～80人くらいで演奏しております。なお本日は70人の楽団員が演奏をさせていただきます。

曲目によって不足する場合は、外部からエキストラを入れて回しております。練習は定期演奏会の場合は3～4日練習します。その他の一般演奏会の場合は1日、あるいは場合によっては2日という形で練習をします。難しい曲、あるいは新しい曲の場合は、若干時間をかけて練習しているということでございます。

譜読みは各自自分でさらってきて、それで指揮者のもとでリハーサルをするという形で曲を仕上げていく形になりますが、やはりプロですので、パツときて、パツと音をすぐ出して、細かい調整をやって早く仕上げております。

V 群馬交響楽団の経営状況について

次に、経営状況についてお話をさせていただきます。

オーケストラの経営につきましては、これは一般論でございますが、一言でいいますと、まったく儲からない事業です。なぜかといいますと、生演奏でマイクを入れないで演奏する関係がございまして会場に限界があるため、集客力が決まってくるということです。

東京ドームで群馬交響楽団が演奏しても音が届かない。集客が限られたところでやらざるを得ない。その上で、演奏する人たちが70人、80人という大がかりで演奏するという形になります。群馬交響楽団の場合ですと、1日の人件費が200万円かかってしまうのです。これで定期演奏会で4日練習して1日本番ということで5日間かけるとなると、楽団の原価だけで、人件費で1,000万円になってしまいます。それに外部から

指揮者、ソリストを呼んできますと、それは別料金です。さらに、ホールの使用料、楽譜の使用料、広告費、こういったものが上乗せになると、商業ベースでは基本的に成り立たないということなのです。

商業ベースで成り立たないと、市場からは除外されてしまうということですが、そういうことであってはちょっと困るわけです。そもそも人種とか、あるいは国境を超えて音楽は世界の共通言語という位置づけとなっているかと思えます。

特に、オーケストラが扱う曲目は、時の試練を経ており、200年、300年前からの曲を今でも弾く。そういう関係がありますので、音楽の世界でいえば、グローバル・スタンダードな曲をやっているということでございます。

したがって、音楽文化という点に關しましては、オーケストラが世界的な規模で社会的な役割を担う部分があるのではないかというふうにとらえております。オーケストラが、商業的に成り立たないから、なくていいんだということであっては、音楽文化というものが発展しないと思いますので、公的支援をいただきながら活動をしているという実態がでございます。

全世界、商業的に成立しているオーケストラはございません。どこのオーケストラも、何らかの形で、寄付か公的支援をいただきながら活動をしているという状況でございます。

経営状況は、収入は、約3分の1が演奏料収入、公的支援が6割ほどを占めております。民間からの収入は5%しかございません。一方、支出のほうは、人件費が6割、管理費が1割くらいありますが、管理費に事務局スタッフの人件費も含まれますので、人件費だけをとらえますと、約7割が人件費ということです。事業費は、出演料、ソリスト、指揮者の出演料等でございますが、約4分の1でございます。

これが首都圏の自主運営のオーケストラの場合は、収入が、演奏料収入が6～7割になって、公的支援が大体1割です。支出のほうは、一般演奏会の数が多いこともあって、指揮者、ソリ

ストの出演料の割合が非常に高い。さらに、事務局のスタッフが非常に多いものですから、管理費の割合が高くなることもありまして、相対的に楽員の人件費がかなり少ない形の支出構成になるという状況でございます。

地方オーケストラは、どちらかといいますと、公的な支援の中で賄われているという割合が高いのですが、国も地方も非常に財政難です。オーケストラとしては非常に心配をしております。

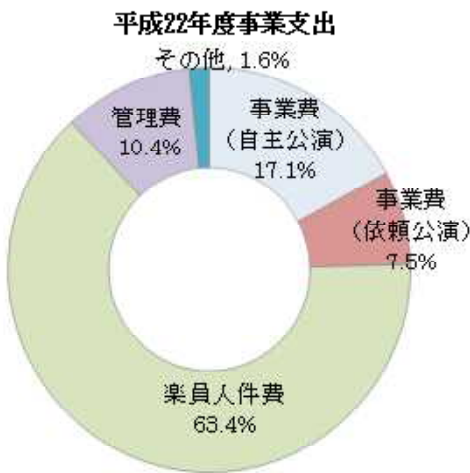
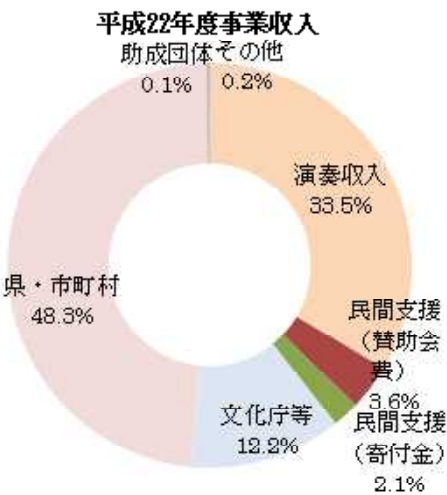
V 群馬交響楽団の経営状況等について

1 オーケストラの経営について

- ・儲からない事業
- ・構造的要因 集客力の限界（会場）、多大なコスト（人数、時間）
- ・地理的要因 都市力の弱さ、大都市でなければ立地困難
- ・公的支援不可欠

2 群馬交響楽団の経営状況（平成22年度決算）

- ・収入は公的支援の割合が高い。60.5%。
- ・支出は人件費比率が高い。楽員63.4% 事務局員含めると70.7%
- ・事業収支は赤字傾向



収入		
演奏収入	241,427,742	33.5%
民間支援（賛助会費）	26,200,000	3.6%
民間支援（寄付金）	15,313,656	2.1%
文化庁等	87,900,000	12.2%
県・市町村	347,398,700	48.3%
助成団体	550,000	0.1%
その他	1,164,560	0.2%
計	719,954,658	100.0%

支出		
事業費（自主公演）	120,571,583	17.1%
事業費（依頼公演）	52,820,583	7.5%
楽員人件費	447,188,482	63.4%
管理費	73,228,074	10.4%
その他	11,152,015	1.6%
計	704,960,737	100.0%

VI 移動音楽教室について

移動音楽教室でございますが、移動音楽教室は、昭和22年から始めてもう64年間ずっとやり続けております。規模、実績は全国1位ということです。3年に1度、群馬交響楽団を聴くという基本方針がございまして、小学校で2回、中学校で1回、高校で1回、あわせて、18歳になるまで4回群馬交響楽団の生演奏を聴くシステムが確立されております。昨年末で累計604万人の子どもたちに音楽を届けてきました。

ところが、このグラフを見ていただくとわかるのですが、推移は、学校の数が増えていますが、少子化によって生徒数は減少傾向になっています。

ホールで実施する場合と体育館で実施する場合の二つの音楽教室がありまして、できるだけいい環境で音楽を聴いていただくという方針がございまして、ホールのある市町村については、基本的にホールで実施をしています。ホールのない市町村は体育館でやるということで回しております。

六つプログラムがございまして、各学校の希望によって選択をしていただいております。

どういうシステムになっているかということですが、実施体制が、県と市町村の教育委員会の全面的なバックアップをいただいております。県の義務教育課さんが実施計画をつくり、その計画に基づいて各学校に割り振りをします。現在、24年から26年の第11次実施基本計画をつくっており、それができて、向こう3年間の計画で回していくという流れでやっています。

費用負担ですが、現在、こちらに書いてあるような金額をいただいておりますが、始めた当時は、1人10円をいただいております。10円は、当時、銭湯が10円です。おそばが15円ですから、今に換算すると約400円から500円くらいの金額をいただいております。

昨年の実績では1億6,600万円くらいの収入があり、その4分の1くらいが移動音楽教室でお金

をいただいております。

その成果に関しましては、まず小学校から高校までの期間は耳が一番いい時期です。年寄りになると高音が聴こえなくなることになりますが、音楽の美しさや音楽の喜びを伝えられる重要な時期だと思っております。

子どもたちが優れた本物の音楽に触れて曲の美しさ、あるいは演奏への憧れといったものを素直に感動することで、子どもたちに豊かな感性、あるいは創造性、あるいは自分の目標みたいなものが生まれてくるという効果がございます。

さらには、生のオーケストラの演奏を聴くという体験が、その後の音楽、芸術との関わりをある程度決めるということ、その後の人生に大きな影響を与えるということもあります。すべてのお子さんというわけではございませんが、移動音楽教室を聴いて音楽を好きになったとか、楽器を習うようになった、あるいはオーケストラのファンになるという子どもたちが多くおります。そういう教育的な効果があるということでございます。

その他、どんな効果があるかということですが、地域の文化ということでございますが、群馬交響楽団が一番身近なオーケストラとして今、地域に根付いているところですが、群馬交響楽団と県民との距離感の近さというのは特筆すべきものであって、これは、移動音楽教室がなければ、この近さというのはなかったということでございます。オーケストラを地域に根付かせるベースに、移動音楽教室が大きく働いているということでございます。

今後のオーケストラの課題といえば、やはり教育活動であったり、それから地域密着ということがキーポイントになってくると考えております。移動音楽教室は、地域密着と教育活動に直接関わる取り組みでございますので、未来の群馬交響楽団を左右するのは移動音楽教室ではないかと思っております。

今、移動音楽教室の中身をもっと強化をして、事業効果を高めていく、魅力的なものにしてい

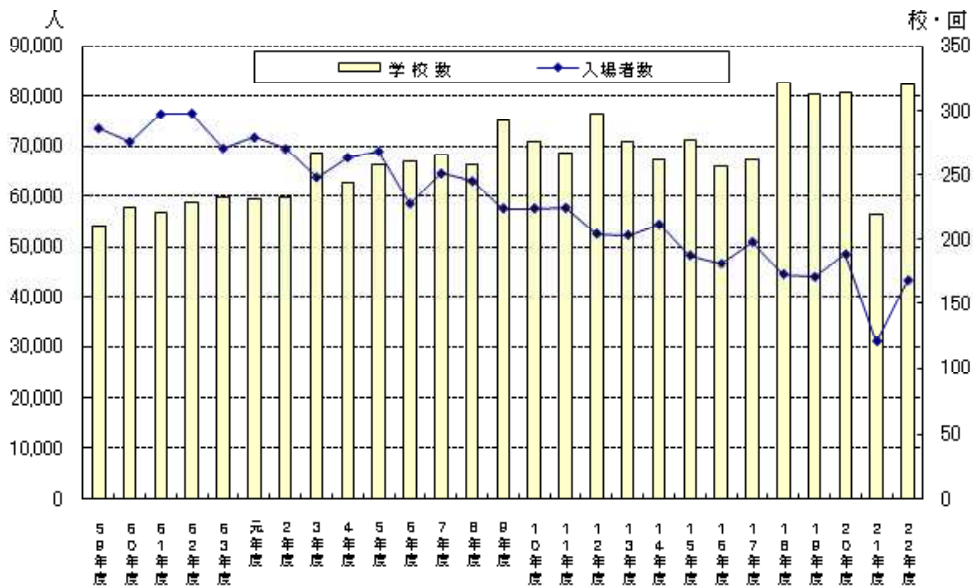
く必要があるということで、改革を図っている ところでございます。

VI 移動音楽教室について

1 移動音楽教室の実績・過去の推移

- ・基本方針：3年に1度群馬交響楽団を聴く
- ・小学校2回、中学校1回、高校1回 計4回 群響を聴くシステムが確立
- ・日本で唯一、最大の規模：64年間の累計6,048,135人
- ・平成22年度学校別実績

小・中・養護学校	320校	43,216人
高校	25校	17,043人
計	345校	60,259人
- ・過去の推移 学校数は増加傾向、鑑賞者数は減少傾向



2 移動音楽教室の種類

- ・基本方針：良い環境で音楽を聴かせる（ホールのある場合はホール使用、ホールのない場合は体育館・講堂使用）
- ・学校の選択により6つのプログラムで実施
- ・平成22年度プログラム別実績

<ホール>	Aプログラム	4回(6%)	ホール計43回
	Bプログラム	12回(19%)	
	Cプログラム	0回(0%)	
	Dプログラム	27回(44%)	
<体育館等>	Iプログラム	15回(24%)	体育館計19回
	IIプログラム	4回(6%)	

3 実施体制

- ・県と市町村の教育委員会が全面的にバックアップ
- ・3カ年毎に移動音楽教室実施計画を作成

4 費用負担

- ・小学校1800円
(児童生徒400円、県700円、市町村700円)
- ・中学校 1850円
(児童生徒450円、県700円、市町村700円)
- ・高校 2000円
(生徒 1000円、県1000円)
- ・平成22年度収入

小中音楽教室	108,053,400円
高校音楽教室	58,095,800円
計	166,149,200円

5 成果

- <教育的効果>
 - ・子どもの豊かな感性、創造性、意欲を創出
 - ・子どもとクラシック音楽との関わりを決定
- <県民の理解と協力>
 - ・群響と県民との近い距離感
 - ・県民の理解と協力

VII 文化・芸術について

文化・芸術について、残りの時間お話しさせていただきます。

戦後、日本は、過度な経済成長、あるいは物質文明の陰で、心の豊かさ、潤いの大切さといったものが後回しになってきたということは皆さんご承知のことかと思いますが、今では、経済活動と文化活動は密接に結びついていて、豊かな社会の形成のためにはそれが両方なくてはいけない世の中になっているかと思っています。

さらにこれからのことを申し上げれば、経済がどんどんグローバル化してくると、やはり日本は、付加価値の高い産業に特化していかない

と生き残れないということになるかと思っています。

付加価値を生み出すのは、人間の創造性に負っていると思っています。創造力のある人間が高い付加価値を生み出し、日本の未来を切り拓いていくということではないかと思っています。人間の創造性については、文化とか芸術が深く関わってくると考えております。資源の乏しい日本の国づくりは、創造的な人づくりが重要になってくるということで、芸術なり文化というものを大切にしていくなきゃ必要があると考えております。

VII 文化・芸術について

文化・芸術の意義・価値	・「豊かな人間性」「創造力のある人間の」の形成 ・文化と経済は国家の両輪
文化・芸術の力	東日本大震災の教訓 ・厳しい現実の中でも文化・芸術が心に余裕を与え、心が豊かになる ・心の癒し、明日への希望、生きる力
文化(地方)の創造	・空間と時間の共有、様々な交流の蓄積＝手間と時間がかかる ・世界に一つのサウンド、群響の音色 ・地域のアイデンティティ、地域の誇り

VIII 群響のこれから

厳しい経営環境	・少子高齢化の進展、人口減少、経済の低迷、地方自治体の財政逼迫 ・何も手を打たなければ縮小均衡の恐れ ・発展に向けた絶えざる努力の必要性
基本的方向性 (二兎を追う)	<めざすべき姿> ・県民から親しまれ、愛され、支えられるオーケストラ <具体的方向性> ①演奏力のアップ ・グローバルスタンダードをめざす ・ブランド力の向上による県外公演の獲得やファンの拡大 ②地域密着活動の充実・強化 ・移動音楽教室の充実・強化 ・多世代への浸透・拡大
群響の原点を忘れず	・群響の原点＝「ここに泉あり」の精神を忘れず ・人生のひとときをオーケストラとともに

特に教育の中で豊かな人間性ですとか、あるいは創造力をしっかりつくっていくということが大切だと考えておりますので、我々は音楽を通じてそういう部分に少しでも手伝いができればという思いでやらせていただいております。

将来的には、文化・芸術を大切にする国はどんどん栄えていくのではないかと、文化・芸術を疎かにしていく国は衰弱をしていくのではないかと考えております。

これは、地域に置き換えても同じことがいえると思っています。文化・芸術がなければ、結局、その地域は見向きもされなくなってしまいます。やはり文化・芸術がないと、表情が見えない、顔の見えない寂しい地域になってしまうということだと思いますので、文化・芸術はこれから非常に大切なものになってくると思っています。

さらに、今回、東日本大震災が起りましたが、文化・芸術の別の面の力を見せていただきました。

東日本大震災は、いろいろな意味で、これまでの生き方、社会のあり方を考える契機になりましたが、同時に、人と人とのつながり、あるいは大切さを感じるとともに、人間が生きていく上で文化・芸術が非常に不可欠であるということを改めて感じさせてくれたと思っています。

被災者の心を癒して、明日への希望、あるいは生きる力を与えたものは何なのかと考えてみますと、やはり音楽を含めた文化とか芸術でありました。芸術、文化に触れて、それで明日への生きる力をつけていったという被災者の方々をいっぱいご覧になったかと思います。

そういうことで、人間が生きていく上で、文化とか芸術がそもそも不可欠なものということではないかと考えております。

文化・芸術をどうやって育てていくかということですが、実は時間と手間が非常にかかるということでございまして、例えばほかからオーケストラを呼んできて演奏してもらったことで、オーケストラ文化が地域に育つかというと、

そういうことはなかなか起こらないということではないかと思います。

やはり地域の人とオーケストラ、楽団が時間的にも空間的にも共有するものがないと、地域に文化はなかなか根付いてこないと思います。群馬交響楽団があることで、この地域に個人で演奏活動する場合がありますし、お子さんをレッスンする場合がありますし、あるいは学校に教えにいくということもあります。そういうことで、地域と楽員が音楽を通じた交流がある、そういうことでオーケストラが地域に受け入れられて根付いてくるのではないかと考えております。

群馬交響楽団の例を申し上げますと、楽員と地域の交流を基礎にした上で、市民の思いが詰まった群馬音楽センターという器があって、さらに66年間支えてきてくれた温かい県民、市民がいて、そしてそれに応える群馬交響楽団の楽員の熱い思い、演奏、そういったものが全部そろって、世界に一つの群馬交響楽団のサウンドができる、その群馬交響楽団のサウンドを鳴らすということが地域の文化の創造につながってくるというふうに考えております。

時間になりましたので、最後に一言だけ申し上げますと、コンサートというのは、生演奏でございますので、生身の人間が一生懸命弾く形になります。今はどんな媒体でも音楽は聴けるのですが、生身の人間の演奏は、ほかの媒体ではまったく感じるできない、いろいろな音の表情、強弱、緊張感、解放感、そういったものを含めて、もっと深みのあるものを感じ取ることができるのだと思います。その場その場の一期一会の演奏会のなかでオーケストラと、あるいはいろいろな芸術と向かい合う、そのまを見て感じて感動するというのがライブの楽しみかと思っています。

そういったことで、もうちょっと時間をいただいてこれから準備を進めますが、これから群馬交響楽団の演奏をお楽しみいただければと思います。

最後に、芸術・文化、あるいは教育も、人づ

くりという点では共通しているかと思います。
私学は特色ある教育、あるいは多様な人材の輩
出という観点から、重要な公教育の一端を担っ
ているということでございますので、お互いに

しっかりやっていければということで、私立学
校のますますの発展を心から祈念をしまして私
の講演とさせていただきます。

本日はありがとうございました。



※写真は群馬交響楽団よりご提供いただいたものです。

群馬交響楽団演奏（指揮：上野正博）

- ・舞踏会の美女（アンダーソン）〈アメリカ〉
アメリカ軽音楽の巨匠ルロイ・アンダーソンの曲で親しみやすい曲です。
アンダーソンは1935年からボストン・ポップス管弦楽団で編曲・作曲をしました。
- ・シンコペティッド・クロック（アンダーソン）〈アメリカ〉
規則正しく時を刻む時計が、突然ささやかな反抗を起こしてしまったらどうなるかを音楽で実際に聴か
してくれている曲です。
- ・グリーンスリーブスによる幻想曲（ウィリアムズ）〈イギリス〉
イングランドの古い民謡をもとにしたロマンティックな曲です。
グリーンスリーブスは、その名のとおり“みどりの袖”という意味です。
- ・ペール・ギュント第一組曲（グリーグ）〈ノルウェー〉
ノルウェーの文豪イブセン（1828-1906）が自国の伝説にもとづいて書いた戯曲です。
第1組曲は、朝の気分、オーゼの死、アニトラの踊り、山の魔王の宮殿にての4曲からなっています。
- ・トルコ行進曲（ベートーベン）〈ドイツ〉
ピアノの曲として有名ですが、舞台劇「アテネの廃墟」のための音楽から独立したものです。
軍楽隊が遠くから近づき、目の前を過ぎ去っていく様子を描いています。
- ・カルメン第一組曲（ビゼー）〈フランス＝スペイン〉
フランスの作曲家ビゼーが作った歌劇「カルメン」を演奏会用の組曲としたものです。
ビゼーの代表作でありフランスオペラの最高傑作。
- ・夏の思い出（中田喜直）〈日本〉
群馬県と福島県・新潟県の3県にまたがっている高層湿原として有名な尾瀬ヶ原を歌った日本の歌曲で
す。
- ・ラブソディ（外山雄三）〈日本〉
楽器編成に日本の伝統的打楽器を豊富に加え、日本の様々な民謡を素材として外山雄三が作曲しました。

私学経営部会

1 研究目標 私学経営の活性化と次世代リーダーの育成

2 会場 ホテルメトロポリタン高崎「6階 丹頂ⅠⅡ」

3 日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
10月28日	受付 部会開会式	講演Ⅰ	講演Ⅱ	実践報告 ①・②	昼食	フォーラム ・ディスカッション		閉会式

4 内容

部会開会式 運営委員長挨拶 樹徳高等学校 校長 星野幸一

講演Ⅰ 演題 「私学をめぐる状況と当面する課題～未来を担う私学の理念と経営活性化～」
講師 東京女子学園中学校高等学校 理事長・校長 實吉幹夫

講演Ⅱ 演題 「群馬の私学振興について」
講師 群馬県総務部学事法制課 課長 関隆之

実践報告 テーマ 「生徒指導における一考察について」
発表者 樹徳高等学校 副教頭 金安伸一
テーマ 「学校組織活性化をめざして—ミドルリーダー設置の中間報告—」
発表者 前橋育英高等学校 副校長 竹渕敏

フォーラム・ディスカッション
テーマ 「次世代リーダーの育成」
パネリスト 東京成徳大学中学高等学校 校長 木内秀樹
パネリスト 株式会社ブレインアカデミー 執行役員 淡路雅夫
パネリスト 株式会社 J T B 法人東京 取締役 大塚雅樹
コーディネーター 水戸女子高等学校 理事長・校長 鈴木康之

部会閉会式 総括 樹徳高等学校 校長 星野幸一
専門委員長挨拶 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長 實吉幹夫
閉会のことば 前橋育英高等学校 副校長 竹渕敏

5 運営委員

委員長	星 野 幸 一	(樹徳高等学校 校長)
副委員長	竹 渕 敏	(前橋育英高等学校 副校長)
委員	池 田 量	(樹徳高等学校 副校長)
	田 中 薫	(樹徳中学校 教頭)
	青 山 正 伸	(樹徳高等学校 教諭)
	高 瀬 元 彦	(前橋育英高等学校 教頭)
	金 子 雅 人	(前橋育英高等学校 教諭)
	神 山 義 幸	(前橋育英高等学校 教諭)

6 専門委員

委員長	實 吉 幹 夫	(東京女子学園中学高等学校 理事長・校長)
副委員長	鈴 木 康 之	(水戸女子高等学校 理事長・校長)
委員	長 塚 篤 夫	(順天中学高等学校 校長)
	木 内 秀 樹	(東京成徳大学中学高等学校 校長)
	真 城 義 麿	(大谷中学高等学校 前校長)
	新 田 光之助	(筑陽学園中学高等学校 理事長・高校長)
客員研究員	野 原 明	(文化学園大学杉並中学高等学校 特別顧問・名誉校長)

講演Ⅰ

「私学をめぐる状況と当面する課題 ～未来を担う私学の理念と経営活性化～」

東京女子学園中学校高等学校 理事長・校長 實吉幹夫

はじめに

おはようございます。ご紹介いただきました實吉でございます。講演の題が非常に重く与えられましたので、題名どおりのお話ができるかどうか自信のないところでございます。また、こういう機会にお話をさせていただくことも数多くやってきましたので、繰り返しの話も幾つか出てまいって、お耳に煩わしいところがあるかと思いますが、お許しをいただきたいと思います。



群馬県の関係の先生方には、昨日のプロ野球のドラフト会議で、藤岡選手がロッテに第1位で指名をされて、ロッテ入団が決まったということで、桐生の先生方はたぶん、今後の藤岡選手のプロ野球での活躍をご期待されているのではないかと、一緒に喜びを表したいと思っています。

また、昨日、教育懇談会では本当においしいお食事をご用意いただいて、腹一杯、あるいはこちらの地酒も飲まれて、若干お疲れの向きが

あるとすれば、学校では「寝るな」とご指導されているのだと思いますが、どうぞゆっくりお休みの中でお聞きください。

それでは、お手元に用意いただいた資料をもとにして、話を進めさせていただきます。

実は、中高連の吉田会長、あるいは副会長の近藤先生、東京の協会長でございますが、非常に人使いが荒うございまして、様々な分野で学校を放り出している状況であるご理解いただきながら、話を聞いていただければと思います。

Ⅰ. 教育政策・制度改革への私学の対応について

1. 中央教育審議会等への対応について

まず最初に、教育政策・制度改革への私学の対応ですが、日頃、吉田会長は、「物言う私学」であろうと言っています。今日、お話の中で、私もふさわしくない言動、あるいは誰か一人を個人攻撃して誹謗中傷するということがあるかもしれませんが、物言う私学、思いを伝えていくということがあって、もしそれは言い過ぎであろうということもあるかもしれませんが、お許しいただければと思っています。

まず、中央教育審議会等への対応ですが、現在、様々な分科会が中教審の中に、ワーキンググループも含めて用意されています。従来は前会長の田村先生が中教審委員をされていたので、私学側としては様々な会に関係者が出ていくことが少のうございましたが、吉田先生になってから、とにかくいろいろなワーキンググル

ープに出ていって、私学の本意を伝えなければ、国の教育政策は公立学校を中心として、あるいは公立学校に偏って様々なことが語られて、私学が片隅に置いていかれてしまう、そういうことがないようにしようということで、現在、先ほど人使いが荒いというふうに申し上げましたが、清水先生、長塚先生、中川先生、会長、それから私もですが、なるべく会に出ていろいろなお話をしていこうと思っております。

必要に応じてとにかく意見陳述をしていこう、意見書を提出していこうというのが今の姿勢だというふうにご理解をいただければと思います。

様々な部会のことを少し掘り下げていきたいと思えます。

(1) 教員の資質能力向上方策

最初の教員の資質能力向上方策についてということですが、これはいつもお話をしますが、資質というのは生まれ持ったものですから、資質など向上するはずがないというのが私の思いです。日本の子ども達の国語力が落ちた、表現力が落ちたというふうに国は大騒ぎをしますが、当の文部科学省がこの「資質」という言葉を間違えて使っているのではないかと私は思います。「質」は向上します。「資質」は生まれつきのものですから、向上させることが可能なのでしょうかという疑問をまずぶつけておきたいと思えます。しかし、使われてしまっている言葉ですので、「資質向上」ということでお話をさせていただきます。

教員の資質能力向上方策については、中教審の中ではその特別部会におきまして、教員免許制度改革と教員養成、採用、研修、こういうものを総合的・一体的に検討しているというのが現状です。現在、そのより具体的な制度のあり方についてワーキンググループがつけられ、そこで審議されているわけですが、そこに吉田会長に参加していただいているということになります。

特別部会におきましては、私立学校は、公立

学校とは何かしら性格がそもそも違っているものであるから、教員の資質の向上方策においても、公立学校とは異なる教員の養成のあり方、採用のあり方、研修のあり方があるというふうに主張させていただいています。

資料「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(審議経過報告)に対する意見」には、審議経過の報告が出ています。2番目として「多様な人材育成と採用について」という書き込みがあって、このことについて中高連としては、「様々な資質能力を備えた教員を確保することが不可欠である。そのためには、現行の『大学における養成』と『開放性』を基本的に維持すべきである」と考える。」と意見を言っています。

審議会の中で話されている内容は、教員の専門職化というのでしょうか、小学校段階、中学校段階、高等学校段階の教員免許のあり方が問われていて、そこで、現在の免許制度を見直して、「基礎」「一般」「専門」に再編して、また免許区分を「義務教育」あるいは「中等教育」にすることが検討されていたのです。このことについて、私学にとっては少し違うぞということをお願いしたくて、この意見書を提出したというふうにご理解をいただけるとありがたいと思えます。

なるべく事を荒立てないようにとは思っていますが、やはりしなければいけないところ、あるいは私立側として押さえておいてもらわなければいけないことがあるということで、「今後の審議について」ということで、「今後貴審議会におかれては、かつて散見された教育政策の朝令暮改が教育の現場に及ぼす影響にも十分目配り」をしていただきたいということを書き込んであります。

昨日、高崎市の富岡市長のお話の中に、文部科学省は10年前の資料なんて見ないなんていうお話がありました。ご承知のように、全国各都道府県の私立学校審議会の全国での集まりの中で、通信制高校のあり様が随分問題視されて、この12年間ぐらいですか、文科省に通信制の高

等学校のあり方について検討してほしい、あるいは見直しをしてほしい、現状を調査してほしい、という話をずっと陳情してまいりました。

富岡さんの話を聞くと、あ、そういうことだったのか、全く相手にされないというのはこういうことなんだなという思いを強くしましたが、朝令暮改にならないようにしてほしいというのが一つの思いです。

昨日の吉田先生の話の中にもありましたが、専門学校の課程の中に通信制の課程を入れようということで、これは実は扱いが生涯学習局です。そこで、高等学校の通信制課程のあり様がいろいろ問題になっているのに、その現状を見もしないで、生涯学習局がもしやるとしたら、それは間違方向に行くのではないかというお話もさせていただいているところです。

ただ、専門学校の全国の組織の中では、賛成の方もおいでになりまして、反対の方もおいでになって、なかなかまとまるのが大変だと思いますが、いずれその方向はみていきたいと思っていますところですよ。

そんなことを意見書として出しているということをお資料としておつけしましたので、またその細かい内容については、後ほどお時間のあるときにお目通し願えればと思っています。

(2) 中高一貫教育校制度

次に、私どもにとって非常に重要なことだと思いますが、三浦朱門さんが座長の国民教育会議で教育に提言がありました。その中に、中高一貫教育のお話があって、平成9年だったでしょうか、中教審の答申の中に、中高一貫教育ですね。「中高一貫校」ということは法律の中にはないのです。「中高一貫教育を施す学校」ということの略として「中高一貫教育校」という言い方がなされると思いますが、文科省では500校計画を出しました。

第一としては宮崎県の五ヶ瀬で始まったのでしょうが、500校計画があったように、公立、私立合わせて約470ぐらいが全国にあるのでしょうか。しかし、いつの間にか500校という話

が、文科省のお話の中からどこか消えているようには思います。

昨日の都道府県の協会長・事務局長会議の中で近藤先生がお話をされていた、設置者が同一の場合には連携型の中高一貫教育校化はできないというふうに従来から言われていたという話があったかと思います。いつの間にか出てしまったというのが、平成18年4月付の「中高一貫教育 Q & A」というものです。これは文科省の内部資料ということで、申しわけありません、つい3日前に手に入れたものですからお手元にお届けすることができていませんが、この中で1から25番まで **question** があって、その4のところに、「誰が中高一貫教育校をつくるのですか」という質問にして、**answer** として「中等教育学校については、都道府県だけでなく、市町村もその規模と能力に応じて設置することができます。併設型の中学校、高等学校についても同じです。連携型の中学校、高等学校による中高一貫教育は、既存の市町村立の中学校と都道府県立の高等学校が連携して行うものです。したがって、設置者については、中学校は市町村、高等学校は都道府県となります。」。

次が不思議なんです。「なお、中学校と高等学校の設置者が同一の場合でも、連携型中高一貫教育校を設置することができます。」という、なお書きがいつの間にか入っているのです。これを文部科学省は、知らない間に、ここを読むと私立でもできるではないかという読み方ができるようになるわけです。このことを昨日、近藤先生がお話ししたというふうにご理解ください。

今、私立で連携型の中高一貫校化しているのは、茨城県に1校だけあるはずですよ。設置者が同じで、連携型の中学校、高等学校にしている例が1件あるとご理解ください。

実は、公立の中高一貫校の中で問題になりましたのが、入学者の選抜方法です。ご承知のように、公立中高一貫校をつくるときに、一つは「エリート校化しない」という言い方がありました。それから、受験競争を煽らないようにす

る。子どもが小さいときから受験勉強に取り組まなければいけない体制ではない学校として中高一貫校をつくっていかうというような、国会の付帯決議でもあって、規定であったはずですが、それが、例えば千葉県でトップ校と言われている高校が、中高一貫教育校化しました。

東京は、そういうふうにはなっていないですが、でも、小石川、両国、あるいはかつてNo.3と言われた学校が中高一貫教育校化していった、実は今年、昔の府立第一高女、戦後、白鷗高校と言いましたが、そこの中高一貫の卒業生で東大の合格者が5名出た、早慶、上智に何人入った、都立の復権だと騒ぐわけですが、中高一貫教育をつくる趣旨とはやはり外れているのではないかというのが我々の思いです。

公立の学校は学区制を撤廃しました。一方で、地域との連携が公立の学校で崩壊してしまっている、地域との連携を強めるという一方の議論があります。そのときに、学校選択の自由と称して、学区を全部撤廃してしまって公立学校に進めるようにしている政策というのは、私は些か違うのではないかという思いがしているのです。

話があちこち飛んでまとまりがありませんが、中高一貫校が現在どういう議論をしているかという、適性検査。適性検査では、中学校の段階、これも昨年の長崎の大会、あるいは今年の私学経営の大会でもお話をしたかと思いますが、「中だるみ」というのですか、確かに私も、中学校から高校に行く中学2年生、3年生のころに、高校の入試がないので、中だるみするという言葉を発した記憶があります。しかし、私立でお預かりしている子ども達は、その6年間でどう成果を出すかということですから、中だるみがあって当たり前ではないかというのが私どもの感覚でないでしょうか。それを公立の中高一貫校をつくったあの人達は、中学校2年生、3年生でどうも中だるみがあるので、選抜の方法を変えたいということです。これも常日頃、野原先生がお話をしていることですが、学力というのは一体何なのだという議論が、

日本の教育界の中でどれだけされてきたかです。

ご承知のように、今回の学習指導要領の改訂で、中学校の学習指導要領の総則部分で、なぜこのような改訂を行ったのか、あるいはこの改訂の趣旨はどういうところにあるかという書き込みの中で、知識・技能の習得、これが学力の一つだという規定が最初にあります。

二番目として、習得した知識と技能を活用して、思考力とか、判断力などを様々な外部発信できる、あるいは自分で課題を発見して自分で解決できる能力をつけていく。これも学力だというふうに規定しています。

三番目として、富岡さんが、昨日、とんでもない話をしましたが、夜の席でもお話をしましたが、日本の子ども達の学習する意欲が一番足らないという話がありました。今回の学習指導要領の中にも「学ぼうとする意欲」と書いてあります。この三つをもって学力という規定が初めてされたと理解しています。

野原先生は、この三つのことを、最初の部分は「学んだ力」というふうに私どもに発信してくださっています。それから、知識・技能を習得した上での次の判断力とか、いろいろな力、これを「学ぶ力」というふうに表現されています。意欲の部分、これは「学ぼうとする力」。この三つが学力であるというふうに、私立学校の関係者としてはずうっと思っていたことだと思います。それが今回、はからずも国として、学力だ、と。

中高一貫校では学力検査をしてはいかんということになっているわけです。あえて「適性検査」というふうなごまかしの言葉を使って、公立の中高一貫校は、今まさに示した学力の部分、全部を含めて総合的な問題というかもしれないし、一つの教科に偏った問題でないというかもしれないが、つくってきました。

この学力検査をやらせようというワーキンググループの中での会議があって、従来、適性検査という、私達から見れば現在行われている適性検査は、私達が考える学力検査なのだと主張

してきましたが、文科省の今の適性検査は学力検査だというふうに、審議官がはっきり会議の席上で言ったのです。ですから、国としても、現在、中高一貫校で行われている適性検査は、学力検査そのものだと思ってしまうと思います。

そういう部分で、その作業部会に向けて、中高連としては現在、公立中高一貫校で行っている入学者選抜の学力検査に意見を申し立てます（公立中高一貫教育校の入学選抜者における「学力検査」の取扱いについて（意見））。

東京にある有名な中学受験の塾があるのですが、現在その塾は私立中学校への受験のというよりも、むしろ公立一貫校への取り組みに経営方針のシフトをしています。その塾に対して私は文句を言っているのではなくて、あれだけ中高一貫校をつくるときに、受験に子ども達が振り回されないようにしようと言って中高一貫校をつくったにもかかわらず、その趣旨とは違う世の中の動きがある。これを文科省は何も知らない。目をつぶっている、知ろうとしないと言ったらいいいでしょう。ということについて、我々は苛立ちを感じていますし、抗議もしているところです。

今までの文科省の姿勢でいくと、事前にこういう文書を出して受け取るということはわからなかったのです。本来ならば、部会の中でいろいろ議論されるのであるから、我々の意見をその部会の中に届けるという努力をしなければいけなかったのが、かつてはされていなかった。

かつての方法は何かというと、ワーキンググループがいかにもアドバイザーとして、皆さん方の意見を聞きましたよということで、意見があれば寄せてくださいということをやってきましたので、同じ方法がやはり出てきたので、あえて前段の文章をもう少し簡素化して出させていただいたのが、『「中高一貫教育制度に関する主な意見等の整理」への意見』です。

中高一貫校の特典というのでしょうか、教育課程の編成を少し自由にできるという部分があることは、法律をよくお読みいただいていると

わかると思います。ただ、これに絡んで、かつて未履修の問題がありました。未履修問題があったときに、ある都道府県では私学の行政課が、例えば教育課程の編成に伴って学則変更を出したときに、時間割を出したとか、教務手帳を出したとか。未履修のときには教務手帳を出せとまで言われたのです。そこまでされていいのだろうか。

再三お名前を出して申しわけありませんが、野原先生から、「君達、私学の自主性と独自性と言うけど、私学の独自性というのはどこに言葉があるんだい」と私は注意を受けることがあるのですが、自主性は自主性。ただ、私学として公立との違い、先ほど群馬の会長先生が「亜流ではない」と言われました。「私学は亜流であってはいけない」というお言葉があったように、私学には自主性のなかに含んで独自のいろいろなことを組んでいくことが大事だろうと思っています。

それで、未履修のときに、平成16年でしょうか、文科省に、実は中学の教育課程の組み方の中で、特に芸術科目が主になっていたかと思いますが、学年配当どおりの時間の編成になっていない。それは中学の段階での未履修だという指摘があって、そんなことはないだろう、と。中学校3年間である力をつけてほしいというふうにして学習指導要領が組まれているのであれば、そこは幾分か教科の持っている特性を考えながらやってもいいのではないかといって、放られたまま6年が過ぎました。

今年の7月19日に中高連に、室長が来て、「従来から懸案になっていた問題について、教育特例法の申請をしてくれれば、従来私立側から出していた教育課程の編成について、文科省としては認めるから、教育特例法の申請をしてくれ」と。それも7月20日付で文科省は文書を出して、「8月いっぱい各都道府県から文科省のほうに私立は手を上げろ」という内容での通達が各都道府県にいったかと思いますが、おまえ、何を言っているんだ、夏休みの最中にそんなことができるわけはないだろう、と。そうだったら、

「8月中は手を挙げてもらうだけ挙げてもらって、9月になって申請を出していただければいいです」と言っています。

各都道府県におかれては、それぞれ学校独自のご判断、あるいは都道府県のご判断の中で、教育特例法の事例を使って申請をしてくれというお話があったかと思います。そんなことも今後、学校の教育課程の編成をどうしていくかということに思いをいたしながら交渉を続けていきたいと思っています。

東京では、この特例法は、いっぱい出るかと思ったら、ほとんど出なかったのです。文科省は東京都に対して、「東京都は連携型の学校の指導をしていないのか」と担当官が言ってきたと言っていますが、あえて連携型の申請をしなくてもできる部分があるわけですから、その辺は少し冷ややかに見ていこうかと思っています。

中高一貫のことを語り出すと切りがないので、先に進ませていただきます。

(3) 学校評価

三番として、学校評価のことをお話しします。

我々の考え方ですが、学校評価につきましては、自己評価と関係者評価については、法律の中に組み込まれて、自己評価については義務規定になり、学校評価については努力義務規定になっているのは、既にご承知のことだと思いますが、問題は第三者評価のことが今後話題になってくるところです。

私もワーキンググループの一員として、私立側の立場としては、私立学校は常に第三者の評価にさらされているのだと言っています。

東京に杉並学院という石川遼君が卒業した学校があるのですが、その校長に3・4年前にご就任された吉野校長は、文科省で学校評価をどうするかということを法制化しているときに関係者として文科省の中にいた方なのです。この方が杉並学院の校長になってみたら、「これはとんでもない、私立学校はあそこで議論されていたような評価に対する考え方は、どこの学校

でもやっているのですね」と、はっきり言っていました。

ですから、我々私立学校はそもそも第三者の目に常にさらされている。それは、例えば、おかしなことをやった学校法人が幾つかありますから、私立学校法が随分強化されて、我々もつらいところがありますが、それはお仲間の方がそういうことをやったことによって法が厳しくなるということは、我々の律していかなければいけない部分だということで他山の石として、自戒の念をもっていかなければいけない部分があります。しかし、私立学校法が改定されて、理事会の機能、教育委員会の機能、さらに管理の機能が強化されていますよね。

学校法人が設置する学校ですから、学校の内部評価としては当然に評議員会、理事会に現在の学校の状況を報告し、審査を受け、監事から様々な監査を受けている。それから、第三者というとなれば、まさに受験生、あるいは保護者は、常にその学校をみながら、自分の子どもを預けるべきか、預けないほうがいいのかという判断をしているわけです。常に第三者の評価を浴びているというのが私どもの考え方です。当然に幼稚園にしても、小学校にしても、中学校にしても、高等学校にしても、学校種、学校規模にとって、一律に何かを決めるということは、とてもでない、受け入れることはできないということも、そのワーキンググループの中では発言させていただいているところです。そんなふうな考え方で、現在、第三者評価についてはやっつけようかと思っています。

現在、自己評価と関係者評価を実際にやってみて、どうだったでしょうかという事例報告がワーキンググループの中でされています。自治体としても、あるいは教育委員会としても、費用が非常にかかるということと、いわゆる評価はしてみたが、本当に目的としていた学校改善がなされているのかというところでも、つまりきというか、迷いがあるように、今、思っています。そういう意味では、まだまだ学校評価の物の考え方というのは、法律上はしなければい

けない、あるいはするべきだと決められました
が、その中身については、まだまだこれから議
論していかなければならないという感じだとい
うことをお伝えしておきたいと思います。

(4) 高等学校教育改革

四番目として高等学校教育の改革です。

高等教育と義務教育の間にあって、長らく検
証が行われてこなかった高校教育について、中
教審の初等中等教育分科会に新たな部会として
高等学校教育部会というのが設置されました。
これは10月下旬以降、教育の質の向上の観点か
ら、これまでの高校教育改革の成果と課題、今
後の高校教育のあり方について審議が始まる予
定になっています。本年度末に骨子、そして平
成24年度にも報告を取りまとめる予定になって
います。

ここの会議は、私学側の代表者として長塚先
生がご参加されますから、今後、中高連の会議
で恐らく部会としてのご報告がいくと思います
ので、各都道府県の協会長先生、あるいは中高
連のほうに理事としておいでの先生方にはお伝
えすることになりますから、今日お集まりの先
生方は、それぞれの都道府県でご関心をお示し
いただければと思います。

重要な情報だと思ったときには、中高連のホ
ームページか、あるいは日私研のホームページ
に情報を提供する方法を今後考えていきたいと
思いますので、その辺も、お時間をいただいて
努力をしていきたいと思います。

このことについて、実は第177回の国会にお
いて、平成22年に閣議決定された地域主権戦略
大綱というのがあります。地方公共団体に対す
る事務の処理またはその方法を規定している関
係法律を改正する法律「第2次地域主権一括法」
というのが、先日、公布されたわけですが、こ
の中で、文部科学省の関係するものでは、「高
校標準法」というのがあります。高校標準法に
規定されている公立学校の生徒の収容定員の
下限に係る基準が廃止されました。

「構造改革特区法」では、公私協力学校にお

ける公私協力基本計画で定める「教育目標に
関する事項」が「努力義務」になりました。公立
高校の収容定員の基準が廃止されたことによって、
地方公共団体の財政格差に応じて公立高校の統
廃合が進むものと考えられています。一方、公
私協における公私収容定員の協議にも影響があ
ることが予想されますので、この辺は、この法
律を少しお読み込みいただいて、私学所管課の
協議のときに、あるいは教育委員会との公私協
の協議のときに、私立学校側の体制を整えてい
くことが必要な事態になっているかと思ってい
ます。その辺もまた、法律をよくお読み込みい
ただければいいかと思っています。

時間がだいぶ押してしまっていますので、私
学の理念と経営活性化はパスさせていただきます。

2. 東日本大震災への対応について

(1) 災害復旧特別助成措置法案

東日本大震災への対応について、お話をさせ
ていただきたいと思います。

経過だけお話をしておきますと、平成23年3
月に発生しました東日本大震災は、その被害が
大変甚大であったことを受けて、復旧する事業
に対して、公立学校と同率の3分の2を補助する
こととされた法案が8月9日、自由民主党など野
党5党により参議院に提出されました。しかし、
この法律案は、文教科学委員会において、民主
党、国民新党の反対にあって否決されましたが、
本会議では22日に可決されました。その後、衆
議院に送付されて31日に閉会した第177国会で
は成立せずに、継続審議となっています。

(2) 義援金

義援金ですが、本当にご協力をいただきました。
各都道府県の協会を通じて中高連にお寄せ
いただいた義援金、学校によっては既に赤十字
を通じて義援金を供出されていた学校があった
ので、中高連にすべてが集約することは不可能
ではありましたが、いずれにしてもご協力いた
だいた学校には感謝申し上げたいと思います。

赤十字の義援金は、たしかまだ被災者の手元に半分もいっていないのではないですか。中高連はその辺は迅速にやらせていただいて、我々が考えたそれぞれの被災県に、お寄せいただいた義援金についてお渡しを終わっていることをご報告しておきたいと思います。

Ⅱ. 私学の理念と経営活性化

なるべく中央で政府あるいは文部科学省、あるいは議員達とどういう話をしているのかということを中心に今日はお伝えしようと思って話を進めてきましたので、話があちこち飛んだり私の思いだけで話をしてしまったという部分があって、お聞き苦しい点があったかと思いますが、ご容赦いただきたいと思っています。

今回、東日本大震災によって、あるいは、なでしこジャパンの活躍によって私が感じたのは、日本人というのは集団になって、その中で一人ひとりの力が生きてくるというのが日本人のかなと思いました。私は戦後の民主主義教育といわれている、平和に貢献した教育をずっと受けてきて、成熟した個人をつくっていくことによって社会がそれなりに成熟していくだろうとずっと信じてやってきましたが、日本の現状を見ると、個人をどうつくるか、あるいは成熟した市民としての個人をどうつくり上げるかというのは、最終的には私立学校に関わっている人間に課されている課題だろうとは思いますが、集団の中での自分の生き方を考えなければいけないと思います。

先ほど中高一貫校のエリート校化と言いましたが、世の中はともすると、前にも話をしたことがあります、世の中の図式としては、2割のできる人と、6割のそこそこの人と、2割の全くどうしようもない人とが、組織の中には必ずいて、2・6・2の構成の中で社会が動いている。だから、各学校で2割の上澄みの先生をどれだけつくれるかというのが、これからの私学の生き方だし、その2割の人に引っ張られる6割の人を、2割の人にどう近づけるかというのが、これからの私学経営の要諦だろうとかつて申し上

げたことがあるかと思います。

ただ、エリートばかりをつくっていくことが、日本の社会が果たしてこれからの21世紀型の社会としていいのかなというのは疑問を感じています。2・6・2の6の部分の質をどう上げるかというのが、日本社会が上がっていくための重要な要素なのではないか。そうすると、私立学校が公立の垂流ではないと言われましたが、私立学校が育てるべき人間は、組織の中で2・6・2と分けられてしまったときに、6の部分にいる人間が、6の位置に安住しない、あるいはこの6の力が発揮されて初めて社会が動く、あるいは組織が動くという仕組みをつくるのが必要なのではないか。世の中ではフォロワーといわれるのでしょ、うが、そんなことを感じています。

集団で一人ひとりの力が生きていくというのが日本人の力だとすれば、学校で必要なことの一つに、やはり特別活動とか、学校行事などは、これからも私立学校の特性として充実していく必要があるのかなと思っています。

おわりに

最後に、いつもお話ししている、これからの私立学校の姿を三つお話しします。

いつも申し上げているのは、一番目として、栄光ある長い伝統を守ったところで、学校としての使命を果たし終えたとして、建学の精神、理念に殉じて死していくか。

二番目として、社会のニーズに応えようとして時代のあとを追い、先進校といわれる学校の実践、成果をみて、模倣を繰り返しながら生き延びるか。

三番目として、時代に即応した、あるいは時代を先取りして、学校の新しいやり方を模索し、むしろ時代と教育をリードしていく理念を再構築して、実践していくことによって、世間からも支持を得るか。

この三つの生き方で、私立がとるべき道は当然に第三の道だろうと思います。

先生方の学校でも、先生方が生徒募集にご苦労をされて、「学校の生き残り」というお言葉

をお使いになることがあるかもしれませんが、もし生き残ろうという弱い意志の私立学校は、学校を閉じるべきであろうと私は思います。うちの学校があって初めて世の中の役に立つのだということを、我々自身なり校長なりという職にいるものは、その気概をもって初めて私立学校のありようが世間から認知されると思っています。

實吉はそれほど意志が強いのかと言われると、私も学校に帰ると、先生方には、「先生の給与をちょっと減らせて」なんていう話をし

てしまう一人ですが、ただ、思いとしてはそういう思いで、これからも子ども達にかかわっていきたい。

昨日お話をしましたが、未来からの留学生です。私どもが過去の難民になるわけにはいきません。未来の留学生のために、我々が過去の難民にならない自分をこれから自分自身でどうつくっていくかという努力を私なりにしていきたいと思って、お話の最後にさせていただきたいと思います。

講演Ⅱ

「群馬県の私学行政と私学振興」

群馬県総務部学事法制課 課長 関 隆 之



〇はじめに

皆さんおはようございます。県の学事法制課長の関と申します。大変緊張しておりますが、よろしくお願いいたします。

群馬県の私立高校、あるいは私学の現状、少し歴史の話、そして行政の役割と課題、これらについてお話しさせていただきます。

実は本日、10月28日は「群馬県民の日」となっておりまして、学校はお休みでございます。明治4年の10月28日に初めて「群馬県」という名前を使ったということから「県民の日」になっております。

昨日は、教育懇談会で、群馬県のブランド力が全国最下位であるとの話がありました。群馬県は大体真ん中よりちょっと上くらいの地位をキープしているのですが、なぜ最下位なのかよくわかりません。全国からお集まりの皆さんに少し群馬県の紹介をさせていただきたいと思っております。

〇群馬県について

歴史的には、神話の世界からいきますと、豊

城入彦命（とよきいりひこのみこと）が祖であるといわれています。毛野国（けのくに）というのが古墳時代にあり、これが二つに分かれて、上毛野国、下毛野国です。その上毛野国から、701年、2文字にするということになりまして、「毛」を取って、上野国（こうずけのくに）となりました。その後、第一次群馬県が、明治4年10月28日に成立し、一旦、熊谷県になるのですが、今の第二次群馬県が成立して今日に至っています。俗に上毛とか、上州とも呼ばれます。

ではなぜ「群馬」というのか。もともと1300年前に、車郡（くるまのこおり）というのがあり、「こおり」というのは「郡」です。「くるま」というのはまさに「自動車」の「車」を使っています。「車」を、2文字で表すことになり、馬が群れる、上州は馬が盛んだということで「群馬」を当て、それを県名に採用したという経緯です。

実は、1300年前の「車」は、実は今、実現しています。スバル、富士重工はご存知かと思えます。免許取得率は全国一ですし、一人当たりの車の保有率も全国一です。「群馬県」でなくて、「車県」であっても、実際はよかったかもしれません。

群馬県民は、「言葉が荒い」なんてよく言われます。上州人、群馬県人はどんな性格か。やや荒っぽい、ギャンブル好き。国定忠治も出ております。

群馬県が誇るキリスト教者に新島襄と内村鑑三がいます。この内村鑑三が『上州人』という詩をつくっています。「上州人は無智無才」、あまり頭がよくない、才能がない。だけど、「剛

穀木訥で欺かれやすい。正直である。誠を尽くす」。こういう性格を内村鑑三は言っています。私も、そういうところが上州人にはあるんだなと思っております。

名物では、「かかあ天下とからっ風」、KK ですね。それと「雷」が K で、これを「群馬の3K」という人がいます。

昨日、岩手県が4人の首相を出している話がありました。群馬は戦後だけで4人総理大臣を出してます。

昨日、群馬交響楽団のすばらしい演奏を聴いていただきました。群馬の宝と言われましたが、もう一つの宝に「上毛かるた」があります。群馬県の主立った歴史、名勝地、自然を歌い込んであります。すばらしいのは、これを小学校からやっていますから、みんな知っているということです。皆さんのところもご当地「かるた」があると思いますが、これだけ子どものころから慣れ親しんで大体覚えていてというのはそうないかなと思っています。

その「つ」が「つる舞う形の群馬県」。群馬県の地図が鶴の形に見えるのでしょうか。私立の中学・高等学校は、大体中央部の前橋、高崎市、それと東のほうは桐生、太田、伊勢崎方面に集中しています。左上に中之条町。合併前は六合村といいました。白根開善学校はあえて山間地につくっています。もう大変な山奥です。隣が草津温泉、標高1,200メートルぐらいあるという、ちょっと人里離れた学校です。ちなみに、群馬県の鳥は鶴ではなくて、ヤマドリです。

○群馬の私立高校

群馬の私立高校を類型的にお話しさせていただきます。宗教教育を行っているのが共愛、樹徳、新島学園。新島学園は新島襄ゆかりの学校です。もう一つ、「繭と生糸は日本一」ということで、群馬県は養蚕が非常に盛んでした。そこから裁縫など家庭科を中心に、戦前、女子教育も非常に盛んであった。そこから発展してきた学校があります。

生徒急増期、昭和30年代に、前橋育英高等学

校、東京農業大学第二高等学校、関東学園大学附属高等学校などができました。白根開善学校は、今は小学校はないようですが、小・中・高の全寮制の学校です。そして、新しく、ぐんま国際アカデミー、英語イマージョン教育を行っています。中高一貫校も3校ございます。

経営状況ですが、収入の47%が生徒・保護者負担、補助金収入が41%を占めています。全国3位を誇る群馬県の補助単価ですが、経常費に占める補助率でいきますと46.3%になっております。

消費支出を見ますと、これは何といても人件費が大きいです。これは、先生方が宝ですから、むやみに削れないわけです。

中卒者、15歳人口の推移は、平成元年がピークで、33,800人。これが急激に落ちてまいりまして、平成20年代はやや横ばいでした。幸い来年度は少し増える予定ですが、25年度からまた横ばいで、平成30年度以降、また落ちていくという状況です。30年度以降の通減を視野に入れる必要があると思います。

全日制高校生徒公私別内訳は、今、23.2%が私立です。平成4年度の25.2%から少し落ちている状況ですが、逆に言えばこの割合を群馬の私学が支えているということです。

私立高校定員充足率については、最高は平成2年度の99.4%で、その後、99.4%の充足率が、ボトムで80.1%、今は86.6%という状況になっています。

群馬県の高校進学率は、昭和48年に90%、今は98.1%。大学等進学率も徐々に上がっておりまして、平成22年は54.4%、残念ながら平成23年は52.6%でやや落ちました。

学科については、平成22年度で普通科が63%、あと商業、工業等となっています。

○私学教育の歴史

次に群馬の私学教育の歴史を説明させていただきます。

群馬県は、近代文化の三つの背景がよくいわれます。キリスト教、英語の普及、教育の普及

の三つです。キリスト教は何ととっても、安中藩で新島襄が、高崎藩で内村鑑三が出ています。新島襄は同志社大学を作り、本県の新島学園につながっています。「平和の使い新島襄」「心の灯台内村鑑三」と上毛かるたでうたわれております。本県にこの2人が出たというのは大変な誇りです。

次に英語の普及です。歴史をひもときますと、群馬県は全国でも盛んな英語学校ブームだったようです。その中で、明治21年にできた前橋英和女学校は、今の共愛学園で、120年の歴史を持っています。そして、ぐんま国際アカデミーではイメージ教育という新たな英語教育が始まっています。

教育の普及については、当時、「西の岡山・東の群馬」といわれたそうです。なぜか。明治の初期、小学校就学率が群馬県は非常に高かったのです。あと公立女学校とか、県立幼稚園とか、屈指の教育県といわれました。

就学率は非常に高かったのですが、出席率は非常に低かったそうです。これはなぜかというところ、おかいこ、養蚕で学校へ行っていられないという状況があったようです。いずれにせよ教育に群馬県は非常に力を入れておりました。

官富岡製糸場は今、世界遺産の暫定のリストにのっています

明治の頃は、蚕業の学校や裁縫の学校等々が非常に盛んであったといわれております。

戦後早々、昭和23年4月、新制高等学校になりました。戦後、民主主義教育となり、宗教教育を目指す学校、家政や家庭科の女子教育を目指す学校など、私立は自由通学ですから非常に充実していた。全体的にはまだまだ家政・家庭系の女子高校が多かったようです。

それが第一次ベビーブームで、昭和33年の関東学園高等学校から前橋育英高等学校という形で、私立高校が新設されてまいりました。

中学卒業者が増えるとともに、高校進学率も上がっていきますので、一気に高校需要が増えたわけですね。これを受け入れたのが私立高校であります。本県私学はこの急増期に大変貢献し

ていただいた。特に女子の受け入れに貢献していただいた。当時の特徴としては、共学校、それと家政系から普通科、商業科、デザイン科が増えたことがあります。

実は公立高校は今もそうですが、群馬県は男女別学が日本一なのです。伝統校は今も別学です。

私学助成については、昭和45年に地方交付税算定基礎に私立学校運営費が算定されたり、50年に今の私立学校振興助成法ができて国庫補助も始まりました。そういうような形で、公的助成が大きく増えることになりました。

そして第二次ベビーブーム、昭和58年度には、明和県央高校の新設や定員増で対応しています。このように、本県の急増期に私立高校は大変貢献していただきました。それが、今、急減期を迎え、群馬県としては公私協調で対応しようとしています。

その中で、中高一貫教育制度も平成12年度ぐらいから本県私学でも実施しています。

○群馬県の私学行政

私学行政の基本姿勢は、振興助成法の目的のとおりです。教育条件の維持・向上、父母負担軽減、学校経営の健全化ということで我々はやっています。教育基本法の8条「私立学校の有する公の性質及び学校教育において果たす重要な役割にかんがみて、国と地方公共団体が自主性を尊重しつつ、助成、その他の適切な方法によって私立学校教育の振興に努めなければならない」の精神で、群馬県としても一所懸命取り組んでいるところです。

私学の存在意義では、公教育、公の性質の非常に重要な役割を担っています。また、時代をリードする多様な教育をやられている。人格形成であり、学業、あるいはスポーツ、文化活動であり、一貫教育であり、イメージ教育であり、公立ではなかなかできない、まさに時代をリードする多様な教育を提供していただいています。

ただ、生徒数の減少は経営環境の悪化につな

がりますし、教育の質を確保するためにも良い先生の確保は欠かせません。公私間格差の存在もあります。3倍以上の開きが公費支出にあります。群馬県では高校の初年度負担金の差が43万円ぐらいあるという試算があります。そういう中で、県としては補助単価が全国3位というレベルを維持しております。経常費補助率で46%ぐらいです。

助成額については、平成23年度の予算単価が高校で346,345円で全国3位、そのうち保護者の負担軽減にあててくれというのが23,160円です。

本県の場合は、授業料はそう高くなく、就学支援金の2倍加算でほぼカバーされます。ただ、年度途中の家計急変の場合、加算を受けられませんので、そういう保護者の方については、独自で補助をしています。

入学金の減免も昨年度から実施しております。2倍加算の対象者に6万円、1.5倍加算対象者に3万円の補助をしています。

経常費補助金額の推移は、総額で若干微減という状況です。単価は上がっていますが生徒数が減っていますので。それでも、23年度は81億円、うち高校に41億円という補助をしています。

○私学教育の役割

経営資源は人、物、金、情報、時間とよくいわれます。もちろん金も必要ですが、使うのは誰かと考えれば、これは人であります。「国家百年の計」とか、「米百俵の精神」とか言われます。短期的には穀を植える、あるいは樹を植える、すぐ実るものがほしいわけです。人生も100年になってきます。百年の計でいくには、穀物、樹より人にかける、米より教育だという精神が必要だと思います。その中身については、知・徳・体のバランスが大事だと思います。教育基本法でも人格の完成を目指しています。人格の完成の中に知・徳・体が実現されていくのではないのでしょうか。今、世の中のスピードが速く、スキルがどんどん変わっていく時代です。そのスキルだけ追い求めても難しい。最近、企

業でよくいわれるのは、コンピテンシーというもの。同じ学力・能力がある、スキルがあるが、実際の業績には差が出る。それは何なのか。よくできる人の行動特性、コンピテンシーということが最近いわれています。今後学校教育の中で考えていく必要があるかも知れません。

いずれにせよ、教育の内容とそれを支える経営の健全化が両輪として重要です。教育の多様性、教育の自由がグローバル世界と変化に対応するために必要です。単純な作業は海外に行きます。そうすると、残った我が国では相当レベルの創造力、技術力、革新力を養うような教育をしていかなくはなりません。それは画一的な中ではなかなかできない。創造力や個性を育てる教育が必要なんだと思います。

私学の課題については、いろいろ議論されています。生徒数の減少は、客観的な事実です。選択される競争の時代です。顧客満足度を高める工夫が要ります。厳しい環境の中で教育内容を充実していく必要があります。

そういう中で中高一貫だけでなく、さらに大学まで、あるいは幼稚園・小学校と総合的に教育できるのは、私学の強みかなと思います。ただ、ハード面の問題があるし、公私間の負担の格差、諸々の問題があります。是非皆様方の英知を結集して、日本の未来につながる人材育成にご尽力をお願いしたいと思います。

○最後に

昨日からのお話を聞くと、ウィリアム・ウォードの「最高の教師は、子どもの心に火をつける」ことが大事です。高崎市長の子供達の意欲が低下しているというお話は気になります。「馬を水辺に連れてくることはできても、馬に水を飲ませることはできない」という言葉もあります。子供達に火をつけることができれば、アインシュタインの言葉で言うと、学びたくなる、意欲が出てくるというようにつながっていきます。

ずっと前に、ある私立高校の先生が、テレビ

で紹介されていました。中勘助の『銀の匙』という小説だけを3年間かけて読むというものです。この成果が子供達に火をつけて、今のその学校の土台をつくったそうです。そういう発想は私学でしかできない、公立ではできない教育ができるすばらしさがあると思います。

私は、3月まで県の自治研修センターというところにいました。そこで呼んだ講師の言葉を

紹介して終わります。

その先生が学んだアメリカの学校に掲げられていたそうです。「能力のない者はいない。ただ、その能力の発揮の仕方を知らないだけだ。」

是非、皆様方には、子供達の能力を最大限に発揮していただくようお願いいたしまして、私の話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。



実践報告①

「生徒指導における一考察について」

樹徳高等学校 副教頭 金 安 伸 一



はじめに

こんにちは。樹徳高等学校副教頭の金安です。本日は、本校の生徒指導につきまして報告をいたします。つたない内容ではありますが、精いっぱい発表しますので、どうぞよろしくお願いいたします。

1. 学校の概要

樹徳高校の創立は大正3年で、今年は97年目にあたり、あと3年で百周年の節目を迎えます。また、平成13年には中高一貫校を創設しました。一貫校は、これまでに5期生が卒業生しているまだ新しい学校です。



現在の在籍は1,300名ほど、一番多かったときには2,800名の生徒がおりました。この写真は高校側の校舎を見たところです。手前の公園は桐生市の中央公園で、その右下方向に、一貫校校舎があり、公園を挟んだ形で高校と一貫校の校舎があります。両校舎共に、JR桐生駅南口から徒歩で5分程のところに位置しています。

特徴として、本校は浄土宗の関係学校です。浄土宗の開祖・法然上人の教えをもとに、仏教精神に基づいた教育を行っております。しかし、宗教を教える学校ではありません。

次に、教育方針は、「智慧と慈悲の調和による全人教育」です。「智慧」は、賢さや強さを示し、「慈悲」は、優しさや同じであるということを示しています。この二つを調和させて、学問に偏ることなく、将来のリーダーとして必要な学力や実践力を身につけ、知識や感情、意識などが円満に発達した人間を育てることが本校の教育方針です。

生徒は、県内あるいは県外から入学していますが、最難関の大学を目指す生徒や就職を希望する生徒、部活動に励むことを目的とする生徒などさまざまな生徒が入学しています。

本校は落ち着いた校風を伝統とする学校ですが、以前は特別指導や中途退学生などの課題もありました。そのような状態において、昭和57年に、群馬県高等学校が一斉に「三ない運動」を実施し、その後、普通自動車運転免許の取得に関する指導を行うなど、健全な修学の保持及び規範精神の確立を目的とした生徒指導が展開されました。本校においても、目的達成に努め、一定の成果を得ることができました。しかし、

これらの指導は、どちらかという生徒にブレーキをかける指導であり、生徒が主体性を持って先に進むことにはつながりません。そのため、規範の精神の確立と生徒理解に基づいた指導を目的として生徒指導に取り組むことにしました。そのポイントが三つあります。「1. 何に対して問題意識を持つか、どのようにして取り組むのか」を指導計画に明示しました。「2. 指導事項について十分な説明と理解を得て、総合力を持って指導に取り組む」「3. 指導の機会を逃さない。後からではなく、やるのはいつでも今」この三点についてを周知、徹底をはかりました。

2. 生徒指導

生徒指導の方針につきましては、項目を4つほど上げてあります。読んでいただければおわかりになると思います。時間の関係もありますので省略させていただきます。

2. 生徒指導

(1) 指導方針

- ①一人一人の生命の尊さを理解させ、理想人格の育成に努める。
- ②精神的、物的環境を整え、個性の伸張をはかる。
- ③教師と生徒の人的な触れあいを通じて、人格の陶冶と学校生活の意義を深める。
- ④自発的学習意欲の向上をはかる。

6

次に、生徒指導の目的は「生徒自身が人間としてよりよい成長を遂げる」ということです。本校では、「一人一人の生徒は完成された人間となれる種（可能性）を持っている」と考えています。それは「ことごとく仏様としての善い性質を持っている（悉有仏性）」ということです。そして、そのような生徒達の善い芽を、私達教員が伸ばせる機会を与えていただいているということでもあります。

「有用な人材へと成長していけるように学習環境を整える」ということについて、有用な人材と申しますのは、自分を大切にすること

とを自覚し、それによって生じる感謝の心をもって自分以外の人を大切にする。思いやりの心を日々の生活の中で実践し、培った学力と人間性をもって地域社会へ貢献していく人間になるということです。

3. 生徒指導の取り組み

生徒指導の取り組みには、PDCA の実践があります。「Plan（計画）」→「Do（実行）」→「Check（評価）」→「Action（改善）」ですが、C、Aのほうは最初のうちはあまり明確ではありませんでした。主に、計画、実践をして、管理職や学年主任等の意見を聞いて、次の計画を立案、実践していました。しかし、思うような成果につながらなかったため、PDCA のサイクルにしっかり取り組むようにしました。

まずは年間の計画とそれを細分化した計画を立て、これらについて各教員の意見を聴くようにしました。そして、その上に前年の課題や現状を盛り込むようにしました。また、指導方針や実施事項、担当者別の役割分担なども作成しました。

お手元の資料にもあるものは、年間計画の書き出しの部分を検討したものや月ごとに実施する指導項目を一覧にしたもの、そして、担当者がどのような任務を分担するのか表したものです。

平成23年度 生徒指導部 年間実施計画			責任者	金安博一	担当者	戸
4月	5月	6月				
○年間計画、生活指導月間・波制作成	○マルチ検査	○更衣(金下校時指導)				
○青少年健全育成運動	○交通安全運動	○マナーアップ運動①(6/15)				
○にこにこ運動	○1年生交通安全教室	○6月の生徒指導事項作成				
○各種指導計画作成	○生活指導月間刊行、まとめ	○進路指導(靴箱の確認)				
○1年生宿泊研修集団作り	○部制(天ノ山、赤毛等)届け受け	○レインコート着用指導(雨天)				
○別館・補導(学管連)	○給付給付場利用指導	○学管連指導(雨天)				
○自転車通学指導受付	○生活の調査	○食事指導				
○駐輪場のクラス区分	○登校時給入手	○授業状況調査				
○通学路、名簿、随時作成	○食事指導					
○学管連指導(雨天)	○レインコート着用指導(雨天)					
○レインコート着用指導(雨天)	○学管連指導(雨天)					

10

次に、実践の説明をします。本校には、「生徒指導の基本（3本柱）」があります。一つは「出席」です。「キーワードは3」と申しますのは、欠席が3日続いたら家庭訪問をするということ

です。3日というのは、課題等を抱えた生徒や保護者の意識や行動が変わっていくのが欠席して3日目とされています。早期対応として「キーワードは3」を合い言葉として各教員へ周知しています。

(2) 実践

①重点指導事項

ア. 生徒指導の基本（3本柱）

出席・・・キーワードは3

教材・・・必携

服装・・・観察と指導（月例）

検査と言わない

12

二つ目は「教材」です。生徒自身が目的を達成するために必要なものを大切にする、感謝の心をしっかりと持つことを指導しています。三つ目は「服装」です。本校では、服装とは頭髪から爪先までの全体を表しています。指導は月例で行っていますが、本校では「服装検査」とは言いません。生徒は物ではありませんので、必要なことが理解できるまで、繰り返し身に染み込むように教えていきたいと考えています。ですから、本校では「服装の観察と指導」と呼んでおります。

イ. 生活指導月間～評価と課題～

評価

生徒指導評価一覧表 全校 項目番号順

項目番号	1	2	3	4	5
1. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
2. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
3. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
4. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
5. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
6. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
7. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
8. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
9. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
10. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
11. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
12. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
13. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
14. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
15. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
16. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
17. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
18. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
19. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
20. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
21. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
22. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
23. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
24. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
25. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
26. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
27. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
28. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
29. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
30. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
31. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
32. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
33. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
34. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
35. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
36. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
37. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
38. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
39. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
40. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
41. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
42. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
43. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
44. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
45. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
46. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
47. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
48. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
49. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
50. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
51. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
52. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
53. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
54. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
55. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
56. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
57. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
58. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
59. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
60. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
61. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
62. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
63. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
64. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
65. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
66. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
67. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
68. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
69. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
70. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
71. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
72. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
73. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
74. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
75. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
76. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
77. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
78. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
79. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
80. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
81. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
82. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
83. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
84. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
85. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
86. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
87. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
88. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
89. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
90. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
91. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
92. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
93. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
94. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
95. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
96. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
97. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
98. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
99. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他
100. 生活指導月間	出席	服装	教材	課題	その他

13

毎年4月は生活指導月間として指導に取り組んでいます。そして、その指導結果について男子、女子、一貫校別に「A、B、C、D」の4段階で各教員が評価します。Aは「よくできた」、Bは「できた」、Cは「ややできなかった」、Dは「できな

かった」という評価です。さらには、Aを4として、Bが3、従って、最後のDは1ということにして、4段階に評価して平均を出しています。これによって、評価の低い項目を抜粋します。

* 4月は生活指導月間・・・実践を評価して課題を見つける

生徒指導評価一覧表

1. 評価項目別

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
男子部平均	4.0	3.6	3.5	3.6	4.0	3.8	3.6	4.0	3.9	3.7	3.8	3.9	3.8	3.9	3.9
女子部平均	4.0	3.6	3.6	3.8	4.0	4.0	3.8	3.9	4.0	3.9	3.9	3.9	4.0	3.7	4.0
一貫校平均	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	3.4	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
平均	4.0	3.7	3.7	3.8	4.0	3.9	3.6	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9	4.0	3.7	4.0

2. 平均値計算

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
男子部平均	3.0	3.6	3.6	3.5	3.5	3.6	3.8	3.7	3.7	3.8	3.8	4.0	4.0	3.9	3.9
女子部平均	3.6	3.8	3.6	3.6	3.7	3.8	3.7	4.0	3.9	3.9	3.9	4.0	4.0	3.9	3.9
一貫校平均	4.0	3.4	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
平均	3.5	3.6	3.7	3.7	3.7	3.8	3.8	3.9	3.9	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0

14

資料14はそれをグラフにしたものですが、このようなことを通して今後の指導すべき課題を把握しています。そして再指導の計画をつくっています。

【参考】再指導の評価

(1) 評価基準について

①クラス毎に4～1の段階評価とする。

評価段階	目安	*比率(%) 算出
4 → よくできた	1%未満	総指導回数
3 → できた	1%以上～3%未満	20日×在籍数
2 → ややできない	3%以上～7%未満	=比率
1 → できない	7%以上	

②例：在籍40名クラスで試算

評価段階	7	23	55	56
4 → よくできた (1%未満)	20×40 ×100=0.88(1%未満) 総指導回数7			
3 → できた (1%以上～3%未満)	23	20×40 ×100=2.88(3%未満) 総指導回数23		
2 → ややできない (3%以上～7%未満)	55	20×40 ×100=6.87(7%未満) 総指導回数55		
1 → できない (7%以上)	56	20×40 ×100=7.07(7%以上) 総指導回数56		

③クラス評価後の全体評価算出基準

各評価段階の総数	*4～1の評価の比率を求める
クラス総数 ×100	*分子は4～1毎の評価の合計

17

また、再指導の結果についても評価をします。資料17の②番に、在籍40名クラスで試算とあり、枠の評価段階4、3、2、1の右隣に「総指導回数7」とあります。これは数学科の先生へ相談したところ、確率や統計の面から「大体よくできたという場合は1%未満です」ということでしたので、20日間の登校日数を基本として、母集団を20日×40人とし、それを指導回数7で割ると、0.88で1%未満になります。これを「よくできた」に当てはめて評価し、指導に活用しています。

次に、特別指導について、「仏教精神(宗教的情操)による指導」とは、特別指導は罰則ではな

く、「自戒の時」ということです。「自戒の時」と申しますのは、真摯に自らを振り返り、改善をはかるために規律的生活をするということです。指導方針や方法等は生活指導委員会において協議、提案していますが、カウンセリングマインドを大切にした生徒理解により、問題の根の部分（要因）について確認しています。そのため、心理検査等の客観的な資料も活用しています。教員のチーム編成による指導は、ベテランと若手の教員、生徒指導が得意な教員と不得手な教員というような組み合わせをしています。そして、お互いに勉強し合うという目的でチーム（複数による）指導をしています。

また、内省化では、特別指導のマニュアルを活用して指導しています。指導の初めに「人間は悪いことをしたら償う」という基本を教えます。生徒に対して、「反省の心を毎日の生活行動や姿から見ていただきましょう」と指導して自戒の活動をさせます。生徒はその意味を理解し、自分自身で何をするのか考えてしっかりと取り組みます。

その他、面接や校長室の仏様にお参りして手を合わせます。そして、「父母恩重経（ぶもおんじゅうきょう）」を写経し、その内容について感想を書いて保護者の方に見ていただきます。その後、保護者から今後の家庭指導について記した文書が学校長へ提出されます。このような形で保護者と連携しています。その他、生活日誌の活用や課題学習（自学自習）への取り組み指導などもしています。

②特別指導

仏教精神(宗教的情操)による指導

ア. 罰則ではなく自戒の時

イ. 指導方法を生活指導委員会で協議、提案

ウ. 教員のチーム編成による指導

エ. 内省化をはかる多面的アプローチ
仏教精神(宗教的情操)による指導

18

教育相談の導入と関わりについて、カウンセラーとの連携とは、本校に専任カウンセラーが常駐

するようになりましたのが昭和60年で、当時としてはとても早いカウンセラーの配置であり、教育相談活動を行っていただいたことにより生徒が落ち着いた生活をするのができて効果的でした。ですから、私達教員も真摯に教育相談を学びました。担任による個人面接は、心理検査や中学校からの情報をもとにして、担任やカウンセラーが面接をします。そして、生徒にとって、学校が安心できる場所であるように心がけ、1年を通して随時の面接、あるいは計画的な面接、夏休みを利用した面接などを行っております。

③教育相談の導入と関わり

ア. カウンセラーとの連携

助言と家庭訪問、情報共有

イ. 教育相談研修の実施

面接、ロールプレイ

ウ. 担任による個人面接の実施。

エ. 配慮を要する生徒の情報共有。

19

④その他の指導

- ・交通安全指導
- ・登校指導
- ・校内外巡回
- ・清掃活動
- ・出席率向上運動
- ・食事指導
- ・授業状況の把握
- ・生活の調査
- ・科学検査等

20

その他の指導では、登校指導をしています。本校では、登校指導は挨拶運動です。まずは教員が生徒の顔を見て、明るい表情と元気な声で「おはよう」「さよなら」と声をかけることを約束として行っています。

登校指導の画像は、ライト先生が制服の第1ボタンを留めてない生徒を指導している光景です。見逃しをしないという指導の現れです。

清掃活動は、掃除と学問という理念により、感謝の心を持って、環境を磨き、心を磨くとい

うことで行っています。月末には全校で大掃除を行い、各学期には市街地の清掃をしています。これは、学校周辺の環境が整っていることへの感謝の心を表すという目的で行っています。



また、朝の清掃活動は、生徒に整った学習環境で学ばせたいと考えて、毎朝、教員が率先して行っています。本校では、きれいになった校舎、校庭で生徒を迎えるという、智慧と慈悲を基本とした考えと実践を宗教的な情操教育と呼んでいます。画像は、毎朝、子ども達が気持ちよく登校できるように、打ち水をしているとろ

こです。また、朝の清掃活動は、校舎内外で行われ、副校長先生は職員室前を担当されて毎朝大きな熊の置き物を磨いていらっしゃいます。



市街地清掃における独居老人宅の訪問清掃の光景です。市街地清掃は各学期ごとに計画され、その一つとして独居老人宅を訪れた清掃活動を行っています。準備等がありますので、毎学期というわけにはいきませんが、室内清掃や草むしり、ガラス拭きなど様々な希望があります。生徒が熱心に取り組むため、大変喜んでいただいています。

出席率向上運動は、全校で毎月の出席状況を報告、把握し、欠席を無くすようにしようという運動です。1学期の出席率は99.9%でした。今回、100%と発表したかったのですが、99.5%になってしまいました。その要因は、生徒達が義務教育までの間に経験した心の課題への対応があげられます。各担任やカウンセラーが熱心に関わりましたが、生徒の自己解決を導く過程に時間を要して出席率は99.5%となりました。遅刻の結果は0.48%で、数値として良い方だと

(3) 評価

生活の調査

<生活の調査 質問用紙> ㉑

この調査は、君たちの生活状況を把握して、よりよいものとするためにしています。
お答えのうえよりか本出のことを答えてください。 ㉒

① いじめ

いじめは、様々な方法によって他人に苦痛を与えたり、傷つけたりますことを言います。(無視・暴力・使いきり・悪口・物を隠す等々)。
初めはからかい半分のようですが、次第に激しく、毎日繰り返されるようになります。その結果、不登校になったり、場合によっては、尊い命を絶ててしまふ人もあります。また、携帯電話やインターネットを利用した「ネットいじめ」と言われる。いじめは、中傷行為も問題になっています。

いじめの原因は、いじめを行う側の心理にあります。自分が満足するために他人を犠牲にするは、愚かであり、人間として許され

1. 現在、あなたは、いじめの対象となっていますか。 ㉓

① 対象となっている ② 対象となっていない

① 対象となっている と答えた人 → 「2-32」に答える。
② 対象となっていない と答えた人 → 「1-1-32」に答える。

25

2. どのようないじめですか

①無視される ②教材などをかくされる ③暴力をふるわれる(なぐられる、けられる、つわられる等) ④飲食物(パン・ジュース・弁当等)を買いに行かされる ⑤悪口を言われる ⑥その他(内容を右に記入) 〉

3. 相手は何人くらいですか

①1人 ②2人 ③3人 ④4人以上

4. 時間はいつ頃ですか

①朝のH R 前 ②朝のH R 後 ③昼休み ④授業終了後の休み時間 ⑤放課後 ⑥一日中、時間に関係なく

5. 主な場所はどこですか

①教室 ②廊下 ③階段 ④トイレ ⑤電車または駅 ⑥その他(場所を右に記入) 〉

26

11. 校内、校外で他の生徒がいじめられているのを見たことがありますか③

①ある ②ない③

●あると解答した人は、どのようないじめなのかを書いてください。

いじめている生徒のクラス・氏名を書いてください。

年 組 氏名 年 組 氏名

12. 暴力・威圧(おどし)・からかい③

12. 暴力・威圧(おどし)・からかいなどを行う本校生徒がいますか③

①いる ②いない③

13. 授業態度③

13. 私語や寝だりして授業を妨害する、寝ていて授業を聞かない、教科担当の先生の指導に反抗したり寝ないような生徒がいますか。③

①いる ②いない③

27

生活の調査について				
凡そ10分の対象となっているとは理解ができて、他校の調査結果や 所見等を報告していただく。				
クラス	1年〇組	担任氏名	△△ □□	回答数 1
1	観察生徒氏名	AA BB		
	加観生徒氏名	CC DD		
	内 容	- 道徳本人に質問を食ってからかう。また、他の顔型に ぶんの質問を食う。 - 「AA」について、この人に対するについても質問を食う ことがあった。		
	指導内容及び 理由	- 加観者に対する、クラス全員に対して、注意指導する。 このようには本校の教育方針に反することであり、 行状を助長する場合は反逆で済まないこと。また、 人間として成長することが大切であることを強調して 指導した。 - 現在、以上のようになりはしない。		

男子部 生活の調査 報告書													
番号	項 目	第 1 学 年											
		学 年	クラス										
		在 籍	J1	J2	J3	J4	SS	K1	K2	S	計	割合	
			43	43	43	42	5	30	30	39	275	100%	
1	①いじめの対象となっている ②対象となっていない	1								1	2	0.7%	
	③無視	41	41	42	41	5	30	28	34	262	95.3%		
	④物をかかす									0	0.0%		
	⑤暴力									0	0.0%		
2	⑥どのようないじめですか									0	0.0%		
	⑦思い通り									0	0.0%		
	⑧悪口を言われる	1								1	0.4%		
	⑨その他									1	1.0%		
	⑩1人									1	1.0%		
3	⑪相手は何人くらいですか									1	1.0%		
	⑫2人									0	0.0%		
	⑬3人									0	0.0%		
	⑭4人以上									0	0.0%		

平成22年7月9日

学 校 長 殿

生徒指導主任
金 安 伸 一

生活の調査結果について(報告)

標記の件につき下記のように報告致します。

ご検討のうえ指示くださるようお願い致します。

記

1. 現在、特に問題となるような報告はありません。

2. クラス別一覧表(資料A、1ページの項目1)より、「いじめの対象となっている」「いじめの対象となっていないが、いじめに関する何らかの回答をした」生徒について担任へ報告を求めました。(資料B)

5. 今後、二学期に再調査を実施し、確認と指導をする予定です。

30

- 59 -

て学校へ報告しています。

資料30は昨年の7月に行った報告ですが、1番に「現在、問題となるような報告はありません。」と記載してあります。各学期にこのような形で評価、報告をしています。

最終的に大切なことは改善です。まず、中途退学生生の減少ということですが、現在、樹徳高校では非行等による退学はありません。しかし、経済的なことや精神的な不安を理由として出席日数が足りなくなってしまう生徒がいます。そのような生徒は、心身を落ち着ける期間を設けて次のステップへ進みたいという理由から方向転換することがあります。現在、本校はおかげさまでこのような状況です。

不登校の生徒は、6～7割が1週間程で教室へ復帰しています。このことでは、なんと言っても早期対応が重要になります。各担任は、「生徒の心の内を聴くことができるか」「生徒を理解することができるか」「適切な対応ができるか」ということについて、カウンセラーへ相談し助言を受けて支援しています。また、学年主任をはじめ、副校長、教頭などが皆で関わって意見を出し合っています。

(4) 改善 (結果)

前年より良好。

- ①退学生生の減少
- ②不登校生が教室へ復帰
- ③出席状況が良好
- ④挨拶、服装が良好
- ⑤交通事故、特別指導が減少

31

このような、「改善」ということは、PDCAを行っただけでは成果に結びつかないと考えています。それではどのようにすべきなのかということですが、本校においては、「全教員が運命共同体である」という意識を持って任務に当たることが大切である」と考えています。そして、全ての教員がそのような意識を持てる環境をつ

くることが私達に課せられた任務です。絶対に、担任一人が孤軍奮闘するようなことはさせないと強く考えています。

生徒指導の特徴的なことを紹介します。

3月11日に発生した東日本大震災では、桐生市も相当大きい地震に遭遇しました。本校では校舎の倒壊などはなかったのですが、学校長から、「生徒が落ち着いて生活し、学習ができるよう指導する」という指示をいただきました。そのため、生徒の不安や動揺を軽減する目的で現在の状況を説明しました。また、我が国が戦後に復興を果たした先人の培いについて話し、今を生きていく心構えを理解させました。そして、今、何をすべきなのかを問い、自覚と責任ある言動をするよう求めました。それに対して、生徒は見事に応えてくれました。

生徒が積極的に取り組んだのは、宮城県岩沼市の泥かきボランティアでした。桐生市社会福祉協議会の泥かきボランティアの募集に本校が応募したことから、6月に延べ人数360名強の生徒が11班に分かれて行ってまいりました。現地では、震災後に屋上で「SOS」の印を書いて、救助を待っていた、岩沼市の南浜中央病院で主に活動しました。資材や機材など建物内の物を、全て運び出し、私が行ったときには病院の駐車場が山積みになっている状況でした。「これは全て生徒さんが出してくれました。ものすごい量ですが、若い力に感服しました」と病院の方からお話をいただきました。そして、生徒は泥かきにも懸命に取り組み、病院内は綺麗に片付いた状態になっていました。作業する生徒達の姿を見て胸が熱くなる思いを感じました。病院の方より、「おかげさまで何とか再開の目安が立ちそうです」という話をいただいて帰ってまいりました。

次は1年生対策についてです。高校生活への適応を目的とした、学年主任や担任による積極的な指導によって、生徒は自己の可能性に気づき、自覚を持ってしっかり生活しています。「中1ギャップ」という言葉がありますが、「高1ギ

ャップ」という言葉はあまり聞きません。しかし、「高校生になったら…」「高校生になったのだから…」という誤った思い込みや考え違いから、失敗をする生徒がいます。また、生徒同士の摩擦なども生じます。このようなことを未然に防ぐために、指導方針や、具体的指導事項、方法などについてを計画を立て、説明しています。その結果、担任が、丁寧に、繰り返し、折にふれていろいろな形で指導しています。生徒も非常に落ち着いて生活しています。

4. 教員の育成

6. 教員の育成

(1) リーダーシップの在り方
悉有仏性、出会いの関係、漸進原則

- ①人間性を理解する
- ②涵養の精神と生徒に関する哲学、精神を注入
- ③指導すべき事項を明示
- ④率先垂範、要に応じて行動を共にする
- ⑤自己評価

33

生徒指導面における教員の育成、リーダーシップのあり方について、人間性を理解するためには、教員自身が人間として幸せな生活を送っているかどうか重要です。まずは、その面から一人一人の教員を観察していく必要があると考えています。二つ目の涵養の精神は、教員も完成された人間となる種を持っているということです。人間としての成長を見守っていくということが大切です。例を挙げると、年齢の若い教員と話をしていると、「それについてはいつも言っているのですが…」という言葉が出てきます。私は、「いつも言っていることが、どうして表にあらわれてこないのか。それを一緒に考えないと、先生方も生徒も先に進むことが難しくなります」「指導と客観的評価、再指導を徹底する」「これ以上は…という限界をお互いに忘れましょう」ということを指導します。指導すべき事項の明示については、計画に示したり、先生方から話を聞き、必要事項を直接指

導するということも含まれています。

率先垂範は、先生方とお酒を飲んだり、個人的に話をするときに、「教育は、共に育つ共育」と心得て、「生徒から共に学んでいく姿勢をお互いに持ちましょう」「生徒をしっかり慈しみ、成長していく姿を我々の喜びとしましょう」と、熱く語り合っています。

生徒指導の精神ということですが、ここでは出会いの関係と漸進原則について話します。

(2) 生徒指導の精神

- ①出会いの関係と漸進原則
- ②教育相談(カウンセリングマインドと生徒理解)
- ③授業における生徒指導
- ④手本になる

34

教員と生徒が、人間として対等な出会いをしてお互いを尊重し合う。生徒指導は、生徒が自己の現実を認め、模索のため、目標に向かって自主的な人格形成をすることによって、目的が達成できます。相互に尊敬し合うという関係を出発点として、生徒自身が教員に感化を受けたり、人格の同一化を求めるといったような気持ちを持ったときに、生徒指導本来の目的が達成できると考えます。したがって、生徒の成長や変化の段階を見守る。ゆっくりでいいと思っていれば、必ず生徒の後ろ側に回り込むことができ、機会を見て背中を押せるという、漸進原則によって指導にあたっています。

5. まとめ

まとめとしては、これからの生徒指導は、生徒と先生方の調整機能の役割を果たさなければならないということと、教育相談を取り入れて生徒理解に力を注ぐ必要があると考えています。

最後に、冒頭の全人教育というところで、「学問に偏ることなく」と申し上げました。手前み

そになりますが、就職難の現在、本校は就職を希望する生徒の4倍から5倍、またはそれ以上の求人をしていただき、毎年100%の就職を達成しております。これは各企業の方々から本校の全人教育が信頼を得ている証であると考えています。おかげさまで、非行対策に労力をとられることなく、生徒の自覚と相まって、充実した学習指導が展開できています。その結果、東大をはじめとした旧帝大へ毎年複数合格を出しています。これらは、長い時間をかけて樹徳高校の教職員全員が一つになって取り組んできた成果と捉えています。

7. まとめ

(1) 生徒指導の役割

学習環境を整える。

(2) 生徒指導担当者の任務

教育方針に基づいた教育活動を実施する。

そのため、計画、実践、評価、改善に努める。

ポイント・・・分担と共有

(3) これからの生徒指導

調整機能としての役割り・・・コーディネイト。

教育相談を取り入れる・・・生徒理解。

35

今後も生徒の可能性を信じ、地域、社会、我が国、そして世界に貢献できる生徒を育てていきたいと、大きな夢を持っております。

また、今後も私達は指導者としてさらに学び続け、よりよい取り組みをして心と指導力の根を深くしていかなければいけないと考えています。

以上で、私の発表を終わりといたします。ご清聴ありがとうございました。

実践報告②

「学校組織活性化をめざして —ミドルリーダー設置の中間報告—」

前橋育英高等学校 副校長 竹 洸 敏



はじめに

皆様こんにちは。前橋育英高等学校副校長の竹洸と申します。よろしくお願いいたします。

全国各地から多くの先生方にお集まりいただいて、本当にありがとうございます。これから、「学校組織活性化」という大きなテーマですが、お話いたします。個人的に申し上げますと、学校組織の活性化というのは、たしか昨日も實吉先生が懇談会のご挨拶で仰っておられたと思いますが、我々教職員が生き生きと仕事をする、あるいは生徒達も生き生きと学んでいく、また、そういった環境を整えることが、学校組織の活性化ではなかろうかと考えております。

私自身、副校長になって1年半になりますが、どうすれば、学校のそういったあるべき姿、あるいはより良い環境づくりができるのかということをいろいろ考え、模索して、試行錯誤しているところですが、その一端をご紹介します、ご報告といたします。

I. 前橋育英高等学校の概要と取り組み

1. 学校紹介

前橋育英高校の概要と取り組みですが、最初に学校紹介を兼ねて申しますと、創立から今に至るまでのいろいろな取り組みがございました。その中から幾つか簡単に振り返り、そして現状の課題をその中から見つけ出して、具体的なイメージを描いていく、そういう作業へと進んでまいりたいと思います。

昨日から何度かお話がありますが、群馬県は、どの辺にあるかよくわからないと仰る方もいらっしゃると思います。大体、日本の真ん中あたりにあります。

群馬県の県庁所在地が前橋市、そこに本校は位置しております。現在こうやって皆さんをお迎えして研修会を行っている、ここは高崎市というところになっております。

それでは、学校紹介を簡単にします。まず本校は、1963年、創立者中村有三先生によって、男子普通科の前橋育英高等学校として開校しました。最初は、入試も群馬会館という会館を借りたり、公立学校をお借りして入試を行ったりと、いろいろ苦勞したらしいですが、以来49年、来年ちょうど50回目の入学生を迎えます。再来年、50周年記念式典ということで、そういった事業も行います。

現在、1年生から3年生まで1,436名が在籍しております。同窓生は2万名を超えまして、2万912名の同窓生がいます。

続いて、私学の心という建学の精神ですが、

本校は、「正直・純潔・無私・愛」という道義標準に基づきまして、国際的視野に立って、世界平和と社会福祉に貢献できる人材の育成を掲げて開校されているということです。よく「不易流行」という言い方をされますが、学校の不易に当たる部分が建学の精神であって、私学の普遍的な価値観を言葉であらわしている、顕在化しているということになるかと思います。先ほど来いろいろなところでお話がありますが、公立高校との決定的な差は、明確な人間形成の哲学というのが、私学の建学の精神には宿っているということだろうと思います。

続きまして、その不易な部分の具体化、価値観を具体化したということで、前橋育英には幾つか特徴があります。

本校には、普通科、保育科という二つの科があります。普通科は4つのコースに分かれていて、2つの科と普通科が4つのコースを持っています。

ここでは簡単に、Ⅳ類：スポーツ科学コースと保育科といった特徴あるところだけご紹介します。Ⅳ類：スポーツ科学コースというのは、全国トップレベルの部活動が幾つかあります。ご存知の先生もいらっしゃるかと思いますが、そういった部活動を支えたり、あるいは普通科でありながらスポーツにある程度特化したコースになっていて、オリンピック選手であったり、あるいはJリーガー等も多数輩出しているコースです。

保育科につきましては、県内唯一の専門学科ということで、育英短大の保育学科というのがございますので、そこと5カ年教育ということで、県内外で活躍している多くの幼児教育者もここから巣立っているということです。

2. 取り組み

それでは、今まで約50年になる育英高校の歴史の中で、どんな取り組みをしてきたのかということで、私自身、管理職になって一番最初に考えたことは、今までの過去の不易に対する流行に当たる部分です。具体策としてどういうこ

とをやってきて、そこにどういう手がかりがあるのか。その手がかりをもとにして現在、あるいは将来的な課題点を洗い出して、あるべき姿に向かっていく一つの材料にしようと思いました。

過去のお話を創立者にお聞きしたり、あるいは本を読んだりしたのですが、創立2年目に推薦制度を導入しているということです。これはそもそも本校、「育英」という校名の由来が、孟子盡心の「君子の三楽」の中の三つ目に、「天下の“英”才を得て之を教“育”す」ることというのがございます。この孟子の中から「育英」というふうにつけたとお聞きしています。また、創立者の言葉をかりますと、人それぞれが持っている「英」なる部分を「育」むことが教育の使命なのだということで、推薦制度を導入したということです。

約50年近く前の当時は、公立学校の入試が9教科入試で非常に厳しい。要するにすべての教科で点数を取っていかないと高校に入れないという状況だった。それを何とか打破するということで、そういう理念のもとに考えられたそうです。

続きまして、多様なコース、目的別教育ということですが、これもいささか言い古された感があるのは否めないということですが、非常に早くから専門学科を含めた科の設置をしております。高校開校後しばらくして、幼稚園を続けて3つ作ったそうです。幼稚園で幼児教育者、幼稚園の先生を採用したりするわけですが、採用する先生達を何とか自分達で育てられないかということで、保育の専門学校をつくり、その保育の専門学校が現在の育英短大の保育学科になっているわけです。保育学科に進む、幼児教育者を目指す高校生、そしてその高校から短大へ進んで、5カ年で幼児教育者を育てていこうという理念で、保育科というのができたそうです。

当時、国際化とか、グローバル化という流れが非常に加速していたときだったのですが、そのときに育英短大に英語科をつくるということ

で、やはり5カ年教育で、高校にも英語の専門学科をつくったということです。

開校してしばらくしますと、運動部が力をつけてきます。そもそも男子の普通科で開校しましたので、その男子が頑張っていて、いろいろな運動部が県内、あるいは全国に進んでいきます。そういった全国に行くような力をつけていくクラブの強化であったり、あるいは学校の組織として支援していくにはどうするかということで、体育コース、あるいは体育科という専門学科を新設しました。

ここには挙げておりませんが、今までの中で、すぐ廃止してしまったらしいのですが、焼き物をやる陶芸コースをつくったりもしていたということを知っています。

これも今では当たり前となった、特待生制度の導入、クラスの設置です。普通科の高校として開校して、だんだん大学進学希望の生徒が入学してきます。大学に入って頑張りたいという生徒達に対して支援していくという理念のもとにつくられた制度、またコースということです。初期のころ、昭和50年代の最初のころから半ばころになると思いますが、初期のころは本当に気合が入っていて、進学合宿を11泊12日でやったりしたということも聞いています。

今までの取り組みを幾つか挙げました。今ではそんなに目新しい取り組みではなかったと思いますが、当時、学校としては理念の顕在化として取り組んできたわけですね。今までの取り組みを見ますと、例えば推薦制度であったり、あるいはコース・科の新設であったり、あるいは特待生制度、あるいはここには書いてありませんが、新校舎をつくるのか、体育館をつくるのか、そういったインフラ面、要するにハード面の改革といいますか、取り組みがほとんどだったということです。

ただし、明確な理念を持ってやっていくことですし、それが外部へ発信されていって、それが受け入れられてきたということです。これは言い換えますと、内部になかなか目がいかなかった。組織とか、個人とか、そういったところ

になかなか目が届かなかったという問題点があるのではないかと思います。

Ⅱ．前橋育英高等学校の問題点と課題

1. 校務分掌組織

内部組織ということで言いますと、校務分掌組織、これは学校組織ということですが、これに目を向けてみますと、最近ではピラミッド型も増えてきているようですが、本校ではずっとフラット型というか、なべぶた型と言われる組織でやってきております。そういう組織に何か問題は無いだろうかということで、まず考えたということです。

私自身が一番印象に残るといえるのか、思ったのは、職員会議のあり方です。本校では、職員会議が3時50分から、これが月に運営委員会と大体5：5ぐらいに行われて、月に2回ぐらい職員会議があります。その職員会議が定刻になりますと、職員が70名ぐらいいるのですが、その70名が全員集まっているわけではなくて、ぽつぽつと空席があります。だんだん人が集まってきて空席が埋まり、5分ちょっと過ぎて職員会議が始まります。議案が提示されて、その議案を、例えば行事だったら、その係の先生が淡々と説明をします。それに対してほとんど意見は出ません。次へいって、また議案が審議されます。議案が終わりますと、連絡事項に入って、大体5時ちょっと過ぎぐらいに終わるということです。

本当にそこに不満といえるのか、改善する余地はないのか、ちょっとおかしいなと思っている人もいないのか。前年度と同じようなことを説明してやるのだったら、職員会議をやる必要はないのではないかと思います。私自身しています。が、ひょっとすると、何を言っても先送りされてしまう、あるいはあまり改善されることはないのではないのかというあきらめがあって、そういうふうになってしまっているのか。そういう職員会議の様子が頭にすぐ浮かんできました。

そういった本校の学校組織の現状として、「フ

ラット型の限界」という言い方をしておりますが、先ほど述べました職員会議、運営委員会も同様ですが、まず多くの先生方の合議でやっていますので、どうしても新しい議案が出にくいし、何かを改善しようとしめすと、相当根回しであったり、あるいは稟議というものであったり、そういう形で、なかなか意思決定ができない。後れていく。だったら、前例踏襲でいったらどうか。そういうふうに波風が立たない方法でいく。去年も大丈夫だったしと。あるいは時期尚早なのではないかということで、結局、先送りしてしまう。あるいは、そういったところで何か提案していくことによって、責任が出てくるというのを回避する、あるいはそもそも責任の所在が明確ではないということですので、どうしても意思決定に後れが出ますし、短期課題志向、中長期的な目標に向けて何か出していくというのが非常に難しいということになっていきます。そもそも目の前の問題が山積みでありますので、先までなかなか見通しにくいということです。

もう一つ、本校の組織の中では、リーダーシップが発揮しにくい。どうしても我々、お互いの自主性、あるいは個性を尊重するというふうになっています。例えば、何年も経験されたベテランの先生、あるいは今年入ってきた新人の先生も同じ教諭として、仲間として尊重し合うわけです。そういう意味では、横並び意識も当然出てきますし、何よりも我々自身、企業人とは違ひまして、職務の階層といいますか、はっきりとした分掌であったり担当であったりという職階意識が非常に低いということが言えます。そういった意味で、リーダーシップが発揮しにくいし、どういうところがリーダーなのか、どこがリードしていくのかといったところも明確ではない。そういう問題点があると思いました。

2. 教員の閉塞感

もう一つ、私が考えましたのは、言葉はきついというか、教員の閉塞感と言ってしまいます

と、「前橋育英高校はそんな学校か」みたいに思われても困るのですが、ちょっと大げさに言ってみたのですが、例えば自分が学級経営をしているという立場でいますと、なかなか人からの意見を聞きづらい。逆に、他人の学級経営であったり、教科指導に意見を差し出しにくいといった面が出てきます。先ほど申し上げた自主性とか、個性尊重といったところもあるのかもしれませんが、とにかくお互いにあまり口を出し合わないといいますか、相互不干渉という形になっています。

そういう事実があるわけですが、反面、自分がやっている学級経営でいいのか、あるいは教科指導は大丈夫なのか、そういったところで自分1人で考えていくということで、大丈夫なのかといった心配、あるいは無力感にもつながってきます。それとまた、何か人からいろいろ言われることに対して、プライドといったものも当然あります。ちょっと大げさな言葉を使いましたが、孤独とプライドといった問題点が、個人の中には生まれてきてしまうのではないかと思います。

また、1人の先生に、役職であったり、係であったり、いろいろなものがかぶってきます。さらには、学習指導要領が改訂になりまして、新課程を今、先生方はおつくりになられている、あるいは完成されていると思いますが、本校でも新しい教育課程に対応して、では教育課程研究会をつくらなければということになったり、あるいは生徒の安全確保が話題になってくると、では危機管理委員会をつくらなければということで、その時々の研究テーマに対して委員会であったり、係がすぐに設置されます。それが未整備のまま、だんだん積み重なってきて、結局、放置されて増加していく。そういったものもあって、先生1人が4つも5つも校務分掌、組織表を持っていたりもするわけです。

Ⅲ. 課題改善に向けて

そういった組織、あるいは個の（内部的な問題ですが）課題に対してビジョンとしてどう描

いていくかということです。これもご存知だと思いますが、一般的な組織というものには、まず共通の組織目的があり、その組織を構成する人達が協働意志、あるいは貢献意欲を働かせて、そしてコミュニケーションをとりながら進化していく、発展していくものだということもよく言われているところです。

学校組織に関しても全く同じことが言えると思います。学校組織で、共通目的というのは教育理念であったり、教育目標、あるいは一番大きな建学の精神の具体化ということだろうと思います。そして、先生達がそういった協働意志、貢献意欲を働かせて、お互いのコミュニケーションをとりながら、教育活動を実施していく。この三つの要素が円滑に循環していく個人と組織のあり方を考えたわけです。

1. 校務の優先順位づけと分掌の統合

最初に考えたのは何かといいますと、校務の優先順位をつけていく、あとは、いっぱいできている分掌などを統合していくということです。その具体的な方策として取り組んだのが、本校には「職員規約集」というのがあります。これは学則から始まって、教務内規や進路などの内規、いろいろな係の分掌表が載っていたり、職員の諸願いのフォーマットがあって、非常に簡単な必携規約集です。これを利用して、いろいろな学校にもおありだと思いますが、校務分掌表、組織表をもっと内容が明確になるようにしたらどうかということでした。校務分掌の表だけではなくて、分掌の係、あるいは部といったところが、どういう目的で、あるいはどういう目標を持ってやっているのか、あるいはどういう範囲のところをやっているのかといったことをある程度はつきりできれば、我々自身の職務に対する意識も少し変わってくるだろうと思いました。

校務の軽減・効率化ということですが、何よりも規約集を改訂する過程の中で、いろいろな問題点が出てきたり、あるいは合理化できるところがあるのではないかと考えたわけです。そ

ういう中で、合理化できれば、先生1人1人の負担感であったり疲労感も少しは払拭できると思います。ましてや学校全体の組織ももうちょっとうまく回っていくのではないかと考えたわけです。

2. リーダーシップの明確化

もう一つ、同時に着手したというか考えたのが、今回のテーマでもあります「ミドルリーダー」のところですが、リーダーシップをもうちょっと明確化していくということです。そもそもミドルリーダーとはということですが、文部科学省では「中堅教職員」と定義しています。そのままですが、ただし、「学校ビジョン・事業参画と教育活動の推進」「職場の活性化」「同僚教員の指導育成」「学校外部の折衝対応」といった4つの分野、さらには「期待される行動」ということで、19の項目が挙げられております。文科省がミドルリーダー、主幹教諭とか、そういったものを公立では実際にやっているようですが、なかなか公立では機能していないことはお聞きしています。希望降格者が多いとか、大変だという話も聞いています。

しかし、せっかくあるこういったリーダーシップを発揮する、しかも中堅教職員にとって何か力になるようなものがあればいいということで、そのまま名前をお借りして、本校では「主幹教諭」ということで始めてみました。これも理事長をはじめとし本部ですぐに対応してくれる体制があったからできたことですが、こういった形で「主幹教諭」をつくっています。もちろん目的は、先ほどの問題点や課題から出てきた、意思決定とか対応をもっと早くするということですし、なかなか見にくい中長期的な展望を少し考えていく核になってもらいたいということをやっております。

機能としては、まず第一に我々管理職の補佐機能ということで、私はいろいろなことで相談に乗ってもらっていますし、あるいは集会とかいろいろなところで肩代わりしてもらったりもしています。

2つ目が調査研究機能ということだと思います。いろいろな内外の情報を集めたりして、いろいろな状況を把握してくれる。内外というのは、特に中堅の先生方にも、若手の先生方もそうです。

3つ目が先ほどの文科省のところでもありますが、人材育成機能ということで、何しろ現場に先生方はいますので、非常に近くにいてとところで、いろいろなサポートとか手助けをしてもらえるのではないかとということで、今回試験的に導入してみました。

先ほど、ピラミッド型とか、フラット型、なべぶた型というのが出てきたのですが、どちらがいいのかという話ではないと思います。私はピラミッド型にはピラミッド型の弱点はあるし、例えばどうしても成果主義とか効率化ばかりを追いかけってしまうので、そっちのほうにいつてしまうとか、では、現場は上からの指示だけ待っているという指示待ちになってしまうとかということもあるでしょうし、逆にフラット型にはフラット型の良さが、なべぶた型というか、帽子型というか、そこにはその良さがあると思います。

ただ、私が主幹の先生方に対してお願いしているというか、本校で位置づけているのは、こういう位置づけになっております。

フロントラインというか、第一線の先生方がいるわけです。我々は抽象的な戦略等を指示して、主幹を中心とするミドルの先生方が外からの情報、あるいは中でいろいろな先生から話を聞く。そして具体的なシナリオを明示して、実行してもらう。

ただし、第一線でいる先生方をただただ指導するだけではなくて、そこから得たものとか、あるいは感じたことを、その段階で、あるいは次の段階に活かすために、また上に現場の情報として提供していく、また、新たなアイデアを目指していく。それをまた我々が受けまして、そのアクションの結果を反省して、また次の戦略に活かしていくというふうに、絵だけ見るとすごくうまくいきそうな感じはするのですが、

でもそういう意識を持って接していくことがまず大事ではないかということで、先ほど申し上げました職員必携規約集についても、そういった形で今、改訂に取り組んでいます。

また、50周年記念事業、式典等につきましても、主幹の先生達に具体的なシナリオを描いてもらうということで進んでおります。

こういうグルグルしている螺旋状というのは、上からクルクルいきますし、下からもクルクル回っていくということと、もう一つは、ピラミッドみたいにここまでが主幹だから、ここがミドルで、それ以下の先生は関係ないということではなくて、このあたりがミドルということになるわけで、リーダーは幾らいてもいいと思います。教科のリーダー、あるいは部活等を指導するようなリーダー、そういうリーダーがいていいと思います。今は主幹教諭という名前になっていますが、そこからこの辺に位置する先生方の意識が高まってくるのではないかとはいくもくろみもあります。

現在、どのような形でやっているかといいますと、定例的には管理職の打ち合わせの直後に主幹会議というのを設けて、週に1回ですが、やっています。少人数の戦略チームということで、少人数ですので、はっきりとした意見がそこで出てきますし、さらにその会議を離れたあとで先生方からいろいろな意見、要望を聞くことができるということで、原則論ではなくて、具体的、また突っ込んだ議論ができるということです。

例えば、入試総括であつたり、生徒募集・中学校対策といったことは、入試が終わった直後というのは、全体としての会議日程がなかなかとりにくい。結局、年度が変わって4月とか5月になって、新しい募集要項をつくらなくてはいけないときになる。そこでは前回の入試のときの反省、募集のときの反省は忘れてしまう、先送りになってしまうということがあります。そういった意見が出にくかったり、あるいは日程の関係で全体会がしにくいものについてなど、非常に早く対応することができるということ

で、来年度の入試に関しても、形として今までずっとやってきたことが変わったという利点はかなりあります。

実際に主幹をやっていた先生方に感想をお聞きしたりすると、非常にスピード感がある対応が可能になったということ、あるいは自分自身が自覚的に働けるようになった、あるいは漠然と将来のことも大事だろうとは思っていたが、もっと具体的に明確な形として将来像を考えるきっかけになったということです。

3. 教員間のコミュニケーション

もう1つ取り組んでいるのが、先ほど申し上げましたコミュニケーションです。それをどうにかして授業力と絡めてやっていこうと考えて、授業力向上プログラムという形で、要するに公開授業とか、相談し合うとか、お互いに授業を見合うといったものを増やすということだけなのですが、プログラム化して正式な形でバンと出してやっています。

どんなにいいプログラムだったりカリキュラムだったりしても、授業が一番だというのは、私自身も含めて皆さん同じご意見だと思います。授業が生徒の力を高めるということだと思います。

そういう形で、今まで何となく研究授業はやりましょう、各教科1人ずつやってください、で終わっていたのを、公開授業週間とか、あるいは日常的にミニ教科会とか、あるいはどこかの空き時間を定めて、横並びで持っている先生方はお話をする機会をつくってくださいという意識づけを現場に提供していくということです。

ただ、先週1週間、公開授業週間だったのですが、まだなかなか動きがないです。どうしても授業の予習があるとか、小テストの採点があるとか、いろいろな理由があると思いますが、なかなかまだ腰が重くて。実は私もこの発表の準備で、というのを理由に、あまり公開授業に参加できなかったのも、自分がやらないとダメ

だという気がしています。ただ、提供しなければ絶対動きませんので、そういった契機をつくっていくのは大事なことだろうと思っています。

お互いの授業が見られる、あるいは誰かがやっていることがわかる、見える。我々も見えるということで、「見える化」ということでやっております。なかなかうまく進んでいません。

もう1つは、「校内研修」をコミュニケーションの1つの材料にしようと思っています。例えば、教員全員の普通救命講習というのがありますが、これは消防署にお願いして、救命とAEDの使い方等を講習して、全員が普通救命講習の修了証を持っています。ただ、今年はちょっと時間がなかったのもので、簡易救命講習になってしまって、新しい先生は修了証をもらえなかったのですが、これも校内研修扱いとしてやっています。そういった研修の中で、救命講習をやりながらお互い話をしたり、いろいろな会話をしたり、そういう中で少なくともコミュニケーションとしての役割は果たしているということです。

今こうやって皆さんの前でお話ししている内容も、そっくりそのまま校内研修ということで、11月になってしまうのですが、先生方の前で行うことになっています。そういった形で、なるべく手づくりの校内研修をしていくことによって、少しずつお互いの距離が近づいていくのではないかと考えております。とにかく連帯の干渉、あるいは共働意識を何とか生み出して、あるいは高めていくということです。

研修報告書、「ドウダンツツジ」の「満天星」で、群馬県の花ですが、「満天星の花」といった研修報告書を出していて、校外研修に行った先生方は必ず報告書を書くことになっています。昨年度のものは大体270ページぐらいのものになっていますが、これも本当は行ってすぐに報告をしていただくのが一番いいと思いますが、数も多いですし、なかなか難しいので、報告書を出すことで、読んで、興味があることは

その人に聞いてください、あるいはこの件については、このグループでもうちょっと考えたらどうですかと、そういう材料にできればと思ってやっているところです。

おわりに

最後になります。取り組みから見えてきたことがあります。今まで前橋育英が取り組んできたことは、先ほど申し上げたようなハード面、インフラ面の改革でした。今、私が考えたり取り組んだりしていることは、ソフト面とか、言ってみればヒューマンウエアといったところですので、こちらのほうに力を入れている。もちろんインフラ面も重要な要素です。しかし、こちら側のソフト面の改革というか、活性化といえますか、そういったところを強めていく。つまり、「不易流行」の「流行」の部分のいかに考えていくかということが非常に重要なことなのではないかと、当たり前のことかもしれませんが、改めて思いました。

今後の方向性ですが、先ほど言ったことをまとめただけで、当たり前のことだと思います。みんなして学校のビジョンを考えて、それを実現していく。それも生徒の力を高めるために我々も力をつけていくということであろうと思います。

「自らの課題として」、先生方一人ひとり皆さん使命感を持って、行動力もあって、そういう先生方の心といいますか、先ほども心に火をつけるというお話がありましたが、火をつけていく。そういったエネルギーに火をつけていくというのが、我々管理職としての役目であろ

うと思いますし、教員のエネルギーが一つに向かうための一つの方策がミドルリーダー、主幹の設置でもありますし、そういった役割が課せられていると思っています。なかなか答えが出にくい問題、いや、答えがないかもしれない問題に、仮説を立てて、それを検証していくことになります。今回の報告は中間報告ということで、また、どういう結果になったかということは今この場でご報告できないのは非常に残念ですが、何かあったらお聞きいただければと思います。

前橋育英高校の教育理念に、「自らの行動でより良き社会を」というのがあります。この教育理念、スローガンというのは、生徒に向けられた理念ということですが、実は内側の我々にも向けられていることで、「自らの行動でより良い学校を」「自らの行動でより良い授業を」とか、我々の人間力といいますか、我々の力を高めていくことが非常に重要なのだろうということを改めて実感いたしました。

今までどこかで聞いたぞ、というお話で、斬新的でもなければ、そんなに創造的なお話でもない、本当に当たり前のありきたりな実践で、しかも中間報告ということで、お役に立ったかどうかいささか心もとないのですが、実はこういったことを通じて一番勉強させてもらったのは自分自身だったなということで、こういったチャンスを与えていただいたことに感謝しております。

ということで終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。

私学経営部会

フォーラム・ディスカッション

「次世代リーダーの育成」

パネリスト	東京成徳大学中学高等学校	校長	木内秀樹
パネリスト	株式会社ブレインアカデミー	執行役員	淡路雅夫
パネリスト	株式会社 J T B 法人東京	取締役	大塚雅樹
コーディネーター	水戸女子高等学校	理事長・校長	鈴木康之



○司会（高瀬元彦）

1時になりましたので、午後の部のフォーラム・ディスカッションに入りたいと思います。よろしくお願いします。

テーマを「次世代リーダーの育成」と題しまして、4名の先生方にお越しいただきましたので、ご紹介いたします。

パネリストとして、東京成徳大学中学高等学校校長の木内秀樹先生、株式会社ブレインアカデミー執行役員の淡路雅夫先生、株式会社 JTB 法人東京取締役の大塚雅樹先生、そして、コーディネーターといたしまして水戸女子高等学校理事長・校長の鈴木康之先生、以上4名の先生方です。よろしくお願いいたします。

それぞれ講師の先生方の詳しい経歴につきましては資料がございますので、ご確認ください。

それでは、コーディネーターの先生より進行をお願いいたします。よろしくお願いいたします。



○コーディネーター（鈴木）

水戸女子高等学校の鈴木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私の学校は、今年、創立80周年を迎えることができました。ちょうど創立記念日の約1カ月前に例の大震災が起りまして、私の学校は、ざっと20億円弱の被害を受けまして、今、仮設校舎で教育活動を展開しております。生徒達からは、「校長先生、トイレがきれいになってよかったですね」などと言われ、ちょっと複雑な思いではあるのですが、そのようなことで教育活動を展開していますが、中高連からはたくさんのお見舞いをいただきまして、まことにありがとうございました。

ご参集の先生方も大変お疲れだろうと思います。最後のプログラムは、フォーラム・ディスカッションですけれども、最初にちょっと確認をいたしたいと思っています。

先生方、ご案内のとおり、日本私学教育研究所は、研修のあり方について、昨年いろいろな改革を行いました。6月にとり行われています私学経営研修会、それから、この全国私学教育研究集会をきちっとリンクさせようということで、6月の私学経営研修会でいろいろ取り上げられた事柄を、この全国私学教育研究集会ではさらに深め、さらに具体的に。このような日私教研の意図がございます。

今年、神戸で開催された私学経営研修会ですけれども、これは「混迷の時代に期待される教育と私立学校」というテーマで研修をとり行ったわけです。そして、そのパネルディスカッションの中では、私学に求められる三つの力、教育力、経営力、そして教員力、こういう三つの切り口で神戸では議論したところです。

その中で、教育力という部分では、やはり私学の建学の精神を通して、入学したい、あるいは入学してよかった、そのような学校をつくり上げていこう。あるいは経営力では、持続性ということをパネリストの方が強調されていました。これは、もちろん経営資源、金銭的な部分もそうですし、また、教員の力、この持続性がないとなかなか難しいだろう。そして、教員力というところでは、やはり研修の重要性ということが指摘されました。

一方、翌日のグループディスカッションの中では、今の教員のあり方について忌憚のないご意見をいろいろいただいたところです。例えば今教員を採用する際、大学院卒の教員を多く採用する傾向にありますが、どうもこの人達が使えない。いろいろなことは知っているけれども、実際、物を教えるだけではなくて姿勢を示す、あるいは生徒指導等のところで、なかなか難しいというような報告もいただきました。

それらのことで、やはり今どうしても避けて通れないのが今回のテーマである「次世代リーダーの育成」。やはり学校の質の向上、それから持続性等を鑑みて、今回のテーマはこれが適切なのではないだろうか。そして、学校の中で我々は何ができるのか、我々は何をすべきなのか。管理職として、次世代リーダーを育成するために我々は何をすべきかといったことを、パネリストの方々から忌憚のないご意見をいただければと考えております。

この後の進め方ですけれども、パネリストの先生方から20分ずつお話をいただきます。お一人のパネリストの方が終わった段階で、私からの質疑、あるいはパネリストの方々のご意見をいただきながら進めてまいりたいと思います。後半の部分では、フロアの先生方からもご質問やご意見をいただき、進めてまいりたいと思います。

まず、木内先生から学校の現場からということで、次世代リーダーの育成ということについてお話をいただければと思います。

それでは、木内先生、お願いいたします。

○木内

木内でございます。よろしくお願いいたします。

本日のテーマが「次世代リーダーの育成」ということでございます。これは、学校の将来リーダーとなる中堅・若手教員をどうやって育てるかということだと私は考えております。

先ほど樹徳高等学校、それから前橋育英高等学校から、成果至上だとか、校務分掌内でのい

ろいろな取り組みのお話を伺って、これから私が話したいことも実践されているということで、非常に刺激になりました。本当にありがとうございます。



そこで、現場からということでございますけれども、多少抽象論も入ってまいりますので、ご理解いただきたいと思います。

まず、次世代リーダーを育成するということには、どういう力を持った人がリーダーになるのか、どういうリーダーを育てたらいいのか。これは、やはり必要だと思います。ですから、まず、リーダーシップとは何ぞやということについて触れさせていただきます。これは、先生方、もちろんご存知のことかもしれませんが、改めて聞いていただきたいと思います。

このリーダーシップというテーマは、ビジネスの世界の企業研修ではよく扱われるものでございます。きょうも企業の方にお出でいただいておりますけれども、企業と学校とでは多少違いがあると皆さんは感じていらっしゃると思います。ですから、リーダーシップは何ぞやということから、次に、学校におけるリーダーシップはどのようなものなのか。それを考えて、最後に、学校の中でリーダーシップを持った人材を育てるにはどうしたらいいのかというについてお話できればと考えております。

まず、リーダーシップでございますけれども、黄色い紙で私のレジユメが1枚紙に入っているかと思いますが、リーダーシップというのは、人やチームに影響を与えて結果を出すことだと一応定義させていただきます。リーダーシップ

の科学研究というのは20世紀初めの頃から盛んになったと言われております。初めは、リーダーシップ理論についてということで括弧でくくっておりますけれども、リーダーシップ特性論というのがあります。もちろん幾つかのリーダーシップ論があるわけですが、この特徴は、優秀なリーダーと言われる人はどんな特性を備えているかということを考えていったわけです。

「リーダーシップについて」

東京成徳大学中学・高等学校
木内 秀樹

1. 概論

(1) リーダーシップ理論について

リーダーシップ特性論



リーダーシップ行動論



変革型リーダーシップ論 ビジョン志向のリーダー
変革型リーダーシップ

(2) 変革型リーダーシップ論

① ビジョン志向のリーダーシップ

- ・ 素晴らしい組織をつくりあげ、長期的に発展していくために必要なものは、自分たちで実現することのできる未来へのビジョンである（パート・ナヌス）
→ 魅力的でやりがいを感じられるビジョンを創造して、メンバーに広く共有化して、実現していくことがこれからのリーダーに求められる役割である
- ・ メンバーに支持されるビジョンの4条件
 - a. ゴールがイメージできる
 - b. 実現したときの状態が魅力的である
 - c. チャレンジングだが実現の可能性がある
 - d. わかりやすく、伝えやすい

② 変革型リーダーシップ

- ・ 「変革型リーダーシップ」が求められる背景
- ・ ジョン・P. コッターのリーダーシップ論
組織の変革を進めるにはマネジメントではなくリーダーシップが求められている
- ・ コッターによる「リーダーシップ」と「マネジメント」の区分
- ・ コッターによる企業変革の8つのステップ
危機意識喚起 → チーム結成 → ビジョン策定
→ ビジョン伝達 → 行動サポート → 短期成果の獲得 → 次なる施策 → 定着

2. 学校におけるリーダーシップ

(1) スクールリーダー

- a. スクールリーダーは「教育活動の組織化」を推進する役割を担っている
(校長・副校長・教頭・教務主任等)
- b. スクールリーダーは相互に意思疎通を図りながら、学校のビジョンを共有化し、個々の責任を自覚しつつ、役割を補い合って教育活動に取り組んでいる各学校の経営改善のキーパーソンである
- c. 校長の役割…「マネージャー型」の校長から「リーダー型」の校長への役割変容

- d. 管理職は所属教職員の人事上のサービス管理だけでなく、自分の学校の経営戦略を推進することが重要な役割
「管理職の仕事はスタッフの労働意欲をあげること」
(大手メーカーの人事担当チーフ)
「真のリーダーは、人間のエネルギーとビジョンを創造することが自らの役割であることを知っている」
(P. F. ドラッカー)

(2) 経営戦略の推進

① 経営戦略とは

「経営理念 (建学の精神)」

…当該組織の社会における存在意義 (プレゼンス) や果たすべき「ミッション」(使命)を普遍的な形で表した基本的価値観の表明 — 不易なもの「ビジョン」

…普遍的な信念、揺るぎのない価値観である経営理念 (建学の精神) の下で、ある時点 (〇年後) までにこうなっていきたいと考えるゴール (到達目標)、めざしたい組織の将来像を利害関係者 (ステークホルダー) に対して具体的に表現したもの

「戦略」

…普遍的な「経営理念 (建学の精神)」にもとづく、短期具体的な「ビジョン」(到達目標)を実現するための手段が「戦略」(ストラテジー)である

② 経営戦略の方法

a. 「現在地 (学校の現状・評価)」の確認をすること
戦略とは「現在地」と「目的地」との距離 (ギャップ) を結ぶ複数の道 (選択肢) の中から何かを捨てて (選択)、何かを優先させる (集中) といったトレードオフ (取引関係) の問題である

b. 学校経営案・校務運営要綱・教務運営案等において、その戦略 (道のり・進路) を明確化すること — その舵取りと具体化こそがニューリーダーの役割
「よき意図があっても、山を動かすことはできない」
(P. F. ドラッカー)

(3) もうひとつの視点

① 個人の幸福論からリーダーシップを考えようとする立場

リーダーシップとは自らの価値観どおりに行動する力である

そして個人が幸せな人生を生きるために、必要不可欠な姿勢こそがリーダーシップである

・WBCでの日本チームとイチロー選手

・アップル社 Steve Jobs

Stay Hungry, Stay Foolish

② 「学校目標」と「個人目標」

別の形のリーダーシップ (教師像)

以上

昔は、体格が大きくて圧倒するような人がリーダーにふさわしいとか、声が大きい人が良いとか、スタミナのある人が良いとか、いろいろあったようです。ただ、その後の研究では、資質によってリーダーを特定することはできない。リーダーという特性は、経験とか、そういったもので備わってくるものだ。もちろん家柄とか、そういう場合もあるでしょうけれども、一般的には、最初からリーダーという資質を持っている人はいないのだということでございます。

次に出てきたのがリーダーシップ行動論というものでございまして、リーダーの行動を類型化して、効果的なリーダーシップのスタイルを見出そうとするものです。典型的なものとして、皆さんもご承知のようにパワー理論というのがあるわけですが、例えば地位を利用して、部下にこれをやれ、あれをやれという命令を下す。これは、正当パワーといいますが、あとは罰を与えるような強制パワー、「おまえ、これをやらないと地位を下げる」とか、ペナルティーを与えるようなやり方です。言うことを聞かざるを得ないようなリーダーシップ。それから、モチベーションを上げるために、「これをやったら給料を上げてやるよ」というような報酬パワーというやり方もあるわけです。リーダーがパワーを行使してチームを動かす。これは典型的な形でございます。

幾つかいろいろなリーダーシップ理論があって、現在の理論的な流れとしては、いわゆるさせるリーダーシップから、ついてくるリーダーシップを志向するようになりつつあると言われています。つまり、リーダーが掲げたビジョンにコミットメントしたメンバーが、ビジョンを達成しようと自ら進んで動くようになるようなスタイル、これが現在の主流といえますか、新しい理論だということです。

ただし、先ほど申し上げたパワー理論がいけないということではなくて、要は結果を出せるリーダーシップ、問題解決できる理論こそがよいわけですから、状況によってどんなスタイルがよいかという研究もされているわけで、リーダーシップ状況論というのがあって、こういう場合にはこういうリーダーシップを発揮すべきだというようなことを言われる場合もございます。

いろいろな理論がございしますが、先行き不透明で困難な状況の中で、学校も同様に課題を抱えていて、少子化があって、それから自分のところの学校のアイデンティティーを出さなければいけない。保護者も学校選択にいろいろなことを考えながら来る。昔のような生徒募集は

できなくなった。そういう中で、組織変革を実現していくにはどんなリーダーシップが求められているかということで、その代表的な例として、変革型リーダーシップ論の中から、その代表的な二つを(2)のところに掲げさせていただきました。

変革型リーダーシップ論の代表的なものとして、一つはビジョン志向のリーダーシップと、②として変革型リーダーシップを挙げさせていただいておりますけれども、①のビジョン志向のリーダーシップというのは、リーダー行動だけに着目するのではなくて、ビジョンという将来の構想を打ち出すことから、チームやメンバーを引っ張っていくことがリーダーに求められている役割であるという考え方です。ですから、学校の次世代リーダーも、校長なり教頭、中堅ということになってきますと、この辺のビジョンを校長と共有して、一般教員に訴えられるような資質を持っていないといけないことになるわけです。取り組むべき仕事の目的や意義を熱く語ることが大切だと。

そして、ビジョン志向型のリーダーシップでは、メンバーに支持されるビジョンの4条件として、ゴールをイメージさせるとか、実現したときの状態が魅力的であるとか、a、b、c、dと書いてございますけれども、二つ目は変革型リーダーシップでございます。この変革型リーダーシップというのを言い出したのはコッターという方ですが、コッターという人は、組織の変革を進めるためにはマネジメントではなくて、リーダーシップが求められるというように言っているわけです。

今、マネジメント流行りですけども、コッターによれば、リーダーシップとマネジメントは違うのだ。リーダーシップというのは、わくわくするようなビジョンと戦略、わくわくするような絵を描いて、みんなの目をその方向にくぎづけにして、その絵を実現しようとするメンバー集団をつくり上げ、彼らのやる気を熱狂的に高め結果を出す、これがリーダーシップなのだと言っています。

これに対してマネジメントというのはどういうものかということ、冷静に計画をつくって予算を確保して、人材を適材適所で組織に配置し、実行レベルでは仕組みやメンバーをコントロールし、発生する問題をその都度解決しつつ結果を出す。リーダーシップのほうに魂に火をつける。先ほど2校から報告がありましたけれども、火をつけるということ、これがリーダーシップの重要な役割の一つになります。

ただ、現実の問題として組織を運営していく上では、リーダーシップとマネジメントの両方が必要であるということは言うまでもありません。ここの違いを理解して、自分の学校の状況においてリーダーシップを強化するか、マネジメントを強化するかといった検討がなされなければいけないということでございます。

さらにもっと新しいリーダーシップ論として、ここには書いてございませんけれども、ファシリテーター型リーダーシップというのがございます。ファシリテーター型リーダーシップというのは、会議等でみんなの意見を聞きながらまとめて上げていく、新しいものをつくり上げていく、そういう能力を持ったリーダーなわけです。先ほども話がありましたように職員会議等、長時間にわたるような会議、その中で議長である、教頭先生がされるのかどうかわかりませんが、いろいろな意見を出させながら、そこでファシリテーターは自分の意見を言わないのですけれども、その中で議論しながら集約させて、また、いろいろな少数意見も導き出していく、そういう能力を持った人間も必要である。

不透明な経営環境下で、リーダーが独創的なアイデアを提案してメンバーを引っ張っていく、そんな力強さがこういう不透明な環境下では絶対大事だというようにお考えの方も多いと思うんですが、今日のような変化の激しい時代には、変化のほうにスピードが速いのです。こういう時代には、ビジョンと決断力があるリーダー、それに加えて人の話に耳を傾けて、そして人に権限を持たせることのできるリーダー、こういったリーダー、2種類を足したようなタ

イブのリーダーが求められているという方も多くいらっしゃいます。

この場合、リーダーの言うビジョンを心からみんなが受け入れているならば、メンバー主体の話し合いが成立するということは言うまでもないことでございます。

抽象的でございましたけれども、リーダーシップ、いろいろな考え方がございますが、人間は100%、あれもこれもいろいろな能力を持った人がいるわけではありません。この分野はすごく得意だが、この分野はあまり得意ではないということもあり得ます。例えば私どもの学校ですと、私は校長ですが、教頭が二人おります。一人の教頭は教務畑です。教務をやりながら、細かくいろいろなことを押さえて、堅実なといえますか、そういうタイプの男でございます。昨年、もう一人教頭にした者がおりまして、その者は非常に熱く語るのです。ただ、細かく押さえてということは多少欠けるところがあっても、二人の教頭がいて、うちの学校は非常にうまく機能しているなど。熱く語るほうの教頭が、まず話をして、後ろから細かく押さえる者がフォローしているようです。

ですから、私としては、どちらをさらに権限を持たせていくかということは別にして、人間は得意分野があつて、もし教頭が一人であるなら、私どものように二人備えて、そこもカバーしながら役割を担ってもらうということも必要ではないかと考えます。

学校におけるリーダーシップですけれども、今、本校の場合の話をいたしました、レジュメのほうに2番として、「学校におけるリーダーシップ」ということでスクールリーダー。aは教育活動の組織化を推進する役割を担っている、2番も経営改善のキーパーソンである。これは大事だと思うのですが、cの校長の役割として以前はマネジャー型の校長、校長の役割はマネジャー型だと言われていたことがありますが、現在ではやはりリーダー型、先生達を引っ張って、ビジョンを構築して、目標を与えていく、こういう校長先生に役割が変容して

きたと言われております。

校長先生の次の副校長、教頭、教務主任、そういった管理職も、人事上の服務管理だけではなくて、自分の学校の経営戦略を推進することが重要な役割だといわれています。例えば、そこに二つ書いてありますけれども、大手メーカーの人事担当チーフなどは、管理職の役割はスタッフの労働意欲を上げることだ。管理ではなくて、どうやって進んで働いてもらうようにするかだとか、そういう労働意欲を上げることだという考え方があります。皆さんもご承知のドラッカーなどは、「真のリーダーは、人間のエネルギーとビジョンを創造することが自らの役割であることを知っている」というような言葉も残しておられます。

(2)「経営戦略の推進」。経営戦略の推進といいますと、企業でよく使われますけれども、学校にも当てはまるわけです。先ほどの2校の中でもビジョンだとか、いろいろ出てきましたけれども、まず、企業における経営戦略、これは、学校では建学の精神に当たるものでございます。学校の存在、ミッション、使命を普遍的な形であらわした基本的な価値観の表明であつて、これは不易のものだと言われているけれども、建学の精神として位置づけて、このところ多くの学校で建学の精神をもっと具現化するために、教育に生かすためにいろいろな取り組みがされています。

例えば本校で言いますと、長い間建学の精神がありながら、なかなか教育実践の場で活かしきれていなかったのが実情です。私どもは、例えば建学の精神で言いますと、東京成徳、「徳を成す」という建学の精神。すばらしい人間性を持った若者を育てようということなのです。創立者が「徳を成す人物の育成」という建学の精神をつくったわけですが、3代目の理事長がそれに基づいて五つの教育目標、「おおらかな徳操、高い知性、健全なる身体、実行の勇氣、勤労の精神」をつくって、学校の教育を進めていたのですが、今の五つの教育目標というのは、どちらかといえば当たり前というか、

実行の勇気と勤労の精神については多少特色がありますけれども、前の徳・知・体についてはどこの学校でもありそうな内容でございます。

それを具体的にすることがなかなかできないでいました。そうすると、建学の精神はこうだと言いながら、一般の先生達は、自分達は何をしていけばいいのか。そうすると、どこの学校でも取り組んでいるような、勉強させて、進学実績を高めて、生活指導ではしっかりした生徒をつくろうとか、そういうところにどうしても終始しがちだったわけです。

現在は、「建学の精神」から、「自分深め学習」という形で展開しています。揺るぎのない価値観である建学の精神のもとで、ある時点までにこうなっていきたいというゴール、目指したい組織の将来像を利害関係者、ステークホルダーに対して具体的に表現したビジョンをつくらなければいけないと考えています。丸で書いてありますけれども、「〇年後」。企業などですと、これは3年だそうです。3年以上の長期にわたるとドリームということだそうですから、3年計画でこういうものをつくる。

その際には数値目標だとか、そういったものが立てられて、それを検証していくという作業が必要になるかと思うのです。そういうビジョンに対して、さらに戦略といいますか、短期具体的な到達目標を実現するための手段、どうやったらこれに到達できるかということを打ち立てなければいけないわけでございます。

この戦略を立てるときには、現在地といいますか、学校の現状、評価を確認する。現状はなかなか確認しづらいのですけれども、在校生の保護者にアンケートで学校をどのように感じているか。在校生の保護者は自分の学校に入ってきた保護者ですから、一応よさはわかって、支持していただいている集団ですけれども、例えば私ども始めたのは入学前の受験生、もしくは説明会等の生徒に、うちを受けなかった人達にもそういうアンケートをとりたい。そのような現状をまず認識する。現状を認識しない限り、先ほど出したビジョンとのギャップ、どうやっ

て改善していったらいいかという戦略が立てられないわけですから、そういったものを行うということ。

それから、bとして学校経営案、校務運営要綱、教務運営案等によって、さっき言った戦略の道のりを明確にして、そのかじ取りをする。これがニューリーダーの役割になるわけでございます。リーダーシップとか、やるべきことはわかっているわけですが、それに向けて、では教員をどうやって指導していくかということです。

リーダーシップをつけるために何が大事かといいますと、アメリカのリーダーシップ研究の専門会社であるロミンガー社という会社があるのですけれども、その調査によると、リーダーとして成長する上でどのような出来事が有益であるかとリーダーに聞いたのです。その結果、経験が70%、そして上司がいろいろなことを教える薫陶が20%、研修が10%だということです。ですから、今コーチングだとか、いろいろな研修が大いにはやっています。コーチングはやっていて、実際に行った人、コーチングをやったけれども余り変わらないというような現実もあるように思います。

例えばコーチング研修ですと、人事担当などは、管理職全員コーチング研修を実施したけれども、いま一つ効果がない。コーチング技術はいろいろな業務で話せとか、復唱しろとか、いろいろスキルがありますよね。こういう技術は身につけたけれども、聞いてやるというような態度で上司が接せられても困るとか、受講管理者で、コーチングのやり方はわかった、でも使う機会がないとか、そのような意見が寄せられているわけです。

いずれにしても、リーダー経験ができるプロジェクト、意識的にトップリーダーが見込みがあるというか、学習能力がある人を見つけて、そういうものを実践といいますか、育てていく。これがまさにリーダーをつくり上げる手段だと思います。トップのリーダーが中堅幹部だけではなくて、自分の学校のビジョンを熱く

語って、これを共有する。これはトップの一番大きな仕事だと思います。そして、その後ビジョンを具現化して、戦略を立てる。この中心に将来育つような人材、これは学習能力を見抜かなければいけないわけですが、そのような人達をつけて、そこで経験を積んでもらう。これが一番のリーダー養成だと考えられています。

最後に、もう一つの視点ということで、人を引っ張るのがリーダーシップだという一つの定義をしましたけれども、価値観を示して人を巻き込むという言い方もあるわけで、個人の幸福論からリーダーシップを考えようとする立場もあります。

よく会社で、入ったけれども3年以内に3分の1はやめてしまう。これは、自分がどこに所属して、自分のやりたいことができているかということと大きく関係あると思うのですが、学校の場合には教員を目指して教員になったわけですから、最初の教員になったときの思いというものを思い起こしてもらおう。そうすると、学校目標と個人目標が違っていても、学校の場合は個人目標を優先していても給与が下がるとか、待遇が下がるわけではありませんから、学校のビジョンになかなか従わない人達も中にはいそうな気がします。そういう人達には、まず所属している学校の教員、生徒を教える、生徒を成長させるということをもう一回思い出してもらいながら、学校ビジョンを共有するということが大事だと思います。

そこにイチローのことを書いたのは、イチローは WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）でリーダーでしたね、という話をされたときに、「私はリーダーじゃないんだ。みんながリーダーだ。私は野球が好きで一生懸命やったけども、みんながリーダーで、誰が指示してこうやれ、ああやれということは、このチームではありません」と言っているのです。

学校でも、例えば管理職として人を指示したりする人ではなくて、教員としてすばらしい人間性を持っていて、生徒からも慕われ、教科指

導もしっかりしていて、責任者にはつかないけれども、学校の先生として理想の先生像というのがあるような気がするのです。そういう人達は、決してリーダーではないけれども、学校の中では生徒にとっても、他の先生にとってもある意味のリーダーだと私が感じますのは、専門職という分野なのかもしれませんが、そういうリーダーも学校の中では大事にしたいと思っています。

○コーディネーター

ありがとうございました。

先生、前段の部分でリーダーシップとマネジメントの区分のお話がありました。いわゆる若手、次世代リーダーの育成ということで言うと、イメージできるのはマネジメントできるという解釈でいいのでしょうか。

○木内

いや、マネジメントできることも必要ですが、それ以上に熱くビジョンを共有できる。学校のビジョンがあるわけですから、学校のビジョンを自分のものにしながら、いろいろなアプローチはあると思うのですが、やはりその部分がないと指示待ちになってしまうのです。

○コーディネーター

わかりました。ありがとうございました。

私が校長になったころ、今から13～14年前ですけれども、公立の先生方と一緒に会議のときにいろいろなごあいさつの中で、心の教育ということをお皆さん盛んに仰っていました。心の教育というのは一体何なのだろう。もちろん文科省でいろいろいえばわかるわけですが、この人は何を指して言っているのだろうということをお私は素朴に疑問に思って、何度かお尋ねしたことがあります。「先生、心の教育って何でしょうか」と。そうしましたら、「いや、それは一言では難しいよ」とか、どなたからもお答えをいただけなかったのです。そのときに、この人達は本当は知らないのではないかと私は

思いました。

それは、その人達が云々ではなくて、恐らく心の教育といったときに、もう思考が停止してしまっているのではないかと私は思っているわけです。同じように、先ほど木内先生が仰った経営理念のところ、いわゆる建学の精神です。我々、建学の精神ということを声高らかに言うのですが、もしかすると我々もそこで思考がとまってしまっているのかもしれない。

木内先生が仰った、それを具体的に落とし込んでいく。そして、それを学校教育活動のすべてにしみ込ませる。それが私学の強みなのではないかと思うのですが、現実には目先の生徒募集の問題もあり、難しいことはあると思うのですけれども、建学の精神の具体化ということにもう少し力を入れていかないとならないと私は個人的に思っています。

私の学校は、先ほど言いましたとおり80年たちましたけれども、創立者は、これからの社会は女性がどんどん社会に進出していく、ゆえに社会に貢献する女性を育成すると言われて、初めて女子に商業を教えた学校です。ですから、お裁縫の学校とかということではなかったものですから、となると例えば社会性、女性、貢献ということで具体的に落とし込んでいくと、いわゆる本物の私学になるのではないかと考えているのですが。

○木内

繰り返しになりますけれども、建学の精神はもうあるので、ビジョンというのは幹部で考えなければいけないと思うのですが、その先の戦略になると、それを構築するときにやはり中堅とか、一般の先生達が参画してつくり上げていく、それがリーダー養成につながるということ。

先ほど前橋育英の副校長先生、今回いろいろ調べて、自分も勉強になったと仰っていましたけれども、まさにそうだと思います。そういう経験を積ませるということだと思います。

○コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、先に進めます。では、淡路先生、お願いいたします。



○淡路

私は、一昨年まで神奈川の浅野總一郎翁が創設した浅野中学高等学校でお世話になっていました。浅野總一郎は近代化を進めた先生ですけれども、明治、大正、昭和と苦難の人生、社会づくりに努めた方です。先生は、いろいろな仕事をされました。鉄道からセメント、港湾、埋め立て、鉄鋼、公衆トイレ、と多くの仕事をされたわけですが、富山県から出てきて、その仕事を起こした源というのは、今社会に何が必要なのかということで、いろいろな仕事を展開したわけです。83歳で亡くなりましたけれども、仕事や社会を動かすのは人であると考え、社会に通じる人づくり、そういう学校をつくることが人生残った仕事だということで、浅野総合中学校、戦後の浅野中学高等学校を創設したのです。

私は、その生徒として、また、教員として40年、その間、教頭3年、校長8年。一昨年、90周年を迎えたのですが、振り返ってみると、46年間、ここに学ばせてもらった影響は大きいものでありました。そういう学校で育てられたために、おかげで私は常に現場はどうなっているのだと、現場重視という意識が育てられたように思います。生徒目線で指導する学校だからです。

社会は日々変わっていく。子どもや親も変わっていく。若い頃の親は、若い教員の私に、「先

生、こうしなさいよ、ああしなさいよ」といって世話を焼いてくれる。それは親切心なのです。でも、若い私達にとっては、うるさい親だなど思いながらも、自信を持ってこうしたらと言ってくれますから、親と一緒に生徒の指導ができました。

そして、高度経済成長になって物が豊富になり、生活も豊かになってきた。私は、学生時代から家族問題をライフワークにしてきました。そのころから核家族の脆弱さが感じられました。それは、当然に学校社会にも出てくるわけです。つまり、権利要求型の社会風潮でした。

そこで先生方も、親への対応を考えなければならぬ。そのころから学校の教員が一人で対応するのは難しい時代になったと思います。こういう問題が出てきたらどうしようかといって、お互いに子どもの情報を共有して親や子どもに対応しなければならない社会になったのです。

その間に私も何回か学年主任をやらせてもらったのです。やはりそういう傾向はみられました。学年のまとめ役をしなければいけないので、最初のころはいろいろ指示を出すと、指示通りに指導してくれます。しかし、指示を出すにしても、それこそスピードの社会ですから、担任としてかかえた問題に対応しきれない場合も出てくるのです。後の報告では間に合わないということから、「起こりそうな問題って何か。今の親が考えていることは何だろう。今の親のニーズは何だろうか」ということを先生方と話をし、対応しなければならない。

最近は個人化の傾向です。子どもを学校に預けるけれども、うちの子にどのような指導をしてくれるかというのが親の期待です。そこで、学校も皆で生徒一人ひとりに目を向けるという方針が出されてきたのです。

また、ホームルームにしても、工夫しなければならなくなりました。生徒の指導課題が生徒指導部からおりてきますから、例えば、通学路の生徒指導。ある先生は、「通学路では紳士的に歩きましょう。通学路は市民のためのもので

す」という連絡をするわけです。それで済むかというと、伝達だけでは指導の効果は出ません。どうしたら聞けるのだろうか。我々も社会の中の一員なのだから、社会の一員として生活できなかったならば、教科の勉強を身につけても、どうなるのかということを先生方が話し合い、自分の言葉で語るようになってくる。そうすると、子どもの心に少しずつ影響が出てくる。でも、一人の力では無理だということで、お互いで協力、話し合いをする。それでもなかなかうまくいかないです。根気が要りますね。しかし、そこで気づいたことは、学年の問題を各担当同士で共有すると皆が少しずつその方向に向かってくれるということです。

私は社会科が専門分野です。政治・経済や現代社会、総合的学習などを担当させてもらいました。ところが高1の総合的学習というのは誰も持たないのです。そこで、これは校長の担当ですと。「いやいや、生物の先生、国語の先生、みんなで生きる力をつけましょう」といっても、各教科受けてくれないので、私が高校1年生をもたせてもらいました。

では、なぜ高校1年生に入れてもらったかというと、高校1年生を担当すると、中高一貫ですから中学3年間の振り返りをさせて高校生活を考えさせますから、中学時代の生徒の様子が見えるのです。「自分は3年間こういう生活をしてきた」「自分はここがまずかった」「このまずいところを乗り越えて高校生活を送って、将来こういうことをしたい」という内省をはかる機会でもあるわけです。

ですから、自分の振り返りが行われながら授業を進めますから生徒の心の動きや行動が見えてくるのです。そして担任から生徒の話が出てくると、「彼は中学時代、このような生活をしていらしいですね」と担任へのアドバイスもできるのです。だから、高校1年生で総合的学習をやらせてもらって、現場の学年主任や担任との交流・支援ができました。

更に、今ここでも話題になるように、一人の先生の力の限界という問題、これは何とかしな

ければいけない、チーム力ということを考えなくてはならない。ところが、チーム力というのは、口で言うけれども、学校の先生という職場はチーム力をつくるのはとても難しいと思います。先生方もお気づきだと思いますが私も含めて、先生という職業の人達とはかく自尊心が強いと思います。大学や大学院を出て、すぐに先生ですから。年上の親からも先生と言われているわけです。そうやって育ってきていますから、自分の考えでという人が多いのです。これは、いわゆる教職という職業についた教員の特質だと私は思うんです。だから、これを乗り越えなくてはチーム力は発揮しにくい。

それから、今お隣に JTB の大塚さんがおりますけれども、会社のように縦社会ではありません。私が教員になった昭和40年代はまだ先輩には礼を尽くす風潮がありました。でも、その後の社会は、先輩、後輩、ましてや上司、部下などという意識はだんだん希薄になってきたと思います。

もう一つ、学校はルーチンワークに陥りやすい社会ではないかということです。例えば、指導案や学校行事の実施要領などをつくる時に、一部修正で4年、5年使いませんか。1年目は大変ですけど。でも、ちょっと修正していけば、教科にしても、学校行事にしても、長いこと使えませんか。

新しいものには、親にしても子どもにしても、それを受け取る側は新鮮です。でも、学校という職場は、すべての学校ではないと思いますが、そういうことが起こりやすい教職、あるいは教員社会という特徴が

それから、今の話と関連して、「イノベーション」ができていく社会でもあると思うのです。「去年うまくいったから、去年と同じでいい」、世の中変わっているのだから、例えば体験学習などは毎年新しいものを、新しい生きる力を身につけるためのメニューを改善、創造していく必要があると思うのです。でも前例が重視されるということがないでしょうか。

私は、学校というのは特殊な世界ではなく、

社会の中の学校なのだと思うのです。例えばクレームの問題、今、学校社会の大きな問題になっていますけれども、このクレームにしても、学校社会では何でこのようなことにクレームをつけてくるのだという意識になりがちではありませんか。でも、この不況にもかかわらずお金を出して子どもを預けている。その学校が自分の子どもが満足できない、あるいは親が満足し得ないような状態だったならば、意見を言うのは当然ではないですか。だから、企業では今クレーム担当という部署までできています。

ですから、親は社会の中の学校だと思って子どもを学校に預けていると思うのです。しかも、自分達の思うように、自分達の考えているように指導してほしい。ある雑誌で東京の女子校のお父さんですけども、この不況でも、「お金は出します。でも、しっかり指導してください」と。不況ですからお金を出すというのは大変なことだと思いますよ。でも、我が子のために指導してくれるのだったらお金は出す。

今、企業は良い製品では儲からないといわれています。良い製品が商品にならないとお金にならない。これは JTB さんの商品でもそうだと思います。良い製品というのは高度成長期までです。だから、学校も相手が求めるような指導をしなかったならば、親のクレームは減らないと思います。

今まで学校の特色を考えながらお話をしてきましたが、そういう意味で、学校運営するのにどんな中間職のリーダーをつくったらいいか。校長は全体をまとめるわけですけども、学校という特質を踏まえて運営する必要があると思うのです。学校としての教育方針は校長が出して、現場の先生がそれぞれ具体的に提案する。木内先生のお話の中にもありましたが、そうすると現場からいろいろなリーダーシップを発揮する先生が生まれてくる。そして、その中にリーダーの資質をもった人が見つかる。例えば、職員会議でも意見を言う人がいますよね。何でも意見を言いたい人や教育観の違いで文句を言う。

しかし、中には「今出ている原案、こういう問題があるんじゃないですか。」と、問題点や課題を考えて発言する先生もいると思います。その人は、常に学校全体のことを考え、問題点を自分なりに考えて発言している人だと思うのです。そういう人の意見というのは建設的です。だから、例えば、その人の意見を取り入れずに組織が出した意見を通して、このような意見はとても参考になります。このような人は、リーダーとしても候補になる可能性があると思うのです。とりあえず有限リーダーでも、学年主任、部長、さらに大きな組織の長になり得る可能性があるのではないかと思います。

クラブ顧問の中にも、外のいろいろなサークルや協会などでも、まとめ役のできる人がよくいます。問題が出てきたときに、課題に関連して盾になれる人。そういう人もリーダーの候補者として育てればリーダースhipを発揮してくれるようになると思います。

もちろん理論的には人間関係力、コミュニケーション力、行動力、組織力、問題解決能力、社会人力のある人がリーダーにと、これはどこでも取り上げられます。でも、校長は、現場にいる先生方の活動を見ていて、「あの人は近い将来リーダーとして活躍するな。あの人はああいう能力を持っている。」と注目しておいて、役職を委嘱したらと思うのです。

もう一つ、私は、木と森の理論。つまり、学校には、私学と公立校があって、私学の中には建学の精神に基づいた各校がある。それぞれ独自の私学の中には、学年があり、分掌がある。私はいずれも全体は森、その中の構成は木になるのではないかと思います。例えば、学年は森で、担任は木なのです。森の維持にとって、1本1本の木は大切になります。学年主任は、その担任という木をまとめる森の管理者だと思うのです。そして、主任や部長というのは、中学校、あるいは高校の森の管理者なのです。そして、全体の管理者は教頭、副校長、校長だと思うのです。

それぞれの森をどのように育てていくかとい

うことは、建学の精神に基づいて校長、教頭、あるいは副校長による運営委員会等で決定する。そして、森のあり方に応じて、その範囲でそれぞれの森を育てる基本方針を創造してもらう。だから、トップダウンとボトムアップのバランスは具体的に調整しなければならない。

学校のトップダウンの役割は二つ。一つは、全体の学校の方針を出すことと相談役。その相談というのは、いわゆる学年主任や各部の部長の相談役です。そして、学年主任や部長には、先ほども出ていましたけれども、権限を与えなければ。権限というのは、学年の方針を自分達でつくって、それを全体に発表して、それぞれ運営をする権限です。樹徳の先生の報告の中にもありましたけれども、例えば生徒指導。多くの場合、生徒指導部は、子どもが問題を起こした時の処分委員会になりがちですね。でも、こうやって子どもが育ちにくい社会では生徒指導委員会というのは子どもを育てる役割を果たす必要があると思うのです。

子どもにどうやって生活させようかといって親も戸惑っている。であるならば、先生方が今の子ども達には足りないものは何なのか。教科の勉強しているけれども、大学に行っても社会に出られないという不安ももっている。では、社会性がつくような指導をどのようにしたらいいのか話し合って、管理職がそれをフォローしてあげればいいのではないかと。

また、学校レベルで問題を考えていると、職員会議では時間がかかって決まらないことが多いです。でも、各分掌や学年行事という形になったならば、学年主任と学年がやるという合意ができていて、校長が認めていれば動けるのではないのでしょうか。つまり、スピーディーに動くためにも権限が必要だと思います。当然、学年や各部の森の長は、常に目標に沿って必要なことをやる。そして、そのときに、事前・事後の校長への報告・相談は必要です。

ですから、基本的に校長は基本方針を認めていますから、その方向で学年は動きやすい。つまり、現場が活性化して動き出す。

親のニーズや子どものニーズに合わなければ、私学は大変です。とにかく対症療法の時代になっていますけれども、私は、このようにお話しできるのは、神奈川私学の校長先生方との間でもよく話題になっていたこととともに、今、樹徳の副教頭先生も生徒指導の話をされています。「ああ、やっぱり同じようなお考えでやっておられるな」と。群馬県の樹徳の先生の報告は前にも聞いたことがあるのですけれども、今日、生徒の羅針盤が学校の指導で育てられているなということを確認しながら話を伺っていたのですが、リーダー養成論になるのでしょうか。

○コーディネーター

ありがとうございます。

私、3年の授業、社会教養という授業を教えているものですから、さっきの指導案の話はそうだなと思って私もちょっと反省しています。

先生の前半の話で教員の特質という話がありましたよね。よくわかる話です。恐らく先生方も同じ思いでお聞きになっていたのではないだろうか。それをどうやって乗り越えていくかということが大きなポイントだと思うんです。

木内先生が先ほど仰っていた特質を乗り越えていく、具体的に乗り越えていこうというようなことで何かご意見ありますか。

○木内

個性がなくて後ろ向きな人も中にはいますけれども、先ほどもちょっと申し上げましたが、教員を目指してなったときの気持ちを思い起こしてもらって、私などはできるだけ若手の教員と飲んだりする機会を多くしていますけれども、そこでよく話をしてくるということかと思っています。

○コーディネーター

確かに教員の特質というのが教育活動の妨げになることがあると思うんです。これについては、確かに個別に指導ということもとても大事だと私は思っています。起こった出来事は、も

しかしたら教員にとっては一つ一つが研修の場ではないかと思っているのです。私のところでは、さっき事例の発表のところでもこの話が出てきましたけれども、どうもこの子は様子がおかしい、と。おわかりのとおり、休み始めてしまうとずっと休んでしまうことが多いので、この子はどうもおかしいとか、あるいは1日、2日休んだという段階で、うちはチーム指導というのをやっているものですから、校長、教頭、生徒指導、学年主任、担任がミーティングを開いて、そこで、このように指導していこうという指導方針を立ててしまいます。私は、そのほうが効果はあると思っていますし、もう一つは若い担任の教員の研修になると思っているのです。そこでスキルを学び、当然ですけれども、相手が人間ですから相性もありますから、担任が家庭訪問するよりはこっちが行ったほうがいいということもあって、そして、これはこういう理由でこうなっているのだということをきちんと理解させていく。

これは、生徒指導に限ったことではなくて、すべての事柄で一つ一つが研修で、そこで注ぎ込んでいくというような取り組みも必要なのではないかというように感じながら伺っておりました。また後半にいろいろお話を伺います。

それでは、大塚さん、お願いいたします。



○大塚

日頃は JTB をご利用いただきまして、ありがとうございます。

恐らく私をここにお呼びいただいたのは、プロフィールにもありますように、1年半前に旅

行業に戻ってまいりましたが、会社に入ってから5年間しか旅行業やっておりませんで、その後17年間、インキュベーションの時間を入れると19年間、企業のモチベーションコンサルティングの仕事をしていました。その中で、企業のコアリーダーという人達、1,000人以上インタビューをしてきたものですから、今年の春も毎日新聞の取材を受けまして、その新聞が目にとまっていたように、きょうは先生方に次世代のリーダーということが企業の世界ではどのように創造し、採用の段階でその資質を我々が見つけていっているのかというのを五つぐらいのポイントでお話をしたいなと思っております。

1,000人以上のコアリーダーですから、企業からうちの次のリーダーにとにかく会って、彼らがどんなことをしているかインタビューしてくれと言われるわけです。それを見て、こういう人材をたくさんつくりたいので、企業のモチベーションのコンサルティングをしてくれと、このように来るわけですが、彼らに会って共通的に言えるのは、五つの中の一つ目はコミュニケーションスキルです。非常に簡単に言ってしまうと、「何だ、そんなの、どこにでも書いてあるよ」というのですけれども、それをちょっと分解してみますと、周りの人の能力や知識を引き出す力があるということなのです。結局、コミュニケーションというのは双方向のキャッチボールでございますけれども、その形骸化している能力や知識ではなくて、その人が持っている潜在的な能力や知識、意見や感想を引き出す力があるかということなのです。

入社面接などをしていて、最後、役員面接になりますと、私も最初うちを受けに来る方々は、大学で運動部のキャプテンをしていて、たくさんの人をまとめていました。あるいは新しくサークルをつくって、それも幹事長になってみんなを引っ張っていました、だから私はリーダーシップがあるのですと。そんなときに、その人達がどんな課題を持ってリーダーシップがあるかということを見ていくわけです。

そうすると、今までのキャプテンのやり方、今までの部長のやり方を継承している人が多くいるわけです。私なりにこう工夫しました。部員のこういうものを見詰めて、それをどう引き出せるかを見てきました。確実に通常のコミュニケーションを一つ踏み込んだ意識を持っている人ではないかなと思います。

企業は、本当に一匹オオカミの個人戦から組織戦に変わっております。チームワークがないと、結局、一人の能力や知識では物事が解決しない。企業や産業が非常に複雑化しておりますので、うまくいかないのです。年次が高い人、経験が高い人が必ずしも成果を上げるわけではなくて、チームが若い人の意見を引き上げて答えを求めていくという時代になっておりますので、確実にコミュニケーション能力を持つチームリーダーが存在しないと、若い人を引き上げないのです。

先ほどの木内先生、まさにそうだなと思ったのですけれども、マネジメントというのは、我々の中では操作主義、自分の価値観を部下に、あるいは周りのメンバーに与えて、それを教えつけて、こうやるのだという概念が非常に強い。リーダーシップは、「私はこう思うけど、君達はどう思うんだ」というような、彼らの知恵を引き出していく。ずっと問いをかけ続けられる。これがコミュニケーションの一つのポイントだと思うんです。

したがって、私どもは、会社に入ってからでもコミュニケーション力、一般的な表層的なコミュニケーションだけではなくて、もう少し深層に入るコミュニケーションをつけるためにチームビルディング、一緒になって何かをなし遂げていくというようなアクティビティーといいますか、検証をやったり、新入社員は、今年ちょっと入れなかったのですが、習志野自衛隊に2泊3日で入隊させます。これは、コミュニケーション能力もつきますし、2番目に申し上げたいメンタルタフネスもつくのですけれども、習志野航空自衛隊は11メートル、人間が恐怖感を一番感じる高さから飛びおりるのです。一人が

勇気のある飛び込みをすると、女子も男子も一緒にやりますから、どういう気持ちだったら飛びおりられるかみたいなことをお互いが共有していくのです。全員が達成すると、そこに非常にきずなが生まれます。昔で言う、恐らく一つ同じ釜の飯を食ったということになるのだと思うんです。

そうすると、こういう話をするときと恐怖感がとれるだろうとか、周りの人が工夫し始めるのです。周りの人間の深層に入っていくということです。

二つ目は、自衛隊の研修を我々はやるのですが、メンタルタフネスというのが次世代リーダーでは絶対大事だと思います。当社にも残念ながら年間を通じて数名うつ病になって、会社に来られなくなって、結果的には退職するということがございます。時代のバックグラウンドとしましてうつ病という病気が引き起こす生産性の低下というのは、国家としても非常に問題があると思います。

では、若いときからどうやってメンタルタフネスを強めているかということを新入社員、あるいは入社を希望してくる人に役員面接で聞くと、やはり挫折感。自分自身が中高でどんな挫折感をしましたかという質問をします。そうすると、胸を張って、自分の一番行きたかった大学に入れなかったのが挫折ですと。我々にとっては挫折というよりは勲章みたいな感じで、誇らしげに言っているような感じがするのです。その挫折感があって、上位の大学に入れなかった悔しさを彼らなりに超えましたと。

でも、それはきっとメンタルタフネスにとってみれば、余り影響のない、人によっては悩んで悔しくなったという思いがあったのでしょうか、一つは、やはり自分のレベル、目線よりも高い人とおつき合いをしたり、年次の高い人と学生時代からいつも議論したり、あるいは、なかなか一人では踏み込めないコミュニティーに入っていたりして、そこで自分の愚かさや弱さを若いときから感じる。あるいは学校生活の中でも、学園祭を自分はまとめる力がな

いかかもしれないけれども、やってみた。そうしてうまくいかなかった。周りからも批判を受けた。このことをどう克服してきたかというトレーニングをしてきた人は、我々からしてみると、決してうつ病になったりしません。

したがって、挫折感は悪いことではないのだということを価値観として持っているのです。挫折感というのは自分の栄養になるということ。周りの人、親、先生に聞いて、「いい失敗をしたな」と言われると、「あっ失敗はいいんだ」ということになるのですけれども、残念ながらうつ病になったメンバーと最後に退職のときに会話すると、「私は親にも先生にも一度も怒られたことはなかったです。中学入試で自分の希望の中学に入りました。附属だったんで、そのまま大学も入って、JTB という会社に入りました」と。その間全く挫折もなく入ってきたら、先輩からこれやれ、あれやれ。ちょっと先輩が期待したことにこたえられないと、がつんとやられるわけです。もっと言うとお客様から怒られるわけです。こういったことが自分では経験していないことなので、もうそこで壁を越えられなくなってしまいます。

したがって、メンタルタフネスの強化というのは、恐らく学校でも周りでも挫折感を許容してあげるということが大事だと思います。

次世代リーダーの資質を持っている、あるいは行動を起こしている人達というのは失敗を恐れないです。私も社内ベンチャーで JTB モチベーションズという会社をつくりましたが、でも、「3年で完全な黒字にならなかったら、もう君の帰るところはないよ」と言われました。20代でしたから、結婚もしたばかりで、どうしようかと恐怖感に駆られましたけれども、私が今あるのは、そこで挫折ではないのですが、それをどう乗り越えようかということを常にやってもやっても残念ながらうまくいかなかったわけですが、でも3年を超えたということで、そのプレッシャーに自分自身が打ち勝ってきたということではないかと思っています。

三つ目は、毎日新聞の取材でも非常にユニー

クだということで新聞に書いていただいた、自分に常に答えのない問いを立てる力、これはなぜなのだろうとか、これはどういうことなのだろうということを、いつも自問自答しているビジネスリーダーがたくさんおります。もちろん世の中の事象に対して問いを立てることもありますし、自分の言ったこと、会議で話してしまったのだけれども、果たしてあれでよかったのだろうか。リーダーになりにくい人は、言ったことをすぐ忘れてしまいます。結局、表層思考なのか、深層思考なのか。一步踏み込んで考える力を持てるかということを、若い時代に先生達や親に教わっているのです。それが最後の答えなの、もっと考えてみな、もっと深いところがあるのではないのということを周りの人に言われているので、いつもその訓練をしているのです。

「それだけじゃないんじゃないの、もっとこういうのも読んでみたら。ここにも情報あるんじゃないの」ということをいつも言われてきた。だから、大学生になると、もうそれを言われなくても、これだけではないな、もう少し調べてみよう、こんな人にも会ってみようと、どんどん自分で問いを立てていくわけです。答えがないから、ちょっときついのです。受験勉強で答えのあるエクササイズをずっとしてきましたので、答えのないことと闘い続けるのは非常にストレスになるのですけれども、それを乗り越えてくるとリーダーシップというのが生まれてくると思います。

それと先読みをする力、これもハイパフォーマンスのコア人材という人達は、「自分はこの先こうなると思うんです。だから、今こんな手だてをしている」。要は、先読みをする力を持つということはリスクを読めるのです。ですから、恐らく先ほどのクラブ活動の運営においても、やめてしまうようなシグナルを見詰めたときに、先んじてこういう手を打とうと。彼から一回話してもらおうとか、次の展開を設定して計画していく。

先ほど淡路先生からも親の問題はどうなのだ

と。その先に何があるか、子どもの先に何があるのかとか、家庭の中はどうなっているのだという見えないところを先に見ていくということもあるでしょうし、先読みをする人はマクロの思考とミクロの思考、すごく視界を広げながら、ぐっと視界を縮めて深く見る力があるのです。これも聞いてみると、高校時代とか大学時代に、例えば自分がやっているスポーツとかゼミの範囲を超えて、運動部だったら横のつながりのコミュニティに入って、彼らが先生になるかもしれない。大学スポーツとはどういうことなのだというのを考えながら、自分のスポーツについて考える。そういった、マクロ思考とミクロ思考が顕在し合いながら物事を発想する。

これも面接をするとよくわかって、視野狭窄になっている人は、本当に自分がすごい人なのだとすることを一生懸命アピールするのです。それと、ちょっと違う学生だなと思うのは、「私の周りにいる人間はこういう思考で、このように考えていて、私達の世代は海外旅行にも行かなくなりました。車も買わなくなりました」などということをマクロで言いながら、ミクロで自分自身の友人はこうですとか、我々が聞いていても非常に入りやすい。本人も、「なぜ若者は海外に行かなくなったんでしょうね。専門の人はどうですか」と逆に役員面接で聞いてくる学生がいるのです。この人は、やはり思考も深いですし、ユニークだなと思うわけです。

五つ目、私はモチベーション理論を17年間やっていたので、確実にリーダーシップを持っている人は成長欲求があるのです。先月より今月、去年より今年、自分がどれくらい成長しているのかなということを感じたいのです。だから、もちろんスキルでいえばこういうことができるようになった、TOEICの点数が上がった。その成長欲求はとどまるところがないのです。天井がないということをも自分自身もわかっている。常に成長欲求を持つわけです。

今ビジネスマンを見えていますけれども、我々の部下のメンバーも非常に短期に成長する人は、「実は私、今、仕事が忙しくて非常に不安

なんです。とにかく社内の人としかしゃべってないんです。あとお付き合いしているホテルとか旅館の人としか話してないんです」と相談してくるのです。「何でだ」というと、「社外の人と話さないと自分が成長している感がないんです」、このようなことを言う人がいるのです。これは、本人がすごく成長欲求があるわけです。

ちょっと余談ですけども、1,000何人を見てきて、優秀だなと企業も思っていて、私もそう思う人の特徴的なことが一つあって、それはボキャブラリー、語彙が多いのです。「何だ、そんなこと」と感じるかもしれませんが、これは、今申し上げたいいろいろな人達とつき合って、限られた人の中でも、「おい」とか、「そうか」とか言ってコミュニケーションできるのですが、我々から言うと社外の人、高校生や大学生は学外の人とどれぐらいコミュニケーションがとれるか。自分にボキャブラリーが足りないということを感じ覚的につかむのです。自分と同じ表現しているのに相手は違う言葉で言っている。あのことはどういう言葉なのだろうと本を読んだり、誰かに聞いたりする。やはり自分は一步でも成長したいという思いがありますので、いろいろな人とコミュニケーションをとるのです。

コミュニケーションをとろうとすると、冒頭に戻りますけれども、その人達のいいところをどう引き出そうか、自分の糧にもしたいなと思っていますから、そういうコミュニケーションがとれると思います。

本当に短時間でございますが、五つの資質、これは先天的なものではございません。生活、行動で明らかに変わってくるものだと思います。お役に立てればと思います。以上でございます。

○コーディネーター

ありがとうございました。

今の五つの事柄というのは、そういう力がリーダーの資質につながっていく。それを意識されて JTB の中で、例えばさっきのメンタルタ

フネスの強化ということを意識したプログラムなどはあるのですか。

○大塚

普通、仕事を通じて、まず先輩は部下に対して厳しさを持たなければいけない、しっかりサポート、支援していく、両方兼ね備えないと。優しくするだけでは、先ほど申し上げたエリートで来た人は、先輩にも優しくされてしまうといつこけるかわかりませんので、厳しさを伝えるために、お客様に対する行動が間違っていたら、間違っているということをはっきり言うということを管理職研修等で上司に教えて、実践するということをしております。

○コーディネーター

ありがとうございました。

3.11のときに私は修学旅行で比叡山に行っておりまして、翌日こちらに帰ってきたのです。新幹線は翌日動きましたが、東京駅から水戸までは高速道路もだめで、JR もだめで、そのとき JTB の添乗員の方が夜を徹してでもといっていると思うんです。翌日帰れるかどうか当日はわかりませんでしたけれども、東北にどんどんバスが手配されていく中で観光バスを確保してくださって、無事に帰ることができたのです。

確かに彼の働きぶりを見ていると、今仰っていただいた五つの事柄が何となく当てはまるなという感じがします。これが学校でも、これから実践をしていく大事なポイントなのではないかと思っております。

前段の部分ではパネリストの方々から基本的なことをいろいろお伺いいたしました。後半、それを少し深めていきたいと考えています。

まず、木内先生、大塚さんにご質問があるようですから、どうぞ。

○木内

大塚さんに質問したいのですが、先ほど建学の精神からビジョンに落とし込んで、このビジョンは、みんなが納得できるようなものに力を

尽くしてつくっていかなければいけないわけですが、ややもすると、うちの学校でもそのようなのですが、職員会議だとかそういうところで、こういう目標があっていろいろな訴えるのです。ちょっとたって、いろいろな先生に聞くと、「それはそう言うけれども」とか「聞いてなかった」という話で、何回も言っただろうということが多いのですけれども、自分をわかってもらうことで、もっと配慮して時間を使わなければいけない。これは、どういう言い方をしたかという、余りに多くのリーダーが自分のしていることと、その理由は誰にも明らかなはずだと思っている。こんなことはわかっているだろう、と。そのようなことはないのです。

成果を上げるには、自分をわかってもらうために時間を使わなければいけない。そして、納得させるように繰り返し、繰り返す。先生達は自分の価値観を結構持っていますから、ちょっとひっかかることがあると、「校長はそう言っても」という思いもあると思うのです。そういうところをちょっとすり合わせというか、説得しながら一つにまとめていくことが大事だと思うのです。

JTB ですと、そういう企業のビジョンをどういう形で構築されていて、一般社員にどういう形で浸透させているのか。例えば企業だったら、儲かればいいとは言わないですけども、お客に満足してもらうというのは大事だと思うんですが、やはり収益を上げることが優先になってくると、ビジョンとの整合性はどうかなのだとすることを考えたりしてしまうのですが、その辺どうなのでしょう。

○大塚

ご質問ありがとうございます。JTB は、2006年分社化をしまして、私の会社、JTB 法人東京という、企業や学校法人様の B to B のビジネスを専門にやっている会社で、北海道から沖縄、各地域に分社しているのですけれども、JTB 法人東京という会社の中には社員が全員持つクレド、いわゆる経営理念が書いてある、我々、

BWT COMPASS と呼んでいるのですが、こういうものを持っているのです。例えば会議の前には、我々のサービス信条というのがあるのですが、これを読み合わせをしたり、各支店の支店長はこれを使って朝礼の中で、この言葉は我々にとってはどういうことなのだというのを問いかけて、若い社員に話をしてもらったり、あるいはお客さんのことで悩んでしまったといったら、必ずこのクレドに戻るという身体性を持たせているのです。ここに答えがあるのだ、この経営理念の中に必ず答えがあるのだと。これは、経営理念のほかに我々の行動指針だとか、ミッションとかが書いてあるのです。

評価も、先ほど先生が仰っていただいたように、もちろん業績、成果を上げるという評価項目があります。しかし、バリュー評価というのを去年から、正確には今年なのですが、経営理念に沿った行動ができたかというのを四半期ごとに上司と部下が面談して、項目に合って行動できたかということを確認し合って、地道なのですが、このことを続けることで経営理念を常に自分自身の頭にたたき込んで、体にたたき込むということをやっております。

○木内

ちなみにどういう経営理念ですか。

○大塚

ありがとうございます。法人東京の経営理念、「私達はお客様の良きビジネスパートナーとして、お客様の新たな価値創造をサポートし、『人々の交流』を通じて、豊かな社会の実現に貢献します」。特にここにあるビジネスパートナーという役割、お客様の言われたことだけをただこなすのではなくて、その先にある、お客様とパートナーになり切れるご提案やサポートをしていくということ。また違うところではビジョン、あるいはバリューというところで示しています。

○淡路

そのことで、私は、生徒や親とのかかわり、先生と先生のかかわりの中でどうしたらいいのだと。大塚さんの言われるようなビジョンというのは校長室にも張ってあるし、教室にも張ってある。しかし、学校ではそのビジョンを具現化しにくい。

だから、私は、なぜこういう学年の指導をするのか考えていかないと、先生方の意識のアップにつながっていかないのではないかな。例えば午前の報告にもありましたけれども、マニュアルをまずつくろうとする。もちろんマニュアルは大切です。けれども、社会や親はどんどん変わっていくし、子どもも変わってくる。

だから、私はよく、自分のところの課題は頭の上にあって、答えは足元にある、と言うのです。もちろん、親のニーズを何でも受けてしまったら、学校は負担が多くなってしまう。だから、子どものために何でこれをやっているのだという指導の意味を考えておく必要があると思うのです。親のニーズが出てきても、これはわがままだということで、先生方は自信を持って、「それは子どものためにならないんだ」と主張ができるのではないのでしょうか。

学校の建学の精神を具現化するのが本当に難しい社会だなということを感じています。やはり、それぞれの学校が事情に応じて考えていく必要があるのではないかと感じます。

○コーディネーター

ありがとうございました。

結局、今のやりとりの中だと続けるということが一つのキーワードですよね。確かに私もいろいろなことを言ったりしますけれども、意外に伝わっていない。ただ、その中では、自分では割り切らなければいけないところがあるなと思うのは、先ほどのコミュニケーションスキルにもちょっと関係することかもしれませんけれども、伝えることではなくて、伝わるということがとても大事だから、もしかしたら伝わるまではこちらの責任かもしれない。そのためには辛抱強く続ける。

それから、今お話があったように、当然利益を上げるという目標もあるわけですが、目標と同時に目的をきちんと伝えていく。そういう中で少しずつ意識が高まってくる、そういう地道な活動なのではないかというように今伺いました。

こちらに集まっている方は決して悪意にはとらえませんか、先ほどから学校と企業の違いというのがこちらのパネリストから出ています。大塚さんが外からご覧になって、学校の体質の課題、あるいは問題点などあったら、忌憚のないところで仰ってください。フロアの方々は決して悪意にとりませんから、どうぞお願いします。

○大塚

発注側であったりして担当者が困るかもしれませんが、逆に企業が職員室のようになってきているような気がします。中身は何かというと、先輩、上司という関係性を超えて、若い人が先輩に物を言うといいますか、「それはそうは仰いますけど」ということがリベラルにといいますか、出てきています。それを一ついいようにとらえて組織が活性化している会社あるいは学校と、それは悪いのだ、もっとちゃんと先輩関係のヒエラルキーをつくって、フラットではなくて、三角形やピラミッドの形でしっかり運営するのだと。

実は当社は「さんづけ運動」で、基本的には役職で呼ばない。先輩からも後輩を呼び捨てではなくて、さんをつける。もちろん新入社員が私に対しても、役員であつても大塚さんと呼ぶ。これも意識のフラット化なのです。そのかわり必ず自分の意見や考えを言うということが企業の中の原則なのです。だから、そこをフラット化しているのですけれども、上の人、あるいは職員室でも先輩先生の経験とか勘とかが答えで、それに従うことが自分としては多分教師として成長することだみたいな文化になったときに、きっと間違いが起こってくるのではないかなと思うのです。

したがって、私が個別の学校様のどこがこうだとかという立場ではないのですけれども、木内先生が最初に仰った、先生は先生を目指して職員になっているわけですね。うちの会社は、商社に入りたかったけれども、落ちてしまったので旅行会社に入った、あるいは銀行に入りたかったけれども、入れなかったのが旅行会社に入っているというのがたくさんいます。先生のほうは適職感が必ず高いと思うので、そこをもっとリベラルに意見を確定化していくと、そこにまた違う新たな化学反応が起きるのではないかなと感じ取れます。

先生の質問に合っているかどうかかわからないのですけれども。

○コーディネーター

ありがとうございました。どうぞ。

○木内

今、大塚さんからお聞きした話、それから先ほどの淡路先生の職員室での先生のいろいろな提案みたいな、それとも関係するのですが、先ほどお話ししたリーダーシップで考えますと、リーダーシップは上からコントロールするという言い方もありますけれども、一般の教員からすると現場に近くて、そこで気づいたり、こうしたほうが良いということもあるわけです。それを中間管理職、ないしは校長にこういう気づきを上げていく。中間管理職は中間管理職で上司に対してリーダーシップを働かせる。ちょっと変な言い方ですけども、リーダーシップの中には主導権というような意味もありますから、そういうことをやってもらえる、そういうものを教育していくと、もっといろいろな工夫、改善が持ち上がってきて、いろいろなことを考えられる。

私も「こうしろよ」といったときに、「それはだめですよ」と全面否定されるとむっとしますけれども、「わかりました。でも、ここはこうにしたほうがよろしいんじゃないですか」というような意見が出てくる。それは、と

てもうれしいことですし、広がっていきますので、そういう雰囲気をつくっていききたいなと思います。

○淡路

私は、先生の特質が悪いといっているのではなくて、教員の社会がそういう特色を持っているということ、今は、特定の先生がカリスマ的に子どもに対応する時代ではない。どのクラスにも同じように面倒を見てほしい。どの学年にも同じような指導してというのが親の、あるいは社会の状況だと思うのです。

もう一つ、先生方は自分でこうしたいという意欲を持っているのです。だから、現場の先生方の自主性、主体性を尊重する。それを校長、教頭が支援してやる。そうすると現場は活性化してくるのではないかなと思うのです。

その上でいわゆる自分達の目標の進捗状況を報告しながら、運営委員会や校長、教頭からサポートを受ける。これがいわゆる教員社会の現場の活性化につながるのではないかなと思うのです。

○大塚

我々がここ1年ぐらいでテーマにしているのは、変われているか、変化ですね。要は企業で言うイノベーション、経営におけるイノベーションなのですけども、非常に象徴的なのが会議のやり方が変わっているからということを各支店長や各部署のトップに話しています。会議一つがずっと同じやり方できると、人の頭が活性化されないのです。いつも予定調和的に、こうやって、こうやって、あと答えがあって、1時間たったら、これで終わり。多分支店長や個所長がこういうことを言って、課長がこういうことを言うのではないかな、こういう報告をするときとオーケーではないかな。みんな、予定調和になるのです。

でも、まるきりやり方を変えて、方法論ですけども、例えば新入社員に司会をやらせる、あるいは立ったまま30分やるとか、方法論を変

えて、そこで何が生まれるかというのを体感した人が、会議は何のためにやっているのだろうと、個人が気づくのです。こういったイノベーションを、例えば職員会議のやり方は変えられるものですか、変えにくいですか。

○コーディネーター

どうぞ、木内先生。

○木内

同じあれで淡路先生にもちょっとお聞きしたいのですが、例えばうちの学校ですと子ども達のことを全員で自由に話し合うことが大事だというような、それは悪いことではないのですが、そういう雰囲気があって、本当に3時間とか4時間、そういう時間を費やすことがあるのです。今、大塚さんが仰ったような形でやると、会議がうまくコントロールできればいいのですが、報告とかで終わってしまって、こんな会議要らないのではないかということにもなりかねないような気もするのです。あわせて、その辺どうですか。

○淡路

若い頃はそうでした。暗くなるまでやっていましたけれども、最近は組織から提案されることが多いですからそれほど時間がかからなくなっています。それは事前に校長、教頭のところを通っていますから、職員会議に出たときにはほぼ実施案なのです。

ただ、80名近くの先生がいますから、それに対していろいろな意見が出てきます。ある程度の意見が出たところで議長が採決しますが、できるだけ組織の提案を重視していました。個人からいろいろと意見が出てくるけれども、建設的な意見は取り上げます。平均すると1時間ぐらいという時間ですね。

○コーディネーター

学校によって会議のあり方も様々だと思うのですが、確かに職員会議も大事な研修の

場であると思うのです。いろいろな議案を処理するということ、共通理解を図るということ、それから、まさにビジョンを落とし込むという研修の部分があるだろうと思うのですが、私は、研修部分はもう職員会議ではちょっと厳しいかなと思っています。それは、さっき木内先生からお話があったとおり、言ったけれども忘れてしまっているとか、聞いてないというのが、1カ月に一遍だけだとちょっと厳しいので、うちはもうリアルで、研修の部分については日々の朝会でやっています。気づいたことは、そこで言っていくということで、職員会議はもう1時間以内と決めてしまっています。そのようなスタイルでやっているのです。

次に進めますけれども、活性化ということしていくと、今、私が少し感じているのは、確かに教員の特質もあるのですが、世代の特質を感じているのです。つまり、40代、50代の教員と今の20代、30代の教員は溝というか、質がちょっと変わった。これは、ある意味でいうと教育の成果なのかもしれません。一生懸命やっているのだけれども、どこかの力が弱くなったかということ、私が感じているのは気づき、自分で気づいて動いていく。まじめにはやっているのだけれども、気づかない。そここのところで、今までどおりの手法が通用しなくなっているように私は感じているのですが、そういう年代のことについて何かありましたら、どなたでも結構ですけれども、仰ってください。そのように感じているのは私だけですか。

○淡路

教員の研修との関連なのですから、情報の共有という視点から考えると、学年会とか教科会、それから部会等の、校務分掌、そこがいわゆる若手が育つ場所になるように思います。

世代の関係というのは、例えば分掌とか教科会の中に先輩がいるわけですから、そうすると、そこでいろいろと討論するときに、先輩の意見というのが指導になっているのではないかと思います。

○コーディネーター

これは全然関係ない話ですけども、先ほどメンタルタフネスで弱くなくしまっている部分ということ。これは、ある意味でいうと受けた教育の成果なのかもしれないのですけれども、私、数年前にうちの娘がまだ小学生のころ、逆上がりができないのだという話を食事のときにしていて、私は自分の体験で、「昼休みとか放課後とか一生懸命練習しているんでしょ」と聞いたら、それはやっていない。私の世代ですと逆上がりは全員できるまでやらされたわけです。「どうしてやってないの」と聞いたら、うちの娘は、「一生懸命やればできなくてもいいんだ」ということを言ったわけです。私は、アルコールが入っているせいもあって、ちょっとかっとなって叱ったのですけれども、よく考えたら、あの子が何でそんなことを言ったのかなと思うと、やはり教員が言ったのだと思うのです。けれども、あそこで鉄棒ができたという達成感というのは、少なくとも私は今でも鮮明に覚えているわけです。そうやって気持ちはだんだん強くなってくるのだらうと。

そういうのがどんどん学校の間から奪われているのかもしれない。これを私が職員会議で話したら、30代の半ばぐらいの教員はもう逆上がりはできなくてもいい世代になっているのです。そうやって育っていくと、やはり弱ってきてしまうのだらうなということを私はそのときに感じたのです。

○大塚

私も今、逆上がりの話を聞いて、そうですか…。私は子どもと随分公園に行って、泣いてもやらせていましたけれども、恐らく自分の価値観を、子どもと世代は違うのですが、先生が仰ったジェネレーションギャップをどう埋めるかという課題においては、企業では例えば一つの方法として、メンター制度。要はメンターというのはあこがれの人ですよ。学校で言うと、自分がああいう教員になりたい、企業で言うと、

自分は25歳だけれども35歳になったときに、あるいは45歳になったときに、あんなビジネスパーソンになりたいという人を定めて、その人がどんな意識を持っているのか、どんな格好をしているのか、休みの日は何をしているのか、ちゃんと自分の腹に落として、まねすることはまねする。違うなと思うことは違うと考える。そのためにはその人と接触しなければいけないので、いろいろな人がいますけれども、メンターになる人というのはちょっと価値観上がっているのではないかなと思う人なので、その人からその世代の人達の意識をキャッチアップするという訓練をしたりすることがあります。

そういった、あこがれの人を自分なりに絞って行って両者が歩み寄るといような、世代間ギャップを埋める方法というのはあるのではないかと思います。

○コーディネーター

木内先生、お願いします。

○木内

私も若い人達の価値観がちょっと違ってきているのかなという気はします。ただ、若い人達は優秀ですし、こうなのだと教えていくことがやはり必要だと思うのです。教えられていないというか、小さいときから指導されていないというのがあるのだと思うのです。

価値観ということで言うと、先ほどイチローの話をしましたけれども、最近亡くなったアップル社のスティーブ・ジョブズ、彼などはお金儲けというよりも、自分の価値観を強烈に持っていて、先ほど大塚さんが仰っていたように粘り強く掘り下げていく、満足しない。「ステイ・ハングリー、ステイ・フーリッシュ」という有名な言葉がありますけれども、ハングリー精神というよりも、もっと追い求めて自分の理想を…何かあるのでしょうかね。それを求めていて、彼はカリスマだけれども、会社でも巨人ですが、IT 産業とか、全世界でもやはりリーダーだと思うのです。そういう生き方もある。

自分の価値観の確立はなかなかできないでしょうけれども、追い求めるということを教育していくのが、学校の中での生徒に対してのリーダー教育の一つになるのかなという気がします。

ちょっと先ほどと重なるようですが、学校の中で管理職ではないけれども、教員として本当に生徒があこがれたり、尊敬するような人がいる。何かわからないけれども、人に影響を与えるような、教員のリーダーなのだなと、そういう人は大事にしなければいけないと思います。

○コーディネーター

淡路先生。

○淡路

ちょっと話題が外れるかもしれませんが、今、若者のメンタルの弱さという問題が出てきましたが、私、少し空いている時間に大学でキャリアデザインの講義をさせていただいているのです。先日、2009年12月18日にNHKテレビで扱われた「ゆとり世代の特徴」という、アンケートを講義で話題に取り上げたのです。例えば希薄なコミュニケーションしかできないとか、失敗を極端に恐れるとか、すぐにマニュアルを求めるとか、その資料を見せて、気づいたことはといったら、自分もそのとおりだと、そこで終わりなのです。そのとおりではなくて、これからどうするかということが問題ではありませんか。

4年後には就職です。大塚さんのところへ受けに行く。そうすると、大塚さんは採らない。つまり、就職難。そのとき、私は、中高で教員として長いこと過ごしましたから、こういう社会人力も支援しておかなければと考えて、なでしこジャパンの話をしたのです。

4位を目指したら4位で終わってしまう。でも、優勝といったら優勝まで行ったという話がありましたよね。やはり中高時代に、それぞれの学年で目標を持たせて、そういう小さな目標を積

み重ねて自信を持たせていくと、社会性やコミュニケーション力も上がってくるし、表現力もついてくるのではないかな。

あるいは夏の日大三高の監督の話です。「うちは選手が練習メニューを持ってくる」。監督が見ていて、それをベースにして、監督として指導内容を加える。そうすると選手のモチベーションが全然違うというのです。

これは、例えば、生徒にクラブの練習が終わると一日の反省をノートに書かせるクラブ顧問がいるでしょう。部員のノートを見て、コメントを書いて、次の日、「あなたは、昨日はこういう点が弱かったから、この練習を加えなさい」と。そうすると、次の練習目標がはっきりしてくるわけです。部員一人ひとりのモチベーションが上がり、自主性や主体性も育ち全体のレベルも上がってくる。

これは、生徒の意識やリーダーシップを高めることになると思います。

今のゆとり世代のメンタルの問題が出てきましたけれども、何とか元気になるように支援してあげなければならないと思うのです。

○コーディネーター

木内先生、お願いします。

○木内

まさに今、淡路先生の仰ったことは、上からこれをやれと言われてやるのではなくて、自分でビジョンだとか戦略を構築するということ、そして実行するということですね。

○淡路

そうです。

○木内

それによって育っていくということですよ。ね。

○コーディネーター

今までずっとこちらで話を進めてまいりまし

た。これからちょっとフロアの方々のご意見やご質問もいただければと思います。

ご質問、ご意見ある方がいらっしゃいましたら、どうぞ挙手を願います。新田先生、お願いします。

○新田光之助（筑陽学園中学高等学校 理事長・高校長）

お願いも兼ねてです。この次世代については、関心が非常に高かったわけですが、たしか11月でしたか、次世代的な研修会が計画されていると。それを知って、うちも創立90周年になって、いろいろ考えると今の部長とか学年主任とか全部かえてくれと。ドラスチック過ぎるのですけれども、今はいいのですが、そういうことを考えると、次世代を育てなければという気になって、いわゆる委員会で次世代研修会があったな、誰か推薦してくれとって、1週間たちましたら、困った顔をして選べないと言ってきました。

そういう実態があって、当初期待していて、いろいろ回ってきたのですけれども、学校によるのでしょうか、私、専門委員をしていますけれども、お願いですが、今度の次世代研究セミナーに來た人の意見とか、やはり会社とは違って、会社の場合は主任とか係長とか課長とか縦長にあって、明らかでいいのですけれども、学校は、先ほど前の先生の方が言われましたように、次の人もまだ40ぐらいで、例えば英語科であれば、14～15人いる中で1人選ぶというのは非常に難しい心理があって、やはり先生というのは、ご承知のようにイーブンで横並びが多いわけですから、その辺の悩みは私も持っていますし、思っていられしやるところもあると思うのです。

それについてどうすればいいか。そのようなことを時間かけて、研究して標準型とか、いろいろなことをまとめていただくとありがたいなと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

○大塚

アイデアですけれども、横並びでも恐らく年次、何年先生をやっているかというのもあると思うので、とはいっても企業ではふるい落とし、要はライン職で常にマネジメントの道を歩むか、専門職で、マネジメントでたくさんの部下のトップに立つよりも、自分自身のやりたい仕事を高いレベルでやりたいと。支店長と同じぐらいの年収になる専門職のラインがうちにはあります。

それから、何年かたったところでふるいをかけるといいますか、ご本人が自分としては学校の経営を目指していくのだという方と、生涯一教員なのだけでも、さっき先生が仰ったように、誰にも負けないくらい子どもや保護者に好かれる教員になるのだということも意識として持つような5年目研修とか10年目。10年目だと次世代リーダーの入り口に立ったときに、果たして私は学年主任とかを目指していいのかどうかということも意識の中にあると、それが見えてくると選抜もしやすいのかなと。

あるときに、こういう研修があるからといったら、色がついていませんから、確かに先生の仰るように選びにくいですね。済みません、ちょっと簡単に。

○木内

中堅ぐらいまではとにかく、それ以上のリーダーになっていくためには、やはり経験が必要なのですけれども、それは年配の人のほうが経験が豊かですね。若手は経験がない。でも、誰かを選んでいかなければいけない。

どういう人を選んだかということ、どんどんリーダーシップの能力が大きくなっているよりも、今引き出されてなくて、潜在的に持っている、学習能力があるのがどんどん大きくなるわけで、そういう人を見出すかなのです。勇気を持って選ばなければいけないのですけれども、横並びで選べないというのは、分掌上の部長や課長ではなくて、小さいプロジェクトでもつくったときに、ぼんとその人を指名してや

らせてみる。うまくいったら、ご褒美ではないですけども、ちょっとここに出てみるよとか、そういう方法もあるのではないかなという気がします。そうすると、その人はどんどん大きくなるのではないかと思います。

○淡路

私が最初に話したのは、そこなのです。先生方というのは、やはり授業を重視したいという人が多いですから、特に中堅の年齢になって、まとめ役などという重責は避けたい。けれども、やはりそういう経験や知恵を持っている人にはやってもらいたい。

私、時間がなかったから話さなかったのですけれども、リーダー養成とも関わる問題ですが、委嘱の方法を工夫する必要があると思うのです。学年主任や部長を委嘱します時、そのときに、急に委嘱されて、「先生お願いします」と言われる。私もそういう経験がありました。結局勉強のためにやらせてもらいましたが。

だから、この人にはこういうところで頑張ってもらいたいなというときには、早めに学年や分掌の情報交換をしておいてお願いしたらよいと思うのです。中堅のリーダー探し、最後の詰めは、信頼関係でしょうかね。

○コーディネーター

野原先生、お願いします。

○野原明（文化学園大学杉並中学高等学校 特別顧問・名誉校長）

淡路先生にお尋ねしたいのですが、大変わかりやすく興味深いお話をいただいてありがとうございました。ただ、伺っている中で、一カ所おやっと思ったところがありますので、ちょっとお伺いしたい。

それは、新しく総合的な学習ができたときにみんなが嫌がったと。それで校長自ら高1の授業をおやりになったというお話でありました。そのお話の主眼として、校長として高校1年生や中学校時代にどんな生活したかということ

を、いい評価を得られたと、いいお話で終わってしまいました。私はそれを聞いていて、あの学校の高2、高3とか中学校の総合的な学習は一体どうなったのだろうと。先生がおやめになった後のあの学校の総合的な学習はなくなったのですか、という疑問を持ちました。つまり、新しく、先生方が嫌がるような話題が出てきたときに、それをどう理解させ、実行させるかというのがまさにリーダーの役割だと。その意味でいうと、今、先生、振り返ってみて、あのときああすればよかったなというようなお考えはございますか。

○淡路

まず、学校には校長も授業をもつ習慣があるため、毎年どこかの学年に出ているのです。それから総合的な学習の科目の件ですが、私は、総合的な学習というのは総合的な学習科でやるものではないと思っていたのです。最近、防災科ということも話題になっていますね。これも特別な科目にするよりも、それぞれの教科やホームルーム、あるいは折々の行事の中で学習する方がよいと思うのです。

けれども、総合的な学習については、文科省は時間を置かなければいけないというようになりましたからきちんと置きました。

○野原

それでは、校長先生の方針を、総合的な学習の時間をお持ちになったというのは何をおやりになったのですか。

○淡路

時間はありませんが、高1の総合的な学習の時間は、一言で言えば、他者との関わりで気づき考え行動できるように社会力や生きる力を自主的、主体的に育むための指導案を考えました。例えば資料を提供して、私の話は知識として学習するのではなく、資料や話を聞いて、あなたは何に気づいたか、そして、どのようにこれから自分を変えていくか、行動していきますかと

いう視点で自己を探究させ、時々、二百字から四百字くらいでそれをまとめさせました。そして、後日、その気づきをまとめて共有する。ですから、同じ高校1年生の自分達の仲間がどういうことに気づいているのか、仲間の気づきを参考にして、また彼らは学び、いわゆる主体性や自主性を基本にした生きる力や社会力をつける。

○野原

議論するつもりはないのですが、それでは、高2、高3などの総合的な学習の時間は、どうしたのですか。

○淡路

それは教科や学校行事などで、それぞれ総合的な学習の目的を達するようにカリキュラムをつくりました。

○コーディネーター

では、野原先生、もう時間になってきていますので、恐れ入ります。

13時から始まりましたパネルディスカッション、間もなく終わりの時間となりました。私どもの進行も下手で、十分なところまで行かなか

ったかもしれません。私の経験では、この研修会に参加するというのは何か一つきっかけ、何か一つ糸口をつかむことが私自身にとっては大事なことだと感じています。今も当然そうなのですけれども、どうぞ次世代リーダーの育成という部分について、きっかけをつかんでお帰りになっていただければと思います。

午前中、實吉先生が生き残るということについて仰いました。確かに生き残るということを目指しては、最終的には生き残れないかもしれませんが、なくてはならない私学、感謝される私学、それが最終的に生き残るのだらうと。

私は、こういうすてきな先生達が、こういう立派な先生達が集まっている、そういう保護者や中学生、私の場合中学生ですが、が多くなってくること、それがとても大事なことになるのではないかと。そのすてきな先生達、立派な先生達というのは、当然、育成、研修の中で育まれていくものだと思います。今日の研修の成果、それぞれの学校で実践していただきまして、またたくましい私学を育てていただければと思っております。

3人のパネリストの方々、本当にありがとうございました。

総 括

樹徳高等学校 校長 星 野 幸 一

第59回全国私学教育研究集会群馬大会私学経営部会にご参加をいただきました全国の皆様、誠にありがとうございました。私学経営部会は、私学経営の活性化と次世代リーダーの育成研究会を締め括るに相応しい、充実した内容の研修となりました。

当日は四つの分野にわたって研修が行われました。はじめに、實吉幹夫先生より中央における教育行政の様子についてつぶさにお示いただきました。私学を取り巻く多くの問題について諸先生方が並々ならぬご苦勞をされ取り組んでくださっている事の様子を知り、これからの私学経営のあるべき姿について深く考えさせられました。それぞれの私学の創立の理念、その実践の中で時代に応じた教育を展開することの難しさと、何をおいてもやらねばならないという責任感を改めて心に刻むひとときでした。實吉先生、ありがとうございました。

次いで、本県の学事法制課、関課長にご講演をいただきました。県内にあっておおよその事は承知しているつもりでしたが、拝聴して、県の私学に対する高い評価と期待に接し、ありがたく感謝するとともに、これに応えなければならないという意を強くいたしました。皆様にとっては他県の私学行政の様子を幾分なりとも垣間見ていただけたのではないのでしょうか。

そして、私ども樹徳高等学校の副教頭兼生活指導部長、金安伸一より生活指導の考え方と実際について紹介いたしました。金安教諭はおおよそ30年間、生活指導に携わってまいりました。弊校のような小規模私学には良きにつけ悪しきにつけこのような偏った人事が行われております。校長より自校の創立の理念、教育方針、教

科・生活指導の目的と推進、いわゆる教育の心が伝えられ、これを受けて担当者は全教師と生徒に対してその精神を説き実践する。一見すると校長の考えとは異なるかの如き指導法が展開されることもあります。しかし、じっくり見ておきますと、校長が当初求めているものを超えた校長の理想とする指導が展開されます。私学という転勤のない職場にあつてはおのずから生涯かけての天与の使命と受け止める教育活動がここに生まれるのではないかと、などと愚考いたします。

さらに、前橋育英高等学校副校長、竹渕敏先生による「学校の組織活性化について」の詳説がありました。組織の活性化に真摯に精力的に取り組む、その繰り返しを積み重ねるもの、外部機関研修を活用しつつも、今だに暗中模索中である、と謙虚な姿勢で紹介され、聴者に、私学ならではの感銘を与えてくれました。

最後のパネルディスカッションでは、水戸女子高等学校理事長、鈴木康之先生のコーディネートにより、次世代リーダーの育成について、様々な角度から真剣、且つ情熱的な議論が進められました。これこそ私学教育の目指す全人教育の成否を問う問題でありました。そして、聴者それぞれの胸に秘めるものを燃え立たせてくれたものと受け止めております。

終わりに臨み、今大会には、県当局の並々ならぬお力添えとご指導を戴きました。そして、実際には私学教育研究所の諸先生方のご指導によるものでありますが、地元群馬の運営委員との共同企画・運営・進行という初めての試みにより実施いたしました事を申し添え、当部会の総括といたします。ありがとうございました。

教育課程部会

1 研究目標 次代の私学教育を見通した教育課程と評価について

2 会場 エテルナ高崎「2階 デイジー」

3 日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
10月28日	受付 部会開会式	講演Ⅰ	研究発表Ⅰ	昼食	講演Ⅱ	研究発表Ⅱ	閉会式	

4 内容

部会開会式 運営委員長挨拶 関東学園大学附属高等学校 校長 根岸 弘

講演Ⅰ 演題 「すべては一步より始まる」
 講師 広島県立歴史博物館 元館長 皿田 雄三
 広島県立芦品まなび学園高等学校 初代校長

研究発表Ⅰ テーマ 「『新しい学び』へ 開智の挑戦 —4・4・4制、異学年齢学級、習熟度別グループ授業、パーソナルの時間等、開智独自の教育実践—」
 発表者 開智学園 総合部 校長 那須野 泰

講演Ⅱ 演題 「カリキュラム開発とその評価」
 講師 筑波大学人間総合科学研究科 准教授 根津 朋実

研究発表Ⅱ テーマ 「教育課程と評価について」
 発表者 関東学園大学附属高等学校 教諭 吉田 明稔
 発表者 桐生第一高等学校 教諭 岡山 敏明

部会閉会式 総括 関東学園大学附属高等学校 校長 根岸 弘
 専門委員長挨拶 学校法人 鷗友学園 常務理事 清水 哲雄
 閉会のことば 桐生第一高等学校 校長 高山 信廣

5 運営委員

委員長	根 岸 弘	(関東学園大学附属高等学校 校長)
副委員長	高 山 信 廣	(桐生第一高等学校 校長)
委員	米 山 守	(関東学園大学附属高等学校 副校長)
	吉 田 明 稔	(関東学園大学附属高等学校 教諭)
	飯 島 昌 幸	(関東学園大学附属高等学校 教諭)
	味 戸 克 之	(桐生第一高等学校 教諭)
	齋 藤 亮 祐	(桐生第一高等学校 教諭)
	岡 山 敏 明	(桐生第一高等学校 教諭)

6 専門委員

委員長	清 水 哲 雄	(学校法人鷗友学園 常務理事)
委員	助 川 幸 彦	(芝中学高等学校 前校長)
	山 本 与志春	(青山学院中等部 部長)
	大多和 聡 宏	(開星中学高等学校 理事長・校長)

講演Ⅰ

「すべては一步より始まる」

広島県立芦品まなび学園高等学校 初代校長 皿 田 雄 三



はじめに

13年前になりますが、「つくば」で一緒に研修をさせていただいた委員長の根岸校長先生から、是非、この場に来て話しをしないかというご依頼があり、最初はお断りをさせていただきました。

また、教育課程ということになりますと、私自身現場から離れて10年近くなり、数年前までは県立歴史博物館館長の職にいたのですが、学校現場ではなく少し違和感を感じ、お断りをしたのです。

その後、再度お電話をいただいて、お受けする状況になり、何からお話をさせていただこうかと困惑しながら、この場に立っております。

広島県からも、この研修にご参加されている先生方も、多くおられるかと思いますが、

広島県の県立高等学校の中で、初めて単位制制度を導入した経緯について、お話をさせ

ていただきます。貴重な時間を与えていただき感謝しております。

新設校設置の時代背景

もう13年前になりますが、平成10年5月20日に、忘れもしません当時の文部省から前代未聞の是正指導を向こう3年間受けることになりました。

それは13項目からなる是正指導でした。

- ①「卒業式や入学式等の国旗掲揚・国歌斉唱の実施」、
- ②「人権学習を政治運動や社会運動に繋がる不適切な内容」、
- ③「道徳の時間が学習指導要領から逸脱した内容」、
- ④「国語の時間を日本語と表記」、
- ⑤「国歌を小学校音楽での指導の徹底」、
- ⑥「授業時数の改善」、
- ⑦「指導要録の不適正な記入」、
- ⑧「勤務および勤務時間に係わる管理が不適正」、
- ⑨「主任の命課が適正な実施が行われていない」、
- ⑩「主任手当の拠出」、
- ⑪「職員会議が適正に運営されていない」、
- ⑫「確認書の締結」、
- ⑬「市町村教育委員会指導」

平成13年6月に一定の成果があったとしては是正は終わりましたが、未だ十分とはいえず、

引き続き指導は行っていくという状況でした。

当時の県教育委員会は「是正から改革へ」と新たな「教育県ひろしま」の創造を目途にビジョンを打ち出し、指導体制を明確にし教育改革を推進してきました。

そこでは、運動団体等他からの教育介入を排除し、中立性を保ち、説明責任の重視の中、公開制を打ち出した公教育の基盤づくりを背景として、「確かな学力」・「信頼される学校」・「豊かな心」を目標とし、もちろん県民の学校教育への参画・協力を強く求めた教育の推進でありました。

新設校設置に関わる経緯（抜粋）

平成11年

5月 教育委員会議で府中地区定時制4校の統合・募集停止案決定

7月 教育委員会議で設置方針決定（単位制を活用で、単位制ではない）

①開校日：平成12年4月1日 ②位置：B 高校 B 校舎 ③課程：普通科 ④

昼夜別：昼夜間3部制 ⑤通学区域：広島県一円 ⑥教育内容：単位制を活用した多様な教育システムの導入

11月 教育委員会議で校名（仮称）決定

①校名：広島県立芦品まなび学園高等学校 ②校名趣旨：地域に親しまれ、生涯学習の機能を備えた新しいタイプの学校をイメージする。

12月 県議会12月定例会議で、芦品まなび学園高等学校設置条例議決

孤立無援の学校づくり（府中地区4校定時制教員の新設校への軋轢）

平成11年5月の広島県教育委員会議で府中地区定時制4校の統合・募集停止が決定した後、組合を中心とした反対運動が起こり、誰が新

設校の校長として赴任するかという話題が聞かれる環境になっておりました。

ところが、私が平成11年12月20日に、校長（尾三地区：尾道・三原地区に勤務）から人事異動の内示を受けたのです。府中地区定時制4校の募集停止・統廃合による、新設校の「芦品まなび学園高等学校」の校長内示でした。

「皿田さん、校長室に来てくれないか」、「何かありましたか」、「人事がある」といわれ、少し驚きをもって校長室に入りました。「まさか芦品まなび学園ではないでしょうね」、「そうですよ」、「教頭ですか」と訊ねると、「いやいや、校長ですよ。新設校だから頑張ってください」と、人事異動の内示を受けました。

組合が反対運動をしている環境の中で、どのような形で学校を立ち上げていけばいいか、自分がどう立ち振る舞うべきか悩みました。

当時は、全県挙げて高教組（高等学校教職員組合）は立て看板、座り込み、そして、抗議打電や抗議文を県教育委員会や校長に送る反対運動を行っておりました。

赴任は、平成12年1月1日の任用替えて、当時は、校長、教頭、事務長の3名が準備委員として、激しい反対運動を繰り広げている戦（いくさ）の火中の真っ直中に入っていき、開校準備のスタートを切らねばならない状況にありました。

『一燈を掲げて暗夜に行く、暗夜を憂うなかれ、只、一燈を頼め』という心境であり、決して順風満帆な船出ではなかったのです。

1) 何も整理できていない環境の中で、3ヶ月という短期間での学校機構づくり。

今まで取り組まれた新設校の内容を12月27日の辞令交付日に県教育委員会に提示を要望しましたが、何も出来ていない状況にありました。

従って、平成12年1月から3月まで、3ヶ月

間という短期間で開校に向けての取り組みをしなければならなかったのです。

取組内容（抜粋）として、

タイムスケジュールの策定、開校式・入学式の実施要項策定（日程・規模・内容・来賓等）、教育課程の策定、単位制としての教育内容の策定、教科書採択及び副教材の採択、教育目標の策定、校訓の策定、校務運営規程の策定、教務内規の策定、授業時間・勤務形態の策定、校章の決定、校歌の決定、校旗の決定、学校要覧の作成、入試実施要項作成とその手続き、入学のしおり作成、一括転学手続き、生徒手帳の策定、聴講生募集、非常勤講師選定契約、物品整理、PTA 規約策定、校医の選定契約、警備契約等々。

これらを学校機構全てを白紙から策定する状況に置かれていたのです。

- 2) 募集停止・統廃合を受け、激しい反対運動を繰り返している定時制が位置している同じ敷地内の B 高校同窓会館を、開校準備室として設定してあり、このことが、組合との戦（いくさ）の始まりであったといえます。（校長、教頭、事務長の3名のみの準備委員）

また、同校の同窓会館を借用したのですが、この建物は物置同然であり、机・椅子はなく、破棄するような机・椅子を校長から借用し、準備室の整備に取りかかったのは平成12年1月4日でした。

当初は、電話（1月5日設置）もファックス（1月7日設置）もパソコン（1週間後設置）もない悲惨な状況でありました。

新設校開校は同年の4月1日には変更はなく、わずか3ヶ月間で準備し、生徒を迎え入れなければならない状況に置かれておりました。

- 3) 平成12年1月から3月までの3ヶ月間で、主だったものだけでも約20回、開校準備室に統合・募集停止を受けた4校定時制の他校の教員が来ては開校準備の妨害をしました。

募集停止・統廃合反対、単位制導入反対、3修制導入反対、聴講生導入反対、新設校設置反対と、時には声高に机を叩きながら、恫喝し、脅し、人間性を否定する言葉を平気で投げかけてきたのです。

この状況下の中、発想の転換をもって彼らが要求している逆の学校づくりをすれば、必ず成功すると確信を得ました。

主な要求内容は、

「作業学習」を継承、フィールドワークを中心に据えた「現代社会」の教育内容の継承、「日本語教育」等を継承、「今までの取り組みの経緯を教えよ」、「関係各校全体で話し合いを開催せよ」、「4校の教育内容を継承せよ」、「中学校への取り組んでいる内容を教えよ」、「条例規則が出来ても単位制は絶対反対だ」、「兼務辞令を何故県教委に申請しないのか」、「入試を3人でしょうと思っているのか。出来るわけではないだろう」、「人事はどうなっているのか。教えよ」、「組合で単位制の加配を要求ししているが。結果を教えよ」、「兼務辞令が出ていない状況で、4月の開校に間に合うと思っているのか」、「授業展開と教育課程を見せよ」、「施設はどうなっているのか教えよ」、「入学のしおりに元号を記載しているが、定時制は同和教育の視点に立って教育をしてきたので、許すわけにはいかない」、「出願の状況を教えよ」、「在校生と保護者に一括転学の内容について案内をせよ」、「在校生の授業状況を、何故、見学をしなかったのか」、「在校生に新設校の趣旨説明をせよ」、「B 高校定時制職員に新設校の趣旨説明をせよ」、「離

任式を芦品まなび学園でせよ」、「3年修業は絶対反対だ」・「単位制は絶対反対だ」、「4校代表と校長との話し合いを持て」、「校長がだめなら教員同士で話し合いをさせよ」、「今まで取り組んできた教育内容と異なっている。どうなっているのか」等々。

以上のような要求を掲げ、他校の定時制教員が準備室に、何度も押しかけてきたのです。

彼らは、「子どもを守る」と言いながら、社会環境が大きく変化しているにもかかわらず、新しい教育内容を創造しようとする意識すら感じられませんでした。

そして、従来の統合・募集停止を受けた4校定時制の教育内容を維持継続させるため、定時制教員の新設校開校準備に対する兼務辞令申請も強要してきました。

しかし、妨害・攻撃は開校準備期間のみならず、開校後、平成13年度上半期まで攻撃を繰り返し、事あるごと「新設校は失敗であった」という批判文章まで出していたのです。

4) 地域の定時制高校不要論に伴う辛い広報活動。

①地場産業への取り組みの中で、資料を受け取ってもらえない、名刺も受け取ってもらえないという門前払いの日が多々ありました。

②平成12年5月31日、進路開拓で地場産業の企業を訪問した中で、「もう定時制はいらないと県教育委員会に提案をした」と言葉を投げかけられ、今までの定時制教育のあり方では、人づくりが十分できていない教育環境から、地域の定時制高校不要論に繋がっている表現そのものでした。

この信頼の失墜の表現を次のステップとして、単位制としての新設校を、意欲的に

取り組んでいかねばならないという決意を新たにさせられたのです。

③中学校訪問の中で、今までの定時制というイメージが強く、また県教育委員会の指示の中で「単位制制度を活用した教育」という不透明感のある表現が、新設校の教育内容が十分に伝わらない状況でした。

このことから、制度的に単位制として整備されていない中で、「単位制高校」として明確に広報することを、校長の責任で行うことに切り替えました。県教育委員会には中学校の提言も含め「私の責任で、明確に単位制としての教育内容を広報していきます」と伝え、今後、単位制制度導入反対論者からの様々な攻撃や抵抗を覚悟した上での決断でもありました。

このような動きの中で、平成12年2月10日、県教育委員会議で「芦品まなび学園を単位制高校とし、聴講生制度も導入をする」として、「単位制高等学校明定に関わる条例」が制定され、覚悟を決した行動に大きな力を与えてもらうことができました。

一方、広報活動の中で定時制は、全日制の受け皿であるという意識が強く感じられました。また、心に傷を負って入学してきている生徒もいる実態の中で、地域の定時制に対する思いと生徒が抱えている心情を背景に、広島県初の単位制高校として、定時制のイメージを変えたいという一心での取り組みであったといえます。

そこでは、明確に単位制としての教育課程を策定し、それを教育実践できる人材（教員）の育成をしなければ絵に描いた餅になり兼ねず、定時制のイメージは変えられないという思いを、常に自分自身に強く言い聞かせておりました。

5) 福山地区内の一部の校長に「芦品まなび

学園高等学校」とは、無縁である態度。

平成12年1月1日の新設校の開校準備室が、設置されるや否や「芦品まなび学園高等学校」の校長が、統合・募集停止を受けた4校の定時制教員の反対運動の攻撃を一手に引き受ける状況に置かれる中で、準備室に妨害にきた教員への所属校校長による指導は加られておりませんでした。

その背景のには、福山地区の定時制が理解できていない他地区（尾三地区：尾道・三原地区）からの校長赴任は、容認できないという考えが一部の校長にあったことが、無縁の態度に繋がった要因の一つと考えています。

平成12年4月7日、福山地区の多くの校長に出席をしてもらいたいため、開校式・入学式を午後に挙行了しましたが、福山地区の校長は数えるほどの出席しかしていただけませんでした。

新設校における前任校制度逸脱の是正

3ヶ月の開校準備を経て平成12年4月に開校し、単位制の新入生に、学年制である前任校定時制（統合・募集停止を受けたB高校定時制の在校生一括転学）の2年生から4年生までの在校生全員を受け入れ、単位制と学年制が混在する体制によってスタートしました。（B高校定時制教員8名の内、4名が人事異動による赴任）

新設校で教育をする過程の中で、平成10年5月20日に是正指導が入って2年目を迎えていても、府中地区の定時制教育は何ら改善がなされておらず、旧態依然の制度を逸脱した組織環境にあったことが明らかになりました。

このことは、是正指導の真っ直中にあり県教育委員会に向けて表面だけを繕い、これを隠れ蓑にしていたと考えられます。

従って、単位制新設校の基盤の確立と併せ、公正・中立をベースに透明性を前面に押し出し、総てを明らかにしながら是正を図る取り組みにも傾注しました。

その例として（抜粋）、

1) 組合対応の是正

法規法令に基づいた学校経営を行い、一切、組合への根回しはせず、組合主導の学校運営は行わないことを明確に全職員に公言。

県教育委員会の学校視察に対して、組合との事前打ち合わせや要望を出すことを禁止。

2) 制度を逸脱した教科科目指導の是正

学習指導要領を無視した科目の設定や「現代社会」のフィールドワークを中心とする教育内容から教科書指導へ是正。

「日本語教育」と称して、非常勤講師を正規の授業をさせないで帰国生徒の通訳。

3) 悪しき病弊の是正

始業式・終業式の廃止、総合体育大会参加に対する練習時間確保の2週間授業カットまた大会参加の翌日は公欠扱い、宿泊合宿指導準備のための1週間授業カット、文化祭準備のための3週間授業カット、文化祭における生徒会の募集停止・統廃合の「反対看板」・「反対のぼり」等の掲示、募集停止・統廃合のLHR等での指導、未成年者の喫煙の容認、授業時数無確保、本人に渡らない無償配布の教科書、怠っている教科書中心の指導、テストを行わない評価点、組合主導論者・同和教育基底論者の特権意識等々。

新設校開校以来、事あるごと一括転学を受けた前任校より異動してきた教員から、「今までは、こうしていた」という要望を出してきた中で明らかになりました。

学習指導要領から逸脱し、築き上げてきた定時制教育の継承を掲げ抵抗しておりましたが、教育を正常化していくために様々な抵抗

を顧みず強力に是正し、教育の再生を図る学校づくりをしてきました。まさに、「混迷する教育からの旅立ち」といっても過言ではありません。

心に一筋の光

1) 恩人1

平成11年12月27日校長辞令交付日に、当時の県教育長の言葉に心を大きく動かされました。

「皿田さんしんどのいは分っているが、楽しみながら学校づくりをすればいいよ。好きなようにしてもよい。失敗したら俺が責任を取るよ」

この言葉には、うっ積していた重しが取れました。つまり、学校づくりは、その環境にいる者が、ましてやトップが夢を描かなければ、すばらしい学校づくりは出来ないという示唆をいただいたのです。

また、『学校づくりの真なる真理追究』とでもいえますが、常に夢を描いていれば、学校づくりが出来るという喜びが感じられる教えでもありました。

『道つけば拓かれ、道あれば栄える』と考え、その道の一步をつける喜びは、何ものにも替えがたいものでありました。

学校の常識が、社会の非常識にならない環境づくりを創造するには、法規法令に基づいた学校経営・運営を行い、県民・地域・保護者に対する学校教育の説明責任を果たさねばなりません。つまり、内輪の理論や論理は通じないということです。

また、一つの運動団体等に片寄った学校経営・運営や教育をすることは、公正・中立性が求められる公教育の目的は達することは不可能であり、県民・地域・保護者から信頼・信託の回復を図ることもできません。

そのため、学校組織のあり方として、校務運営規程の徹底や主任制を機能させる態勢を強化していきました。主任は調整型の人選は避け、年令に関係なく主任としての資質を基に、徹底した校長権限で命課をしたのです。また、「主任」という固有名詞を付けて呼ぶ環境づくりと主任の机の配置を教頭に隣接する前出しを行い、形の上からも環境整備いたしました。このことで、教員の主任に対する意識の変化を見ることもできました。

是正指導前、職員会議は最高議決機関の発想を基に、校長権限を剥奪し、その他、校内人事委員会（人）、校内予算委員会（かね）、校内建設委員会（もの）が組合によって支配されていたといっても過言ではありません。

このことから、職員会議の位置づけを明確するため、「みんなで相談して、みんなで決める」という考えを排除し、校長の職務の補助機能として、校長の執行を助ける内部的な機関にしました。

従って、校務運営会議をベースに基本的には部会で連絡・調整を図り、定例職員会議を排除し、校長の権限で必要に応じて招集をかける態勢を確立したのです。

あくまでも、連絡調整する場とすることを徹底し、質問を受けるかどうかは、校長の事前調整を必要としました。従って、決定機関としては職員会議ではなく、校務運営会議を最大限重視する組織にしていきました。

また、校内人事委員会、校内予算委員会、校内建設委員会は校長権限の範疇で処理していくため組織から全て排除したのです。

2) 恩人2

平成12年1月18日に、一本の電話が入りました。募集停止を受けた前任校定時制の校長から、定時制教員の開校準備に対する兼務辞令の申請に対する問い合わせが、当時の教職

員課長からありました。

「校長先生、前任校の校長先生から兼務辞令の申請が出ているが、いかがされすか」

新米校長である私は即答を避ける優柔不断な回答をしていました。すると、「前任校の校長先生の意見を聞いているのではないのです。芦品まなび学園の校長先生の考えを聞いているのです」

私は、全身に冷水を浴びせられたような思いに駆られました。

管理職としての責任と権限の重さを自覚して、校長本人の意思で決断することが、学校経営において、いかに大切であるかということをお教えられたのです。

このことから、「兼務辞令の拒否」を明確に意思表示しました。この意思表示が過去の定時制教育からの柵を断ち切ることを可能にし、単位制として新設校の教育内容の確立を、大きく前進させることを可能にしたのです。

管理職の権限が、明確に打ち出せる学校づくりを、力強く前進させる一歩をいただいたといえます。

このことから、校長は強い信念と明確な経営理念を持って、組織の方向性を策定し、常日頃より筋を通した一定の発言様式・行動様式を明確に示す言動と組合の批判や中傷攻撃に躊躇することなく、毅然として公正・中立な学校運営を行う努力をしてきたのです。

3) 恩人3

平成12年2月9日の人事ヒアリングの中でのひとこまで、「新しい学校で、新しい制度を導入して希望に燃えた生徒の受け入れをする決意をしており、是非、意欲に燃えた若い先生方を配置してもらいたい」と、お願いをしました。

これに対して人事係長は、「総合的に判断しているが、今は迷っている」。

この言葉から、私自身、感じ取ったことは、他力本願ではなく、トップとして人材の育成をすることが大切であり、校長としての職務でもあると感じ取りました。

そのために、自ら求める戦略的な人材育成に力を入れてみようと思いを新たにしました。

まず、研修体制の環境づくりをしていく、それは、長期研修等への積極的な推薦と教育センター講座へ全員受講の研修参加体制の確立を求めました。

また、主任を中心に、各分掌における校内職員研修の定着や年間を通じた全教科の公開研究授業の確立、そして、国・県の指定事業を積極的に導入し、ここでは、一部の教員の請負ではなく、組織として全教員で取り組む態勢と地域を取り込んだ「指定事業実践報告会」の確立を図りました。

平成13年度から平成14年度まで、独自の校内目標管理（平成15年度から全県公立学校に目標管理導入）の定着を図る実践も行い、授業のあり方を問う教員自身の自己評価に、学校評価連絡協議会を設置し、外部学校評価を導入し地域の意識を教員に認識させる取り組みをしました。

ここでは、目標管理によるマネジメント手法において、数字合わせのための成果ではなく、いかに教員自身に「やる気」を起こさせるかを求める自主的成果主義として導入したのです。

4) 恩人4

平成12年4月21日の県校長会での忠告を、当時の県校務指導監から耳打ちされました。

「皿田さん、福山地区の校長先生の中に、あんたが校長になったことを快く思っていない校長先生がいるが、気にせず学校づくりをしてもらいたい」。

この言葉をもらったとき、「命をかける決意はできています」と答えました。

『世の中の人は何とも言わば言え、我が為す事は我のみぞ知る』（坂本龍馬）の言葉を心に落としており、また、この新設校が失敗に終わりますと、次に県教育委員会が推進しようとする今後の教育改革に大きな影響を及ぼすため、『命』という言葉が発したのです。

つまり、単位制高校の確立という新設校の重責を自覚せざるを得ませんでした。

そのため教育の方向性を明確にし、より教育内容の深化を図り、制度に載って新しい発想を基に行動を起こし、学校の特色づくりを求める環境づくりが必要と考えました。

学校のコンセプトは、教育課程からくる教育内容を明確にし、旧態依然とした教育からの脱却をして、県民や地域にアピールしていく特色のある教育活動を確立することにありました。

それによって、「今、何が出来るか」を自問しつつ、アイデアを具現化するために、素早く、わかりやすく、大胆に行動を起こすことに集中をしておりました。

その背景に、広島県内初の単位制高校を確立するために、どんな障害があっても、これを乗り越えて、定時制のイメージを変え、教育改革を具現化するという強い意欲を持続することができたといえます。

完成度の高い単位制を求めて

教科・科目の選択肢を積極的に導入し、年次の枠組みを排除した教育課程の編成の確立に努めました。

単位制の原点でもある74単位修得による3年修業を可能にし、無学年制における単位履修と年次・部を超えた選択システムを導入したのです。この背景に、基礎・基本をベースに

多様な選択科目を設定し、標準および発展科目を設定することにより、個々人のライフスタイルに応じた科目が選択でき、自ら時間割の作成も可能にすることができました。

また、無進級制度によって、単位の履修と修得を異にする単位修得制度を確立させることができたのです。

柔軟な単位認定の積極的な導入では、過去在籍した他校の修得単位の認定や実務代替、高等学校卒業程度認定試験（大学入学資格検定）の他、学校外におけるボランティア活動・インターンシップ、高大連携・高専連携、公民館サークル活動に会員として参加すれば、単位認定する「学校外における学修等の単位認定制度」の導入による単位認定を可能にしました。

また、2期制に伴う半期完結型単位認定や半期分割型単位認定を導入し、4月・10月入学、3月・9月卒業を具現化できたのです。

その他、「総合的な学習の時間」の地域人材活用の導入や生涯学習機能を背景とする学者融合の取り組み、および聴講生制度の積極的な導入を実現させることができました。

この聴講生制度は、単位制制度を活用して、リカレント教育の一役を果たす学校づくりを追求することを可能し、地域の教育力を積極的に導入する受信教育と、地域参加型教育として聴講生制度の導入による学校教育の地域に対する発信教育としての生涯学習機能を確立することができたのです。

平成12年度の開校当初の聴講科目は「情報処理」「文書処理」の2科目でありましたが、平成13年度以降は地域のニーズが高くなり、「自然観察」「実用化学」「レクリエーション・スポーツ」「音楽Ⅰ」「美術Ⅰ」「書道Ⅰ」「中国語」クロスカルチャーコミュニケーション」「家庭看護・福祉」「生活園芸」「簿記」「文書

処理」の12科目に増やしました。

また、聴講生制度は、正規の授業の中で生徒と聴講生が共に学ぶものであり、生徒には地域住民の「真剣に学ぶ後ろ姿」を見せながら学ぶことの大切さを体感させ、社会人と共に学び合う生涯学習の在り方を考えさせる教育効果をもたらしました。

教員の意識変革

教員の行動ポイントとして、「自己の教育の古い体質の先例主義や既成概念を破壊する」、「追い詰められたときにこそ、新しい知恵が創造できる」、「出来ない説明よりも、やる方法を考えることに労力を注ぐ」、「パーフェクトではなく、とにかく行動を起こすことである」、「心配の先取りをしないことである」、「言い訳をしないことである」、以上のような行動ポイントを基に、あらゆることにスピーディーに対応し、知恵を絞って新たな価値を創造していくことが大切であると考えます。そして、教員一人ひとりが、高い識見と教育力を持って、自ら積極的に行動が取れる資質を養うことが必要といえます。

これらの行動ポイントを背景として、地域・保護者などから、更なる信頼・信託を確固たるものにしていくことです。

教員の教育力・指導力のポイントは、教員は常に一専多能を自ら求めていくことを忘れてはなりません。つまり、教科の専門性を追求すると共に、生徒指導・クラス運営・クラブ指導など、多様な能力が求められるからです。

そこには、洗練された高い教育理念を持つことが大切です。学校の本来の姿は、「行ける学校」から「学びたい学校」へ、そして、洗練された高い教育理念をもった教員集団に変貌を遂げることによって、「どこで学ぶか」か

ら「誰に学ぶか」という意思ある学びの実現ができると考えます。

社会の宝を育てる教育の追求は、人間の理想を目指して行うものであり、生きる力と自律を養う教育をしていくことにあると思います。

そのためには、教員として教育の尊厳さを自覚し、洗練された教育理念と高い教育力・指導力を身に付けなければなりません。

おわりに

新しい学校づくりの中で、信頼の回復と地域における存在価値を新たに築くことに傾注してきました。そこでは、「破壊から創造へ」という考えの基に、学習指導要領に基づいた単位制という、新しい教育課程からくる教育内容を求めていきました。

今川義元と「桶狭間の合戦」で、織田信長に城に立て籠もることを重臣が進言した時、信長は、『人、城を頼らば、城、人を捨てせん』として、攻撃に打って出ました。

まさに、当時の4年間は、本丸も、山城も持たず、攻めることのみの学校づくりと言っても過言ではありませんでした。

このことは、統合・募集停止を受けた4校定時制の取り組んできた、旧態依然とした教育内容の「城」に頼り、それに甘んじて安住していたならば、新設校の存在価値は失っていたでしょう。

その「城」に頼らず、新しい城である「単位制という新しい教育」を創造する行動を起こし、教育という「夢を描き」、「夢を追い」、当時の県教育長の「楽しみながら学校づくりを…」の心理を追求したのです。

その一步を踏み出したことから、全てが動いたと確信をしております。

混迷に喘いでいた教育が蘇ると共に、一

種の定時制教育の幕開けでもありました。

この背景には、先生方個々人も、自ら研鑽・努力して、教員としての教育理念の資質向上を図り、本物の教育力・指導力を身につけ、「新しい学校や新しい教育を、創造するのだ」という、やる気と情熱をもって、今までの既成概念の殻を破る勇気と実行力が原動力になったと言えます。

常に変化を遂げている社会にあって教育にはゴールはありません。

そのためにも、定期的に見直しされる学習指導要領の改訂と同様に、教育課程は、年度により常に点検・見直し、改善を図っていく

ことは必要不可欠と考えます。

『教育は国家百年の大計』です。

『未来からの旅人』であり、『社会の宝』である生徒への教育を実践するためには、是非、気力と情熱とやる気をもって、行動を起こし、あらゆる事象に『仕事をやらされている』という受動的な考えから、自ら積極的に『仕事をする』という、能動的な行動へ、さらなる努力をされることを祈念しております。

『道がつけば拓かれ、道あれば栄える』という言葉信じ、『我が道は一を以て、これを貫く』という信念の基、すべては一步より始まるという想いの中で、新設校の取り組みを行ってきたのです。



研究発表Ⅰ

『新しい学び』へ 開智の挑戦

—4・4・4制、異学年齢学級、習熟度別グループ授業、 パーソナルの時間等、開智独自の教育実践—

開智学園総合部 校長 那須野 秦

はじめに

こんにちは。開智学園の那須野でございます。お疲れのことと思いますが、午後に向けてのちょっとした時間としてお使いいただければと思います。

開智のの取り組みということで、少しご案内させていただきます。特にこれを使って段取りよく説明しようと思っと思っています。今日ここに立って、皆様のご様子をうかがいながら、何か一つでもためになるものがあればと、そのように思っています。

まず、開智学園、開智と言っても、ほとんどご存知ないのではないかと、これを心配しております。どういうところかといいますと、都内に向かって言いますと、JR線をずっと上っていくか、あるいは大宮まで出ていただいて、そこからまた東武野田線というので横に走るの、保護者の方もこう言います。「大宮まではたまに買い物に行ってもいいけれども、そこからまた野田線に乗ってというのはどうかな」という形で、場所がどこにあるのかということ自体、周知するのが大変だなというところで、教育実践を行っているという学校です。

私自身は静岡のほうで教員をしておりまして、私立の教員をしばらくやっっていました、公立に移って、これからやろうかなと思っていたところへ、「埼玉で学校をつくるので、一緒にやらないか」と誘われて、女房に相談したのです。「埼玉の方でこんな話があるんだけど、ど

うかな。僕はあまり気乗りしないんだけど」「いいんじゃないの。都内の方へ行ってみようよ」ということで、ぽっと出てきて、中高一貫の準備室という形で、開智に入りました。

これは大変だったですね。埼玉第一高等学校というのが、その前の校名としてはあって、その学校自体、私は存知上げないのですが、教員と子ども達が本当に懸命に取り組まないと、学校の運営自体が難しい学校だったように聞いています。そこが中高一貫をつくるということで、私、結局1年はほぼ授業もせずに、募集活動ということで懸命に回りました。「埼玉第一ですが…」、ほとんど塾は相手にしてくれないわけです。そこにもってきて、初っ端から何とか結果を出す子ども達を集めなければいけないということで、懸命に中高一貫の立ち上げをやりました。

その立ち上げの1期生とともにずっと上がって行って、その1期生は、運よく面白い子が何人か出まして、1年目の子ども達から東大が2名出た。それをバネに、昨年あたりかなり結果を出してきていると思います。東大も17名出しましたし、医学系、薬学系もかなり出て、総計分母ですと、たぶん関東エリアでもトップ層の学校に入ってきたかなと思っています。

その子ども達と、じゃあねといって、今度は小学校の建屋に入ってきた。私、高校が一番長うございましたので、中学生を見たときに、「トムとジェリー」じゃないかと思ったんですね。

あら、これは大変だな、と。それがまだまだ十分ではないうちに小学校を見たのものですから、これはどうしたものかなと思ったのが正直なところ。けれども、何とか小学校を総合部ということで立ち上げていこうということで動き出しました。

いろいろな学校を見て、参考にさせていただきながら、それをアレンジしてつくり込んでいった。今、これから教員になる若い人は、たぶん小学校免許を持っていたほうがいいと言われる時代です。つまり、小・中・高、特に関西エリアというのは動きが早くて、小学校を立ち上げるよといって、私どものほうにも立命館さんとか、あるいは同志社さんとか、学校を見にきてもらって、話をされていて、次の次のステップでは小学校をつくり込んでいるのです。早いな、関西は、と思ってびっくりしました。ですから、たぶんこの動き、小・中・高の一貫の教育は、全国的なうねりになっていくのではないかと思います。

I. 4・4・4制、異学年齢学級

小学校を立ち上げようといったときに、いろいろな学校を見たのです。ものすごい校舎。東北へ行きますと、ご存知のように、私どものメインの校舎よりも、廊下のほうがすばらしいのではないかという東北のパイロットスクールを見にいった、びっくりしました。そういうところへ行くと、いろいろあるわけです。10年前ですと、国際教育エリアとか、何とかエリア。当時、びっくりしたのは、学級をほとんど構成しない学校というのが10年前ある一部で考えて受けていたようです。行くと、ロッカーがあるのです。ロッカーがあるのですが、そのところがホームルームだというわけです。子ども達はホームルームとしてのロッカーは持っているけれども、それぞれが個として成立していて、1時間目は国際教育エリア、2時間目は数的何とかエリアという形で、移動して学習をする。これがメインという話があった。

それを見たときに、ぼんやり考えていた異学

年齢学級をつくるのだったら、そのスペースだけではなくて、そこにいろいろやることを埋め込んでいったら面白いのではないかという発想が、自分の中で固まっていきました。結局、私達は子どもを伸ばせばいいわけです。伸ばすために何が一番必要かという考え方をしたときに、学校への要請として高まってきている要求を構成すればいい。ご存知のように、ものすごい要求があります。そんなのに一々応えていたら、体が幾つあっても足りない。それもやりません、これもやりませんというのはうそです。だとすると、当時、何が一番大きな要求かなと思ったとき、やはり子どもの経験知の低さ。それがしっかりとないと、土台がないから、上へ積み重なっていかないと思います。

要請として、私達のころには、年代的に大きく言うと同じだと思いますが、地域でかなり遊んでいましたよね。地域で遊んでいた人数というのは、皆さん方の頭にぽっと思い浮かべる人数って何人くらいですか。地域で朝から晩まで、夜、「何々ちゃん、帰きなさいよ」と言われるまで、ずっと遊んでいました。何人くらいが平均値だと思いますか。私のころで恐らく7後半くらいが平均値だと思います。そこでたくさんの経験をして理解したことというのが、自分の原形となっている。これは恐らく確信が持てることだと思います。その当時、たくさんの経験したこと、上からは叩かれ、下からは突き上げられ、大変な思いをしている。そういう当たり前のことが、今、なかなか成立しないですよ。だったら、異学年齢の学級を学校としてつくってしまったらどうかと思って、やってみました。異学年齢。

これは感想だけ申し上げますと、プライマリと私達は呼んでいる小1から小4の部分ですと、これは当たり前ですが、自然な形で毎日がフィールドワークみたいなのです。うちは4・4・4といって、朝、ホームルームに行くと、小1から小4がいるホームルームに行く。1時間目と2時間目と3時間目は集団の時間。これは小学校5年から中学校2年でも同じことをしています。

朝、行くと、4学年がまとまっている。その4学年で様々な動きをつくっていますが、基本的に学習は、1時間目の集団と2時間目の集団、つまり1時間目の英語と2時間目の数学、3時間目の国語の集団は全部違う。20名の少人数に分かれていく。その子にとっていうと、1時間目、2時間目、3時間目、4時間目の集団は全部違います。

こういう形で運営をしているのですが、異学年年齢の動きというのは、やってみて、セカンダリーと言われている小5から中2の段階の動きはすごく面白いです。小1から小4は、ほっておいても化学反応を起こして面白い。難しいと言われている年齢のときに、いろいろ仕掛けてあげると、本当に面白いです。

個人的には、高校でもやったらどうかと思うときがあります。ただし、高校はかなりの学習集団として組織されています。例えば、開智でも、上に上がれば上がるほど、学習の集団が小さくなって専門化していきますので、完全に学習集団となっています。うちは4・4・4と言っていますが、いわゆる4・4・3・1です。最後の1年は、やはり予備校といえは予備校ですね。そういう形で運営していますので、最後の高校生のところで異学年年齢の集団をやるのはなかなか難しいのですが、私は個人的には、今、一番求められているのは高校生のところかなと思います。

II. 開智独自の教育実践

1. 組織を学びリーダーを育てる「異学年年齢学級」

子どもを伸ばすためにどうしたらいいかということで、幾つか考えてやっています。一つつくったのが、異学年年齢の Team をつくりました。異学年年齢の Team です。先ほど申し上げましたように、小1から小4、小5から中2という集団をつくって、それがいわゆる学級になっています。学級という呼び方になっています。その学級で様々な取り組みを、実際に行ってみる、これをやっています。

例えば、Team で「道徳」を行っています。外部から、時に先生方が訪ねて見えることがあ

ります。関東の幾つかの学校と親しくさせていただいて、見に来ていただいて、何だかんだと話をすることがあるのですが、まず「Team 道徳」のところでご覧いただくと、皆さんこういうことを仰います。「あれっ、それぞれの Team でやっていることが全部違いますね。その辺は難しいのではないですか、具体的には」と仰います。

うちの場合には、Team で課題を見つけて、その課題を一つ一つ検討していくことも、日常の「道徳」の中に入っています。ですから、Team によって課題は違いますので、出てくることも違いますので、それぞれ Team で「道徳」を構成してやっています。

その中には、例えばプライマリーでいいますと、これも「道徳」と位置づけてやっているのが、「Team 集会」という呼び方になっています。1年生から4年生の子ども達が1時間、授業をつくる。自分達でテーマを設定し、例えば学校のほうから「挨拶をしよう」というアナウンスを出したことは1回もありません。子ども達はどうかという、自分達が、何か挨拶をしたいなという感じになってくると、「挨拶をしよう」というテーマで集会を持つ。集会を持って、前に出てきて、子ども達が劇をやります。例えば、挨拶をすることによって、うまく遊びに入れてもらえる例と、挨拶をしないことによって、なかなかうまく人間関係がとれないというような例。これも実際に1時間かけてやってみて、1年生から4年生、全員が活動して、みんなで集会を持って、学級へ戻って話し合ってくださいまでで、1時間持つ。これも一つの「道徳」と考えてやっています。

最近よく、受け売りのになることが多いのですが、環境問題ということで、Team でそれぞれ考えてやってみたり。一番近々で見たのは、セカンダリーという小5から中2のところでやって、この前、面白いなと思って見ていたのは、1学期に子ども達が教科のアンケートをとりました。1学期に教科のアンケートをとって、1学期の終わりに担当の教員と Team の代表者と

教科についての話し合いを持った。それを Team に返してはいるのですが、さて、なかなかそうはいっても、うまく燃えてこない、成立しないような授業もある。どうするかということで、Team で話し合っている様子を先日見ました。やはり面白いですね。

例えば、ある Team に行ったら、そこは1学期から Team カラーはオレンジで、オレンジのシャワーをかなり浴びられている。つまり、やったアンケートは全部、教室掲示の中で子ども達に返して行って、子ども達はそれをちゃんと読んでいます。読んでいるなあということがよくわかるような「道徳」の時間を教科授業とともにつくっていかうということで話をしている状態。

あるいは、隣のクラスに行きますと、実際に学習してみようよ、言葉でなくて、とにかく学習してみようといっ、10分間ぐらい学習を試してみる。やはり僕達はやればできるじゃないという体験をもとに、そこから話を進めていく。なかなか面白い内容です。

それができるのはなぜかと考えたときに、うちの場合、Team 合宿ということで4月にスタートします。Team 合宿というのは、勉強合宿です。プライマリーはやりません。セカンダリー、あるいは学校として単位でいうと、高校生の最後は、学校全体でずうっと年間合宿をしています。Team で合宿をする。うちは4月に行っています。総合部は4月にその合宿を行って、2泊3日です。学年が上がると長くなって、神戸の勉強合宿もあるのですが、総合部の年齢のときには、学内での勉強合宿で4月、スタートします。勉強するだけです。普通の1日が終わって、子ども達は宿泊施設に移動して、そこからまた新しい夜の学習が始まる。子ども達は何を思っているかわかりませんが、非常に楽しいと言って学習しています。

その中には、当然、5年生から中2という差がありますから、同じことをやるときもあれば、結果として学び合いになるときもあります。中2は小5に教えたり小6に教えたりするのが楽し

そうです。あるいは、小5、小6も、中1、中2のお兄さん、お姉さんに質問をして答えてもらうのがうれしそうです。もともとそういうことが好きなかもしれませんが、楽しく勉強合宿でスタートします。

そして、Team の学習会というのを、これは適時、Team 担任の判断でやっています。今のところ、九つある Team のうち、Team の学習会を開いているのは3Team だけです。そういうことが何となくできている形をもう1回、「道徳」の時間の最初の10分でやってみようか。そうすると、僕達できるじゃない。でも、できていない授業もあるのだよねという話にしてい。否定するのではなくて、肯定的な面を出しながら、「道徳」の時間を進める。

ある Team に行ったら、「表現」を取り入れています。「表現」というのは、例えばですが、子ども達に「この授業は、言葉にするとどういう感じ」「こそこそそだよ」「わさわさわさだよ」と、子ども達はそうのように解するのです。それをベースにして、小さなショート劇をその場でつくっていく。つくり込む中で、「道徳」の時間として展開していく。

そういうのが意外とできるのはなぜかという、話が十把一絡げになってわかりにくい部分があると思いますが、Team で「表現」という時間をつくっています。これは年間を通じてつくっています。プライマリーもセカンダリーも、一つの Team で一つの演劇を—今、演劇と限定しています。演劇をつくる。脚本も自分達でとりあえずは最低限つくる。もちろん、あるものをアレンジしてもいい。舞台も自分達でつくる。衣装も自分達で考える。監督も自分達の中から選ぶ。全部自分達でやります。

劇自体はそんなに大したことない。観る人が観れば、「何だ、これは。これできちんと教育していると言えるのか」と言われるくらいの程度です。けども、子ども達がどこかで光り輝いていて、かつ自分達でつくり出すから、責任はあるし、意欲は十分あるのです。

そういう「表現」という時間を1年間通じてや

って、演劇のプロに来てもらってやってもらったり最初の頃はしながら、先生方も演劇集団がやる指導の練習をやってもらいながら、最近は自分達でやっていますが、そういう形で体験的にやってみる。子ども達と投げて返して、投げて返してというようなことを日常的にやっている。

やっていると、それを教科に戻したときにも、何とかついてくる。これを言葉で表現してみようぜ、あるいは前に出てきて「君、何々先生の役で、最初の2分やってみてよ。どんな授業なの？」、そうすると、その子どもが始める。周りからやいのやいの入るわけです。「そんなじゃないだろう」と。そのような「道徳」を展開しているクラスもある。

もう一つのクラスを覗いてみると、これは数学をやっているのです。数学をやっているというのは何かというと、子ども達からどんどん意見を出してもらう。「先生、あの授業、全然うるさい」「みんな好き放題しゃべっているよ」と言うと、教員のほうで、「そうか。でも、そうするとあれだな、わかったことが一つあるね。緊張してしまって、誰も何も一言も発しないような、そんな授業ではないということだけは、ここでみんなわかったね」なんて言いながら、少しずつ論理展開を筋立てて子ども達に持っていくというようなことをすると、様々な道徳的なアレンジがあるわけです。そのようなTeamの動き、「Team 道徳」という形で動かしている時間があります。

「Team 体育」というのをやっています。Teamで体育をやる。担任が体育をやります。そうすると、委員会活動と結びつきながら、面白い展開があります。例えば、廊下を走らないということをこちらからアナウンスするのではなくて、子ども達が廊下を走らないためには何をしたらいいだろうということを考える。考えると、例えば廊下に造形物をつくって置けば、走りにくくなるだろうという発想が出てくる。あるいは、Team 対抗の何々大会、スポーツ大会みたいなのを企画して、実行させてくれよと来る。

「よし、わかった。やってみようね」という話をする。

どういことが起こるかということ、外で異学年年齢で戦う集団になって、単純なことでいいですよ、例えば大縄跳び、そういうことに熱中する。当然、中2や中1は勝ちたい。小3、小4も勝ちたい。小1、小2を小5、小6を鍛えなければならない。けれども、うかうかしていると、小5、小6のほうが上というよりも、小2だって小4よりすごい子は何人もいない。

結局、走らないようにしようではなくて、外で大縄跳び大会をやりましょうというのが、中でぶつかる可能性を限りなく低くする方法だということで、子ども達が誘導してくれる。それに我々が乗っかっていく。このような形で、例えば委員会と「Team 体育」が融合して、学年の大きな動きになっていく。「すごいね、君達」というような形。これがまた集会につながる。もちろん「Team の時間」というのは持っています。「表現」の時間があって、「Team 道徳」があって、Team でやる「パーソナル」という時間を持っています。

2. 自ら学ぶ力を育成する「パーソナルの時間」

「パーソナル」という時間は、子ども達が小1からずっと自分達で、最初は4時間やっていましたが、教科のほうからの突き上げも厳しくて、今、2時間になっていますが、2時間、自分で学習を組み立てるという時間として持っています。

これも開校時に、幾つかの大学を一生懸命回らせてもらいました。トップと言われている幾つかの大学に行って、無理して教授にお会いする時間をつくっていただいて、「いやあ、自分達は新しい学校をつくろうと思っているのですが、先生だったらどういう時間をつくれますか」と、何人もの方に聞きました。トップ校でもこう言いました。つまり、我々のところに来ているのは、情報処理の力はすごい、テストを出せば各校のトップの子ども達が来ています。でも、自分で問題を立てることができないのです。こ

の傾向が各大学、共通でした。どうしたらいいだろう。思い切って、時間を子ども達に投げてみる。計画のところから、全部あなたが考えてやりなさい。何をやってもいいのですと言って、始めます。

最初の年は、普通これは反対されてできないのですが、小1から小5の同時募集で、複学年募集に成功しました。埼玉の淑徳のカワゴエ先生などに本当にお世話になって、いろいろなところの反対もあったのですが、教育委員会も全部回って、自分達は異学年齢をやりたいのだ、ぜひお願いしたいということで、結局、時間がかかりましたが、ようやく議会を通過して、みんなオーケーだということになったので、1年から5年の複学年の同時募集をしました。最初は面白かったです、1年生から5年生へ行くわけです。

何でそんな話をしたかという、一番パートナーができなかった学年が5年生なのです。4年生でのパートナーなんて言われても、どうしようもなかったです。「先生、どうしたらいいの。何したらいいの」と。一番できたのは、新1年生です。新1年生が先生です。見てこいと。君達は、与えられて何かやるとか、まとめるとか、問題を解くとか、そういうことはできるけれども、見ろと。1年生達は勝手にやっているのです。外で遊んでいる子もいれば、本を読んで読書会をやっている子もいれば、何か物をつくっている子もいれば、お父さんお母さんがつくってくれた問題をやっている子もいれば、英語が好きだという子もいる。

小1から5時間、英語の時間を持っています。オール・ネイティブの時間。小5から6時間ですが、小6からは3時間、3時間です。3時間ネイティブ、3時間日本人教師、そのうちの1時間は日本人教師指導ですから、オールでいうと4対2、2時間ネイティブがセカンダリー。プライマリーの5時間はオール・ネイティブです。3時間がセマンティック・ユニットといって、テーマ学習。あとの2時間はアートとミュージック、TTです。ネイティブと音楽の先生、ネイティブと美術の先生、それで5時間やっている。そうい

うことで、英語の学習をしようという集団ができる。ちょっと大きくなると、数検集団ができる。漢検の集団ができる。様々な集団がそれぞれ自分で勝手なことをやっている。

ただし、計画書は担任のところへ集約される。そして実行して、チェックしてということです。中には、小1からそんなことをやるのかと。家庭に迷惑をかけるではないかとか、いろいろなこともありましたが、それぞれ Team でこなして、自分達の「パーソナル」をつくっている。

セカンダリーになると、それが探究という形になります。恐らく先生方のところでも盛んにやっている部分だと思いますが、探究の時間があります。自分でテーマを決めて、1時間探究を重ねて、そして中間発表から、最後は製本まで持っていくというところへ、「パーソナル」の時間が収斂されていく。

つまり、Team という時間の中で学ぶものはものすごくたくさんあるというのは、やってみるとよくわかります。子ども達がどういうふう孤立化しているかというのが、すごく見えてくるのです。我々が当たり前だと思っていることが、既に当たり前ではなくなっているということです。必要な経験をしていない。例えば、こういう経験をしていない子は、徹底的にだめです。逆説的になりますが、「入れて」と言って、「ダメ」と言われたことがない人が増えているのです、端的に言うと。そういう子ってこれから何を学ぶかといったら、ほぼ絶望的です。そういう経験をしていない子が一体何を学んで、どういうことになっていくかというのは目に見えている。

面白いのは、小1あるいは遅くとも小5ぐらいから、そういう経験をたくさんさせてあげないといけないと思います。何かをやればトラブるわけです。誰かが何かをやりたいと思えば、トラブります。問題が発生するに決まっている。例えば劇をつくるといったって、40人の思いが違う。小1から「リーダーズシアター」という形で、音読劇をやっています。かなり丁寧に1年かけて、「言葉」ということでテーマ学習と

してやっていますので、小1でもなかなか手強い。何かやろうと思っても問題が常に発生する装置になっています。いろいろな場面がありますから、それを一つ一つ解決していかなければならないとなっていくと、大変ですが、保護者の方々の理解をなかなか得られない部分もあるけれども、そういうことで過ごしていくと、何かいい形のものにつながってくるのかなという感じは持っています。開智の「道徳」という価値観です。

だいぶお疲れでしょうから、学校が違う方と、後ろの方でも結構ですが、ペアをつくっていただければと思います。隣の方で結構です、自己紹介をしてみてください。もしかしたら、時間が経っていますが、初めての方で、まだお話をしたことがないとしたら、3人でも結構です、隣の方とちょこちょこという形で、「ふだんはこんな授業を展開している那須野です」と。私でしたら、「何回研究授業をやっても、おまえの授業は遊びが多過ぎて話にならないと言われていた那須野です」、この一言で結構でございます。お疲れの場合はもちろんやっていただかなくて結構です。隣の方とアイコンタクトがもとれたら、あるいは中心になっている方は、指導されている方だと思います。「こんな指導をした何々です」と一声かけてもらえませんか。二人顔を見合わせていただいて、一言で結構です。両方やっていただきたいのですが、まずお一方、こういう形でやっていただけるとありがたいです。ちょっと時間をとります。

ありがとうございました。こんな授業をやっているということを本当はアピールして、三つぐらい挙げてもらって、「私の授業はこんな授業だ」と、そこでインタビューをとって、「こういう授業ですよ」、ワーンというふうに持っていきたいところですが、ここは責任取っていただきまして、どんなお話をされたでしょうか。

○受講者 教師としての姿勢はどうかなというのを、私は確認しました。

○那須野 ありがとうございます。

代表して一声いただきましたが、自分の教師としての姿勢をある言葉にして発してくれたんですが、何となくわかるのです、ちょっと見て、話をちょっとしただけで。ああ、魅力的な人だな、ということがすぐわかると思うのです。よく子ども達にも、実際朗読をやるときにも、正解はもちろんないです。正解なんかあるわけはありませんね。またこの時代ですし。そうすると、子ども達というのは意外と応えてくれる。

例えば、今のペアで、今度は逆に、ここ3カ月以内で、管理職の先生は、担当の教員の先生を褒めたことについて、教員の皆様は、教務を中心として学校の中核の皆様だと思いますが、子どもを褒めたことについて、今のペアの方に少しお話しただけませんか。

ペアの方は、「そうですか」と黙って聞いてあげてください。「それはね」とか途中で言わないで、「あ、そうですか」とにこやかに聞いていただく。子どもを褒めたら、これはたぶん得意だと思いますので、10や20ではないでしょう。そんなことはないですよ。私も褒めたことと言われると、あれっ、ぼくは褒めたかな、ああ、きのう褒めたなと思い出しますね。

きのう、新聞づくりを5年生がやっていました、5年生が新聞をつくるのですが、かなり本格的につくるのです。大判でほぼ現物と同じ形で全員でつくります。ある会社に行って広告をとってくる。パワーポイントでプレゼンをつかって、企業に行って広告をとってくるのです、小学校5年生です。5,000円です。結構本気になるって、相手にしてくれることが私の出している条件です。相手に失礼にならないように、小5だからではなくて、一流の企業へ行って、その営業担当が相手にしてくれることをやってこいということだけ指示しています。結構やりやすいよ。すごいパワーポイントをつくっています。近くに東武動物公園というのがあるのですが、そこへ行って、「この時期からこの期間まで、子ども達は無料というのを勝ち取ってきた」といつてくるのですが、それは相手の営業の一つ

の手段だよねと、そういうこともあります。

あるいは、楽天という企業に行って、「楽天」は、公用語が英語ですから英語でプレゼンをするという感じでやっています。大体、成績中位クラスの子が、「やりたい、やりたい」という子が多いのですが、その子達が英語でプレゼンにいく。プレゼンにいて懸命にやりきるのですが、向こうが本気になって英語で返してくると、答えられない。でも、その子達は間違いなくこれから伸びますよね。その悔しさったらないでしょう。自分が一生懸命やっていて、やっと相手にしてくれて英語で返してくれた、それに答えられなかった私って何？という問題提起は、かなり根深く突きつけられていますから、その子達は間違いなく伸びると思います。

そういうことでいくと、最近褒めたのは、一昨日の朝、子どもが新聞記事の取材だといって自分のところに訪ねてきて、「開智の建築について10項目質問があります。お答えください」といって、10項目話しました。きちんとした態度で、考えもまとまっていて、質問の意味もよくわかりましたので、「私はあなたを尊敬します。この時間を共有できたことをとてもありがたいと思います」というふうに返すことができた。相手がすばらしかったから、だから自分も一生懸命10分間共有したけれども、君のおかげだねという形で、褒めたといえ褒めました。

さて、皆様方、先ほどの反対になっていただいて、ここ3カ月以内に生徒さん、あるいは担当の先生に「ありがとう」と言った、あるいは褒めていただいたことがありますかということ、少しお話しいただけますでしょうか。これも45秒程度とりたいと思います。

ご協力ありがとうございます。教員というのは、飲み会などで見ていて、いつも、この人達はすごいと思う瞬間があって、それは果てしない物語なのですよね。皆さんそうでしょうが、教員の飲み会って、子どもの話題でずうっとしゃべっていますね。これはすごい。これはもう能力ですね。

保護者のほうからよくクレームがあったりすると、私、クレーム担当者ですで行って話をするのですが、「先生達はすごいよ、と。皆さんのお子さんのことで朝まで話す。わかりますかという気持ちで、すごく尊敬しているのです。たぶんこんなことを話し出すと、また止まらなくなってしまうので、一言。申しわけありません、前にいる方。

○受講者 私は普段の授業でやった小テストで、やさぐれていた子達がきちんと満点をとったので、それを授業中に褒めたという話をしました。

○那須野 満点をとって褒められたら、またやろうかなと、こういうことだと思うのです。そうやって話しているときに、「ああ、そう」と聞いてもらえるのは、すごくうれしいことのようにですね。

子ども達にもいろいろな形で話をしていますと、「何かほかほかした気持ちになったね」と話をするのです。「道徳」のときは、結局、何が正解かというのは一切ありませんよね。君達もそういう気持ちになって友達のことを考えているあなたがいるということ、このことが最高価値なのだ、と。すべて大体それでやっています。そうでないと、意欲、好奇心というのは生まれてくるはずがないということです。

重点6項目ということで、うちは全部これにつながっていると思っている項目があります。

一つは、意欲、好奇心を持つということです。自己肯定観をしっかり持ってくださいということで、ずっとやっています。開校8年ですが、禁止事項等をこちら側から出したことは1回もありません。それはどのように工夫しても、こちらの都合になります。私としてはこうしてくれたらありがたいとか、そういうことはいっぱいあります。100でも200でも挙げろと言われてたら挙げられるぐらい、いっぱいあります。こうしてくれたらいい、こうしてくれたらいい…。でも、それは大人の都合だ。こちらから出さないということを、何を言われても通しています。

「開智というのは放任じゃないの」「しつけ

をしないのではないの」と言われてもいいのですか。しつけなんかこちらが踏み込んでいいのですか。そうではないですよ。見通しを持って、子ども達をどういう形で信じるかということについては、いろいろな方策があるけれども、しつけを学校は、何をしたいというんですか、という感じで、反対はありますが、意欲、好奇心が出てくる場所はそういうところでしかないでしょうという形でやっています。

それから、脳の機能を高めるというのが、うちのメインテーマです。脳の機能を高めるためには、一つはトレーニングがあると思います。あると思いますが、脳の機能を最高に高める場所というのは、これは全教員が一致してくれというふうにお願いしています。それはトラブったときです。トラブったときしか本当には伸びない。これはなかなか難しいです。今もたくさんトラブっています。

ややもすると、トラブると誰かのせいにしたくなったり、分析したくなったり、これは親が問題があるからだ、あるいは教師の問題があるからだ、あるいは社会全体がこういう動きであるからだ、システムがこうだからだ。それぞれに正しい分析なのかもしれません。しかし、それは私達に最終的には返ってくる。何よりも子ども達がどうやって受けとめるか。そのためだけに我々はいるのでしょう。それが脳の機能を高める最高価値だということで、トラブルはウェルカムということで、失敗してということを限りなく言っています。

あとは思考、推論の仕方ということです。これはかなり中心のテーマですが、やっています。何をやっているかという、うちは学年というのがものすごく薄い学校です。普通の学校は学年で回っています。私は公立でやっていて、公立が一番そうだったのですが、学年が学校みたいなものです。学年主任がいて、その主任がしっかりしていて、構成員の中に2人優れた人がいれば、その学年は大丈夫。逆は、とんでもない1年になるのです、子どもにとって。そのくらい学年で動いているというのが一般的な学校

のあり方だということで過ごしてきました。自分も学年を持っていますし、学年でいろいろなことをやるのが楽しかったし、先生方と話をしたり、計画したり、実行したりするのが楽しかった。

でも、うちは学年は非常に薄いです。Team、Team、とにかく Team でやっている。Team が窓口ですという形で、担任のところ、そこが一番大きいですね。

3. フィールドワーク・体験テーマ・探究テーマ

学年というのは、極端なことを言うと、やるのは二つだけです。フィールドワークとテーマ学習です。これは非常に珍しい例だと自分では思っていますが、12年間一貫してテーマ学習を持っています。1年生は「生活」。これは今、「言葉」ということに重きを置いています。「リーダーズシアター」という朗読劇。この朗読劇は朗読で構成する劇ですから、受け手の側がやり手の側よりもしっかりしていないと、成立しない劇です。なぜかという、言葉だけで全部やる。「おむすび、ころころ」と言ったら、全員が「ころころ」とやらないで成立しないという意味で、想像力で成立させるような劇だと思っていますが、それを1年間かけてやっています。

2年生のときには、「遊び」という形で1年間取り組んでいます。「ネイチャーゲーム」ということで、これは教えてもらいながらですが。これもそうですが、子ども達は遊んでいないです。つまり、遊びの中には工夫というようなもののすべてがありましたね、私達のときには。例えば、遊びを楽しく成立させるためだったら何でもやりましたね、遊びの中で。自分が楽しくなるためには、相手との力の差があればハンディキャップをつけてでも、「僕は片足けんけんがいいから」とか、様々な工夫をして、とにかく自分が楽しくなるためには何でもやった。でも、子ども達は意外と本当には遊んでいない。大問題です。

論理矛盾ですが、「遊びを、さあ、やろう」と言っているわけです。その時点で、本来ダメ

です。いいか悪いかといったら、そんな論理矛盾はないです。遊びというのは、「さあ、遊ぼう」と言って遊ぶわけではなくて、誰がトップではなくて、権力関係も全くなくて、自由で、だから遊びで。最終的には、あなたに責任があると言われるだけ。これが遊びだと思います。

こうなったら論理矛盾だろうが何だろうが、遊び。やたらな遊びを自分達で考えて、何もないところで遊ぶ。遊べないのだったら、ネイチャーゲームでその協会の方々に来てもらって、最初是一緒に遊んでもらって、そこからネイチャーゲームで、とにかく遊ぶ。2年のときに出かけるので、雪の世界で遊ぼうぜといって、自分達で全部遊びを企画して、それを持って出かけるのです。めちゃくちゃな遊びですが、遊びを考えて。3年は米づくりということでやっています。裏の水田を借りて、農家の方と一緒に米づくり。4年生のときには、物づくり。何か物をつくるということで。物づくりで成立してきた国ですから。物をつくるということの中には、すべてがありますからね。

自分が何者かということ、その限界みたいなものは、物づくりから知る人が多いと思います。私は、すごく時間をかけて戦車のプラモデルをつくって、スイッチを入れて動かなかったとき、そのとき自分が何者かということを実際に知りました。ああ、僕って救いようのない不器用なやつなんだ、じゃ、どうして生きるか、ということこそから考えるのです。そういうことってあって、自分と向き合うということが、手作業で様々なものをつくり込んでいくことで、初めて自分が気づく。そういう機会が本当になくなってしまいました。これは大変なことだということで、物づくりを今やっています。なかなか難しいですが、とにかく手で物をつくる。

5年のときには、新聞。売れる新聞をつくる。今、100円で売っています。大体100円ぐらいの価値はあるかなと。広告もとりにいって、時々断られるのが面白い。丁寧に断ってくれる。つまり、本気で相手にしてくれるということです。だから、僕は褒めてあげます。「よーし。そこ

までやって断られたのは、どうだ、相手の営業の担当のどこが出てきた」「営業部長さんが出てきてくれました」「そうか、部長が来てくれたか。よかったな。断られて何ぼだ」というような新聞をつくっています。

6年のときには、テーマが「交流」ということで、自分達で交流のテーマを探します。年によっていろいろ違います。地域づくりの年もあるれば、とにかく交流であればいいということでやっています。新聞から交流を探してくるグループ、交流について考えるグループ。

今、一番できていないのは、隣の子と交流ができない。隣の子と交流ができないのだったら、どうやって「私達」という世界に行けるのですか。どうやって「全」という世界に行けるのですか。これは行けるはずがない。何年かして隣にイスラム圏の人が住んだら、どうするつもりだという話をよくしています。そんな遠い未来ではないのだよ。その隣の同質のある異質を理解できなくて、本当の異質をどうやって理解する自分が成立するかということを、がんがん、やいのやいの言っています。6年は「交流」です。

7年は、「仕事」という形で一つのグループをつくってやっています。仕事を通じて考えようというワークをしています。今、一番面白いところです。つまり、今までは何か仕事があって、それに対して自分を適応させるということで何とかしのいだけれども、これから違うでしょう、と。これから世の中をつくっていく仕事って、何？そういう一番面白いところにいるのだから、それをやらない手はない。

学内の仕事に目を向けて、お金がない学校でするので、できるだけみんなでやろうやと。直すところはみんなで直そう。ペンキ塗るところはみんなで塗ろう、そういう仕事を探せ、実行しろというグループをお願いしています。

もう一つ、今年は、8年生。8年で、最初の年の1年生が出ていく年ですので、一貫部と合流する年になります。合流に向けて全精力を注いでいくというグループ。その中心には3つぐら

いのテーマ。もう一つは、次の年、フィールドワークでどこへ行くかを研究する地域探究というグループ。7年生は3.5くらいの比率でやってもらっています。8年生は探究の中間まとめという形の学年ごとのテーマ学習とフィールドワーク。

1年生は、1泊でとにかくお泊まり。自分の役割を果たす。2年は2泊で雪の世界へ行って雪の遊びを考える。3年、5年、7年は野外活動。これは大学を回っていろいろと聞いて、「先生だったら学校で何をやりますか」と聞いたときに、これだなと思った答えはこうでした。

「あなた方、外へ出て行くでしょう」「はい。4泊で考えてください。予定調和的にやるのだったら、やめなさい。全く予定調和のない、ちょっと怖いけれども、子ども達に全部放り投げて、1日過ごさせるという覚悟があるのだったら、野外活動がいい。外へ出て行って、1日自分達で企画して、失敗して、こうでもないああでもないといって、やいやいやってくだされば」と言われて、「わかりました。思い切ってやってみます」と言ってやり出したのが、3、5、7。都合3回の野外活動です。全部自分達で準備して、テントも張って、食材も考えて、コンテストをやって、まき割りから全部自分達で準備して、考えて行って失敗する、こういうことをやっています。

自分がやってきたのはどちらかというと、「早くしろ、飯食えなくなるぞ」とか、あるいは飯づくりで遊んでいる子に、「ふざけてんじゃない」と文句垂れてみたり説教してみたり、そういう野外の活動が多かったのです。今はかなり子ども達が自分達でやっている姿を追っています。

もちろん、危ないときには係の先生だけでは足りませんので、フィールドワークの得意な方の集団にちょっと手助けしていただいてやってもらっています。特に3年生は、かなりドウジンのところですので、湖にこぎ出そうかといって「オー」なんて言っていますが、こぎ出して帰ってこれないと大変なことになりますので、

ちゃんとシフトは引いて、その中で大いにやってもらったりしています。

4年生は農業体験ということで、ある地域に出かけて行って、とにかくそっちの爺ちゃん婆ちゃん、おばちゃんおじちゃんと触れ合う。民宿ですから、民宿の方々には、こうお願いしています。「自分の子どもだと思って、何でも言ってください。めちゃくちゃ悪いことをしたら怒ってください」。今年あたりはかなり面白かったようです。爺ちゃん婆ちゃんなり、父ちゃん母ちゃんというのは、結局、自分の子どもには何を言っても受け入れてもらえないみたいです。何も聞いてくれない。それを突然あらわれた子ども達が、「へえっ、おい」って聞いてくれるので、かなり長い時間付き合わされたとお爺ちゃん、お酒が回って大変だったという話もあるぐらいで。交流ができる。そんな形で4年はやっています。

6年は、海。とにかく海の生き物と対話するというので、面白いです。自分が行って見つけてきたところで一番面白かったのは、海に365日出ていっている自然の探究者というお爺ちゃんがいて、その人と知り合って、「ああ、ここはこいや」「あ、そうか。絶対来ますよ」といって。でも、隣には東大の理科学研究施設が併設してあって、そこにもお邪魔したいといっって、そこにも行った。

東大の先生は、「ああ、あのお爺ちゃんね。どうしようもないね」と言うわけです。爺ちゃんに聞いたら、「ああ、ダメダメ。あんな東大なんかダメ」と言うわけです。子ども達はそのどっちも体験するのです。どっちがいいと聞いたら、みんなは「お爺ちゃん」といいます。なぜかという、その場でウニをむいてくれた。食べさせてくれるということで、これは圧倒的にお爺ちゃんの勝利だったのですが。

でも、そういう対極にある研究者のところでお互いに話ができたり、あるいは質問できたりする時間がとれる。海というのは非常にいい教材です。山に比べると非常に探究が楽しくできます。

8年は、自分達で企画する旅です。北海道に行こうが、沖縄に行こうが、海を渡ろうがそれはいいけれども、説得する材料をきちんと準備してくれという形をお願いをして、つくっています。

学年はだから非常に薄いです。その二つしかないです。週2時間しかありません。その中で問題も発生することもあります。うちは学年は薄くやっています。そのかわり「Team の時間」というのを手厚くやって、異学年齢での活動を徹底して保証している。それが必ずや学力を伸ばすと信じています。

先ほど申し上げましたように、これで4・4ときて、中高一貫の中3と合流します。非常に心配していました。何を心配していたかということ、合流したときの学力差です。言ったら悪いですが、見かけ上の学力差はあるに違いないと思っています。なぜかということ、うちに来る子ども達というのは、大体小学校4年生から塾へ行って勉強しているのです。4、5、6、少なくとも5年、6年と徹底して、お父さんお母さんと食事をしなくても塾に行きたくて徹底してやってきている子ども達です。それに対してうちは、外へは行くわ、一応勉強はやっていますが、解法のための何とかというのはやっていませんので、圧倒的に見かけ上の学力は普通そっちが上で、引け目を感じてしまうと思っていたのですが、意外とそうではない。もちろんテストをやると、一貫部に来ている子どものほうが上のことが多いです。

けれども、成績上位者、上位何名とやると、トップのほうは総合部出身者ということが多いです。今年も1位と3位、4位あたりは、総合部出身者で埋めています。非常に力強い学力というのですかね。いろいろなタイプの子がいます。とにかく家庭科も全部完璧でなければ嫌という女の子とか、やや適当な男の子とか、いろいろいますが、そういう形で学力を保証していく、子どもの伸びを保証していくということでしょう、これからですが、頑張ってるっていかねければという責任を痛感しています。

Team という形で、私どもとしてはベースをつくって、そして個に焦点を当てています。何年何月に生まれたというのは変えられないですが、現住所というのは恐らく幾らでも変わっていくし、近未来的には何年生だからこのことを習うとかいうことは、恐らくなくなっていくのではないかと。私達はトライしましたが、それは認めていただけませんでした。それはダメだよ、勝手な飛び級みたいなことは構造的に許されませんよと、その辺は認めていただいておりますが、やれることはやっています。英語なんていうのは全然関係ないわけですから、そのあたりでかなりやれることを進めていこうかなと思っています。何か成立してきたときにあわせていように、一番根源的なことから物を考えていく。普通に考えて、どう見てもこの学年の子よりも下の子のほうが論理構成が上だ、理解能力が非常に高いということも間々ある。だったら、そういうふうに応えてあげないといけないということで研究を重ねています。

あと、うちの面白いところは、自分が経験した中で言いますと、ここまで自分達で運動会をつくっている学校を知らない。運動会自体は、見に来ると、何だ、これは、というぐらいしょぼいです。見ている人は面白くないのではないかなと思うぐらい、しょぼい。けれども、最初から最後まで全部自分達で、今年は Team によって担当を替えました。この Team は会場の準備、この Team は接待、この Team は何々、全部 Team で確定してやっています。1年生から8年生までが、Team で燃えていくというようなことをやっている。全部自分達でやっている。そのために運動会があるのだらうと思っています。

もう一つ、開智発表会というのがあるのですが、これも辛気臭いといえば辛気臭いです。おとなしいといえばおとなしい、派手さがなくて地味といえば地味。でも、そこで準備している1年間の学びを集約して、みんなに知らせたいんだ、見てほしいんだ、という気持ちは、子どもの中

では非常に熱いものがある。これが質的に一步步上がっていく唯一の方法だろうと思います。つまり、何かがあって、これが突然飛躍するということはないだろう。地味だと言われようが何だと言われようが、指導しないとわれようが、とにかく子ども達が自分達でつくっていく正味のものを信頼して教育活動を地道に進めていくということ以外、自分達の進む道はないのだろうと思ってやっています。

4. 一人一人の学力を最大に伸ばす「習熟度グループ授業」

習熟度みたいなこともやっています。習熟度で今トライしているのは、自分の目の前にいる子どもに適する視点をつくりましょうというのを数年前から徹底してやっています。ですから、その集団によって全部テストが違う。評価もその集団でやってくれと言っています。ですから、一番下のクラスの評価点でいうと、10段階の7と、一番上のクラスの4という子が生じてしまうということもあえてやっています。トータルとしては、5段階に直したときに、あまり激しく下にならないようには気をつけてねぐらいは言っていますが、思い切ってそれぞれの集団に対して最適なテストと言っています。それがよしんば教科書レベルになろうが、やむなしと言っています。

今、ミニマムはあるけれども、それにこだわっていたら、その子がつらкаろう。そういう集団があるのだったら教科書レベルでいってくれ、そしてそれを評価してくれ、と。その子が伸びる時間というのは、もしかしたら高1の夏休みかもしれないではないか。そのときに困らなければいい。今、できる・できないということよりも、そういう必要になったらそれをやってくださいということで、先生方は大変でしょうけれども、それぞれが全部自分の担当のテストをつくり、そして自分の評価を相手に伝え、これは保護者に納得してもらわないととんでもないことになりますので保護者と連絡をとり、こういうことですよということで、今、始めてい

ます。全教科というのはなかなか難しいので、今やっているのは数学だけです。

習熟度自体はなかなか難しいですね。つまり、目的が単一であって、極端な話、中学受験のトップ層をさらに3分割するということだったら、うまくいくに決まっていますが、学校というのはそういう場所ではありませんので、当然ながら習熟度というのは問題を抱えて、試行錯誤をして、ただひたすら繰り返して、どんなうまい方法があるのかな、何かないような気もして、難しいですが、とにかくやるのだということで、子どもに最適なものをということでやっています。

結果的に、うちが投げている平均が、普通示されているもの掛ける1.25だったり、1.45だったりすればいいなという程度のことしか今はできていないのが実態です。補習もかなり強烈に一貫部ではやっています。

うちの一番の特徴というのは、上位層ほど塾へ行っていない。それで今出している結果だというのは、これは結構——自分は反対していたのです。つまり、面倒を見過ぎるというのはよくないとずっと主張していたのですが、結果としては徹底して面倒を見て、上位層がずっとくっついてきて、夜、一緒に学習して、そして自分の目指したトップ校に入っていくという姿を見ていると、自分のやっていたことは、もしかしたら半分以上間違いだったのかな、そんなもの自分でやるものだ、そのためにやっているのだと言っていたのが、今の現状から言う間違いだったなと深く反省しています。

先生方が朝晩、徹底して指導を繰り返している。学校として何かできる子をねらって引っ張り上げるということは全くやっていません。絶対やると思ったら、やる。自習室はずっと開いていますし、夜も8時、9時まで、残りたい子はやっている。休みのときも来ている。みんなで実績を上げていく。薬学系もかなり手厚くなってくるのではないかと思います。早慶も非常に手厚くなってきました。そういうことで学校全体が伸びていく。

さらに、本物の学力は何かということで突き詰めていこうというのが、学校の姿勢です。きついですが、本物はどこにあるのだということで、徹底してみんなで探求していければいいなと思っています。

4・4・4ということで言うと、4・4・4のよさというのは、途中で、音が好きだと思ったら、グーッと音の世界へ入っていつてしまうことが許されることが一番の魅力だと思っています。例えば、ゲームが好きというのだったら、いいです、それは。与えられたゲームが好きというのは、そんなことは何の意味もないでしょう。音が好き、聞くのが好きというのはいいですが、自分で音をつくるどころまでいって、あるいは自分でゲームって何だろうというところまでいって初めて意味があるとする、分断されるとなかなかそこは行けない。そんなところまで行って帰ってくる余裕はないです。高校なんて2年半ですから、そんなところへ行ってしまったら、そのまま終わりです。どんなに能力があろうとも。けども、4・4・4というのは1回ドンと好きになって、ゆっくり帰ってこれます。高1の後半、高2の初めぐらいまでに気がつけば、大体の子は何か、自分の好きなことにボカー

ンと行っても。しばらくの間、シンカイク然としてやっているわけです。必ず戻ってくるというのはわかりますね、見ていると。あ、この子は戻ってくる。そういうことが4・4・4の魅力かなと思います。

おわりに

概略を急ぎ足でお話し申し上げました。自分の感覚からすると、高校生が今本当に求めていることが、その中にあるような気がします。自分も高校が一番長いものですから、高校生が一番好きですし、やりやすいです。けども、そのところで使えるソースが、小学生や中学生からいっぱい教えてもらっているような気がします。もし今、自分があの中の高校の教師に戻れたら、あの子達にやってあげられることがもっとたくさんあったのだなということを非常に思っています。「おまえら、やっておけ」というふうに過ごしていたことのいかに多かったかということを強烈に反省している状況です。

時間のほうもちょうどいいようですので、もし何か使えることがありましたら、ぜひ使っていただければと思います。いろいろご迷惑をかけました。ありがとうございました。

講演Ⅱ

「カリキュラム開発とその評価」

筑波大学人間総合科学研究科 准教授 根 津 朋 実

はじめに

こんにちは。根津と申します。よろしくお願いします。

先ほど、名簿を拝見しました。校長先生、教頭先生、あるいは教務部長の先生、そうそうたる方々がいらっしゃいますので、むしろ私がいろいろと教えていただきたくと思いますが、1時間半おつき合い願います。

唐突ですが、模擬試験を実施したいと思えます。実は、免許更新制の講師を担当しており、そちらと本日の内容が若干重なりましたので、このような趣向を考えました。

1. 「模擬試験」

では、問題用紙と解答用紙をお配りします。時間は別途指示します。

補足しますと、免許更新制では大体この倍ぐらいの分量のものを最初にお配りし、その後で解答、解説をします。

まず試験、その後答え合わせとなりますが、行き渡りましたでしょうか。それでは今から5分、お時間を差し上げます。のちほど、A4、1枚の正答がありますので、そちらを参考資料とあわせてお配りします。

【模擬試験：問題】

問1 次の文は教育課程の定義について述べたものです。以下の問1-1、1-2に答えなさい。

教育課程とは、(①)の訳語として使われている用語である。(①)の語源は、(②)語の「④ currere」であり、もともとは、「(③)」を意味し、「人生の来歴」という意味も含んで

いた。

問1-1 ①から③にあてはまる語句を、カタカナまたは漢字で記入しなさい。

問1-2 ④の読み方をカタカナで書きなさい。

問2 以下の文は、「2008年3月に告示された学習指導要領」について述べたものです。正しい内容が書かれているすべての文の番号を、解答欄に記入しなさい。

(1) 中学校と高等学校とで、「部活動」が必修となった。

(2) 小学校5年生から、「英語活動」が必修となった。

(3) 小学校「総合的な学習の時間」は時数が削減され、1998年告示の3割以下の時数になった。

(4) 小・中・高等学校の学習指導要領が、「官報」に告示された。

(5) 中学校の内容として、イオンや二次方程式の解の公式が「復活」した。

(5分経過)

はい、時間です。ここですぐ答え合わせでもいいのですが、せっかくの機会ですので、お隣の方、あるいは前後の方とお話し合いの上、答案を良いものにしていただく時間をとります。なお、「問1」はヒントの出しようがないものもあります。「問2」、「すべての文の番号」とあるのですが、実は正しいものは一つしかありません。

では、5分差し上げますので、座席を移動したり、話し合ったりして結構ですので、口と手を動かしていただきと思います。

もちろん模擬試験ですので、いろいろ資料等をお持ちの方は、ご覧いただいても結構です。
(5分経過)

はい。ここで5分です。あと1分ほどで解説に移りたいと思います。

2. 模擬試験の解答と解説（その1：問2）

「問2」から解説をします。

まず、問題文中「以下の文は、『2008年3月に告示された学習指導要領』とは、どういうことでしょうか。今日この場には、中学校、あるいは高等学校の先生がお集りかと思います。今回の学習指導要領改訂は、オンライン版でも見られますが、冊子体の一つ大きな特徴があります。小学校版には、幼稚園教育要領と中学校学習指導要領がついています。そして中学校学習指導要領には、これも同じく幼稚園教育要領と小学校学習指導要領がついています。ところが、2008年3月には高等学校の学習指導要領がまだ出ていません。告示はもう1年後です。ですから、「2008年3月に告示された学習指導要領」とは、小学校と中学校の学習指導要領を指す、となります。高等学校の学習指導要領は、冊子体を見ますと、中学校の学習指導要領は含まれていますが、小学校は含まれていません。このように、1冊の学習指導要領の中に、関連法規等は載りますけれども、他校種の学習指導要領が含まれる形式は、あまり見ません。これが何を意味するか、となりますと、小・中・高の一貫制に結びつくだろう、と理解できます。

さて、問2の(1)番です。「中学校と高等学校とで、『部活動』が必修となった。」、これはあり得ません。教職の授業で「部活動は教育課程外」と言うと、学生は驚きます。「部活動で休日出勤しても先生の手当は安い」と話すと、もっと驚きます。高校生時代にあれほど打ち込んだ部活動が先生のボランティア精神によって支えられていた、という内幕を、生徒は理解していません。かつては部活動とクラブ活動とがあり、両者を同様に扱う時期もありましたが、今の学習指導要領や教育課程で、部活動は正課外

です。ただ、総則にごく一部、記述されています。とはいえ、必修になったわけではない。そこで(1)番は正しくない、となります。

問2の(2)番、正式な名称は「英語活動」ではありません。「外国語活動」です。学校教育法施行規則、学習指導要領でもそうですが、教科名も「外国語」で、「英語」ではありません。学習指導要領の「外国語」のところ、「指導計画の作成と内容の取扱い」に、「外国語科においては、英語を履修させることを原則とする」というただし書きがあります。英語の先生はご存知かと思います。小学校でも、「英語」ではなく、「外国語活動」といいます。しかも、これは教科ではなく、「活動」という言葉がつく。検定教科書もないわけです。新しく教科をつくるのは、国家的な大事業です。検定教科書の作成もそうですし、教員の養成は大学の課題となります。小学校の英語ですから、中学校と同様というわけにもいかないでしょう。となりますと、誰が大学で小学校の英語の授業を担当するか、そこから始めないといけません。私の憶測に過ぎませんが、将来的に、英語は小学校の一教科になる可能性が高いでしょう。ともあれ、問題文(2)の「小学校5年生から」、学年は合っていますが、「英語活動」ではない、「外国語活動」が正しい、となります。

次は(3)です。「小学校『総合的な学習の時間』は時数が削減され」、「3割以下の時数になった。」というのは、いくらなんでも減らし過ぎだろうと。大体、週あたり3コマあったものを、1コマ減らして、2コマになった。減らした1コマは、小学校5、6年生で、実質的に「外国語活動」になったともいえます。「やはり総合学習は失敗だった、時数を削るべきだ」、「詰め込みへ転換だ」等と宣伝されますが、まったく逆の見方を「総合的な学習の時間」の関係者は持つようです。よくこれだけの削減幅で済んだ、まだ時間数が残っている、という。

もうひとつ、学習指導要領には目次や並び順があります。1998年版では、「総合的な学習の時間」が目次にありませんでした。総則の中に

入っていたのです。今回、「総合的な学習の時間」が目次として独立しました。さらに、「特別活動」よりも並び順が前にきました。義務教育でいえば、学習指導要領の目次は、各教科、「道徳」、(小学校の場合「外国語活動」があるわけですが)、そして「総合的な学習の時間」、「特別活動」となります。ともかく、(3)の「小学校『総合的な学習の時間』は時数」は減ったのですが、3コマのうち1コマ減で済みましたので、「3割以下の時数になった。」というのはおかしい、となります。

(4)番は、先ほどのとおり、2008年に告示された学習指導要領は小学校と中学校だけです。高等学校の学習指導要領はまだ告示されていませんでした。「官報に告示された」という箇所は正しいですが、高等学校の学習指導要領はまだ出ていなかったのもので、全体として誤りとなります。

そして、(5)番です。「イオンや二次方程式の解の方式」、私は中学校で学んだ世代です。「復活」と書くのは少々ためらいもあります。見ようによっては、復活ではない、というお叱りを受けるかもしれませんが、(5)番は極端に間違ったことを述べたわけではない。一度消えたものがまた現れたという意味では、復活と呼べます。そこで問2の(5)は、正しいとします。

いかがでしたでしょうか。

3. 自己紹介

今、レジュメでいいますと、「0. 模擬試験」が終わったところです。「1. 自己紹介」を飛ばして、「2. 模擬試験の解答と解説」に少し入り始めています。前後しますが、自己紹介をさせていただきます。私は根津朋実という人間です、専門がカリキュラムの評価と開発ということで、今日こちらにお招きいただいたと思っています。略歴や著述等はレジュメをご覧ください。

そもそも「教育課程」と「カリキュラム」という言葉、どうして二つあるのか、そこだけご説明すれば、90分のお時間が終わる気がします。いわゆる教育内容が「教育課程」という言葉に

あたるかと思います。この分野の専門学会として、「日本カリキュラム学会」があります。この学会が発足して20年以上経ちます。創設時に、名称を「日本教育課程学会」にするか「日本カリキュラム学会」にするか、という議論があったそうです。そのとき、「カリキュラム」と「教育課程」という言葉は違う、ということで、会の名称は「教育課程」ではなく、「カリキュラム」という言葉が採用されました。その理由は、もう少し後で詳しく説明します。

4. 模擬試験の解答と解説（その2：問1）

今度は「問1」の解答と解説に移ります。答え合わせと解説です。「次の文は教育課程の定義について述べたものです。」というところですよ。

「教育課程」とは「カリキュラム」の訳語として使われている言葉です。外国語の「カリキュラム」を「教育課程」という言葉に翻訳したのは、明治の初めごろです。そのときは、主に大学の「カリキュラム」をどう日本語にするかということで、「学科課程」や「教育課程」という言葉が、翻訳としてありました。当時の英和辞典に出ています。

行政の言葉として「教育課程」という言葉が広く用いられるのは、明治よりもっと後です。戦後、最初の学習指導要領は1947年版、昭和22年版ですが、このころ「教科課程」と言っていました。どうしてこうなったかといいますと、当時は連合国に占領されていましたが、学習指導要領の中には、教科しかなかったのです。いわゆる教科外活動がないのです。

1947年、もう一つ忘れてならないのは、6・3・3制、厳密には6・3制です。以前、中央教育審議会でも9年制義務教育学校という言い方がされていましたが、今その議論は足踏みしている感じがします。小中一貫教育や、学習指導要領に異校種のものが含まれるという事情を考えると、校種間の連続性、これを接続と言いますが、接続が重視されていくのかなと。そうしたら、6・3制は時代遅れだ、という議論が出てもおか

しくない。ジュニアハイスクールと言っても、英語圏でこの制度が普遍的ではなくなっている、という状況もあります。

さて、昭和26年（1951年）、60年前ですが、ここで「教育課程」という言葉に改められます。その理由は、今で言う「特別活動」にあたる部分が入ってきたからです。そこで、教科と教科外とを併せ持つものとして「教育課程」という言葉が採用された、となります。ここからです、文部省が「教育課程」という言葉を広く使うようになったのは。でも、「カリキュラム」ではなかったのです。このころはいわゆる生活カリキュラム、経験カリキュラム全盛の時代で、実践ではカリキュラム研究が流行しました。〇〇プラン等、各種のプランが試みられた時代です。

続く1958年（昭和33年）版の学習指導要領は、連合国の占領が終わり、再独立後の初の学習指導要領です。特設「道徳」が導入された学習指導要領です。47年版、51年版は、「試案」でした。従っても従わなくてもいい、という性格の緩いものですが、58年版からそうではなくなりました。

5. カリキュラムと教育課程

次に、「カリキュラム」の訳語として使われる語ですが、行政では「教育課程」という言い方をしてきた。一方、「カリキュラム」の語源はラテ

	教育課程	カリキュラム
特 徴	行政、法律の用語。 教科と教科外活動に大別できる。	研究、実践の用語。 例：日本カリキュラム学会
範 囲	学習指導要領にもとづき、各学校が編成する。	①計画・実践・経験 ②国・地方・学校・教師・学習者の、各レベル・範囲にわたる。
重 点	計画・立案段階。	実施・評価段階。
関連語	学習指導要領、検定教科書、 ナショナル・スタンダード、 教育課程行政、教育課程実施状況調査、 等々。	学校に基礎をおくカリキュラム開発、履歴 (CV)、隠れたカリキュラム、研究開発学校制度、SSH・SELHi、等々。

ン語です。ラテン語の *currere* は「クレーレ」と読むのですが、それが「問1-1」、「問1-2」の解答です。もともと「レースコース」を意味します。

問題文中には「人生の来歴」という意味も含んでいたとありますが、今でもこの意味は残っていきまして、「履歴書」を「CV」と英語で略すのですが、「カリキュラム・ヴァイティー (*curriculum vita(e)*)」、あるいは「カリキュラム・ヴィータ」と言い、ラテン語に由来する言葉です。「ヴィータ」は、「ヴァイタル・サイン」というように、「生きる」に関する言葉です。造語ですが、ヴァイタミン、ビタミンという語もあります。生きてきた履歴、足跡、コース。「生きてきたコース」ということで、「履歴」という意味が出てきます。「カリキュラム」一語でも、「履歴」という意味がなくはないのですが。

このように、今でも「カリキュラム」という言葉には、学校で教える「教育課程」に含まれない意味がある。そこから言えるのは、「カリキュラム」は、「教育課程」という言葉よりも、指す範囲がかなり広い、ということです。二つの語の関係を説明したのが、次の表です。

表の左側から説明していきます。まず「教育課程」ですが、特徴は行政の言葉、法律の言葉であると。大まかにいいますと、文部省、文部

科学省は教育課程行政で「カリキュラム」を使わず、「教育課程」という言葉を使い続けています、大学は例外として。それは法にそう書いてあるからで、法に「カリキュラム」という言葉は見当たりません。「課程」の「課」の字は「ごんべん」です。「コース」という意味ですので、「ごんべん」の「課程」です。もう一つの特徴として、教科と教科外活動とで「教育課程」になるわけです。両輪です。教育課程という語が指す範囲とは、法的性格を持つ学習指導要領、これにもとづいて各学校が編成するもの、となります。

学習指導要領は教育課程の基準ですが、他に二つのものの基準となります。一つは検定教科書、もう一つは大学入試センター試験です。センター試験は学習指導要領に準拠するとされます。学習指導要領は「コース・オブ・スタディ（course of study）」という英語の訳で、最初は「学習指導の手引き」と訳されていたそうです。のちに法規を整備する際、「手引き」では少々格好が悪いので「要領」にした、という関係者による当時のエピソードが残っています。

「教育課程」という言葉の場合、重点は相対的に計画立案段階におかれます。記憶に新しいところでは、例の「未履修」が該当するわけです、「ペーパーの上では」という。大学の授業で、学生に「高校時代の時間割を持ってくるください」と課題を出します。すると、さっと持ってくる学生と、「母校に聞いたのですが、ちょっとそれは出せないと言われて」と言う学生がいます。どういう意味だろうと思っていたらあの騒動で、妙に納得したものです。とにかく、教育課程という言葉では、どちらかというと計画立案段階が重視される。事前チェック、という考え方です。

関連語は、学習指導要領、検定教科書。見ようによってはナショナル・スタンダード、国が決めた最低基準という見方もできます。関連する言葉として、教育課程行政があります。「教育課程実施状況調査」というものがあり、学習指導要領の定着具合を見る調査です、最近の報

道ではあまり見ませんが。どちらかというと、例の「全国学力・学習状況調査」のほうが、クローズアップされています。

さて、教育課程に比べると、「カリキュラム」という言葉はもっと範囲が広いわけです。特徴として、どちらかというと「カリキュラム」は研究、実践の言葉です。学術団体の名前も、「日本カリキュラム学会」です。カリキュラムという語が指す範囲ですが、計画段階だけではない。実践段階、あるいは経験段階まで入ってくるところが、この言葉の一つの特徴です。

昔は PDS と言っていましたが、最近聞かなくなりましたね。昔は PDS、「プラン・ドゥ・シー（Plan-Do-See）」です。最近は、「プラン・ドゥ・チェック・アクション（Plan-Do-Check-Action）」。PDCA サイクル、という言い方にしておきます。「シー」と言うと、計画して実践して、あとはぼうっと眺めている感じですので、そうではなく、ちゃんとチェックして、その後はアクションを起こしなさい、と。本によっては、アクションにかえて「インプルーブメント（改善）」とも言います。評価をしたら、何かしなさい、ちゃんと手を打ちなさい、という趣旨です。この考え方がいいかどうか、いろいろ議論はあるところですが。

このサイクルの全部に、「カリキュラム」はかかわります。まず、計画レベルの「カリキュラム」、年間指導計画レベル。次に実際に行っていること、そして評価し、どうやって改善するかという改善策、これら全部を「カリキュラム」と呼べます。幅広い言葉です。しかも表の「②」のように、国レベルのカリキュラムもあれば、地方レベルのカリキュラムもあり、学校を単位としたカリキュラムもあれば、先生の中にあるカリキュラム——教えてきた、経験から学ばれるカリキュラムもある。学習の履歴として、学習者にもカリキュラムが残るわけです。つまり、「カリキュラム」のほうが、「教育課程」という言葉よりも、範囲が広いといえます。

6. カリキュラムの関連語（1）：潜在的カリキュ

ラム (hidden curriculum)、SBCD 等

表中、「カリキュラム」の重点は、実施や評価段階のところ、先ほどの「プラン・ドゥ・チェック・アクション」で言えば、「ドゥ」から後の手続きにあります。実施して、どうだったか「チェック」し、改善する。これらを指して「カリキュラム」を使うことが多い。しかも、学習指導要領や年間指導計画には表れない部分、それらを「ヒドゥン・カリキュラム」と呼ぶ場合があります。校風や、雰囲気です。いわゆる「隠れたカリキュラム」です。「潜在的カリキュラム」と訳す場合もあります。これは、「教育課程」と訳しにくい部分です。私だけかもしれませんが、理科の先生という、一定のイメージがあります。白衣を着て云々、という感じです。同様に、数学、家庭科、国語、音楽、等々の先生。そういったイメージは、経験により育まれるもので、そこから生徒は何事かを学びます。他に、学校の立地、制服一標準服と呼ぶ学校もありますね、服装、行事や先輩後輩関係、それらも大きな影響力があります。これらは「教育課程」の中に表面化しづらいものです。これらを、「ヒドゥン・カリキュラム」と呼ぶのです。

「カリキュラム」の関連語にある、学校に基礎を置くカリキュラム開発—横文字ばかりですみません、もともと「スクール・ベースド・カリキュラム・ディベロップメント (school - based curriculum development)」という英語を日本語に訳し、ここ30数年使われてきた言葉で、頭文字で「SBCD」と略します。これは、各学校がカリキュラムの開発の主体である、という考え方です。学習指導要領に沿って検定教科書で授業を進めるだけでいいという意識では困る、という意味です。皆様には、このあたりわかりやすいところかと思います。公立の学校では、少々難しく、各学校で自前のカリキュラムを作ってくださいとなりますと、混乱します。文部科学省が専門家を集めて作った学習指導要領をしのげるわけがない、という認識が強いようです。実際には、例えば「総合的な学習の時

間」や学校行事の大部分は、「学校に基礎をおくカリキュラム開発」です。各学校独自の条件や特色を活かした教育活動は、「カリキュラム」と呼べるのです。

7. カリキュラムの関連語 (2) : 研究開発学校制度、SSH、SELHi 等

関連語の「履歴」は、先ほど説明し、「隠れたカリキュラム」も、今説明をしました。

残る関連語は、「研究開発学校制度」です。文部科学省は、次々と改革を進めているように見えますが、改革にあたって必ず基礎となる資料を作成します。「生活科」、「単位制高等学校」、「総合学科」、「中高一貫」、いずれも導入に先立ち必ず実験校を設け、報告書を求めます。「研究開発学校制度」は、その実験校の一種です。どういう制度かといいますと、学習指導要領による制約がない。研究期間の3カ年、学習指導要領を堂々と度外視してよろしい、という制度です。今は確か、最大で年数百万円の予算が使えるはずです。その制度によって、例えば新しい教科をつくるという類の実験を、10年ぐらい複数の学校で蓄積し、これらの実践を資料として、次の学習指導要領改訂に活用する、という事業です。

裏を返せば、今、研究開発学校がどういう実験をしているかを見れば、次の学習指導要領改訂の流れをある程度読めるかもしれません。もちろん、改訂に反映されない実験もあります。一ころ多かった研究課題は、脳科学でした。先ほどふれました小学校の「英語」も、この制度が基礎にあります。実験校は2パターンの「英語」があるようです。一つは活動中心、今の「外国語活動」のパターン、もう一つは完全に「教科」として「英語」を学ぶパターンです。教科書をつくって、テストして、という。他に「福祉」もあります。高等学校の「福祉」ではなく、義務教育段階の話です、小・中学校からの「福祉」。いずれは、年金制度、少子高齢化や子育て支援を扱う教科が、新たに設けられるかもしれません。そういった研究開発が取り組まれて

います。

さらに、ご関係の高等学校の先生もいらっしゃるでしょう、「スーパー・サイエンス・ハイスクール」です。SSH。これは「研究開発学校制度」を下敷きにできた制度です。「研究開発学校制度」は、ここ40年ぐらいの歴史があるのですが、SSH はだいぶ新しいです。文部省と科学技術庁が一緒になって文部科学省になったのが平成13年1月ですか、もう10年たちました。それ以降の制度です。SSH は予算規模が大きく、そのため成果の評価も厳しいと聞きます。

私の知るところでは、筑波大学附属駒場中等学校、ここが SSH です。筑駒、つくこまと略します。ここ10数年ほど、筑駒に携わっております。男子校、中高一貫で、戦後にできました。最近、SSH の潮流は、グループ学習と海外進出、国際交流です。現在は、ノーベル賞研究者を呼んで話を聞くという段階を超え、生徒が活動し、各種の学力五輪にも出場します。筑駒の生徒は数学オリンピックや化学オリンピック等の常連ですが、先生はほぼ何も教えていません。先生も、自分がよくわからないことを生徒がやっている、と言います。生徒のクラブが勝手にどんどん進めていくのです。ここが面白いところです。また、国際交流という点で、大きな予算があるならば、海外での研修や、英語で発表させるという事業も、SSH では重視されています。

SELHi (セルハイ)、「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」、これも SSH とよく似た制度です。勤務校に経験した学生がたまにいますが、どこが SELHi だったのかよくわからないという声が多いですね。SSH に比べると、通常の英語の授業の一環という実践が多いからかもしれないですが、「あまり英語をやった記憶がない」と学生が発言しますので、「でも君のところ、SELHi だったんでしょう？」という話になります。

表中に書きませんでした、近年増えているのが、「教育課程特例校」です。研究開発学校

や SSH、SELHi は予算がつくので、校数に限りがあり審査も厳しいわけですが、「教育課程特例校」は予算がつきません。特例として、学習指導要領によらない教育課程の編成のみ認められる、という制度です。これは、旧「教育特区」、構造改革特区の教育版ですね。「特区研発」(とつくけんぱつ)とも呼んでいました。旧教育特区制度の運営は、文部科学省ではなく、旧内閣府でした。主眼は構造改革ですから、規制緩和の一環です。自治体設置の学校は丸ごと認定を受ける、有名なのは東京都品川区のケース、小中一貫や「市民科」で有名です。取り組みの内容として多いのは、小学校の「英語」です、1年生、2年生から開始する。あるいは、小中一貫で新教科をつくる、という内容が目立ちます、例えば伝統芸能を教科として扱うわけです。その大半が、「総合的な学習の時間」にかえて新しい教科を設ける、というパターンです。「教育課程特例校」は義務教育の学校が多いかというと、近ごろはそうでもありません。中学校や高等学校でも認定を受ける動きがあります。

8. カリキュラム開発とその評価 (1) : 卒業生調査

カリキュラム開発といいますが、一から新しいものをつくるのもそうですが、今のカリキュラムを見直し、チェックし、アクションを起こすところから始める、という方法もあります。私は、カリキュラム評価は点検だと思っています。評価の仕事は、シンプルです。良いか悪いか、悪かったらどこを直すか、これだけです。そう言いますと、客観性はどうかという話になるのですが、どこの学校でも使える評価項目は、無難すぎてあまり意味がない。その学校ならではの「使える」評価項目のほうが、実際的です。その意味で、主観性が見直されつつあります。どこの学校でも使える評価項目は、一般的すぎる場合がある。それぞれの学校に役立つ、良さをあぶり出せる評価項目を開発し、データがあるといいのではないかと。

二つ、カリキュラム評価の方法をご紹介します

す。

一つは、先ほどお話ししました筑駒（つくこま）の話です。私が大学院生のとき、前身校含め筑駒の卒業生約7,000人、そこから標本抽出して、卒業生調査を実施しました。卒業して20、30年たっても、中高一貫校で6年、または高校から3年過ごした経験が、色濃く残るとわかります。筑駒の場合、受験勉強ばかりかというのと、そうでもないのです。卒業生が何を高く評価したか。「中だるみ」です。中学3年から高校1年にかけて無気力になって、何にもやる気がなかったけれども、そのとき焦らずじっくりやれたのがよかった、と卒業生はいうのです。生徒は高校3年生の11月まで、学校行事に参加します。受験勉強は塾でやるからいい、というのです。学校では受験勉強よりも、行事で得たものが大きいという結果でした。

また、筑駒の先生が感覚的に思っていたのは、中学から6年間いる生徒と、高校から3年間いる生徒とでは何かが違うと。お話を聞くと、必ずこの話になります。筑駒では高入（こうにゅう）や外部生と呼んでいました。中学校から6年間いる子は、「内部」という言い方でした。「内組」（うちぐみ）とも言っていました。両方の卒業生に、100点満点で駒場の教育を評価すると何点ですかと尋ねましたら、ほぼ同じで平均約80点でした。ところが、評価の理由、中身が違います。高校から入った生徒は、大学進学が目的です。中学校から来た生徒は、そうでもないのです。女の子がいないところで、好きな部活や行事に打ち込んで、6年間伸び伸び過ごせてよかった、と。だとすると、中学校からの「別学」は、重要な選択肢としてあり得るのでは、と思います。中等教育の一時的な「別学」は、一概に否定的な経験ではなく、メリットがあるかもしれない。勉強できる男子生徒の場合、共学ですと女子生徒との間でぎくしゃくするケースも見聞しますが、中高で男子しかいなければ、案外気楽に過ごせるかもしれません。関連して、筑駒は今後、別学にすべきか共学にすべきかと質問しましたら、結果はほぼ49対51、僅差だったと記憶

します。

調査からわかったのですが、卒業して1年、2年より、10年、20年と社会に出た卒業生に尋ねると、意外な結果が出る。筑駒の調査は量的に行ったのですが、特色ある取り組みをされた場合には、各世代の卒業生にお集まりいただき座談会を開く試みも、面白いでしょう。これも立派なカリキュラム評価です。「在校時、何が一番印象に残っていますか」、こういう聞き方です。「何が今の自分の人生にとって役に立っていますか」、これこそカリキュラムです。学んだものが、その後、どう使えるのか、使えないのかを見極めるのは、こういった方法でも明らかにできます。客観的に数字で何%でという方法は、短期的な成果には向いていますが、長期的な質の部分については、掘り下げてじっくり聞かないとわからない部分があります。

9. カリキュラム開発とその評価（2）：チェックリスト法

カリキュラム評価のもう一つの方法が、資料にありますチェックリスト法です。これは私が外国のものを翻案しました。「概要・コメントは箇条書きでいいです」、「評点は主観的で構いません」、「気楽に記入してみてください」というものです。

右側にある10点満点の評点は、客観的な情報や裏づけを、さほど気にする必要はありません。個人の主観で結構です。イメージとしては、映画を観たとき、5点満点でいうと3点ぐらいかなと、そんな感じです。本等、いろんなレビューもありますね、星が幾つ、といった。一見、「えっ、これで使えるの?」と思いがちですが、意外と使えます。重要なのは、一人で評点をつけても意味がない。いろいろな立場の人に記入してもらい、突き合わせると、デコボコがわかるのです。先ほど、カリキュラム評価は点検だと言いました。もう一つ、評価にはコミュニケーションという機能があります。数字をボンと出しておしまい、ではなく、さあそこからどうしようか、という議論につながっていきますので、

■カリキュラム評価のためのチェックリスト

概要・コメントは箇条書きでいいです。

評点は主観的でかまいません。

気楽に記入してみてください。

項 目	概要・コメント	評 点
1 評価しようとするカリキュラム（実践）は、どのようなものですか。		／ 1 0
2 どうしてこの実践を行おうとしたのですか。		／ 1 0
3 この実践は、誰に直接働きかけるのですか。また、間接的には誰に影響を及ぼしますか。		／ 1 0
4 この実践を行う上で、必要な「もの」「こと」（場所や機材、知識等も含む）は何ですか。		／ 1 0
5 この実践の目標（ねらい）は何ですか。		／ 1 0
6 「5」で示した目標を達成するため、カリキュラム上(学校経営上)、どのような工夫や手続きを行いましたか。		／ 1 0
7 この実践の結果はどうでしたか。また、どのような手だてで明らかにしましたか。		／ 1 0
8 この実践に、どのくらいくお金、時間、人手、会議、場所、手間＞等をかけましたか。		／ 1 0
9 この実践の代替案はありますか。また、他校の実践等と比べてみましたか。		／ 1 0
1 0 他の学校でこの実践を行えると思いますか。また、それはなぜですか。		／ 1 0
1 1 1～1 0の評点を足すと、何点ですか。		／100

1 2 この実践はどこをなおすとよくなりますか。また、どこが優れていますか。		
1 3 この実践は、どのように外部に報告・発信されますか。		
1 4 以上の1～1 3の評価結果を、他に評価する人は誰ですか。		

記入日：

評価者：

感 想：

評価にはコミュニケーションが欠かせません。

さて、1番から14番までの項目には、それぞれ意味があります。項目を読んでみます。

1番は、まず「評価しようとするカリキュラム（実践）は、どのようなものですか。」となるわけですが、こうした研修ですと、参加者がそれぞれの実践を持ち寄ってくる場合があります。割と見かけるのは、学校行事です。教科は試験があるからいいのだ、ということで、学校行事や、特別活動といった、教科外の部分をお書きになる方が多いです。

2番は、「どうしてこの実践を行おうとしたのですか。」これは、背景や理由です。「学習指導要領が改訂されるから」というお答えもありえますし、「うちの学校を活性化させたいなと思って」という場合もあるかもしれません。

3番です。「この実践は、誰に直接働きかけるのですか。また、間接的には誰に影響を及ぼしますか。」と。これは消費者、顧客と呼ばれる項目です。どれくらい実践の受け手を意識するかという内容です。その影響を、どう考えているかと。

4番です。「この実践を行う上で、必要な『もの』『こと』」、それは何か。条件整備、資源の問題です。一定の広さの場所がないとできない、特殊な機材や知識が必要、そういった類です。

5番、「この実践の目標(ねらい)は何ですか。」、しばしばこの5番が非常に重要なように言われるのですが、1、2、3、4番までの背景の部分がきちんと記入できないと、なかなかこの5番は書きづらいところがあります。

6番、「この目標を達成するため、カリキュラム上（学校経営上）、どのような工夫や手続を行いましたか。」。具体的な手だてです。

7番、ではその「実践の結果」はどうだったのか。書きづらいところでしょう、データがない場合も多いですから。どう結果を把握するか、説得力のあるデータをどう持ってくるか、というチェックポイントです。先ほどデータとしての感想文というお話をしようと思っていました。5点が何人、何%という方法だけでなく、

文章で学習者に書かせると、案外書けるかもしれません。

8番、「この実践にどのくらい〈お金、時間、人手、会議、場所、手間〉等をかけましたか。」、コストの問題です。コストはお金だけでなく、こういう手間暇の問題が大きい。各種の研修で、書けないのがここです、「わからない」と。何回会議を開いたか、何時間ぐらい取り組んだのか、どれくらいお金がかかったのか。そこが、「見える化」という言い方もありますが、「可視化」です。データ化してみると、何か見えてくるかもしれません。

9番、代替案はあるのか、ほかの実践とくらべてみたのか、ということなのです。

10番は9番と似ていますが、別です。他校で同じ実践を実施できるか。一般化の問題です。

11番は、1から10まで足すと何点ですか、100点満点で書いてくださいという趣旨です。合計で何点、と点数が出ます。この点数自体、さほど意味はありません。点数を他の人と突き合わせて、「やっぱり〇〇先生はこっちを低くつけるのですね」とか、「△△先生はこういうふうに考えているんでしょうけど、私は考えつかなかったですね」というところが出て、そこが面白いというわけです。ですから、一人で客観的にという方法とは、随分違います。それぞれの主観を持ち寄って大人数で評価する、そのほうが実は有益な情報を得られる場合があるのです。

12番から14番は、ここまでの項目に比べると扱いが軽いので、評点に入っていません。

12番は、改善点と優れているところです。

13番は、校内の研修等の発表もあるでしょうが、そうではなく、校外に向けての発信です。今でしたら、インターネットの利用もあり得るでしょう。メールマガジンという方法もあるかもしれません。学会での発表、書籍の出版や、学校通信という手段もあるかもしれません。

14番、その実践を他に評価する人は誰ですか。評価者が一人であれば、評価の結果を補強する必要があるでしょう。一人では、その人の立場

でしか、ものを見られないからです。

おわりに

カリキュラムの開発には、大きく分けて二つの方法があるとされます。一つは、工学的接近と呼ばれる方法です。もう一つが羅生門的接近と呼ばれる方法です。

工学的接近は、一見「科学的」です。行動目標が重視されます。これは、はっきりと行動で成功失敗がわかるよう、一般目標を「〇〇ができる」という行動目標に変換し、その行動目標に合わせて教材を構成する、という段取りです。授業研究の形式は、はっきり意識されていませんが、工学的接近、アプローチにもとづく場合が、よくあります。この接近法は、「科学的な正しさ」に重点を置くわけです。唯一絶対の正解を前提にできる場合は、工学的接近が向くでしょう。この工学的接近は、教科の内容に関する専門家を重視します。ですが、行動目標、工学的接近は、1960年代から1970年代にかけて、批判の対象となりました。その背景には、公害や戦争といった政治状況、社会状況が、カリキュラムの開発や評価にもっと反映されるべきではないか、という発想があります。この批判が、もう一つの羅生門的接近へと結びつきます。

羅生門的接近は、より創造性を重視します。加えて、いろいろな人が集まってみないとわからない、多数の人の目を通す手続きが重要となります。羅生門的接近の場合には、アートといえますか、そういう「わざ」につながる創造的な開発に向きます。この「羅生門」、黒澤明監督の映画です。芥川龍之介の小説「羅生門」ではないのです。芥川で言えば「藪の中」、犯人が誰かわからないという、あの短編小説です。それを原作としたのが映画の「羅生門」です。アメリカのある研究者が、黒澤映画にちなんで羅生門という名称を用い、それが日本で広まったという流れがあります。先ほどのチェックリストは、羅生門的接近を意識しています。いろいろな人が、様々な立場でかかわるのが面白い、だから、数学の授業を英語の先生が見ても役立

つはず、という発想です。数学の授業は数学の先生でないと正当に評価できないのか。そんなはずはない、英語の先生が生徒役として聞いて理解できなければ、生徒はもっとわからないだろう。そういう発想です。ですので、人々の中には、当然素人も含まれることになります。

これらの接近法、アプローチは、当然、指導観や評価観も違います。車の運転を習う場合、まず工学的接近で学ばないと、困るかもしれません。羅生門的接近により、創造性豊かにブレーキを踏まれても、ちょっと...

取りとめのない話になりましたが、休憩をとり、その後、質疑応答に移ります。

質疑応答

質問がもしございましたら、今お話しした内容にかかわること、あるいはそうでないことでも結構ですので、できる範囲でお受けしたいと思います。いかがでしょうか。こういう場合に名簿が役に立ちます。今日は10月28日、28番の方、いかがでしょう。よろしくお願いします。感想でも結構です。思いつかない場合は、1から73までの番号を一つ言っていただきたいと思います。

○28 63番、申しわけありません。

○根津 63番の方、いかがでしょう。

○63 先ほど話題にされておりました教育課程特例校制度の申請をしている大学附属校です。当校は、未履修から逃れるというわけではなく申請しているのですが、IT 授業、イマージョン、英語を使ったすべての教科の授業をしているということで、国際化とのかかわりのところの申請ができる学校ということでやっております。未履修ではありません。以上です。

○根津 ありがとうございます。教育課程特例校の場合には、そういう特徴のところですね。他に何かございますか。どうぞ。

○Y1先生、ありがとうございました。私、もう少し聞きたいなと思ったところは、10年たったところの卒業生の方の座談会でもしたら、これも一つの評価になるのではないかというお話だ

ったのですが、その部分。それから、先生の研究の中で、新入生、高入生の違いですか、筑駒の場合、高入生は大学進学が目的であるが、中入生はそうではないということであったと思いますが、そうではないところがどんなことだったのかという点と、10年たったときの調査で、興味深いところをもう少し伺えればと思います。

もしこれを私どもで実践するときに、座談会のメンバーの選び方は何かあるのでしょうか。私達、10年後、20年後とか、50年、60年たったときに、そのときに来ていただいた方に座談会することは比較的簡単なのですが、それでは少しバイアスがかかってしまうのかなという思いもあります。それでもよいのかどうか、そのあたりを教えていただければと思います。

○根津 後のご質問からいきたいと思います、バイアスがかかるほうが面白い、と考えます。それだけ有名人ということかもしれませんので。あと、卒業生調査で難しいのは、学校が大嫌いだった人は質問紙を送っても回答しないし、母校にも来てもらえないという課題があります。

先ほどの座談会、筑駒でも実施しました。そのときは同窓会にお願いして、各期から一人、どなたか推薦してほしいという方法をとったのです。こうしますと、連絡がとれる人の中で、あの人がいいのではないか、あの人がうちの期の代表だ、という声が、必ず出てくるのです。筑駒の場合、中学から120人、高校から40人追加で合計160人です。そのうちどのくらい連絡がとれるかは「期」によってまちまちなのですが、大体絞られてきます、彼だったらうちの期を代表して言ってくれるだろう、と。その方々が当然、バイアスがかかっていると同時に、その方が一番そのときの筑駒らしさを残している。むしろそこに面白みを見出していこう、という発想です。

もちろん他の方法もあるでしょう。無作為にくじ引きをし、当たった方をお願いする方法です。が、それより、あの人だったら大丈夫と言

われたほうが、背負うものが違うといえますか、座談会としても〈やはりあの人が来たか〉という雰囲気になると、うまくいく気がします。

もう一つ、10年たったところだという話です。私が直接関係したわけではないのですが、研究室の関係者が、小学校の英語に関連して卒業生に話を聞く、という調査を実施しました。そのときにも、やはり学校の協力が不可欠だったそうです。ですので、学校が同窓会と良好な関係を保っていて、同窓会がきちんと名簿を管理して、同窓会からの働きかけに快く応じてくださるOB、OGがいる、というあたりが、必要な条件かと思います。

中学入学の生徒についてです。筑駒の学園祭が秋に行われ、3日間で約1万人が来ます。私も初めて行ったときにびっくりしたのですが、中学受験を考える保護者とそのお子さんが、たくさん来るのです。学校行事を見て、この学校に入りたいと。学力一辺倒ではないのです。また、体育の先生によれば、筑駒の生徒は、中学入学時は中学受験の影響で、体力的には都の平均を下回る。それを6年かけて体育の授業と部活で徹底的に鍛え上げる。すると、高校を卒業するころには、都の平均をはるかに超える。そういった部活動の役割は、高校入学者とは異なるでしょう。

さらに部活は、単独加入ではありません。平気で二つ三つ、かけ持ちをします。テニス部をやりながら、鉄道研究会をやって、たまに数学研究会に顔を出す。これがわりと普通です。そうすると、異学年で幅が広い関係ができる。筑駒名物の一つは、囲碁です。「駒場棋院」という生徒の団体があり、中学校1年生だろうが、高校3年生だろうが、強い者が1番という実力の世界です。そういう集団内の切磋琢磨というのは、数学オリンピックにも通じるわけです。学年ではない。どれだけのユニークさを持っているかというところで、生徒がお互いを見ている。

しかも、学校行事が非常に多く、いろいろな役割があります。リーダー形成という点から見ますと、頻繁にリーダーが変わります。6年間

のうち、必ずどこかで一度は長のつく仕事を任されることになる。リーダーをやってみて、大変だと思う経験と、大変だったから今度はあのリーダーを支えてあげようという両方の経験を、6年間でできるわけです。もちろん高校から入ってきて、厚い信頼を得る生徒もいるわけですが、中高6年間という長さからすると、3年間は短い気がします。あつという間な感じすらします。特に高校3年生では、受験が入ってきますので。

そういったところが、受験学力プラスαの部分で、受験生が筑駒を選ぶ理由かと感じています。

お答えになりましたでしょうか。ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

○ Y2先生、どうもありがとうございました。よろしくお願いします。

先ほどの話にあったチェックリストがあります。羅生門的接近というのを興味深く聞かせていただいたのですが、例えば学校行事で、教員間でチェックリストを使ったとします。先生は、本や映画のレビューの星をつけるという言われ方をしましたが、例えば担当者の評価と、それ以外のあまりかかわらなかった教員の評価が大きく乖離しているようなことは、よくあることだと思います。そういったときの対処として、今後にどう活かしていったらいいのかなと思ったので、聞かせていただければと思います。よろしくお願いします。

○根津 ありがとうございます。そこがチャンスだと思うのです。羅生門的接近が面白いのは、これはある強盗殺人事件の話ですが、目撃者の証言がまるで違って、何が正解かわからない。今お話しになった学校行事ですが、行事の全体を見た人は、恐らく誰もいないのです。例えば体育祭としましょうか、「体育祭はとてもよかった」という人と、「まあ例年どおりじゃないかな」という人とで、温度差があるでしょう。すると、そこでコミュニケーションの機会が生じるわけです。「自分はすごくうまくいったと思ったけど、あの人からするとそうじゃな

いんだ」、「自分は今回、例年どおりだと思っていたけど、この先生にしてみると、こんなに思い入れがあったのか」、その違いにお互い気づくことに、意味があると思います。

重要なことは、評価は多様であっていいのです。いろいろな見方があっていい。ところが、意思決定は違います。評価の後でアクションを起こすには、みんなで一緒に認識して実施しなければいけない。認識の統一、共有はよく言われるのですが、前段階として、みんな違う物の見方をするという当たり前のことを、どう理解するか。チェックリストは、そのためのツールですね。ですので、これが唯一絶対の評価だ、というものではなく、「あ、誰々先生、やはりこここのところだったんだ」という、お互いの違いがありえます。行事の途中や、行事が終わった後というとり方をしてみると、ご自身でも違いに気づくかもしれない。チェックリストは、業務日誌のようにも使えるのです。日付、「記入日」ですね。あと、「評価者」、「感想」も、そういった意味で、主観的な情報をできるだけ盛り込むための手がかりです。

見方の違いを生むためには、教育実習生のように、その場に不慣れな人がいると、楽です。あるいは、保護者の方々や生徒でもいいのです。いろいろな立場の人に少しずつ何か書いてもらい、それらを集めると思わぬ全体像が浮かび上がる、という事態に至る。そういった意味で、チェックリスト法は情報の多様性に重きを置くわけです。

ただ、先ほど申し上げましたように、どこかねらいを定めてやはりここだ、と決める手続きは、一通りしかない。それは運営を実施される、責任を持っている方が行うべき重要な仕事だろうと思います。そう考えてみますと、評価を行う分掌、データをとって、ああだった、こうだったねという役割と、評価結果をもとにどう実行に移そうかという役割とは、分けたほうがいいかもしれません。使う頭が違いますので。こんなところでよろしいでしょうか。

私の信条として、必ず時間前に終わらせるこ

とにしております、そろそろお時間かと思ひます。どうもありがとうございました。

(根津付記：再録に際し、文意が通るよう、大幅な加筆修正や文の入れ替え等を施しました。また、ご質問いただいた方々のお名前やご所属は仮名としました、ご了承下さい)

文献

根津朋実 2005 「チェックリスト法を用いたカリキュラム評価の試み ―高等学校の『総合的な学習の時間』を事例として―」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』

4、69-82頁

根津朋実 2006 『カリキュラム評価の方法 ゴール・フリー評価論の応用』多賀出版

田中統治・根津朋実編著 2009 『カリキュラム評価入門』勁草書房

根津朋実・吉江森男編著2010『教育内容・方法』培風館

根津朋実2011「カリキュラムを評価する」天竺茂編集代表、大脇康弘編著『学校をエンパワーメントする評価』(学校管理職の経営課題 第5巻 これからのリーダーシップとマネジメント) ぎょうせい、121-138頁

研究発表Ⅱ

「教育課程と評価について」

関東学園大学附属高等学校 教諭 吉田 明 稔

はじめに

皆さんこんにちは。大変お疲れのところですが、少し時間をいただいて、「研究発表Ⅱ」というところで説明をしていきたいと思います。

私は、関東学園大学附属高等学校に赴任して17年がたつ、地歴科の日本史を専門にした教員です。たまたま教務ということと、あと開催県群馬、この後、桐生第一高校も発表されるのですが、2校が担当県の担当部会ということで、今回発表することになりました。つたない発表になるかと思いますが、短い時間おつき合いをいただければと思います。よろしくお願いいたします。

お手元に、クリアファイルに入ったパワーポイントのレジュメと、あと中学生向けの「やる気にオン」と書かれている冊子があるのですが、それが本日の配付資料となっております。

1. 学校紹介

まず、教育課程の説明をする前に、学校の概要を簡単にご説明したいと思います。

学校概要

- 歴史
昭和33年4月創立の普通科男女共学校
- 校訓
敬和 温順 質実
- 所在地
群馬県館林市大谷町625番地
- 求める生徒像
人の気持ちを尊重し、可能性を信じて、物事に一生懸命取り組む生徒

男女共学校、1学年の定員は240名となっております。関東学園大学附属高等学校という名称です。学校法人は学校法人関東学園となります。同じ法人内には、関東学園大学、関東短期大学、あと聴覚障害を持った子ども達に言語教育の研究、あるいは実践をしているヴェルボトナル研究所を同じ敷地内に併設しております。

校訓は、敬和・温順・質実ということで、その校訓に基づいて求める生徒像は、人の気持ちを尊重し、可能性を信じて物事に一生懸命取り組む生徒となっております。

コース紹介

- ①特進コース
国公立大学と難関私立大学への進学を目標とする生徒を対象としたコース
2年次より、文系・理系に分かれる
- ②進学コース
私立大学から就職までを進路目標とする生徒を対象としたコース
2年次より、文系・理系・資格取得系に分かれる

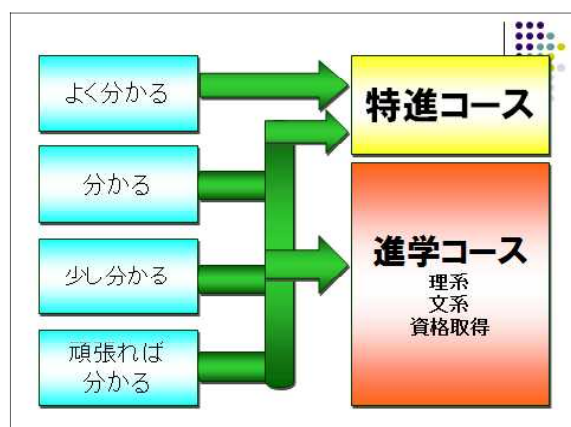
コースですが、普通科の中に特別進学コース、いわゆる特進コースと、進学コース、二つのコースを設置しております。これは私立高校であれば、特進コース、進学コースという形では目新しいところはないのですが、特進コースは、国公立大学と難関私立大学の進学を目標とする生徒を対象としたコース、2年生より文系、理系に分かれます。

進学コースは、私立大学から就職までを進路目標とする生徒を対象としたコースということで、2年生より文系・理系・資格取得系に分か

本校は、昭和33年4月に創立しました普通科

れます。この資格取得系というコースについて、後ほど教育課程の特色ある部分ということで、説明をしていければと思います。

二つのコースがあるのですが、1年生のときの教育課程は同一教育課程になっています。これは1年生から2年生に上がるときに、コース変更が可能になるような形で同一のカリキュラムを組み、2年生以降は、特進コースは進学コース+3単位ということで、1週間35単位で授業を編成しております。



こちらのスライドですが、一見何かと思うスライドですが、中学生の学校案内に載せている表になっています。どんな学力の層が本校に来ているのかといったときに、我々教員側では、オール3とか、オール4とか、評価がオール5.0というような数字を使うと、あ、大体どれぐらいの層が来ているんだなと想像がつくのですが、中学生やその保護者にそういう数字を出しての説明がなかなか難しいものですから、中学校の学習を中学生がどれぐらい理解しているのか、中学校の授業が「よくわかる」「わかる」「少しわかる」「頑張ればわかる」。それで君達はどうかなということを使って、ああ、自分はどれぐらいなんだなという形で、この言葉をつくるまでに、広報担当の教員と随分時間をかけたのですが、これを使うことによって、自分でもこの学校に入学すれば、こういうコースに行けるのだなというある程度の目安が立てられるところに役立っていると思います。

「よくわかる」というのはオール5の子から、「頑張ればわかる」というオール3を切ってし

まう子まで、本当に幅広い生徒が在籍している学校です。



これは特進コースの2年、3年に上がってきた形ということで、2年生から文系で、進路先は4年制大学のみという形で、先ほどの説明を図式化したものになります。

特進コースの特徴ですが、4点挙げさせていただきました。

特別進学コースの特徴

- 部活動と学業の両立ができる
- 少人数選択別クラス
⇒将来の希望進路に合わせた授業
- 学習効果を高めるコンピュータ活用
- 教育顧問による教員指導力の向上



一つ目は、部活動、学業の両立ができる。これは特に地方というか、進学実績を上げようと思っていらっしゃる学校の中には、特別進学コースに入る子は部活動ができなかったりというのがあるような学校も聞いております。そんな中で、本校は部活動と学業両方やる。そんなところから、進学実績を上げようというのが、まず1番にきております。

二つ目は、少人数選択別クラスということで、特進コースは、入学生の実況にもよるのですが、学年1クラスの年があったり、あるいは2クラスになってしまったり、定員とか、人員確保の部分で年によってクラス編成が変わってきます。

なので、その学年によって、2年、3年以降の選択科目によっては、かなり少人数の授業が存在してきてしまっております。例えば理科の物理であった場合には、生徒2人でも授業を編成してやっているようなところもあります。これで希望が少ないから、物理を化学にしろさいというのはいないということです。

三つ目は、学習効果を高めるコンピュータ活用ということで、下のほうに写真がありますが、真ん中の生徒がパソコンに向かっている映像とか、左側の写真はコンピュータ上に英語の文章が出ているディスプレイの画面があります。これはコンピュータ活用ということで、本校は英語の教員が50分の授業の中で、500単語のテストの採点が一緒にできてしまうというソフトをつくり、生徒が昼休みであったり、放課後に自分で50分500問の単語を覚えています。自学自習をするソフトによってさらに大きな成果を上げているということで、コンピュータ活用も行っているということです。

教育顧問

- 教員の指導力向上を目的に平成19年度より配置
(国・数・英・理・地歴・公民)
- 各教員の授業観察・指導を行うと共に、進路指導・教育相談等のアドバイスも行う




四つ目は、教育顧問による教員指導力の向上です。地方にある私立高校で、ましてやそんなに規模が大きい本校では、進学実績を上げるような授業を展開したり、あるいは課外授業ができる教員に限られてきます。これは公立高校になりますと、伝統があったり、あるいは先輩の先生がいたり、あるいは実績のある、指導力のある先生方が転勤してきて、後輩に指導したりということが可能になるのですが、小さな私学になりますと、なかなかその部分が大変だということで、教育顧問という形で、主に進学

校の校長先生、あるいは教頭先生、進学実績を出された学校から、国、数、英、理、社会を招き指導を受けています。私は日本史の教員ですが、週1時間ぐらいつつを、その先生が私と一緒に教室に行って、授業を観察して、「こういうふうにとったらいんだよ」というところのアドバイスを受けながら、我々の指導力強化につなげるような指導を受けております。

私も自分の授業がいいのか悪いのか、なかなか自信がない中で、人に見せるのが結構恥ずかしい部分があったのですが、顧問の先生に見ていただくことで、自信が持てたり、あるいはいろいろな部分で新しく知る部分があって、非常にいい効果が出ているかと思います。それとともに、進路指導であったり、あるいは教育相談等のアドバイスが同時に受けられるようになっております。



進学コースは、2年生から文系・理系、資格取得、幅広い進学、進路目標がありますので、特徴としては、個別のきめ細かな進路指導ということで、以前、「総合的な学習の時間」で、福岡のある高校が、進路学習に力を入れて話題になったことがあります。その流れから、進路学習に力を入れよう。個々の進路志望をかなえてやろう。これが一番の目標と特徴になっております。

進学コースの特徴

- 進路実現ささえる進路指導
- 高・短・大連携プログラム
- 資格取得(情報・商業・保育)

そんな中で、高・短・大連携プログラム、資格取得、このあたりの学園全体の悩みであったり取り組みの部分で、後ほど紹介していければと思います。

部活動の活躍ですが、本年度、平成23年度、全国レベルで活躍している部活動を紹介したいと思います。

部活動の活躍(平成23年度)

①水泳部

北東北インターハイ

おいでませ山口国体

女子50m 自由形 第1位(高校日本新記録)

女子100m 自由形 第2位

男子1500m 自由形 出場



まず水泳部ですが、今年、岩手で行われました北東北インターハイ、山口で行われました「おいでませ！山口国体」、この二つの大会で、女子50m自由形で第1位になった生徒が在籍しております。インターハイでは高校日本新記録ということで、来年のロンドンオリンピックに出場を目指している女子生徒がいて、この子が特進コースにいて、文武両道を実践している生徒になります。

地元ではかなり有名人で、先週は地元館林の一日警察署長にも任命されました。

そのほか、レスリング部は、今年、大阪で8月に行われましたグレコローマンの全国大会に

部活動の活躍(平成23年度)

②レスリング部

第27回全国高校生グレコローマンスタイル

レスリング選手権大会 出場

出場しました。

部活動の活躍(平成23年度)

③和太鼓部

第35回全国高等学校総合文化祭

吟詠剣詩舞部門 文化連盟賞



本日より京都で行われる国民文化祭にも参加

また、文化部のほうでは、和太鼓部が、全国総合文化祭の吟詠剣詩舞部門で、文化連盟賞をいただきました。和太鼓部なのに吟詠剣詩舞というのはおかしい感じがするのですが、和太鼓を中心にしながら伝統芸能に取り組んでいる部活で、昨日も群馬交響楽団が演奏した八木節を地域の伝統芸能としてお祭りで発表したり、あるいは剣舞に取り組んだり、そんなような活動もあわせてしていて、たまたま総文祭では吟詠剣詩舞部門ということで出場させてもらいました。明日も京都で行われる国民文化祭に招待されて出場することになっております。

弁論の部ですが、これも8月の全国総文祭の弁論部門ということで、こちらは群馬県の大会を2年連続で総文祭を優勝して、今年出場した様子です。この子も特進コースの生徒です。

2. 特色のある教育課程の編成

本題に入りますが、特色ある教育課程についてということで、本校は群馬県館林市というところにあります。館林市は、なかなかご存知ない方が多いと思います。ニュースなどでは、「日本一暑いまち」ということで、熊谷市が全国最高を持っているのですが、今年の夏の最高気温は館林が熊谷に勝ったかなとか、そういう部分で暑さが誇れると思います。

場所ですが、地図を用意させてもらいました。今、先生方がいらっしゃる高崎市というのは、水色の部分です。昔はこんな大きくなかったのですが、最近、箕郷町とか、榛名町とか、地元の人間でないのでよくわからないのですが、市

町村合併して、榛名山の山頂まで高崎市だと聞いて、私も群馬県人としてびっくりしているのですが、随分北のほうに広がっています。今、一番南のほうに我々はいるのですが、そこから東のほうに50km ぐらいのところにあるのが館林です。赤いところですよ。このすぐ南が熊谷あたりですが、この辺が暑いところです。



我々の高校が存在するところは、邑楽館林地区という館林市が、邑楽郡という中にある、大泉、千代田、邑楽、明和という四つの町に囲まれた地区にあります。ものすごい県境です。北に栃木、南に埼玉、東に茨城ということで、昔、私が赴任した頃には、県外から通学する生徒も非常に多くて、私が知っている限りでは千葉の野田市あたりから通学をしていた生徒がいたり、茨城のほうから通学する生徒もいたのですが、最近は県を越えて本校に入学する生徒が少なくなっていました。

実際、本校に在籍している生徒のほとんどが、邑楽館林地区から通学しております。群馬県全体というか、特に邑楽館林地区の特徴は、その地区の中学生の約9割は公立高校へ進学してしまいます。残りの1割の生徒がうちの学校へ来たり、あるいは県外の私学に出て行ったりということで、私立学校への進学を決意させるのが非常に難しい地域です。伝統ある公立高校があったりとか、あるいは授業料の無償化、私学には奨学支援金が出ておりますが、なかなかその部分が中学生保護者に行き渡らない中で、公立高校がかなり有利な状況で進んでいる地域だということです。

この地域には、六つの公立高校があり、本校を入れて七校です。邑楽館林地域には普通科の男子進学校、普通科女子進学校、普通科男女共学校、あとは実業科の農業科、商業科、工業科を持つような男女共学校が二校あります。それぞれ県境ということで、県外の高校も視野に入れながら募集活動をしていかなければならない。ただし、公立志向の中で、生徒確保は難しい。その中で、カリキュラムに特色を出して、なおかつ生徒が集められるかというのはなかなか難しいです。

特色のある教育課程の編成

- 近隣公立高校との競合の中で、いかに生徒を確保するか。近隣には、

普通科男子進学校(1校)
普通科女子進学校(1校)
普通科男女共学校(2校)
実業科男女共学高校(2校)

* 県外高校も視野にいれなければならない

なぜ本校に来ないのかというのは、ある程度予測はつきます。公立高校のほうが授業料が安いとか、あるいは群馬県は公立のほうが人気があるからというのは想像はつくのですが、裏づけがなかなか得られないものですから、今年度、こんな形で「環境向上アンケート」というのを実施しました。言葉の意味がわかりづらいのですが、簡単に言いますと、本校を併願の入試形態で受験した併願合格者です。合格しても、公立高校に受かってしまえば、そっちに進学してしまう中学生が、第1回特待入試ということで数えますと、1,300人ぐらい受験する中で1,000人は公立高校に行ってしまう。他の学校に進学した1,000人の高校1年生の子達にダイレクトメールを送りまして、アンケートをとりました。

1,000名に送り、どれぐらい戻ってくるのかなと思ったのですが、200通くらい戻ってきました。それでいろいろ分析をして、今、どこの学校に通っているのかとか、本校の学校見学会に何回ぐらい来てくれたのか、あるいは本校を

受験した理由はなぜかとか、本校に入学しなかったのはなぜかというのを聞いたのです。

環境向上アンケートの実施

- 本校を受験したが、他校に進学した者にアンケートを実施
- なぜ、本校に入学せず、他校に入学したのか？
その多くの理由として、
 - ・公立(第1志望)に合格したから
 - ・公立の方が、授業料が安いから
 - ・普通科しかないから(実業科がないから)

そうすると、本校を受けた子がどれぐらい公立学校に行っていて、どれぐらいの学力があるかというのをそこで知ることもできました。ここに挙げさせていただいたのは、本校に入学せずに、他校になぜ入学したのか。ベスト3がこれです。圧倒的に「公立に合格したから」。根本的に私立志望ではないというのが、ここで裏づけられました。これは想像つくのですが、「公立のほうが授業料が安いから」。三つ目は、「普通科しかないから」。以前はうちの学校でも、工業科、自動車科、商業科があったのですが、今は普通科だけになってしましまして、専門的な資格が取れないのであれば、実業高校に行ったほうがいいという結果も出てきました。

特色のある教育課程の編成

- 競合校との差別化を図る意味で、特色のある教育課程を編成する必要性



- 高・短・大連携プログラム
- 資格取得

これらをもとにして、公立高校、本校では「競合校」と呼んでいるのですが、そちらと同じカリキュラムを編成していたのでは勝ち目がないです。どこかで何か特色を持たないといけないということで、法人全体で考えれば校舎をきれ

いにしたりとか、突出した部活動があるとか、あるいは宣伝するものがドーンとあって、私学で高い授業料を払っても入学してくれるという学生がいればいいのですが、それもなかなかないものですから、であれば公立高校とは違う視点で、違いのある教育課程を組めないかということになりました。そこで、本日は2点、高・短・大連携プログラムと資格取得ということで説明をしていきたいと思います。

(1) 高・短・大連携プログラム

1 高・短・大連携プログラム

(1) 目的

系列の関東学園大学、関東短期大学の講義を、出前授業形式や大学生・短大生と共に受講することで、社会的見識を広め、上級学校進学者を増加させると共に、系列大学・短大への内部進学者の増加も図る。

そして、最終的には本校入学者の増加に繋げる。

まずは高・短・大連携プログラムの説明ですが、この目的は、最終的には本校の入学者が増加してくれるというのが目標ですが、これは法人全体で取り組むということです。系列の大学、短期大学、それらを巻き込んで、全体で取り組もう。これは同じように、高校の入学生が少なくなっていれば、大学、短大だって入学生が少ないのです。そういう部分で、一緒に取り組める何かをということで設定させていただきました。

1 高・短・大連携プログラム

(2) 授業科目

- 2年次 専門科目家庭科
「発達と保育」・「児童文化」それぞれ2単位
- 3年次 学校設定科目
「大学授業」・「短大授業」それぞれ2単位

授業科目は、先ほどの普通科進学コースの資格取得コースの中にあります。授業科目としては2年次の専門科目家庭科「発達と保育」「児童文化」、それぞれ2単位、3年次は学校設定科目として「大学授業」「短大授業」、それぞれ2単位です。

1 高・短・大連携プログラム

(3)「発達と保育」「児童文化」(専門科目家庭科)

①内容

- 2年次各2単位で、関東短大教授とのT・T実施
- 資格取得でも連携

「発達と保育」「児童文化」は保育系ということで、家庭科専門科目になりますので、あまり目新しいところがないのですが、目新しいところを挙げるとすれば、本校は、関東短期大学のこども学科、単科の短大になっていまして、同じ敷地内にあります。ですので、高校の授業に短大から教授に来てもらったり、あるいは短大に生徒を連れて行って、短大の先生に講義をしてもらったりしながら、家庭科の教員とともにTTを実施して、資格取得のほうで連携しようということです。

短大の保育実践室というところで、子ども達への読み聞かせの実践をしていたり、あるいは右側の写真は粘土ですが、小麦粉で、子どもが口に入れても危険ではない粘土をつかって、どんなものがつくれるのだろうかということをやっています。

次の写真は、離乳食をつくったり、あるいは赤ちゃんにミルクをあげている様子ですが、座学ではなかなかできないものが、短大とTTすることによって実践できる。

「発達と保育」「児童文化」は、4名の先生が入れかわり立ちかわり期間を区切って、特に「発達と保育」の部分は、心理分野の担当の教授の先生が半年来ます。「保育」の部分は保育専門

の先生が来たりというふうに、4名の先生で担当しております。

1 高・短・大連携プログラム

(3)「発達と保育」「児童文化」(専門科目家庭科)

②単位認定

- ・通常科目と同様に高校での定期試験を受験し、評価・単位を認定する



単位認定については、高校での中間・期末試験を家庭科の先生がつくって、それを短大の先生に見てもらいながら、採点・評価はお互いにし合って、それぞれ評価、単位を認定しようということで、「5」「4」「3」「2」「1」をつけております。

1 高・短・大連携プログラム



もう一つ、「大学授業」「短大授業」ということで、3年生の学校設定科目になります。系列の大学は隣の太田市というところにあるのですが、そちらのほうに移動して、大学生と一緒に授業を受けたり、あるいは短大生と一緒に授業を受けたり。先ほどの「発達と保育」「児童文化」は高校生だけなのです。先生が代わっているだけなのですが、こちらのほうは学生と一緒に受ける。「大学授業」は平成17年度から、「短大授業」は平成21年度から実施しております。

「大学授業」の流れですが、お昼休みにスクールバスに乗り込みまして、てくてくとキャンパス内を歩いて行って、大学生と一緒に学食で

御飯を食べて、講義を受けて、学校に帰ってくる。これを1年間繰り返しているわけです。

1 高・短・大連携プログラム

(4) 大学授業・短大授業

② 単位認定

● 高校での単位認定

「大学授業」「短大授業」とも、高校でその成果が満足できると認められたとき、2単位を認定する。

● 大学・短大での単位認定

「大学授業」は関東学園大学での4単位が認定される。また、関東学園大学へ進学した場合は4単位を取得したものと入学後その単位を生かすことができる。

「短大授業」の関東短期大学における単位認定は行っていない。

単位の認定ですが、基本的には高校での単位認定と大学での単位認定をしております。高校での単位認定は、高校で成果が満足できると認められたときに、単位を認定する。わかりづらいのですが、評価は基本的に行いません。「成果が満足」というのは、出席とか、授業態度という部分で評価をさせてもらっています。

特に「大学授業」は、単位認定のところにもつながるのですが、「大学授業」の場合は大学での単位が認定されたときには、もし学園大学に進学した場合、入学した後に、大学1年生のときにその授業が免除になります。大学生と一緒に授業を受けながら、前期と後期の大学生の試験も、大学生と一緒に受験をさせているのです。

大学生の前期試験は夏休みにありますし、後期試験は3年生の家庭学習の期間にあるものですから、当日行かなかったりとか、そういう生徒には高校での単位は認定しない。ただ、これは卒業認定の単位数には含まれておりませんので、生徒には「しっかり取りなさい」という指導しかしていないのですが、そのような形で活かすことができるので、大学のほうでは附属から行った場合には、若干メリットがあるというふうになっております。

「短大授業」のほうは、平成21年度からになりますので、単位認定はやっていなくて、基本的には一緒に授業を受けているだけという形になっております。

その他の「高・短・大連携プログラム」は、「職業講話」と書いたのですが、これは、関東学園大学のいろいろな分野で精通されている実務経験のある先生方を招いて、「職業講話」を行っています。オリエンタルランドで東京ディズニーランドをつくったときのプロジェクトチームに参加していた先生を招いたり、あるいはサッカーのJリーグ設立に貢献された先生を招いたり、あるいは群馬県の県警本部、これは捜査一課、刑事課ですが、その刑事部長をされていた先生を招いたり、あるいはJTBで営業実績のある先生方を招いたりしながら、興味の手持てる職業教育も連携しながらやっております。それと学内進学で進学した場合には、受験料、入学料、授業料半額の免除という措置があります。

1 高・短・大連携プログラム

(5) その他

・職業講話

関東学園大学の魅力ある教授を迎えての職業講話

TDL設立、Jリーグ設立、県警本部、JTBなど

・学内進学の場合

受験料免除、入学金免除、授業料半額免除等の優遇措置あり

(2) 資格取得

資格取得は、ここに挙げたような資格を取るということで、特に目新しい資格はないので、省略させていただければと思います。

2 資格取得

① 情報・商業系資格

■2年次:「情報B」2単位

■3年次:「情報C」3単位

→ 全商情報処理検定 1級
全商ワープロ実務検定 1級

■2年次:「課題研究」4単位

■3年次:「課題研究」3単位

→ 全経簿記検定 1級

「保育」のほうも、保育技術検定を3級まで

取らせるような努力をしているということです。

2 資格取得

② 保育系資格

■2年次:「発達と保育」2単位
「児童文化」2単位
→ 保育技術検定 4級

■3年次:「短大授業」2単位
→ 保育技術検定 3級

3. 評価について

最後の評価ですが、どこで評価するのかというのは非常に難しいです。本当は「大学授業」や「短大授業」「高・短・大連携プログラム」に関しては、この授業を受けたから、学園大学に進学した者がものすごく増えたのか、短大に進学した者がものすごく増えたかというのが出れば、評価になるのですが、実はそういうことはないので。内部進学者が増えたというのはありません。

評価について

1 卒業生の進路状況

	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
四年制大学	32.6%	46.0%	50.8%	43.4%	59.9%	54.9%
短期大学	13.9%	12.1%	9.2%	8.8%	4.5%	9.8%
専門学校	31.0%	20.9%	23.2%	22.8%	18.5%	16.5%
就職	13.9%	17.2%	10.3%	15.4%	12.7%	13.5%
その他	8.6%	3.7%	6.5%	9.5%	4.5%	5.3%

ただ、一つここで評価を見つけるとすれば、「大学授業」は平成17年度からになります。18年度から急に4年制大学の進学率が上がるのです。その後、50%台、40%がありますが、60%近くになったりしていく中で、専門学校進学が50を超えてきているのです。主に資格取得コースで、「大学授業」に行っている子は、当初、大学希望の子ばかりなのかなと思ってつくった

のですが、実際には専門学校希望者や就職希望者も含まれているものですから、そういう科目で大学生と一緒に授業を受けることによって、4年制大学に行きたいと思い、そういう部分で、四大進学者が増えたところは評価になると思います。

評価について

2 資格取得状況(平成22年度)

	情報B(2年 16名)			情報C(3年 20名)		
	1級	2級	3級	1級	2級	3級
全商ワープロ検定	1名	7名	9名		6名	3名
全商情報処理検定	2名	3名			5名	

	課題研究(2年 16名)			課題研究(3年 20名)		
	1級	2級	3級	1級	2級	3級
全経簿記検定			14名		11名	

	発達と保育(2年 11名) 児童文化(2年 11名)
	4級
保育技術検定	11名

資格取得に関しては、他の実業高校と大きく違うのは、例えば簿記の資格は2年生から選択で入るところなので、実業高校は1年生から資格取得をさせるのに、2年生から資格取得に取り組みさせて、なおかつ3年生の1学期に就職や推薦で行く生徒は、そこまでに資格を取らせなければならないので、そういう部分で赤字で書かせてもらったのですが、2年生1年間だけで両方1級を取れた生徒が出たのです。今の3年生ですが、この生徒は2年生で両方1級に合格して、関東学園大学に進学してくれるので、こういう生徒が1名出たのは非常にいいなと思いながら、挙げさせてもらいました。

おわりに

短時間なので、羅列的に説明をさせてもらって、わかりづらい部分もあったかと思いますが、終わりに、この後、平成24年度、来年度は理科と数学、25年度から教育課程が学習指導要領の関係で全面移行になります。群馬県は、平成29年度に中学生がものすごく激減するという、それが6年後に控えております。そのときまでにある程度の入学生を確保しないと、学校の存続が危ぶまれる、それぐらい激減する年が来るのです。そのようなところを後に控えているとい

うのを自覚しながら、25年度の教育課程を、特に資格取得の部分をもう少し充実させて、さらに上位層は上位層で特進コースに学ばせて、幅広い生徒を受けて入れていきつつ、進路実現を

させていけばと考えて取り組んでおります。

短い時間でありましたが、ご清聴ありがとうございました。これで終わりにしたいと思います。

研究発表Ⅱ

「教育課程と評価について」

桐生第一高等学校 教諭 岡山 敏 明

はじめに

皆さんこんにちは。桐生第一高校の岡山と申します。群馬大会の最後の発表となります。もとより大した発表はできませんが、短時間おつき合ください。

これから本校の教育課程とその評価についての発表をさせていただきますが、その前に、簡単に本校の概要を説明させていただきます。

1. 学校の概要

本校は、桐生市の市街地に位置し、桐生川というきれいな川と吾妻山との緑と水に囲まれた、非常に環境のよいところにあります。1901年に創立以来、社会に役立つ人間の育成という、建学の精神に基づいて、すべての人にはすばらしい人間性と可能性があり、それを発見し磨き高め、真に社会の信頼に足る人物を育成することを目的に、「自ら成すことによって学ぶ」という実学実践の教育理念で、心身ともに健全で、人間性豊かな生徒を育てることを目指してきました。

2. 特色ある教育課程

(1) 科・コース・系の編成

それでは、本題の教育課程とその評価について発表させていただきます。

本校では、生徒が興味・関心を持って学習や学校生活に取り組んでいけるよう、基礎学力の向上の上に、ご覧のように、普通科と調理科の2科を設けています。普通科の中には、特別進学コース、進学コース、進学スポーツコース、総合コースの4コースを設置しています。

さらに、総合コースには6つの系、情報ビジネス系、生産科学系、デザイン美術系、生活教養系、福祉教養系、保育心理系を設置して、それぞれ特色を活かした教育課程を作成しています。

この中で、普通科の4つのコース、それから調理科については、入学時に編成をしてしまいます。そして、6つの系ですが、これについては1年生のときに、各系の授業を体験させます。そして、さらに保護者に対してもガイダンスを行った上で、2年に進級するときに、生徒の希望に合わせて、人数制限をしないで、そのときの生徒の目標や興味・関心のあった系を選択させています。

ただし、一度選択した系については、2年、3年と継続して行う授業がありますので、途中での変更は認めていません。各系でそれぞれ特色ある専門科目、学校設定科目を設置して、専門的な学習をして、各系に応じた免許や検定等の取得、合格を目指しています。

このクラス編成についても、系ごとに情報ビジネス系のクラスという形ではなく、1組、2組という形で、その1組の中にすべての系の生徒がいるというクラス編成をしています。生徒は指定された時間に、指定された場所に移動して、その授業を受けるという形で、授業を行っています。

(2) 各科・コース・系の紹介

それでは、各科・コース・系について、簡単に説明をさせていただきます。

まず調理科です。調理師養成に主眼を置いた、

本県唯一の学科です。高等学校卒業を基礎とする調理師養成機関で、卒業と同時に調理師免許が取得できるようになっています。高等学校で一般教養科目を学んだ上で、調理師になるための専門科目を習得して、基礎知識の徹底した幅広い見識を持った調理師を養成しています。

授業は、実技を多く実施しており、基礎理論から和食、洋食、中華料理の実習、さらには特別食という広範囲な学習をしています。

専門科目として、いろいろな調理師免許取得に必要な科目を学習しています。

努力目標として、調理師免許の取得はもちろんですが、調理師技術検定の合格、食育インストラクターの取得も目標としています。

次は、特別進学コースです。多くの私学も設置していると思いますが、国公立大学・難関私立大学を希望する生徒を対象として、主要5教科に主眼を置いて、少人数のクラス編成できめ細やかな学習を行って、補習授業、模擬試験等を随時行ない、大学の合格を目指します。努力目標としては、希望大学への合格はもちろんですが、さらに英語検定や漢字検定などの2級以上の合格も挙げています。

次に進学コースです。特別進学コースほどの学習指導まではいきませんが、私立大学や短期大学の進学希望者を対象としたクラスです。特色としては、第2外国語に「中国語」を履修しております。努力目標として、先ほどの特別進学コースと同じように、希望大学への合格、そして英語検定、漢字検定の準2級合格を挙げております。

進学スポーツコースです。こちらも多くの私学さんでも設置していると思いますが、得意競技でさらに自己の能力や技量を練磨して、体力と技術を向上させ、全国大会に出場できる選手の育成を中心としたクラスです。同時に、習熟度別のクラス編成をして、基礎学力の向上を目指して、大学進学にも力を入れております。特色として、「選択実技」を履修させております。努力目標としては、普通救命講習の修了を挙げています。

以上が、調理科、普通科の中の三つのコースですが、これから紹介します、総合コースの各系を本校として特色ある教育課程として、挙げさせていただきます。

まず情報ビジネス系です。情報処理の基礎と技術を習得させて、情報化社会に相応した人物の育成を図っています。専門科目として「簿記」や「情報処理」など、ここに挙がっているものを履修させています。努力目標として、情報処理、簿記能力、工業簿記、ワープロ実務、IT活用などの、各種検定の3級以上の合格を目指しております。

生産科学系です。これは工業部門と農業部門のものづくりに関して、基礎知識や技能を習得させ、幅広い職場で役立つ人材育成を図っています。専門科目として、農業分野では、「環境科学基礎」、「グリーンライフ」などがあります。工業部門としては、「溶接技術」、「都市環境」などがあります。努力目標として、ガス溶接技能講習、アーク溶接、研削砥石の修了証の取得、それから危険物取扱者の資格取得、また農業分野でいえばエコ検定の合格を挙げております。

次にデザイン美術系です。絵画や創作を中心に芸術分野で幅広く活躍したいという生徒の夢を育む系です。専門科目として、「絵画」、「デザイン技術」、「クラフトデザイン」、「映像メディア表現」などを履修しております。こちらの努力目標としては、画像処理技術検定などを挙げております。

次に生活教養系です。こちらは実生活での技能と教養を育みます。授業では礼儀作法や和洋裁、手芸、編物、着付け、育児、料理など、多方面のことを学びます。中でも和洋裁では、自分の求める服飾をデザイン、創作し、身に着けたファッションショーを毎年開催しております。専門科目として「服飾文化」、「被服製作」等を履修しています。努力目標としては、被服製作技術、ファッション販売能力等の検定の合格を目指しております。

次に福祉教養系です。高齢化社会に伴って、これからの日本に欠かせないものになってくる

介護、福祉の基礎を中心に学習し、ボランティア精神を兼ね備えた心身ともに豊かな人材を育成することを目指しています。専門科目として、「社会福祉基礎」や「基礎介護」、「社会福祉実習」など、様々なものを履修しています。努力目標としては、訪問介護員養成研修修了、福祉用具相談訪問員の取得、さらに福祉住環境コーディネーター検定の合格などを挙げております。

最後に保育心理系です。心豊かな保育者とな

るために、様々な実習と児童心理を学んで、保育系大学や専門学校進学を希望する生徒を対象に、愛情いっぱいの保育者の育成を目指しています。専門科目として、「発達と保育」や「児童文化」「保育技術」などを履修しています。努力目標としては、保育技術検定の合格、普通救命講習の修了などを挙げています。

以上が各系の概要説明です。

下記が本校の教育課程表になります。

平成23年入学生 教育課程表																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
教科	科 目	標準 単位	普通科 特別進学		普通科 進学		普通科 進学スポーツ		普通科								選択科目	教科	科 目	標準 単位	普通科 特別進学		普通科 進学		普通科 進学スポーツ		普通科								選択科目																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
			文	理	文	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理					理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理		理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理

を使っています。2年生も3年生も、それぞれ1日その系の授業だけを行う日を設けており、本校では木曜日を「2年の系の日」、金曜日を「3年の系の日」という形で呼んでいます。

(4) 進路状況

次に、進路状況ですが、調理科は卒業後、さらに上級の資格を取得するために、桐丘学園系列の桐生大学をはじめとする上級学校へ進学したり、また県内外の調理関係への就職をしています。

また、特別進学コース、進学コース、進学スポーツコースも、桐生大学や桐生大学短期大学部への進学はもちろんですが、そのほか県内外の国公立、私立大学等へ多くの生徒が進学をしています。

そして、系でいいますと、生産科学系は、やはり工業系の大学等への進学、そして各種製造業への就職をしています。

デザイン美術系では、桐生大学短期大学部はもとより、美術系の大学や専門学校へ進学しています。

福祉教養系も、やはり福祉系の大学や専門学校、そして県内外の福祉施設へ就職しております。前述しました生産科学、デザイン、福祉については、大体半数以上が選択したコースや系に関係した進路を決定しています。ただ、情報ビジネス系、生活教養系及び保育心理系については、必ずしも系に関連した進路へ進んでいないのが現状です。

これについて、進学については大体関連したところへ行っていますが、就職については、どうしても県内に関連した企業が少ないということで、本人が希望しても進路変更を余儀なくされてしまっているということがあると思っています。

3. 評価（アンケートより）

評価ですが、本校では年に一度、生徒、保護者、そして教員を対象とした学校評価アンケートを実施しています。その学校評価アンケート

の中から、特に今回の教育課程に関してのポイントを抜粋し、それを考察させていただいて評価とさせていただきたいと思います。

まずアンケート結果からいいますと、生徒からの教育課程の評価としては、多くの生徒が自分の選択したコース・系の授業内容については、満足をしているようです。そして、意欲的に学習、系の努力目標に取り組んでいるようです。

ただし、それぞれ進学という面については、多くの生徒が希望校等に合格して、十分な結果を出しているのですが、資格や免許等の取得という面では、まだまだ十分な結果を出せていないのが現状です。

保護者からの評価としては、生徒同様に、コース・系の学習内容、その取り組みには満足しているようです。生徒が目標に向かって学校生活に臨んでいるという考え方をしているようです。

また、生徒が取得しようとしている免許や資格についても、本校は普通高校ですが、普通高校でもこれだけのものが取得可能であるということについては、非常に満足しているという結果が出ております。

最後に、教員の評価ですが、生徒達を選択したコース・系の授業内容に対しては満足して取り組んでいるととらえているようです。そして、なかなか合格率は向上しませんが、意欲的に資格や免許の取得等の目標に向かって、学校生活を送っているととらえております。また、特色を持たせた科目を教員側として教授するに当たっても、意欲的に授業を行っているということがわかります。

以上のアンケートの結果より、生徒、保護者、教員が3者の立場で、教育課程についてはほぼ満足しています。特色を活かした教育課程については、それなりの成果を上げているのではないかと思います。

4. 課題

最後ですが、今後の課題ということで、3点について考えてみました。系の選択をするに当たって、人数制限をせずに行っています。そのために、その年、その年によって、系の人数が増減をします。それに伴いクラスも増減をしてしまうために、なかなか一定しないという点。そして、クラス数が変わってしまうことによって、専門教科の教員確保が非常に難しいということがあります。また、今年は少なかった、来年は多い、次の年に少なくなってしまうということになると、生徒に整える施設や設備の充実に対しての経費がかかってしまうという課題があります。

履修時間への対応ですが、普通科の授業の中

に、先ほど話しましたように、専門教科を16時間取り入れています。そのために、主要5教科に対する時間が十分にゆとりをとって行えないということで、選択した系と大きく異なる系統の大学等へ進学する場合に、入学試験等に十分に対応できなくなってしまうことが起こり得る可能性があるのではないか。

今後もこれらの課題点を十分に考え、より充実した教育課程の作成に当たっていきたいと思っております。

おわりに

以上で発表を終わりにさせていただきます。最後までお聞きいただきありがとうございます。

総 括

関東学園大学附属高等学校 校長 根 岸 弘

私学教育研究の全国大会が群馬県で行われたことを喜ばしく思うとともに、参加いただいた方々、講演・発表をいただいた先生方さらには関係各位のご支援に対し感謝申し上げます。

教育課程は学校教育のまさに骨組みであり、それぞれの学校が私学としての特色を織り込み、どのような生徒を育てるかがこれにかかわっております。それ故、教育課程は常に手を加え精査することが求められています。

そのような中、平成21年3月に高等学校の新学習指導要領が告示され、数学・理科については平成24年度からの学年進行で実施することになりました。これに伴い平成27年度大学入試センター試験では数学・理科で新たな出題がなされることになり、その編成には各校ともご苦労なさったことと思います。

平成23年度6月17日に大阪で行われた日本私学教育研究所実施の私立学校専門研修会・教育課程部会に参加した先生方からは、新教育課程の編成とセンター試験への対応等々、アンケートからその関心の高さと編成への迷いを知ることができました。

このような中でこの部会を担当することになり、教育課程の重要性に対する思いが積もるばかりで、いかに部会構成をするか迷いが続きました。しかし、新たな取り組みをするのは「人である」と考え、これを一つの焦点としました。指導者がいかなる思いをもって骨組みを作るかが必要条件であろうと考えたのです。その思いの先には、広島県で初めて単位制を導入した「芦品まなび学園高等学校」初代校長の皿田氏がいました。骨組みを作るのは人であり、その思い

が教育課程に魂を入れるのではないかと思います。もう一つの焦点は、カリキュラムとは何かです。今回はこれを十分条件として部会を構成しました。

皿田先生の講演は、カリキュラムへの豊かな肉付けのご苦労と心構えを、筑波大学の根津先生からはしっかりした根拠（論理）に基づいたカリキュラムの捉え方をお話いただきました。さらに研究発表として、開智学園の那須野先生からは縦横の発想のみならず高さを加えての空間を感じさせる「新しい学び」を、さらなる発表は本県の桐生第一高等学校・関東学園大学附属高等学校の独創性のある豊かなカリキュラム編成とその取り組みが紹介されました。

長時間にわたる部会も、席を立つ人もなく、意義ある時間となったと確信しています。会の結びに、次年度開催の岩手県からの出席者5名の紹介には、もろもろの思いと期待をこめた大きな拍手が贈られました。スタッフの顔に笑みが窺え、新たな経験と感動が教師を大きくしてくれた一瞬でもありました。

このたびの部会に参加いただいた先生方と関係各位に改めて感謝を申し上げ、総括といたします。

ありがとうございました。

法人管理事務運営部会

1 研究目標 事務室が変われば、学校も変わる

2 会 場 エテルナ高崎「5階ティラレー」

3 日 程

時 間 月 日	9	10	11	12	13	14	15	16
10月28日	受付	部会開会式 基調講演	講 演	昼 食	研究 演習	分 科 会	閉 会 式	

4 内 容

部会開会式 運営委員長挨拶 高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長 森 本 純 生

基調講演 演 題 「選ばれる私学をめざす組織づくりー学校改革とリスクマネジメント」
講 師 聖光学院中学高等学校 理事長・校長 工 藤 誠 一

講 演 演 題 「大型温泉旅館の破綻と再生から学ぶ魅力づくりと意識改革」
講 師 (株)星野リゾート・トマム 代表取締役総支配人 佐 藤 大 介

研究演習 ー講義と演習ー
テーマ 「明るい接遇で学校を楽しく」
講 師 高崎商科大学短期大学部 教 授 大 津 ゆ り

分 科 会 テーマ 「学校事務の質の向上と今日的な課題対応について」

- ① 学校窓口としての接遇（コミュニケーション力・傾聴力・マナー・電話の対応・クレーム対応）
- ② 情報の管理（個人の情報・セキュリティー）
- ③ 保護者・近隣への対応（危機管理能力の向上・リスクマネジメント）
- ④ 学校事務・業務の効率化（就学支援金手続き・補助金申請）
- ⑤ 教員とのコミュニケーション・信頼関係づくり（カリキュラム・経営への参画・生徒募集）
- ⑥ 協力的な職場環境の構築（協調性・やる気の向上）

Aグループ 司会：常 見 憲 男（常磐高等学校 法人本部長）

助言指導：正 村 幸 雄（学校法人鹿児島学園 理事長）

Bグループ 司会：塚 越 隆（常磐高等学校 事務長）
 助言指導：森 本 純 生（高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長）
 Cグループ 司会：加 島 勝 一（高崎商科大学法人本部 課長）
 助言指導：工 藤 誠 一（聖光学院中学高等学校 理事長・校長）
 Dグループ 司会：石 川 貞 雄（高崎商科大学附属高等学校 事務長）
 助言指導：富 本 道 宣（富本教育研究所 所長）

部会閉会式

総 括 高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長 森 本 純 生
 専門委員長挨拶 聖光学院中学高等学校 理事長・校長 工 藤 誠 一
 閉会のことば 常 磐 高 等 学 校 校 長 高 山 幸 索

5 運営委員（順不同）

委員長 森 本 純 生（高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長）
 副委員長 高 山 幸 索（常磐高等学校 校長）
 委 員 金 井 誠（高崎商科大学附属高等学校 副校長）
 石 川 貞 雄（高崎商科大学附属高等学校 事務長）
 加 島 勝 一（高崎商科大学法人本部 課長）
 栗 原 恒 典（常磐高等学校 教頭）
 塚 越 隆（常磐高等学校 事務長）
 常 見 憲 男（常磐高等学校 法人本部長）

6 専門委員

委員長 工 藤 誠 一（聖光学院中学高等学校 理事長・校長）
 委 員 森 本 純 生（高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長）
 正 村 幸 雄（学校法人鹿児島学園 理事長）
 富 本 道 宣（富本教育研究所 所長）

基 調 講 演

「選ばれる私学をめざす組織づくり —学校改革とリスクマネジメント—」

聖光学院中学高等学校 理事長・校長 工 藤 誠 一



聖光学院校長の工藤です。今日は、54年目を迎えた私どもの学校の歴史を振り返り、その中であった危機、改革について少しお話して、現在取り組んでいることについてもお話したいと思います。

私学というのは様々な職務を経験した者の集まりというのが特徴であると思っております。学校の事務職になるつもりはなかったのだけれどもという形になっている方々、教員にしても、当初は司法試験を目指していたとか、元々音楽家や作家を志望していたとか、そういうケースが多いのではないかと思います。どちらかというと、公立の学校の教育者であるよりも、自由の効く私学の教育者を志望したということなのでしょう。こういった多様性というものが、私学の特徴をくんでいるのかなというように私は感じるわけです。

私どもは首都圏の学校ですが、採用に携わると、最初から私学の教員になりたいという人がこのごろ目立って増えています。それが本当は

いいことなのかなと思っています。こういったことから、これからの私学はどうなっていくことが大事なのかなと、私自身感じるところがあります。

もう一つ、やはり学校というのは、美しい夢や気高い理想が語られるべき場であると、私は基本的には思っています。私学ですから、どうしても経営が重要になりますが、そこで主人公となるのは未来の時代を担う子ども達です。その子ども達が夢を持てなければ将来はないわけですから、学校は其中でどのような形で運営されていくべきなのかが大きなテーマになると私自身は考えています。

私どもの学校は、神奈川県横浜市中区一場所的には、外人墓地や港の見える丘公園から一駅離れたところの昭和33年に創立されたカトリックのミッションスクールです。どのような学校のカテゴリーにあてはまるかというと、カトリックの学校であり、日本有数の進学校とっていいと思います。私どもの学校は東大の合格者数は全国でベスト10に入っていますので、私自身校長をやっている、毎日のように来年東大に何人合格できるかを考えます。そういった部分がないと学校はやっていけません。私学の小さい学校であり、私は経営者であると同時に教師でもあります。また10月から学校法人の理事長にも就任することになりました。校舎建てかえに20数億お金がかかる。今までの理事長は80歳ですから、借金の保証人になるためになっようなものなのです。

このような経緯から、教育者としては子ども達に対して、「本当にこの学校で過ごしてよかったな」「僕達はこの学校で愛されていたのだ」と思って卒業してほしい。そして、できれば卒業式の日、「お父さん、お母さん、今まで月謝を払ってくれてありがとう」といって卒業式の日を迎えてほしいなと思っています。

もう一つは何かというと、私どもの学校、先生はほとんど辞めません。大体40年勤続で勤めていくわけです。そうしたとき定年を迎えた日に、「お父さん、本当にいいところへ勤めたね」と言われて先生達が退職していくのが大事なと考えています。私は、たまたま校長という役職をやっていますが、私立の学校で校長になろうと思う人はほとんどおりません。

公立の学校の場合であれば出世競争もあるでしょうが、私学の場合にはそれはない。作家志望だが、ひとまず先生をやっておこうかなどといった、夢をもちながら職に就く部分があると私は思っております。

そういった中で言うと、先生達はその学校に一生をかけてもいる。それに対して経営者としては、ここへ勤めてよかったなと思ってもらいたい。ですから、学校というのは、本質的には夢みたいなきれいごとが語られる場であると言えます。そのことに対して、「学校に勤める、教員であることを全うし、それに向かって日々を過ごせる」というのが、私達の毎日の生きがいになっていかなければならないのではと私は思っております。

3月11日に東日本大震災がございました。その直前の2月半ば、福島県の協会さんに頼まれて磐梯熱海温泉で話をさせていただきました。一泊させていただいて、大七酒造のお酒を飲んで、おいしいなと思って帰って来ました、1カ月もたたないうちに福島も大変な被害に遭われているということがありました。今もなお東日本大震災は日本の中で大きな影響を及ぼしています。

そんな中で私どもの学校は、6月5日から8日、6月8日から12日、生徒40名ずつ80名を岩手県の

宮古へ被災者のボランティアに行かせました。全校の中で高1、高2に呼びかけまして、200名ぐらいの生徒が応募してくれ、その中から選びました。やはり今こうした日本の状況の中で、その姿をどうしても子ども達に目の当たりにしてもらいたいという思いがありました。同時に、6月5日から8日、8日から12日というのは平日です。ちょうど連休が終わった後にボランティアをおこない、行かせられるというのは、公立ではかなり難しいです。教育委員会に具申しても、返事が返ってくるのは1年後ぐらいでしょう。けれども、私学であればそれができる、現実にはできました。私が率先してやろうといったことですから、できるわけです。

そして、このことは非常に意味があったなと思っています。私自身も1日おくれで出かけました。夜行のバスに乗り、朝、子ども達と合流しました。到着した被災地の姿を目の当たりに見て、山田線の焼けただれた駅舎、そして周りはずべて瓦礫になっている。また事前に用意するものを尋ねると、防塵マスク、かなり厚でのゴムの手袋、靴の中に鉄板の中敷きを用意してくださいと言われたので、それら持参し、宮古市街の側溝のヘドロ除去などを生徒と一緒に行いました。

そのときに、ヘドロが入った土嚢を絶対手で抱えて持たないように、こうやって持ち上げてくださいと言われました。側溝にあるのは下水も全部一緒のヘドロなのです。ですから、汚染されたものとかバクテリアなどが入っているおそれもある。聞いたときに、これが被災地の実態だと痛感しました。

ヘドロを掘ると、アクセサリーが付いたままの携帯電話であるとか、学級通信が入ったファイルであるとか、そのようなものが出てきます。そういったものを実際見ると、この持ち主はどうなっているかということに思いを馳せてしまう。周りに家はほとんどありません。そういったところどころに花が手向けられている。多分、そこにおいては、そこに住まわれた方が津波に流されたのだらうなということが実感するわけ

です。

そんな町でありながら、ボランティアに行ったという私達の姿を見かけると、町の人達がご苦労さまと声をかけてくれたり、笑顔で我々を迎えてくれたりします。あらためて「私達は人々との連帯が大事なのだ」ということを知ることができたと思っています。

考えてみれば、「人間が一人で生活できるようになること」が文明の発達であると言われていました。しかし、その文明の発達というのは、逆に、人々と人々の間でのぬくもりとか連帯とか、そういったものを喪失させていたのではないかな、と私自身は思っています。このことは、私学はどういう教育をするのかということと密接につながると私は思っています。考えてみれば、「平等と社会的統合」を目指すことこそが公立学校の使命ではないのでしょうか。小学校にしろ、中学校にしろ、義務教育によって日本全国が共通の言葉で話せるし、あるいはお店でお金を払い、お釣りは幾らかという計算もでき、お互いにわかり合えるのです。そのような平等と社会的統合の原理を目指すのが公立の一番の使命であると私は考えます。

では、我々私学が目指すのは何かといいますと、「自由と社会的多様性」だと思うのです。公立は平等ですが、我々私学というのは自由なのです。その中で、社会的な多様性を生まなければならない。世界人権宣言の第26条第3項には、「親は、子に与える教育の種類を選択する優先的権利を有する」とあります。これは「子どもが受ける教育は公立なのか、私学なのかを選ぶ権利は親が優先的に持っており、国家より優先する。」ということなのです。つまり、民主国家であるということは、私学が存在することでもあるのです。

我々がなぜ補助金をもらえるのかを考えると、一つの方向に教育が行かないように、公立とは違った形の私学が存在することによって、結果的には国民に利益をもたらすことを意味しています。ですから、私学というのは「自由と社会的多様性」が原理であり、いつも私のテー

マにありますので、今回のようなボランティアのようなことも私学はやったほうがいい、やるべきだと私自身は思っています。「自由と社会的多様性」—これこそ私学にとって失ってはならないのではないかと私自身思っています。そうした中で、私どもの学校はどのような形で進学校として歩んできたのか。大学進学状況の変遷と、その際に学校で起きたことについて少し触れたいと思います。

私どもの学校は昭和33年に1期生を迎えました。神奈川県内には、もう一校、カトリックの学校としてよく知られている進学校があります。栄光学園という学校で、養老孟司先生や、細川護熙元首相も、栄光学園の出身であります。私どもの学校よりも10年前に創立した学校です。

同じカトリック校ですから、栄光の校長先生とも懇意にしています。私どもの初代校長はブルーノ・カロンという修道士で、外国の修道会が開いた学校なのです。私は、実は日本人で初めての校長です。36歳で事務長を務め、42歳で教頭、48歳で校長になりました。私は、もともと一般教員ですから、ただの卒業生です。

初代校長ブルーノ・カロンが創立当時に当時の栄光学園校長に挨拶に行ったところ、栄光学園で180人東大に合格したら、聖光学院での合格は1人だろうと言われたのです。そう言われて、33歳と血気盛んだった初代校長ブルーノ・カロンは、とにかく1人でも多く合格させるように頑張れと皆を鼓舞したそうです。それが私どもの学校の、活力の原点になっていると思います。

そして昭和39年、1期生卒業時には東大に1人合格している。やはり、その部分で頑張ったのです。その後、現役、OB ありますが、東大に入っています。その後、栄光学園と入試日を同じ日にして、受験生に、どちらを選びますかという姿勢を明確にし、いわゆる追いつけ追い越せという形で進んでいくわけです。

ところが、そうした私どもの学校も昭和44年、危機を突然迎えます。9月に初代校長ブルーノ

・カロン先生が交通事故を起こしてしまう。それが死亡事故だったので、職を辞さなければならない。たいへんワンマンであり、またカリスマでしたから、徐々に今までの不満というのが噴出してきます。原因はどこにあったかというと、組織がつくられていなかったのです。だから、カリスマによる個人商店が、必然的に組織化の道を歩まなければならないという事態にうちの学校は直面するわけです。当然ながら、どうしても混乱が起きる。そうすると、学校の中から誰かを代わりにもってくるのは難しいわけです。ですから、外部から教頭や事務長を呼ぶという形にするしかない。そうすると、昔からいる教員と対立することになる。大体どこでもお定まりの構図です。

私どもの学校は、聖光学院中学高等学校で中高一貫校です。全くすべてが一つ。職員室も一つですし、校長も教頭も一人一人という形です。生徒数が1,350、職員は専任が63名、事務職員、養護、全部で15名ぐらい。講師入れて80〜90ぐらいの職場です。

そうした中で一番有効な方法は何かということで、中高を分離統治するわけです。そうすると、ポストがすべて倍になります。教頭が2人、校長は1人です。部長が皆2人ずつになる。修学旅行、卒業式、それぞれ分離統治することになりました。

最初は、そうした対面的な手法で秩序が徐々に戻り始めました。けれども、そういった中で、生え抜きで創立からいるような先生などは反発し、言うことを聞きません。その先生を解雇する。ですから、私が校長になって初めにやったことは何かというと、和解でした。私も教え子としてその先生をよく知っていますから、もういいよということで水に流してくれて、50周年の記念史には原稿を寄せてくれ、その後の学校行事にも来てくれるようになりました。校長として、そういったことはまず先にやらなければいけないと考えていました。

中高を分離して困ったことがもう一つありました。高校を教えられない先生が中学にたまっ

てしまうということです。私どもの学校では、生徒からの評価にも耳を傾けます。質問や問題に解答できない教員などを生徒は信頼しません。実際にそういう先生がいた時代もあるのですが、授業の部分で高校では勤まらない教員が出てきてしまいました。

このような面が高じて、学校の将来的な発展が危ぶまれる状況にまで追い込まれました。そういう状況下で、トマス・トランブレ校長に交替します。この先生は、修道士でフランス系カナダ人なのですが、ずっと高校3年生の英語を教えられていた。外国人が進学校で、英文法をも含めた英語を教えられるというのはたいへんなことなのです。身長は180センチ以上あってブロンドの髪でスタイルもよいので、説明会をやればお母さん達が、「あんな映画俳優みたいな校長先生のところだったら生徒を入りたい」とたいへんな人気がありました。

学校の将来についていつも考えていた先生ですから、思い切って分離統治されていた中高を一つに戻します。校長交代に組織の改革、学校の移転問題も絡み、内部では大いなる争いがありました。結果的に、トマス先生は昭和59年に3代目の校長に就任します。

ところが、その数年後、トマス先生が解任されます。校長は移転反対でしたので、一部の移転推進派が巻き返しを謀ったのです。そういったことで学校はまさに大混乱になりました。そんな中で、保護者がトマス先生のことを一番支持してくれていたということが大きかったと思います。PTA 会長、後援会、卒業生みんなが支持しました。ですから、先生達も心強くなるという部分があり、結果的にトマス先生が校長職に戻る形で、事態は収束します。

その後、結果的には私が引き継ぐことになるのですが、それからずっと考えたことは何かというと、やはり一連のこうした混乱は、しっかりと学校経営と東大への進学実績を挙げることで払拭するしかないということでした。ライバル校である栄光学園の東大の合格者数は平均して50人前後です。それに対して私どもの

学校は昭和39年から昭和50年代まで東大合格20人を超えたのは一度しかありません。ですから、我が校との差は歴然としており、大きく差が開いていました。時代的にも日本が高度経済成長を遂げて、中学入試というのがブームになり始めていた時代ですから、そのような部分に助けられた部分も大きいと思います。

その際に何を売り物にしたのかというと、「生活指導をきっちり行うカトリックの学校」ということを売りにしました。今でも私どもの学校のことを称して、「受験少年院」だというように揶揄されることもあります。決してそういうつもりはないのですが、生活指導は厳しい、受験の勉強ばかりさせられるという、その当時のイメージがずっと残り、なかなか払拭できません。だから、東大は少なかったけれども、225人ぐらいから早慶には毎年100人ずつ確実に合格するようになったところから、私どもの学校経営も安定してきたのかなと思います。

そういった意味で、トマス校長が復職されたときに、私と私の恩師である前の校長と二人で考えたことは、どうしたら聖光学院を安定した経営の軌道に乗せていくことができるかということでした。

そうした二人でやってきたことの中の一つに、入試の回数を2回にするというのがあります。

このことは、私どもの大学入試の結果にも直結しています。初めて2回入試を実施した学年の東大合格者数は30です。2回入試を実施して以降、東大合格者数は30を越えているのです。これは、制度変更の効果が如実に現れた結果かなと思っています。

ところが、順調に結果が出てくると、教員から、勉強は生徒が自律的にやるものなのだという考えが出てきて、高校の指導課程をもとに戻そうとする意見が出てきました。

もう一つは2期制への対応です。3期制から2期制にすれば授業日数を確保できるから変えようということで、実際に変えたのです。あわせてクラスも、高校2年生から文系、理系には分

けるけれども、選抜クラスと一般クラスという成績別クラス編成をやめて、フラットにしようということになりました。これについては、それぞれの学校のお考えですから、それぞれの学校で決めていただければよいことです。うちの学校はやめました。その理由は、3期制を2期制にすると試験の回数が一つ減ります。定期試験が減ると、中学生は勉強しなくなるのです。だから、仮に2期制にしても試験の回数を減らさないほうが、中学生には多分よいのだと考えます。

とりわけ影響が出るのは、中1、中2です。具体的にいうと、生徒は本校に入るために小学校4年から塾に行きます。その結果、中1、中2になると気が緩んでしまいますから、試験がないと勉強しなくなり、だれてしまう。こういう状況をみて、これはよくないなと思いました。

またもう一つは高2で成績順によるクラス分けをしないと、中高一貫教育の場合、いわゆる中だるみになってしまいます。でも、高2で成績順によってクラスを分けられるとなると、中3の終わりから高1ぐらいで勉強に対する取り組みが変わるのです。ですから、これはそのほうがいいなということで、以前の方法にすぐ戻しました。

これらのことから言えるのは、学校関係者であればおわかりいただけると思うのですが、変えるべきことは1年ちょっとでも変えるといったように、危機に対する対応策をただちにとることです。3期制にしても、高2からの成績別クラス編成にしても、すぐ戻しています。そもそも学校というのは、割合時間をかけて検討して、もし変えようとするならば3年先、4年先で変えるのが一般的です。それをすぐに変える—これが私どもの学校の強みだと思っています。ですから、冒頭にお話しした震災ボランティアもできたと思います。

3月11日に震災が起きて、6月5日から8日の時期におこなうというのは、間髪を入れずに決めたからです。そうした部分で、運営のスピード感というのは私学に求められることだと私は思

っています。公立学校や教育委員会の人達では難しいのではないのでしょうか。

朝令暮改ということではなく、中身の云々というよりも、早く変えられるというのも一つの戦力なのではないかなと私は思います。状況を見極め、どうやって動くことができるかということが重要であろうかと思います。

そういった中で、私どもの学校もトマス校長が戻ったときに校舎の改修を行います。結果的に十数億の借入金が残ってしまいました。修道会のほうでも混乱はもう嫌だということで、私は修道会から頼まれて、事務長になります。私は、請われた仕事を断ることは余りなかったのですが、そのときはどうしようかなと思いました。結果として事務長になるのですが、前歴を知らない新入生の保護者は私のことを工藤さんと言うのです。私は23歳から先生ですから、先生としか呼ばれたことがありません。それが「さん」と呼ばれたときに、何と言ったらいいのですか、微妙な違和感や葛藤を覚えました。

でも、逆に先生と呼ばれると変だなと思ったかもしれません。私はもう先生ではないよ。たいへん複雑気持ちにさせられます。今の自分も教育者だけでも、経営者なのだなと見直します。何ともいえない宙ぶらりんさを抱えてきましたというのが本音なのです。だから、どこかで泣いている。不思議な自分の立場を今でも思っています。多分その結論は生涯出ないのではないかなと思いますが、事務長を経験して本当によかったなと思っています。借り入れもしたし、大変だからやってくれと言われて、それで引き受けることになりました。

最初にやらなければならないということは組合との団交をしなければならない。相手は全部私の恩師なのです。今までの関係はリセットして臨みました。相手がもうやめましょうというまでずっとやるのです。建築関係の住民との交渉も、向こうが帰れというまでずっといる。水分の摂取を控え、じっと座っていられるように、粘り強く対応する。そういったこともあって、でも、譲るべきところは譲りました。相手側の

プライドもありますから、私自身は礼を逸してはいけないところは心がけたつもりです。そういった意味でわかっていただいた部分もあってか、徐々に問題は解決していきます。

あとは校舎改築に伴う借入金の返済をしなければなりません。私は、学校はもっとお金があると思っていたのですが、いざ金庫をあけてみたらあまり金がないので驚いてしまいました。なぜかという、建て増しを繰り返していましたから、どんどんお金を使っていたわけです。結果、必然的に使えるお金がなかったというのが実態でした。ですから、総額13億の借金があったということなのです。

そのためボーナスを払う日にちや給料の支払いシステムを変える、一般的なシステムに改める、現金ではなくて振り込みにするなどというようなことを事務長としておこないました。

同時に事務のことも合理化を推進しました。例えばコンピューターで入力するときに定型仕分けを入れておき、その月を呼び出して登録する。光熱費とか水道代とか数字が違うのは全部1円で登録しておいて、後で番号を呼び出して1円のところに金額を入れればよいようにする。一々借方、貸方打っていたら事務は大変です。

また日本私学教育研究所の学校事務の委員をやっていた時代に、コンピューターの講習をやっていました。そのときに OCR を使った事務処理をしばらくやったことがあります。マークシートを使うというのは学校になじまないのです。それはなぜかという、よく模試などではマークシートを使いますが、シートの紙代を学校では負担できません。それは模擬試験ならば、受験料明細の中にそれが入ります。しかし学校の中であの上質で高価な紙を使って生徒が試験をやったり住所の登録をしたりとか、そういうのは困るわけです。

ところが、学校の場合、必ず印刷機があるから、一般的な印刷用紙を使ってできるのであれば、非常に合理化しやすくなります。そういうことを全部研究して、それができるようになるまでには随分苦労しました。皆さんに OCR と

いう機械も買いました。ですから、うちの学校は、例えば生徒の住所の登録とか、そのようなものは全部 OCR でやるようにしています。事務職員が全部打つということはありません。そのような合理化を結構おこなったわけです。

もう一つ、例えば印刷室はかなり充実させました。私どもの学校の印刷室というのは、町の印刷屋と何ら変わりません。オフセットもあれば、丁合機もあれば、無線つづり機もあるというくらいで、町の小さな印刷屋よりもうちのほうが設備は整っていると思います。また印刷専門の職員は、いつも自衛隊に頼んでいます。こういうオフセットが使える印刷屋と同じくらいできる人を雇うときには、自衛隊の研修をさせて、採用するわけです。自衛隊は自分のところで教材をつくるので、たいへん大きい印刷所を持っているのです。そこで研修させて、使えるようにして雇用します。ですから、普通の印刷技術を持っているのと同じレベルになっているわけです。

なぜそこまでするのかというと、私どもの学校は聖光学院のテキストはつくりません。テキストがあるとマニュアルにもなってしまいます。ですから、テキストを学校でつくってしまうと、予備校なども熱心な人がつくって、それを教員が使うことになるわけです。ですから、うちは教員にオリジナルのテキストをつくることを奨励しています。そのかわり学校で教材として製本します。というわけで学校の中に印刷所があるのです。そして、定年になったら、そのテキストを持って塾で教えなさいと私は言っているのです。こういう部分はあっていいのではないかなと思います。

それから、私どもの学校は、初代校長がワンマンでカリスマでしたから、基本給以外に多種多様な手当がありました。100種類ぐらい手当があったのですが、それも整理しました。今は10種類ぐらいしか残ってはいません。思い切って変えました。

それから、女性の職員の方も大勢いらっしゃいますけれども、基本的に教員は男性しかいま

せん。養護教諭は女性です。たまたまそうなったわけですが、今のところ積極的に若い女性の先生を採ろうとは余り思っていないです。それはなぜかというと、若い女性の先生が入ってくると、教頭はどの先生が彼女のところに行ったかを監督することが仕事になってしまうからです。冗談ではなく、実際にそのようなところがあるとよその学校でもお聞きしています。

また男子校なので、お母さんが割と若い女性の先生に対してジェラシーをお持ちになる。男の先生のほうがお母さん達の当たりがやわらかいことも理由の一つです。

そういう学校ですから、給料以外、いわゆる小遣いになるように、いろいろな手当は袋で別に出していました。ですから、勤続25年になると金一封を出すのですが、それも現金で出します。これは、自分で使ってもいいし、家族に渡してもいいよという意味です。ただ、最後に年末調整の源泉の総額には入れ、調整と課税は済むようにしていますが、それも小さい学校だからできるのです。やはり、そのような部分でお互いが理解し合うことが大事ではないかと考えています。

話は戻りますが、中学入試を2回やるようになってから、東大はずっと30人以上合格しています。その間、私自身は平成17年に校長に就任します。それ以降、周りの学校の東大合格者数も増えてきているので、30名ではなく50名以上合格することを目指しなさいということを保護者の皆様や職員に言っています。私が校長に就任してからは安定的に40人の東大合格者が出ています。

私が校長になって迎えた新入生が6年目にどういう数字が出すのかというのは、当然世間でも進学塾でも注目しているわけです。この47期生というのは65人が東大に合格します。この時点で神奈川のトップになりました。ところがすぐ翌年、栄光さんに抜かれましたから三日天下になりましたが、とりあえず結果は残せたということでしょう。

こうした部分というのは制度の維持がききま

せんので、私自身がやっている部分で、多様性という部分はある程度徹底しなければいけないと考えています。6年間でどう使うかという中で、情操教育を中心にした自由に発想できるようなことをやって、そして後半でしっかりと勉強するというようなやり方をする。それから、先にこういうことをしますということをまず自分で言ってしまい、それに近づけるようにということで周りを努力させる。それから、一番大きいのは、生徒が元気になるといけないということで、生徒が自由に勉強できる空間をつくってきたつもりです。セミナーハウスみたいなものがありまして、そこは年末年始とお盆以外はずっと開けておき、そこで生徒達が自由に勉強できるという環境づくりもしました。

一つ一つの学年ごとに6年間をかけてやっているということなのです。なるべく多く宿泊を伴う行事をおこなったりして、中高6カ年の中での中だるみにならないように気をつけています。ですから、中3とか高1という時期では学期に1回ぐらい割合で宿泊を伴う行事に連れていきます。先日も志賀高原に高1で行きましたが、1月には、また志賀高原で中3のスキー教室をおこないます。あるいは3月にはニュージーランドに行ったりします。ですから、年間50日ぐらい私は学校にいません。10月はずっと毎週毎週、今週は協会の仕事ですが、生徒の宿泊行事につき合っ出てかけるというようなことをしているわけです。そうした中で、安定した形は出来てきたかなと思っています。

ただそうした中で、今、私が思うのは、そういった目標とはまた違う現実があるということです。現在、私立中学校のブームというのは、首都圏においてもかなり陰ってきています。これは事実です。たとえば入試相談会などをやると、高校が使用している学校のブースに並ぶ人がちょっと増え始めている。中学校は増えていない。やはり就学支援金の問題があつて、高校は無償というような部分が影響しているのかもしれない。

そうした中でも、私どもの学校が目指す教育

をきちんとし、かつ教職員を食べさせていかなければいけないということがございます。

現在、私どもの学校へ通ってくる生徒の中で、遠方では、行田市、沼津市、蓮田市、千葉の白井市、そういったところから通っている子もいます。それから、単身残留の家庭というのもあります。お母さんと子ども、それで言うと沖縄県、新潟県、北海道北見市、西伊豆町、お父さんだけ残っていて、お母さんと子どもがこっちに来て、学校の近くに住む。そういう子もいるわけです。中には長崎県から来ている子もいます。

ですから、まだまだそうした形で、私学に通わせたいという部分のニーズはあるのだなと思っています。そういう中で、神奈川においては、港北ニュータウンというのがあります。私は、港北ニュータウンを制する者が神奈川県私学を制すると思っていましたが、これが大きく崩れました。それはなぜかということ、港北ニュータウンは、専業主婦の町なのです。旦那さんは地方から出てきて高学歴、かなりの給料を得て、一戸建てを建てて、奥さんは専業主婦という家族構成でした。ところが、今は雇用の流動化が激しいですから、金融機関とか、そういったところに普通に勤めているということでない限りは、お父さんがリストラになると、収入は何で得るか。そういう問題に直面してしまう傾向があります。

それより強いと思われるのは、川崎市に武蔵小杉というところがあります。ここは湘南新宿ラインの電車が停車する。新宿、渋谷、品川、羽田空港にたいへん近い。もう一つはバブルがはじけて東京都内の地価が下がって、ビジネス需要も減ったので、そういったところにマンションが林立しています。そこに住む人達、あるいは武蔵小杉に住む人達の特徴は何かというと、夫婦でキャリアなのです。例えば旦那さんがどこかの官僚、奥さんが医者とか、日銀であるとか、といったケースです。夫婦で2,000万円以上の安定した収入がある。だから、扶養家族が一人増えても大丈夫といった感じの層で

す。そういう人達というのは公立ではなく、私学に通わせる。そして、子どもも割と多いのです。これは、子育て支援の制度も充実しているからなのですが、こういう家庭に合わせた学校づくりということは今までしてこなかったわけです。

また練馬区から一本で来られるように交通がたいへん便利になってきていますので、そのような形の変化があります。そういった家庭の子に来てもらえるような学校にする。夫婦でキャリアの世代になってきたわけですから、保護者を平日にやるということはありません。土曜日の午後とかにやらなければなりません。

もしくは学校に食堂があって当たり前の時代です。お母さんがお弁当をつくりたいと思っても、つくれないときがある。食堂があると安心してもらえます。あるいは1年間の予定を年度が始まる3月に渡します。そうすると、出張とかあったりしても、これはどっちが行くかということがあらかじめ決められるわけです。そうした配慮が大事だと思います。

もう一つ、中学1年、2年のときにはきちんと宿題を生徒に出すことが大切です。小学校のときは、4年、5年、6年生と、私学受験のために塾に通わせます。そうすると、夜8時、9時に迎えに行けばいい。でも、その間、自分達が見ていないときに何をやっているかという、勉強をやっているのがわかります。けれども、中学入試が終わって進学したとあと、幾ら職住近接といっても、帰宅するのが遅くなることもあります。その間、学校が終わっての時間をどう過ごしているのか、親御さんは心配になります。ですから、そうしたときに、やるべきことがあるというのはたいへん大事なことで、きちんと宿題を出すということです。やはり、そういったことを私どもとしては体制としてつくっているということです。

もう一つは、この方達は、ある程度お金を使ってもよい教育を受けさせたいという気持ちがあります。ですから、私どもの学校では、いろいろな形で体験できる機会をつくっているとい

ます。今、私は、全員を連れていくのは無理にしても、25時間かかる小笠原に行くとか、そういう形のものを考えています。私どもの学校では聖光塾と称しているのですが、いろいろな機会を与える、そういう場面をつくるということに重きを置いています。

ただ、そうした中でも押さえていかなければいけないことは何なのかというと、3月10日に保護者がスーパーマーケットに買い物に行けるということです。3月10日は東大の合格発表の日です。そのときに買い物に行けるかどうか。結果がよくないと行けないわけです。東大に限らず、私自身は、たとえ校内順位が200番であっても早慶に合格できるようにさせてあげたいという気持ちを持っています。結局最後のところでは、そういったことが大事なと思うのです。

冒頭ども申し上げましたように、学校というところは美しい夢や気高い理想が語られる場ではなければいけないのではないかと私は思います。同時に、学校の中では子ども達に対して温もりを伝えていくのが大事であると思います。ですから、今日、これから後の研修でどのように保護者に対応するかというのもあると思います。私どもの学校では、事務所に「面談の場所はどこですか」と親が受付に尋ねますと、そのときにどんなに忙しくとも、事務職員が必ず面接室のほうまで親を案内するようにしています。親御さんというのは、近所に住んでいるわけではないですから、ほとんどが電車で時間をかけて学校に来るわけです。そこまでの間いろいろな話もできるだろう。ですから、一人一人来た人を案内するようにしています。大変でもそれをやります。

その中で、母親との信頼関係やコミュニケーションも築けてきます。お母さんが忘れた弁当を届けに来た。授業が終わるまでまだ30分ほどあるから、「届けてあげます」といって預かり、届けに行きます。そこから「受付の〇〇さんがわざわざ教室まで届けてくれた」と交流や信頼も生まれるわけです。その点は、きちんと生徒にも出てくるものです。また私も常々、そうい

うことが大事だよということを言っています。

それから、私自身は、生意気なようですけれども、「報・連・相」は大嫌いです。「報告、連絡、相談」のことですが、そんなのはいらないと言っています。若い教員にも「いろいろな危機のときに自分で判断し実行できなければダメだ。とにかく自分でやってみなさい。失敗したらそこから考えてまたやり直せばいい」というように言っています。生徒達にも同様です。「そんなことをやっていたらだめなんだ。自分で考えて行動できる力を身につけなさい。」一私どのような学校の教育というのは、「報・連・相」になってはいけないと考えています。

ただ、そういったものが成り立つためには、学校の中で子ども達に温もりを伝えるのだ、子ども達を愛するのだということが大事なのではないでしょうか。マザーテレサは、このように言っています。

毎日毎日、マザーテレサの修道会のシスター達が枯れ立った町へ出て食事を与えます。その食事を与えるときに、ただ、食事を同じ量だけ与えるのだったらロボットでできるけれども、あなた方は、与える人達に対して微笑みをもっ

て与えましたか、声をかけましたか、短い言葉で、あるいは手を握り、肩に触れ、温もりを伝えましたか。こうマザーは言っています。学校の教育も、やはりそうした部分が大事なのではないでしょうか。

今日、私達一人一人は親から生まれて一番年をとる日であります。と同時に、今日より若くなる日はないわけであります。ですから、今日が一番若い日であります。 **youngest of my life** ということではないかなと思っています。

私達は毎日仕事をしていますが、仕事というものは、ただすればよいというものではないと思います。その仕事のために使った時間、その時間は実は私達の命の使い方である—そのように思っております。祈ったところで神様を変えることはできません。でも、祈りというものは自分を変えることになっていると私は思っています。

最後になりますが、皆様と一緒に祈りたいと思います。望んで与えられた仕事でなくても、与えられた仕事を果たす力を神様お与えください。どうもご清聴ありがとうございました。

「大型温泉旅館の破綻と再生から学ぶ 魅力づくりと意識改革」

(株)星野リゾート・トマム 代表取締役総支配人 佐藤 大介



はじめに

皆さんこんにちは。北海道からやってまいりました。結構講演はさせていただいております。先週は、青森県の中学校の校長会でお話をさせていただいたのですが、先生とか、学校の人達、50人、100人に囲まれるというのは、全く気分のいいものではないのですが、ドキドキしながらお話をさせていただければと思っています。

講演する際に、2人の講演の中で、その一つの大体後ろ側をやることは私は多いのですが、前の先生との整合性がとれているか、いつもドキドキしながらお話を聞いておりますが、今日の工藤先生のお話とは全くずれていないです。「ホウレンソウ」の「ソ」ぐらいは似ていると思いますので、そこら辺は共通する分もあるかと思っていますので、お聞きいただければと思います。

本日のお話の内容ですが、私は先生と呼ばれるのは慣れておりませんし、講師ではなくて、参考事例のお話だと思っていただければと思います。先ほどちらっと、「人の不幸は蜜の味」

ということも出ておりましたが、古牧温泉という青森にある巨大旅館がつぶれた。何でつぶちゃったの？というところのお話。これは人の不幸なので、皆さん楽しくお聞きいただけるのではないかと思います。

そこから私は5年間、青森におりまして、震災後、お客さんがほぼ戻ってきて、満足度もとれるような状態になった。そのお話をして、現在は北海道のほうですが、ここも今、立て直し中です。古牧温泉を事例にしながら、なぜつぶちゃったの、それを立て直すときに何を大事にしてきたの、という話をしたいと思っています。魅力づくり、満足度向上、生産性向上、それに当たっての組織づくりをお話したいと思っています。

私自身は、先ほどのお話でいくとすれば、崩れの人間なのかもしれないと思います。理工学部で建築学科です。高校時代は早稲田大学高等学院という附属高校で、中学校から入試のときはめちゃくちゃ勉強しました。ところが、入ったらパチンコと麻雀しかしなかった。見事に崩れていきまして、そのまま楽しんで、理工学部附属で上がっていきまして。父が建築士だったものですから、建築学科に進みましたが、見事5年間勉強して、留年して、商社に入りました。総合商社の三井物産というところで人事部を担当し、そこで人の大切さをすごく学びました。その後、営業でニューヨークに行くことになって、退職して、今は星野リゾートという会社にいるところです。

1. 星野リゾートとは

最初の1年間は、ここから近い軽井沢の本拠で1年間、アルバイトで、若い女の子に怒られながらフロントで働いていましたが、1年後から青森の再生ということで社員になって、社員になって2カ月後に総支配人というめちゃくちゃな人事が行われながら、そこから5年間。そして、昨年11月からアルファリゾート・トマム、この10月から星野リゾート・トマムとなりましたが、そちらの総支配人をしております。

私どもの会社は星野リゾートという会社で、最近、社長がしょっちゅうテレビに出たりしておりますが、リゾートの運営会社です。あまり所有はしてなくて、これから出てくる古牧温泉は、ゴールドマンサックスという外資系の会社の持ち物です。私の扱っているトマムもまた別の者が持っていて、我々は運営に特化しております。全国で今、25。沖縄にも3件増えておりまして、どんどん増えていっています。

2001年から軽井沢が、「リゾナーレ」という山梨県にあるリゾートホテルの再生に乗り出して、その後、「アルツ磐梯」という福島のスキー場、あるいは「アルファリゾート・トマム」というスキー場、そして温泉旅館の再生も取り組んでおります。で、「星のや軽井沢」というのができて、今、「星のやシリーズ」で「星のや京都」、今度は「星のや竹富島」なんていうのもあります。多種多様なところでやっております。

いろいろなものをやっております。ビジネスホテルと違って、各施設ごとに違います。「何で」というと、お客様のニーズは、その地、その地によって全然違います。全国行けば行くほど、その地らしさを味わいたいというのがニーズです。ビジネスホテルの場合だと、いつも同じ家のように寝たいということで、基本的に統一されていますし、昨日泊まらせていただいたメトロポリタンさんも、全国というか東日本エリアにありますが、大体同じようなつくりになっていたりします。様々な地域体験をするというのがリゾートの大切なところです。

先ほどの先生が黒板に書かれたものを、早速写真にさせていただいたのですが、公立の場合は平等と社会的統合というお話が出ておりました。これはどちらかというとビジネスホテルなのかもしれない。同じように快適に、どこに行っても同じように、東横インだったら東横インで同じようにしたい。

ところが、リゾートホテルというのは各地、各地で違います。どちらかというと自由で社会的多様性、私が言いたいのは多様性です。各地域、各地域でならなければいけない。星野リゾートの場合は、星野リゾートと名前がつくからには、約束することは二つ。学校でいったら、一つは学力向上というのがあるのですが、我々でいったら一つは質が高くなければいけないです。これはビジネスホテルも共通かもしれない。もう一つが、地域独自の魅力です。その地らしさの魅力を出すことが、我々にとってはとても大事です。これを見出していけない限り、つぶれていってしまう、淘汰されていく。「大型ですよ」「グランドホテルですよ」と言っただけで、つぶれてしまいます。

その中で、私の仕事って何をやっているのというと、バブル期につくられた、ちょっと宣伝が入りますが、バブル期につくられたホテル、あるいはスキー場、プール、雲海テラスなんて最近人気になっていますが、こういったところの再生の仕事です。

総支配人という立場の仕事は何、というと、苦しくなったホテルを立て直し、たくさんのお客様に来ていただく、その先頭に立つ仕事です。こう言うと、よくわからないです。置き換えると、私の仕事は、サッカーチームでいえば監督の役目です。選手でもありません。オーナーでもありません。監督です。ザッケローニ監督と同じです。

私の仕事はこうです。戦略づくり。どうやってお客様が来てもらえますか。「行ってみてほしいな」という魅力をつくること。そして、来ていただいたお客様に喜んでもらう。満足度を向上する。「よかった。このリゾートに来て。また来たい」と思ってもらう。

この二つは混同されやすいのですが、違います。「行ってみたい」というのと、「行ってよかった」というのは別物です。

3番目が、生産性・収益性。工藤先生も経営がお得意と仰っていましたが、どちらかというのと金勘定の世界になります。これもなければいけない。大体、破綻したリゾートホテルというのは無駄が多いです。ここも直さなければいけない。こっちだけやると、どちらかというところと旅館コンサルとか、コンサルのお仕事になってしまいます。私は実際に入って、監督と一緒にやる。評論家でもないの、やらなければいけないのは、それをやってくれるスタッフ達をつくること、人をつくることが、何より私の仕事です。今日の話は、この両方について触れたいと思っています。

『星野リゾートの教科書』という本が出版されています。これは星野リゾートに一銭も入らなくて、日経 BP が儲かるだけです、『日経トップリーダー』に掲載された話から、ここに取り込まれています。星野リゾートは、最近、リゾート界ではいろいろ注目されていますが、社長がカリスマで、天才的で、いっぱいアイデアが出てくるわけではないです。私が入って「すごいなあ」と思うのは、「社長がすごいなあ、天才的だな」というよりも、社長はきちんと教科書通りやっている。ものすごく教科書通りです。マーケティングにしろ、生産性向上にしろ、あるいはスタッフのモチベーションアップにしろ、『ハーバード・ビジネス・レビュー』に書いてあったり、コトラーだったり、最近だとピーター・ドラッカーがはやっていますが、そういったものをきちんと理解して、それを実際に落とし込んでいる。そこが実は注目されている強みで、ぽっと出のやり手という感じではない。そこが私は社長を信頼しているところですし、我々の経営というのは決して突拍子もないことをやっているのではない。逆にいうと、メーカーだったら当たり前のことをやっている。それを旅館業界、リゾートホテル業界はめちゃくちゃ後れていたということとご理解いただければ

と思います。ということは、教科書通りやってみようということでもあります。

2. 古牧温泉の破綻「古牧温泉は東北新幹線八戸開業で成功したのか」～古牧温泉破綻の真実～

今日のお話は、古牧温泉という青森にある温泉旅館の再生のお話です。まだまだ再生の途中です。が、「しの字」回復で、震災の影響にもめげず、今、好調にお客様が戻ってきているところですよ。

こういった素敵なお話ですが、昔は「古牧温泉 古牧グランドホテル」という名前でした。一世を風靡した。グランドホテルなんて日本中どこへ行ってもある。ところが、大体破綻したのが10年、20年前からです。「グランドホテル」という名前がついているところが破綻しました。ここは北東北ナンバー1のホテルでした。一時期は年間100億を売り上げていました。結婚式だけで10億円近く売り上げる。北東北でナンバー1と言われていたホテルです。

位置は、青森県の中でいうと、十和田湖が真ん中にあり、奥入瀬溪流、青森空港、八戸。先ほど先生が仰った宮古は、もうちょっと南です。久慈。岩手からちょっと入ったところ、三沢というところにあります。

巨大です。でかいのです。東京ドーム18個分のでかい土地に、公園を築きました。渋沢栄一の秘書をやっていたという杉本行雄さんという方が、ワンマン経営者で、カリスマ経営者だったのですが、彼が一代で築き上げた。すごい人です。その人が築き上げた巨大リゾートでした。

この中には、第1グランドホテル、第2グランドホテル、第3グランドホテル、第4グランドホテル。これをどうやって立て直すのだろうって、私が専務のところに行ったら、「おまえ、行け」と言われてしまって、今に至っていますが、全部で330室ありました。客室はいまいちです。昔は、30年前は一流だったのですが、それがそのまま陳腐化してしまった。食事会場も取り立てて魅力があるわけでもなかった。

1973年、私が生まれたのが1975年なのですが、

その2年前に古牧グランドホテルというのがオープンしました。ここに「大岩風呂」というのができて、第2、第3、第4、そして奥入瀬溪流グランドホテル、奥入瀬溪流第2グランドホテルと、急成長を遂げた。カリスマ社長です。すごい社長です。

それから後を継いだ。バブルが崩壊するところから傾き始めていた。ところが、救世主があらわれます。今日も皆さん、利用されてきたかもしれません。こちらは上越新幹線ですが、東北新幹線が、それまで岩手の盛岡までだったのが、八戸まで延びてきます。新幹線開業というのは、地方の悲願なのです、大体。開業すれば何かいいことが起きる。経済効果が起きて、経済交流が起きて、交流人口が増えます。観光はいけるのです、そのような雰囲気が出ます。実際、それは半分当たり、半分幻想なのですが、それに賭けている。

この間の12月4日、新青森まで開業したのですが、その前に八戸まで開業しております。新幹線は救世主だったのか。外的要因で、観光客が増えるなんていうことを期待した。学校の場合には、突然生徒が増えるなんていうことはなかなかないでしょうが、我々の場合は、新幹線によって増えるかもと期待感が出たのですが、実際どうだったかというお話をします。

これが売上と稼働率のグラフです(略)。一番左側が1995年、このときは絶頂期から下り始めたときです。60数億円の売上。稼働率は60%超。100%に越したことはないのですが、旅館で60%を超えているというのは結構優秀です。週末は埋まるが、平日は埋まらないというのが旅館の特徴ですので、50%超えていれば、うまくやると黒字が出るようなところですよ。悪くはないです。

このころ、プロが選ぶランキングで、日本一になったりしています。ところが、それはいろいろな根回しをして、影響力があるとそういうことができてしまうのです。10年間、1位をとり続けました。

実態は、10年連続日本一の宿と言いながら、

売上は落ちてきています。稼働率の落ちより、さらに売上が落ちている。どういうことか。単価も落ちている。1人当たりの値段も落ちている。安売りをし始めたのです。

「日本一の宿」というのを売りにするのですが、お客は減っている。バブルが崩壊したのは確か。バブルのせいにしたのはいいのですが、とにかく減ってきてしまった。「やばい、やばい」と。新幹線が来るのは2002年。「それまでもたないぞ、どうしようか。安売りだ」と。何と「3,000円1泊朝食付」なんていう激安プランを売り出しました。数を稼ごう。お客さんが飛びつきました。「あ、そんな安い」と。昔は1万5,000円、2万円の世界だった。これが95年ぐらいには1万2,000~1万3,000円になってきている。「あの古牧が3,000円で泊まれる。行こう、行こう。家族で行こうよ」と。テレビCMもじゃんじゃん地元で流して、地元でとっていた。最初は東京に流したら値段が下がってしまうからといって、地元でやりました。ところが、結構来たのです。

98年から99年、お客さんが減ったのが戻りました。稼働率が上がった。「よし、お客さんが増えたとし、もっともっとやろう」といって、CMもじゃんじゃん出して、どんどん稼働率が上がってきました。新幹線が開業するときには、稼働率90%。「よかった。お客さんが戻ってきて」。

東北新幹線開業特集なんていうのが地元の新聞で組まれるのですが、既に準備完了、勝ち組だと新聞には書かれていた。ところが、新聞に載るのは稼働率で賑わっているのですが、売上です。売上は確かに下げ止まりました。よかった、よかった。

でも、よく見ていただきたい。98年から99年、稼働率が上がって、売上ととんとん。お客さんが増えて、売上が下げ止まったで喜んでいいかというと、そんなはずはないです。売上減収で、お客さんが多いということは、出迎えの人数が増える。部屋清掃が増える。そして、料理の原価も上がる。すなわち、98年から99年で、経営はもっと悪化してしまっている。なのに安売り

を続けた結果、稼働率90%で、昔に及ばないということになりました。開業しますが、その後、ドーンと。結局、自転車操業だったのです、この上澄みで、2004年に経営破綻したのですが、2005年に1泊朝食付プランをやめると、こんな状況になりました。経営破綻。総額220億円の負債を抱えて、民事再生となりました。

何でつぶれたのということですが、当然、市役所などで社長が挨拶します。カリスマ社長の息子です。強権政治だったのです。その中で、結局、ぼろぼろになっていた。国が滅びかかっていたと同じように、おかしくなっていた。その社長が記者会見すると、「景気低迷です」と言い訳をします。あるいは、「団体客から個人客に移って、団体客が来なくなった。外部が悪いのです。外的要因です」と言っていたのです。

私が最初に派遣されて、調査しなければいけなかったのは、「本当なの、それ。何が根本原因なの。本当にそれが原因だったら、立て直らない。あきらめるしかない。でも、行ってみました。広くて、ぼろぼろで、これは無理だと思った。ただ、調べれば調べるほど、何だ、やることやってないじゃないか。これはやれば復活するぞ、チャンスあるぞと思いました。

① 顧客志向の不足

その三つの根本原因。まず一つ、顧客志向の不足。よく言われる、おもてなしが足りないというもの。ゲストをこなす、捌くの発想になっていた。とにかく入ってくればいい。お金が集まって、入ってきて、それをこなせばいい。スタッフが悪かったわけではないです。スタッフには、本当に「ありがとう」と言ってもらいたい。でも、格安でスタッフの人数が削られて、お客さんがたくさん来る。結果的に、こなす、捌くしかない。

例えば、我々がアンケート調査をしたら、おもしろいコメントが出てきた。「朝食のリンゴがまずい。青森に来たのに、リンゴがまずい」。何でだろうと調べてみると、適当に仕事をやっていたわけではなくて、スタッフは残業代も減

らされながら、人も減らされながら、リンゴをむかなければいけない。ピークで千人泊まるのです。千人分のリンゴをむかなければいけない。人が足りない。朝からむかなければいけない、あるいは前日の昼からむかなければいけない。茶色くなってしまいます。茶色くならないようにするために、塩水につける。今、もっといいのが出ていますが、薄い塩水につけておくと、茶色くならない。

ところが、当時は、おいしいリンゴを出して喜んでもらうというのが仕事ではなくて、千人分のリンゴを並べるというのが仕事だった。いわゆる、捌く、こなす。しょっぱいリンゴだった。そんなことが起きていた。お客様でなくて、ワンマン経営者を見ていた。

3番目、実は数字の話ですが、お客様が満足しているかどうか、数字で測るものがなかった。アンケートをやっていなかった。

4番目、全く別の話です。スタッフは頑張っていました。偉くなればなるほど、休みがなくなった。その結果、他の良い旅館に行ったことがない。良いサービスを見たことがない。ディズニーランドも行く暇がない。グループで奥入瀬溪流ホテルなんてありましたが、奥入瀬溪流は中学校以来、行ったことがないと、40歳のスタッフが言うわけです。良いサービス、何が良いのかを知らないということ。

5番目、他の部門のことは知りません。どうということかという、縦割りです。フロントはフロント、レストランはレストラン、調理は調理。仲悪いのです。フロントが忙しい時間は3時とかなのです。その時間帯、レストランは休憩をとっているのです。レストランが忙しい時間の7時とかっていうのは、フロントは人が余っています。「あいつら、いつもサボりやがって」みたいな、そういう壁ができています。結局、レストランのことがわからないフロントがお客様に質問されても、「よくわかりません」になってしまう。そんなことが起きていた。お客様を大事にしないということが、一つ目。

② 収益性志向の低さ

二つ目、収益性志向の低さ。先ほどのグラフが示しているのですが、売上高と稼働率のグラフはすぐ出てきたのですが、コストとか、収益のデータが出てこなかったのです。稼働率、売上高優先。安値が唯一の武器だが、採算性を無視していた。3,000円1泊朝食付で来たお客さんが、何と無料で十和田湖の観光ができてしまう。大人気で、お客さんが来る。お客さんが来て、喜んでもらって、儲からない。赤字が増える。そもそも収益情報を管理・共有していないから、儲かっているのか損しているのかわからない。調理長は、会社がつぶれたというのを、奥さんからの電話で知った。何か怪しいとは思っていたけど、調理長に奥さんから電話がきて、「あんた。テレビであんたの会社、つぶれたと言ってるよ」と。どんな状況なのか、赤字なのか黒字なのかも全然知らない。

先ほど言ったフロントとレストランと調理がばらばらだから、みんなそれぞれ人を抱えます。生産性が低い。非常に無駄が多い。なんてことで、利益を大事にしなかった。

例えば3,000円1泊朝食付プランですが、彼らは3,000円だけで儲けると思っていたのです。夕食を食べるはずだと。だって、お母さんは“楽”したいから来る、ゆっくりしたいから来るのです。3,000円で来るのですが、3,000円の夕食を食べて、しかもビールなどを飲んで、飲み放題、1,575円。安いでしょうと。和食膳になるかもしれないし、お土産を買っていけば、1万円ぐらいになるのだ。これが前の経営陣の主張でした。

実態はどうだったか。きちんとお客様のデータを見ていないから、こういうことが起きます。めちゃくちゃ持ち込み。お弁当を家で作って持ち込んでくる。あるいは、ガスコンロと肉と野菜を切ったのを持ち込む。あるいは、「すいません、台車貸してください」と言われて、フロントでお出迎えすると、炊飯器があって、中にといだ米が入っている。お部屋までご案内する。電話がかかってくる。「すいません。はし、あります」「すいません。グラス、貸してもら

えます」「お皿、貸してもらえます」「すいません。大きいビニール袋、あります」。渡す。全部無料です。チェックアウト、お支払い3,000円。生ゴミと汚い皿が残っている。コストはかかる。そんな状態に陥ってきました。結果的につぶれてしまったということです。

③魅力発信力の弱さ

3番目、これは今日のお話にも絡むと思いますが、おもてなしと、もう一つ大事なのは、「行ってみよう」と思うことが大事です。学校の場合も、まず入学試験を受けてみたいと思うことが大事です。入って、東大に行けた。これはいいのですが、入ってもらわなければ、東大に行く教育もできないわけです。入ってもらい、来てもらう魅力。それが魅力発信力です。

自分達の売りは何なの。我々は「コンセプト」と呼んでいます。高級ステーキ店に対して、吉野家のコンセプトは何か。「早くて、安く、うまい」です。これがうちの売りだ。うちの売りって何なのという、その軸がしっかりしていなければ、お客さんも来ないです。

BMW とプリウスは全然違う車です。BMW は、エコカーでハイブリッドである必要がないのです。カッコよく、スポーティーにと。あまり燃費のことは気にしない。プリウスは燃費が大事。そういった違いがあると思います。その売りは何なのか。

古牧温泉は、「安いですよ」で売りになってしまったし、お客様が望むものではなくて、社長の望むものをやった。社長が「こうやれ」と言ったら、こうやっていた。

あとは広告ばかり出して、「来て、来て、来て」だった。青森には酸ヶ湯温泉という有名な温泉がある。あるいは、青荷温泉という「ランプの宿」があります。ここの広告なんて見たことがないです。CMなんて見たことがない。でも、お客さんで賑わっている。古牧温泉は、月に1,600万円、広告費を使っていました。魅力あるところは、広告費がなくても、いろいろな媒体が取り上げてくれる。そういったことをしなかったということがあります。

お客様が減ってきます。施設として古くなっていますから、満足度が落ちる。満足度が落ちて、お客さんが不満に思っ、減る。本来は逆に満足度を高めることが、めちゃくちゃ大事なのですが、それをせずに安易に、利益が減ったので、びびって値段を下げる。一時的にお客は戻るかもしれませんが、単価は下がっているわけ。利益が上らない。また利益が減ってしまうわけ。

値段を下げるのは無理だから、どうしよう。よし、人を削る、あるいは料理の原価を削ろうと。サービスを低下させてしまう。サービスを低下させると、ますます満足度は落ちていってしまう。お客さんは減ってくる。あるいは単価も減る。ますます利益が減って、つぶれてしまいました。このパターンです。本当は逆を追っていかねばいけません。満足度を高めて、サービスをよくする。で、値段を上げてと。

3. 旅館・リゾートの運営において重要なこと

経営の基本だと思いますが、まず来てもらう魅力をつくらなければいけません。先ほど出てきた事例でいうと、プリウスは、ハイブリッドで快適で、ハリウッドスター達が乗っている。是非買ってみよう。今や大型のアメ車ではなくて、みんなエコなのだ、エコなのだ、買わなきゃって。買ってみると、実際はすごく快適だ。品質が高いからだ。その品質を高めてあげることが大事です。この二つは、金をかければできます。

例えば、古牧温泉では、「大間のマグロ、食べ放題、3,000円」とやります。行ってみたい魅力を出して、食べたらおいしいです。ところが、利益が出なかったら、つぶれてしまうわけ。利益を出すというのが同時に必要で、収益性を高めなければいけません。ムダを徹底的に排除することが大事で、生産性を高める。これを行っています。旅館はすごくこれが後れていた。トヨタなんか無駄なくつくる工場の仕組みができています。

例にとりますと、カローラという車が昔、一世を風靡しました。ところが、彼らは魅力づく

りのために、どんどん進化していった、新しい車づくりをして、今、プリウスにたどり着いている。それを満足させて、無駄も削って、利益が出て、また新しい車を開発する。

ところが、古牧温泉は、昔のカローラが安いですよと言っ、今、売っているようなものです。そうではない。我々は魅力をつくっていかねばいけません、来たお客さんに満足してもらわなければいけません。それと同時に、無駄も排除していかねばいけませんというのが、経営の基本だと思っています。

日本の製造業は世界で一流ですが、観光産業は三流だった。商品企画力だったり、それを発信したり、生産性が製造業は高いのに対して、観光業は残念ながら後れています。だから、僕みたいな素人が来て、こんなふうに偉そうに話せるのです。僕は自動車業界に出てこんなことは話せないはず。でも、それだけチャレンジする環境にあるし、魅力もあるし、日本は観光で生きていく。ものすごくポテンシャルのある産業ではあると思っています。

4. 古牧温泉再生の具体的取り組み

①魅力づくりと魅力の発信～コンセプト策定とその具現化～

実際、私はどういうことをやってきたのか。我々星野リゾートでどういうことを古牧温泉の再生でやってきたかということですが、先ほど言ったコンセプトをつくっていかねばいけません。昔は、「超大型旅館で、大きくて、公園がありますよ。それが安いです」となっていたのを、払拭しなければいけません。そのためには、まず狙う相手を絞らなければいけません。誰を狙うのですか。

「どういうお客さんに来てほしい？」と言うと、苦しい経営者ほどう言うのです。「誰でもいいんです」「誰でもいいから、お客さんなら来ていただきたい」と言う。ところが、「誰でもいい」というものほど、誰も買いたくない、誰も行ってみたくない。絞らなければいけません。

事例でいうと、昔はコーヒーといえば、「ポ

ッカ」か「ダイドーブレンドコーヒー」だったわけです。誰もが飲んでいて、今はこれより売上があるコーヒーって、このコーヒーです。「ワンダモーニングショット」。何かというと、「朝専用缶コーヒー」といっているのです。自動販売機で売っていて、自動販売機は24時間売っているにもかかわらず、朝だけ。しかも、朝のサラリーマン、OL に買ってほしい。忙しい時間なのだけど、朝、出勤がてら買って、さっと飲んでほしい。その瞬間だけに絞っています。その結果、「スッと飲めて、キリッと苦味!」、朝すっきりしたいというニーズに応えた。ゆっくり、ゆったり、コーヒーで休憩しようではないのです。「朝、スッと」。それを狙ったところ、「朝専用缶コーヒー」と書いて、「朝、じゃ買おうか」となって、売上が上がった。こういうふうに絞ることが大事です。

私も大好きです、工藤先生も大好きなようですが、お酒が大好きでございまして、昔だったら、「ラガー」「黒ラベル」だったかもしれない。王道の商品があった。ところが、今はそれに対して「キリンラガー」も「プレミアム缶」がある、「一番搾り」が出たりとか、あるいはうちはどっちかということこっち派ですが、お金がないので「発泡酒」というのが出て、知恵と工夫をしたり。「発泡酒」は安いだけではなくて、「お父さん、ちょっと健康に気をつけなさい」と言われると、「糖質ゼロ」という、ちょっと味は落ちるかもしれないが、機能性を高めた商品。「ラガー」が王道だけでも、細かい。さらには、「のどごし〈生〉」がいい。

あるいは、「アルコールが入ってなくても飲みたいんだ、ビールを」という需要に応えるために、「フリー」というのも売れている。今の世の中、結構絞って、ここが売りだよというところの商品が売れるようになってきた。

その上で、ではどう戦うのかというと、素材の良さを見直そう。こだわりだったり、違い、自分達の売りって何なのということを大事にしなければいけない。我々は、星野佳路だったり、私のように外部から来た人間がそのコンセプト

を決めたのではなくて、優れた古牧グランドホテルに前から勤めていたスタッフ達に、全国を見に行かせました。東京から離れていて、古牧温泉と同じように大型旅館で、古牧温泉とは違って成功しているところ、例えば和倉温泉の加賀屋さんだったり、鹿児島からいらっしゃっていますが、指宿の白水館であったり、北は敦賀さんであったり、そういうところを見て回る。

そういうところを見て回ると、「いや、おもてなし、すごいな」「お姉さんの接客、すごいな」「鹿児島の魅力を出してんだ」と、よその良さもわかるんだけど、「待てよ、うちボロボロだけど、うちの温泉の泉質って、すごくいいよね」とか、「加賀屋に行ったら、結構、全国から中居さんが集まってるけど、うちはみんな南部弁で訛ってるよね」とか、違いが見えてくるのです。その自分達の強みであったりというのを生かしましょう。集めました。

南部、津軽、下北という、青森県は三つの地域に分かれます。言葉も違いますが、その中心地に位置できる。「広い公園もあるよね、うちって」「博物館があって、その中に古い収蔵品があるよね」「豊富な湯量、しかもすごく泉質の良い温泉があるよね」「スタッフ、訛ってるんだよね。みんな訛っていて、何言ってるかわからない」「祭り文化が地元にあるよね。青森の文化っていいよね」、こんなことに気づきました。

そこで生み出されるコンセプトは、自分達の強みは何で、お客様に何を提供するのか。うちはこれが一番強いんですよ。先ほど言った吉野家だったら、「早くて、安くて、うまい」、これが強みです。豪華ではないです。あるいは、プリウスと BMW を出しました。BMW はカッコ良さです。これに対してボルボという車は、彼らは安全だと。ターゲットはファミリー。うちの強みは安全なんだ。だから、サイドエアバッグを先につくる、安全に特化するということをやっていく。自分達のこだわりです。

こういうことをやると、大体、地元の旅館さんも、「いや、うちは何もない。良いよね、お

たくはいろんな施設があって、公園があったりして」「おたくはお祭り棟があって良いですよね」「おたくは豪華な客室があるから良いですよ」と、他のいろんな良い色ばかり見えてくるのです。でも、青森はぼろぼろだった。人も疲れてしまっていた。

そのときに大事なことは、この間、誰かに言われたのですが、クレヨンに例えると、「他はみんな何色もあって良いよね、美しい絵を描くに当たって」「いろんな色があって良いよね、おたくの色はきれいだね」と言いますが、そうではなくて、何色あったってしょうがない。それによって絵が描けてなくても、なくてはいけない。自分の色は何色なのかということを、僕はひょっとしたら緑と白しか持っていない。その二つで描ける絵を描こうぜ。何色もないと悩むのではなくて、緑と白があるではないか。それで描ける絵って、何？そうすると、青葉の絵を描けるかもしれない。そこが我々の売りだよ。

黒しかない。黒では絵が描けない？水墨画的な絵が描けるかもしれない。しっとりした絵が描けるかもしれない。それが売りだよ。

つつい、いろいろな色があったりすると良いし、他の色をまねしたくなるのですが、自分達しかない、例えば色が少なくても、それが売りになること気づくことがスタートラインになります。

我々の「青森屋 古牧温泉」の場合は、前は「古牧グランドホテル」だったのですが、最後行きついたコンセプトは、「のれそれ青森」。「のれそれ」とは津軽弁で「目いっぱい」です。たぶん工藤先生は、昨日、のれそれ飲まれたのだと思います。そういうふうに使います。「のれそれ飲むべえ」と言うと、めちゃくちゃ飲むぜと。

実は古牧温泉のポテンシャルと青森県の魅力と一致しているよね。夏祭り、海の幸、山の幸を提供できる。郷土料理もあるし、湯治という文化もある。その温泉は、うちはすばらしいよね。自然もある、公園もある。スタッフは方言を喋るよね。そういったものを売りにしていこ

うではないか。だから、我々は青森文化を徹底的に体感できる旅館になりましょうと。

行っていただくとわかるのですが、スタッフのサービスはまだまだ洗練されていないです。全然今一かもしれない。でも、めちゃくちゃ青森です。青森らしい。グランドホテルではないです。豪華なシャンデリアは要らない。きれいになる必要も、きれいになったほうが良いのですが、それよりも優先すべきことは、俺達は青森らしさを出すことを徹底的にやろうぜと。

実際、ハードを改革していきます。でかいカッコ良い宴会場があったのですが、古くなってしまった。年に数回しか使わない、今一だった。競争力もない。青森市内のほうがよっぽど良い。そこをどうしようか。ではここにしかないものをつくろうとってつくったのが、「みちのく祭りや」という青森の祭りをテーマにしたレストランをつくって、ねぶた（青森）、ねぷた（弘前）、三社大祭（八戸）の山車を並べて、ここでお囃子をする。スタッフが覚えてお囃子をするし、青森郷土の料理を出して、三味線民謡ショーをやろうぜ。これは加賀屋さんでできないです、絶対に。青森でしかできない。ここで勝負しよう。豪華な、すてきな宴会場だったら、加賀屋さんに勝てない。でも、これはここでしか絶対できないのだと。

「大岩風呂」というお風呂がありました。新しくお風呂をつくったのですが、昔は、日本一の大岩風呂というのが人気だったのです、30年以上前は。ちょっと陳腐化して、古くて。でっかいお風呂なのです。滝まである。滝も全部温泉なのですが、よくこんなをつくったなという。岡本太郎監修らしいですが。

時代がたって、アンケート調査をとってみると、スタッフ達は、「これが売れているんです」と言うのですが、実際には暗くて、遠くて、寒くて、今一だ。これを直そうと思ったら、10億かかる。これは無理だ。閉鎖しよう、捨てる覚悟をした。

もう一つ温泉がありました。内湯で、「瑞鳳浴殿」というのがあった。悪くない温泉なので

す。外の景色も見えて悪くないのですが、ただ、問題点が幾つかあった。パッと見て、青森っぽくはないと思います。魅力として青森らしさがないというのと、もう一つ洗い場が足りていない。結果的に不満を持っていた。機能的な不足と魅力を何とか解消しよう。これはリニューアルしよう。もっと魅力的にしよう。

となると、みんなで考えるわけです、スタッフ達で。パートのおじちゃん、おばちゃん、夜中しか来ない清掃のおじちゃんに来てもらって、青森らしい温泉って考えてみよう。「何？」という、星野佳路も私もわからない。でも、みんな知っているのです。「あ、酸ヶ湯温泉とか、谷地温泉だよ」「鄙びてんだよね。何か薄暗いんだよ」「青森はヒバだよ」。誰からもジャグジーという声は出てこないです。「青森らしいというのは、熱湯とぬる湯って、湯治場で二つの違う温度のお風呂に入るんだよ」。

でき上がったのが、このお風呂です。開放的だったのをわざわざ下げて青森っぽくして、外に見えるのですが、オール青森ヒバにして、熱湯とぬる湯という二つの浴槽をつくることで、ジャグジーはないが、「青森に来たな。青森の湯治文化だな」と感じてもらえる温泉になった。

露天風呂もやりました。露天風呂はこんな感じだった。実際、岡本太郎監修で、岡本太郎がつくった、謎のカップの像があったのです。このお風呂も問題点があった。これも青森らしさを感じられないのと、広さが不十分。あと深さが70cmあって、溺れるという問題点がありました。これは経営者が、回転率を高めるために、わざとそうしたという。顧客満足度とはかけ離れたことをやっていたのです。

これをリニューアルするに当たっては、こういうお風呂です。これは何かというと、外につくるのだから、青森の自然を表現しようではないか。ここはコイが泳いでいます。コイにえさをやれるお風呂なんてなかなかないです。ここをじゃぶじゃぶ歩きながら行くのですが、十和田湖、奥入瀬、八甲田、美しい水と緑を一番表現できる形はどうしたらいいのだろうというこ

とで、池の中に浮かぶ「浮湯」というのをつくったりしました。

名前も変えました。それまで「古牧グランドホテル」だった。でも、我々が売っているのはグランドではないです。我々が売っているのは青森らしさだということで、グランドホテルを統合して、「青森屋」という名前に変えた、青森を売っているのだから。最初、スタッフから抵抗がありました。旅行会社は、売りやすいと言って喜んでくれた。「青森だから、『青森屋』ですよと言える」。

同時に、選択と中止です。全部変える金なんてないです。あまりお金を出してくれないです。その中で、捨てるところは捨てる。あきらめるところはあきらめるところのも大事でした。「お祭り広場」なんていって、「じゃわめぐ広場」というところに、昔の博物館にあった展示物をやったり、民謡ショーをやったり、「南部裂き織り」という地元の織物でこういった看板をつくったり、昔懐かしい雰囲気を出した。博物館にあったものを廊下に展示したりしています。

だんだん宣伝になってきて、話がみんな青森に行ってほしいなという思いになってきました。売店もこんな感じです。

ロビーもリニューアルしました。ロビーはこんなぼろぼろだったのを、青森らしくしようということで、こんな感じになったりしています。

バイキングレストランもそうでした。これだけ青森を売ると言っていたのに、前のバイキングレストランはこうだったのです。世界のバイキング食べ放題。違和感がありますよね。青森を売っている旅館なのに、世界のバイキング食べ放題ですよ。そこなのです。ここに違和感を感じるときに、だんだんその“らしさ”が出てきて、その違和感を排除していかなければいけない。

昔はこういうきれいな豪華なところだったのですが、遠かったり、いろいろ機能的な問題があった。よし、青森らしいものをつくろう。青森らしさって何、青森の魅力って何？ 郷土料理と新鮮な野菜だ、お母さんの温もりだ、“か

っちゃ”（お母さん）だ。それを表現しようといつてリニューアルすると、こんな形になった。

入口に“かっちゃ”がいて、割烹着を着て、野菜が並んでいて、井戸があって、それを目の前で切っているのです。「人件費がかかるんじゃないですか」、前から裏でパートで来ていたおばちゃんなのです。その人が割烹着を着ると、「新鮮ですね」と言われてしまう。そんなバイキングレストランをつくったりしました。

地元の高校と組んで、ゴボウアイス、ジャガイモアイスというのを出しました。これはもともと地元「田舎スイーツコンテスト」というのがあって、僕はそのNPOの理事長になってしまったのですが、準グランプリだったのですが、そこで最高評価を得た。地元の素材を使っていて、青森らしさ。三沢はゴボウの産地です。日本で一番とれるゴボウの産地。そのインパクトがあって、かつ何よりもおいしい。これはうちのコンセプトにばっちりだよねということで、このアイスをバイキングでもこういった形でお出しして、バニラ、ストロベリー、抹茶の間にゴボウを入れた。

これが難しくて、青森のホタテアイス、イカアイス、長イモアイス、ゴボウアイスとやると、お客さんは「食うものがなかった」と言うのです。では、ストロベリー、バニラ、チョコ、抹茶とやると、「地元のもが食べたかった」と言う。この間に1個、ゴボウアイスを入れると、ちょうどいいということも、やりながら気づいています。

「朝もぎまんま」なんてやりました。お客さんに自分で野菜を採ってきてもらい、自分で切っていただき、お金をとるという商売です。ちなみに、これは私の娘でございまして、かわいい娘です（写真略）。お金もないので、モデルも自社調達です。

青森らしい、曲がり家みたいなどころがあるので、そこで朝食を食べる。朝食1,500円、プラス1,500円です。昔だったら1泊朝食付の値段で、朝飯しか食えない。でも、お客さんは喜んでくれるし、これで取材がとれるのです。こん

な青森らしいことをやっていますよと。広告費を払わなくても、東京から取材陣がやってきてくれる。

ばかばかしい宴会芸ですが、スコープ三味線。これはスコープをたたっているだけです、音楽に合わせて。めちゃくちゃ人気です。これもスタッフ達が楽しむということがすごく大事です。世界大会があつて、優勝しました。世界大会といつても、99%青森県民なのですが、アメリカ人が1人参加したということで、世界大会になった。第5回までやっています。

我々が約束しているのは、最初に申し上げました質が高いだけではなくて、地域の魅力をつくるのが大事。我々は青森らしさを売ってこうということをすごく大事にしています。京都にも旅館がありますが、京都は京都らしさを売っていかなければいけないです。

今度、沖縄・竹富島にも出ます。そうすると、島文化を売っていかなければいけない。竹富島でねぶた祭りを見たって、「何じゃ、それ」ってなるわけです。そこら辺、自分達らしさを出すのがすごく大事です。

その時に大事なのが、これはちょっと学校では別かもしれません。五感で伝えるということ。味だけではないです。よく芸能人がテレビ番組で、10万のワインと500円のワインを区別できないのと一緒にですが、意外と人間というのは五感で感じています。好きな彼女と一緒にピクニックに行ったときのおにぎりは、コンビニのおにぎりだっておいしいのです。高級な米を使っているかどうかではなくて。そのシチュエーションで伝えてあげる、五感で伝えるというのが大事。例えばバイキングレストランでも、「のれそれ食堂」という意味はこうですというのを、マットにつくってあげたりとか。

あるいは、「雪見こたつ馬車」なんていうイベントをやっていますが、ちゃんちゃんこを着せて、馬に乗ってという、途端に青森らしいわけです。コスプレというのはすごく大事で、これもうちの息子だったりするのですが（写真略）、こうやって衣装を着せさせると、途端に

大評判です。先ほど出てきたこれも、お子様に着せたり、お母さんが着たりすると、それだけでなりきってしまう。そういった視覚だったり聴覚が結構大事だったりします。

そのときのポイントですが、1回つくれば終わりではないです。常に進化し続けることが大事で、どうしてもハードに頼りがちですが、さっきハードが出てきましたが、ハードをつくった後が大変です。ハードをつくるために、どうしたいのかと考えるのが大変です。成功しているところは、みんな継続的に進化している。先ほど取り上げましたトヨタもそうです。ユニクロも、最初はフリースからスタートしたのです。フリースが爆発的になって、その後、ヒートテックだ何やらいろいろな出てきた。常に新しい魅力をつくり続けることが絶対的に大事なことです。

その意味で参考になるのが、こちらです。北海道、旭山動物園です。旭山動物園は今、200万人以上を集めていますが、一時は20数万にしか来なくなってしまっていて、つぶれるかという危機になった。それが200万人集まったのは、豪華なハードを一気につくったわけでも、新幹線が来たわけでも、何か変わったわけでもないのです。地道に一步一步変えてきた。96年に26万人ぐらいまで減ったのが、そこから徐々に、「とりの村」、「もうじゅう館」で猛獣が見られるようになって、「さる山」「ペンギン館」といろいろなものを作ってきました。上がっていった。

その軸となったのが、彼らもやはりコンセプトを明確にしたのです。うちの動物園の売りはこうだろうとか、どんな動物がいるというものではなくて、うちは行動を見せるのですと。確かサンディエゴの動物園から学んだはずですが、こんな動物がいます、パンダがいますよではなくて、うちのアザラシはこう泳ぎます、ペンギンはこう歩きます、オランウータンはこうやって木を渡りますと。何がいるではなくて、見せることに特化しよう。ご飯を食べますよというところを見せる。それを変革のコンセプトにした。それに特化したら、いろいろな取材が

来たり、「あそこはおもしろいよね」「ただ、動物がいるのを見るのではなくて、いろんな動物の姿を見れるよね」。

それを毎年のように、鳥は飛んでいるものだから、飛んでいるように見せるために工夫をしたし、オランウータンは檻の中で座っているのがオランウータンではなくて、木を渡っているのがオランウータン。それを見せるために、わざわざそれが通れる道具をつくったりした。アザラシなんて有名ですね。継続的進化をしていくことが大事です。

例えば、ゴボウアイスも、最初はカップアイスだけだったのを、シューアイスなんていうのを高校生なりに進化をさせて、またパブリシティをとっている。「あ、ゴボウアイスはいいよね」となっていくということです。

あとパブリシティをとるときは、「1,000個販売達成」といって、マスコミを呼んでやる。無料です。当然、このプレゼントは、箱に長イモとゴボウが入っています。

ということで、後ほどお読みいただきたいのですが、テキストに「開業の効果／魅力を常に進化させよう」というのが、まとめて入っていますが、成功しているところは、例えばヨーロッパの老舗ブランドであったり、いい酒蔵さんだったり、あるいは京都の和菓子屋さんだったり、生き残っているところほど進化し続けています。NHKの「プロフェッショナル」で京都の和菓子屋さんが出ていましたが、確か源氏物語の話かなんかをどう入れていくかということで、知恵と工夫を練られている方でした。京都から学ぶことはすごく多いです。

その次のポイントです。盗んでしまえ。魅力を一から開発するのは結構難しいのです。一から学校の魅力を開発するのも、結構大変かもしれない。それは自動車メーカーでいったら、全く自動車の知識がなくて、自動車がよくわからないけど、自動車を突然つくるなんてそんなことできないわけです。低燃費の部分だって真似ることはできる。成功事例を堂々と参考にする。

成功事例だけをそのまま真似たら、それはた

だのパクリです。それに自分達らしさを入れる。例えば、「みちのく祭りや」というさっき出ていた、ねぶた祭りとかのショーレストランです。これはもともと、僕が今いるアルファリゾート・トマムに「よさこい」のショーレストランがありました、「祭りや」というのが。バイキングとよさこいが楽しめる。ところが、僕は青森の支配人として、「これはパクれるな。結構お客さんが一緒になって喜んで踊ったりしてくれる」「まてよ、祭りは青森だろう。青森のねぶたの山車があって、お囃子があって、しかも三味線があって民謡があったら、青森のほうがいいんじゃないの」ということで、青森らしいものにした。

あるいは、「のれそれ食堂」という青森らしいバイキングレストラン。これも一からつくるのは大変で、バイキングのノウハウを知るなら、いいところへ行こう。品川プリンスの「ハブナ」ってどうやらいーらしい。全国いろいろなところに行ったのですが、その中で参考になったのは、品川プリンスの「ハブナ」。ここは女性客に人気。20代、30代の女性客が彼氏を連れてきたり、あるいは女性同士で来て喜んでいます。

人気のポイントは、入口を入るといきなりある、このケーキコーナーです。ドキドキしちゃう。「キャー、すごい。後で食べようね。別腹、別腹」と言いながら、先にカニとか、寿司とか、さんざん食べます。その後、ケーキを食べる。ケーキを食べて、戻ってきて、出口がここにあるのです。ここを見ながら、「いやあ、あれおいしかったね。あれ食べた」と品評会をしながら、最後にみんなの記憶にあるのです。「ハブナ」のデザートはすごいというのを、入るとき、出るときに、必ず確認していく。これ、バイキングでは大事ではない？ということに気づいた。バイキングって一品ごと説明できないのです。バイキングレストランの入口のインパクトは、めちゃくちゃ大事ということに気づいた。

もう一つ、ドリンクを売るのにどうしたらいいのだろう。ここはワインタワーがあるのです。彼氏がいると、ついつい見栄張って買ってしま

うわけです。「これもいいな。よしパクろう」。

青森でやる。青森のターゲットは、60代、70代です。それにケーキなんかやったら胸やけ起こして大変なことになります。なので、どうしたか。我々のターゲットに合わせて、このノウハウを生かしたらどうなるかという、入口のインパクトだから、入口に井戸をつくって、野菜を並べようと。わざわざここを通して、この売りはケーキではなくて、ここは野菜なのよ。野菜がいいのよと、すり込ませましょう。入口に入ってきて、「ああ、野菜切ってるのね。新鮮ね」と言う。帰りに、必ずこの井戸をさわっていきます。記憶に残るわけです。「ああ、あそこ、野菜がおいしかったね」。野菜は限界率が低いのです。経営にも効いてきます。それがないと、「天ぷら、ないの」「ステーキ、ないの」になるのですが、野菜料理を主にしたと喜んでもらえるのですが、何より入口が大事ということを学びました。ワインタワーなんてカッコいいものでなくて、地酒ブースをつくる。こういうバーができる。

あるいは、「雪見こたつ馬車」なんて青森っぽいのです。これは由布院の馬車からです。馬車っていけるのだ、成功するのだ、お客さんの人気が出るんだ、お金出してでも乗るのだ。これをそのまま馬車持ってきたら、「あ、由布院の真似ね」と思われるわけです。そこに青森らしいものは何？雪でしょう、寒さでしょう。「なべっこだんご」というおやつもいいかもしれないね。ちゃんちゃんこ着せようか。方言で案内しようかという、途端にこういう「雪見こたつ馬車」になる。いいところに自分達らしさを加えてあげる。それによって勝てるものになってくる。

日本の車メーカーはそうです。フォードとか、海外の自動車のノウハウを学びながら、低燃費というので最初、地位を築いていったはずです。あるいは、無駄なくつくる。そういったことが大事かもしれないです。

ということで、「成功事例」＋「独自色」が成功確率の高いオリジナルになりますというの

が、私の成功の方程式だと思っています。独自性がなかったらアウトです、猿真似なのです。他のうまくいっているところを見ると、うちのほうがいいというプライドが出てくるのです。

「うちはこんなところがいいよね」と気づいてくる。現場のスタッフほど気づきます。

ということを繰り返しながら、我々は魅力をつくって、来てもらう。あるいは、満足度を高めていったり、ムダをなくすのですが、これはやはり製造業が進んでいますから、星野リゾートは製造業から学ぶことがめちゃくちゃ多いです。ちなみに、星野佳路の奥さんは日産の副社長で、一昨日も NHK ニュースに出ていましたが、女性経営者としてもトップクラスのようです。製造業のマーケティング手法、生産性向上手法は、すごく我々は学べるなと思っています。というのも参考事例に、私がたまたま地元の新聞で書いたのも入っておりますので、是非ご覧ください。

② お客様満足度の向上～変革し続ける顧客志向の自律型組織～

満足度が落ちていた2008年1月です。どちらかというと、私は先にリストラのほうをやりました。給与変革をやったり、閉鎖するところは閉鎖したりと。満足度は次だと思っていて、体制が整っていないときに、ちょうどいいメールがきました。少しずつハードの改装が決まっていたのですが、2008年1月に届いた旅行会社からのメールです。JR 東日本びゅうという旅行社ですが、その事業部からのメールです。「お世話になっております。びゅう事業部の〇〇よりメールが入ったと思いますが、今回の件が本当ならば、お部屋の対応といい、フロントの対応といい、日常行われていると思われても仕方ありません」「せっかくリニューアルして、ホテル名を変更しても旧態依然のままでは、商品設定を考えなくてはなりません。今後は大丈夫なのでしょうか」、こういうことでした。事実それぐらいのレベルだったのです。

調査してみると、こうだった。到着時の挨拶が事務的だった。みんなパソコンを見ながら、

「いらっしやいませ～～」。「おお、居酒屋か何かか」という。なぜか、「せ～」が伸びている。

「いらっしやいませ～～」と言う。

チェックインは3時ですが、2時に着いてしまった。「すいません。ちょっと早く入ったんですけど、佐藤です」と言う。そうすると、「チェックインは3時でございます」、追い返してしまった。「すいません、また出直してきます」。正しいことを言っているのです、チェックインは3時。結局、4時まで待たされた、清掃が遅れて。

料理を食べてみたら、説明がいいかげんで、「これ、何ですか」と聞いたら、「よくわかりません」と言われてしまった。「異物が入っている」と言ったら、誠意がなかった。「料理なんか食ってられっか。明日、他の観光地で楽しもう。少しぐらいどっかいいところを紹介してもらおうか」って、フロントへ行って、「どっかいいところあります」と聞いたら、「よくわかりません」と言ってしまう。些細なことなのです。これが根っこにあった。

これに対して、スタッフにチェックインの挨拶は、マニュアルでこれが大事です、挨拶はこうですというのも大事です。そういったマニュアルをつくってあげるのも大事。ただ、それを一つ一つ私がつくるわけにいかないです。論理も大事ですが、共感しなければいけない。みんながわかりやすいような価値観を伝えなければいけない。うちのリゾートの価値観の一つが、「顧客は大切な友人」というのがあります。「お客は友人、社員は家族」というのが、我々の大事な価値観です。「お客は神様」というのがよくありますが、我々は「大切な友人」と言っています。

これは実際に青森の古牧温泉で使った、スタッフ向けにやった資料で、ここからスタートします。みんな、「顧客は大切な友人」と考えて。さっきのクレームのメールも見せました。

みんな、こういうのを考えてみようよ。あなたにとってとても大切な東京に住む友人が、あなたのうちにわざわざ遊びに来ます。遊びに来

るんだよ、東京から。新幹線代3万円以上払って。しかも、あなたのうちに1万円払ってくれるのです。その東京から3時間以上かけて新幹線でやってきた友人が到着したときに、何て言う。「いらっしやいませ〜」と言うの。言わないでしょう。「よく来たねえ、お疲れさま。新幹線、どうだった。思ったより早かったでしょう。あなたのためにおいしい料理を用意しているから。その前に、疲れてるだろうから、早くお風呂に入って」と言うでしょう。何より労るでしょう。よく来たねと言うでしょう。何でそれができないの。友達があなたのうちに来た時はお金を払わないかもしれないが、お客さんはあなたの給料まで払ってくれる。友達だったらやるということをやってごらんよと。

当初、友人は、新幹線の時間で3時頃に着くからねと言っていました。今日は、お昼までご近所さんが来て、散らかっています。3時に来るから、3時までには片づければいいやと思っていた。ところが、2時過ぎ、ピンポンってチャイムが鳴った。どうやら友人が早く着いたようです。「ごめん。新幹線1本早く乗れたから、早く着いちゃった」と友達が言った。どうする？

「3時と言ってたでしょう。3時に来て」と言うの、友達に。言わないでしょう。「あ、そう。早く着いたの。よかった。で、ごめんね。今まだ片づいていないの。すぐ片づけるから、ちょっとだけ待ってくれる」と、申しわけなさそうに言うでしょう。慌てて片づけるでしょう。あるいは、何とか早く入れてあげようと思うでしょう。もし部屋が片づいていたら、入れてあげるでしょう。何でそれが友達だったらできるのに、できないの。

友達が到着したとき、外は大雨で、あなたの友人はずぶ濡れです、どうしますか。タオルを渡しますよね。「風邪引くから、拭いて、拭いて」と言う。ところが、当時の古牧温泉のスタッフに、「どうする」と言ったら、「いや、タオルはクリーニング代50円かかるんですよ」と言ってしまうわけです。途端にここでコスト意識を発揮してしまう。友達だったらどうするとい

う判断をする。

あなたは友人に地元の食材をふんだんに使って豪華な料理を用意してください。友人からアピオス（ほといも）を、「これ、何？」と聞かれました。どう答えますか。料理を出しているのです。「ほといもというのはね、栄養価が高くて、畑のバイアグラっていうんだよ」と、そういったストーリーを言いながら、友達だったら言うはずです。ところが、この時は「わからない」と言ってしまうのです。おいおいおい、友達が来たのに、何かわからないものを食わせるの。違うよね。

「デザートに、ちょっと硬い何か入っているんだけど」と、友人はたぶん申しわけなさそうに言う。どうするの。「ごめんね」と謝るでしょう。なぜできない。

振り返ってみて、あなたはお客様を大切な友人として接していましたか。クレームの大部分は、大切な友人として扱わなかったことが原因です。わざわざ来てくれた、あなたにとっても大切な友人です。もっと関心を持ち、もっと親身にと。これをやった途端、結構スタッフの動きが良くなりました。自分で判断していいんだ。友達だったらやっていいということをやっているのだと。イメージしやすくなったのです。

例えば、奥入瀬溪流へ行こう。外は雨。チェックアウトするお客さんがいる。ビニール傘がある。お客様が傘をどうしても欲しがっている。さあ、どうするか。ばあちゃんの形見だったら渡さない。ビニール傘だったら、友達だから渡すじゃない。いいよ、渡してしまっ。そのときに、一々許可なんてとらなくていいから。その基準が友人だったらするレベルだよということ。チェックアウト時に、「よく来たね、ありがとう」と言うわけです。その一つの基準が大切な友人ということです。これは一つの事例ですが、共感なくして論理は通じない。自分で判断をしてほしいと思っています。

③ 生産性の向上（ムダの排除）～マルチタスクへの挑戦～

持続させるためには利益が重要。観光業界で

つつい誤解されるのが、「観光を高めるのはおもてなしだ」と言ってしまうのです。確かにおもてなしなのです。だから、「ただでもいいですよ」「安くしよう」という圧力がかかりやすいです。安くして、利益が出なくなって、一瞬喜んでもらえるけど、その先のお客さんに喜んでもらえなくなります。3,000円1泊朝食付で喜んでもらっても、つぶれたら意味がないのです。我々はきちんと利益を出して、それで再投資することで、また持続可能になるし、喜んでもらえる。その投資先は、まずオーナーに返さなければいけない。僕は3分割。オーナー、スタッフ、そしてお客様。お客様には値下げ還元ではなくて、その利益でリニューアルする。新しい魅力をつくる。もっと良くしてあげるということを繰り返す。それがすごく大事なことだと思っています。

利益を出す工夫なのですが、旅館の場合、ばらばらです。「私、フロント、何年やっていました」とか、大型のシティホテルもそうですが、「ベルボーイを何年やっていました」、お出迎え担当、接待担当。ところが、お客さんというのは、チェックインの前に夕飯を食べません。フロントはフロント、お出迎えはお出迎え、接待は接待とプロのようになるのですが、かなりムダが多いのです。

フロント。チェックインの時間、3時から5時というのは、スタッフ10人必要ですが、7時以降要らないのです。ところが、フロントしかできないから、7時、8時でも残っているのです。あるいは、中抜けさせて、朝来て、昼休憩させて、夜来させる。いい人材来ないのです、そんなきついところは。無駄が多いし、スタッフのモチベーションが低くなる。

我々は、「マルチタスク」と言っています。これはメーカーでも同じことを言っています。「多能工化」ということです。ある人に依存しなくて、全部複数こなしてやります。例えば先ほど出てきた「みちのく祭りや」というのは、お祭りショーレストランです。調理もします。料理も提供します。踊ります。笛を吹きます。

笛を吹くためのプロを雇って、調理人を雇って、接客要員を雇ったら、利益出ません。全部やらせます。

まず出社すると、調理をやります。あるいは、半分の人材は客室清掃にいきます。その後、お出迎えにいきます。お出迎えに行った後、会場セッティングをして、休憩をした後、料理を提供して、「おいしく食べて行ってね」と言って、ショーに出ます。で、終わって帰る。大変そうですけど、1時出社で、11時に帰れるのです。9時間で帰れる。旅館は朝6時に来て、夜10時に帰るというのが結構多いのです。それが良い人材を生んでいないのですが、そういった効果があります。

もう一つは、お客さんに寄り添っています。例えば、チェックインのときに、お客さんが誕生日だとか、「今日の夕食、祭りやで待っているからね」と言ってご案内できる。あるいは、今日、お婆ちゃんの誕生日なんだよと言ったら、何かサプライズをすることができる。

あるいは、料理を提供します。文句が出るかもしれない、クレームが出る。「これ、おかしいんじゃないの」と言われる。旧来型だと、それを調理に言う。調理は「そんなことで、おまえ、何がわかるんだ」と怒る。ホールが黙ってしまう。

ところが、この場合だと、うちのスタッフが自分達でつくっていますから、何が悪いかわかっているから、何がいけないのかって、すぐ謝れるし、翌日からすぐ改善することができる。プラスにもなるということで、我々はマルチタスク化をどんどん進めています。こういった生産性向上の仕組みが必要です。

ここに帰っていくのです。来てみたい魅力をつくる、満足度を高める、そして生産性を高めるということです。

それを言うのは簡単なのです。僕が全部マニュアルをつくって、「こうしなさい」と言ったら簡単かもしれない。いやあ、簡単ではないです、ここは大変ですとなると、大事なのはやはり人なのです。スタッフなのです。スタッフが

勝手にやってくれるようにならなければいけない。工藤先生と一緒にするのは、いかに僕が楽しめるか、外に行けるか。いなくて回るかという状況に持っていくのが大切です。組織づくりは、人づくりです。

5. 組織づくり、人づくり

① 目指す組織は、自律型サッカーチーム型組織

我々が目指す組織はどんな組織かということですが、二つの事例です。僕は阪神ファンです。さっきサッカーで言いましたが、二つともいいスポーツです。どっちがいいスポーツかと言えない。だけど、我々のサービス業というか、旅館業においてはどちらかです。私の会社が目指すのはこっちです。どっちがいいか、白黒つける気はさらさらない、甲乙つける気はさらさらない。我々が目指すのはどうかというと、通常の会社ですと、ピラミッド型の組織です。社長がいて、上司がいて、スタッフがいてと。一々お伺いを立てる。先ほど工藤先生が仰った「ホウレンソウ」をしてやる。

例えば、お客様がスタッフに、「すみません。今日お婆ちゃんの誕生日なので、夕食のとき何か喜ばせてあげたいんですが、何かできますか」と言う。そうすると、上司に報告する。「ちょっとお待ちください」「課長、何か喜ばせたいと言ってるんですけど、やっていいですか」と言う。課長は部長に「いいですか、これやっちゃって」って。そんなことをやっていたら、お客さんは何て言うか。「いいです、いいです」って言うので。そんな面倒な時間がかかることは。すぐ応えてあげるようにしておかないといけない。

あるいは、業務外に、娘さんが体調を崩してしまった。「病院を紹介してもらえます。送ってってもらえます」「少々お待ちください。課長に送っていいか確認してまいります」なんて言っていたら、時間がかかってしょうがない。それをさっさとやる。すぐ自分で判断してほしいのです。

ピラミッドだと、どうしても一方通行、ある

いは時間がかかってしまう。ではなくて、我々はこういう組織になっています。総支配人がいて、ディレクターというキャプテンみたいな存在がいて、あとはプレーヤーという、フラットな組織です。お客さんから何か言われたら、それは自分で判断していく。後から報告すればいい、後から。自分で判断していいよと。

野球の場合だと1球ずつサインが出ます。ピッチャーとキャッチャー間もそうですし、バッターの場合も、次はバントだ、打て、**hit & run**だなんて、指示が監督から出る。それは間があるからできるのです。私が前にいた会社は、間があるからできるのです。ちょっと持ち帰ることができる。

ところが、サービス業の場合は、目の前のリクエストに対してすぐ応えてあげなければいけない。サッカーと一緒に。サッカーでパスがきた。「監督、次、パスしましょうか。シュート打っていいですか。センタリング上げましょうか」なんて確認していたら、ボールとられてしまう。自分で判断して、パスするのか、センタリングするのか、シュートするのか、決めないといけない。それが連続しているのが、全くうちと一緒に。我々が目指す組織というのは、自由に、相互でコミュニケーションする。1人1人が自律的に動くサッカーチーム型組織を目指しています。

好きに動いていいわけではないです。強いサッカーチームほど戦略が理解されています。守りなのか、攻めなのか、相手情報を知っています。我々の相手というのは、お客様です。お客様の情報を知っている。みんなが自由にカバーし合う。空いた穴のところ、スペースには埋める役目が出てくる。それを自分達1人1人で判断する組織を目指しています。

② フラット組織実現に必要なこと

環境も整えてあげなければ、やれと言ってもできないわけです。目的、何が大事なの、目標が明確であることが大事だし、権限委譲を進めて、ミスを責めずに、チャレンジを奨励する。

あとはスタッフが自分で判断できる。サッカ

一チームでいったら、相手チームの情報が一々監督に聞かなければ出ないのだったら、そのサッカーチームは弱くなるわけです。ディフェンダーだったらディフェンダーが相手チームの攻めのパターンを知るのは、コーチから聞くのか、スコアラーから聞くのか、いろいろなアクセスができなければいけない。自由にアクセスできるということも大事ですし、意見は、言いたいことは言いたい人に直接言えるようにしよう。

うちは、基本的にさんづけです。支配人と呼ぶなど言っています。大体失敗する事例というのは、社長の思いつきだったり、僕の思いつきでやるのは失敗します。そのときに、悪いのは社長なのですが、スタッフもそれをいいことに、言い訳をします。「だってこれ、社長がやれって言うんだもの。わがまま言うんだもの」。失敗しても、責任をとらないわけです。

そうならないように、何を言っているのか、みんなで議論しましょう。誰が言っているか、部長が言っているかは、関係はない。それが本当にお客様のためなのか、我々のコンセプトに合っているのか、我々の価値観に合っているのが大事。となると、やはりコンセプト、行くべき方向は何なのか。我々が大事にしている価値観は何なのか、それを支えるシステムが大事です。先ほど先生が仰っていましたが、印刷所をつくる、あれは一つのシステムだと思います。それを支えるためのサポートと、価値観はこうなのだ、自分達でつくるのだという価値観が大事だったりします。

我々はもう一つ、感情的に訴えるとともに大事なのは、満足度調査を数値化して、わかりやすくしている。お客様にはA4、4枚分も書いてもらいます。でも、回収率は20%です。それを例えば、「滞在の満足度はどうでしたか」「料理の味はどうでしたか」「レストランのスタッフはどうでしたか」というのを、点数で7段階評価します。「大変満足」「満足」「やや満足」「どちらでもない」「やや不満」「不満」「大変不満」、これを点数化すると、グラフができてしまうのです。我々は半分が「大変満足」になろうとい

うのが目標です。

支配人が言ういいサービスと、現場が思ういいサービスと違ったりするわけです。でも、一番いいサービスは何かというと、お客さんが良いと思うサービスなのです。お客の声に素直になると、支配人の言うことは納得できないが、お客さんが言っているなら、従おうかとなる。

これはホテル間の比較ですが（グラフ略）、全体満足度の点数はどうでしょうか。上の青いのが「不満」です。赤い丸が「大変満足」の度合いです。他の施設と比較できるよね。あるいは、料理の満足度は低いが、フロントの接客はいい。料理を立て直そうぜと。改革の優先順位づけもできてしまう。数値化することがとても大事です。

もう一つは、時系列で判断できます。前より良くなっている。モチベーション維持にもつながる。数字でわかることが大事ですし、東大合格者数が一つのわかりやすい数字なのかもしれない。その数字を示してあげることもとても大事で、それによって成長だったり、悪くなったのを実感できます。

ここから観念的というか、僕の思いも入ってきます。スタッフを育てるに当たって、すごく大事にしているのは、やはり施設だったりリゾートだったりスタッフが愛さなくて、お客様が愛してくれません。我々、研修でよく使うのは、「スーパーの女」という伊丹十三監督の映画です。「正直屋」というつぶれそうなスーパー。そこのパートのおばちゃん達は、自分達のスーパーが今一なものを扱っていたり、賞味期限を偽装していたりするのを知っているから、自分のお店で買わないのです。そんなところにお客さんが来るはずがないのです。自分のところが好き、自分のホテルが好きとならなければいけない。幾ら満足度が大事、あるいは幾ら収益が大事と言ったところで、好きでないところのために働こうなんて思いません。愛してもらわなければいけない。

と同時に、私の場合は、大体つぶれた旅館、つぶれたリゾート、あるいはうまくいっていな

いところにも行きます。うまくいっていないから、スタッフはダメなのかというと、絶対そんなことはないです。能力的に低い人もいるかもしれない。でも、その能力を出し切るチャンスをもっていないのです。スタッフはできないのではなくて、どうやっていいのか知らない。

「なぜできない」と言ったって無意味などころか、逆効果です。やってみようよ、こういうやり方があるんだよ、コンセプトというのはこうなのだ、マーケティングというのはこういうのだというチャンスを与える。

ただし、その時にどうしても再生における失敗事例です。再生コンサルが入って、失敗する事例が多いのです。何かというと、教科書通りのことを押しつけるから。財務諸表を見たらこうですよ、ここをコストカットすべきですとか。でも、動いているのは実際人なのです。で、評価制度も変えたりしなければいけない。評価制度はこれが正しいではなくて、どうそれを伝えて、どう納得して、よし働こうと思うことが大事なので、コミュニケーション、共感なくして論理は通じないというのをものすごく痛感しています。ここを配慮するのが大事です。

ザッケローニ監督も、コミュニケーション。どうやって選手に伝えるのか。正しい戦略があるだけではなくて、それを伝えて、納得して、選手にどう落とし込むかということがとても大事。そのためにはものすごく粘り強く話さなければいけないし、痛みを伴うときほど丁寧に話をしなければいけない。

その行き着く先ですが、私は最初の1年は軽井沢にいました。軽井沢は先行しています。このスタッフ達はすごいなと思った事例をご紹介します。

私が入ったとき、26か27歳で入ったのですが、その時に23歳の女性スタッフと25歳の女性スタッフがフロントにいました。別にマネジャークラスでない。一般社員です。プレーヤーと我々は呼びます、一般社員を。その日は2月で、軽井沢は雪が降っていました。寒い日。ホテルブレ斯顿コートというところですが、そのチ

ェックインは3時です。ところが、12時過ぎ、女の子を連れて3人の家族がいらっしやった。6歳の女の子を連れてきた。「すみません。ちょっと娘が熱出しちゃって、早くチェックインできます」ってフロントにやってきた。

フロントのスタッフはどうしたか。先ほど、顧客は友人だったらどうすると話しました。一々、上司に「12時半ですけど、入れていいですか」なんて確認しない。すぐ、「ああ、そうですか。わかりました。すぐお調べします。大丈夫です。お子さんは大丈夫ですか。病院かなんか必要だったら言ってくださいね」と言う。

とりあえず部屋に入る。これはお客さんが望んで、それに対してマニュアルを超えてご案内した。すばらしいですね。部屋から電話かかってきた。「ごめんなさい。御飯も食べられなかったんだけど、もし何か食べられるものはありますか。ルームサービスとかあります」。ブレ斯顿コートにはレストランが1カ所。今、2カ所に増えましたが、あります。そこはルームサービスをやっていない。フロントの女性スタッフが受けた。後ろにマネジャーがいるのですが、マネジャーに一々確認せず、「はい、すぐにレストランで用意します」「何号室のお客さん、娘さん熱出しちゃって、何かすぐつくって持っていけるものない」って言う。

そうすると、受けた向こう側のスタッフも、確かパートのスタッフだったはずですが、「わかった、何とかする」、一々上司の許可なんかとらない。マニュアルから外れる行為です。でも、友達だったらそうするよね。お金ももらえばいいのです、その分。そこのお金はもらう。それを望まれて、料理も届けた。

そして、数分後。また電話かかってきた。「やっぱり、ちょっと熱が上がっちゃってるんで、病院に連れていきたいんですが、病院に連れていってもらえます。ちょっと車じゃないんで」と言われた。たまたまマネジャーが隣にいたんだけど、若いスタッフが「行ってください」「わかった、行くよ」。その状況を判断して、この人、暇そうにしているから、この人を使うのが

いい、「あなた、行ってきて」ということになる。それを自分で判断して、コストだったり、今日はチェックインはがらがらだし、行けるなと思って判断して、上司というか、ディレクターになります。命令する。行く。これもお客さんから望まれて、臨機応変に対応した。僕は脇で見ていたのですが、「すげえな」と思った。

ここまでは、実はお客様に望まれてやっていることです。それを超えて、その2人のスタッフ達は何をしたか。ブレストンコートというのは、お部屋が全部コテージです。雪が降っていました。お客さんは、娘さんが心配でしょうがないから、一緒に軽井沢病院に行きました。お客さんがいない。ところが、さっきの23歳と25歳の女の子が、割りばしと画用紙で何かやっているのです。「何やってんだろうな。確かに今日は暇だけど、遊んで何してんだろうな」と思ったら、「ちょっとフロント見ててください」と言われた。「何だろう」と思ってのぞいてみると、コテージのところに雪だるまをつくって、割りばしで差して、「早く良くなってね」と書いてある。それは自分で判断している。勤務時間中です。でも、今だったらやっていいし、勝手にやってもいいし、お客さんに喜んでもらえるし、コストも割りばしと画用紙だったら、やっちゃってもいいよねということ、一々上司に相談しないでやってしまう。それがスタッフ達が楽しくてしょうがない。そんな環境だったのです。「これはすごいな。こういうスタッフをどうやったら増やせるんだろう。やっぱりチャレンジさせるしかないんだよね」と思っています。

違う言い方をすると、1人1人が旅館のお上になってほしい。旅館のお上は、お客さんの状況を見て自分で判断します。やれることをやってしまう。金勘定を考えています、頭の中で。金勘定とお客様の喜びと両方考えている。みんながお上になったら相当強いんじゃないと思うわけです。

その時に、僕らがもう一つ大事にしているのはプロセスです。大体そういうことは、やって

みないとわからないのです。雪だるまも何て思われているかわからない。その時のケースは、めっちゃくちゃ子どもが喜んだし、「また具合が良くなったら来ますね」ってリピートしてくれるわけです。それは感動しますよね。その時に、やってみなければいけない。ただ、正しい手順と議論、そして共感を有すれば、いろいろなことは大体うまくいく。ただ、100%成功しません。

そういう意味で言うと、シュートを打たなければ入らない。挑戦しましょう。僕らは意外と失敗してもいいのです。メーカーだったら、失敗製品を売ったりしたら大変な問題になりますが、我々はクレームを受けますが、改善がすぐできます。

スタッフによく言っているのは、絶対成功するというのをやるのは、これは作業です。でも、仕事というのは、60%成功できるようところまで詰めていく。でも、70%いくかいかないかで、「よし、やろう」という決断。そこまでの準備と決断が仕事です。私もそうですし、星野佳路という社長は、常に仕事をしている。彼がやったことは全部成功しません。何割か失敗します。その決断をするということ、その準備をすること。50%の成功率を60%以上、7割、8割に高めていくということと、やると決めることが仕事なのだよ。それを自分達でやってごらん。シュートを打っていいから。失敗したら、同じ外すことをしなければいいからということ伝えていきます。

その上で、よくチャレンジしたと褒めることがめちゃくちゃ大事です。褒める。「よくチャレンジした」「よく上達した」と。いつも20分遅刻してくるスタッフが、5分遅刻でやってきた。「おまえ、よく早く来たな」と一旦褒めてやる。叱るのですが。

それよりも、何かお客様を喜ばせようとか、こうやったらコスト削減できるのではないかと、考えて、考えて、6割いけるかなと思ったのは、まずチャレンジしよう。チャレンジしないで、言われたことだけやる人については評価

をしませんと言っています。

もう一つが、これは技術者に多いのですが、できない理由を探すのはプロフェッショナルです。先ほどの「みちのく祭りや」というレストランをつくったときも、ねぶたの山車を入れると言ったら、「いやあ、そんなことやったら床が抜けますよ」とか言うわけです、「荷重が」とか言って。あるいは、レストランに井戸をつくると言ったら、「いや、配管的に無理ですよ」、無理な理由はこれこれですと。あるいは、ショーレストランで、よさこいをお客さんも踊るといのは、「いや、うちは年配層が多いから、踊らないですよ」と、できない理由を並べ立てます。「どうしたらできるか考えてごらん」と言うと、うっと詰まってしまう。

「わかった。できない理由は、あなた達はプロだね。すごいと思うよ。で、どうやったらできるの」「問題は何々ではなくて、どうしたら、に変えてよ」と言っています。できない理由は、聞き流します。どうしたらできるかが見つからないときに、あきらめようぜと。できない理由があるからやめるのではなくて、どうしたらできるか、見つからねえな、しょうがない、これは無理なんだなど、そういう判断基準にしたりしています。

再生旅館の場合は、やはり頑ななスタッフもいたりする。それを最初から色分けするつもりはないですし、最初に思ったのとは違う形で花開く方もいっぱいいらっしゃる。それは年配とか、若いとか、関係ない。けども、そのために我々は変わるというチャンスを与えるし、変わってくれとも言いつけなければいけない。変わってよと。時間がかかるかもしれない。時間かかっていいから、変わる努力をしてよ。それが嫌なら去ってね。十分チャンスを与える。去らないとお互いにとって不幸だからと。その環境を整備していきます。

最初は、数年は退職が出ます。その時に、選別して退職していくのではなくて、合わないと思って退職していつてもらうなら、OK としよう。去っていったら、その分採用できるのです、

価値観の合う人を。採用はめちゃくちゃ大事です。私も星野佳路も採用にめちゃくちゃ力を入れているし、あれだけ星野佳路がテレビに出る理由は、採用のためなのです。「あ、こういった会社があるのだ。こういった産業があるのだ。ここはポテンシャルがあるんだ」と思われたいからです。

事実、私も最終面談をしていると、高校生のときに「プロフェッショナル」の第1回を観て、ああいう会社があると思って、受けたいと思っていましたという大学生が来たりするのです。我々は採用するに当たって非常に苦勞する産業ではあるのですが、訴えていきたいと思います。

あとはポジティブです。僕は悪くいうと、いいかげんです。「やろうよ。いいんじゃない、やっちゃって」というのが多いです。「やっちゃおう、やっちゃおう。いいんじゃない」、その時にチェックするのは、プロセスが正しいかどうかということを確認しながら、成功するかどうかかわからないが、そこまでやったらいいんじゃない、やってみよう。やってみてダメだったら、もう1回やり直して、違うことをやろうということです。そうすれば絶対成功するぜ、よくなるぜと前向きに思い続けることが、とても大事だったりします。

6. 他の事例との共通点

これは他の事例から学ぶということと、コンセプトだったり文化の大切さですが、衆議院選挙で、長野県小諸市が開票作業を46分で終わった。すごいのです。生産性を高めて、早く発表できることは、有権者の満足度にも貢献する。

見ていくと、小諸市では迅速化は既に文化として定着している。文化、価値観だったりコンセプトだったりする。早くしようよということ、を、みんなが合意している。

2番目、開票の早さで定評のある東京都府中市といった先進地から学んだ。パクっているのです。パクった上で、自分達らしく、途中からリストバンドを入れた。過去に汗がついた投票用紙が計数機に詰まって、作業が滞った経験を

踏まえて、新しく違うのを入れるのです。その時に大事にしたのが、自分の仕事だけをすればよいのではなくて、1人で何でもこなし、みんなで作るという意識が浸透しているからできる。これは我々にとってのマルチタスクです。目標を設定して行政事務に取り組む。1人で何役もこなすのはとても大事です。

最後に、市職員が部や課の枠を超えて、コンマ1秒縮めるためにどうしたらよいか考え、総がかりで取り組む。誰か偉い人が決めるのではなく、みんなが決める。そこには上も下もなく、改善点をみんなで考える。これは通常の業務に活かせる。ちょっと違う参考事例ですが、行政の事例でもこういったことをやっていますので、我々と共通するなという事例としてご紹介させていただいて、追加の資料とさせていただきます。

おわりに

最後になりますが、トマムは私が就任したときに、恥ずかしい話ですが、かなり社員のモチベーションが落ちていました。だから何とかしなければということで送り込まれたのですが、支配人だったり総支配人と呼ばれる経営陣に対する不信感が強かった。何よりも「上」という言葉が、ものすごく出ていたのです。これは変えなければいけないぞ。先ほどのようなサッカーチーム型にしなければいけない。プロ野球で、「監督が馬鹿だから負けるのだ」って、昔、有名な監督批判がありました。そんなところは絶対勝てっこないです。

そういう中で、僕がトマムのスタッフ達に、最初、ちょうど1年前に話したことです。約束とお願いです。約束、私は耳を傾けます。情報を公開します。プロセスを共有する機会を増やします。最終方針は責任を持って決断します。痛みを伴う改革では、徹底して説明します。お客様を幸せにしながら、我々が幸せになる環境をつくります。お客とオーナーがよければいいんだなんていうことは絶対ない。やはり俺達が楽しくなければダメだと。それは僕が約束する

から。最後、痛みを伴うことも決断するし、責任はとる。

お願い。そのかわりにみんな、自分達が主役として積極的に意見を発信し、行動してほしいです。変革を起こすときは、絶対に遅れます。あるいは、失敗も起きる。そういったことが起きるのは覚悟してほしい。必ず前に進むけど、真っすぐは進まない。そういうことが必ず生じるから。けども、それをやろうという情報発信はするし、責任をとるから、みんなで合意したことは守ってほしいです。何よりも、トマムを自らつくることを楽しみ、トマムを愛してほしい。これが僕からのお願いです、ということで、1年たった。ようやく今、みんな動き出した。もう一步、もう一段上にいかなければいけない。残念ながら、トマムに今年、去年、おとし来られた方には、たぶんご不満を与えていると思います。来年よくなりますから、また来ていただければと思っています。

そういった意味で、私がしている仕事は、本当に人づくりです。リーダーづくりだし、スタッフが働ける環境、自分達で動ける環境をつくるのが私の仕事でやっておりますし、そういった中、私にお声がかかる業界は、なぜか教育業界が多くて、そこには共通することも多いのではないかな。私自身が学ぶことが非常に多いと思っています。

最後に、修学旅行も結構受け入れておりますので、何かご用命がありましたら。こういった人づくりをテーマにした修学旅行ができないだろうかということも考えてりしていますので、これも1年後ぐらいに新しい旅行が出てくるかもしれません。是非お問い合わせください。

ということで、お話を終わりたいと思います。本日はありがとうございました。

研究演習

—講義と演習—

「明るい接遇で学校を楽しく」

高崎商科大学短期大学部 教授 大津 ゆり



初めまして、よろしくお願いいたします。午前中、素晴らしいお話が続いた後で、そして名簿を拝見させていただきますと、皆さんお偉い方ばかりなので、お昼のお弁当が喉を通らなかったぐらい緊張しております。私がお話することは皆さんがご存知のことばかりかと思いますが、復習のつもりでお聞きいただければと思います。それから、中学生や高校生に指導なさるときに、参考にさせていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、このお話をいただいたときに、タイトルをどうするかということで、悩みました。事務局が良くなれば学校も良くなる。では、いい学校とは何だろうかと考えました。いい学校とは、在学中も卒業してからも、みんなが楽しかった、いいなと思って気楽に帰って来られるような、楽しい場所ではないかと思いました。

私どもの大学短大は、学生、職員、そして教員、みんな仲がいいです。すごくフレンドリーで楽しい大学で、昨日は2名の卒業生が来ましたし、先週は、文化祭とかそういう特別な時で

はないのに7人のグループが遊びに来たり、卒業生がしょっちゅう来ます。もちろん在校生も来るのですけれども、「失恋しちゃった」「転職したい」「上司にいじめられた」「新しい彼氏できた」とか、いろいろなことで学生や卒業生が訪ねてくれます。それは、やはり大学に戻ってくると何か安心だし、楽しいし、ホッとするというすごくいい絆があるのだと思います。

早速、私の学校自慢をさせていただきたいのですけれども、今年、就職が大変なときでも96%の就職率でした。でも、それは3月の時点で、6月ごろになりますと、お試し期間で働いていた学生も正社員になったりして、ほとんどの学生が満足のいく就職をさせていただいております。明るく素直で、とてもいい学生が多いのです。

午前中に佐藤さんが「お客様は友人」と言っていらいしゃいましたけれども、友達ではないのですが、私達教職員も、まるでお母さんの気持ちで学生を見ています。そして、何か間違ったこととか、よくないことがあったときに、「だから、私達が必要なのよ」と言います。「みんなが何でもできて、パーフェクトだったら、教職員は必要ないでしょう？足りなかったり、弱かったり、思うようにいかなかったりするからこそ、私達は存在する理由があるのだから、どんなことでも心配しないで相談してね」といつも言っております。

私はこちらの大学に移って7年ほどたちました。今日の司会者も、いつも笑顔で感じよくて、この7年間、ただの一度も嫌な顔を見たことが

ないのです。それは、彼だけではなくてほかの人も同じです。

私は朝4時半に起きて東京から新幹線通っています。寒いとき、暑いとき、結構疲れます。事務局で出勤の印鑑を押さなければならないので、朝、扉をあけ、「お早うございます」と入っていくと、「お早うございます」と明るい挨拶が返ってきます。それだけで、元気で頑張れるぞと思います。ですから、挨拶はとても大事だと思います。

今日一番最初の「好印象を相手に与えるポイント」の前に、ちょっと申し上げたい。私どもの短大では、三つのことを教えています。一つ目は「その場に相応しい挨拶をしよう！」挨拶は、やはり本当に大事ですよ。

以前にほかのところで働いていたときに、最初は誰も挨拶をしてくれませんでした。これではいけないと思って、スクールバスの運転手さん、カフェテリアの人、お掃除の担当者に、「学生に挨拶していただけますか。相手から挨拶が返ってこなくてもいいから、挨拶していただけますか」とお願いしました。大体、みんなが挨拶をするようになるのは7月ごろでした。

こちらの高崎のほうにお世話になることになって、スクールバスもないし、どうしよう。誰に挨拶をお願いしようかしら、朝の指導をお願いしようかと思っていました。ところが、第1日目から知らない学生、四大の学生、新入生、在校生、いろいろな学生が、こちらから挨拶する前に「お早うございます」と、挨拶してくれました。ですから、挨拶の指導をしなくてもいいくらい、挨拶のいい大学です。自慢ばかりしてごめんなさい。

二つ目は「誰とでもコミュニケーションできるようにしよう。」自分の好きな人、友達だけではない、誰とでも。ちょっと困っているかなと思う人がいたとしたら、考える前に、親切にぱっと手を出したりできるように、誰とでもコミュニケーションできるようにしましょう。

コミュニケーションというのは、やはりとても大事なことです。耳が聞こえない方やお話の

できない方ともコミュニケーションできるように、「手話コミュニケーション」という科目で手話を学んだり、車いすの扱い方を全員ができるようにしたり、目のご不自由な方を見かけたら、「ちょっとお手伝いしましょうか」と申し出ることができるように練習をしたり、そのような授業も行っております。

三つ目ですけれども、(小さな黒い点を書いてある大きな紙を見せながら)「これは何が見えるでしょうか。小さい黒い点が見えますよね。私は、この黒い小さい点ではなくて、できれば白い大きな紙も見えるよ」と言っていたきたいのです。私が小学校のときにアメリカ人の神父さんから、これを見せられました。「みんな、何が見えるの?」と言われました。みんなは「黒い丸、黒い丸」と言ったのですけれども、私はちょっとへそ曲がりだったのか、「白い大きな紙が見えます」と答えました。

ずっと忘れていたのですが、今、それを思い出して、本当に小さなこと、自分の足りないところ、人の嫌なところ、自分の住んでいる地域のマイナスの面、学校の嫌なところ、こんな小さなことかもしれないけれども、この黒い丸みたいな、マイナスのところ目がいってしまつて、こんなにたくさん大きな白い部分、いいことがたくさんあることを私達は忘れてしまいがちだと思います。

それなので、三つ目、「いいこと探しの達人になろう」ということを大事にしています。いいこと探しは、とても難しいかもしれないですね。ついつい悪口を言いたくなつてしまつたり、天気が悪いことが嫌だつたり、嫌なことを言いたくなつたりします。小さなことだけれども、嫌なことばかりに目がいって、集中してしまうことがあるから、周りにある白いところ、たくさんいいところを探しましょうよということを授業でやっています。

「いいこと探しの達人になろう」ということを行っているのです。私は、学生からスーパーウルトラプラス思考とか言われているのですけれども、やはり同じことだったら、嫌なことでは

なくて、いいことだけ考えて、スーパーウルトラポジティブシンキングでいったほうがいいですよ。この三つを柱にしながら授業を行っています。

いい印象を相手に与えるポイントというのを考えてみました。どうしたらいい印象を与えられるか。やはり近づきやすさ。窓口などにいたときに、何かあの人怖そうだな、話しかけたくないなと思われたらとても困りますよね。「大丈夫なんじゃないかしら。あの人には話してもいいんじゃないかな」。大事なことは、やはり見たところがオープンであること。話しかけにくいとか、閉鎖的ではなく、オープンだったらいいですね。

では、ちょっと表情を研究してみましょう。オープンな人に見えるか、あるいは閉鎖的か、この人に何か聞いたら怖いかな、親切に教えてくれないかもしれないなと思ってしまったら、新しいコミュニケーションはできません。だから、やはりオープンだったらいいと思います。

それには何といっても大事なのがボディーランゲージ。ボディーランゲージの一番は何でしょう。やはり、微笑みではないでしょうか。いい印象がない相手であっても、やはり、微笑んでしまいましょう。では、ちょっと違うことをやってみます。

○大津 工藤先生、お早うございます。

○工藤 お早うございます。

○大津 といって視線を合わせずに、「工藤先生、お早うございます」、どんな印象がしますか。

○工藤 嫌われていると思います。

○大津 そうですよ。やはり視線を合わせないと、何か冷めたいな、近づきがたいなと思ってしまう。だから、気に入らない人には挨拶したくないなと思うかもしれないけれども、先に挨拶して、にこっと笑ったほうが勝ちですよ。だから、誰かに会って、気に入らないなと思っても、「お早うございます」と言って、微笑んでしまいましょう。そうすると、自分のことを好きになってくれないかもしれないけれども、

絶対にコミュニケーションは始められるのです。始まらないことには何もならないので、やはりいいコミュニケーションを始めましょう。

ちょっとお手元にある「表情」というシートを見てください。へんてこりんな顔が五つ並んでいます。そこに目と口をちょっといたずら書きしていただけますか。こんな立派な大人の方に落書きみたいなをお願いして恐縮ですが、ちょっと書いてみてください。お願いします。

今書いていただいたの、こういうのと二つの表情があるとします。こっちの笑顔は、ストレッチ、体を動かしてストレッチすると体にいいように、顔の表情もストレッチしましょう。こっちはギャザリング。この中に女性は7人しかいらっしやらないけれども、女性の方はギャザースカーツをはかれますか。こういう真っ直ぐな布を縫います。きゅっと縮めると、ギャザースカーツになるのですけれども、このごろの若い人は余り知らないです。こうやって、きゅっと真ん中のほうに寄せます。こういう表情をギャザリングといいます。どうせならギャザリングではなくて、ストレッチの表情でいるようにしたら、オープンな感じがして近づきやすいのではないのでしょうか。

先ほど工藤先生は、この辺の肉（顎の下）が邪魔だから、つい上を向いた角度になってしまっているけれども、これは気をつけたほうがいいのかと仰いました。やはり、あごの角度によって印象が変わってしまいます。だから、学生を相手にしていたり、保護者の方を相手にしたときに、この方だったら安心していろいろな相談に乗ってもらえるなと思っていただけるような角度の研究、これもやはり大切なことではないかと思います。

こういった顔は安心メッセージですよ。この人だったら安心して自分のことを話せるかな、子どものことを相談しても大丈夫かなという安心メッセージを送るには、やはり何といってもほほえみ、ストレッチの表情が大事ではないかと思います。

身だしなみが整っていると、相手は健全な感

じがするし、歩き方とか姿勢、そういったものも安心メッセージになると思います。

2枚目を見ていただくと、表情はどうでしょうか。お隣の方と表情などをちょっと見ていただけるとありがたいのですけれども、どうでしょうか。どんな表情でしょうか。ストレッチのいい表情していただけますか。どうかな。これ、ちょっと恥ずかしいからスキップしましょう。

では、姿勢はどうかな。ある時、「ホスピタリティーとは何か」という会に参加していて、立ったときに写真を写されたのです。そうしたら、あごがちょっと出ていて、ぽっとおながが出て、変な立ち方をしていました。これは大変だと思って、翌日から歩き方教室に通いました。歩く姿というのもとても大事です。ちょこちょこ歩く。学生など若い子はすごくきれいに着飾っている。だけど、膝を曲げて、内股でちょこちょこ歩いている学生がいる。私達は、鏡のあるすばらしい教室があるので「みんないい女に見せるために格好よく歩こう」といって、姿勢をチェックしたり、歩き方を研究したりしています。

やはり仕事をするときに、何となくしょぼくれて、元気なさそうな人よりも、動作がきびきびしていて、いろいろお願いしたら、うまい具合にいくのではないかしらと思う印象を与えたほうが絶対に得だと思います。

この歩き方、どすんどすん、きよろきよろ、ちょこちょことか、いろいろな歩き方をしている人が結構いますので、「人のふり見て我がふり直せ」ではないですけれども、ちょっと歩き方を考えたらいいと思います。

3番目、アランの言葉とレジュメにタイトルを書きましたが、言葉はわざわざ印刷しませんでした。というのは、私がとても好きな言葉なので、皆さんにも覚えていただきたかったからです。アランはご存知ですね。1951年に亡くなったフランスの哲学者で、本名は **Emile Auguste Chartier** というのですけれども、アランという人の『幸福論』を読みました。何か

幸せになるのにいいフレーズはないかしら、幸せになりたいからいいメッセージはないかしら。探したらあったのです。

「すべての不運や、つまらぬ物事に対して、上機嫌で振る舞うことである」。何か嫌なことがあっても、上機嫌で振る舞ってしまうといいのです。「上機嫌の波はあなたの周囲に広がり、あなた自身をも軽やかにしてくれるだろう」と言っています。

「機嫌がいい、機嫌が悪い」ということは、とても大事なことではないかと思います。機嫌の悪い人がいて、嫌な暗いムードだと、それも伝わってしまいますよね。だから、よくないムードというのは、人にすごく伝わってしまうから、自分からいいムード、元気なムードを発信できるようにしたらいいなと思います。

アランは、こうも言っています。幸福の秘訣は、自分自身の機嫌だと。「不機嫌な自分に負けてはいけない。不機嫌というものを相手にしていなければ、そのうちに犬が犬小屋に帰っていくように、自然に不機嫌なものは消えてしまうから、不機嫌にならないようにしようね」ということを言っています。

そして、人というのは、うれしいとき、幸せを感じる時笑いますよね。だから、本当は機嫌が悪くても、ちょっと無理してでも笑って笑顔でいると、それがだんだん自分の幸せな気持ちになっていくから、笑顔を大切にしましょうということです。やはり、うれしいと笑ってしまう。今日も皆さん、午前中、随分笑っていらっしやいましたね。工藤先生がおもしろい話をしてくださって、みんなはとても笑いましたね。笑っていると、さらにそれが楽しくなって、いい感じになるので、本当は気分がよくないなと思っても、笑顔でいるように努めると、幸せの、若さのホルモンが出てきて、脳にもいいそうです。いろいろと脳のことを書いている茂木さんという方が、「プラス思考でいいことをたくさん考えると、脳の中にいいホルモンが出て元気になる」ということを書いていらっしやいましたけれども、やはり笑顔はすごく大事にしたい

と思います。

次に、「興味を示す」。やはり人間は、自分に興味を持ってもらいたいのです。無視されたくない、興味を持ってもらいたい。では、人の話を聞くときはどうしたらいいのでしょうか。何となくではなくて、やはりうなずいて、「そうですね」、「ああ、そうだったんですか」というように相槌を打つたらいいいと思います。沈黙が続いてしまったりすると、ちょっと気まづくなってしまうですね。

そして、これは本当に大事なアイコンタクト。アイコンタクトはとても大事で、目は口ほどに物を言う。恋をしたときも目にそれが表れるように、やはり目というのはとても大事です。アイコンタクトをすると、自分にちゃんと関心を持ってくれているなということがわかります。ですから、アイコンタクト。

例えば私は出席をとるときに、「〇〇さん」「はい」、「〇〇さん」「は〜い」。「あれ、寂しいな、やはり返事をするときは私の目を見てくださいよ、お互いに今日もいい授業にしようよ、楽しいことを一緒にしようよという気持ちを込めて私の目を見てください」と言います。何となく返事をしてしまわないで、返事一つでも、お互いにいいメッセージを送り合うようにしようと言っています。

そうすると、インターンシップに行ったり、仕事に行ったときに、ただ、「いらっしゃいませ」と口先だけで言うのではなくて、相手に本当にいいときを過ごしていただきたいとか、本当にありがとうございますという気持ちを目に込めるというのは、とても大きな目力。目力とこのごろよく言いますが、目力というのはとても大事だと思うので、アイコンタクトに気をつけるといいと思っています。

それから、なるべく相手の名前を覚えましょう。名前を覚えるのはなかなか難しいです。短大生はみんな同じようなファッションで、同じようなメイクしていて、同じような洋服を着て来ます。

私の授業は週に2回、ホテル関係の授業をする

ときとホスピタリティーの授業のときは、スーツを着て、ヒールのある靴を履いてきてもらいます。やはり着ているものによって感じが違います。ファッションとか動作とか、そういうのも大事だから、だらっとした格好をしないように、今はやりのスパッツとか、ジーンズではなくて、きちっとした服装をして、ちょっと踵のある靴を履いて、姿勢を正して授業に出てもらっています。文句も随分出たりするのですが、そうすると、座り方も「おなかを出して座らないで、ちゃんとひざとひざをつけて座りましょう」と指導がしやすくなりますから、やはり服装というのもとても大事だと思います。スーツを着るということに抵抗がちょっとあるのですが、スーツで赤い髪の毛だとかおかしいので、今、髪の毛の色も7番よりも黒くとか、うるさく指導しています。

というのは、インターンシップを帝国ホテルやニューオータニのような一流のところにもお願いしているので、インターンシップに出すときには大学の代表として出すので、個人のアルバイトだったら何でもいいということではないのですが、大学の代表として出すためには、きちんとした教育をしなければいけないので気をつけております。

行った先で、どこへ行っても、「とてもいい学生さんですね、素直で明るくて」と言っていたり、そのままニューオータニに就職が決まったり、いろいろな一流企業に採っていただいたりしております。スーツできちんとしてというのは、学生には結構嫌がられるのですが、それはとても大事なことだと思いますので、附属高校でもマナーの指導を厳しくしていらっしゃるようですが、短大でもマナー教育に力を入れております。

あと、会話。私などもそうですが、まどろっこしくいろいろ話されると、つい結果を「こうなんじゃないの」と言いたくなってしまうのですが、相手の話の腰を折らないように、ちょっと我慢強く聞くといいと思います。

ここの項目では「興味を示すこと」。相手に

興味を示す。そうすると、相手もこちらに興味を示してくれます。やはり自分から興味を示す。学生でも、誰であってもそうですけれども、自分から興味を示すことが大事ではないかと思えます。興味を示すことで相手が理解してくれる。こちらから興味を示すことによって、相手も理解してくれるのではないかと思います。

そして、次の「話題を提供する」。これも大事です。話題のところで私がいつも思うのは双方向です。一方的でない、演説調ではない、命令調ではない。演説調だと、相手に傾聴、一生懸命聞いてくれることを無理強いしてしまうことがあるので、一方的でなく、傾聴モードを強いることなく、お互いにキャッチボールできるようにしたらいいと思います。

そして、「その場に合った話題」も大切です。全然関係ない話題で、その場の空気を壊してしまうことがないようにしたらいいと思いますし、日常的なたわいもないことを話すのも、安心感を与えるのでいいかなと思います。

そして、いつも思うのは「相手の関心を確認しながら話す」。これも大事ではないかと思えます。相手がゴルフに関心が全然ないのに、ゴルフの話ばかりされても困るし、やはり相手に関心があるかどうか確認しながら話すことも必要だと思います。授業のときは学生にとってつまらない話もしなくてはならないけれども、そうではないプライベートのときに、興味のない話ばかりされたら学生も嫌になってしまいます。ですから、相手の関心をちゃんと確認しながら、相手に興味を持ってもらえるようなことを話すというのは、とても大事ではないかと思っております。

その次、「自己開示する」。これはカウンセリングの言葉です。自分をオープンにすることで。やはり自分が心を閉じていたら、人とのコミュニケーションはうまくいきません。自分を見せるということがとても大事ではないかと思えます。中には閉鎖的で、自分のことを何も話さないで、相手に質問ばかりしている人もいます。でも、自分を見せる。そうすると相手に安

心感を与えます。だから、やはり自己開示、自分を見せる。そして、自分の基本的な情報、どこの出身ですとか、そういう簡単なことでいいので、基本的なことを話すのも大事かもしれません。名前以外何も話さないというのでは、ちょっと困りますね。

そして、会った途端ではないかもしれないけれども、自分の失敗談とか、そういうのをちょっと交えると相手も安心するかもしれない。もしもパーフェクトで立派な人だと思われてしまうと、人は心を開きにくいので、ちょっと失敗したこととか、自分のマイナスの点などを話すと、案外会話が弾んで、いいコミュニケーションがとれるかもしれません。

ですから、ここで言いたいことは、少し控え目に、でも、もっと知りたい。話していて、この人、たいしたことない、つまらないと思われないように、難しいけれども、相手にもうちょっとこの人のこと知りたいと思う好奇心を掻き立てるように話したらいいのではないかと思います。何もかもわかってしまったら、この人はこれだけだから、つまらないと思わせないように、もう少し話してみたいなと好奇心を掻き立てるようにできたら、とてもいいのではないかと思います。

どんどん来てしまいましたけれども、持ち時間が余りないですね。皆さんにいろいろやっていただく時間がなくなってしまうので、大急ぎで。

次の3V5S。3Vというのは、皆さんも、メラビアンの法則というので勉強なさっているのではないかと思います。Visual、見た目です。服装、動作、姿勢、歩き方とか目から見えるものがいろいろありますね。もちろん、さっきやっていただいた表情とか。メラビアンという人は、一番最初に印象に残るのは見た目が50何%だというように言っています。

あと、Vocal。声のスピード、語調、高低、大きさ、声もいろいろあります。そういったものも相手に合った、そのときの場所に合った、「挨拶はいつも大きな声で自分から」と習った

からといって、静かにしなくてはいけないところでは余り大きな声で話されたりすると困るので、やはり場所をわきまえましょうということを言っています。

Verbal は、言葉、話の内容。この三つがメラビアンの3V と言われています。

5S というのは、私が考えたものですが、人と会うとき、接遇であっても、プライベートで会うときでも、やはり五つの S というのは大事にしたいと思っています。

英語と日本語が一緒になっているのですが、やはり①「親切な気持ち」でいたい。仕事のときは②「スピード」がないとまずいです。もたもたしていて、ゆっくりしてはいけなから、やはり接遇であっても何であっても迅速に行いたいと思います。スピード。あとは何といっても③「スマイル」、④「誠実」です。そして、情報などが間違っていたらまずいから⑤「正確さ」。これ全部 S ではないかなと思って、日本語と英語が入りまじっていますけれども、この5S というのを大事にしています。誰にでもここにこスマイルで親切にしましょう。仕事はスピーディーにちゃんちゃんとやっていきましょう。そして、正確な情報を相手に伝えましょう。こんなことを気にしております。

その次は、感じのよい話し方についてです。話し方のときのポイントで私がちょっと気に入っていることがあります。声のスピード、語調、高低、大きさ、こういうことに気をつけるのは大事ですが、皆様に声をちょっと出していきたいと思います。

5本線があります。音符です。ドミソ。皆様、ちょっと子どもじみていて申しわけないですが、好きな言葉は何かありますか。いい言葉、何でもいいです。挨拶、ありがとうございます、お早うございます、こんにちはでも何でもいいです。ドの音で言っていただけますか。では、「ありがとう」と言ってください。

では、ミの音で「ありがとう」と言っていただけますか。工藤先生、ソの音で。(工藤先生ソの音で「ありがとう!」と言ってくださる)

そうなのです。「お早うございます」、「こんにちは」、「ありがとうございます」というときに、ちょっと頭の隅とか、心の中で「ソ」の音を思い浮かべる。そうすると、何かははっきりと伝わるということに長年いろいろやっていて気がつきました。特に「ソ」の音を思い浮かべると、電話でも、挨拶でも感じよくなるなというのを発見しました。これ、いかがでしょうか。教科書とか、テキストとか、接遇の本に書いてあるわけではないのですが、それを実践していて、結構いいかなとは思っております。

その次、皆様、よくご存知のことばかりですが、けれども、「聞き上手になる」には・・・。

さっきも申し上げたように、「そうですね」とか、「そうですか」とか、相槌を打ちながら焦らずに。そして、私はよく思うのですが、わからないとき、わからなくていいと思います。わからなかったり、聞き取れなかったり、今はやりの言葉で意味がわからなかったり、そんなときは、わからないと言いたくはないのですが、勇気を出して質問する。これは、聞き上手の大事なことではないかと思います。わからないことは質問する、そして確認することが大事なことでないかと思います。

そして、話し方のポイントとしては、ご存知のとおり、正しく、わかりやすく、曖昧な表現、〇〇なはずですか、〇〇だと思いますとか、そういうことは言わないで、わからなかったときには、「只今調べてお答えいたします」といって、きちっと調べたらいいと思います。あと、自分から名前をきちっと名乗るのがいいと思います。

対面対応のマナーについては、お配りした資料を見ていただくと、いろいろなクレームが書いてありますので、後でお時間のあるときにご覧ください。クレーム対応、来校されたときと電話のときに、このようにしたらどうかというのを自分なりに考えたものをおつけしておきました。

対面のマナーというと、挨拶、笑顔、自分から声をかけるのが大事ですね。お待たせする場

合は、ちゃんと丁寧に理由を言ったほうがいいと思います。電話の場合の注意点をひとつ。私はある大使館に電話しました。何と40分ずっと待たされました。学校でもお待たせしているときは、間で今どういう状況かという事をちゃんと知らせてほしいと思います。つい、ほかのことに忙しいので、「少々お待ちください」といって、そのままにしてしまうことも結構あるので、お待たせしない。お待たせする場合は、それをちゃんと丁寧に相手に伝える。保留にする場合は、前後に挨拶をするだけでなく、長くお待たせしている場合は途中で状況伝えることが大事だと思います。

また、電話は3回以内に受話器をとるとよく書いてあります。私は、せっかちなもので、1回鳴るとぱっと出のですが、息子に「相手の心の準備ができないから、余り早くとり過ぎないほうがいいよ」と言われました。そういうこともありますね。かけた途端に、「はい」と出られるより、やはり2、3回鳴ってからの方がいいのではないかと思います。

クレーム対応に関しても、感情的にならないように、相手のクレームを受けとめて、問題解決をしていく。やはり最後にいい感じで終わるようにしていけばいいと思います。

「報・連・相はくそ食らえだ」と、さっき工藤先生は仰いましたし、佐藤さんもそう言っていらっしゃいましたけれども、やはり「報・連・相」も大事なことがいっぱいあると思うのです。学校でそれがなかったら、困りませんか。やはりある程度、好き嫌いをしないで、「報・連・相」も食べましょう。私は、この年になって老眼鏡かけていないのですが、ハウレンソウをよく食べているからです。これは冗談ですが…。

におい、加齢臭、気になりますね。特に電車に乗ったりすると、整髪料が強過ぎて、うっとなったりするようなこともあるし、煙草を吸う方なども、煙草のにおいがあると思います。今年入ってみえた私の同僚の先生、とてもいい先生なのですが、ちょっと私が困ったなと思うの

は、煙草を吸う方なのです。でも、彼は自分で気がついて、いつもミントをポケットに入れて、私と会う前には必ずミントを食べて、煙草のにおいをさせないように気遣ってくれます。やはり口臭とか、においというのもとても大事だと思います。

また、距離というのもとても大事だと思います。余り近過ぎるのも困るし、余り遠いのもよくないし、1.5メートルぐらいがいいと言われています。広い部屋で、こっちからこっちで話すのも、エレベーターなどで、たくさんいるときはいいですが、たった二人で余り近過ぎると気持ち悪いし、やはり人間関係も、そのときの状況に合った距離をとるというのもとても大事ではないかと思います。

あと、先入観です。これはテレビで言っていたのですが、ある人を紹介するときに、「雑誌の編集者の女性です」といって紹介すると、インテリかなと男性は思うそうです。同じ人を「幼稚園の先生なんですよ」と紹介すると、きっと優しいのではないかと思います。だから、新しいどなたかと会うときは、先入観を余り持たないようにする努力も大事ではないかと思います。

私は弾丸トークと言われているのですが、本当にどんどんしゃべってしまって、相手のことを余り考えていないようで申しわけないのですが、最後に、「ゲーテのように暮らそうよ」を提案します。ゲーテは偉大な人ですよ。今の学生で知らない人もいるのですが、ゲーテほど偉大な人も、「涙ながらにパンを食べ、枕を涙でぬらしたことのない人に何で人生がわかるだろうか」と言っています。私は高校3年のときにそれを読んで、それから悩むことがいっぱいあるときに、ゲーテみたいな偉大な人だって、そうやって悩んだのだから、まして普通の自分が悩むのは当たり前だと思いました。

高校を卒業するときに、自分の好きな言葉を何か書いて出すのがありました。そのときに、この言葉を書きました。私の人生、うん十年、

いつもこれを思っています。

「気持ちよい生活を送ろうと思ったら
済んだことはくよくよせぬこと
めったに腹を立てぬこと
いつも今を楽しむこと
とりわけ人を憎まぬこと
未来を神に任せること」

この「済んだことはくよくよしない」、どうしたらいいか。私が考えたことは、自分で「くよくよタイム」というのを作りました。電車の中でも、歩いていても、「どうしよう、あんなこと言わなきゃよかった。馬鹿なことを言っちゃった」、「あんなことしなきゃよかった」とくよくよする。私は、「くよくよタイム」にまとめてくよくよしようと思います。例えば今日の11時から11時10分までをくよくよタイムに決めてそのときにくよくよしようと思って、他の時にはくよくよしないことにする。そうすると、11時頃にテレビを見ていたり、電話がかかってきたり、メールをやっていたり、くよくよしないで済むこともありますので、このくよくよタイムというのはとても役に立つと思うので、是非やってみてください。

「めったに腹は立てぬこと」。今日、私は腹立ててしまいました。というのは、様子を見ながら皆さんに資料をお配りしようと思ったので、「配らないで、私が配るから」とお願いしておいたのに全部机の上にあったので、ちょっと頭にきてしまった。本当にだめだなと思いました。めったなことに腹を立てぬということで、この2年ぐらい一度も腹を立てていなかったのに、今日はうっかり腹を立ててしまったと思って、すごく反省しております。ごめんなさい。

昔、子どものときに見たドナルドダックの漫画で、ドナルドがホテルのベルボーイをやっていました。「お客様は神様です」と言われて、怒りたい、怒りたいけれども怒ってはいけない。1、2、3、4と10まで数えて怒りを抑えるのです。それを小さいときに見たので、私は怒りたくなったときは、ドナルドの顔を思い浮かべながら、1、2、3、4と数えることにしています。これ結

構効きます。

それから、私は込んだ電車で来るのでぶつかられたりするのですが、そのとき腹を立ててしまう。「何よ、この人、ぶつかっても謝らないで」とか、「込んだ電車は不愉快だわ」と思ってしまう。そのとき、いいことを考えました。

「ぶつかった人のエネルギー、いい運を私はもらっちゃった」と思うことにしたのです。この人の持っているいい運やエネルギーを私はもらってしまった、そのように思うと、ぶつかられても、混雑な電車も気持ちよく過ごせます。

それから、「いつも今を楽しむこと」。一人で両親を介護していたことがあったのですが、そのときに遅ればせながら大学院に行っていたので、毎日がへろへろになるぐらい大変でした。高崎ではなくて、埼玉の方へ通っていたのですが片道2時間かかる。でも、10分、自分の夢を見る時間を作ろうと思って、「クオリティータイム」というのを考えました。バスに乗りかえるのに待ち時間が10分あるので、そのときにドトールに行って、安いコーヒーを飲みながら、「これ、私のクオリティータイム、どんな夢を描こうかしら」と思いました。

これを教えてもらったのは、ユダヤ人のおばあさんからでした。ある時私はパリのオペラ座の近くを歩いていました。ロワールのお城のポスターがあって、それを赤毛のアナ・ロエベルという女の人が見ていました。フランス語は上手ではないのですが、ボンジュールか声をかけてしまいました。知らない人ですが、一人で旅をするより二人だと安いから、二人で旅行しようということになりました。ホテルでくつろいでいる時に、彼女には入れ墨があることがわかりました。何かなと思ったら、ナチスの収容所にいたそうです。お兄さんも両親も殺されてしまったかどうかわからない、いつ自分の番が来るのだろうか毎日心配していたそうです。

でも、そのとき考えたそうです。悩んでも苦しんでも一日。それなら戦争が終わったときに何をしようかということを考えて、自分のクオリティータイムを毎日作りながら、考えながら、

プラス思考で…それで弁護士になろうと決めたそうです。決めた途端に戦争が終わって、助かったそうです。60歳まで働きながら勉強して弁護士になって、お休みをとってパリに来たというときに会いました。そのアナという人のことを思うと、どんなに悲しい辛いことでも、収容所と比べれば、みんな、すごく幸せではないでしょうか。だから、毎日、私は新幹線から外を見ながら、「新幹線で通えるなんて、何てありがたいことかしら。こうやってきれいな緑が見える、目が見えるのは幸せだな」と思うので、毎日すごくハッピーです。今を楽しむことです。

その次、「とりわけ人を憎まず」。これ、とても難しい。やはり気に入らない人がいる、意地悪な人がいる、腹が立つことも多い。でも、そのとき考えました。勝手にその人のシナリオをつくってしまうのです。きっとこういうことで苦労しているに違いない。だから、私に意地悪をして、それで憂さを晴らしているに違いないとか、勝手にシナリオをつくることにしました。そうすると、その人を憎んだりしないと思います。

最後に、「ラッキーな毎日、幸せな一年を」というプリントをご覧ください。これを一年の始めに学生に配ります。これは、私ではなくて、藤木さんという方が書かれた『そんな生活をしていると運が逃げますぞ』という本から抜粋してきたので、後でお時間があるときに読んでいただきたいと思います。

あと7分しかないので、ゲームはできないかな。5分だけください。

資料の中に「未知の人取材ゲーム」というのが入っていますのでご覧ください。これは今から20年近く前なのですけれども、そのころは文科省ではなくて文部省だったのですが、レクリエーションインストラクターの資格を取るときに何かゲームを考えないといけない。どうしようかと思いました。日本人は知らない人と話すのが結構苦手ではないでしょうか。だから、取材ゲームというのをして、みんなで取材しあったらいいのではないかと考えてました。もう長い

間やっているのですけれども、これをオープンキャンパスで致します。一人で参加する人もいます。そこで、取材ゲーム、「今から15分の間に5人の人を取材してください」と言ってゲームをします。高校生だと、質問は血液型、好きな芸能人、好きな食べ物、何でもいいのです。一緒に質問を作ってゲームを始めると、初めはいいややでも「私は新潟から来ました」とか、「好きなタレントは」などいろいろ話します。そうすると、一人で来た高校生が、模擬授業の後何人か一緒になってティータイムに行きます。そして、次のオープンキャンパスには「こういうのやるから来てね」というと、知り合ったばかりの高校生同士が「じゃあ、来ようか」といって次のオープンキャンパスに来てくれます。

このゲームを本当は皆さんにやっていただけるといいのですけれども、時間がないのでご紹介だけさせていただきました。是非やっていただきたいと思います。

ここ10年以上、初級公務員の研修をしているのですが、「うちの上司にやってくださいよ」などと頼まれて、50代、60代の部長さん達の研修もやっているのですが、一番よかったのは、取材ゲームでいろいろな人と話せたことだと言われますので、これを利用していただけると、いろいろいいコミュニケーションが広がると思います。

たわいもないことをお話して、お役に立てたかどうか分かりませんが、みなさんがますますお元気で、お幸せな毎日をすごされますように祈っております。

どうもありがとうございました。

分 科 会

「学校事務の質の向上と今日的な課題対応について」

- ① 学校窓口としての接遇（コミュニケーション力・傾聴力・マナー・電話の対応・クレーム対応）
- ② 情報の管理（個人の情報・セキュリティー）
- ③ 保護者・近隣への対応（危機管理能力の向上・リスクマネジメント）
- ④ 学校事務・業務の効率化（就学支援金手続き・補助金申請）
- ⑤ 教員とのコミュニケーション・信頼関係づくり（カリキュラム・経営への参画・生徒募集）
- ⑥ 協力的な職場環境の構築（協調性・やる気の向上）

法人管理事務運営部会では、午前中の基調講演と講演、午後の研究演習を受けて、最後のプログラムとして、上記のテーマについて分科会を行った。テーマは、「学校事務の質の向上と今日的な課題対応について」とし、上記の①から⑥までの小テーマを各グループごとに絞って、協議がなされた。また、本部会のテーマである「事務室が変われば、学校も変わる」をテーマとして協議を行ったグループもあった。

司会は、A グループは常磐高等学校法人本部の常見憲男部長、B グループは、常磐高等学校の塚越 隆事務長、C グループは高崎商科大学法人本部の加島勝一課長、D グループは高崎商科大学附属高等学校の石川貞雄事務長が担当し、それぞれコメンテーターとして、学校法人鹿児島学園の正村幸雄理事長、聖光学院中学高等学校の工藤誠一理事長・校長、高崎商科大学附属高等学校の森本純生理事長・校長、富本教育研究所の富本道宣所長にご参加いただいた。

なお、本報告では、分科会ということで、忌憚なご発言を求めたため、都道府県名、学校名、氏名に関しては、公表せず、かつ協議内容の一部を紹介する形とした。

各県での事務職員を対象とした研修会の実施状況について

ほとんどの都道府県は学校事務については行われていないが、少数ではあるが、大阪、鹿児島のように私学協会が中心となって行われているところもある。

就学支援金に関する事務の研修会については、私立(私学団体)ではなく、各都道府県が説明会という形で行っている。鹿児島県が3回ほど実施前に私学団体で実施している。東京は私学協会が事務の取扱業務に関するアンケート調査を行い、都の担当へ集計結果を提出した。その結果かどうかは分からないが、助成金が出るようになったということである。



事務職員の事務室以外の業務

ある県では、事務職員が外に出る機会が全くないということで、修学旅行(引率)の派遣して

いる。事務職員が教員と共に仕事をし、お互いの仕事を理解し合え、効果的でなようである。また、複数の学校が事務職員にクラブ(部)活動の顧問等をお願いしている。問題は事務の業務への影響であるが、問題のある学校もあるが、うまく調整している学校も多い。ある学校は、部活の顧問というより、長期休暇等で業務に支障が出ないように、3年ごとに業務をローテーションしているという学校もあった。

クレーム対応について

クレーム対応については、多数が、基本的には事務では職員室となっている。ただ、電話等、事務が学校窓口となっているので最初の一言は事務がまず受けてやりとりするから、事務の言葉が不十分だったりすると、問題が大きくなっている場合もある。

なお、事務か教員科の問題で、クレームではないが、授業料の滞納についての催促についての話題も出されたが、ある学校の事例では、事務局が中心にやるべきか、学年あるいは担任がやるべきかというのはかなり微妙な問題で、事務局は、家庭の事情なりは担任のほうがよく知っているから教員がやってくれと言い、教員は、生徒指導を教育の面では言うが、金の話をしたら子どもとの信頼関係が壊れるからやりたくないという。その辺をうまく役割分担して、事務的にできることは事務局でお願いしますと言っているがも、担任が入ったほうがいい場合には担任が入るとのことである。

事務職員と教員の役割分担・仕事の分担について

教員の事務室への仕事の依頼が急を要する場合が多いことに対して、各校の様々な事情も考慮しながら、問題点が指摘された。例えば、出納に関することが多い。事務室の業務が煩雑であることが要因となっていることから幾つかの辞令が出された。

①業務カレンダーをつくり、ルーチンワークに関しては全部カレンダーを確認しながらやって

いるとのこと。

②インターネットバンキングを取り入れ、模試の代金等を先生方が集金していたのを銀行振込みにし、振込状況等を全部学校でインターネットを利用して見るができるようにした。ただ、先生方からは見れないようにしているため、それをプリントアウトして先生方へ状況を報告している。

③事務職と教員がお互いの仕事を理解するために、毎朝、朝礼を行い、そこに事務職員も全員出させて、一緒に教員の一日の仕事、事務の一日の仕事を報告させている。(本件は幾つかの学校も同様なことを行っているようである。)

時間外の事務室の体制について

学校終了後(17時以降)の管理について、各校の実情が聞きたいということで、次の2つがあげられた。

①事務室・法人室と職員室だけ独立してセコムを入れ、機械警備は完全に分けている。教室は自由に、最後の教員が閉める。分けたほうが便利。事務室は事務室側のセコムを解除し、職員室側は教員が解除します。

②電話は、学校の始業が8時20分、それまでは、守衛ではなく、夜勤の方(一晩中)に頼んでいる。お願いしております。学校の構造が開放的であり、運動が盛んでよく合宿・朝練をやっているためセコム等は入れていない。

教員とのコミュニケーションについて

教員と職員の中で、どうしても教員が上で、職員が下といった傾向になりがちである。職員会議の席へ出ても、職員は記録係で発言権もなければ決議権もない。その解消法や同じ問題を抱えている学校はないだろうかという質問に対して、次のような意見が出された。

①教員はプロであるので、こちらも経営のプロにならなければならない。きちんと勉強した上で、対等にやり合っていけば、ちゃんと認めてくれる。それを頑張ってる。下の職員にはいろいろな会議に出るように指示してい

る。また教員に対して説明をする、あるいは、こういうことをやってくださいと説明をしていくという形をとっている。

②委員会とか、そういうところに事務もメンバーとして入っている。それで、発言権はあるが、決定権という部分でいうと、委員会によって左右されます。ただ、今は一つのものをやり遂げるというところに教職員が必ず絡んでいくところから、例えば外部の方がある教員にアポをとっていききたいというときには、必ず委員会のメンバーの職員に声をかける。そして2人で話を聞くことによって、例えば、市の観光課から、学生に地域の碑の調べをお願いしたいという話があったりして、そういうときも教員が職員に声をかけて一緒に入ってやっていく。そういうところで近くなってきている気がする。

③何かあると、いろいろな部分で打ち上げに教職員で行きます。それが本当にいいのか悪いのかわかりませんが、近くなるかなという気はしている。ただ、そういったコミュニケーションをとる材料として、何か仕掛けをすれば、必ずそれは返ってくるかなと思っています。

④校長をやっているが、職員に対しても言っているが、「事務方」という言葉を使わせない。それから、「団」という言葉も使わせないんです。担任団は担任会、学年団は学年会。「団」と言うと、何となく職場の雰囲気が悪くなりそうなので、担任会というふうに言い直しさせる。そのようなことをやっている。

協力的な職場環境の構築について

「事務室が変われば、学校が変わる」という大きなテーマということであるが、本校では、事務室だけで変わろうと思っても100%できない。内部の中の意見統一ができないということもあるが、先生方の力関係で、かなり強いプライドを持っている先生が多いため、絶対に譲れない部分があり、事務が意見を出しても、つぶされてしまうパターンが多い。教員・職員の垣根を取り払った上で、一つの方角に向かって、例えば本校では生徒数減少等があるが、良い方

向に向かうために建設的に話し合ったり、それを行動に移して、どうすれば生徒が集まるか、いい学校になるかという話し合いをし、道しるべになればいいと思っている。事務、事務長、先生の立場で意見をうかがいたい。これに対し、下記の意見が出された。

①本校は50から40代ぐらいの人間が多い。その年代というのが今中心的に動いている。私(事務長)からも教員からもコミュニケーションを多くとっている。そういうところで、意見や考えの根回し的な話をしている。教員も金銭に関わる企画等について、いきなり会議で出せない場合は同じように根回しし、ある程度仲間を広げて会議へ上げる。だから、教員、職員、上下というのではなくて、どれだけ本音で言い合えるようなつき合いが教員と事務ができているかということ。これを広げていっている状況で、本校は動きやすくなっていると思う。

②本校は結構若い先生が多いので、職員との間にはうまくいっているんです。職員室によく顔を出している。上から目線で言われたこともないし、学校の見学会なども教職員と一緒にプランを立て、反省会なども一緒にやっている。だから職員が孤立しているような感じはないです。

③事務職員としてまだ日は浅いが、経理を担当している。やはり数字のプロフェッショナルを目指しいろいろ勉強し始めていろいろやっている。初めは、先生方とのコミュニケーションもうまくとれてなかったが、尋ねられることを先々シミュレーションした。学校というのは1年間で、行事が大体決まっているが、先生方は担当が代わったりするので行事というのは久しぶりとなる場合がある。例えば修学旅行を何年ぶりに担当するとか。それは事務の人間、経理の人間としては、お金のことは毎年だからわかるだろうからということで、先々これはこういうふうに尋ねられるのではないかと。あと、多忙な先生方にこのぐらいでいかがでしょうかというふうにコミュニケーションをとっていくように努力もしている。初めは、新人ということで、任せられるのかなと思われていた部分もあ

ったと思うが、やはり自分自身も努力をしていくということもすごく大切なのではないかと思う。私はまだまだ新人ですが、自分のやっている仕事に対しては、何を聞かれても大丈夫だというぐらいのプロ意識ではないが、そういう気持ちも持って、先生方に尋ねられても、すぐ頭が回転できるように考えている。

④本校は毎週1回課長会議を月曜日に開いている。全てではないが、そこで議論をして、委員会ベース、もしくは大学の協議会に持ち上げている。それを我々が下の者に説明する。そういった流れを今つくってやっている。

⑤本校は教員が約60人、事務職員が15人。そうになると、校長が事務員、教員に直接話をする。小さい学校だと、事務長を通してではなくて、事務職員から直接話を聞くというぐらいの規模です。大きい学校は組織になりますが規模によって違う。また生徒募集は、事務職が募集委員会等に入っていたほうが良い。学校の先生が授業をつぶしてパンフレットを持ってまわるより事務職員がやったほうが絶対効率的。本校は、生徒募集、入試委員会には事務職員が必ず入って進めていく。男子校であるが、女性の人が入って相談に乗ったほうが親は安心する。寮の話になると、逆に女性が相談に乗ったほうが実際には安心する。そういう部分がある。だから、コミュニケーションのとり方というのは規模によってうまくつくっていく。それはある部分というと、校長なり、教頭なり、事務長なりがどういうふうに意見をくみ取っていくかなというところじゃないかと思う。

「事務室が変われば、学校も変わる」

①確かに事務室が変われば学校も変わるかもしれないけれども、教員も変わってもらわないと学校は変わらないという思いでいます。

②変わっていけるとは思う。対応とかで、まず印象をよくすることができるといいますので、それをすることで、先生方にも影響が出ていけばいいなと思います。

③学校が変わってほしいという希望もあるの

で、変わると思う。一本目の電話が鳴った場合、事務の窓口は必ず通ります。その窓口で電話等を通して先生方に伝えていく。その窓口でまず対応させていただいて、先生方に用件を伝え、その用件を、どうされるかは別としまして、職員室と情報交換、情報の共有ということを管理職も含めてしているので、多少漏れ等はあるが、逆も真なりで学校の先生方も変わっていただければ、私達も事務の立場ということで変わっていけるだろうと思う。例えば生徒の対応にしても、事務のほうから担任のほうに電話をして、先生方も協力的にやっただけでいる。先生方に希望するところは、管理職を通ることもあるが、自由にさせていただいている部分が私どもの中高にはあるので、そういう意味では変わっていけるのではないかと思います。

④教員と事務職というのは、二本柱で学校を支えているのだと思う。教員の場合については事務職がなかなか意見を出す機会ができないというのが現状だが、なるべくコミュニケーションをうまくとり、こちらで感じたことをうまく伝え、改善なりをして、今のところは本校の場合はうまくいっていると感じている。事務職は一番最初の外部との窓口であるので、外部とのコミュニケーションで印象をよく持たいただくために常日頃心がけることがよりよくしていくと思う。

⑤保護者と事務の関係で考えれば、事務室の対応がよければ保護者の感じももちろんよくなる。電話ももちろんだし、事務の窓口で対応に関しても、その方が何を求められているのかを常に意識してやっている。教員とのコミュニケーションはやはり難しく感じており、同じことを伝えても、よくとる方もいれば、逆にとられる方もいる。

⑥本校は、理事長・校長が事務室は学校の顔だと言っている。だから、学校の顔が変わるということは、事務室が変われば学校は変わっていくといつも考えている。生徒の窓口もそうだが、外来者の窓口もそうである。一番最初に外来者が会うのは事務室。そのときの第一印象という

のは、その人の一番印象に残りますよという話をよくされる。そういう部分を考えると、変わるだろうと思います。

⑦事務室に入ったときに、先生方と事務室との距離感をたいへん感じた。居心地が悪いため距離感を縮めていい雰囲気づくりができたらし、一生懸命距離感を縮めるように努力しているつもりではある。そういったことで、事務室が変われば学校が変わるんじゃないかということで日々仕事をしている。お互い雰囲気よくいいコミュニケーションができれば、いろいろないいアイデアも生まれるだろうし、主役は先生方で、補助的な部分を担っているのが事務室だと思うが、お互いになくってはならない存在であって、やはりお互い理解していいコミュニケーションをとらないと、いい学校はできないと思う。学校という組織の中であって、先生方に対して事務室というのは少し違う立場からものを言えるポジションでもある。だから、先生方に刺激を与えることもできるポジションでもある。コミュニケーションがうまくできるような状況をつくっていくことが、やはり学校にいい影響を及ぼすと思う。事務室が変われば学校も変わると、強いて自分はそういうつもりで仕事をしていくつもりである。

⑧自分自身、教壇に立つ一方で、事務方の仕事も同時にこなしていたので生徒に接するという点では私も教員の気持ちが理解できるところがある。現在、入試公募委員会の校務分掌に加わる形で、教員と一緒に仕事をしている部分が非常に多い。本校は事務室が非常に強く出ていると実感をしております。というのも、私自身も卒業生であるのと同時に、事務長もそうである。そのため教員に対しては非常に強く出ている。教員からの書類提出についても、遅れるということは基本的になく、また、遅れた場合でも督促をする。一方で、教員の方々の中には一枚岩というわけにはいかない、勤続年数が何十年という方もいらっしゃるの、なかなかお考えが硬いというか、古いという方もいる。ただ、夏休み等、長期休養期間中については、教員が毎

日1人ずつ入れ替わりで事務室のほうに詰める形になります。そこで窓口等、あるいは保護者等の対応をしてもらっている、多少は橋渡しの形もあり、お互いの理解につながっているのかなと思います。「事務室が変われば、学校も変わる」というテーマに対しましては、学校が変わるという認識はあります。対外的な考えで申し上げれば、県の中央より北が本校の生徒が大半を占めるものですから、どうしても地域密着にならざるを得ない。そうすると、私が一事務職員として応じた業者の方は、実は息子さん、娘さんが小学校6年生であったり、そういったところでロコミが広がる可能性が非常に高く、事実、そういったところから生徒さんにいらっしゃってくれることが非常に多い。中身というか、校内に関しても、私が先に動くという考えで今おります。校務分掌に加わる形でもって、一部の教員ではありますが、一緒に仕事をしておりますので、そういったところから徐々に、事務室が変わればというよりは、事務室が変わることで学校を変えていくという所存でもって今後、仕事のほうに臨んでいくと考えている。

⑧最初は職員会議には事務長しか出席していなかった。一緒に事務職員もできる限り会議に出るようにしようということになり、まず情報伝達がしやすくなったり、保護者や生徒の情報というのも先生と共有して、プラス面があった。

授業料徴収等の仕事をしていたが、実際に職員会議で資料を出したり、そのあたりの悩みを先生に共有していただいている。そうすると、例えば授業料が滞っている場合等、先生と一緒にになって取り組む。



総 括

高崎商科大学附属高等学校 理事長・校長 森 本 純 生

平成21年10月の山陰大会の終了後早々に、当時の群馬県私立中学高等学校協会の会長として群馬大会の開催をお引き受けしてから、2年間の過ぎました。今回の全国私学教育研究集會群馬大会が皆様のご協力を頂き無事終了し、正直長い間の肩の荷がおりた感じがしております。群馬県で開催が決まってすぐに準備に掛かりました。集會の内容や部会の研究目標等を一年後の長崎大会で発表しなければならないので協会で検討を急ぎました。全体会は「音楽のある街・高崎・からのメッセージ」と題して記念講演と群馬交響楽団演奏を楽しんでもらうこととなりました。全体會の内容が全国で初めての試みであり、出演料が高額になるなどの心配な問題もありましたが、群馬県・高崎市からの資金的な援助もあり、実施できました。参加者の皆様の感想からも好評でありましたことを大変嬉しく思っております。

当研究集會の法人管理事務運営部会は常磐高等学校と高崎商科大学附属高等学校が担当することになりました。本年度より日本私学教育研究所主催の私立学校専門研修会の部会と共催の形となり、専門研修会の専門委員の先生のお力添えを頂き開催できました。今回の部会は「事務室が変われば学校も変わる」を研究目標とし、学校事務職員の意識を改革し、事務職員の果たすべき役割を確認し、事務室が変わることが学校全体の質の向上に繋がるとの信念を持つことが最も重要であると考え企画を致しました。

基調講演には法人管理事務運営専門委員会の委員長であり、聖光学院中学高等学校理事長・校長の工藤誠一先生にお願いを致しましたが、研究目標に副った素晴らしい内容の話でありま

した。先生は教員・事務長・教頭・校長・理事長を歴任され、学園の歴史の中での危機や改革を通して、私学の教育・経営の全てに精通されておられます。平等と社会的統合を目指すのが公立学校の使命で、私学は自由と社会的多様性であると仰り、すぐに行動に移せる私学の教育や事務の合理化、事務長としての職務、保護者への対応に加え「報連相」ではない、自分で考えて行動できる力がないと駄目である等、経営を軌道に乗せられた実績ある先生のお話は貴重でありました。

「大型温泉旅館の破綻と再生から学ぶ魅力づくりと意識感覚」と題して株式会社星野リゾート・トマム代表取締役総支配人の佐藤大介先生の講演は異業種企業の再建・改革の内容でありながら、教育関係にピタリ当てはまることばかりでありました。ビジネスホテルは公立学校です、と工藤先生の話と関連づけながら、サービス産業と私学経営の共通点を話され、魅力作り・満足度向上・生産性向上・組織づくり（自律型サッカーチーム型組織）等のまさに私学に必要なとされる要素を示して頂きました。

最後に学校の窓口の事務サービスについて「明るい接遇で学校を楽しく」のテーマで高崎商科大学短期大学部教授の天津ゆり先生に楽しい講義で締めくくって頂き、分科会へと進みました。

分科会にはほとんど全員の参加者が出席し、活発な意見交換がなされました。アンケートの中でも今回の研修で得たものは多かったとの感想が多く、企画・運営にあたった者として少しは責任が果たせたかとホッと致しました。ご協力頂きました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

進路指導部会

1 研究目標 個性を伸ばし夢をかなえる進路指導の実践

2 会場 エテルナ高崎 「3階 凜」

3 日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
10月28日	受付 部会開会式	基調講演	事例発表	昼食	研究発表Ⅰ・Ⅱ		総括・閉会式	

4 内容

部会開会式 運営委員長挨拶 東京農業大学第二高等学校 校長 松本 兼太郎

基調講演 演題 「進路、大海への出発点 実り多い航海のために何を託すか！」
講師 株式会社アメリカンドリーム代表取締役 吉川 浩司

事例発表 テーマ 「将来を見通した体系的な進路学習」
発表者 文星芸術大学附属高等学校 進路統轄部長 牧島 勝利

研究発表Ⅰ テーマ 「生徒の希望を重視した進路実践」
発表者 東京農業大学第二高等学校 進路指導部長 山田 欣司

研究発表Ⅱ テーマ 「個々の潜在能力の発掘と進化を目指して」
発表者 明和県央高等学校 教諭 津久井 武

部会閉会式 総括 明和県央高等学校 校長 田村 仁
閉会のことば 明和県央高等学校 校長 田村 仁

5 運営委員（順不同）

委員長	松 本 兼太郎（東京農業大学第二高等学校 校長）
副委員長	田 村 仁（明和県央高等学校 校長）
委員	伊 藤 薫（東京農業大学第二高等学校 教頭）
	山 田 欣 司（東京農業大学第二高等学校 教諭）
	奥 川 武 史（東京農業大学第二高等学校 教諭）
	津久井 武（明和県央高等学校 教諭）
	中 村 健 彦（明和県央高等学校 教諭）
	高 橋 尚 志（明和県央高等学校 教諭）

基 調 講 演

「進路、大海への出発点

実り多い航海のために何を託すか！」

株式会社アメリカンドリーム 代表取締役 吉 川 浩 司



皆さん、おはようございます。アメリカンドリームの吉川と申します。初っ端からいきなりですけども、今、苦笑いが出ています。身に余るご紹介をいただいたのですけれども、もともダメ男でございまして、恥をお話することになると思いますが、お許してください。

まず一番最初に、ご紹介の中にありました、世界へ羽ばたく夢を持ってアメリカへ行ったという部分ですが、実は世界に羽ばたく夢なんか全然なくアメリカへ行ってしまったんです。どうということかといいますと、私は、ご紹介にありましたように、広島にある舟入高校という公立高校の出身です。私の家は、私の親父が小さな会社を経営してまして、そこに社長の息子として生まれたんです。親父に言わせますと、「おまえは将来わしの跡を継ぐんじゃ。将来、社長になるんだぞ」と、ものすごく甘やかされて育ちまして、幼少の頃の私は、「ドラえもん」という漫画をご存知の先生方も多いと思うのですが、あの「ドラえもん」に出てくるジャイア

ンとスネ夫の二つを足して2で割ると私ができるという、これはジャイアンのたくましさと、スネ夫の財力というのと違うんです。ジャイアンの凶暴さと、スネ夫のずる賢さを兼ね供えた子どもだったわけですが、そのままスクスクと育って、将来、僕はパパの会社を継ぐのだらうと思っていましたら、中学校1年生のときに僕の親父の会社が倒産してしまったんです。小さい頃から、「おまえは将来、わしの会社を継いで社長になるんじゃけん」と言っていたのが、「パパ、話が違うじゃないか。継ぐべき会社が無くなったじゃないか」と。それで、さてさてどうしようかと。わがままに育っていたので、ちなみに言いますと、わがままが原因で小学校5年生、6年生のときには、2年間、クラス中から無視されました。それで、当時、「不登校」などという言葉はなかったですから、もしあったら僕もそうになっていたかもしれないけれども、学校はいつもどおり毎日通っていたのですけれども、過ぎ去って思うと、あのときになぜあんなふうにクラス中から無視されたのか、全部思い当たることがありましたから、あれはあれでよかったような。なにしろ、それでも、今こんなにおしゃべりに育っていますからね。

そういう時期も過ぎて高校に入って、先程サッカーのご紹介がありましたけれども、僕はスポーツは柔道をやっていました。体型がそのままだったといいますか、柔道は全然強くなかったんです。地区大会に出ては勝っては負けたり負けたりみたいなことだったんです。先ほど

僕の親父は会社を経営していたと言いましたが、親父は柔道を本当にちゃんとやってまして全国制覇したんです。スネ夫とジャイアンのでき損ないの僕としましては、僕のパパは会社を経営していて、おまけに柔道日本一。憧れはあったんですけど、自分は全然内容を伴っていませんでした。

それで、先ほどお話ししましたように、親父の会社が中学校のときにつぶれてしまって、さて、ここからどうするかというとき、わがままにずっとそのまま育っていましたから、会社勤めというのも性に合わないし、それで思ったのが、じゃ、会社がつぶれたのだったら自分でつくろうと。大人になったら自分で会社をつくろうというふうに高校ぐらいのときには考えていたんです。それで、高校3年生で進路指導があります。僕は今まで先生には恵まれていまして、高校のときの先生もそうですし、結局、アメリカの大学へ行くことになったのですけれども、英語をずっと教えてもらった先生も、そういう先生方のおかげで僕は自分なりに満足した人生をずっと歩かせてもらっています。英語を教えてくださいました先生とは今でも非常に親しくおつき合いさせていただいていますし、進路指導していただいた先生は残念ながら数年前に亡くなられたのですが、そのときも母校の先生が、「吉川、あんたは永見先生にかわいがってもらったけん、お参りしたいじゃろ」と言って、わざわざご連絡をいただいて、お参りに行かせていただくことができました。

その永見先生は豪快な先生だったんですけど、進路指導のときに一人ずつ呼ばれて、「おまえ、どうするんだ」、「先生、僕は会社をつくって社長になります」と言ったら、1979年だったのですが、永見先生は「今どき珍しいな」と言われて、そのときに先生が仰ったのが、「おまえがそういうことを考えておるんだったら、おまえは大学は広島で国立を目指すよりも、東京の私立を目指すほうがいだろう。東京は都会だから、東京へ行くといろいろな人間がいるので、そういった大勢の人達の中でもまれ

で、それが勉強になるだろう。ちなみに、おまえの成績だが、これが見事な右肩下がりで」と言われたんです。

というのも、強くなかったですが、それなりにクラブ活動をやっていて、クラブを引退するときになりますと、それまで運動部でやっていた連中達が、そこから勉強に打ち込むんです。みんな一生懸命勉強し始めるんです。僕はちょうどそのころに、親にねだって原付きのバイクを買ってもらいまして、これが楽しくて、その原付きバイクで高校3年生の夏休みを過ぎるぐらいからでしたが、僕は広島だったので広島から博多まで走って行ったり、山陰一周とか、四国一周とか、そういうようなことばかりやっていたので、きれいに成績が下がっていったんです。永見先生が仰いますのに、「ところで、おまえの成績じゃが、これを見てみろ。きれいに下がっているだろう。だけど、心配するな。おまえはまだやる気になっとらん。とにかくテストを受け続けろ。そのままいくと、着々とこれからも下がっていく。そんなあるとき、おまえはやる気になるんだ。そのやる気になったときに、これじゃいかんということで、そこから勉強を始めろ。東京の私立だったら受験科目数が少ないから、幸いなことに、おまえは英語の成績はそう悪くない」と。永見先生は英語の先生だったのですが、「そこから国語と社会を一生懸命やってだな」と、ここから反転に転じるんです。「2月、3月ぐらいの入試の時期にたくさん私立大学を受けて、その中の入試問題と意見が合ったところに入れてもらえ。心配するな。」と。もともと心配していなかったんですけど、「先生、ありがとうございました」とチャラチャラしながら進路指導の1回目のお話が終わりました。

舟入高校というのは文系と理系に分かれていて、僕は文系だったんですけど、隣のクラスの文系とうちのクラスの文系が半分ずつで一つのクラスをつくって幾つかの授業をやっていたんです。それで、ある日の弁当を食べた後の午後の古典の授業で、漢文の先生が朗々と漢詩をお

うたいになって、気持ちよく眠くなっていくような授業だったのですが、その授業のときに、隣のクラスの私の友人が「吉川、おまえ知ってるか」、「何や」と言ったら、「うちのクラスの和田がアメリカに留学するでい」、「アメリカへ留学するんか。それはすごいやん」と。それで、和田の隣の席に、授業中だったのでコソコソと代わってもらって、「おまえ、どうしてアメリカへ留学するようになったんや」と聞いたら、どうやら東京まで留学の試験を受けに行って、それで合格したから行くことになったと。これはいいと思ったんです。テストの成績は着々と下がっていつにいましたので、僕が友達に言っていたのが、「一浪は覚悟」と。長い人生、1年ぐらい浪人しても、長生きしたらわからんようになるとか、そういうわけのわからない理屈を言って、一浪は覚悟だと言っていたんです。



ところが、聞いてみると、ちょこちょこと英語のテストを受けて、それで合格したらアメリカへ留学できるということですから、それはそっちがええじゃろうということで、その日の6時間目の授業が終わって、再び永見先生のところへ行ったんです。「先生、すみません、相談があります」、「何や」、「隣のクラスの英語も先生が教えていらっしゃるんですね。僕の英語の成績と和田の成績を比べてみてください」、「唐突に何や」と比べてもらったら、「実は今聞いたら、和田がアメリカへ留学するという話なので、僕もそういうのはどうかなと思ひまして」と。それで、比べて見てもらったら私のほうが若干よかったらしいんです。それで、先生が仰るに

は、「おまえのほうがちよっとええ」、「わかりました。ありがとうございます」とニヤッと笑って、家へ帰ってまずおふくろに言ったんです。「お母さん、心配かけたね」と。本当に勉強しなかったですから、「あんた、大学どうするんね」みたいに言われていたんです。「長いこと心配かけたけど、進路が決まった」、「どうしたん」、「俺ね、アメリカへ行こうと思う。アメリカの大学だよ」と。そうしたら、おふくろは製造担当者ですから、むしろ僕の性格はおふくろから受け継いでいる部分が多いので非常に似ていまして、おふくろがすぐ言ったのは、「アメリカ、浩司、それはええね。あんた、そうしんさい」と。

先ほども言いましたが、親父の会社は中1のときに倒産して借金が1億円以上あったんです。だから、親父は借金を返さなければいけませんから、おふくろは「仕送りは私が何とかする」と。おふくろはそれで一発オーケーです。格好いいからそうしなさいという話ですから、今度は親父に言ったんです。「お父さん、僕、アメリカの大学へ行こうかと思う」と。そうすると、親父は「ほうっ」と言って、僕の親父は先ほども言いましたが柔道が強かったんです。柔道で広島から東京の明治大学というところへ行ったんです。明大柔道部だったんです。それで、親父が言うのに「なるほど、わしらのころに『都の昼寝』という言葉があった。同じ昼寝をするのでも、田舎で見る夢と都会で見る夢は夢が違う。そう思って、わしらは都会へ出たものじゃ。わしはそれで、よう寝たもんじゃ」と。本当に勉強しなかったらしいんですけど、「わしらのころは都といたら東京じゃったけど、今なら都といたら国内じゃないかもしれん。おまえがそうしたいなら行ってみい。ただ、言うときけれども、ええか、人間は限界を知るのも大切じゃ。帰るところがないと思うなよ。これが限界じゃ思うたらいつでも帰ってこい。おまえには帰ってくるところがあるんじゃけん。考えてもみい、アメリカの大学へ行ったら授業は全部英語だ。よほど賢ければ別じゃけど、日本語も

まともにしゃべらんおまえが、おまえはわしの子じゃ、賢いわけがない」と言ったんです。製造担当者のもう片割れが「賢いわけがない」と。これはお墨付きですから。それで、とにかく一応許可が出て、進路が決まってしまったわけです。これはテストを受ける前だったんですけれども、高校3年生の11月ぐらいだったと思いますが、東京に英語のテストを、2時間ぐらいのテストだったのですけれども、TOEFL をご存知の先生方もいらっしゃるんじゃないかと思いますが、TOEFL と似たテスト、プラス、エッセイがあったんです。それを受けに行ったんです。そのテストはマークシートなんです。マークシートはいいですね。一発で合格したんです。それで、アメリカへ行くことになった。

どういう大学へ行ったかといいますと、実はアメリカには大学の数が多いです。約4,000校近くあると言われています。人口で比べると、今、日本は1億2,000万人とか3,000万人ぐらいですが、アメリカは2倍より少し多いですね。昨日人口センサスで見たら3億1,000万人ぐらいでした。ですから、2.何倍ですから、日本に約1,000ぐらい大学があるのですが、2.何倍というと二千数百あればいいんですけど、それが4,000校あるんです。これが、アメリカは大学に入るのが簡単で、出るのが難しいと言われる所以ですね。だから、入るのは簡単なんです。

もちろん、それはランキングに分かれています。どんなランキングかといいますと、今言いましたように、大体3,500から4,000校ある大学が、こんなランキングです。Most Competitive、Highly Competitive のプラス、Highly competitive、Very competitive。Competitive は、Competition（競争）ということです。その most 最上級の競争から Highly-competitive、Very-competitive、Competitive、Less-competitive、Noncompetitive、競争がないというのものもあるんです。僕はどこの大学へ入ったかといいますと、先ほども言いましたように、将来、大社長になろうと思っていましたので、専攻はもちろん経営学ですね。私

が入ったのはここです。Less-competitive。これは、別に Less-competitive を狙って入ったのじゃなくて、とにかく不真面目な男でしたから、テストに合格したらカタログがいろいろ渡されて、この中からまずは好きな大学を選ぶところから始めろと言わतんです。

それは全部英語で書いてあるんです。英語でいろいろ書いてあるものというのは、あまり読みたくなんです。だけど、選ばなければいけませんから、そのとき思ったのが、アメリカの大学へ行くというのは楽じゃなかろう。向こうへ行って、たぶん僕は苦労して、場合によっては日本へ帰りたいとか、日本恋しいと思うだろう。そのときに、よし、海を見よう。この海の向こうに日本があると思って、そこで自分を励まして闘うのも良し。海の近くがいい。この海の向こうに日本があると。それで選んだのが東海岸のノースカロライナにある小さな大学です。おわかりと思いますが、東海岸で海の向こうはヨーロッパなんです。そういうこともわからない僕だったんです。

それで、とにかくカタログの中の写真で、海だということで「これ」と言って選んだわけですが、これまた大笑いで、行ってみましたら海だと思ったのが森だったんです。地図で調べろよということなんです。ノースカロライナは東海岸と聞いていたから海だと思って、写真で、よし、この海の向こうに日本があると選んだのですが、ファイエットビルというすごく治安が悪いところだったんです。全米最大の陸軍の基地があるところで、今でもニュースで時々名前が出ますが、フォートブラッグという全米最大の陸軍基地があって、アメリカは戦争のたびごとにそこから出撃します。だから、名前は今でもしょっちゅう聞くのですが、人口が少ない中に陸軍最大の基地がありますから、就学中、いろいろな目に遭いました。そこをわざわざ選んだのではなくて、写真で選んだのが下から2番目のランキングのメソディスト・カレッジという全校生徒650名の小さな学校です。ここで1年目が始まりました。高校3年生を3月に卒業して、

その年の8月にアメリカへ行ったんです。不安はありましたよ。よく親父にも言われましたが、「おまえ、全部英語だぞ」と。言われればそうだけど、行けば何とかなるだろうと思ったんです。根があまり暗いことを考えないようにしようというタイプですから、行けば何とかなるだろうと思って授業が始まってすぐ気がつきました。これは何ともならんと。全然聞き取れませんが、これはマークシートですし、聞き取りテストは発音などもものすごくクリアだったんです。ところが、アメリカの大学は世界中から留学生が70万人ぐらい入っています。世界最大の留学生を受け入れているところですから、そこで世界中から来た学生達が学位を取った後、残って教えている先生がたくさんいるんです。

一番苦労したのが経済学の授業です。インドから留学して博士号を取って教えていらっしゃる先生の授業なんですけど、全く聞き取れませんが、とにかく聞き取れたことをノートに録ろうと思うのですけれども、ほとんど黒板に書かれないんです。グラフを書きながら書くぐらいです。あとはバーッとレクチャーで、とにかく話をされるんです。それで、聞き取れたことをどんどん書こうと思ったら、聞き取れたのは唯一、話の合間に先生が仰った「OK. OK.」と言った、その「OK」しか聞き取れない。だから、グラフと「OK. OK」全然「OK」じゃないじゃないかと。それで、授業はだめだなと。アメリカ人に聞いたんです。「Excuse me. Do you understand his English」と。アメリカ人の彼は「No」。そして彼に「What do you do」と聞くと「Read a book」と。「Read book. OK」、それだ、教科書を読もうと。ところが本が600ページあるんです。

我々留学生は F-1ビザという学生ビザで入りますから、フルタイムの学生であり続けなければいけないんです。フルタイムということはどういうことか。パートタイムじゃだめなんです。だから、勉強が大変だったら、少しずつ学べばいいじゃないかというのが法律上できなくなっ

ているんです。フルタイムというのは12単位取らなければいけないんです。12単位というのは、通常の今の先生がしゃべるタイプの授業を少なくとも4つ取らなければいけないんです。それで、学期ごとの独立ですから、年間を通して一つの授業を受けるのではなくて、僕が行った最初の大学はセメスター制という年間で2学期に分けるのですが、1学期にある4教科を取ったら、これは4カ月1学期で完全に終了。次の学期にまた全然違う授業を取る。ということは、4カ月で4教科取らなければいけないんです。1教科の教科書が少なくとも600ページあるんです。600ページといたら、枕にして寝れるぐらいの厚さですから。それを「read a book」と言われても、高校時代、そんな長文なんか読んだことはありませんから。

でも、とにかく読むしかないと思って辞書を引き引き読むのですけれども、1回の授業で20ページぐらい進んでいくんです。ところが、こちらは一生懸命読んでも、せいぜい一晩で3ページ読めればいいほうです。そうこうやっている間に、自分がどこを読んでいる、授業が何をやっているのか全然わからなくなってしまった。でも、相変わらず何とかなるだろうといっても、だんだん気持ちが暗くなっていくんです。何とかなるだろうと思っている間に中間テストが終わって、期末テストが終わりました。期末テストが終わったら、成績表が郵便で届くんです。当時、インターネットなんかありませんから、とにかく日本語に飢えていて、私にとって唯一の心の救いは日本の友達からの手紙です。友達からたくさん手紙がきました。なぜか？出発前に自分で留学する、留学すると言って回りましたから。そうすると、わしの友達に留学するやつがおるといというのは友達にとってもいいんでしょうね。友達がバブルのように増えましたから。それで、とにかく友達からくる日本からの手紙だけが救いです。

ある日、期末テストが終わって郵便箱をあけたら、メソヂスト・カレッジからの大学の封筒に入っている手紙がきていたんです。これが

成績だったんです。なるほど、こんなものが郵送で届くのかと開けたんです。成績表にはいろいろ書いてあって、僕の封筒にだけピンク色の小さい紙が入っていたんです。周りはどうかと見ると、みんなピンク色の紙がないんです。1枚の白い紙だけ入っている。僕だけピンクの紙が入っているんです。成績にも当たり外れがあるのかなと思って、その紙を見ましたら、そこに書いてあったのは「Academic Probation」とあったんです。ネーム「ヒロシ・ヨシカワ」で、小さい字でいろいろ書いてあるんです。わからないです。それで、「John」と叫んで、John という名前はアメリカではたくさん転がっていますので、「John. John.」、すると「Yes」と誰かが返事をする。それで彼に「Excuse me. What is this?」と聞いたんです。そうしたら、ジョンがピンクの紙を見て、「Ah woow.」とか「Oh Boy!」とか言って、それで彼に「What is this?」と聞くと、彼は「Are you Hiroshi?」と。それで冗談っぽく「Yes, I am Hiroshi. From Hiroshima」という言うと、そうしたら、笑っている場合じゃないということで、「You are in danger」と言うんです。「You are in danger」、あなたは危険な場所にいる。それで、簡単な英語でわかるように教えてもらったら、どうやら退学の警告書らしいんです。Academic というのは「学問的な」、Probation は「警告」なんです。だから、簡単に言うと、あと1学期同じような成績だったらクビにしますよということです。知らなかったのですが、こういう仕組みになっているんです。

アメリカの大学は、A、B、C、D、F の5段階評価です。100点法でいくと大体90点から100点だったら A をあげますよ、80点から89点だったら B です、70点から79点だったら C です、60点から69点だったら D です、60点以下は F、即ち failure（落第）です。これを、成績を比べていくときに、A が2つで、B が3つでとやると、どちらがいいかわからないですね。だから、これは点数に換算してあるんです。A を獲得したら4点獲得です。B だったら3点、C は2点、D

は1点、F は0点です。これでやれば、正確には単位数を掛けて1単位当たりのポイントを出すのですが、簡単に言うと、教科の数で割れば、何点とっているか、成績平均点は何点かというので、どちらがいい成績か割り出せますから。だから、ストレート A というオール5だったら4点です。GPA (Grade Point Average) というのですが、成績平均点ですね。一番いい場合だったら4.0です。これに対して、アメリカは卒業が難しいと言われる一つのポイントですけれども、C のところへラインを引いてあるんです。成績平均点が C を下回ったら、学問的警告書が出ます。僕は、こういうこともあろうかと思って、下から2番目のところにいておいたんですが、僕は1学期目の成績が何だったかというと、2.0を下回っていて1.56だったんです。これが私の、留学するぞ、4年間頑張るぞと言った4カ月後です。高校を卒業して、夏に出発して、年が明けてすぐの段階で、これで大学からいなくなれとなってしまったんです。

これはどうにもならんなと思いました。先ほども言いましたように、教科書は600ページもあるものを3冊も4冊も与えられていて、どうにもならなかったんです。もうこれは無理だと。無理だということはどういうことかということ、あと1学期の猶予があるのですけれども、どっちみちクリアできるわけがない。次の学期に、2.0以上まで引き上げなければいけないわけですから。だめだったらどうなるかというと、大学をクビになるんです。クビになったらどうなるかというと、当然、寮も出なければいけませんから、学生ビザの法律上からいくと、日本へ帰国しなければいけないんです。あちゃーと思いましたね。先ほども言いましたように、みんなに留学する、留学すると言って出発して、4年間頑張るぞ、で行ったのに、4カ月たったら、おまえ、いなくなれになってしまったんです。初めて、これはえらいことになったなと思いましたね。

振り返ってみると、先ほども言いましたけれども、ずっとチャラチャラでやっていたのです

が、でも、ごく普通に小学校へ行って、2年間無視されましたけれども、普通に中学校へ行って、普通に高校へ行って、小学校のとき2年間無視されて多少学習しましたので、中学ではあまり乱暴なことは言わないようにして、中学では少しいい人になろうと。高校になりますと、更に学習機能を発揮して本当に楽しかったんです。高校3年間は本当に青春ドラマみたいな感じで、先生もいろいろなことを認めてくれる先生でしたから、高校3年生の夏休みにクラス全員で海水浴に行ったり何かするのが先生にバレちゃったりしても、「とにかく事故にだけは気をつけろよ。夏の間にしっかり体を焼いておけば、風邪をひかんでええから。ただ、事故だけはないように頼むぞ」と、そういう雰囲気の中で高校生活をやっていましたから楽しかったんです。そういうふうにごく普通できて、いきなり、おまえ、いなくなれよとなってしまったんです。

考えてみると、ハイカラが好きな親でしたから、いろいろな習い事をやらせてもらったのですけれども、全部やめてしまったんです。最後までやったのはクラブ活動ぐらいなものです。でも、そのクラブ活動も、先ほど言いましたように、全国大会に出たりなんて、とてもじゃないけどそんなレベルじゃない。でも、僕にしてみると、みんなこんなものだろうという感じだったんです。子どものころの夢は確かにありました。それが中学校になってくると少し現実がわかってきて、高校を卒業するころになると、夢という言葉自体あまり言わなくなって、口では、お互い友情は大切とか、人を裏切らない、それだけはやめておこうみたいなことを言っているけど、心の中で、俺らがどこかへ行ってそこに50人いればその中で二十何番目ぐらいのところにいればいいさと、成長するということはこんなものだろうということが何となくずっと自分達の中でわかりかけてきた。楽しくはないけど、そういうことだろうと。

そこへ降ってわいたようにアメリカへ行くという話があって、心機一転頑張るぞと思ったの

ですけれども、こういうことになったんです。よく考えてみたら、おまえ、今まで人生の中で何一つ本気になってトライしたことはないじゃないかと。何一つなかったんです。学生時代、先生方から言われました。「おまえはやればできる」と何回も言われました。でも、やらのですよ。やればできるかもしれないけれども、やろうと思ったことはない。言われたときは思いますよ。よし、やってみようと思いますけれども、それをちゃんとやったことは僕は一度もなかったんです。でも、別に誰かを脅して金を巻き上げたりとか、そんな悪いことはしないし、普通に友達と、学生服がちょっと丈が長いぐらいの感じだったんですけれども。ところが、アメリカまで行って、みんなにアメリカへ行くぞ、アメリカへ行くぞと宣伝していったのが、4年間頑張るどころか、4カ月でいなくなれたんです。

それで、どうしようかと。まず思ったのが、広島には帰れんと思いました。広島へ帰ったらどうなるかという、たぶん友達から言われるでしょうね。「知つとるか」「何」、「吉川が帰ってきた」「何でや」「ばかじゃけ」「大学をクビになった」「何でや」「ばかじゃけ」と。まさにそうだったんです。成績が悪くてついていかれんから、それで帰ってきたと。町を出るときは留学するぞと宣伝していたのが、正直、「ざまあみいや。あいつはずっといいかげんにタラタラしていて、人生そんな甘くない」となるに決まっている。だから、広島には帰れん。じゃあ、どうするか。当時、今思えば、全部が本当の事じゃなかったと思うのですけれども、例えば『アメリカ横断冒険旅行』という本が出ていたり、あるいは留学生のアルバイトは禁止されていたのですけれども、アメリカでアルバイトをして元手を貯めて、そこからアメリカでビジネスを起こしてミリオネアになりましたよなどという本が出ていたり、17歳という年齢ですから信じていたんです。アメリカは冒険の天地だみたいな形で思っていましたから。そうすると、とにかく広島には帰れないから、それじゃ、いっそ

のことノースカロライナの田舎じゃなくて、ニューヨークとか、ロサンゼルスのような都会へ行って、そこで禁止されているアルバイトでもやって、そして元手を貯めて、僕も商売をやって一旗揚げようかと思っても、心は奮い立たないんです。

じゃあ、高校のときと同じように、また親に頼んでお金を送ってもらって、中古のバイクか何か買ってアメリカ横断旅行と。そして本でも書こうとか、ばかなことばかり考えて、そうこうやっている間にもう決めなければいけないんです。短い休み、2週間あったかなかったかぐらいですね。そのショートブレイクが終われば次の学期が始まります。その次の学期で登校しないのだったら寮を出なければいけないんです。日本へ帰るのだったら、飛行機の切符のお金はないですから、恥をさらすけれども、親に「ごめん、クビになった。日本へ帰るから金を送って」と言って飛行機代を送ってもらわなければいけない。しょうがない。じゃ、とにかく広島へ帰るのはやめて、東京か大阪の都会へ行こう。そこで働かせてもらおう。それで、英語なら任せてください、アメリカに住んでいましたから英語が話せますというふうに言って、どこか会社で雇ってもらおう。そこで、親にはこれ以上は苦勞をかけられんから、自分で働いたお金で食っていけばいいじゃないかと思ったんです。

そんなことを悶々と考えているときに、夜、眠りが浅いわけですよ。寮の部屋の中でルームメイトが部屋の反対側で寝ているわけですが、途中で何度も目が覚めて、当時、たばこを吸っていましたから、外へ出てたばこを吸って、寝つかれないなと言って、寮の長い廊下のところにシャワールームがあるのですけれども、そこへ行って顔を洗ったり、手を洗ったりして、パッと顔を見たら、大きな鏡があって、そこに自分の顔が映っていた。自分の顔を見てびっくりしました。こんな顔していたっけと。暗い顔のように見えて、はっきり言えば人の顔を真っ直ぐに見れないような、そんな目つきを

していたんです。俺、こんな表情をしていたっけとびっくりしたんです。これは負け犬じゃんと思ったんです。

考えてみると、東京あたりに行って、英語なら任せてください、英語がしゃべれますと嘘をついて会社に世話になって、嘘がバレたらどうするの。世の中そんなに甘くはないぞと。仕事で行き詰まったらどうするか。おまえのことだから、またすぐ逃げるよ。言う言葉は決まっている。責任をとって辞めますと言うんだらう。そもそも昔から、習い事をやめるときは必ず全部ちゃんと理由をつけていますから、そもそもこれは無駄であって、こうなって、ああなつて、屁理屈をたくさん言って。会社に入っても、「わかりました。はい、はい。責任をとって辞めますから」と僕は逃げるだらう。

でも、責任をとって辞めたからといって、会社はそこで閉鎖するわけにいきませんから、僕がいなくなった後で誰かがその後始末をしなければいけないんです。そうすると、僕以外の社員がそこを元へ戻すところから始めて、言うでしょうね。「あの吉川のばかが、あいつがいらんことするから、よけいこじれているじゃないか。なぜあいつはうちの会社へ入ったんだ」と。いないほうがいい存在になるでしょうね。でも、世間は広いですから、また僕を知らないところへ行行って、そこでまた明るく見せて、「雇ってください。英語は大丈夫です」と、またそこでしばらく置いてもらって、何かチャンスがあると手を挙げて「やらせてください」と。それで、またちゃんとできない。また逃げて行く。また僕を知らない人のところに入る。一生逃げ続けるんだと。いないほうがましな男になっていくんじゃないか。

誰かが自分のことを負け犬と言うのは、それが友人だったら、もうそいつとは二度と会わないと決めればいいんでしょうけれども、そのときに愕然としたのは、鏡の前で、自分が自分のことを負け犬を言っている。これはどこへも逃げられないですね。どう逃げればいいのかと涙がボロボロ出てきました。正直言いまして、東

海岸の寮の飯はすごくまずくて、寮のカフェテリアの食事をほとんど食べていなかったんです。食べ放題ですけども、こんなもの食えるかと。アイスクリームとか、コカコーラとか、デザートケーキとか、結局、甘いものだけ食べていたんです。コーラとケーキとアイスクリームというのでまともにちゃんと食べていなくて、立ちくらみがするわけです。それで、ちょっとおかしいというので、でも、内心しめたと思ったんです。成績がついていけなくてクビになったらあれだけど、体をこわしてクビになったら、名誉の負傷で帰れるんじゃないかと思ったのですけれども、あまり重い病気はだめだと。それで、診てもらったら栄養失調という診断だったんです。1979年、80年のころにアメリカで栄養失調なんてまずない。踏んだり蹴ったりです。おまけに、先ほどいろいろな目に遭ったと言いましたけれども、治安上のまずい問題、僕に原因があるのですけれども、そういったことを何度も体験して、もうここで終わるかなと3回ぐらいそういう体験がありまして、とにかくアメリカが嫌いになりました。勉強にはついていけないし、体は栄養失調になっちゃって、おまけに人種差別とか、そういうふうなことを目の当たりに見ていましたし、何だ、これはと思いました。でも、「負け犬」という言葉が自分の中で浮かんできたときに、じゃ、果たしてそんな悪いことをやったのか。そこまでのことはやっていない。でも、おまえは今まで一度もやっていない。一度も自分でやってみよう、トライしてみようとしたことがないじゃないか。なのに、おまえはおでこのところへペタッと「負け犬」というレッテルを貼られた。それで、一遍だけやってみようと思ったんです。一回やってみて、それでだめだったらあきらめよう。それで、大学を自主退学するのを止めて単位登録しました。その単位を登録するときも、なるべく英語のハンディが少なく済むような授業をどういうふうにしたらいいかと一生懸命工夫して、次の学期が始まりました。

決めることは簡単なんです。ただ、人の細胞

というのは4日ぐらいで全部入れ替わるんです。だから、やるぞとは決めても、結局、毎日投げ出していました。よしやってみようといっても、授業は同じように聞こえないんです。じゃあ、「read a book」、本を読もうといっても、1回の授業で20ページ進むんです。それを何とか徹夜に近い状態で、本当に変わろうと思いましたから、1日が24時間で、その中で人間6時間ぐらいはやはり眠りたい。3回飯を食って、風呂に入って、トイレへ行ってなんていうことをやってきたからこの結果になったんです。じゃ、1日が24時間だという枠組みを外そう。とにかく読めるところまで読んで、疲れ切って、単にアルファベットを追いかけているだけだと思ったら、そこで目覚ましをかけて3時間仮眠をとろう。3つ目覚ましをかけて、横でルームメイトが寝ていますから、リーンと鳴ったらピッと押して、そのままフラフラしながら、壁伝いでシャワーを浴びに行って、冷たい水を浴びると体がポカポカになりますから、だんだん湯を熱くしていきます。寝不足で毎日頭がクラクラしていましたね。

これでどこまでいけるかと思ってやっても、毎日嫌でした。嫌というのが1カ月続きました。だけど、幸いなことに、一人ぼっちですから、家族とか周りがある前で、一度あきらめてペンを投げてしまったら拾えませんか。でも、一人ぼっちですから、ピッと投げて、怒るのはエネルギーが要りますから、しばらく怒っていて、さてと、とまたペンを拾うようになる。投げる場所を決めておかなければいけない。

そのように毎日毎日だましながら、やめるんだけどけれども、明日やめよう、今日もう一日やってみようと思ってやっていっても、もうだめだなと思ったときがありました。中間テストのときです。テストが返ってきましたら、全然伸びていないんです。先ほども言いましたように、1回の授業で20ページ進むのが、必死になってやっても、見てみろよ、1日僕が必死になっても7ページしかいっていないじゃないか。やっても無駄だ。でも、そのとき、あれっと思った

んです。

僕は何でもそうですけど、記録を録るんです。メモを録ったり記録を録ることが全然苦にならなくて、そのときも毎日2時間、3時間の仮眠をとる前に日付を入れていたんです。それで、何ページ読んだかというのがわかるようにしてあったんです。「あれっ、7ページ？」と思って、ちょっと待てよというので、2カ月前、初日を見てみたら3ページしかいっていませんでした。俺、伸びているじゃん。亀の歩みみたいなものかもしれないけれども、これでも伸びているんだと思ったんです。僕がもっと賢くて、すばらしい方法を思いつくのだったらそれでやればいい。だけど、僕の思いつくことは、とにかくコツコツ、生まれて初めてのコツコツなんですけど、コツコツやるしかない。そこから、よし、わかったと。言ってみれば、マラソンに出場していて、トップ集団ははるか向こうのところに行き、テレビカメラは全部そっちにある。一番後ろで僕が一人、ペタッペタッと言いながら進んでいるんです。いいじゃないかと。僕は、その日から、今日は昨日より1ページ先へ。今日は昨日よりもう1ページ先へ。昨日より1ページ、昨日より1ページというのを目標にして、残りの2カ月とにかくやり続けたんです。

そこからは、もうやめたという回数が減ったように思います。これが僕のマラソンなんだと。いよいよ残りの2カ月も過ぎて、期末のときがきました。もともと卑怯者の吉川ですから、ちゃんと計算はあったんです。やるだけやってみて、いよいよだめだったら、最後の段階のところで期末テストを放棄してしまうんです。そこで期末を放棄すれば最終成績がつきませんから。そして自主退学、それで言えばいいと。アメリカの大学の勉強は社会に出て役に立たないから、だから辞めた。そうすると、僕の成績はついていませんから、勉強についていけなくなって辞めたというか、辞めさせられたということは闇に葬り去られるんです。誰にもバレない。そうすればいいじゃないか。いよいよだめ

だとなったら、そのところで退学届を出せば、「大学の勉強は社会に出て役に立たない」と大人はみんな言うじゃないか。僕もその真似をすれば済むことだと思ったんです。

それで、いよいよ明日からファイナル期末テストというときに、さてどうだったか。全く迷いはなかったですね。生まれて初めて逃げなかったんです。痛みをずっと押しつけられていて、すぐ逃げていた僕が、生まれて初めて4カ月間ずっとギリギリ痛みを押しつけられながら、くそと思いつながら最後まで耐えていたわけです。この結果がどうなるかというのは、たった一人のギャラリー、たった一人のワンマンスペクテーター（観客）ですけれども、たった一人の観客がちゃんと見てやらなければいかんだろうと思って、結果はどうあれ、よし、やるぞと。今度はマークシートじゃなくて記述式だったんです。それで、とにかく知っていることは必死になって書きました。まさに自分なりに18歳で初めてベストを尽くしたわけです。

それで、ファイナルが終わって約1週間ぐらいいしてからテストの結果が出ました。おなじみの封筒がくるんです。もう2回目ですから、アメリカ人達がこういう感じで見て、成績がきた。僕は2.0を下回っていたら退学なんです。私のメールボックスをあけたら入っていました。本当に祈りました。それで、あけてみたら、1.56から2.0がクリアできているかどうか。そうしたら、成績平均点が2.08になったんです。ギリギリ。思わず、ヤッターッと思いました。間に合った、と思いました。2.08ですからすぐに滑り落ちて当然ぐらいいですけども、これが4カ月で間に合うという指一本引っかかっていますから、ここからは、これで全体重を引き上げればいいんだと思いました。イケると思いました。

これで実は1年間が終わっていましたので、先ほど言いましたけれども、ものすごいホームシックなわけで、日本へ帰りたくて帰りたくて仕方がなかったので、人に言ったら、「そんなに日本が好きならハワイへ行けよ。ハワイはえ

えぞ。ハワイは日本と同じじゃ。日本語のテレビもあるし、ラジオもあるし、映画館もあるし、おまけに日本語の本屋さんもある。漫画もある」「そうか、ハワイか。白い飯は？」「もちろんある。おにぎりもあるし、ラーメンもある。まさにパラダイスだ」というので、2年目は本当にホームシックが原因で、転校の手続をして僕はハワイに移ったんです。

ワールドカップ日本招致委員会の国際部員として、世界のあちこちを回らせていただきました。1年半で延べ39カ国回りました。天皇皇后両陛下の接遇させていただいたり、総理大臣の特別随行員としてなど、様々な国へ行き、本当にいろいろなところを見せていただいたのですが、今でも世界の中でどこが一番好きか。お金と時間を自由にさせていただくならどこに行きたいか。僕の答えはハワイです。だけど、1年間過ぎてみて思いました。ハワイは勉強するところじゃない。ここはパラダイス、観光の地、遊ぶところだ。だけど、本当にハワイのおかげで、ホームシックは1年かけて完全に治って、やはりハワイは狭過ぎる、本土へ行こうと。ハワイのときは成績はグーッと上がってきていたんです。1年目は東海岸でしたから、2年目はハワイ、3年目は本土の西海岸へ行こうと。

それで、サンフランシスコにある小さな大学へ転校し直して、3年目はサンフランシスコのリンカーン・ユニバーシティというところへ転校したわけです。アメリカは単位を持って転校できますから、1年生はここで、2年生はここで、3年生はここでとやろうと思ったらできます。ただ、僕みたいにこんなに何度も転校するというのは不利ですけども、僕の場合にはカウンセラーのアドバイスなしで全部自分で勝手にやっていました。3年目のサンフランシスコ、ここではストレート A の成績でした。これでノースカロライナ、ハワイ、サンフランシスコで3年目が終わって、成績はどうなっていたか。4点満点の確か3.78ぐらいまで上がっていたんです。それで、よし、いよいよ4年目、卒業はどこにするか。取り寄せたのはあこがれのハーバ

ード大学。これは、出願していてもたぶん通っていなかったと思いますけれども、まず学費が無理です。さっきも言いましたように、親父の会社が倒産して1億を超える借金がありましたから、親父はそれを返さなければいけない。僕の仕送りはおふくろがやってくれていたんです。広島に4階建てのビルがあるのですけれども、そのビルの2階でおふくろが食べ物屋をやって、そこでコーヒー1杯売って250円の中からお金を貯めて、1ドル250円の時代ですよ。だから、1,000ドル送ろうと思うと、今みたいに7万円とかじゃないんですよ。1,000ドル送ろうと思うと、二十何万円とか送らなければいけないんです。これは大変だったと思います。僕が夏の一時帰国で帰ってきたとき、おふくろが過労で倒れたのを2回見ていますから。そんなこともあって、もしかしたら後へ引いちゃだめだというふうになってきたのかなとも思います。そんな中で、「ハーバードへ行くから、お母さん、あと700万円」なんて言えませんか。ただ、僕にしてみると、3,500から4,000ある大学の下から2番目のランクの劣等生で、おまえ、いなくなれよと言われていた僕が、ハーバードへ行こうかなと思うぐらいのところまできたんです。これはこれでいいやと。あと取り寄せたのは、UC、カリフォルニア大学のバークレー校というところですよ。UC 全体でいくと、今、ノーベル賞学者が50人を超えました。日本全体が十数名だから、1つの大学群だけで日本の何倍ものノーベル賞学者が出た極めて優秀な大学群なんです。その本校がバークレーです。サンフランシスコも近くにありますが、幾つかの授業がバークレーで行われていたんです。そうすると、バークレーでは大学生達が教科書読みながら道を歩いています。これは合いません。僕の性格上、そういう中にいたらまた浮いてしまいますから、これはだめだなと。

それで、バークレーはこっちへ置いておいて、どうするかということで、そのときに残ったのが UCLA だったんです。行ったことはなかったのですけれども、バスケットとか、アメフト

で全米優勝していますし、勉強の点でも全米でトップ10に入っています。まさに文武両道という感じですね。それで、カリフォルニアのサンシャインみたいな、また勝手なイメージです。何しろ日本が恋しいからと言いながら間違えて東海岸へ行ったような男ですから、またイメージで決めて、よし、UCLA にしようといって出願したんです。

ただ、これもまたちゃんと調べずに何でもやってしまいますので、出願する段階のところで初めてわかったのは、経営学部がないんです。えっと思いました。でも、もう先に決めたからというので、聞いてみたら、経営から経済に専攻を変えてもいい。専門を全部取り直しをすればいいと。それで、考えた結果として、どうせだめかもしれないけれども、やってみようということを出したんです。これがアメリカのアドミッションオフィス、今は AO の入試というのがありますね。あれはここからきているんです。Admission Office というものです。その AO のおもしろいところですけれども、一つ一つの出願動機をもすごく綿密に見ていきます。出願期間は11月1日から30日までの30日間のみで、世界中から願書がきます。3,800人から4,000人の定員に対して、その10倍、この間は5万人ぐらい出願があったんです。その結果が翌年の4月に出るんです。だから、12、1、2、3、4で5カ月かけて審査をして、それで合否が決まるんです。

それで、合否結果がどうなるかという、このグループは10月から来ていいよ、このグループは1月から来ていいよ、このグループは3月から来ていいよと。そして、中へ入ってどうなるかという、競争があるのですけれども、正直言いまして、今迄の大学のような甘い競争じゃないんです。今迄のような100点満点の中の点数による評価だと、テストの問題が簡単だったら全員90点以上で A ということがあり得ますでしょう。ところが、こんなに甘くないんです。どういうふうになっているかという、毎回毎回テストで0点から100点まであって、そうする

と、こんな感じのクラスの山型のカーブが描けます。最低点5点がいる、最高点100点が2人いた。このクラスの平均点は73点ということです。ね。どうなるかという、少しおまけしてくれて、70点が C になるんです。では、70点より下、C より下はどうなるか。一発即アウトです。すぐクビ。猶予期間なしです。でも、そうしたら生徒が足りなくなる。だから、10倍以上の出願がありますから、クオータ制というのは1学期が2カ月半、10週間です。だから、10週間、ハイ、レースを始めるよとやって、大体下30から35%は切られますね。次の賢いのを入れるよ、10週間、下35%はアウト。次の賢いのを入れる。この10週間のレースを卒業まで繰り返すんです。だから、卒業というのは何かというと、誰が出てきても生き残った人間、この人達です。この人達に対して、卒業バッジをあげよう、世の中へ出て頑張っていっちゃい、なんです。

「頑張っていっちゃい」の後はどうなるかという、ご存知のように、アメリカも日本も同じように累進課税制度です。こうした競争に勝ち残った人達は、社会へ出て働くと給料がいいんです。給料が高くなると税率が高いのですが、そのときに、アメリカは税制が非常にうまくできていて、寄付した場合にはこれが控除されるんです。だから、税金を払ったのと同じような効果があるわけです。

そうすると、高額所得、例えば僕が1億円の年報をもらっていたとして、何もしなかったら4,000万円以上、税金をもっていられるんです。でも、この4,000万円を母校に寄付したら、母校から感謝状がきたり、場合によっては学部の名前をつけてくれたり、銅像が建ったり、年に1回行われる世界同窓会がありますが、時には大統領が来ることもあります。それで、一緒に写真を撮って感謝の盾をもらうこともあります。どちらがいいかという話です。もちろん寄付のほうがいいですよということで、寄付がものすごく集まるような仕組みになっています。

聞いた話ですけれども、UCLA の場合、年間の寄付が100億円あるそうです。ハーバードは

もっとすごいですよ。1,000億円だそうです。そうすると、その1,000億円というのは貯まっていますから、貯まったファンドが3兆円あるという話ですね。その3兆円を、ファンドマネージャーというのがいて運用する資金を得る。そうすると、何もしなくても4,000億円の利益が足される。その4,000億円の更に1,000億円です。ノーベル賞学者がわんさかいて、テレビで話題になった自熱授業とかあるじゃないですか。その人達がテレビで講演したり、本を出したり、そのたびごとにプロフィールに「ハーバード卒業」とか「スタンフォード卒業」と出ます。そうすると、世界中にいる意気に燃える若い人達が、いいなあ、あんな先生の授業を受けたいと思う。彼らは勝手に目指すんです。そして17、18才の大学へ入学する時期になったときに、世界中からそういった優秀な連中達が出願していく。その中から10人に1人の合格を出す。10人に1人の合格を出して、その彼らを集めてコロシウムのように競争させる。それで、生き残った人に、「君は我らの仲間だ。稼いでくれ」と言う。

僕は、現在、中国が台頭してきていますけれども、今のところはアメリカが世界最強だと思っています。良い悪いではなくて、この世界最強を支えているのは、アメリカの高等教育の仕組みだと思っています。そして僕はそれを知らずに大学に入ったんです。

内容をよく調べもせずに、僕は出願したんです。合格者が10人に1人です。先ほども言いましたように、3,800人とか4,000人に対して4万人以上の出願がくるんです。半分はストレートAです。成績が4.0です。その中から10人に1人を選ぶのはどうするのか。100点満点でも通らないですよ。それが、校長先生から表彰を受けた、地域コミュニティから表彰を受けたら0.1ポイント加点となっていて、合格者の平均が4.38だそうです。4点満点の4.38ですよ。そういうふうに勉強以外のものが加点されていくわけです。

僕は3.78でなぜ通ったのか。それが出願動機

のところに必死になって書いたわけです。この成績を見てください。3.78です。でも、これは4.0からずり落ちていったわけじゃない。僕の成績の最初を見てください。見るなといっても見ますから。1.56ですよ。ここからは上がっていった。親父の言葉の「京の昼寝、都の昼寝」なんていうことも書いたら、合格と、5カ月後の審査の結果で出されたわけです。それでUCLAに入って、専門教科の経済学を全部取り直して、2年間たって卒業できました。

その卒業するときの学長の言葉を今でもはっきり覚えています。卒業生が約3,000人ちょっとぐらいいるわけですがけれども、学長が言いました。「ここに今約3,000人近くの卒業生達がいる。恐らく君達の心の中には二つの感情があるんじゃないか。一つは、やった、修業期間は終わりだ、社会へ出れる、勝負させろ、頑張るぞと、そういう気持が半分かな。あとの半分は、今まで競争の中に身を置いていましたから、社会へ出るとまた更に厳しい競争があるだろう。その競争の中で生き残っていけるだろうか、自分はちゃんとやっていけるのだろうかという不安があるだろう。だから、期待と不安と半々だろう。それは非常に普通の、極めてノーマルな感情だ」と。

それで、学長はアポロ計画の話をしたんです。ついこの間、スペースシャトル計画が終了しましたけれども、僕が卒業した1984年にはアポロ計画があったんです。アポロというロケットを月へ向かって飛ばすんです。そして、月まで行って帰ってくる。これがアポロ計画です。学長は言いました。「君達も知ってのように、ここに月があるよ。ここに地球があって、ここにNASAがある。航空宇宙局ですね。NASA航空宇宙局にはスーパーコンピュータが配備されていて、世界中から科学者が集められて、ここから月に向かってロケットを打ち上げる。ところが、アポロは目に見えている月へ到達するために数千回の軌道修正をしなければいけない。世界最高の頭脳を集めて、最新鋭のコンピュータを配備して、これは目に見えているわけだから、

計算しておいてドンと押せば大砲の弾みたいにピューッといくじゃないかと。とてもじゃないけど、そうはいかない。数千回の軌道修正がある。これだけの賢い頭脳を集めてやっても数千回の軌道修正が要るんだぞ。ましてや君達凡人、我々普通の人達が人生を歩いていく上で、軌道修正があつて当然じゃないか。君達にまず悪いニュースをあげよう。これから先、君達の人生もずっと右へ行くべきか左へ行くべきか、常にどちらへ行くかという選択肢がある。そこで君達は思うだろう。選択を誤らないように、正しい選択ができるようにと思うだろうけれども、これが正しい選択だということを指し示してくれるフォーミュラー（公式）はこの世に存在しない。これが悪いニュースだ。次にいいニュースをあげよう。50分ずつの今まで君達が受けた授業を思い出せ。その授業の中でどうなっていたか。先生達が君達に偉大な先輩達の足跡をずっと教えてくれた。リンゴが木から落ちました、なぜ落ちたのか、どう思う？と。この場合はどうなる、この場合はどうなるといういろいろな疑問を投げかけて、そのたびごとに君達は、これはこういうことじゃないか、ああいうことじゃないかと。50分の授業が終わるときには、実は偉い先輩がこんなふうな理論を導き出している。ところで、その先輩がその理論へたどり着くまでに、誰か一人でも最初からスパンとそここのところへいけた人間がいるか。一人もいなかっただろう。みんなずっと試行錯誤を重ねながら、最後にこれが答えだと思えるところまでたどり着いた。これを覚えておけ。君達は、知ってのように、この世にあるもの全てのものには限りがある。水にも限りがあるし、エネルギーにももちろん限りがある。土地にも限りがあるし、人間の人生、人間の致死率は100%だ。全員いずれ死ぬ。そして、我々のやる気、頑張るぞという気持にも実は限りがある。それを知らずして、自分のやっていることは合っているに違いない、合っているに違いない、と信じていたのに違っていたとなっていくと、エネルギーが尽きたということで、そこであきらめてし

まうことになる。これがほとんどの人達の人生だ。ところが、我が校の卒業生達は違う。自分がやっていることが正しいと思っていない。なぜか。先輩達がずっとそうだったからです。だから、こうに違いないとやっても、恐らくは確率論から言っても、この論理は間違っている可能性が非常に強い。正しければこうなる、間違っていればこうなるということを、一番近くで、一番真剣な目で見ていますから、これはおかしい、これはおかしいと、人が気がつく前にものすごく細かい軌道修正をやるんです。そうするとどうなるかというと、ずうっと細かな数千回もの軌道修正をやります。これは伸ばしてみると、最短距離で一直線よりは余分な距離がいつているけれども、軌道修正が余りにも細かいから遠くから見ると一直線に見えるんです。最初からスツといつているように見える。だから、周りはこのよう、『あいつはラッキーだ』と。でも、それを自分から、『いや、ラッキーじゃありません。僕はこれだけの努力を重ねて、自分に最も厳しく、数千回の何とか』と言ったら疲れるので、どうするかというと、『いや、成功は皆さんのおかげです』と言ってにっこり笑う。これが君達の先輩がやっていることだ。君達も、これから世に出て、様々な問題で悩むだろう。失敗と呼んでいいのかわかりませんが、多くの方向性の間違い、その修正をずっと重ねるだろう。それでいいんだ。おめでとう、君達も今日からラッキーと呼ばれる人達の仲間入りだ』というのが僕達の卒業するときの学長の話だったんです。

それで、みんなおなじみのキャップというあの角帽を投げて世に出て行っただけです。23歳のときでしたから、今年50歳なので、もうかれこれ27年です。

それから社会へ出てどうなったか。本当はすぐ創業したかったのですが、おふくろから大反対されて、「あんたを小さな会社の親父にするために苦勞してアメリカまで行かせたんじゃない。1年でいいから就職しろ」ということで、「1年でいいんだね。母さんの言うとおりに

にするよ」といって、1年会社のお世話になって、その会社は僕の大好きな会社だったんですけれども、このままだとたぶんその会社に留まるだろう。そうすると、年齢がいったから、あのときもし僕が創業していればというふうに思うだろうからといって、エイヤッで自分から辞めたんです。

それで実家に戻りました。おふくろの食べ物屋ですが、僕のばあちゃんにボケが出ていて介護しなければいけなかったですから、経営がガタガタになっていたんです。それを何とかしようと。僕にしてみれば、あつという間に経営を立て直せると思っていたら、世の中、甘くない。うまくいかなかった。

そうこうやっている間に、ビルが競売になるということになったんです。先ほど言いましたが、親父の会社の借金がありましたが、約束どおり借金を返せていませんでしたから、競売といって叩き売られるんです。僕はいずれそうになると予想はしていました。だから、自分で創業と思っていたんです。

ただ、かわいそうだなと思ったのが、もう60歳にもなっている両親です。小さな会社というのは個人保証をやっていますから、当然、ビルを叩き売った競売の価格で追いつかないですから、家も手放すということになるし、仕事もなくなる。大変だなと言って、僕もまだ駆け出しだし、親を養うというところまでいっていないしと思っていたら、ある日、メインバンクに呼ばれて、初めて会った理事長に言われました。

「息子さんですね、お父さんは本当に頑張られたんですよ」と。「だけど、残念ながら、いかんともしい。ところで、今日わざわざ息子さんに来てもらったのは、これはやれというわけじゃありませんよ。ただ、もし息子さんにやる気があるのであれば、我が行は息子さんに1億3,000万円を融資します。息子さんがその1億3,000万円をお父さんの会社に貸す。お父さんの会社がその1億3,000万円を我が行に返済をする。そうすると、お父さんが借りていたお金、借金は消えます」。そうすると、競売をする理

由がなくなる。

「はあ、それはいいけど、ちょっと待ってください。最初の1億3,000万円は僕に貸す、それはどうなるんですか」、「あんたが返すんじや」、「すぐにですか」、「すぐにとは言わん。30年時間をあげる。30年ローンであんたが返すんじや。おまけに、これは降ってわいたような話だから、あんたには蓄えも何もないだろうから1,000万円の追加融資をする。その1,000万円は、やはりあんたが返すんじや」と。

それまであまり実感もなく聞いていましたが、ここで軽く返事をしてはいかん。「理事長、大変ありがたい話ですが、大きな話ですので少し考えさせてください」「当然じや。じゃがのう、競売差止は今日が期限じや」「えっ、じゃあやります。」と言って、スクーターで家へ飛んで帰って、生まれて初めて実印をペタンペタンついて、5時ぐらいになったのでシャッターは閉まっていた、「はい、お待たせしました」と言って古い書類を全部返してもらって、普通預金の通帳をもらったんです。「吉川浩司」という普通預金ですよ。ご新規、入金1億4,000万円。同じ日付で出金1億3,000万円。これが30年の約束の始まりです。

1億3,000万円とか、億単位のお金は見たこともないですけども、ただ非常にわかりやすかったのが、それを30年で返すということはどういうことかということ、利息込みで、固定資産税などもありますから、1日5万円返すのです。1日5万円×365日×30年間やったら約束を果たせるんです。盆正月はありません。疲れたら今日のはなしにしてやるというのはないんです。月額返済金が150万円で、それをずっと30年間。これがわかったときに、すごくよく理解できました。1万札は見たことがありますから、これを毎日5枚ずつ持っていかなければいけない。原則的には月に1回の支払いで銀行落としになるのですけれども、これが僕が25歳でした約束なんだということです。

やはり大変でした。創業して3年間、盆正月もないし、日曜・祝祭日は一切なしです。365

日×3年間、必死になって働きました。夜中2時、3時ぐらいまでやって、おふくろの店と両方の面倒をみななければいけなかったですから。失敗もたくさんしましたよ。今思えば、本当にばかな判断をやったなということもたくさんありますけれども、3年たって、これで僕がこれ以上ばかな判断ミスをしなければ自動返済ができるという体制まで何とかつくり上げることができました。28歳ぐらいのときでしたが、正直、そのとき引退も考えました。なぜかという、親戚から言われたんです。その頃そのメインバンクの理事になられていたのですが、「ようやったのう」と。なぜ銀行がそういうことをやったかという、設立にうちの家のおじいちゃん達関わっていたし、それでとりあえずということでやったけれども、実際は25歳の小僧にできるとは思っていなかった。何とかこの調子でいけば軌道に乗るんじゃないか。「ただ、おまえは危なっかしい。もう何もせんでくれ」というのが親戚としての率直な言葉だったようです。

そのときに一瞬、引退も考えましたけれども、考えてみると、俺は何もやっていない。自分で会社をつくろうと思って、それでアメリカへ行って、何とかかんとか卒業して帰ってきて、創業してとなったけど、創業と同時にいきなり1億4,000万円のマイナスで、とにかく払わなければ、約束を守らなければということで、どうやったら毎月毎月150万円の返済ができるかということで必死で頑張っていた。そもそも、よく考えてみると、子どもの頃はパパが社長だったから社長になろうとしました。この頃、夜中まで悩んでいたの、「おまえはなぜ経営するんだ。おまえはどんな会社をつくりたいんだ」ということをすごく考えざる得なかったんです。判断をするときに、根拠になるのは、「おまえはどうありたいか」という問いかけをして判断します。

なぜかという、さっきの学長の話じゃないですけれども、自分の判断が必ずしも合っているとは思えなかったんです。恐らくは間違った判断をするかもわからない。そのときに、こう

やれば得をするだろうと思ってした判断ミスが致命傷になると思ったんです。これがフェアだろう、これが正しいだろうと思ってやった判断が、仮にそうでなかった場合も、「吉川、おまえはどういう根拠でやったんだ」、「儲かってちょっと得すると思ったから」と言ったら、「そうしたら次の判断が下せなくなるぞ」、「でも、僕はこれが正々堂々としていると思う。これがフェアだと思う」と決断してだめだったときには、また何とか元へ戻せ。決めるということを恐れるな。なぜかという、決めなければいけないことだらけなわけですから。決めるということをおそれずにこれから進んでいくようにするためには、一生懸命に考えて、正々堂々と判断をしたということがないと次に決められなくなるというふうに思っていたんです。

その頃の僕は日々の業務に追われて、本当の大きな何屋さんをやりたいとか、どういう業種にしたいのかということはまだちゃんと考えていない。それで、28歳になったときに業種変更して、現在のうちの会社は留学のコンサルティングをやる会社ですけれども、そこに業態を変えていったんです。

ちょうど僕の大学の卒業の年が1984年、ロサンゼルスオリンピックだったんです。そのときに金メダルを見せていただいたり、これは本当に運に恵まれて、大きなスクープを見てきて、柔道の山下さんに練習のときからずっと同行させていただいて、齋藤さんのあの金メダルを触らせてもらったり、体操の具志堅さんの個人総合優勝、奇跡の逆転とか、鉄棒の森末さんの10点満点とか、本当に感動の涙がポロポロ流れる、そんな瞬間をたくさん見せてもらっていたんです。

それが僕が大学を出て初めての仕事でした。そこから、先ほども言いましたように、ずっととにかく借金を背負って必死になってやっていました。僕は趣味が何もないんです。ゴルフは一回もやったことがないですし、マージャンも知らなければ、釣りもしないし、何も趣味がないんです。それで、3年たって、まだ軌道に乗

るところまでいっていませんけれども、仕事を創業して3年ぐらいたったときにふと思ったのが、人の心が一つになる瞬間、それをオリンピックのときに見せてもらったなど。僕は趣味がないわけだから、その分、趣味の代わりみたいなもので会社の中にスポーツプロモーションというのをつくろうと。

それで、1984年が LA 五輪で、その10年後の1994年に広島アジア大会がある。そのときに、オリンピックでお世話になった先生方から、「吉川君、10年後に広島で会おう」、「何ですか、それ」と言ったら、広島でアジア大会が行われると。それを聞いていたので、1990年あたりからそのための準備をして、アジア大会を支援するための民間の任意団体をつくったんです。これも仲間と一緒に、84年は一個人としてオリンピックに関わった。それから10年たっているのだから、今度は1人の通訳としてやるというのは面白くないから、やはり友達にも、感動体験、それをできれば味わってほしいと思って、90年に民間の任意団体をアジア大会の4年前につくったんです。

これが非常に運が良いことになりまして、そのときに、ワールドカップの日本招致委員会が、1994年のアジア大会に向けて初めて本格稼働するということになったんです。そこに広島から1人貸出しになるということで、後半、2002年のワールドカップの日本招致に関わることになりました。そこから後、海外ミッションにずっと同行するようになって、実を言いますと日韓共催の決定する瞬間にも実は僕はいたんです。

仕事上、知り得た話だから僕はずっとワールドカップの日本招致については一切話をしなかったのですが、今から数年前、フジテレビがドラマをつくったんです。「熱き夢の日」というもので、どうやってワールドカップが日本へ来たか。正直に言いますが、とにかく熾烈な、ものすごく激しい闘いだったのですけれども、日本はフェアプレイを貫き通しました。広島出身ですが、亡くなられた東京の長沼健さん、日本サッカー協会の会長ですが、あの方が当時の招

致の指揮をとられて、僕は会長付きだったんです。その会長が仰ったのが、「恐らくワールドカップは東京オリンピックと並んで日本の歴史に残る大会になる。その歴史に残る大会がどうやって日本にやってきたかというのは、むしろ歴史に残すべきだ。君達が見聞きしたこと、何がどうあったかということを全て語って構わない」ということで、取材を受けて、それがフジテレビでドラマになっていったんです。

招致活動を通じて僕が大切にしたいと思ったことは、一つがフェアプレイ。これは、長沼さんをはじめとした、日本が韓国との本当に激しい招致合戦の中で最も大切にしたことです。アンフェアなことをやって持って帰ったワールドカップは子ども達に見せられないということだったんです。

もう一つがパートナーシップ。パートナーシップとは何かというと、自分達の内部のパートナーシップもあります。でも、僕にとっての一番大切なパートナーシップは、交渉相手とのパートナーシップということです。机のそちら側とこちら側とで話をするとき、例えば僕はこれを右に進めたい、だけど、交渉相手はそれを右ではなくて左へ進めたい、商品で言えば、僕はなるべく安く買いたい、向こうは高く売りたい。要は、利害が相反していますね。それが交渉という意味です。こんにちは、仲良くしましょう、食事を一緒にしましょうということだったらいのですが、それはお友達づきあい。でも、実際に外交交渉であったり、ビジネス交渉であったり、様々な交渉というのは、大抵の場合はイエスとイエスではないんです。ノー対ノーなんです。

そのときに、それを突破できるのは一体どういふことが必要かということ、特に国際会議などの場合は日数が限られています。その中で、簡単な言い方をすると、僕ならこういうふうに話をします。原爆ドームの世界遺産の登録などはまさにそんな事例ですけれども、例えば、日本はこう思っている、原爆ドームをぜひ登録したいと思っている。それに対してアメリカが反対

と言っている。中国が反対と言っている。そのとき、「我々も非常に重いものをもって交渉の席へ来ているんです。相手側も同じようにそこに重いものをもってきている。ここではっきりさせよう。まず、あなた達はこの交渉を壊すために来ていますか。そうじゃないですね。私達もこれを壊したいとは思っていない。あなた達も、できればこれは成立させたい。ただ、それが不公平な形の取り決めになるようであれば、それだったら椅子を蹴って席を立とう。でも、それがもしフェアな取り決めになるのだったら、決めたいですよね」「もちろんそうだ」と。

そこで大切になってくるのが、そのときアンフェアな内容では通りません。向こうは疑心暗鬼で見えていますから。こいつの口車に乗るなよと警戒して見えています。でも、そのときに、こいつだったら一緒にやってみようかという気持ちになってくれたとしたら、交渉はどんどん進みます。一緒にやってみよう。だから、向こうの事情は向こうのチームが一番よく知っているのですから。こちらはこちら事情が一番よく知っています。時間はないです。駆け引きはやめましょう。どうやったら通せるかということ、まさに両者がパートナーシップを組んでやっていく。これができたら、これは通せる、こちら側もこれだったら文書が通せるんです。「やってみましょう。」と。このパートナーシップ。そのパートナーシップを組む根本になるのがフェアプレイだと思うんです。

三つ目、苦節十年。先ほども言いましたけれども、僕自身もたくさんの失敗をしました。失敗すれば、やはり心が萎えます。下を向いてしまいます。自分はだめだと思えます。だけど、だめだと思って、「苦節十年」という言葉があるじゃないですか。10年たってもう一回顔を上げるのだったら、結局、顔を上げるのだったら、10年待つなよと。5秒で顔を上げろと。ましてや、実際にミッションで外に出ているときは交代要員はいませんから、そこの指揮官としてチームを率いて出たときに、指揮官が「行け」指示を出した後に、「しまった、間違えた」と下

を向いたら、隊は壊滅するぞ。顔を上げろ、被弾したら、そのときこそ顔を上げろ。泣くのは後で家へ帰って枕を抱えて一人で泣けよ。そのとき、部下達を生還させるためには、指揮官は絶対前を向いておかないといかん。指示を出せ。右へ行け、左へ行け、伏せろと。これがチームリーダーがやることだろうということです。そのために、「苦節5秒」が必要だと思います。

もう時間がないのに、放し飼状態になってしまいましたね。皆さんお配りしたレジュメと全然違う内容になっちゃいました。航海に必要なものは何か。必要な海図はあるか。私、これはある人に教えられました。「現在地があって、目的地があって、その目的地に向かって進むときのコツを教えてやろう。吉川、覚えておけよ。半分の半分の半分だ」と教えられました。例えば A 地点から B 地点へ行くときに、もちろんずっと目標を見ながら進め。それはそうだけれども、でも、そんな遠くのほうばかりずっと見ながらやっていけば、足元でつまづく可能性があります。どうするかというと、その距離の半分の半分の半分、それをまず最初の到達ポイントにせよと教えられます。そこへ向かって進んでいながら、先ほど言ったのと同じように軌道修正を重ねていけ。そうすれば、必ず目標へ到達できるということです。必要な磁石はあるか。自分にとっての必要な磁石は何か。磁石でもって、どちらの方角へ向かうべきかを見ないといけなんでしょう。

僕の場合の磁石は、先ほど言った何がフェアかということです。これがフェアだと思うことで判断を下したときに、的中率は半分当たるかどうかぐらいでしょう。ということは、残りの半分は不正解だったとなるかもしれません。

残念ながら、これは正解とはならなかったけれども、一生懸命考えた。悩んで悩んで本気で考えて出した答えは常に正解です。ところが、その正解が時の流れとともに変化する場合がある。それは、過去の決定が間違っていたんじゃない。時の流れとともに正解が少し動いた。さっきのアポロ計画の月面計画と一緒にすよ。で

は、どうするか。修正をすればいいことだ。進めということです。

私にとっての磁石は何かというと、何がフェアかということです。自分が最も大切にすること、それをなるべく早い段階で、自分にとっての判断の根拠、自分にとっての磁石はこれだというものを身につけてほしいと思います。僕は、中等教育が、もしそういった自分にとっての磁石を考えるきっかけを与えてくれると嬉しく思います。

その次、乗員になれるか。任せてもらえる持ち場があるか。君の長所は何か。人間全員、長所と短所の集合体です。でこぼこです。そこでこぼこの人間がどういうふうに進んでいくか。決定的な短所は、致命傷になるといけないですから、少しは埋めるような努力をすべきだと思います。でも、長い航海で進むためには、平均値で、完全な人間を目指すのではなくて、俺にはこれがあるぞ、甲板で見る風は任せておいてください、風をみるならうまいぞ、石炭をくべるということになったら一番いいタイミングでやるぞとか、長所で人は使ってもらえのだと思います。長所で人は頼りにされて、「おまえ、これやれ」と言ってもらえると思うんです。だから、自分の長所を磨けということです。

名実ともに世界の大航海時代へ。ユニクロ、楽天、日産の発表。ユニクロ、楽天は公用語を英語にすると書いていますね。日産は、世界中にいる海外の社長を含め全役員の過半数をノンジャパニーズ、日本人以外にすると発表しています。これは大きなことじゃないんです。現在既に100人ぐらいいまして、そのうちの44人が日本人以外の人です。その過半数をあと6、7名増やす。もうそういう動きが始まっているんです。そのほかにも、マクドナルドも経営幹部候補の中途採用の人達に対して、最低条件をTOEICを800にすると書いてやっています。これはかなり前から僕は高校生に予言していたのですが、「恐らく君達が社会に出るころ、今現在、例えばコンビニへ行ったり、マクドナルドへ行ったりすると、そこらあたりで『いらっし

やいませ』とやっている人がちょっと日本語の発音がおかしい。外国から来ている人達だ。それがもうちょっとすると、今度はちょっと違ってくる。『いらっしやいませ』じゃなくて、コンビニへ行くと「Yamada-kun kimiwa shohinno irekaega osoine kubiwo kiruyo（山田君、君は商品の入れ替えが遅いね。首を切るよ）」と、店長がそうなる。その次はどうなるかというと、今度は君達が就職するようになったときに、人事部長が、“サイフロマハリアルファマット”という、これはどう読むのですかみたいな名前の人である、このようになってくるぞ。」と言っていたのですが、この動きはもう始まっています。

日本はこれからどういう方向に向かっていくか。そこの中で実社会がどういう人に出て来てほしいと思っているか。残念ながら、悲しいことですけれども、日本は、世界の競争社会の中にドボンと入っていています。

その中で、では、僕がおチビちゃん達に何を言うか。絶対的な競争力を持てと言うのか。違うんですよ。最強の人にはなれないです。僕は、先ほど言いましたように、「アメリカの大学へ行くぞ」と言ったら、「はい、警告書、いなくなれ」、と言われたんです。社会出るぞ、「はい、マイナス1億4,000万円」。ワールドカップのときも、オリンピックのときも、「何をやっているんだッ」と毎回怒られるんです。最初はちゃんとやろうとしているのに、さあ、やるぞと思ったら、いつも僕は怒られてしまうんです。悪気はないんです。そこからフォームなんか気にしていられるかといって、自由形のレースでも犬かきで泳ぐので、「何なんだ、あの選手の泳ぎ方は」と言われて、でも、それで進んでいくしかなかったんです。

競争社会の中ですが、じゃ、社会は最強の人物を求めているか。僕の意見は違います。だって、最強の人物が1人いても、1人で車はつくれません。1人でコンピュータはつくれませんよ。じゃ、何かというと、外へ出れば出るほど強い人は幾らでもいます。僕は18歳から、大学で、

そして社会へ出て、仕事を通じてのワールドカップなどで、どのチームへ配属になっても僕が最弱です。一番弱い。何せ僕だけが広島の子供です。ほかの人は、それこそ文科省から来ましたとか、三菱商事から来ましたとか、「何、あの顔の四角いのは」、「広島？アメリカンドリーム？何それ？」と。そこの中からやらなければいけない。どこのチームに配属になっても、僕が能力が一番低い。そんな中で邪魔にならないようにと思って、はっきり言うと、切られないようにですが、必死になってやっていて、「はい、ここまで。このチームは次へ行ってください」と言われて、ステージが少しずつ変わっていったんです。強い人はたくさんいます。

その中で、そういったいろいろな個性を持っている人達と一緒にやっていけるかどうかが大切だろうと思うんです。だから、先ほどいくつか例に出した会社の英語能力というのは、単に英語ができればいいということではないと思うんです。まさにあちこちで言われるのはコミュニケーション能力。どんな場合でもそうですが、1人で全てできるの？ということです。チームを組んで一緒にやっていかないと。そのチームを組んで一緒にやっていける人達に大切なものが「コミュニケーション能力」です。

どんな人が自分よりも強い人達とチームを組めるのか。ある人から教えられたのですが、人の能力が伸びるときというのはどういうときか。自分の仕事に自信と誇りが持てたとき。ああ、そうだなと思いました。

自分がやっている仕事の理由が何なのか、これがどんなものにつながっていくのか。その中ではもしかしたら小さな歯車の部分かも知れないけど、でも、この歯車が一つ欠けても、この大きなマシンは回っていかないんだぞ、そのためにこの歯車を一生懸命磨く。ある経営者の先輩に言われました。「吉川さん、なかなか一生懸命頑張られているようで」「いや、とんでもありません。僕なんか本当に器が小さくて」と言ったら、その先輩が仰いました。「何を仰

いますやら。恐らく器が小さいというのは謙遜で仰っているのだと思いますが、もし本当に器が小さいと思っていらっしゃるのだったら、これほど素晴らしいことはないですよ。なぜか。玉が大きいと、磨いても磨いてもどこかが曇る。小さい玉だと、暇さえあればそれを磨くと、これでもかというぐらいそれを磨いたらピカピカになりますよ」と。救われたような気持ちがしましたね。

親からもらって、そして様々な体験をさせてもらって、その中で自分がどうあるか。また失敗しちゃったなとガッカリしても、悪気で行った失敗ではない。それを自分の進んでいこうとする気持ち、そして自分が持っている今ある時間、それを使って一生懸命磨いていこう。人との競争では、さっきも言いましたように、僕はどこのチームへ行っても一番能力がないところになってしまっているのですが、そのときに、ひがんだり何とかじゃなくなるんです。周りの人達はみんなすごいなと思いました。そして、よし、この中で自分に何ができるか、自分にできるところをベストトライでやっていこうと。そうやってずっと走ってきたら、今50歳で創業して25年になります。

僕が大学のとき一緒に卒業した人は、すごいですよ。ある友人はリーマン・ブラザーズの副社長ですけれども、別の友人はソフトバンクの副社長をやったり、そんな彼らが言います。「卒業して本当に長い時間が過ぎてきたけれども、自分達の原点、母港、母なる港はどこなんだろうと思ったら、あのときかも知れないな。」と。「卒業式でこれから外海へ出て行くぞというときに、不安でいっぱいだった。不安とともに、もう一つの半分のところで、よし、ベストを尽くすぞ。」と。

それぞれお互い細かい話はしないけれども、そこらあたりのところでいっぱい共通体験があったと思うんです。その都度その都度の航海で無傷できた船なんか一艘もないと思います。先生方の教えていらっしゃる中学や高校は、僕が思うには、それは母なる港、母港であるかも

しれません。迷ったときに、原点がどこだったか。それと、長い航海に出たら船がズタズタに傷つきますよ。ドックインするじゃないですか。それで、「先生」「おう、来たか」と。そのときに、別に仕事の話とか何とかをしなくても、あるいは来なくてもいいんです。授業の中で、そういえば、あのときに先生がこんな話をしたなと。それで、これでいいんじゃないかというふうに、無傷ではなくて、傷のところへハンダゴテか何か当てて、さあ、もう一回行くぞというふうな船達であってほしい。そうになってくれないと日本は沈没しますから。

日本の経済力が落ちたと言われています。言葉は悪いですが、草狩場になってしまう可能性も十分にありますよ。あるいは、企業自体の名前は残っていても、生産の拠点が海外ヘシフトして、先ほどのように上層部の人事から何から全部外国で決まるようになったりする。これは本当に現実問題としてあり得ます。その中で、おまえはいてくれなければ困るという人になっていかないと、残念ながらご飯を食べていけなくなるでしょう。僕はそんな気がします。

中等教育において一番大切なことは、失敗することを恐れさせないでください。自分の経験からいって、僕はたくさんの失敗をしました。また失敗するんじゃないかと思うと手が打てなくなります。僕の知っている北海道の中小企業でロケットをつくっている会社があるのですけれども、その社長さんが言っていました。ロケットの子ども達が遊べるキットがあるんです。英語ですけれども、ポンと与えておくと、子ども達は面白がって絵を見ながらそれをつくっていくんです。ですから、ポーンと飛ばせるんです。飛ばしても、ちゃんとやらないと落ちてきて壊れるんです。その社長は、「私は直し方だけを教える」と言っていました。「取り返しのつかない失敗なんかないんだということを教えるために、私はそれをあちこちの小学校でそのロケットを飛ばさせているんですよ」と言っていたんです。

一番大切なのは、僕は復活力だと思うんです。

一回も失敗したことはありませんという人は、僕は、自分のミッションの中でとても恐くてその人に指揮権を与えられません。なぜか。大きな任務の仕事になればなるほど、ものすごく難しくなるんです。そのところで、柔道の技でもそうですけれども、よほどの力の差があれば「一本！」とできません。拮抗してきたらそうはいきませんからね。技あり、技あり、技ありという形になっていって、それでもずっとかけ続けていって、あきらめずにずうっとやっていって、できたときに両方汗だくという、こうなるわけでしょう。その途中のところでは、だめだ、だめだ、だめだとそれが何回あるかということですよ。

長い航海に出るときに一番大切なものは何か。復活力。間違っていた、この判断をしたけれども、これは違っていたらしいといったときに、いかに早く次の手を考えて、大丈夫だ、まだこれでドラマは終わらない、さあ行くぞというふうに次へいけ、次へいけと。だって、そうでしょう。船が長い航海へ出て行って、さっきのアポロじゃないですが、スイッチを押してピッといかないですよ。風を見ながら、潮を見ながら、いろいろなところで微妙な航路を見ていながら、目的地へ行って、そしてちゃんと帰ってくるために船出していくわけですから。僕は、進路というのは、最初に、あそこへ向かって行け、と。そうですね、それが進路です。その進路は、ちゃんとミッションを成し遂げて、母さん、父さん、結婚すれば女房、子ども、「父ちゃん、帰ってきたぞ」と言ってにっこり笑うためにあるんです。嵐のときとか何とかたくさんあるじゃないですか。そのときでも顔を上げろ、そして船を前に進めろ。そんなものが一番大切だと思います。

そしてそんな若い人達がどんどん育ってくれば、この国はまだまだ期待できますよ。1945年に国の主権までなくしたのですから。そこからワールドミラクルなどと言われました。GDP世界第2位というところまで飯も食えなかったのが這い上がったのですから。それは何か。エ

リークの強さではなかったんです。靴をすり減らして物を売ってくれた僕らの父ちゃん達の汗があったからだと思います。



時間がきたのですけれども、フェイスブックというのがありまして、そこで実は「進路ということでどんなことを思いますか」と聞いてみたんです。幾つか興味深いものがあるので、これだけ紹介させてください。

「あなたは進路というテーマでどんなことを考えますか。進路についての思い出でも、学校への希望でも構いません。どうぞお寄せください」というのをフェイスブックで出してみました。それで、幾つかあった中で一つ。「私の場合ですが、様々な指標を高校側には提示してほしかったように思います。高卒だとどうなのか、大卒だとどうなのか、大学院卒だとどうなのか、外国の大学を出て日本に帰ってきたらどうなのかなどが聞けていたらうれしかったように思います」。民間企業の取締役。

2番目。「私自身は受験が人生で一番長かった時期のような気がします。第1志望校には落ちたけれども、そのときの集中力や基礎力が人生の財産になっている。何となく周囲が競争運動に乗って、レベルの高い大学を目指すぞゲームに乗っていただけなのですが、でも、もし私が早いうちに進路を決めて、小説家になりたいから大学へ行かなくていいやと高校生半ばで判断していたとしたら今の自分はないわけで、自分の可能性も狭まった気がします。やりたいことなんて、やれることが広がったらどんどん変わってくる。受験という機会に自分の能力の限界

を試してみるほうが後々面白いなと振り返って思います。今の高校の現場はどんな感じなのでしょうね。受験戦争の反省から、自分の好きなことを探せというムードなら、ちょっと残念かも。大学でティーチングアシスタントをしている友人が、最近入ってくる学生が勉強の仕方を知らない、自分で学ぼうとしないと嘆いていました。京大の医学部でもそんな感じで、ほかはどうなっているのだろうと心配になっている。何か話がそれてまとまらないのですが、高校への希望は、とにかく尻を叩いてでも勉強させてください」ということです。京都大学医学部卒業の小説家。

その次。「どんな職業に就いたら幾らの給料がもらえるのか。例えば公務員なら幾らもらえるのか。そして、それらの職業に就くには何を勉強すればよいのか。職業からの逆算の進路を教えてほしかった。今になって悔やまれます。あんなに公務員をばかにしていたのに、公務員は安定していて給料もいいし、知らなかった」。転職を体験したサラリーマンです。

僕が先生方の前でこんなふうにお話をさせていただく、能力も経験も何もないのですけれども、それでもこうやって緊張しながら、つばを飲むタイミングもよくわからない中でお話しさせていただくのは何かというと、僕は教育が日本の最後の切り札だと思っています。土地も狭いし、資源もないし、正直言いまして、今現在の民間も含め給与は非常に高いです。その給与を払っていくための経済の歯車自体が軋んでいるような気がします。だけど、そこから先、この日本国の中でみんながご飯を食べていくためには何が要るか。僕は教育が答えだと思っています。それも、一番大切なのは、根本をつくっていく中等教育。日本は中等教育の普及率が世界一なんです。そこに希望があると思いますので、どうぞ皆さん、これからも若い人達が顔を上げて歩いていけるように、そんな子達を育てていただければと思います。

どうもありがとうございました。

事例発表

「将来を見通した体系的な進路学習」

文星芸術大学附属高等学校 進路統轄部長 牧 島 勝 利



皆さん、こんにちは。今ご紹介にあずかりました文星芸術大学附属高校の牧島と申します。よろしくお願いします。

1時間の発表ということでこれからお話ししていきますが、私、こういう高いところから話をするのはあまり好きじゃないので、下りてもいいですか。同じ目線で話をしたいんですけれども。失礼かと思いますが、すみません。私はパワーポイントは使いません。

今紹介があったように、私は今年教職49年目になるんです。年がわかりますね。たぶん若づくりなので、えっと言われるのですけれども、来年は50年になります。半世紀。よく50年もやってきたなと思うけれども、38年、県立をやった後、10年、文星芸術大学附属高校になってからは、今7年目です。私が赴任した時は宇都宮学園高校です。ここに栃木県内の先生もいるので、ちょっとプレッシャーもかかっています。あと、静岡のツガワ先生が来ていますか。先生、その節はお世話になりました。

49年やってきて、キャリア教育というのが教育の本質だと思っているのですが、今ご紹介に

あったように、私は38年間、縁があって一番長く勤めたのが宇都宮高校ですけれども、進学一筋に歩いてきたんです。だから、進学のプロなんて言われたりしますけど、もし大学へ入れるのが進学指導だとすれば私は進学のプロではないと思いますし、そう言われたくもないですね。

「よく乗るかそるかときは乗るんだよ」、とよく皆さんに言うんですけど、何か縁があって、私がいろいろな高校の赴任していったら進学実績が上がるという、そういう強運の持ち主でもあります。しかし、それはたまたま前任者がつくり上げたところに私が乗っただけであって、決して私の力だなんて思っていません。ただ、束ねる力は私はあるかなと思っています。

私が進路学習のシステム化を生涯のライフワークみたいに思ったのは、宇都宮高校に赴任したときに、それまでは宇都宮高校は県のトップですが、先生がしゃかりきになって進路を教えてくださいました。これを生徒に、進路研究という名前を使っていましたが、進路研究システムをあなたにやってもらいたいとお願いされたのがきっかけです。たまたま私と一緒に赴任した教頭先生が、かつて宇高の進路部長をやってきました。

今は亡くなれて、私、非常にお世話になった先生ですけれども。その教頭先生が今度来る牧島というのは熱い男だから、これをやらせるぞ、と言ったようです。宇高の進路部長に「先生には10年がかりで進路研究のシステムを構築してほしい」と。「えっ、10年ですか。私に10年いるということですか」と驚きました。それから

ぴったり10年間、進路部で働きました。私が宇都宮高校でやってきて進路学習の骨格ができました。

ただ、不消化の思いがありました。私はその後、教務部長になって、そして教頭になって、別な視点、つまり管理職の立場から宇都宮高校の教育を見直す機会がありました。

今、私は那須に住んでいるのですけれども、私は那須が大好きで、山とスキーに明け暮れるような生活がしたいというので、退職したら仙人みたいな生活をするんだと私は固く思って、それを目標にがんばってきたんです。それで、黒磯に家を建てて、那須が見えるところに絶対住むんだと。

そうしたら、縁があって宇学に来てくれと。私は縁もゆかりもないんですよ。栃木県の先生方はわかると思いますが、宇学というのはいわば底辺校です。底辺をさらうような学校では、これから絶対に立ち行かない。進学部署をつくろうと経営者の意思が働いたようです。

それで、英進科というのを立ち上げたわけです。宇学と聞いただけで、進学からはほど遠い学校ですから、はじめは躊躇しましたが、熱心なお誘いで引き受けることにしました。黒磯に越してきたのに、今度は宇都宮かと思いました。片道60キロですよ。それから10年、毎日通っています。高速は使いますが、往復120キロです。私は1年間で4万キロ走ります。この前、3年目の車検をやって12万キロです。

非常に長い距離の通勤を10年間もやってきました。最初は5年で引退するよと言ったけれども、そうはいかなくて。古希の祝いを皆さんに祝ってもらったら、もう喜んで去っていくよと。ところが、もう古希を迎えてしまいましたけどまだ頑張れそうな感じですね。そういう中でやってきた私の経験を皆さんにお伝えしたい。

「ゼロからの出発」とよく言いますが、私はゼロじゃないんです。マイナスからの出発です。「宇学」と聞いただけで、進学面ではあまり耳を傾けてくれません。県北へ行くと、作新や宇短附ならいいけど、宇学だけには行かせたくない

いと。そういう逆風の中を、私は本当に歯を食いしばって、泣きそうな心、折れそうな心を支えながらやってきました。

赴任にあたって、「何人ぐらいのクラスで英進科というのはできるのですか」と聞いたら、「15名3クラス。うちは遅れているから、ほかの学校のように20名も30名も来ないから、少数精鋭でしっかりやるということ売りものにしていって、15人3クラスで考えています」と。「3クラスは難しいかな。2クラスぐらいでもいい」という話でした。

これからの話は自虐的に言うんじゃないんです。原点がそこにあるということを先生方にも言っているんです。我々はそこから出発したので、その原点はいつも忘れないようにしようねということで、保護者の前でも言わせてもらっています。

一期生は、120名ぐらい特待生を合格させました。たぶんそういう子ども達で県立を落ちた子は、少なくとも二、三十名は来てくれるだろうという読みがあったのでしょね。何とふたをあけたら入学者は2人です。私も唖然としてしまいました。「えっ、2人？2人じゃあまりにも悲しいじゃない。せめて10人にしてください」とお願いしました。そのときの進路部長さんが、普通科に入ってきた生徒の学力も高い子を一生懸命口説いて、「とにかくおまえは運動部で来ているのだから、絶対課題は出さない。宿題も出さない。」ということで、初めは10人集まったんです。もう1学期で破綻です。「おまえ、家で宿題やってこい」なんて一言言ったら、野球部あたりから「話が違うぞ」ときますからね。また、たまたま秋の大会で3番、4番を打つような子が来ていたんです。それで、結局、5人は1学期でお返ししました。

それで5人で出発したのが1期生です。私は、そのとき腹をくくりました。来年は、足が棒になってもいい、1年間広報しよう、歩こう、と。中学の先生に教え子はいますけど、中学校の先生は公的な立場ですから。正面切ってすすめることはできないでしょう。

それで、塾です。塾をくまなく回りました。私は13年、宇高でお世話になったので卒業生に何人かで会いました。「先生、今度、宇学でやっているんですか」と不思議な顔をするんです。「宇高でやっていた先生が、宇学で大変じゃないかな」と同情されたりもしました。「いや、これから頑張るんだよ」と言って私が熱く語ると、「じゃ、先生、この子は医学部を志望しているんだけど、今のところはまだまだけど、叩けば伸びると思うので、先生のところへ送るからお願いします」と。まさに一本釣りです。

それで、英進コースに20何人集まって、運動部で学力をつけたいと思う子を特別進学コースに、全部で37人集まったんです。今年集められなかったら、私はもう深入りしないで引こうと思いました。そんな話ばかりしていてもしょうがないのですが、ただ前段として。

そこから話が始まるんです。その私が集めた2期生が早稲田に入ったり、慶應に入ったりしました。また宇都宮学園から国立大学に入ること自体が大変なニュースになる状況でした。ところが、例えば東京外大に入るとか、筑波大に入るとか、そういうことが一気に起きたものだから、宇学で一体何が起きたのかという噂が広まったんです。それを、TBSの「ブロードキャスター」という番組でキャッチしたんです。私の仲間が来てくれたので、シニアの先生が5、6人集まって若い先生を指導しながら少数精鋭でやっているという様子が、「実録ドラゴン桜」として全国放映になったんです。

だけど、あのとき私は本当につらい思いをしました。私、撮影に12時間つき合ったんです。それが放映はたったの4分ですよ。どこを採られるかわからない。このプレッシャーというのはただものじゃなかったです。さすが向こうはプロです。事前に学校でつくられないように、朝、予定の1時間前に来て、生徒に突撃質問します。「あなたはどのようにしてここへ来たの」とトップクラスの子に言う。「県立でも行けたんじゃないの。なぜここへ来たの」と誘導尋問するわけです。そうしたら、ある生徒が「宇学へ行

ったら殺されちゃうかもしれないから気をつけろと言われたけど、来てみたらすごくいい学校だった」と、その後ろだけ採ってくればいいわけです。前だけ採られたら大変です。生徒は全国放映なんていう感覚はないですから。そのあと、やんのやんのの催促で、「東大へ行きたいという生徒を手を挙げさせてください」と。誰もいないじゃないですか。そうしたらホームルームの委員長が、「僕、手を挙げます」と。後で聞いたら、東京からわざわざ取材に来たのにと、やさしい気持ちなんです。

それから撮影、アナウンサーが、「ここで東大に行きたい人」なんて知らんぷりするわけ。

「どうして？」と聞くと、「それだけのすばらしい環境の中で自分の力を発揮したいからです」と答えたのです。その子にとってはプレッシャーになりますね。私もプレッシャーです。

その宣言通り、その子が現役で文一に入ったんです。文一は特に難しいですね。理一だったら定員が1,100人ですが、文一は500人です。さらに全国の中高一貫のトップ進学校が控えているわけですから。その中で彼は塾へも行かない。学校で言ったとおりにやっただけです。

その合格の理由をお話しします。このプリントをちょっとご覧ください。これからが本題です。

01年に開設して10年がたちました。そこに書いてありますね。「なぜこうなったの」とよく聞かれるんです。私は、そういうときに、一言で言えば、英進科創設以来、貫いてきた三つの指導方針の成果だといえます。これは一字一句変わらず、私が10年間守ってきた一つのテーマです。

1番、「進路指導は生き方指導のもとに、総合学習の時間に体系的な進路学習を行い、明確な目標を持つことで学習意欲を高める」これが本筋です。こんなことで本当に力がつくのと、たぶん多くの方が思うと思うんです。私は、それに関する挑戦でした。宇都宮高校の場合には、生徒の質が高いからこれが通じたんですが、偏差値40台、良くて55か60以下ぐらいの子ども

にこのようなことが通じることなのか。しかし、これが私の夢でした。夢を追いかけました。ここを後で読んでいただければ分かると思います。生徒はどんな子でも向上心を持っています。例えば、今年現役で山梨・医学部に入った子というのは、現在だったら、ボーダーラインよりは下だから合格できなかった子です。具体的に言えば、500点満点の入学試験で、今は310点あたりで切っているのです。これは公表しているデータです。本校英進科はそれぐらいが目安になっていますけれども、その子はそれに満たない点数でした。宇都宮市内の宇都宮北高に行きたかったけれども、中学の担任の先生から「何考えているんだ、おまえは」と言われて、「宇都宮工業のような実業高校しか行けないよ」と言われた子が、受けたら、たまたま305点とった。その子が医学部に現役で入っています。

それから、裏側にプリントされている大学合格者の声。東大の文科一類。これが手を挙げた子です。それから、京都大学の工学部、東大の理科一、一橋、神戸と続いていますが、この中で一番上の文一に入った子は単願で来たんです。宇高スレスレ、うまくいけば宇高に受かるかなというような子です。だけど、一日体験学習のときに気に入っちゃって、本校英進科に自分を賭けようという気持ちになって入ってきた子です。

この子は、自分で東大なんて言って、そのまま文一に入った。これは私達にとってもものすごい励ましになりました。あとの京都大学の工学部、東大の理一、一橋、それから東北大の工学部、全員県立高校を不合格になった者です。

京都大学の工学部に行った子は、今、4年生です。東大の理一の子も入試で350点ぐらいでした。トップクラスにギリギリ最下位で入ったんです。京都大学工学部に行った子は、宇都宮高校を落ちたショックを引きずっていたんです。それでゲーセンなんかハマって学校に来なくなってしまった。私は才能を見抜いていたから、「才能をむだにするなよ」と言っていたけれども、全然受け付けなかった。それが2年

になるころに急変したんです。まさに豹変したんです。なぜかと聞いても本人もわからない。

実は、私は『大学の窓』というのを編集しているんです。今、大学の4年生から1年生までの卒業生に聞いて、自分の立場から見た高校時代の進学指導をどう考えるかモニターしているのです。

2期生からずっとモニターしているんです。1回目が終わったので、今度は第2回目の第2集に入っています。「あなたにとって文星で学んだあの3年間は何ものだったのか、はっきり言ってほしい。何がプラスになって、何が障害になったか」。私は、これこそ本当に教育の評価だと思っているのです。

本校英進科は少人数で50、60人に満たないんです。それは、精選しているのではなくて、それしか来ないんです。うちの学校は60人の定員を採るために600人合格させないと60人に満たないんです。つまり、歩留り率1割なんです。悲しいじゃないですか。県立がだめだったら、学校は私立、この構図がなかなか直らない。

本県中学校の進路指導では「県立が受かったら必ず県立に行ってくださいね。」と平気で言います。つまり県立がだめだった場合の保険として受けるんです。本校英進科には、今、校長経験者が9人ぐらいいますけど、みんな口をそろえて言います。「中学校の先生を何だと思っているんだ」と。例えば宇都宮高校などで合格して、切ったり不合格になったら何か復讐をされる。つまり、推薦入学で落とされてしまうなどと考えたりします。絶対県立に迷惑をかけちゃだめだなんて、そんな言い方をするんです。私は、宇高で教頭をやっていましたが、そういうことがあったら、「皆さん、頑張ってください。私立といい意味での競争をしましょうよ。」と私は言ったと思います。私は中学の校長先生にこういうふうにはっきり言うんですけど、校長はなかなか変わらないですね。ここにいる私立の栃木県内の先生方と一緒にその辺の壁を破っていきたい。そうじゃないと、かわいそうですよ。先生方があんなにやっていて評価されな

い。それは、私は中学校に広報するときには、県立高校も私立高校も同列にして選んでください。あなたのお子さんにとって、最も自己実現できる学校はどこかを並列して選んでください。それは、お金が少しかかるけど、優秀なら特待生制度がありますから、そんなに金銭のハンディはないと思いますよということを訴えています。

そういう実態があるんです。地元では宇都宮高校を宇高と言うのですが、トップ進学校ですね。宇高を落ちたのが東大や京大にどんどん入っていくという実績を重ねたい。それで地域の人達にアピールしたいという思いがすごく強かったんです。ところが、本校の先生方には、これで本当に東大に入るのかどうかというすごい不安がありました。私はずっとそういうところでやってきましたから、大丈夫だという自信はあるけど。そのときに私が頼りにしたのが進路学習です。私が頼りにしてきた進路学習とは何かということですが、1番目に書いてあります。

それから2番目。放課後は自主学習の時間を設けます。とにかく自分から勉強する習慣を養い、勉強が楽しい生徒を作ることです。この学校に来てよかった、満足度ナンバー1の学校にならなかったら、この学校はだめだと。学校の評価は卒業生が大学へ行くまでの間は、進研模試しかはかれません。進研模試で高い点を取らせること。自分が落ちた高校で3分の1に入っているとか、県で何番に入っているとか、これで自信を持たせよう。私がとった作戦はそうです。

中学校に、今までは本当に恥ずかしい限りですが、そういう意味で進研模試の成績を出身中学校に送りつけたんです。これだけががんばっていますよと。嫌らしいですね。こんなものを中学の先生方は見たことがないから、「何だ、これは。宇高は気でも狂ったか」というふうに思われたかもしれません。しかし、私はわらにもすがる思いでそれをやりました。

そのうちに、「宇高は力がつくね。だけど、結果的にはだめだよ。あそこで幾ら逆立ちしても東大なんか入れないよね」。それは、先生

の質が低いと思っているからです。私は宇高で13年お世話になりましたが、やはり宇高でうまくいかない先生もいるんです。生徒の学力は高いかもしれないけれども、全然指導力がない。しかし、そういう先生がいても、宇高にもああいう先生がいるのねで終わってしまうんです。

ところが、うちの学校でそういう先生を出したら、やっぱり宇高はだめだよと言われてしまう。だから、みんな一人一人が宇高の看板を背負っているんだよ、重い十字架かもしれませんが、ここではみんな背負わなければだめなんだと考えてきました。

ここは私立の先生だけだからこういうことが言えるのですが、宇都宮高校はぶっち切りです。7月の進研模試のときに100人ぐらいが偏差値70を超えてしまいます。偏差値50を割るのが1人か2人ぐらい、精神的な問題を抱えているような子がいますから。1年生の平均偏差値が70近いんです。67前後です。本校だったら二、三名でしょう。ほかの県立のトップ校でも、栃木高校あたりは20人ぐらいいるけど、あとは1桁です。それが100名を超えるんです。

ところが、3年の10月の最後のベネッセの進研模試のときは、宇高は5教科総合偏差値50を割る子が文・理合わせると50名を超えます。私が宇高在職中、それで非難を受けてきました。

「宇高は、上のほうの子は面倒をみるけど、下半分の子は切り捨てる冷たい学校だ。あんな優秀な子を送ったのに、なぜあんなになってしまうの」という非難です。私はこれと闘ってきました。私がなぜかとずっと自問自答してたどりついた結論が、勝ち組が負け組になったときの脆さです。いつも秀才だ、秀才だと言われてきている。ところが、3回で決まると職員によく言いました。まず1年1学期の中間テスト、40人中40人がいます。Aが40人。そのときは挽回のチャンスが残されているんです。宇高に入ってきたから頑張ろうと。7月の期末テスト、頑張ります。みんなも頑張っていますから、せいぜい1人か2人ぐらいしか上がれない。パッと上げられませんよね。みんなが頑張っているからです。

では、最後のチャンスがあります。夏休み。必死になって挽回する。そして、2学期の10月に中間テストを迎えます。やはり40分の38。その子は、そこで自分をどう支え切れるか。俺はきっとだめだな、中学時代は優秀だったけど本当は俺はばかなんじゃないか。つまり、セルフイメージが下がるんです。このセルフイメージが下がる、このことが全て学力を下げてくる。

今度は宇学に来ました。今は半分ぐらい単願できますが、当時はほとんどが県立を落ちた子です。優秀な子ほど、この制服だけは着たがらなかったという子ども達です。つまり負け組ですよね。負け組の子を勝ち組に転換したときの強さというのは私は感じたんです。そういう子が東大に入ってしまう。

今は模試で引っ張るというやり方はやりませんが、7月の模擬テスト目標としました。入学したときに、しっかりやれよと。手綱をゆるめません。そうすると、生徒らは文句を言うんです。連休のころになって、「なんだよ、宇学、そんなに勉強、勉強って叩いて、なんだ、変な学校に入ってきたな」と彼らは思うかもしれません。でも、それは必ずやりとげます。7月の成果を期待して。

それで、県立高を落ちた子のほとんど全員が落ちた高校の半分以上に入ってくるんです。それが支えです。やればできるじゃん。「入学試験なんかそのときの水ものなんだよ」と慰めても、そんなものはちっとも慰めにはならない。ただ、事実として示せばわかるんです。ほら、できるだろ、と。負け組が勝ち組になったときの強さというのはすごいですね。例えば一回骨折すると、そこが治ったところはより強くなるみたいなことで、私はそれを感じました。これしかないということです。

では、どうやって勉強に対する姿勢を作るかということがこのところ書いてあるんです。これは字が小さくて読みづらいですね。私、めがねをかけなくても普通の字は見えるのですが、これはやっとなですね。皆さんも見にくいかもしれませんが、ここに「進路学習の実際」と

ありますね。これを読んでください。この時間内に全部説明し切れませんから。後ろに具体的なプログラムも載っています。これを参照しながら読んでいただければ参考になるかなと思います。

うちの学校に最近、県外のかかなり遠くからいろいろな先生が訪ねてきます。この前は山形県の東北私立高校、それから兵庫県の姫路市にある某私立高校から熱心に来られました。その目当てが放課後の自主学習、400字作文、それにディベートです。

以前京都の某私立高校から、一晩泊まりに来て話してくれないかと頼まれました。進路学習特に小論文の指導を充実したいということでした。校長先生が言われる話を聞いていると、受験対策なんですね。これじゃだめですよ。本校の400字の場合は、提出した作文を絶対添削しない。ただ判こだけ押して返す。それで、何かのときに感動したところに赤線を引いて返してあげる。読んでいますよというメッセージです。私は今、中学1年から高校3年生、全クラスに出ています。担任とのチームティーチングです。私が最初の部分だけ話をやりますが、担任の先生にお任せします。中学校1年から高校3年まで全クラス縦系列で出るんです。中高一貫の学校での6年間の経験から、中1を乗り切れればものすごいということがわかりました。

「中1ギャップ」というのが社会問題になっていますね。あのギャップというのは何のギャップなのか。小学校は近い学校から来ていて、よく知っているのが1年間ずっと一緒に、高校や中学校へ行くと、いろいろな学校のシステムも、担任指導から教科指導に変わる。そのシステムが制度的に変わることや、様々な人間関係のために不適應を起こす。私は、そうではないと思っています。私の体験から。中学1年生から2年になるとものすごく変化するんです。男子は平均10センチぐらい背が伸びますよ。男子は肉体的な成長が早いんです。ところが、精神的には幼いんですね。そこにギャップがあるんです。それから、中学校は男女共学になりました。

うちにとっては画期的なことです。女子は成熟度が高い、つまりおませなんです。精神的な成熟度が高く、はるかにお姉さんです。書かせたり何かして私が読んだりすると、「えっ、そんなこと考える人がいるんだ」というようなことを書いてきます。つまり性差、男子と女子のギャップ。自分の精神的な成長、幼さと体の成長とのギャップで葛藤するわけです。葛藤の果てに何があるのか。まず自虐ですよ。俺はだめだ、マイナス志向。だから、うちの学校の校訓、「自己（おのれ）を敬え」「他人（ひと）を敬え」「仕事（こと）を敬え」を示します。「自己を敬え」というのは自分を大切にすること、大事にすること、ないがしろにしない。もっと言えば、切らないということです。絶対自分を切ってはだめだよと。自分を切る人は人を切るから。あれはだめだと人を切る。人を切る人は、必ず、こんな勉強なんか何になるんだ、仕事を切ります。みんなはこれに陥らないように頑張っただけと励まします。決して自分はダメだと切ってはだめ、セルフイメージを下げないということがポイントになる。それをずっとやっていくと、思いがけないほど伸びるんです。

今年、医学部に入った子もそうですが、中学時代はテニスのエースで、地元の中学校で県内でベスト8に入って、テニスばかりやっていたんです。その子が、先生のところへ行ったら、進学校に受かるわけないと言われたけど、「俺、大学行きたいんだよな」と思っていた。そうしたら、その先生に「文星の英進科を受けてみたら。もしかしたら受かるかもしれないから」と言われて受けたら、下から2番目でギリギリ受かったんです。

合格してから、友達のところへ行ってドラゴン桜という本を読んでいたんです。そうしたら、高校3年生が奇跡的に頑張って東大へ入る話で、「えっ、1年で東大へ入れるのだったら、俺は3年で入れるかもしれないな」と。実は彼は東大を目指したんです。もし、300点で入ってきた子が、東大なんて言ったら「顔を洗って出直してこい」なんて言いがちですよ。あるいは、

「ばかだよな。自分が自己不当の認識だというのがわかっていないからあんなことを言うんだよ。かわいそうだから、今のうちに実態を知らせてやったほうがいいよ」と言ってしまうと思います。しかし、クラス担任が素晴らしかったと思います。

クラス担任は数学の先生ですので、「おまえ、すごいよ、この解き方。ただ解いているだけじゃない。おまえには才能があるよ」と。それで、「えっ、俺もやればできるの」と。それからリベンジが始まるんです。

さっき話が途中になってしまった京都大学に進学した子もそうです。今、京都大学の4年生です。電気電子工学専攻です。彼は京都大学で成績が2番です。京都大学工学部では、修士課程にいくのが普通なんです。修士が終わったら博士課程（後期課程）に進むのだけど、特別優秀な子は、数人しか採らない修士・博士一貫コースに進みます。そこに彼は入っているんです。

その子が「大学の窓から」に書いてきたのですが、彼が書いてきたのは、僕は高校3年間、「おまえはなぜあんなにぐうたらだったのに、急にそうなったのか」とよく言われたけど、答えはわからないと。今ははっきり言えます。私は先を見る目があった。それは、文星で育てられたとは書いていいです。こんな生活をしていたらだめだよと。自分を見つめることだ。つまり先を見ること、これがキャリア教育ですね。将来どういうふうな人間を育てていくか。この人格の完成を目指すのが教育基本法の本質です。かつて私には、教育は人格の完成を目指しますなんて言うのは簡単ですが、そんなことを言えない現実がある。人格的なものというのは多少後回しにしても、まず力をつけなければだめと思っていたときがありました。

今は違う。人格がで上がることが学力につながるんだと。理想論と思うかもしれないけれども、これをうちの卒業生が実践してくれた。この子ども達が「大学の窓から」というメッセージ集で書いていますね。東京外大へ行った子が、「私は文星英進科で自分の夢を実現するこ

とはもちろん、将来生きていく上で大切な人間力まで鍛えることができました」と。東大の理一に入った、これは本当に中学校の成績からいくと、ほかの人ならともかく、あんなのが東大に入るなんて信じられないよという子でした。それが、「英進科の大きな特徴として、充実した進路指導があります。総合学習を通して学習を理解する動機づけを行い、自発的な学習の姿勢が確立されます。」ということを書いていますね。

彼には衝撃的なことがあったんです。1年のころから、なぜ勉強するのだろうと。彼には哲学的志向がありました。「そんなことを考えているから勉強をやらない。そんなことを考える前に勉強しろ」と言いがちです。彼は、卒業生が書いた受験体験記を読んでいるうちに、ハッと気づいたんです。何に気づいたか。「今まで大学へ行くのは、いい大学を出て、いい会社に就職して、豊かな生活が送れると思っていた。そうじゃないんだ。今、大学合格に成功した子ども達に共通していることは、彼らはアイデンティティを獲得している。自分が何者かわかる。おまえは自分は何者かと言われたら答えられない」と受験体験記に書いてきたんです。

「アイデンティティ」という言葉がありますね。わからないのに背伸びして難しい言葉を使いたがる子がいますが、そのたぐいかなと思っていたんです。そうしたら、中学で質問なんかしたことがない子がどんどん質問にくるようになりました。基礎学力がないからトンチンカンなんですけど、とても真剣でした。この子はただわけがわからなくて背伸びして書いたんじゃない、きっと何かに気づいたんだと。

彼は自転車で帰りながら、赤信号で待っているときに、まるで雷に打たれたようにドーンとその思いが入ってきたそうです。そうだ、アイデンティティを確立するべきだと。それ以来、彼の勉強は丸っきり変わりましたね。

そういういろいろな奇跡みたいなことが起こる。これは奇跡ではないんです。私達は、私立学校の先生方だからあえて言いますが、地方

の私立の優秀な子ほどトップ校と言われるところを落ちている。なぜ俺はここへ来たんだという生徒が多いですね。これは、栃木県内で見ると、大変な努力をされて、そして単願で来る子が増えています。私は、すごく喜ばしいと思います。そんな傷を負わないで勝ち組から勝ち組になるのが一番効率がいいわけですよ。負け組じゃない。つまりゼロから出発するのではなくて、10から出発できるならなおいいわけでしょう。そういう子になるべく育てていくようにしたいと思います。

象徴的なことをちょっとお話ししますが、5期生が東大、京大にダブル合格したんです。東大に入った子に、もう1人の京都へ行った子が感化されて一生懸命勉強しました。まさか東大、京大にダブル合格するとは思わなかった。さらに野球部は甲子園にも出場しました。私は、それまで「東大・京大・甲子園」、と言って、この夢に賭けようと、皆さんに話してきました。それが英進科新設8年目で実現しました感慨深いものがあります。もう間もなく野球の関東大会が始まりますよね。健大高崎こちらは1回戦なんです。県大会では作新には負けましたが、作新は甲子園の有志が残っていますからね。栃木県は、関東大会で17連敗なんです。これを打破しようといって、私は作新に期待をかけているのですが、うちの学校も甲子園に行ける可能性が残されているわけです。春に甲子園に行ってこれたら意気が上がりますね。

だから、甲子園に行ったら頑張って、そんなことを言うと作新に申しわけないけど、ベスト4になるというのはみんなの夢ですよ。作新がかつて春・夏連続で優勝したというすごい経歴がありますね。ああいう学校が出てほしい、ベスト4になったというのは県民の誇りですよ。

ただ、それが直結、生徒募集にくるかという、必ずしもそうではない。つまり、作新も同じですが、うちも2年連続甲子園出場して、2回戦、3回戦に進みました。3回戦、2回戦のとき劇的な逆転があったりして、そのときに「文星はすごいね」と言われるけど、それは特殊な人

間が特殊にやっているせいだと思われがちです。

ところが、進学で東大に入ったとか、京大に入ったというのは、絶対1人、2人じゃできない。チームワーク、どこかが抜けていたらダメです。私も県立で長くやってきて、結局、なぜ宇高では、20人も30人も入ってしまうのか。ほかの学校は、私のいた学校も含めた高校は、東大に行く生徒はいるはずですよ。ところが、届かない。なぜか。これは先生方の意識の問題です。それと、現役で勝負できるのは理科・社会ですよ。私も、灘高校とか、そういうところにお忍びで行っていろいろな話を聞いてきましたけれども、やはり英・数・国は勝負にならないという感じがしているんです。数学と理科・社会。特に文系だったら、東大の社会が勝負だ。東北大も理科が勝負です。トップ進学校以外で理・社2教科の先生をそろえるということは難しいんですよね。ここに私立高校の頑張れる余地があると私は思います。そういう自由度は高いですから。

そろそろまとめに入ります。ディベートに関しては後で読んでください。ここで信じられないことが起きるのです。私の学校の英進科の場合は、1年と2年の3学期の8時間ぐらいは全部ディベートです。準備に苦労します。話の仕方も全部。ところが、これを地道に頑張っていくと、2回か3回が勝負なんです。普通はそこで止めてしまうんです。もうやってもだめだよと。そこを乗り越えようと、彼らは一人で走り出すんです。2年になると、ディベートが楽しくてしょうがないようになります。3年もやらせてくれみたいな話になる。だから、うちの生徒はディベートをたぶん1年、2年で15回ぐらい経験しています。何回もディベートをやります。それが進学に直接役立つかどうかは分かりませんが大学に入って必ず役立ちます。受験対策ということじゃないけど、まず意見の要約をさせて、それから意見を400字で書くんです。400字作文は間違いなく思考力を育てます。

そのときに、自分の意見を書きなさいと。そ

れが、テキストが終わったら自分でテーマを見つけて、自分で課題を解決するのが狙いだと指導します。「先生、終わっちゃったから何をやればいいの」、「だめ、それは。社説だって何だってあるじゃないか。そういうものを見つけて、これについて書いてみよう」と。書くようになりますね。つまり主体的な学習、それが「生きる力」、それがいわゆるキャリア教育です。人材育成につながると私は思っています。私は、ここ50年の教員生活で得た、いわゆる本当にあの教育基本法の第1条は信義なんだと。人格的な向上あつての学力向上だと。最後に私が強調したいことは、「キャリア教育の意義」というところがありますので、読んでもらえばすぐわかるようにわかりやすく書いたつもりですので、ぜひそれをお読みください。

静岡は42校ぐらい私立高校があるそうですが、私学会館という立派なビルがあるんです。びっくりしました。そこで進路指導部の研修会があつて、私も招かれて話をしたんです。そのときに、同じような話をしたのですが、津川先生は前と同じ話を聞いたと思いますけれども。そうしたら、今度は12月6日、静岡県の進路指導の先生方が20人そろってうちへ来るといふんです。

最初、藤枝明誠高校の校長先生から話があつたときに、藤枝明誠高校の先生だけで来るのかと思って、勝手知った仲ですから、津川先生だけ来るのかと思って「何人ですか」と聞いたら、「20人」、「えっ、何それ」と。私は生徒に証言させたいと思っています。全部各学年代表を何人か選んで、できれば自分でやりますという子を選ぶといいのですが、なぜ皆さんはディベートをあんなに一生懸命やるの、それから放課後の自主学習を、1年のころは嫌で嫌で早く終わらないかなと抜け出している人間が、なぜああいうふうになっているのと。私は作文を通してはモニターできますよ、人間的に成長したとか、いろいろわかったとか。だけど、それはあくま

でも字面上の問題ですね。私に面と向かって、自分は人間が成長したと言いますが、私には恥ずかしくて言えないじゃないですか。照れくさいから。だから、静岡の先生が来たら、知らない先生だから何でも言えるだろうというので、私は言ってもらおうかと思っているんです。そして、本当のところはどうなのか私も知りたいと思っています。

みんな、よく言うんですよ。「真面目がかっこいい世界」と私が言い出したのがひとり歩きしているんです。だから、そういう方向に自然に文化が形成されるというか、そこに収斂されているんですね。

最終的に言えるのは、先生方のベクトルの一致です。私は、このベクトルを一致させるために、いわば扇の要的な役割を担っています。いろいろな考えがあったら、これはこうだね、これでいかないという形で収れんさせて共通理解に至る。つまり、生徒にとって先生方の立場は違いますが、異口同音といいます、いろいろな先生の口から同じ言葉が発せられる。それで生徒は安心するのでしょうか。ところが、ベクトルが、例えば先生方の力は1であろうとも、5人そろえば5になる。5の力がある人が2人いても、ベクトルが違えば2しか合力は働かない。この差だねということはよく言っています。

本校の英進科の「真面目がかっこいい世界」の象徴として清掃があります。昼休みに掃除を

やるんですが、誰が言うともなく、みんな這いつくばって廊下をピカピカに磨いています。そういうふうに自然になってしまうんです。

英進科にはシニアの先生が10名近くいます。新しく来た先生は、ほとんど校長の経験者ですが、まずお願いするのがトイレ掃除です。私は、かつて同じようにトイレの便器を拭きながら、やっとこれで本当の先生に戻れたと感じました。校長などを経験していると錯覚を起こすんです。机におじぎしているのを自分におじぎしていると思ってしまう。これは悲劇ですよ。だから早く「かみしも」をぬぐようにトイレ掃除をお願いするのは。以前「週刊現代」の記事にありました。退職したら奥さんを社長と思いなさい、自分は平社員だと。私も縁があって6年間、管理職をやってきたけれども、早く現場に戻りたいと思っていました。だから、本校に充て職で副校長とか、そういうところへ来いというのだったら、私は断ったと思います。新しい職をやれということであり、夢がかけられるかなということで、いわばプラスワンの仕事だったのでこれまでやったのではないかと思っています。

言いたい放題話しました。何かより具体的な、私は実践の話をしました。実践を通して、そのままお話をさせていただきました。ありがとうございました。

研究発表Ⅰ

「生徒の希望を重視した進路実践」

東京農業大学第二高等学校 進路指導部長 山田 欣司



皆さん、こんにちは。東京農業大学第二高等学校の進路指導部の山田と申します。これから1時間くらいの時間をいただきまして、研究発表を行いたいと思います。題は「生徒の希望を重視した進路実践」ということで行いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

お手元の緑色の冊子の21ページからが私の発表の内容のプリントとなっておりますので、そちらのほうを確認しながらご覧いただければと思います。よろしくお願いいたします。

本日の私の内容は、①学校紹介ですが、②脱学力別クラス編成について、③習熟度別授業展開について、④クラス編成についての学校紹介的な内容の話をしたいと思います。

先ほどの吉田先生の話でしたか、私学はなかなか連携がなくて、他の高校はどんなことをやっているかわからないという話もありましたが、私自身も、県内の他の学校がどんなことをやっているか、正直、詳しくは知らないのですが、少しの間、お聞きいただければと思っています。

あと、⑤進路意識調査を3年生でやっている

のですが、その辺から見た本校生徒の特徴を少し話をさせていただきたいと思います。さらに、⑥特別講座をやっておりまして、放課後勉強しているグループがあり、その話をしたいと思います。最後に、今、⑦農大二高の進路状況の話をしていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

①学校紹介

それでは、東京農業大学の話を少しさせていただきます。東京農業大学第二高等学校は、学校法人東京農業大学の関係する高等学校です。学校法人東京農業大学は、東京農業大学、東京情報大学と大学が二つ、あとは、農大一高、農大二高、農大三高と高校を三つ持っています。一高と三高に関しては中学校を持っていますが、二高に中学校はなく、高等学校だけになっています。

東京農業大学は、幕末から明治にかけて活躍しました榎本武揚が産みの親になります。

画面の右下に小さく載っているマスコットキャラクターは、「武揚（ぶよう君）」といいます。

お手元の資料にも大きく載せていただいているキャラクターです。実は昨年度、生徒に募集をし選ばれ、農大二高のマスコットキャラクターとして採用しました。「武揚（ぶよう）」というのは、榎本武揚からきている名前です。

キャラクターのほうは、もちろんダイコンを



イメージしてつくっています。

東京農業大学第二高等学校の話をさせていただきたいと思います。

農大二高は、高崎市から車で10分ほどのところにあります。自転車でも15～20分くらいで行ける場所にあります。1962年（昭和37年）に創立しまして、2011年、今年創立50周年になります。先ほどのマスコットキャラクター「武揚君」は、その50周年に合わせて企画されたものです。来月には50周年記念事業としまして、元 SF ジャイアンツの桑田真澄投手をお呼びしまして記念事業として講演会を予定しております。

学校の教育目標は、学力の向上、生活指導の徹底、特別活動の振興です。

特に生活指導面は、髪形、服装、制服の着用、こういうものは県内の高校のなかでも厳しいかなと思っておりますし、ふだんの遅刻指導などもかなり厳しくしております。

クラブ活動も、全国で活躍するクラブがいくつかあります。陸上、ソフトテニス、剣道、吹奏楽が全国で活躍をしております。

全体として80%の生徒がクラブに入っております。

学校概要ですが、全日制の普通科高校です。1学年の定員が560名。46クラス1,793名の学校になります。1学年は15クラス、2年生は16クラス、3年生は15クラスです。

クラスは、男女併学で、男子クラス、女子クラスで分けています。もちろんきれいに分かれませんが、場合によっては、男女合併のクラスがありますが、基本的には男子クラス、女子クラスでクラス編成を行っています。

あと、農大二高の一番の特徴になると思いますが、クラスの編成をするときには、学力を平均化したクラス編成を行っています。この学力の平均化のクラス編成については、このあとの時間をとって話をしていきたいと思っています。

教職員のほうは110名。専任教諭が67名、非常勤講師が43名でやっております。非常勤講師の先生はほとんど本校のみの勤務をなさってい

るようです。そういう面ではかなり非常勤の先生にもお世話になっているのが実情です。

大学の合格実績は、昨年度（今年の春）は、現役のみでいきますと、国公立大学が74名。東工大、九州大学、筑波大学5名、首都大学、群馬大24名、高崎経済大学9名という数字を出しております。私立も632名。早稲田大学4名、上智大学3名、東京理科大学3名等の合格実績を出しております。

本校の進路指導には二つの柱があると思っております。まず一つは、「併設大学」という表現をしますが、東京農業大学及び東京情報大学への進学数を出すということが大きな役割であると思っています。例年約100名ほどの進学者数を、東京農業大学が90名、東京情報大学に10名ほど出しています。

農大二高は、東京農業大学に約170名の推薦枠を持っております。ただ、基本的に理系の大学になりますので、すべての生徒に希望する学部学科がありませんので、すべての推薦枠が埋まらないというのが現状です。一番人気のある応用生物科学部、バイオとか、希望の多いところは埋まりますがそれ以外のところは余っているのが現状です。

それともう一つの柱としましては、国公立大学の進学という形で、地域からの進学校としての期待、というところと大げさかもしれませんが、そういうものを持っているのかなと思っておりまして、やはりそこも評価される部分でありますので、きちんと数を出したいなと思っています。

先ほど、定員が560名とお話をしましたが、いわゆる単願という表現がわかりやすいかと思いますが、単願で6割くらい、残りの4割くらいを併願で入試をしております。

最近の大きな事業としましては、45周年を期に教育環境整備事業というものを行之まして、4階建てのホームルーム棟という形で校舎自体を建て替えるような作業をしました。1階は、校長室、事務室、職員室等、職員がいられるスペースをつくりました。2階から4階までは、1

フロア16教室をつくりまして、各階に学年を配置しております。

その他、1学年600人が同時に入れるようなホールをつくりました。これができたおかげで学年集会、学年朝礼などもスムーズにできるようになりました。今までは体育館を借り切っていたのですが、かなり上手に運営ができるようになりました。

その他、校門、グラウンド、駐輪場の整備とか体育館の耐震工事・内外装工事等も行いました。4階建てのホームルーム棟は震度7まで耐えられるような基準で設計をしていると伺っております。

②脱学力別クラス編成について

そろそろ本題のほうにいきたいと思います。

まず一番のメインは、クラス編成であると思います。脱学力別クラス編成を平成元年から行っています。

1989年、創立27年目での実施ということで、今から23年前になります。それ以前は、学力別クラス編成を行っておりまして、別の言葉でいえば、「到達度別クラス編成」とか「特進クラス編成」とか、そういう意味になると思いますが、そういうことをやっておりました。

それは、開校当初は約半数の就職希望者がいました。生徒内の学力差も当然ありますし、学習意欲の差もかなりありました。そんなに勉強に精を出さなくてもいいだろうという風潮もあったそうです。

学力別クラス編成の問題点は、根底には、「おれはいいクラスだけれども、おまえは悪いクラス」という形で、生徒間の意識の問題がかなりあったと聞いています。

確かに一部の選ばれる人材を教育するのには非常に効果があると聞いていますが、学校全体としては底上げにならないということで議論がまとまったようです。

ですから、そのクラスに入れたけれども、そのクラスに入れたという優越感だけで努力しない生徒が出てきてしまったり、入れなかったこ

とによってコンプレックスから立ち直れない生徒も出てきてしまったということで、学校内の生徒間でぎくしゃくした関係ができあがってしまいました。

教師・生徒共に責任転嫁をはじめて、うまくいかなかったときに、どうせこのクラスだから、できないクラスの生徒の集まりだから仕方ないと思う教師や、このクラスはどうせできないんだからと前向きになれない生徒が出てきてしまい、学力別クラス編成を行ううえでかなりリスクがありました。

そこで、23年前に根源的な学校方針の転換を行いました。基本的な理念としましては、生徒を学力という一本の物差しで測らないという方針。学力という一本の物差し、それだけで決めつけない教育をしましょと、基本的に今の形に転換したわけです。つまり、脱学力別クラス編成という形でクラスの学力を平均化させてやってきたわけです。

だから、「あなた、学力あるからこちらにきなさいよ」という、強制的なことはしない。基本的に生徒の希望を重視して決めているというのが現状になります。その中で農大二高の教育として根付いたものが3点あげられます。一つは、質・量ともに安定した進学状況、全国レベルでのクラブの活躍、何より大きかったのが、心穏やかに3年間過ごせる校風ができあがったというふうに聞いております。

進学状況では、当時は、学力別クラス編成をやっているところから脱学力別クラス編成になったとき、合格者数はほぼ変わらなかったという話を聞きます。そういうことで、変えても変えなくても同じなら、脱学力別クラス編成でいこうという話になったということでした。

実はこの辺は結構難しいところです。学力を平均化したクラス編成になりますので、逆に今度は、担任の力量が試されるという一面が出てきました。基本的に生徒は平均的なクラスになりますが、そこで1年間やって、クラスに学力差ができる。そうすると、その学力差は担任の学級経営の力量ということになっていくわけで

す。そういう意味で、このクラス編成は担任の力量が問われます。

例えば、1、2年生でも、月1回くらい古文のミニテストや英語のミニテストをやりますと、クラスで平均点に差が出てきます。その中で、いかに担任が投げかけをして、生徒を支えていく。そういうところの力量が問われるところだと思います。

まずこれが農大二高の一番大きな特徴です。

③習熟度別授業展開について

その中でも、カリキュラム的な特徴が二つがあります。まず習熟度別の授業をやっております。ホームルーム単位ではありません。選択授業で習熟度をやっていると思っていただけるとわかりやすいと思います。

これは、入学生の学力の格差が広がってきてしまっているということがありまして、平成19年度大入生から。「大入生」という表現はあまりしないのですが、年度が高校入学なのか、高校を出るときなのか、バラバラになってしまうので、平成19年大入生とは、19年度に大学に入った生徒という意味でとらえていただければと思います。

その年から、数学でまず習熟度別授業を展開しました。内容としましては、発展・標準・基礎の3コース制でやっております。入学時に生徒にアンケートを取り、年度初めから習熟度別授業展開を行っています。

大雑把にいうと、発展では「数学、得意だよ」とか、標準では「普通ですよ」とか、基礎は「本当にできない生徒」というようなイメージを持ってもらえるとわかりやすいと思いますが、ふだんは標準をベースとして、それから $+\alpha$ というのが発展のイメージです。

各学期ごとにコース変更可という形で、かなり組み換えをする形になります。基本的には、上のクラスを目指すように頑張らなさいよという指導をしていきます。例えば1年生でいうと、最後には基礎クラスをなくそう、上に上がろうよとか、上を目指そうというような形でやって

います。

この授業展開は1、2年生だけで実施しています。定期試験を行います。発展と標準と基礎でそれぞれ問題が違います。標準は、発展よりやさしい問題で、良い点がとりやすいと、「標準のほうがいいや」と上を目指さなくなってしまう。評価の弊害面が出てきてしまうので、できるだけ上を目指してしっかり頑張らなさいよという形でやっています。

ただ、それでもやはり評価バランスがうまく取れませんので、年に2回全クラス同じ問題でテストをして、できるだけ評価バランスがよくなるようにやっております。

一応、数学の習熟度をやった年の国公立大学合格実績は42ですが、現役で5年前から32、30、35、25、42と多少増えたかなと思いますが、ただ、習熟度別が要因だったのかどうかというのはちょっとわからないところです。

国公立大学合格実績

大学入試年度	15	16	17	18	19 数学 習熟	20 英語 習熟	21	22	23
総数	53	57	58	46	55	84	68	76	83
現役	32	30	35	25	42	71	55	64	74
浪人	21	27	23	21	13	13	13	12	9

現役数では、
過去10年で2番
目に多い数に
なった

実は、42という現役数は、その年から過去10年間さかのぼると、10年間で2番目に高い合格数になっています。何年か前に43というときがありまして、少し結果がでたかなと思います。

ただ、違う数字がそのあときています。71、55、64、74となっています。この辺の話もこれからしていきたいと思います。

④クラス編成について

続きまして、もう一つの特徴はクラス編成ですが、基本的には併学・学力を平均化するクラス編成です。1年生は、英語・数学の習熟度別授業展開をやっていますがクラス編成は学力を

均等にしています。

2年生は、文・理で分かれます。英数は習熟度別。それ以外は平均化したクラスです。

3年生になりますと、文系のなかでも国公立の文系、私立の文系に分かれます。理系のなかでも、国立の理系、私立の理系という形で、細分化したクラス編成をしています。

この編成のしかたは、もちろん「あなたは頭がいいからこっち」というのではなく、「あなた、どこの進路を考えているの？」ということで、国公立クラス、または私立クラスという二つのクラス編成を行っています。第1志望はどこかというのをきちんと自分で決めて、3年生に向かわせます。

これを決めるのは2年生の10月くらいで、その時期にはもう自分である程度明確な意識を持って、進路を決めておかなければいけません。その時期、三者面談がありますので、保護者の方に説明をするときは、特に国公立クラス希望の生徒の保護者に関しては、「あくまでも国公立を第一希望としてクラス編成をします。ですから、私立の指定校、または推薦等は一切辞退していただきます。そこの約束できなければ、国公立クラスにはいけません」と、国公立大学の推薦とかそういうのは構わないのですが、基本的にはセンター試験を最後まで頑張る集団をつくっていくという意味で、国公立・私立の区分けをしています。

このように3年次、クラス編成を行ない、英数の習熟度もスタートした結果、現役数が71とかなり増えました。

農大二高としては、現役数71は過去最高なのかなと思います。

一応過去にも合計で国公立84とか90もありますが、内訳が違ってきます。例えば平成元年のことですが、現役が27、浪人が58とか、当時は第二次ベビーブーム時代で、現役がなかなか厳しかった時代です。今はそういう時代ではありませんので何ともいえませんが、内訳が違って、このようなクラス編成をしたことが一番大きかったのかなと思います。そして国公立71

という数になっています。最近の合格実績は、8割くらいが現役生の実績です。

農大二高の数年の動きを少しまとめてみますと、脱学力別クラス編成のもと、英数の習熟度別を実施し、かなりきめ細かな学習指導体制をとりました。また3年生の国公立・私立のクラス編成を実施しまして、進路指導もしやすくなったと思います。今までは3年生も、理系と文系だけだったので、一つのクラスに私立の志望、さらに推薦だったり、指定校だったり、または最後まで頑張ってセンターまでいかなければいけないクラス編成でしたが、現在の形にしたことによって、担任も指導しやすくなって、生徒もみんな同じ方向に向かって頑張れる集団になったのかなと思います。そして、近年国公立大学の進学実績が向上したということになります。

⑤進路意識調査

このクラス編成を行ったことによって生徒の進路意識がどう変わったかということをお話ししていきたいと思います。

進路意識調査は、平成18年度から24年度、今年の3年生まで含めましたが、進路希望比較ということで、3年生4月と3年生9月の比較をしました。その希望調査の中には、「あなたは、どういうところを進路希望しますか」という質問で、回答項目としては、国公立大、私立大、併設大学（農大・情報大）、短大、専門、就職の6項目があり、その中で、国公立、私立、併設大学の3項目の比較をしていきたいと思います。

次に、学習時間がどのように変わっていつているかということをお話したいと思います。

国公立大学の希望者という表ですが、お手元の資料で31になりますが、18年ですと、4月の段階で国公立の希望者が28.4%、9月になると、18.1%になって、4月から9月の段階で10%近くが国公立の希望から変わってまっています。19年度も同じように、10%台の数が国公立の希望から変わっています。

国公立大希望者

大入年	18	19	20	21	22	23	24
4月	28.4	33.2	35.6	36.9	38.2	38.7	33.2
9月	18.1	22.9	32.5	32.2	35.1	35.9	32.2
差	-10.3	-10.3	-3.1	-4.7	-3.1	-2.8	-1

私立大希望者

大入年	18	19	20	21	22	23	24
4月	39.1	36	39.3	39.7	37.9	34.7	37.8
9月	46.7	42.2	41.2	39.9	40.3	34.2	37.4
差	7.6	6.2	1.9	0.2	2.4	-0.5	-0.4

併設大希望者

大入年	18	19	20	21	22	23	24
4月	13.2	10.3	12.9	11.5	10.7	15.5	17.6
9月	15.7	16.2	12.8	16	13.4	18.3	20.2
差	2.5	5.9	-0.1	4.5	2.7	2.8	2.6

ところが、20年から先は、先ほど申し上げました、国公立クラス、私立クラスをつくった年からになります。この減少率を見ていただくとわかると思いますが、-3.1%、-4.7%、-3.1%、-2.8%、-1%と、-10%からかなり改善され、つまり、国立を目指すという層がずいぶん残ってきている。

さらに、国公立の希望者も4月の段階で多少多いと思います。国公立からどこに流れるかという私立のほうに流れるわけですが、例えば18年度、19年度は、7.6や5.2と増加しているような状況になります。

我々は、先ほど二つの柱がありまして、一つは、併設大のほうに行かせたいという希望もあります。9月に農大、情報大のほうへ希望を向けることができているという点は悪くはないと思っています。

クラス編成を調整することによって、最後まで希望を変えずに意識的に頑張る層が出てきており、このクラス編成によって、4月から9月の国公立大希望者の減少に歯止めがかかったと考えています。

では、勉強時間はどのように変わったのかということですが、4月と9月で、家庭で1日どのくらい勉強していますかとして、30分以下、1時間、2時間、3時間、4時間、5時間以上の項目を設けて調査します。

あまり立派な数字ではないので、これを出すのは恥ずかしいなと思っているのですが、例えば18年度の4月の段階で、1日の勉強時間30分の生徒が1学年に30%くらいいるという表です。1

日に1時間勉強していると思っている生徒は34%。右横の数字は、単純に（年度で）平均したもので、30分は25.5%、1時間は35.3%。枠で囲っているのは平均より多い数値です。何か出てくるかなと思ってそういうふうにしたのですが。

平均時間をみますと、19年と20年の差が、クラス編成であるわけですが、特別ガクンと上がったわけでもありませんし、変化がある感じがしないんですね。

現在のあなたの、家庭学習における時間は、一日平均どれくらいですか？ 4月 (%)

・30分以下 ・1時間 ・2時間 ・3時間 ・4時間 ・5時間以上

年	18	19	20	21	22	23	24	平均
30分	30.1%	23.3	26.2	24.2	24.4	22.6	27.9	25.5
1時間	34.3	37.0	34.6	34.5	32.9	37.2	36.4	35.3
2時間	22.7	25.7	24.8	28.3	27.5	28.3	20.2	25.4
3時間	9.4	10.8	10.4	10.4	9.9	9.2	12.7	10.5
4時間	3.0	1.8	2.9	1.2	3.2	2.0	2.4	2.4
5時間	0.5	1.4	1.2	0.9	1.9	0.8	0.0	0.9
平均時	1.38	1.45	1.45	1.45	1.52	1.45	1.38	1.44

現在のあなたの、家庭学習における時間は、一日平均どれくらいですか？ 9月 (%)

・30分以下 ・1時間 ・2時間 ・3時間 ・4時間 ・5時間以上

年	18	19	20	21	22	23	24	平均
30分	10.1%	8.3	8.0	6.4	7.3	8.2	10.5	8.4
1時間	14.7	14.3	12.4	13.6	16.8	13.1	15.0	14.3
2時間	21.8	20.8	17.6	16.3	19.6	16.6	15.0	18.2
3時間	24.8	21.9	27.4	27.0	22.4	23.0	20.5	23.9
4時間	17.1	18.6	20.2	16.2	19.4	17.2	17.6	18.0
5時間	11.6	14.8	14.4	20.5	14.5	22.0	21.4	17.0
平均時	2.64	2.78	2.86	2.97	2.77	2.98	2.88	2.84

お恥ずかしながら、30分と1時間の割合を足すと約6割になる。4月の段階で6割の生徒は1時間しか勉強をやっていませんよという表なので、あまり見せられないと思っています。

9月の調査と比較しますと、20年度から多少、多い時間層の割合が増えています。9月になると勉強を始めているのかなというのを見ることができます。

4月は1時間以下が60%くらいいます。3時間以上14%くらいです。9月になると、1時間以内が22%、3時間以上が50%以上で、エンジンが

かかるわけですが、一番大きな要因の一つは、クラブ活動が大きいのかなと思います。

先ほど申し上げましたように、8割の生徒がクラブ活動を一生懸命頑張っています。逆にいうと、勉強とクラブの両立ができていないというような状況になっています。そのあと、クラブが終ってエンジンがかかる。そんな状況なのかなと思います。

この意識調査ですが、クラス編成を国立と私立で分けたことによって、それなりに意識付けとか継続性が上手にできるようになったので、その辺は期待どおりの結果が出たのではないかと思います。

ただ、学習時間は多少改善されたかなと思いますが、結論としては、受験勉強開始時期が遅いというのが現状です。やはり4月の少なさは、部活の影響を受けている部分だと思います。

あと、この表にはないのですが、国立クラスと私立クラスでの学習時間の差が出ていまして、平均をとると、明らかに私立のほうが少ないです。

その他、農大二高のいくつか特徴的なことを話させていただければと思います。

⑥特別講座

まず、特別講座。表現が少しわかりづらいかもしれませんが。農大二高は、4週6休で、週32単位です。6時間授業後ホームルームをやって終わりますが、そのあと、放課後部活のイメージで勉強するグループを入学時に募ります。対象としては、難関国立大学進学希望者です。その希望者の勉強集団を特別講座と言っています。

放課後の部活のイメージで、3年間継続するというのが大前提で、年度初めに1年生に声をかけてやっていきます。担任制でクラス毎に担任をつけてやっています。

実施形態としては、英語、国語、数学の3教科で、3年生は選択制になっています。基本的には英語、数学、国語で月曜から金曜日まで7時間目、8時間目で、50分授業2コマで授業を

しています。土曜日は、第2、第4週がお休みになりますので、午前中やっております。

この講座は参加費用無料です。基本的には実費で、テキスト代、模試代、合宿費のみ徴収するような形でやっています。

詳細としては、3年間、講義形式です。講義担当者は23名。かなり大所帯です。シラバスをつくっております。週1回の全体の打ち合わせをやって意識統一をしています。受講者数は、新入生の約2割、100～120名です。募集の段階で、難関国立大学を志望するということで募集をかけますので、3年次は先ほど申し上げましたように、国公立大クラスのための生徒が入れます。途中から入ることはできませんし、最後まで頑張るということでやっています。

問題点もありまして、すべての生徒に対応できないということがありますが、今では少し改善されてきています。

実績は、最初の卒業生は平成20年大入生ですが、昨年度国公立大31になり、担当者の話ですと、胸を張っていいのかなという感じで、やっと形ができてきた制度なのかなと思います。

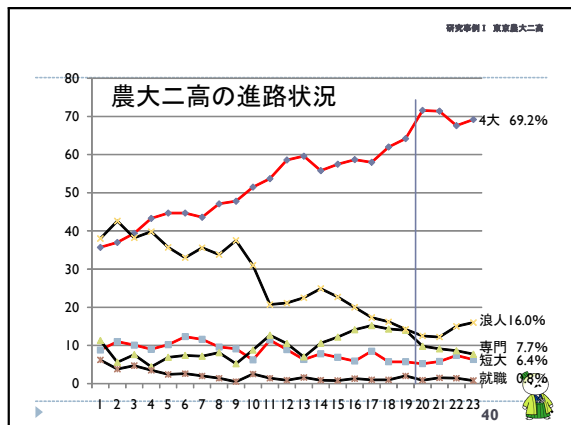
昨年度は、九州大学とか筑波大学、富山大、群馬大などに入っています。ただ、例えば東工大の生徒はここに入っていないのです。国公立大の合格31という数字ですが、全体としては、74名ですので、クラブをやっている生徒が最後に頑張っただけで巻き返しをするという形で、まだまだ伸びる余地があると思いますが、半数までいかない。逆に言うと特別講座に在籍していない生徒も、しっかり結果を出しているということです。

⑦農大二校の進路状況

農大二高の進路状況ですが、平成元年からずっと23年間の表を出しています。一番上のラインが4年制大学に進学した生徒で、昨年度は69.2%が4年制大学へ入学しました。

下がっていくほうのグラフは浪人生の割合です。昨年度は16%。平成元年度は、ご承知のとおり、第二次ベビーブームということで、約半

数が大学、半数が浪人という数字でした。あとは、専門学校、短大、就職のラインで、このような数字です。就職の0.8%というのは、就職できた生徒が0.8%ということです。



実際には、最近は、なかなか受けても受からない生徒がいますので、専門学校に鞍替えをする生徒もいます。

右上がりになってきているからといって進学が伸びているかというのは、各校の先生もいろいろと自校のデータを見ていると思いますのでご承知かと思いますが、やはり少子化の影響が一番大きいのかなと私は思います。

平成元年度あたりが、18歳人口が205万人です。相当いたわけですが、今122万人、約6割です。高校生、18歳人口がかなり減って6割くらいになっているのが現状ですので、先ほど申し上げましたように、35%が現役、35%が浪人という時代と、今の時代背景が違っていますので、少子化の影響で大学に入りやすくなってきている。そういう現状も当然あるのだろうと思っています。

これから先も人口は増えない。大学はますます

す入りやすくなっている。二極化という表現がよくされますが。

ただ、最近の不景気の影響のなかで、国公立大学の合格数を増加させられたということが、少し本校の結果なのかなと思っています。

県内の先生方のご承知のとおり、中学生の卒業生数は平成元年の頃は3万4,000人いたのですが、これから先、10何年経つと1万7,000人くらいということで、ピークの半分くらいに下がっていく現状がこのあとくるというふうに思います。



まとめとして

最後のまとめですが、農大二高の一番大きなところは、脱学力別クラス編成をずっとやってきています。その中でも細かく工夫しながら、習熟度別クラス編成とか、3年次の国公立・私立のクラス編成等もやってきています。生徒の意識を上げるという面ではまだまだ手が入る余地があるのかなと思っています。さらに、特別講座等、できるところもやっているというのが現状になります。

研究発表Ⅱ

「個々の潜在能力の発掘と進化を目指して」

明和県央高等学校 教諭 津久井

武



ただいま司会者からご紹介いただきました私、明和県央高等学校で進路指導部を担当しております津久井といいます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、進路指導部を担当しまして今年で5年目になります。それまでは、この内容にも出てきますが、本校で新コースを立ち上げる際、特別進学コースの最初のクラス担任をさせていただきました。その生徒達を卒業させたあと進路指導を、私が担当することになりました。

本校は決して、いわゆる進路の先進校ということではありません。ただ、いろいろなところで生徒の将来を考えて、自分達にできることにはどんなことがあるかや、生徒に何とか育ててもらいたいという思いで指導に取り組んでいる状況です。

それでは、さっそくですが、題にありますように、「個々の潜在能力の発達と進化を目指して」ということで、本校の現状を含めてご報告させていただきます。

この発表に関しては、1. 本校紹介ビデオをご覧いただきます。2. 沿革と教育方針、3. コース

(クラス)編成について、4. 進路状況について、5. 具体的な進路指導全般の取り組み、6. 特別進学コースの取り組み、最後に7. 今後の課題、ということで7項目にまとめてみました。

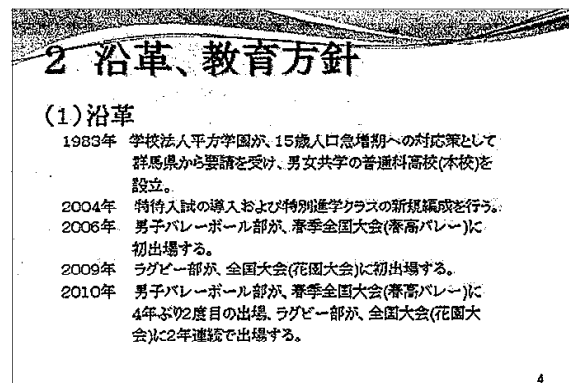
前半4番目のところまでにつきましては、紹介のビデオに出てくる部分もありますが、本校の現状の学校紹介をさせていただきます。5番目以降については、本校でやっていることについてご紹介させていただきます。

それでは、ビデオを流します。約10分間くらいだと思いますので、ご視聴ください。

1. 本校紹介 (ビデオ)

[ビデオ上映]

2. 沿革、教育方針

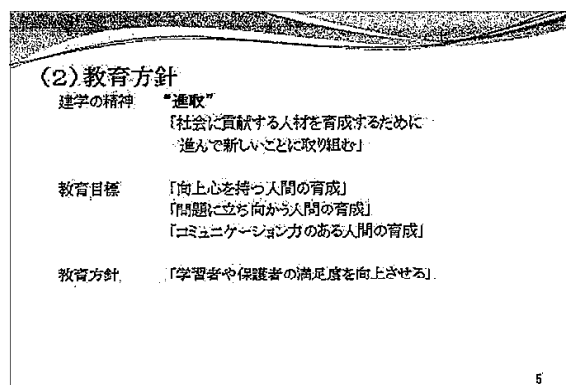


まず沿革ですが、本校は、1983年に、県内の15歳人口急増期へ対応するために創立した学校です。男女共学、普通科でスタートを切りました。今年でちょうど29年目になります。

2004年からは、特待入試制度を導入し、学業、スポーツ、両面でさらに力を入れています。

ビデオの中にもございましたが、近年ではバ

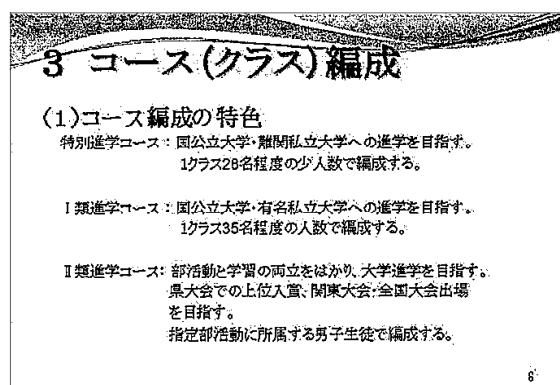
レーボール部やラグビー部が全国大会に出場するなど、特に運動部での活躍がみられるようになりました。また、このあとご紹介しますが、大学入試等についても、旧帝国大学にも合格者を出せるようになってきました。



教育方針についてですが、建学の精神としまして、本校は「進取」という言葉を掲げております。これは、日々変化する社会のなかで貢献できる人材を育成するためには、まず教職員、教員が自ら常に新しいことに興味・関心をもって取り組んでいく、そういうことが必要であろうということを意味しています。

教育目標については、向上心を持つ人間、問題に立ち向かう人間、コミュニケーション力のある人間、この三つを兼ね備えた人材を育成するということを目標に取り組んでいます。その結果として、この教育を実践していけば、本校に入学してくれた生徒、それから保護者について満足度が上げられると考えております。

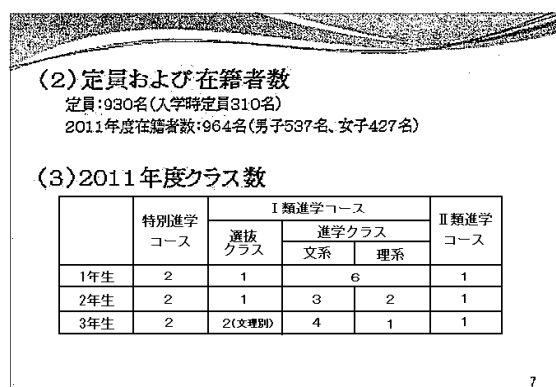
3. コース（クラス）編成



3のコース（クラス）編成についてです。ビデオの中でもございましたが、本校は、国公立

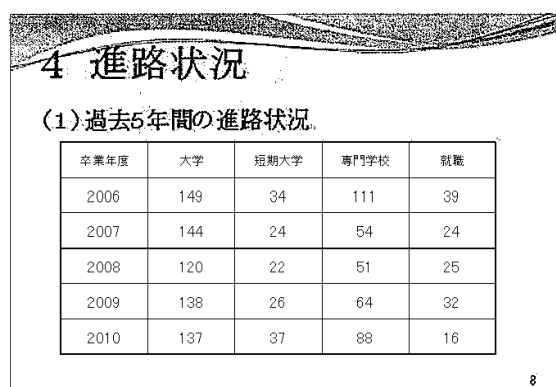
大学、難関私立大学を目指す特別進学コース、国公立大学、有名私立大学を目指す I 類進学コース、部活動と学習の両立をはかり大学進学を目指す II 類コースの3コースで編成されております。それぞれのコースの目標を明確にすることで、そこに所属している生徒達の目標設定がはっきりすると考えております。

定員1学年310名、合計で930名の定員となります。今年度は964名でスタートを切りました。



(3)にあるように、今年度のクラス数は、特別進学コースが2クラス、I 類進学コース6ないし7クラス、II 類進学コースについては1クラスということになっております。

4. 進路状況



続きまして、4の進路状況にしたいと思います。

本校の過去5年間の進路状況についてまとめたものが(1)の表になります。本校は、大学が50%前後、短期大学10%前後、専門学校が25%前後、就職が10%前後というように、幅広い進路、将来の希望を持っている生徒が所属している学校になります。

(2) 番は、5年間で国公立大学の合格についての数字をあげさせてもらいました。北から南ということと、国立、公立ということであげさせてもらいました。先ほども言いましたが、北海道大学や東北大学等の難関校にも合格させることができています。

(2) 過去5年間の国公立大学合格実績

北海道大学2名、北見工業大学1名、東北大学2名、秋田大学3名、茨城大学2名、筑波大学1名、宇都宮大学1名、群馬大学11名、埼玉大学1名、新潟大学1名、信州大学4名、富山大学1名、島根大学1名、高崎経済大学10名、群馬県立女子大学4名、前橋工科大学14名、群馬県立県民健康科学大学2名、首都大学東京1名、横浜市立大学1名、新潟県立大学1名、都留文科大学6名、奈良県立大学1名。

9

(3) については、この春卒業した生徒達についての結果です。北海道大学、首都大学東京など、難関の大学を含めて、本校では初めて合計で20名を超える23名の国立大学合格者を出すことができました。

(3) 2010年度主な合格大学

① 国公立大学合格者数 23名
北海道大学2名、宇都宮大学1名、群馬大学7名、埼玉大学1名、新潟大学1名、高崎経済大学1名、群馬県立女子大学3名、前橋工科大学3名、群馬県立県民健康科学大学1名、首都大学東京1名、新潟県立大学1名、都留文科大学1名

② 私立大学合格者数 189名
明治大学2名、青山学院大学1名、中央大学1名、法政大学4名、学習院大学1名、立命館大学1名、日本大学4名、東洋大学4名、駒澤大学1名、専修大学1名、芝浦工業大学2名、北里大学1名、武蔵大学1名 等

10

私立大学の合格についても、早稲田、慶応というところにはまだ届いていないのですが、MARCH を中心として、難関校の合格も勝ち得ている状況です。

以上、ここまでが、本校の学校紹介と現状についての報告とします。

5. 進路指導全般の取り組み

続いて、進路指導全般の取り組みということで、ここからは、本校で取り組んでいることについての紹介と報告をさせていただきます。

まず、本校の進路の実践目標としまして、「生

徒全員が希望する進路を実現できるよう、学校全体でサポートする」ことを目標に取り組んでいます。

具体的な取り組みとして5項目あげさせてもらいました。

5 進路指導全般の取り組み

実践目標
『生徒全員が希望する進路を実現できるよう、学校全体でサポートする』

具体的な取り組み
(1) 全生徒に学力向上の学習機会を提供
(2) 進路学習・ガイダンス等の充実
(3) 文章表現指導の充実
(4) 模擬試験表彰
(5) 『夢探し講座(Career ambitions lecture)』の実施

11

まず(1)の「全生徒に学力向上の学習機会を提供する」、(2)「進路学習・ガイダンス等の充実を図る」、(3)「文章表現指導の充実」、(4)「模擬試験表彰を行う」、(5)「『夢探し講座(Career ambitions lecture)』の実施」、という五つの取り組みを紹介させていただきます。

(1) 全生徒に学力向上の学習機会を提供

(1) 全生徒に学力向上の学習機会を提供

① 全学年において、土曜補習・長期休業中補習・学習合宿を実施。
・特別進学コースの生徒は、参加を義務化
・Ⅰ類、Ⅱ類進学コースの生徒は、希望制で設定

② 3年生において、センター試験対策特別編成授業を実施
・特別進学コースの生徒は、参加を義務化
・Ⅰ類、Ⅱ類進学コースの生徒は、希望制で設定

12

まず(1)の「全生徒に学力向上の学習機会の提供」ということでは、①にあげましたように、土曜補習・長期休業中補習・学習合宿、こういったものをメインとして実施しています。

土曜補習・長期休業中補習については、基本的には希望制で実施しておりますが、特別進学コースについては、参加を原則としています。

また②、3年生については、センター試験対策として、直前に、授業のなかで特別に時間割を組み直して特別編成授業というものを実施し

ております。このシステムは、Ⅰ、Ⅱ類、特別進学コースに関係なく、センター試験を受験する生徒については、全員参加ができるように工夫しています。

生徒個々の受験科目に合わせて、Ⅰ類、Ⅱ類、それから特別進学コースの国公立型の5教科のについても対応できるように授業を、複雑になりますが、組んで実施しております。

2011年補習計画 土曜補習の実施例

月 日	クラス	5限		2限		1限	
		補習1	補習2	補習1	補習2	補習1	補習2
10月10日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月11日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月12日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月13日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月14日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月15日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月16日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月17日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月18日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月19日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月20日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月21日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月22日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月23日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月24日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月25日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月26日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月27日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月28日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月29日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月30日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語
10月31日	特進(特)	英語	英語	英語	英語	英語	英語

これ(13)は、今年度の土曜補習と長期休業中の補習の実施例です。1、2年生については、基本的には英・数・国の3教科を中心にしております。3年生については、それに地歴・公民、理科を加えまして、科目ごとに配置をして、2週に1回は実施できるような形で行っております。

この補習を担当している教員については、すべて本校の教員です。日ごろから担当している先生方に見ていただいたほうが効果的だと考えて、そのような形で協力をいただいています。

(2)進路学習・ガイダンス等の充実

(2)進路学習・ガイダンス等の充実

* 学年進行に合わせた内容で、半年に1度を目安に進路行事を計画し実施する。

1年 10月 大学見学の実施

- ・東京大学・早稲田大学・上智大学等ニーズの多い大学を中心に5コースで実施(全クラス生徒参加)

3月 学部学科・資格の系統学習会(業者企画協力)

- ・全体講演
『10年後をイメージして、「学び」の内容や「資格」の大切さを知ろう』
- ・13学部学科系統・4資格系統の計17系統の中から、生徒が希望系統を選択し、それぞれ説明を聴講

2番目としまして、「進路学習・ガイダンス等の充実」ということで、本校での3年間の大き

な流れのなかでこんなことをしているということを紹介させていただきます。

まず、本校では、半年に1度を目安として、学年全体の進路行事を計画しております。

まず画面に出ていますのは、1年生の10月の大学見学の実施。それから3月に行っている学部学科・資格の系統学習会、この二つを1年生では行っています。

このあと出てきますが、2年生の10月に、分野系統別学習会を行います。3年生の4月には進路説明会ということで、いわゆる学校説明会を行っています。こんなふうに半年に一度を目安に進路行事を行っています。

1年生対象「学部学科・資格の系統学習会」実施概要

日 期 平成23年 3月9日(水) 13:45~15:35(9・10限)

◆0限(全体講演) 講師 キャリアコンサルタント クロイワ正一 氏
議題 『10年後をイメージして、「学び」の内容や「資格」の大切さを知ろう』

◆0限(分科室) 各教室・特別教室で学部学科・資格を学ぶ

学部	学科	会場	担当教員	人数
1	人文学部	心身学部・社会学部	心理学部	21
2	文学部	文学部・社会学部	社会学部	21
3	法学部	法学部・社会学部	社会学部	21
4	経済学部	経済学部・社会学部	社会学部	21
5	工学部	工学部・社会学部	社会学部	21
6	理学部	理学部・社会学部	社会学部	21
7	農学部	農学部・社会学部	社会学部	21
8	医学部	医学部・社会学部	社会学部	21
9	歯学部	歯学部・社会学部	社会学部	21
10	薬学部	薬学部・社会学部	社会学部	21
11	獣医学部	獣医学部・社会学部	社会学部	21
12	看護学部	看護学部・社会学部	社会学部	21
13	健康学部	健康学部・社会学部	社会学部	21
14	体育学部	体育学部・社会学部	社会学部	21
15	芸術学部	芸術学部・社会学部	社会学部	21
16	音楽学部	音楽学部・社会学部	社会学部	21
17	デザイン学部	デザイン学部・社会学部	社会学部	21
18	情報学部	情報学部・社会学部	社会学部	21
19	環境学部	環境学部・社会学部	社会学部	21
20	国際学部	国際学部・社会学部	社会学部	21
21	総合学部	総合学部・社会学部	社会学部	21

これは、1年生対象で行った学部学科・資格の系統別学習会の内容です。流れとしましては、5時間目が、1年生全体を集めて、キャリアコンサルタントのクロイワ正一さんを講師に、「10年後をイメージして『学び』の内容や『資格』の大切さを知ろう」という題で講演をいただきます。

そのあとは、そこにあげられています15の分野系統に分かれて、それぞれの学校、専門学校の講演をいただくなり、その分野の勉強の内容や将来性、そういったものをお話いただく形になります。

1年生にとっては、進路ノート等を使って、それまで上級学校とか、そういった研究もしていますが、実際に先生方から直接聞くことで、机上での内容と実際の話が結び付き、いい刺激になっています。

続いて2年生の内容ですが、先ほど言いましたように、10月に分野系統別の学習会、2月に

は職業人講話を行っております。3月については、本校の教員による進路ガイダンス、3年生になると、それぞれの分野ごとの動き、流れが変わってきますので、それに向けての準備としてガイダンスを行っています。

2年 10月 分野系統別学習会(業者企画協力)

- ・28分野の中から生徒が希望2分野を選択し、それぞれの分野説明を聴講
- (説明参加校:大学・短期大学18校・専門学校11校)

2月: 職業人講話

- ・演題『コミュニケーション能力を高めよう。～信頼される社会人になるために～』(10年度)

3月 校内進路分野別ガイダンス

- ・大学・短大(3会場)、専門学校(5会場)、大学・短大・専門学校(会場【スポーツ系、芸術系】)に分かれて、3年次の流れと受験準備について説明

16

分野系統別の学習会については、次のシートで説明させていただきます。

これは、10月に行った、2年生の分野系統別学習会の参加分野と参加学校(大学等)です。1年生のときは15分野だったと思いますが、さらに細分化して、全部で28分野に分けて、5時間目、6時間目でを行います。数字は参加人数になります。生徒がそれぞれ5時間目、6時間目に分野の説明や、分野の内容を、1年次よりも詳しく先生方から話を聞いて勉強するようになっております。

2年生対象「分野系統別学習会」(10/15実施)

分野系統・参加校および各校時聴講人数

NO.	分野系統	参加大学・専門学校	2時	3時	4時	5時	6時	計
1	総合系	明治大学	5	11	11	11	11	59
2	経済系	明治大学	5	11	11	11	11	59
3	理工系	明治大学	5	11	11	11	11	59
4	農工系	明治大学	5	11	11	11	11	59
5	医療系	明治大学	5	11	11	11	11	59
6	芸術系	明治大学	5	11	11	11	11	59
7	スポーツ系	明治大学	5	11	11	11	11	59
8	福祉系	明治大学	5	11	11	11	11	59
9	環境系	明治大学	5	11	11	11	11	59
10	国際系	明治大学	5	11	11	11	11	59
11	情報系	明治大学	5	11	11	11	11	59
12	建築系	明治大学	5	11	11	11	11	59
13	工学系	明治大学	5	11	11	11	11	59
14	機械系	明治大学	5	11	11	11	11	59
15	電気系	明治大学	5	11	11	11	11	59
16	電子系	明治大学	5	11	11	11	11	59
17	化学系	明治大学	5	11	11	11	11	59
18	生物系	明治大学	5	11	11	11	11	59
19	食品系	明治大学	5	11	11	11	11	59
20	繊維系	明治大学	5	11	11	11	11	59
21	皮革系	明治大学	5	11	11	11	11	59
22	印刷系	明治大学	5	11	11	11	11	59
23	出版系	明治大学	5	11	11	11	11	59
24	放送系	明治大学	5	11	11	11	11	59
25	映像系	明治大学	5	11	11	11	11	59
26	音楽系	明治大学	5	11	11	11	11	59
27	演劇系	明治大学	5	11	11	11	11	59
28	芸能系	明治大学	5	11	11	11	11	59

17

これが2年生で使った聴講シートになります。話を聞いて気づいたこと等をメモを取れるような形で、5時間目、6時間目を、1回目、2回目ということで書かせております。

この裏にはアンケートをあらかじめ印刷しておき、あまり時間を置かず、生徒にアンケートも回答してもらって担任に提出するように指

導をしております。

2年生「分野系統別学習会」聴講シート

2010/10/15(金)実施

2年()組()番 氏名()

※ 生徒は説明を聞いた内容について、各表にそれぞれメモをとり、感想等も記入して、終了後担任に提出する。

6 時(1 日 目)

6 時(2 日 目)

1. 分野について	
2. 分野について	
3. 分野について	
4. 分野について	
5. 分野について	
6. 分野について	
7. 分野について	
8. 分野について	
9. 分野について	
10. 分野について	
11. 分野について	
12. 分野について	
13. 分野について	
14. 分野について	
15. 分野について	
16. 分野について	
17. 分野について	
18. 分野について	
19. 分野について	
20. 分野について	
21. 分野について	
22. 分野について	
23. 分野について	
24. 分野について	
25. 分野について	
26. 分野について	
27. 分野について	
28. 分野について	

18

これがアンケート結果になります。黄色い帯をつけさせていただいておりますが、割合が一番高かったところにつけてあります。これをみますと、生徒には全体的に好評であるということがおわかりになると思いますし、実施している側としても、やってよかったということを実感できるような数値になりました。

2010年度 2年生「分野系統別学習会」(10/15実施)

【生徒用】アンケート集計結果

質問	回答	割合	回答	割合
1. 分野系統別学習会に参加したいと思う。	はい	10%	いい	1%
2. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
3. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
4. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
5. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
6. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
7. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
8. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
9. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
10. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
11. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
12. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
13. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
14. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
15. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
16. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
17. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
18. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
19. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
20. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
21. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
22. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
23. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
24. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
25. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
26. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
27. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%
28. 分野系統別学習会に参加したくないと思う。	いい	1%	いい	1%

19

質問の一番下、「今後、学校で行ってほしいものは？」という問いかけに対しての回答になりますが、37%の生徒が「大学、専門学校等を招いた学校説明会、そういったものを開催してほしい」という希望でした。

3年 4月 進路説明会(業者企画協力、保護者参加可)

- ・およそ50校の大学・短期大学・専門学校による入試や就職状況等の学校説明と、就職・公務員希望生徒には就職面接講座を実施
- ・学校説明は生徒が希望する3校を選択し、それぞれ説明を聴講
- ・同時開催として、保護者にはIF(キャリア・アドバイザー)による進学のためのマネージング講座を実施

20

今年4月にはその3年生に対して学校説明会を

実施できたので、実際に生徒のニーズに応えられたと考えております。

今、報告しましたように、3年の4月に進路説明会を実施しております。大きな進路の流れとしましては、これが3年間のなかでの最後の内容になると思っています。進路説明会では、大学、専門学校等含めて50校程度集めて行っております。

もう一つ、あとの資料に出てきますが、ここでは、保護者向けということで、「進学のためのマナープラン講座」といったものを開催しております。

これは、特に今、経済的にも非常に厳しい状況が続いておりますので、生徒の進学意識や、そういう希望を何とかかなえてあげられればということで、業者ともご相談させてもらい、そういった企画ができるということで講師をお招きして今年度行いました。

その結果、60名近くの保護者が参加していただきまして、結果的に導入してよかったと思っております。

これが、4月に行いました3年生の進路説明会になります。時間的には30分ずつ、生徒には学校の説明を聞かせるようにしております。

それから、就職講義については視聴覚室がありますので、そちらで別に面接講座を行っております。

一番右側は、保護者用ということで、先ほど言いましたように、「進学のためのマナープラン講座」で、約1時間ちょっと、生徒の第1回目、第2回目の時間帯とあわせて企画いたしました。

会場	3年生(生徒対象)		保護者対象
	体育館	視聴覚室	コモンホール
1回目説明 13:45～14:20	大学短大/専門学校① (学校説明)	就職公務員 実践面接講座	「進学のためのマナー プラン講座」
2回目説明 14:20～14:55	大学短大/専門学校② (学校説明)	・講座は60分を予定 ・終了後は体育館へ 移動	・講師:FP 森 晴幸 ・講座は60分を予定 ・終了後、希望者は 体育館へ移動
3回目説明 15:00～15:25	大学短大/専門学校③ (学校説明)	体育館での学校別 説明会に参加	体育館での学校別 説明会に参加も可能

21

保護者には、「親御さんはなかなか日曜日、

土曜日を使って学校見学会等に、またオープンスクールに参加することもできませんので、いい機会でありますから」ということで案内させてもらったら、参加して下さった保護者はかなり残っていただいて、3回目の学校説明にも参加していただきました。

ちょっと逆になってしまうかもしれませんが、これが今年度参加して下さった学校等になります。

NO	学校名	NO	学校名	NO	学校名
1	東京大学	16	防衛大学校	35	東京理科大学
2	東京理科大学	17	防衛医科大学校	36	東京経済大学
3	東京工業大学	18	防衛医科大学校	37	東京経済大学
4	東京工業大学	19	防衛医科大学校	38	東京経済大学
5	東京工業大学	20	防衛医科大学校	39	東京経済大学
6	東京工業大学	21	防衛医科大学校	40	東京経済大学
7	東京工業大学	22	防衛医科大学校	41	東京経済大学
8	東京工業大学	23	防衛医科大学校	42	東京経済大学
9	東京工業大学	24	防衛医科大学校	43	東京経済大学
10	東京工業大学	25	防衛医科大学校	44	東京経済大学
11	東京工業大学	26	防衛医科大学校	45	東京経済大学
12	東京工業大学	27	防衛医科大学校	46	東京経済大学
13	東京工業大学	28	防衛医科大学校	47	東京経済大学
14	東京工業大学	29	防衛医科大学校	48	東京経済大学
15	東京工業大学	30	防衛医科大学校	49	東京経済大学
16	東京工業大学	31	防衛医科大学校	50	東京経済大学
17	東京工業大学	32	防衛医科大学校	51	東京経済大学

22

これがそのときの様子を撮った写真(省略)になります。会場については、体育館を全部使いまして、各ブース約20席くらい椅子を用意して、専門学校、大学等の先生方から話を聞くような形になります。このなかで、全体に時間を決めて、「時間になりましたので次、移動を開始してください」という案内をして、生徒はそれに従って自分の予定している参加校について回っていきます。かなり真剣に聞いている様子が、写真からだとなかなか伝わりにくいと思いますが、実際にそこに立ち会っていて、生徒が非常に集中してやれたな、真剣に聞いていたなということが私個人の印象です。

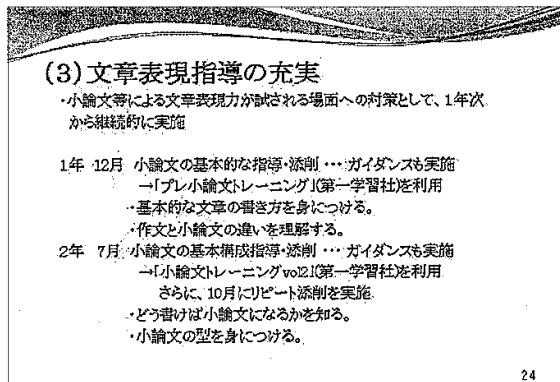
下側につきましては、同じような写真(省略)ですが、ちょうど真ん中にお母さんが一人映っています。保護者の方も3回目は参加して下さっているの、一応あげさせてもらいました。

(3) 文章表現指導の充実

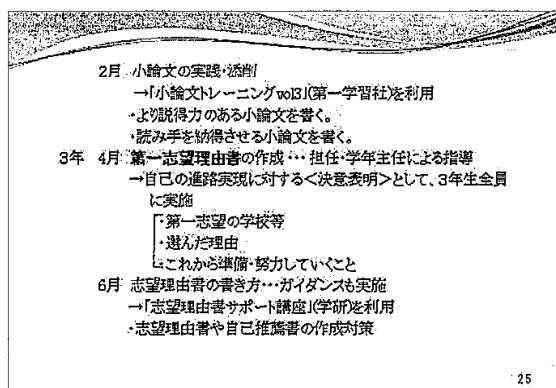
続いて、(3)の文章表現指導という取り組みについてご紹介します。

これについては、本校では小論文の指導を主に1年次から始めて、1、2年生、最後3年生につき

ましては、志望理由についての取り組みというふうに進めています。



前の映像にもあるように、基本的には、1、2年生については、第一学習社さんのプレ小論文トレーニング、小論文トレーニング vol2、それと2年生は2回やるのですが、vol3というものを使って、小論文指導は行っています。



指導については、基本的に総合学習の時間や、場合によってはクラスホームルームの時間で指導するような形になります。ご存知のように、最後に生徒が書いたものを添削してもらおうということになります。

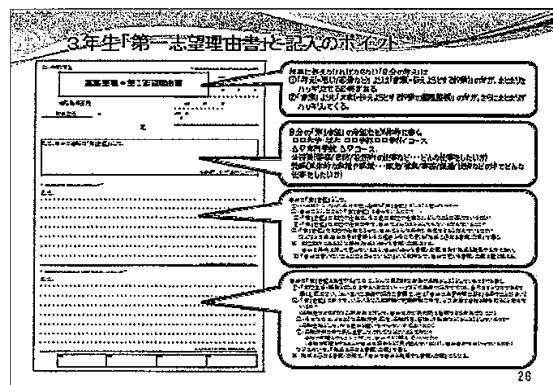
3年生は、5月からオープンキャンパス等が盛んになってきますが、どこに行けばいいのか、まだ自分の進路自体もなかなか決めかねている生徒もおります。また6月に行う「志望理由書の書き方」というサポート講座も予定していますので、4月から「第一志望理由書」を取り入れて生徒には書かせています。

内容としては、まず、第一希望の学校の名前、もしくは就職等については職業や公務員の職種、そういったものを書きます。それから、その学校、職業等を選んだ理由についても書かせ

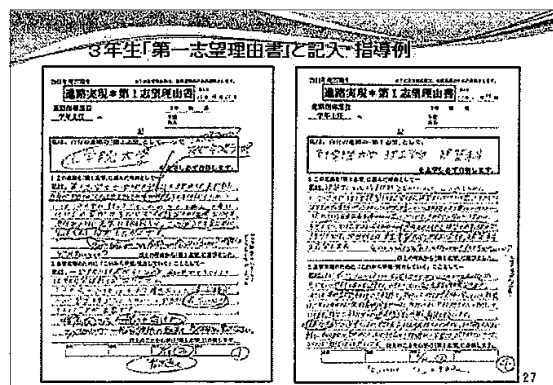
ます。そして、それを実現するために、この1年間、4月から始まって3月まで、この期間どんな取り組みをするか、準備をしたらいいかということを書かせ、目標設定をより具体化することを目指します。

これを生徒に書かせて担任に提出させるのですが、これには、終わりというのではないので、多い生徒は5回も出してくるものもありますし、1回目からつまずいて、なかなかまとめられなくて、出す時期が、遅れる生徒もおります。

ただ、そういったことを書くことによって、自分の進路に向かう、対峙するということで、刺激にもなりますし、自分自身の進路をしっかりと、そこでもう一度見直すいい機会になっています。



この左側が、3年生に書かせているプリントの形になります。右側には、見出しのような形で、それぞれ項目についてのポイント等をあらかじめ示して生徒には配布しております。ここでは細かくてわかりづらいのですが、注意点についてあげてあります。



これは実際に担任、学年主任のほうに出てきたもののコピーをとらせてもらったものです。

名前については消してあります。右下のほうに番号で①というのがあったり、④というのがあったりします。同一の生徒が書いたものです。一番上の右側には、提出した日付が書いてあります。4月11日にこの生徒は最初に、大学は工学院大学ということで書いて担任に提出しております。右側は4回目ということですが、6月19日と書かれています。生徒がいろいろ書いてきたものについてはアンダーラインをして、見たことを知らせればいいという先生のお話もありますが、この場合は実際に文章化することを重視するので、ここではアドバイスも含めて、添削のようなことも行っています。

文章の内容まではわかりづらいと思いますが、実際に1回目、2回目、3回目と繰り返すに従って、非常に内容も豊富になりますし、その内容表現もよくなってきていると学年主任は実感していました。今年約300人の3年生がいるわけですが、学年主任は全員分を見て、朱を入れて返してくれました。毎日5～6人、添削がアドバイスなりをして、生徒への指導をしてくれました。

私のほうも一応横から見る程度はしていますが、実際に手を加えることはなく、学年主任に任せています。

(4) 模擬試験表彰

続いて(4) 模擬試験表彰という内容について報告します。

(4) 模擬試験表彰

① 目的 学習に対するモチベーションの向上をはかり、学習の成果を教員と生徒と共有し、ともに称える機会とする。

② 表彰内容 全学年とも指定した進研模試を対象に、「優秀賞」と「向上賞」の2種をもちて表彰する。
「優秀賞」：各学年とも年3回
「向上賞」：各学年とも年2回

③ 特徴 「優秀賞」は特別進学クラスの生徒に偏りからなるが、「向上賞」は幅広い層で成績向上者を見出すことができる。よって、生徒個々が表彰対象者になり得る可能性があり、表彰がより身近になる。

本校では、4年前、何とか頑張った生徒を評価し認めてあげられるような、そういった場面をつくれないうということ、進路指導部のな

かで相談し、表彰の形がとれたらいいということになり、取り組みを始めました。

特徴は「向上賞」を設けて、向上している生徒を見つけ出して表彰することです。このような生徒は、学力層として上の生徒もおりますし下の生徒もおりますし、幅広く生徒をピックアップできます。

これは賞状の型です。左側については「優秀賞」で、右側については「向上賞」です。本校では進研模試を1年生、2年生、3年生について採用していますので、その結果を用いています。3年生については基本的にマーク試験6、9、11月実施のものを、1・2年生については、7、11、1月の3回で実施をします。



向上賞では、各回で偏差値が10伸びた生徒を対象に行っております。

向上賞の昨年度の集計をとりました。そこにはあげていないのですが、延べで3学年153名が、向上賞に該当しました。そのなかで82名、約半数が特進コース以外の生徒、つまりⅠ類、Ⅱ類の生徒ということで、先ほど言いましたように、成績のいい生徒だけではなく、自分の努力なり頑張りを認める機会になっているかなと改めて集計してみて感じました。

(5) 『夢探し講座 (Career ambitions lecture)』の実施

続いて(5)『夢探し講座』というものについて触れたいと思います。

これは、本校に在籍している生徒は、特別進学コースについては大学に進学するという当初の目的がありますが、Ⅰ類、Ⅱ類の生徒達は、

自分の進路を考え決めているということはなかなか難しい現状です。また、将来こういうふうになりたいという夢とか、そういうものもなかなか構築できていないという状況がみられます。

(5)『夢探し講座(Career ambitions lecture)』の実施

① 目的 生徒個々が将来の夢や希望を見えるきっかけにするとともに、生徒が夢の実現に向け、積極的かつ活力をもって学校生活全般に取り組む契機にする。

② 対象 主に1・2年の生徒で希望者

③ 実施計画 年間4回(予定6/8,9/21,11/16,2/22)、放課後に実施
各回2講座を用意(計6講座から生徒が選択、複数回参加可)

④ 講師 学園組織の「才能開発総合研究所」に講師の選定および派遣を依頼

*「才能開発総合研究所」は、学園組織内にある特有な組織であり、様々な分野において活躍されている方々を講師として登録している。

30

そんなことがありまして、そういった生徒達に何かこちらから働きかけができないかということで企画したものです。

主に1、2年生を対象にということで、特進クラスも希望者がいれば一応聴講できるようなことで組ませてもらっています。今、学期に1回を目安に、1学期1回、2学期に2回、3学期に1回ということで、年間4回を計画していきまして、合計8講座のなかから、全部出られれば4講座聞くことができますというような状況で進めさせてもらいました。

こういった企画をする際には非常に講師の選定が非常に難しいといえますが、大変な場面が出てくるかと思いますが、本校には、学園の組織のなかに才能開発総合研究所という組織がございまして、そこにいろいろな社会人の方がご協力いただいて講師として登録してくださっております。ですから、その組織にこういった先生がいらっしゃったら紹介してくださいということで、私のほうから依頼をして講師をご紹介していただいております。

これ(31)は、今年行った第1回目の「夢探し講座」の内容になります。Aグループ、Bグループに分けております。

Aグループについては、「世界に羽ばたく事業を起こす」ということで、食品製造機を開発して国内外へ販売する会社の起業者であります

桜澤タツオ様にお願いをしました。こちらには、1、2年が中心ですが、58名の生徒が参加してくれました。

⑤ 講座内容

第1回『夢探し講座』6月8日実施

Aグループ 参加生徒数 58名
演題:『世界に羽ばたく事業を起こす』
講師:食品製造機を開発し、国内外へ販売する会社の起業者

Bグループ 参加生徒数 30名
演題:『新しい職業『イベント』』
講師:イベントや行事を企画・プロデュースする、関連業界の第一人者

31

Bグループは、「新しい職業『イベント』」ということで、イベント等を企画・プロデュースする関連業界の第一人者ということで、熊野タクジ様という方に来ていただきまして講演をいただきました。こちら、30名ということで、人数的には非常に少ないかもしれませんが、少しずつ広げていければと思っております。

第2回『夢探し講座』9月21日実施

Aグループ 参加生徒数 65名
演題:『テレビの世界で羽ばたく』
講師:テレビ番組をはじめとしてドキュメンタリー分野でも活躍する、映像ディレクター

Bグループ 参加生徒数 31名
演題:『夢 無限大 -21世紀の生き方づくり』
講師:国内外のSCC(ショッピングセンター)コンサルティングから都市再開発まで幅広く活躍する、商環境プロデューサー

32

第2回は、こちらもA、B二つずつで、「テレビの世界で羽ばたく」、映像ディレクターの佐野トミオ様にお願いしました。65名の参加ということで行われました。

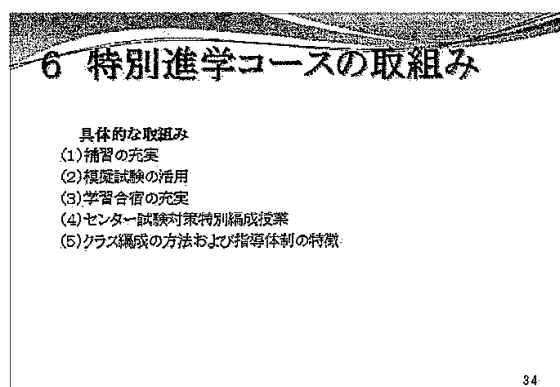
同じくBグループは、「夢 無限大」と題しまして、商環境プロデューサーの佐々木ヒデチカ様にお願いをしてご講演をいただきました。こちらは31名参加。

これが第1回目、6月、1学期に行ったものです。(写真省略) 上が桜澤先生の話ということで、集まった生徒達に向かって熱く語っていただきました。Bグループのほうは、ちょっと人数的には少ないけれども、熊野先生にご講演い

ただきました。非常に内容としまして、私が言うのは変ですが、夢が持てるような話をしてくれということでお願いしていますので、本当に夢を含んだお話を両先生方にはしていただきました。一応紹介させてもらいました。

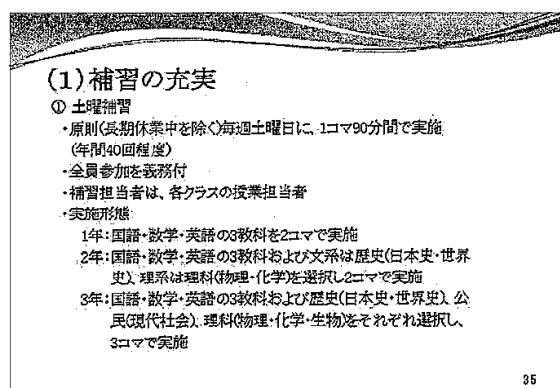
6. 特別進学コースの取り組み

続いて、特別進学コースの取り組みについてご紹介したいと思います。



具体的な取り組みについては、1番目として「補習の充実」、2番目として「模擬試験の活用」、3番目として「学習合宿の充実」、4番目として「センター試験対策特別編成授業」、5番目として「クラス編成の方法および指導体制の特徴」ということで、5項目についてまとめてみました。

(1) 補習の充実



これは、先ほどもちょっとご紹介しましたが、特進クラスについてどんなふうにやっているかということでお聞きいただければと思います。原則、毎週土曜日、1コマ90分で実施しております。特別進学コースについては、全員が参加

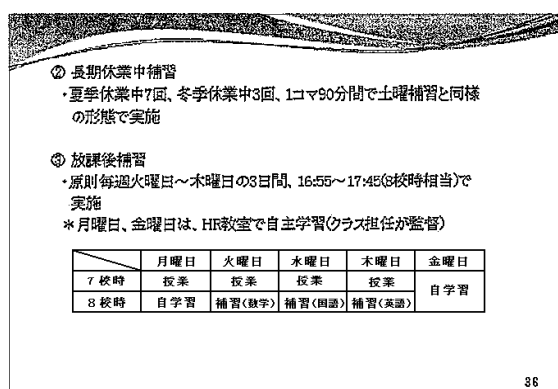
ということで義務づけています。

それから補習担当については、希望者補習については先ほど触れませんでした、どうしても複数クラスに所属している生徒がいますので、必ずしも授業で担当している先生に教えてもらうということにはなりません、特別進学コースについては、すべてそのクラスを担当している先生方をお願いをして、補習のほうを担当してもらっています。

これは、先ほど言いましたように、ふだんから直接関わっている生徒達の学力、強み、弱み、そういったものを把握しているのは、担当してくださっている先生方だというふうに考えておりますので、土曜日といいますと、部活動を担当している先生については、練習試合、公式戦、いろいろ忙しい状況もございますが、何とかやりくりしていただいて、入れ換え等もしていただいて対応してもらっています。

3年生については、3教科に加えて、歴史、公民、理科についても科目ごとに実施をしているような状況です。

この形態については、ナンバー13のところに先ほどあげましたので、そちらもご覧いただければと思います。



長期休業中については、土曜補習と基本的には同じです。

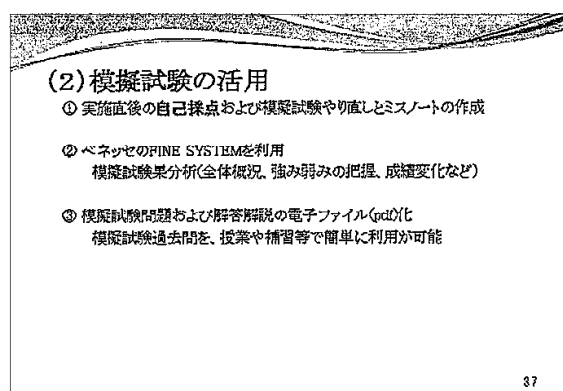
3番目の放課後補習については、放課後、34単位で行っていますので、7校時までが基本的にはいわゆる授業です。金曜日については6時間目までの授業になります。そのあと8時間目の利用ということで、火曜日、水曜日、木曜日については補習、原則、英・数・国の3教科で

実施しています。月曜日、金曜日については、あいているような状態ですが、基本的には自学習をさせています。できるだけ担任が教室のほうにいて、特に何をやるわけではないのですが、監督というような生徒把握、管理ということも含めて行っています。

ですから、特別進学コースの生徒達は、毎日大体6時くらいまで学校で過ごしているような状況です。

(2) 模擬試験の活用

続いて(2) 模擬試験の活用ということです。



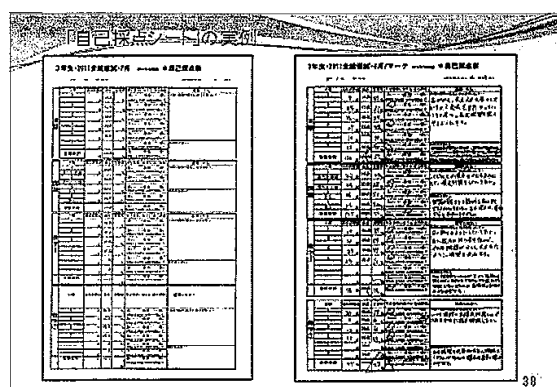
ここでは三つほどあげさせてもらいました。一つ目は自己採点、それからやり直し、ミスノートの作成等です。どちらの学校もやっているかもしれません。

二つ目については、ベネッセの FINE SYSTEM がございます。そちらを本校では全面的に導入させてもらっています。

3番目については、PDF、ファイル化です。これは3年間行うすべての模擬試験については全部読み取ってファイル化をしています。一部、業者によっては、河合塾さんなんかだと、1年後にはアップされるので、それをダウンロードすれば済むのですが、やった直後にまたその問題をすぐに使えるという、それが一番即効的というんですか、出せるという対応力には長けているのではないかなと思っています。

進研でも、昨年度の問題は1年後に冊子になって出てきますが、とにかく事後指導するには非常に重宝しているようなものが電子ファイル(PDF)化です。

①で紹介しました「自己採点シート」の実例ということです。一応左側に、英語、数学、国語とか、そういった教科科目等を配置して、問題番号、配点、内容について、あらかじめ教員のほうが記入をします。右側は生徒の生のものですが、それに対して何%できたか、何点得点できたかということで自己採点と、その内容、どこができたか、できなかったかということが一目でわかるようなシートを作成しています。



右側には、それが終わったあとに各科目ごとに自分の感想、反省を少し書いてもらって、それを持って各教科担当のほうにいきます。ちょっと色がわかりづらいかと思いますが、赤い字と青い字で教員が書いている部分が課題になります。

そういう場面で生徒と教員の信頼関係を築くこともできますし、生徒個々の弱みを発見する機会にもなっていると思っています。例えばクラス持っていると、60人がやってくるわけですから時間もとられますし大変な面もあるのですが、非常に有効な一場面かなというふうに思っています。

(3) 学習合宿

学習合宿についてご紹介させていただきます。これは、1日10時間以上の学習ということで、なるべくいい環境のなかで学習に専念させたいということで実施してまいりました。他校さんでも今はかなり実施していらっしゃる学校が多いかと思います。

1年生については、今年度は、国立赤城青少年交流の家で2泊3日ということで、なかなか期

間がとりづらかったものですから、今年は2泊3日というちょっと短い期間かもしれませんが、行いました。

(3) 学習合宿の充実

① 『1日10時間以上の学習』を目標に、夏季休業中に実施
 ・1年：群馬県「国立赤城青少年交流の家」にて2泊3日で実施
 ・2・3年：長野県志賀高原「岩管ホテル」にて4泊5日で実施

② 自学習を中心とするが、気分転換と集中力を持続させるため、国語・数学・英語の講義も実施

③ 生徒の個別質問に対応するため、5教科の教員を配置

39

2、3年生については、長野県の志賀高原でホテルを貸し切り状態にしまして、4泊5日と少し長めにとって実施してきました。実習学習を基本的にはするのですが、どうしても長くなればなるほど、集中力が散漫になったり居眠りがみられたりということになります。そこで、そういう防止も含めて、英・数・国の3教科に限って講義というものも実施しています。

③ですが、5教科の先生方に、これもお足労いただいて、前日いらっしゃるということもなかなか難しい先生もいらっしゃいますので、その場合には入れ換えて、担当教科を質問等に対応できるように配置をしていきます。

学習合宿実施概要例(2・3年生)

	7月31日(日)	8月1日(月) 8月2日(火) 8月3日(水)	8月4日(木)
6:00		起床	起床
6:00～6:30	7:00学校集合	準備	準備
6:30～7:30	7:30学校出発	自学習	自学習
7:30～8:20	11:00ホテル着 「校長講話」	朝食	朝食
8:30～10:20		自学習・講義 自学習・質問	自学習 自学習・質問
10:30～12:20			
12:30～13:20	昼食	昼食	昼食
13:30～15:20	自学習	自学習	13:30出発準備
15:30～17:20	自学習	自学習	14:00ホテル出発
17:30～19:20	自学習	自学習・講義	17:00学校到着
19:30～20:50	夕食		※入浴時間
21:00～23:00	自学習・質問	自学習・質問	20:00～21:30 2年 21:20～23:00 3年 (交流)
23:00～23:30	就寝準備	就寝準備	
23:30	消灯・就寝	消灯・就寝	

40

こちらが今年実施しました3年生の日程です。主に午前中に着きまして、昼食をとったあと学習になるというような初日です。それから、2日目、3日目、4日目については、一応起床6時で、6時半から7時半まで、食事をする前に1時間学習をして、そのあと、講義や質問ということで、時間を決めて、講義を受けるもの、それ

から質問したい生徒については、午前中1回、午後1回ということで質問の時間を指定して行っています。

環境も、エアコンを使わずにできるような非常にいい環境で、生徒達は今年また少し気持ちが入って、長かったのですが、よくやったかなと私自身は個人的な感想を持っています。

これは、1年生の赤城青少年交流の家での場面の写真になります(省略)。2泊3日ですが、真ん中の段が特進クラスでの自学習の様子になります(省略)。下のところは、青少年交流の家はほかの団体さんも使っていますので、そちらの交流も含めて、ちょっとスナップ写真を入れさせてもらいました(省略)。

こちらは、2、3年生の学習合宿です。上の写真は、勉強している様子が出ていますが、これは3年生で、右下のほうは2年生になります(省略)。あとはホテル、ロープウェイの写真を入れさせてもらっています(省略)。こんなようなところで行ってきました。

(4) センター試験対策特別編成授業

(4) センター試験対策特別編成授業(3年次)

① 12月の期末考査終了後からセンター試験前日までの間、特別時間編成でセンター対策演習を実施

② 正答率の低い問題を中心に、ポイント解説を実施

43

続いて4番目、センター試験対策特別編成授業ということです。これは、センター試験直前の約2週間程度、授業時間のなかでセンター試験を受験する生徒に対して、あるこちらから用意した教材を用いて、主に問題練習を実践していくということでさせてもらっています。

その実践したものについては自己採点をしまして、その集計表を1日の終わりに担任の先生が回収し、それをデータ入力してもらいまして、各教科ごとにその集計結果を今度は担当者のほ

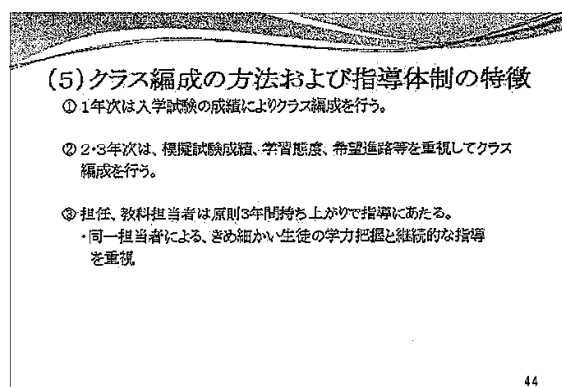
うにそれぞれ連絡します。

それで2番目のところにあるのですが、その担当者のほうで正答率の低かった問題、具体的にはベネッセさんの直前演習の問題集を使わせてもらっていますが、そのなかの何番目の何問目が正答率がこのクラスはあまり高くなかったということで、そこで授業のなかに講義を組み入れて解説をしてもらっています。

そんな日程を2学期、本校は3学期制ですが、2学期の期末考査が終ったあとから、1月17日前まで、直前まで行っています。

(5) クラス編成の方法および指導体制の特徴

続いて5番目、クラス編成の方法および指導体制の特徴ということで、3点あげさせてもらっています。



1年生については、特に入学試験によってクラス編成をしております。特別進学コースを設定した特進入試を開設した当初は、1クラス体制でしたので、2クラスに編成するという作業はなく数年きたのですが、ここ5年くらいは大体60人くらいの生徒が特別進学コースに入ってきています。その入学試験の成績を利用させてもらっています。

2年生については、模擬試験と学習態度、授業態度、それと本人の希望進路等を重視してクラス編成を行っています。このなかで、文系、理系選択が出てくるのですが、現状では2年生、3年生、文系と理系が混在のクラスというふうになっております。

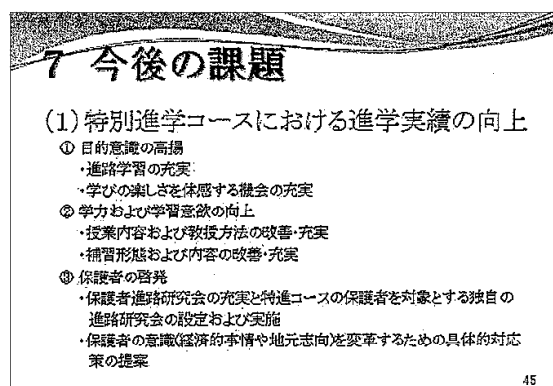
指導体制としては、再三出てきていますが、担当者や担任というのは3年間基本的には持ち

上がりで指導にあたっております。同一の先生が3年間持つことでその先生の責任感というもの出てきますし、その担当したことによって長い間関わることで生徒との信頼関係も深まるかなと思って、そういうことがいい結果を生むのではないかとということで、3年間持ち上がりの体制で進めております。

以上までが、本校での主立った取り組みになります。

7. 今後の課題

最後、7番ということで今後の課題です。



(1) 特別進学コースにおける進学実績の向上

まず一つ目に、(1)として、特別進学コースにおける進学実績の向上というのをあげさせてもらっています。

1番としましては、目的意識の高揚、2番目としまして、学力および学習意欲の向上、3番目としまして、保護者への啓発です。それぞれの項目については、二つ程度、これから考えていく、充実しなければならない点についてあげさせてもらいました。

(2) 進路指導のさらなる充実

2については、進路指導のさらなる充実ということであげさせてもらっています。進路指導を充実させることは、学校生活全般の充実につながると考えております。そこで、三つをあげさせてもらっています。

一つ目は、夢や希望を構築させるようなアプローチ、一つの例としては「夢探し講座」なん

ていうのをやり始めましたが、そういった機会を増やしていければと思っています。

(2) 進路指導のさらなる充実

⇔ 学校生活全般の充実

① 将来の希望や夢を構築させるアプローチ的な取組みを推進

② 成功体験の機会・場面の設定

“褒められ、認められた”ことの実感を体験させる。

→ 成功体験の拡充のために

- ・基礎的学習の繰返しと学力の定着(百マス計算の導入)
- ・作業、勤労体験の構築(周囲・社会からの評価)
- ・部活動・生徒行事の充実(学習以外で活躍する機会の構築)

③ 生徒(特にⅠ類およびⅡ類進学コースの生徒)の進路意識向上

- ・日常の学校生活における満足度の向上

→ 授業・E・R経営の充実

46

二つ目には、成功体験の場面や、そういう機会を充実させる、または設定をこちらから組み込んでいけないかということで考えていければと思っています。

三つ目としましては、これは進路意識の向上ということで、先ほども言いましたが、特別進

学コースについては、大学に進学していくんだという意識が入学当初から持たれていますのでいいのですが、Ⅰ類、Ⅱ類コースでは、現実問題としていろいろな分野に進む生徒達がいまいます。それを決めるということが非常に重要になると思いますので、進路意識の向上ということを念頭に今後進路指導をさらに充実させていけたらと思っています。

ちょっとだらだらしたような話になってしまって恐縮です。お疲れのところ、本当に長い時間おつきあいいただきまして大変ありがとうございました。また、本校でも今回を機会にまたいろいろ進路指導にも取り組んでいけたらなと思っています。

本日は本当にありがとうございました。



総 括

明和県央高等学校 校長 田 村 仁

進路指導部会では「個性を伸ばし夢をかなえる進路指導の実践」を研究テーマに掲げ、実りある部会にするため、大会運営委員を中心に準備を進めてきた。特に講演や実践校の発表を通して、生きる力を育成する観点から進路指導・キャリア教育の在り方を参加者全員が共有できる部会になることを主眼に置いた。

基調講演では、株式会社アメリカンドリーム代表取締役・吉川浩司氏に「進路、大海への出発点 実り多い航海のために何を託すか」と題して講演していただいた。試行錯誤を繰り返し、努力を重ねた体験から、失敗を恐れない人生観を生みだし、エネルギーに夢を追い求める諦めない勇氣には、感銘を受けるとともに強く心を動かされた。結局「井の中の蛙大海を知らず」では、成功も失敗もないし、物事の大局的な判断はできないと云うことを実感した。

事例発表では、文星芸術大学附属高等学校・進路統轄部長の牧島勝利先生から「将来を見通した体系的な進路学習」と云うテーマで、自らが成し遂げてきた進路指導の実践を、事細かくお話しいただいた。先生の教育への熱き思い、教員としての自覚や責任の重さがひしひしと伝わってき、学ぶべきことの多い発表であった。学校・生徒を変えるには、自分の置かれている位置や状態、また、自分の価値や能力を知ることによって教員のスタンスが決まる。そして、その思いを生徒にどう伝えていくかである。生徒の夢を探し出していく進路指導の基本を生き生きと語る先生の話には、興味津々たるものがあつた。お二人に共通して言えることは、人としての生き方、仕事や教育に対する情熱、自らの信念を貫く姿勢そのものが、真贋を見極める眼を養い、

人に伝えることができる人生観を彩っているように思える。

午後の研究発表では、東京農業大学第二高等学校、明和県央高等学校の進路指導主事から私立高校ならではの取組が紹介された。こうした実践事例を聞くことは、他校との交流が少ない私立学校にとって貴重な経験の場である。参加者は、そこで何を学び、良いと思うことをどう具現していくか、一人一人に課せられた使命でもある。とりわけ進路指導の充実・発展は、学校現場の限らない課題で、本部会で得た情報を学校に持ち帰り、活用できるものを精査し、改革の一つに繋げていただければ幸いである。私立学校には、公立のような教育委員会などのしがらみがないだけ、建学の精神のもと理事長や校長のリーダーシップで、長期に渡って特色ある学校づくりを推進できる。それには、教育理念を守り、常に教育や経営の改善策を図る姿勢が求められる。そして、自己点検・組織機能の強化などを実践することが不可欠で、さらに教育目標の実現、学習指導の徹底、教員の活性化など総合的に向上させていかなければならない。現在、多くの学校は、少子化の影響で、整理・統合など再編化の渦中にある。数年後にやってくる生徒急減期に耐えうる原動力を見いだすには、組織内部の自浄努力だけでは、この高波は乗り越えられない。必要な対策・改革を講じない学校は、市場原理の下、淘汰の波にのみ込まれることは明らかである。改革には、リスクやクリアすべき様々な問題があると思うが、打って出なければ、未来は拓けない。こうした研修会を契機に、各学校が新しい一步を踏み出すことを念じてやまない。

国際理解教育部会

- 1 研究目標 グローバルな視点を養う教育をめざして
- 2 会場 ホテルメトロポリタン高崎 「6階 丹頂Ⅲ」
- 3 日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
10月28日	受付	部会開会式	講演	研究発表 Ⅰ	昼食	研究発表Ⅱ	閉会式	

4 内 容

部会開会式 運営委員長挨拶 共愛学園中学高等学校 校長 大川 義

講演 演題 「国際理解教育 ～共に生きるために～」
講師 アジア農村指導者養成専門学校 校長 大津 健一

研究発表Ⅰ テーマ 「語学教育と国際理解との可能性について」
発表者 共愛学園高等学校 教諭 塚本 真理

研究発表Ⅱ テーマ 「国際理解への取り組み アジアとの出会い ―私を変えたもの― 生徒の体験報告」

テーマ1 「新島学園と共愛学園における国際理解教育への取り組み」
発表者 共愛学園中学高等学校 宗教主任 荒谷 出

テーマ2 「アジア学院ワークキャンプの体験」
発表者 新島学園中学校高等学校 宗教部長 小栗 仁志

テーマ3 「共愛学園の取り組みについて（活動の歴史、内容の紹介）」
発表者 共愛学園高等学校 国際交流部主任 村上 英之

テーマ4 「バングラデシュの村々を訪ねて」
―アジアキリスト教教育基金（ACEF）のスタディツアー（概要）―
発表者 新島学園中学校高等学校 教頭 小瀧 秀夫
―バングラデシュの人々との出会いを通して学んだこと―

発表者 共愛学園高等学校 英語科進学コース1年 新井 真莉愛
発表者 共愛学園高等学校 英語科進学コース1年 佐藤 葉子
発表者 共愛学園高等学校 英語科進学コース1年 清水 菜央
テーマ5 「私の国際理解教育体験（アジア学院とネグロス島でのワークキャンプから）」
発表者 同志社大学政策学部1回生（新島学園高校60期生） 山田 光瑠

部会閉会式

総 括 共 愛 学 園 中 学 高 等 学 校 校 長 大 川 義
閉会のことば 新 島 学 園 中 学 高 等 学 校 校 長 市 川 平 治

5 運 営 委 員 (順不同)

委 員 長	大 川 義	(共愛学園中学高等学校 校長)
副委員長	市 川 平 治	(新島学園中学高等学校 校長)
委 員	飽 田 哲 也	(共愛学園中学高等学校 教頭)
	荒 谷 出	(共愛学園中学高等学校 教諭)
	村 上 英 之	(共愛学園中学高等学校 教諭)
	小 瀧 秀 夫	(新島学園中学高等学校 教頭)
	半 田 和 博	(新島学園中学高等学校 教諭)
	小 栗 仁 志	(新島学園中学高等学校 教諭)

「国際理解教育 ～共に生きるために～」

アジア農村指導者養成専門学校 校長 大津 健 一



はじめに

皆さんお早うございます。今ご紹介いただきました、大津と申します。正確にはアジア学院アジア農村指導者養成専門学校（Asian Rural Institute Rural Leaders Training Center）の校長です。一般的には「アジア学院」と言われておりますし、海外では「ARI」とか、「アリ」とかの名前で皆さんに覚えていただいております。栃木県的那須塩原市、西那須野にあります小さな学校です。アジア、アフリカから毎年、約30名の学生を招いて、特に草の根の農村指導者を招きまして、そして農村開発指導者としてのトレーニングプログラムを行い、また現場に戻り、その地域の自立のために働くということを、私の学校の教育の目的として、40年近く西那須野の地でその働きを続けています。

先ほど紹介していただきましたように、私は仕事の関係でアジアで8年間働きました。アジアで働いたということは、アジアの様々な国から来たスタッフの人達と一緒に働いて、アジアの国々、特にキリスト教の関係にあるものですから、アジアの教会とか、キリスト教関係団体

を訪ねさせていただきました。いろいろ農村の現場の中に、また本当に人々が汗水を流して働いている村の中に、また都会にも行かせていただいて、この目で見、またいろいろな人達と出会った経験を少し持っています。そういう経験を通して、テーマに基づきながらお話をさせていただこうと思っています。

もちろん、私が国際理解教育について論じられる十分な経験を持っている者ではないことをまずお断りしながら、何か皆さん方に考えていただく一つの糸口を提示できればと願っています。

言うまでもありませんが、今日、私達はグローバル化した世界の中に住んでおります。人、物、金が国境を越えて行きかっています。それは私達がここにいる間にも、多くの人々が国境を越えて移動し、また経済的には刻々と変わる緊張した経済状況がありまして、ヨーロッパで起こっていることやアメリカで起こっていることが、即座に日本の私達の生活にもかかわってくるという現実の中におります。

農業の視点で考えますと、グローバル化によって、食料が投機の対象とされてきました。以前は、食料は人の命にかかわるものですから、それをもって金儲けの対象にすることはあまりなかったのですが、グローバル化はそのことを許しません。そのことによって今日、食料の国際価格が上昇していることは、皆さんもご存知の通りです。そのことによって、世界の中で貧しい国の人々、特その中の最も貧しい人達にとって、その日の食べ物にありつけるかどうかということが深刻な問題になっています。今日、

食料価格の高騰が、特に貧しい人々に対して大きな打撃を与えている現実があります。

また、今ちょうど問題になっています TPP(環太平洋経済連携協定) を日本がそれに参加するかどうかということが話題になっておりますが、これについてもグローバル化の中での一つの問題としてとらえることができます。TPP は日本にとって厳しい問いかけがなされ、国際社会の一員として、私達がどう生きていくのか、そのことが問われているように思います。

いつの頃からか、“Think Globally, Act Locally” という言葉が語られ出しました。特に南北関係とか、貧困問題を考えるときに、この言葉は非常に大きな意味を私達に与えているように思います。この言葉はアメリカの建築家のバック・ミンスター・フラーという人が好んで使った言葉だということですが、今日の私達のあり方、考え方に対して大きな影響を与えた言葉の一つではないかと思えます。

私がこの言葉に出会ったのは、1980年代にカンボジアのプノンペンを訪ねたときでした。当時のカンボジアはまだ戒厳令が引かれており、夜間の外出が禁止されていました。あるアメリカのキリスト教系 NGO の事務所を訪ねさせていただいた、その NGO の事務所の正面に、この言葉がありました。私はそのときに、“Think Globally, Act Locally” という言葉に深い感銘を受けました。きっとそこで働いている人達は、この言葉を胸に刻みながら、プノンペンで働いていたのだろーと思えます。

その後、キリスト教国際団体で働く知人から、“Think Globally, Act Locally” だけでは十分ではない。同時に “Think Locally, Act Globally” の視点が必要ではないか」という問題提起を受けました。

環境問題もそうです。今、私の学校に来ているアジアやアフリカの学生達に聞くと、各地で環境の変化が起こっていることがよくわかります。山岳民族の人に聞いても、環境の変化によって干ばつや洪水、ネズミの異常な繁殖など、いろいろなことが起こっている。今、タイでは

深刻な洪水が起こっておりますし、また、自然災害が世界中で起こっています。現実的に私達の場合で起こっている問題を世界とのかかわりの中で考えていかないと、問題解決の糸口が見えない、そういう問題を抱えているように思います。

農業問題もまさにそうでした。ソマリアでは大干ばつが起こり、人々の餓死の危険が伝えられています。そのことは私達にとってどういう係わりがあるのか、そのことを考えていく必要があるように思います。私達の場合で考え、そして世界の人々とともにこれらの問題をどう担っていくのか、そういうことが今日の時代の中で私達に問いかけているのではないかと思うわけです。

現在、私達の国は東日本大震災という大きな災害を受けました。そのことによって、日本社会そのものが深い悲しみに覆われ、重苦しい雰囲気の中にあります。今日いただいた資料の中にも、「がんばれ、日本」と。特に私達の所でもそうですが、「がんばれ、日本」という立て看板が各地に立っていますが、本当に何とか奮起しなければならないという思いがあふれているように思います。

このような中で現在の私達の国は、内向き志向になっているように思います。内向き志向は、何もこの東日本大震災以降起こっている現象ではなくて、バブル経済が崩壊してからこの国が経済的に傷つけられて、そこから立ち上がれないような状況の中でまたこのパンチを食らって、ギャフンとしているような状況の中で、どうも私達は内に内にと向かいつつあるのではないか。「がんばれ、日本」と言いながら、内容は一つの内向きの枠の中でしか考えられていない現実を見るような思いがしています。

若者についていろいろな話を聞くと、最近の若者達は海外に出たがらない、留学をする人が少なくなっていると言われておりますし、ビジネスの世界でも海外にあまり転勤しながらない傾向が出ているということを聞きます。私の世代は古いのですが、でも海外に出ようとす

る世代でした。かつて若者達は向学心をもって、世界を見てみよう、世界から学ぼうとして海外出て行きました。

1960年代の高度経済成長が始まり、70年代、80年代には、私達は「国際化」を大きなスローガンとして掲げ、多くの若者達が海外に何とか出て行こうという時代がありました。

今の現実、若者が海外に出たがらない、留学したくない。ビジネスの中でもなかなか出ていこうとする人達がいないうことが起きていると言われています。

深刻な問題は、高校を卒業した若者達、あるいは大学を卒業した若者達に職が見つからないということがあります。皆さん方の学校の中でもそうだと思いますし、私が立教とか津田で教えているときも、4年生の学生が来まして、「先生、すみません。就職活動で授業に出られませんか」と。高校や大学を卒業してもなかなか仕事が見つからない。学生は勉学よりも就職活動のためにエネルギーを費やしてしまっています。

60年代、70年代には、学校を出れば仕事は何かありました。今はとても難しい時代になってきているように思います。若者達が縮み込んでいる。これは大人達も縮み込んでいるのだと思いますが、若者達が縮み込むような状況、あるいは縮み込ませるような状況を、私達はつくって来たのだと思います。

経済的には GNP で中国に抜かれてしまう。インドがまた追いついてくる。韓国からも抜かれそうだという状況で、かつて言われた「ジャパン・アズ・ナンバーワン」ということが地に落ちていくような現実の中で、私達はお互いに何とかしなければいけないと思いながら、今の流れの中では、沈み込むような状況が次から次へと起こっているように思います。

私達の願いは、今日のこの部会のテーマにありますように、グローバルな視点を持った若者が輩出されていくことです。皆さん方の学校の教育を通して、また、いろいろな形を通して輩出され、世界の人々とよい関係を築きながら、よりよい世界、よりよい社会をつくる働きに参

与してほしいという願いが、私達の中にあるように思います。国際理解教育ということも、その背後にはそういう願いがありながら、国際的にいろいろな意味で良好な関係を築きながら生きていける、そういう人材を一人でも二人でも輩出していくことが、今、私達にとって大きな課題と言えると思います。

「国際理解教育」は「隣人理解教育」から

今日のテーマであります「国際理解教育」については、なぜ「国際理解教育」が必要かという形で問いながら、その目的として「共に生きるために」ということが大切であるということをお話させていただこうと思って、この場所に立っております。

「国際理解教育」については、桃山学院大学で教えておりました、蔵田雅彦という人がおります。彼は50少し前で癌でこの世を去っておりますが、蔵田が言っている視点——親しい友人の一人でもあったものですから、彼の意見に賛同するところが多いのですが、彼はどちらかといえば、国際理解教育というのは遠いところに焦点が合わさっていると言っております。そういう国際理解教育ということでポンと投げかけてしまうと、なかなか取りかかる糸口が見つからないわけですが、それに対して彼は「隣人理解教育」、むしろ私達の隣り合わせに住んでいる隣人との関係の中で考えていく必要を彼の著（「隣人としてのアジア」日本基督教団出版局、1993）で指摘しています。そのことによって、国際理解教育に対する糸口について言えば、私達の置かれている状況の中で考えていくことが大切ではないかと思います。

また、皆さん方、特に私学の場合には公立学校とは違いまして、宗教的なバックグラウンドを持った学校が多くあります。例えば、私のアジア学院もキリスト教主義で建てられた学校です。キリスト教を教える学校ではありませんが、キリスト教主義を基盤にした学校です。キリスト教主義学校では、「隣人愛」を教えるのに「善きサマリア人のたとえ」が使われますが、そう

いうものを通して考えると、私達にとっては非常に具体的であって、既にそういう問題を考えてきた積み重ね、基礎があるわけです。私は聖書の話を通して生徒と一緒に考えていくことは、私学教育の中で許されていることではないかと思うわけです。

仏教では、「四無量心（しむりょうしん）」という言葉があります。私は仏教についてはほとんど門外漢ですが、「慈」「悲」「喜」「捨」というのは知り知らない心をさす言葉だそうです。他者への慈しみ、他者へのいたわり、他者の喜びを自分の喜びとする。そういう考え方が仏教の中にもあります。ある面においては、こういう問題を考えていくときにあっては、宗教は問題を考える一つの基盤を与えてくれるものだと思います。公立学校では、命の大切さとか、隣人を愛するということがどういうことなのかということを考えていくための基礎がないように思います。そういう面においては、私達が既に蓄えを持っているところから、この問題を考えていくことが必要なことではないかと思います。

そういう意味においては、蔵田が「国際理解教育」というよりも、「隣人理解教育」という視点の中で考えていくことのほうが、より私達にとって考え易いという指摘は、大切な点ではないかと思っています。

もう一つ、私達に大きな手がかりを与えてくれるものは、3月11日と9月11日、同じ11日ですが、2001年の9月11日にニューヨーク、ワシントンで起こったテロ事件です。ニューヨークのツインタワーがテロの攻撃によって破壊される、あるいはワシントン D. C. にあります国防省が、同じようにテロの攻撃に遭いました。この事件は私達に衝撃を与えました。

この事件の後、インターネットで世界を駆けめぐったと言われております、アメリカ環境学者のドネラ・メドウズ（Donella H. Meadows）の一つのエッセーです。

ドネラ・メドウズは多彩な能力を持った人でした。自身でも有機農業をやっていました。特に彼女が共著で1968年に発表しました『The

Limits to Growth（成長の限界）』という本は環境問題の古典的名著と言われているぐらい、世界的に非常に大きな反響を呼んだ本です。日本では1972年にダイヤモンド社から『成長の限界』という訳で出版されました。

この本を当時、私も読みましたが、日本では数百万冊販売されたということで、非常に大きな反響を呼んだということが、発行部数においてもわかります。世界の28カ国で翻訳されたということですから、世界の多くの人々が同じ本を読みました。この本は、世界の人口問題、経済問題、環境問題が、将来、どうなっていくのかということについて、一つの見通しを与えた本です。特に地下資源の枯渇、石油資源の枯渇ということを指摘しています。今日、私達が直面している課題は石油資源の枯渇と原子力発電の問題です。今日私達は私達のいのちを危険にさらす原子力発電を使い続けるべきかどうかの大きな問いの前に立っています。

2001年9月11日のテロ事件の前、2月に彼女はこの世を去るわけですが、彼女は16年間にわたって、毎週、「ザ・グローバル・シチズン」というコラムを書いておりました。それが約20の新聞、アメリカの新聞だと思いますが配信されて、そのコラムで、彼女は今日の問題を考える手がかりを読者に与え続けました。

その中で、彼女は1990年に「村の現状報告」というエッセーを書きました。これはマガジンハウスの『世界がもし100人の村だったら』に収録されております。この「村の現状報告」が、9・11のニューヨーク、ワシントンのあの事件の後、ネットで世界中を駆けめぐりました。それがまた日本にも届き、日本語で訳され、また多くの人に配信され、私もそのメールを受け取りました。日本のマスコミも取り上げ、非常に話題になりました。

このエッセーの最初は、「もし世界が1,000人の村であつたら」という言葉で書き始められておりまして、私達が住んでいる世界について、地球村（グローバル・ビレッジ）という形で考えていく一つの手がかりを与えたように思いま

す。

先ほど言いましたように、「もし世界が1,000人の村であったら」ということで、大きな反響を呼び起こして、そして『世界がもし100人の村だったら』という形で、池田香代子さんが再話という形で、少し内容を今日のデータなどもまじえながら書き換えられて、ダグラス・スミスさんが英語の翻訳のところを担当して発売されました。2001年9月11日に9・11事件が起りましたが、日本では12月に発売され、これもベストセラーになりました。多くの人達がこの本を読みまし、また皆さん方の中にもお読みになった方がおられるだろうと思います。

メドウズの功績は、グローバル化の中で起っている深刻な貧富の格差を、私達の地球を、1,000人の村に縮めて考えることによって、私達自身の問題として考える手がかりを与えてくれたと思います。どこかに取っかかりがないと、世界で起っていることやいろいろなことは、私達とは関係ないことと考えます。なかなか私達の問題としては響いてこない。しかしながら、彼女は世界を1,000人の村と考えることによって、これは私達の地球村の出来事という形で、一つの問題を考える手がかりを与えたように思います。ちょうど蔵田さんが「国際理解教育」ではなくて、「隣人理解教育」だと言ったこととよく似ていて、私達の場合に近づけて考えていくというあり方がないと、生きた学びにはなっていないと思います。

そういう面で、ドネラ・メドウズが書いたエッセー、そして、そのエッセーが、この社会ですから、インターネットを通じて世界中を駆けめぐ。日本ではこういう形で本が発売されて、多くの人達がそれに目を向けることは、世界の問題を考えるときに非常に大切なことではないかと思います。

アジア学院について

この関連の中で、私の学校、アジア学院アジア農村指導者養成専門学校について、簡単に紹介をさせていただこうと思います。

アジア学院を知ってくださっている方もおられるし、アジア学院というのはどこにあるのだと思っておられる人もおいでになるかもしれません。那須塩原市というところにあります。また、福島原発から110kmのところですよ。福島原発で3月13日、水素爆発が起こったときに放射能が飛び散りましたが、110km離れておりますが、私達のところに、風の通りがそうになっているらしいのですが、那須町、那須塩原市、日光市かけて比較的高い放射能が放出されました。

私達の学校も結局、放射能による土壌汚染の問題に直面しております。地震でももちろん校舎の損壊を受けましたが、地震の問題と同時に放射能汚染の問題を抱えております。今、土壌をひっくり返そうということで、線量の高い土を下に入れ、下の土を上にはひっくり返すことを考えております。私達もただ見ているだけではなくて、これを何とか乗り越えたい。特に有機農業を標榜している学校ですから、農作物が放射能に汚染されることはどういうことなのか、そのことをどう考えたらいいのか、そういうチャレンジを受けています。また、農作物、鶏、豚、あるいは卵など、そういうものの放射線量を一つ一つ測りながら、食べられるか食べられないか、そういう非常に難しい問題に立ちながら、今、私達は働きを続けています。

今プロジェクターでお見せしているのは2010年度の学生です。昨年度の学生の写真ですが、これを見ていただいたら、様々な皮膚の色の人達、いろいろな国から来ている人達がいます。アジア学院にいる人達の姿がこの中に写っています。この中には学生だけでなく、スタッフ、それからボランティア、彼らはドイツ、アメリカから来てくれた人達がいる学校です。

1973年に西那須野で学校を始めまして、2013年に創立40年を迎えようとしています。公的支援を受けず、国内外の個人・団体の支援を受けて、今までこの働きを続けてきました。創設者は高見敏弘ですが、高見はこの働きなどによって、アジアのノーベル賞、マグサイサイ賞を受

賞いたしました。

毎年、アジア、アフリカ、太平洋地域、中南米などの国からも学生を迎えていまして、昨年度はブラジルからも学生を迎えました。4月から始めて12月に終わる9カ月間の集中トレーニングコースを行っています。夏休みもなく、祝日も休まず、9カ月間のトレーニングプログラムを続けています

私達は草の根の農村指導者をターゲットにして、アジア学院に来て、学んで、またもとの現場に戻る。個人として招くのではなくて、派遣団体がいて、その派遣団体から送られて、またその派遣団体に戻って働きを続けていくことを期待しています。学生は、毎年30人ぐらいの小さな学校ですから、卒業生は今までで1,195人、世界55カ国にまたがって、私達の卒業生がいることになっています。それに毎年2人ないし3人の日本人学生がおり、彼らの中には、青年海外協力隊へ行くとか、海外で働くとか、今日まで続けています。

目指しているところは持続可能な農業で、その土地にあるものを有効に利用しながら、肥料づくりから始めて、土地を耕し、土地から生じた収穫物をいただく。小麦とか、お米とか、野菜とかだけではなく、鶏とか、豚などの命をいただきながら、そこで生活をするという形をとっています。

それは同時に、学生達がアジア、アフリカに帰ったときに、現場の中で循環型の農業を実践することを私達は願っています。

アジア学院を一つのコミュニティと考えるなら、全体として、残ったものはすてないで、それを有効利用する。持続可能なコミュニティでありたいと願っています。

私達の学校には強調点が三つあって、一つは持続可能な農業。二つ目はリーダーシップ、そのリーダーシップもトップダウン式のリーダーシップではなく、サーバント・リーダーシップ、仕える指導者です。農村の中で、農村の人々の声に耳を傾けながら、農村を指導していく、そういう指導者の養成を心がけております。

コミュニティの形成は三つ目の強調点です。これら三つの強調点は、農村生活の向上に寄与していくものと考えています。

アジアやアフリカの人達が貧困の要因の一つには、食べられないという状況があります。食べることが状況をつくっていく。自分達で自立できる状況をつくっていく。今の農業の実態は、種を買わないといけない状況があります。農薬を使っている人達は、農薬を買わなければならない、肥料を買わなければならない。このような農業は土地を疲弊させ、借金を増やします。アジアやアフリカなどの発展途上国では多くのところで、農薬を使った農業が行われている。それに対して私達は、そうではない、自分達の村にあるものを有効に使いながら農業を進めていく、循環型の農業を目指すことを私達は強調しています。

今年は、学生が20名しか来ませんでした。30名ぐらい来る予定でしたが、いろいろな事情で来れませんでした。1人だけ放射能のことが怖いから来ないと言った人がいましたが、あとの20名は来ました。学生達は地震もそうですが、放射能に対してもすごくセンシティブになっていて、それぞれ自分達が持っている情報の中で、問題を捉え、考えているようです。世界の人々が集まって、様々な情報を持って、人々がいるということの中で、私達は、共に生きることの大切さを考えると、持っている情報が違い、そのことによってまた考え方も違って、今年の新学期から私達は放射能問題について神経をすり減らすような議論をしきながら、ここまでやってきたということです。ですから、みんなが共通理解に立って、共に生きていくということは、そんなに簡単に言えないということを、私達は改めて考えさせられています。

また、私達のスタッフの中には、日本人だけではなく、アメリカ人2名、韓国、ガーナ、フィリピンから各1名がいて、共通語を英語という形で、日々の生活をしております。日本の学校の中ではユニークな学校の一つではないかと思います。

それと海外からのボランティアを積極的に受け入れています。海外から青年を受け入れていくことによって、お互いに刺激し合い、お互いに向上していくという意味があります。今現在は、ドイツ、アメリカの青年がいます。大体1年から2年ぐらいの予定でアジア学院に留まり、私達と生活を共にしながらボランティア活動を続けています。それから、地域の人の中で、私達の働きに協力してくれる人達があります。

このような事から、世界から、常時70人ぐらいの人々がいて、アジア学院コミュニティを形成しています。そのことから言いますと、ドネラ・メドウズが、世界の人々が集まる村がもし1,000人の村であったらという言い方をしましたが、そういう意味においては、私達も50人ぐらいの小さな地球村を形成していると言えます。世界の人達が一緒にいながら、どういう形でお互いに理解し合って生きていくことができるかという、一つの実験場のような場を私達の学校は持っているように思います。

そこから見えるものについて、言わせていただくなれば、結論からいえば、私達は結局、民族とか、文化とか、宗教とか、考え方とか、言葉とかが違っている。これは当たり前のことだと思いますが、そのように違いを尊重して、共に生きようとする意思がそこにあるならば、違いが違いとしてではなく、違っているということが、色とりどりの豊かな色彩を持っているコミュニティの形成の可能性を、私はアジア学院の働きを通して見ています。

毎年10月、「収穫感謝の日」というのを行います。今年も行いました。その時に、「Coloring the world with, love, care harmony in difference (愛と思いやりと調和で、色とりどりの地球に!）」というテーマを設けて行いました。これは学生達が話し合って付けたテーマです。毎年違うテーマが選ばれますが、私はいつも、このテーマの中にいろいろな意味が込められていると思います。特に違っているということについて、“in difference”というのは大切なことだと思います。日本社会は、なかなかディファレ

ンスを認めない社会です。けれども、違いがある中において、love と care と harmony をもって、色彩豊かな社会を形成していこうという思いがこの中であって、それは私達が願っているものと同じことではないかと思うわけです。

私達の国際理解教育にとって大切な点は、まず私達が相互に違っていることを受け入れ合うことではないかと思うわけです。そのために身近な課題として、隣人理解教育が必要だということが言えると思います。私達の社会は、他者と違っていることや、違っている人を排除する傾向が強いように思います。初めに申し上げた、今日の日本社会の内向き傾向は、ある面においては違っているものをますます排除していく危険性があって、インクルーシブ、内に包み込んでいくようなあり方ではなくて、エクスクルーシブ、外へ押し出していくような傾向があります。その点において、グローバル化の中で、様々な人々が隣人としているという現実を認め合っていく。当たり前のことを当たり前のものとして認めていくことが、私はとても必要なことではないかと思えるわけです。

違っていることを認め合う一つの例として、例えば隣国の北朝鮮に対するこの国のあり方について、だいぶ前から疑問に思っていました。また私達キリスト教の立場から平和や和解について発信したりしていかなければならないのですが、今の状況では、言うとなたかたってしまうような状況があって、なかなかそうはなりません。

かつて東京大学経済学部部長をされて、日本の様々な要職に就かれた、隅谷三喜男先生がいらっしゃる。隅谷先生は、NCC（日本キリスト教協議会）のキリスト教アジア資料センターの理事長を、その出発からずっと担ってくださいました。どんな忙しいときでも会合に出てきてくださって、アジアとの関係、特にアジアの教会との関係が大切だということを、繰り返し繰り返し私達に言われました。

隅谷先生が特に北朝鮮との関係で言われたことは、政府と政府の関係がうまくいかないとき

にも、しっかりと北朝鮮の関係、私達には教会との関係になりますが、教会との関係をつくる必要があると言われました。表向きに先生が動かされたわけではありませんが、水面下では、北朝鮮との和解の働きをとろうとして努力されました。国と国との関係が途切れる中で、人と人との信頼関係を築くようにというのが、隅谷先生のメッセージでした。日本政府をはじめとして反北朝鮮の立場に立って、北朝鮮たたきが行われ、北朝鮮の立場に立つならば、たちまちまたたかされるような状況の中で、両国の関係を冷静な目で見るとある方がこの国の中で必要だと思いますが、なかなかそういう人々の声が表に出てこず、打ち消されていくようなことが起こっています。

しかし、過去の歴史を私達が見ていくなれば、日本の軍国主義は朝鮮半島を植民地支配いたしましたし、北朝鮮のピョンヤン（平壤）には一番大きなピョンヤン神社を、ソウル（京城）にも神社をつくりました。当時の朝鮮人に参拝を強制いたしました。また、日本への強制連行をいたしましたし、女性の人達には強制的に「日本軍慰安婦」として働かせました。

戦前のピョンヤンは東洋のエルサレムと言われ、キリスト教の中心地でした。ピョンヤンにキリスト教の中心があった国です。ですから、そこに現在もクリスチャンがいるのは当然のことであるわけです。

戦後の冷戦時代の中で、私達は北朝鮮というものに対して敵視政策をとり、独裁政権の下でのわけのわからない国のように考えてきました。きっとこの国の人達と私達日本人が会っていないから、そういうことが起こってきた。また、意識的に私達は戦後から今日までこの国と人々を無視し続けてきたことによって、今日のような北朝鮮に対する私達の国の態度が出てきたように思います。勿論拉致問題も両国の関係をこじらせる大きな要因でした。

私はどの国に対しても、どの国の人々に対してもそうですが、我々の歴史への真摯な視点と相手を理解しようとする姿勢なしには、国と国

との信頼関係が構築されないと思っております。そのことはすごく大切なことだと思います。北朝鮮敵視政策をとるよりも、国交を正常化し、北朝鮮をテーブルの前に出して協議をし、その中で両国の問題を話し合うほうが、私達の平和的な方向、問題解決の方向が見えてくると思いますが、なかなかそういうふうにはならない、そういうふうにはさせない力が働いてくるように思います。

国際理解教育というのは、北朝鮮との関係づくりを含めた困難な問題を担っていく、そういう問題を担いながら、問題をきちんと見ていけるような人材をつくるのが、この国の将来にとって必要なことだと思います。何かただ国際社会の中で国益に基づいて発言したり、いろいろなことを言っていく人だけではなくて、そういう意味において和解の働きがとれるような人材の育成も、国際理解教育の中での一つの大切な課題ではないかと思っています。

多様な人々がいるアジア学院で私が学ぶことは、互いの違いを受け入れ合うことの大切さだと思います。アジア、アフリカから来た人達に対して、日本の習慣はこうです、アジア学院の規則はこうです、ここにはまりなさいということであれば、みんなはストレスがたまり、不満が出てくるわけですが、そうではなくて、私達スタッフも心がけていることは、来た学生からも学ぶ。私達の学校は教育をする、教える学校だけではなくて、彼らからも学ぶ、お互いに学び合うあり方、姿勢を非常に大切にしております。そのことなしには、様々な国の人達が来て、数カ月間ではありますが一緒に生活することはなかなか難しいことです。そして、その中で、一つの小さなコミュニティを形成して、これだったら一緒に生きることができるという、小さな経験をお互いに積み上げていくことが、これからの一人一人の生活にとって大切なことだと思うわけです。

私は8年間、アジアキリスト教協議会（CCA）というところで働きましたが、みんなで20数人のスタッフがおりまして、いろいろな国から来

ていました。私は最初、私達はキリスト教の信仰に立っているのだから、一緒にやれる、お互いによく理解できるならば、私達の信仰によって一致できると単純に考えておりましたが、無残にそういう考え方は破られました。そんなことはない。信仰を持っていようと持っていまいが、どの国であろうとなかろうと、違うことは違う。それを一緒にすることはできない。結局、一緒に働くということは、お互いに違いを認め合いながら、共通の場所を見出しながら、そこで共に働く。そのことなしには互いの信頼関係は起こってこないことだと思いました。

そのような意味において、自分自信がそういう努力をしていくことなしには、お互いが理解するということは起こってこないのではないかと思うわけです。そのためには、私達は世界人権宣言や、国際人権規約や、国際的に承認されている取り決めをしっかりと受けとめる。一人一人が人間として尊厳をもって生きていることを受けとめていく、そのことが大切なことだと思うわけです。

私達はどこかでアジアやアフリカの人々に対して蔑視、その裏返しとして欧米人に対する劣等感のようなものを持っているように思います。アジアの他の国の人達の中にも同じような傾向があります。

韓国のアジア研究院院長の呉在植（オ・ジェシク）先生は、日本は明治維新以来、「脱亜入欧」政策をとってきたが、戦後この方、この国は「脱亜」の政策は変えず、「入欧」が「入米」に変わっただけである。そこからはアジアの国々との信頼関係は生まれません。そして、彼のメッセージは、日本はアジアへ帰るべきだ、地理的にも、地政学的にも日本はアジアに位置しているのであって、そのアジアの中で生きていく、そのあり方を明確にすべきではないかという講演をキリスト教関係者の集まりでされました。

私達はアジアに対する関心を向けているということを言いますが、どこかにアジアとの関係に対して距離感みたいなものを持っておりません。特に隣国との関係で考えるならば、韓国と

の関係、中国との関係、台湾との関係、北朝鮮との関係、私達は本当にこの一番近い国の人達との信頼関係を持っているのかということを考えさせられます。この国の中心で歴史歪曲の問題が起こったりしますと、途端に隣国から厳しいリアクションが起こってきます。十分に信頼関係を築いて来なかったことが分かります。

また、韓国・生命と平和学大学院院長の金容福（キムヨンボク）先生が、当時、私は東京におりましたので、東京のオフィスに来てくださって、韓国の学生を日本の大学で勉強させたいという相談にこられました。その話はそのときに、金先生は、英語と日本語と中国語ができる韓国の青年を育てたいということを仰いました。

中国、台湾、韓国、日本を含めたこの地域の中では、東アジア共同体という構想がありますが、なかなか進まない。今、ちょっと宙に浮いたような形になっています。EU ができ、そういう形で経済圏や地域の共同体が形成されていく中で、東アジア共同体という構想がこの地域の中にも生まれておりますが進みません。進まない理由の中には、基本的に信頼関係がないということです。その中で、それを担う人材を育てるために、学生を送りたいということを言われました。

日韓の関係で言うならば、日本の植民地支配にもかかわらず、日韓の関係をつないできた人達は、政治家ではなかったと思います。目に見えた政治家や私達の政治指導者、韓国の政治指導者の中でのつながりが日韓の関係を築いてきたのではなくて、韓国の中での良心的な人達、日本の中での良心的な人達、その人達が水面下でつないできたことによって、今日、戦後の日韓の関係が築かれてきた。特に戦後の日韓の関係を築いてきた韓国人達の中に、日本語を話す人達がおられたということが、それは植民地支配の結果ではありますが、そのことはお互いに共通理解を得るために非常に役立ったということが言えるように思います。金大中元大統領はクリスチャンですが、金大中元大統領が北朝鮮

に対して太陽政策をとることの原動力になった背後の中には、韓国内の良心的人々の支援やいろいろなサジェスションがあったからだと言えます。

その意味において、金容福先生が、これからの学生の中で、少なくとも日本語、中国語、英語ができる青年を育てる。語学教育は、後の分科会の中でもお話があると思いますが、私はすごく大切な点で、これは日本の側からすると、日本の青年の中にコリアン、中国後ができる青年を育てていくことも、私達にとって一つの課題ではないかと思っています。

隣人理解教育が必要だということを言った蔵田さんは、韓国の教会からは、将来、日韓の架け橋になってもらいたいと期待された人でした。日韓の架け橋になってくれる人材が韓国の側から求められているし、また日本の側からも、本当の意味において二つの国の架け橋になれる人材が必要です。

必要なことは、単なる外国語を話す人を増やすことではありません。教育の中でもそうだと思います。相手の民族とか、文化を理解する人材の育成が、私達にとって大切なことではないかと思っています。

共に生きるための国際理解教育

まとめとして、なぜ国際理解教育が必要かということに対して、私は共に生きる世界の構築のために必要だと考えております。その意味において、共に生きるための国際理解教育が問われていくのではないかと思います。今日の世界人口は、この月末に70億に達するということが言われています。皆さんご存知のように、今日、この同じ地球上に住む人達の中で、国連世界食糧計画（WF）の発表ですが、9億2,500万人の人達が飢餓の中で生活をしていると言われていいます。その多くの人達がアジアやアフリカの貧しい農村に住んでいます。現在でもソマリアで、今回の大干ばつ、政治不安で、このままほっておくと数週間以内に70数万人の子ども達、女性が死んでいくことになる、そういう警告が国連

を通して世界に対して発信されています。世界中に住んでいる7人に1人が飢餓の問題で苦しんでいる。その状況を私達は私達の問題として考えていく必要があるのではないかと思います。

農業問題専門家の大野和興さんが岩波雑誌「世界」（「農と食の崩壊と再生」2008年5月）の中で、アジアやアフリカの貧しい地域に住む人々は穀物を食べ、豊かな国の人々は穀物を食べる動物の肉を食べている。日本列島の住民はメタボ傾向を強めている、と指摘をしています。メタボというのは、今、成人病の一つの中に数えられていますが、これは私達の今の国のあり方を象徴しているものだと思います。一方に飢えて苦しんでいる人達がいる、地球のどこかでそういう人達がおりながら、一方で私達は経済的に豊かな生活をしている。

アジア学院では、毎日、地域の給食センターから、小学校の子ども達が食べ残したパンと御飯をもらってきます。いただいたパンや御飯と米粉を混ぜて、豚のえさをつくりまします。私達は非常に助かるのですが、この間も混ぜ御飯をもらってきました。一つ一つビニール袋に入っているので、子ども達一人一人が食べた量だと思えますが、丸ごと残している子ども、一口だけ食べて残している子ども、みんな食べた子どももいるのだろーと思います、たくさんの残飯が残って、私達はそれを使って豚のエサなどにしているわけです。

一緒に働いているフィリピンのスタッフが、子ども達の食べ残しを見ながらため息をついているのです。彼はきっと心の中で、「どうしたことか！」ということと言いたかったのだろーと思います。私自身も自問自答しながら、これは一体どういうことなのだろう。現在のソマリアで、75万人の子ども達が死んでいくということ聞きながら、一方でこういう形のものが許されている社会というのは、一体どうなのだろう。学校教育の現場は、家庭教育は、どうなっているのだろーかということをおぼろげに得ません。

思想家の丸山真男がつくった造語の中に、「他

者感覚」という言葉があります。他者の立場に立って物事を考える力、そのことを通して自分を見直す、そのことについて「他者感覚」という言葉を丸山は使っています。

岩波雑誌『世界』編集長の岡本厚さんによると、日本は1970年代ぐらいに「他者感覚」をなくした国だと。1970年代というのは、ご存知のように、高度経済成長をずうっと続けていくその時代に、日本は個人主義、私中心主義の個人主義に落ち込んでいった傾向がある。自分達の生活、自分達の家族の幸福に目が奪われて、私達は広く物事を見ていく視点を失っていったの

ではないかという指摘をしています（「座談会—日本の右傾化と東アジアの平和」『この国に生きる』所収、いのちのことば社、2007）。されました。私はそれが今日の現在の青年の内向き志向、この社会の内向き志向に結び合っているように思われます。

大人達を含めた子ども達が、同時代に生きる人々の問題を、国境を越えて考える力を養うためにも国際理解教育は大きな役割を担っていくべきだと思います。どうもありがとうございました。



研究発表Ⅰ

「語学教育と国際理解との可能性について」

共愛学園高等学校 教諭 塚本真理



お早うございます。私は共愛学園高等学校で英語教員をしております塚本真理と申します。英語科進学コース3年生の担任をしています。本日は国際理解教育部会におきまして、英語の授業が国際理解をどのように深めていけるかという可能性についてお話しさせていただければと思います。まず始めに、アイスブレイキングといたしまして、皆さんに私が授業や、アジア研究会という活動の中で行っているワークショップの一部分を体験して楽しんでもらいたいです。本日ここにお集りの皆さんは全部で約40名ですので、タイトルは「世界がもし40人の村だったら」です。

今からこのお部屋は地球になります。そして皆さんは色々な国からおこしになっています。お一人ずつカードを持っておいていただき、周りの方には見せないで、ご自分だけご覧になって、今からご自分の国の「挨拶の言葉」で挨拶をしながらお部屋を回っていただき、そして、同じ言葉で挨拶している仲間の方を見つけたら手をつないで、集まって座っていただきます。話せるのは挨拶の言葉だけです。それではどうぞ。

1. Icebreaking1:「世界がもし40人の村だったら」

大体集まってお座りいただきましたら、お座りください。仲間が見当たらなかったのは残念ですがお一人でお座りください。これはもう、何をしているかわかりになると思うのですが、「世界でどんな言語が話されているのか」ということを体験していただいています。一番多いのは「挨拶の言葉を教えてください」。「ニーハオで中国語ですね」。次に多いのが「ハローで英語です」。そして「オラでスペイン語」。「ナマステでヒンディー語です」。

このワークショップは、この後いろいろと展開させることが出来ます。大陸ごとに分かれていただき、このロープの中に大陸ごとに入ってもらい、人口密度を体験しているのがこの写真(略)です。

アジアの方、手を挙げただけですか。たくさんの方がいらっしゃいますが、この一番大きな輪っかの中にぎゅーぎゅーに入ってください。南アメリカの方、挙手をお願いいたします。南アメリカの方はこの少し小さい輪っかの中に余裕で入っていただけます。

さらにアジアの方達には紙が15枚、ヨーロッパには10枚、北米12.5枚、南米1.5枚、アフリカ1枚が配られます。紙の枚数は各大陸で作られているあるものの量を表していますが、さて、それは何かおわかりになりますか？これヒントは地球温暖化です。正解はCO₂ですね。各地域の一人当たりのCO₂の排出量をみることから、先進国が地球温暖化に大きなダメージを与えており、持続可能な社会を築く上での責任を考えることがテーマになっています。

カードの右上を見てください。△の方、手を挙げてください。クッキーを80個差し上げます（と言うと、生徒は大喜びします）。□の方、クッキーを15個差し上げます。○の方は残念ながらクッキー1個です。これはもうお分かりだと思いますが、富の分配の不公平さを体験してもらっているわけです。貧しいグループに入れた生徒の中には、ようし、戦争だ！といいながら、豊かな国に交渉にいく生徒が至り、中間層のグループは静かに仲良く分け合ったりしている姿が見られたりしますね。

この様にこのワークショップは経済格差、高齢化社会、地球温暖化など世界の諸問題を体験的に学習することが出来ます。今紹介しました「世界がもし○人の村だったら」の他にも「貿易ゲーム」やお弁当ゲーム（これは食糧自給率を考えるものですが）など、色々な開発教育の参加型学習プログラムがあります。私が所属している開発教育の Dear という NGO でも数々のワークショップやテキストが紹介されていますし、開発教育の教材だけでなく、テレビの番組や映画等も各単元の導入に良く使います。なぜそうするかといいますと、例えば、Lesson4で Bridge over Troubled Water（明日に架ける橋）という曲について学ぶのですが、このような英文が出てきます。This song became a symbol of the suffering, self-sacrifice, and hope for freedom of those who were suffering from apartheid. 「アパルトヘイトに苦しんでいる人々にとってこの歌は、苦しみ、自己犠牲、そして自由への希望の象徴となった」という文があります。これについて、文法の説明、音読、英作等色々なパターンを使って学習するわけですが、さらにこの一文の裏に存在する様々な歴史的背景を学ぶことによって、この一文がもっと真剣に私達に迫ってくるからです。そこで、Lesson4ではアパルトヘイト政策をとりあげた映画「Cry freedom」をみます。ネルソンマンデラとともに働いて殺害されたビコという黒人の人がアパルトヘイト政策の問題は白人にあるのではなく、黒人の中にあるんだ！というくだ

りを何度も見ます。差別と偏見の日常の中で、いつの間にか黒人は劣っているのではないかと錯覚し、生きようとする意欲を失っている現実があるが、文化に優劣なんかあってはならないんだと自分達の文化に誇りを取り戻そうとする訴えるシーンを何度も英語で見ます。このように、授業の内容を掘り下げていける教材を用いるだけでも、本日のテーマ「英語の授業をとおして国際理解教育を深める」ことは大変可能です。しかし今日の私が皆さんに投げかけるテーマは、「英語というものをどう捉えるか」、これが生徒そして教師自らの国際理解教育の原点ではないか、ということです。

そこで、私はこの「世界がもし？」のワークショップをするときに必ず世界にはどれくらいの言語があるのか、と質問します。正解は6000語、しかしその半数以上が近い将来死滅すると言われているのはなぜでしょうか。そして、英語のランキングを確認します（世界第2位）。そしてその英語が世界のどの国で使われているのかを言語分布マップで確認し、なぜ広がったのかを考えます。そうすると、「産業革命（印刷技術）」「植民地政策」「アメリカ経済の発展」などの理由によって広がっていったことが明らかになります。さらに、なぜ英語を勉強するのか？と考えてもらいます。「カッコいいから、アメリカ人みたいにペラペラになりたいから（1年）」「しゃべれる様になって、世界の多くの人と友達になりたいから（2年）」。3年くらいになると、素晴らしい答えが返ってきます。後ほど3年の意見をお伝えしましょう。

2. Icebreaking 2:間違えやすい単語

ではここでまた、皆さんに質問です。

① karoshi / futon / otaku この中で英語はどれでしょう？

正解は、3つとも英語です。ウェブスターの英語の辞書に載っております。このように他の言語が英語にどんどん加わっているという歴史があります。例えばフランス王のルマンディー公 William がイギリスを制覇した（Norman

Conquest) 1066年以後、200年間フランス語が議会、法廷で使われ、英語は姿を消す。その後、pork, cabbage, stew などの台所関係のフランス語が英語に加わりました。

② air / heir hear / here son /sun この3つのうち発音が異なるのはどれでしょうか？

英語を学習するものにとって、これはたまりません。こんなに綴りが異なるのに発音は同じだからです。皆さんは、Great Vowel Shift の謎をご存知でしょうか。1400年から1600年の間に何かが起こり、母音がひとつづつあがったというのです。昔 moon は「もーん」と発音していました。しかし何かが起こって、「おー」が1つあがり、「うー」となり、「ムーン」となりました。Name も昔は「ナメ」でしたが、「ア」が1つあがって、「エイ」となり「ネイム」となりました。これは、歴史の強い方ならすぐおわかりになると思いますが、黒死病、ペストが全ヨーロッパを襲い、知識階級がなくなり、大多数の下層の人々が使っていた英語が表に出たということです。

生徒が発音を読み間違えたとき、笑いが起きます。本人も照れ笑いをします。その時、いいえ、間違えていい！といってやる！なぜなら、

1. 英語は歴史の中で変化し続けているからです。
2. 私達日本人には、言語間距離の問題があります。ヨーロッパの人が英語を習得するのは比較的簡単と言われています。同じアルファベットを使用し、良く似た単語があるからです。日本語は語順も全く違います。
3. 耳の機能も違います。私達日本人は生まれた時から、「あいうえお」しか母音が無い。Ra の「ら」と La の「ら」、の区別等無くみなおなじ「ら」なのです。一方中国語等はらーとラー等同じ「ら」でもいろいろあるので聞き分ける耳の機能が備わっていると言われています。

このように私達日本人が英語学習が不得意であるという、立派な理由がそろっている上、

①私達日本人は人前で恥をかくことを良しとしません（恥の文化）

②そして、欧米諸国の英語を正しいモデルとし、似せようとするあまり、そのゴールの遠さに 絶望感を覚えるのです。

私達日本人は英語教育によって傷ついています。それなのに、さらに追い打ちを欠けるかのごとく、NHK の英語でしゃべらなにかという人気長寿番組では、native speaker のボスの下で働く日本人ビジネスマンが、冷や汗をかきながら英語で会議をしている場面等を紹介しています。

「失敗を恐れずどんどん話していきましょう！欧米で話されている正しい英語の発音を身につけ、欧米の文化をしっかりと学べば、こわいものなし！ビジネスの世界でもリーダーとして活躍できる！」と言っていますが、これは本当に正しいことでしょうか？

①私達は、恥の文化と同時に、間の文化がある。Turn-taking 順番に話していく文化があります。

②欧米人の様に振る舞い、肩をすくめたりしながら、英語を話す事は美しい事でしょうか。インド人が習得したいと思っている英語は、アメリカ人の英語でも、イギリス人の英語でもなく、インドの教養ある人達が話す英語だそうです。

③英語力と経済力は等しくない現実があります。英語を使用しているフィリピン等も以前経済状態は余裕のあるものではありません。

このような現状を押さえないで、英語力をあげよう！英語力さえあれば、いい大学に入れる、いい会社に就職できると教員も生徒も信じて勉強を続けるのは危険。

英語教師は一步間違えば、欧米文化崇拝者であり、英語偏重主義の犯罪者になってしまう。では、ここ最近の英語を取り巻く社会の動きを見てみましょう。大変なことになっています。

3. 日本の英語教育変遷と現在の英語偏重状態

2010年 「二年後に社内公用語を英語にする」
日本企業現れる。

2011年 「公立小学校5、6年生の授業に「英語活動」の時間が設置。

2013年 高校の学習指導要領改訂「英語の授業は英語で行うのが基本」

これを図にしてみますと、

松本茂（英語で英語の授業、ディベート）

明石康（元国連事務次長） 楽天、ユニクロ

VS

これに対し、たくさんの先生方が、ちょっと待ってと警鐘を鳴らしています。

鳥飼玖美子「英語公用語は何が問題か」「国際共通語としての英語」

寺島隆吉「英語教育が減びるとき」

江利川春雄「英語教育のポリティクス」

鈴木孝夫「ことばと文化」

斎藤兆史「日本人と英語」

大津由起男「危機に立つ日本の英語教育」

★松本先生は、「日本では日常の生活の場面において英語を使う機会が少ないので、教室という場を英語のコミュニケーションの練習の場としても捉えるべき」と考えておられるようです。

★しかし、寺島先生等は、体育の授業を受けただけではテニスの選手になれないのだから…。英語の授業を受けて英語がぺらぺらになれるのか。

★テレビ等の外国語講座などでは、韓国語の授業は韓国語でやりなさいとかイタリア語で教えてないからだめという意見は無いのに、なぜ英語だけ英語で??

★日本の中での英語は「生活言語」ではなく「学習言語」であるから、文法を土台にしながら日本語で学習するのが最短ではないか。

★韓国の例：益川敏英先生がノーベル化学賞を受賞したとき、韓国の研究者達は、日本は母国語で科学を学べるからいいなあ、と漏らしたそうです。韓国の大学では、科学をすべて英語で学ぶ為、深く掘り下げて考え研究する

ことが出来ないという意見が圧倒的だそうです。

★携帯電話市場など、日本独自の進化が進みすぎて、逆に世界市場から孤立してしまう「ガラパゴス化」が叫ばれることが多い日本企業ですが、楽天、ユニクロの両社はそうした枠を打ち破って、グローバル企業へと"脱皮"しようと考えているのでしょう。

★しかし、鳥飼先生は、このような事態は「英語帝国主義」であり、現代のグローバリゼーションとは何と言うことは無い、アメリカ帝国主義だったと仰っておられます。

★津田先生も、英語と英語以外の言語との不平等な状態を「英語支配」とよび、支配されていると気づかずに英語に支配されている日本の現状を「幸せな奴隷」と形容されています。

★英語に夢中になっているうちに、自らの言語を軽視したりしかねない。自らの言語世界とアイデンティティーを捨てることに繋がるということでしょうか。

★江利川先生は、英語教育が会話中心の薄っぺらいものに成り下がってきている元凶は経団連にあるとのお意見をお持ちです。「経団連の多くの役員企業がアメリカを中心とする多国籍企業の利益代表としての性格を強めており、英語の使い手を増やす方向の圧力が教育界に向けられている。」

このような激しい論争をどう英語教員は受け止めるべきか。確かに中国、韓国はじめほとんどのアジアの国が小学校から英語を学んでいます。

このままでは世界に取り残されると焦った企業と文科省が新たな方針を打ち出したのか、黒幕に経団連がいるのか、この混迷状態に果たして終止符が打たれる日は来るのでしょうか。

得をしているのは自信が持てない日本人の心理を利用した英語ビジネス業界！では、ないでしょうか。

でも、生徒達は英語を勉強したがっている。ここで、生徒達が暗唱を好むスピーチを紹介します。

(Video:キング牧師とスティーブジョブ氏のスピーチ)

民主主義、司法の独立、基本的人権、三権分立等の概念が生まれたのはイギリス。そして、人種・男女差別廃絶や、無学歴であっても成功できるというドリームが生まれたのはアメリカです。

私は1998から2002までの5年間アメリカ、カリフォルニア州サンノゼというところに家族で住んでおりまして、前半はカレッジに通ってプリスクールの教員免許を撮りました。(これは実習のアメリカのモンテッソーリの幼稚園での写真(略)です)(次の写真(略)もそうです)。実は私は日本の幼稚園教諭の資格も持っていました、日本の幼稚園とのいくつかの相違点にも驚きました。こども達はジグゾーパズルが大好きです。日本の幼稚園ですと、アンパンマンとかぐりとぐらとかのジグゾーパズルがあったりするのですが、アメリカの幼稚園ですと、このようなジグゾーパズルが用いられているのです。これも実習中の写真(略)で、異文化理解の單元として、私は自分の国の昔話や音楽を紹介してもらいました。幼い頃から人は平等であることを教え、この世界には多くの文化や考え方、生き方があることを教え認めあう教育が、実践されていることに驚きました。

さらにその後私は公立小学校の特殊教育、自閉症のクラスに勤めました。アメリカの自閉症のクラスは TEACCH という教育に基づいてカリキュラムをたてています。TEACCH というのは、ノースカロライナ大学のショプラー教授が研究、開発し、実践しているものです。

Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children

(自閉症及び近縁のコミュニケーション障害の子どものための治療と教育)

基本理念としまして、1. 自閉症の人達の特性を文化ととらえ共に生きる。2. 自閉症の人達の特性や機能に合せて環境の方を変更(構造化)し、構造化された教育を行なう。周囲の人達が自閉症の人達に歩み寄り、自閉症の人達がその

場面で何をすればよいのかを理解し、安心して行動出来るように 環境を視覚的に分かりやすく整理し、構造「明確」化し、自閉症の人達の適応能力の不足を補完する、というものです。自閉症の人達は、かも知れないという予測を立てて行動することが難しく、これから起こる事も予測出来ず 不安で混乱するのであって、視覚優位の自閉症の人達が目に見える形(絵カードなど)で分かりやすく提示し 今、何をどうするのか、何をどれだけやれば終わりかという予測が可能にする。(写真(略)をご覧ください。生徒達は今自分がやるべき学習のみに集中できるようにしてあり、カードにそって移動、学習する内容も変わっていきます。次も、視覚に訴えたクッキングの時間です。)環境の方を自閉症の人達にとって理解しやすいようにすることで、不必要な不安が取り除かれると、逆にこだわりが薄れ、自分の方から外界に働きかけようとする自発性が芽生えるようになっていきます。

このように、幼い頃から平等を学び、また、障害を持つ人達の文化を理解しようと歩み寄る理念等、私が経験したわずか5年のアメリカの生活の中でも、学ぶところがたくさんありました。ですから、現在の私の生徒達も英語の教材を通して様々な新しい価値観、考え方に日々であっていると思います。

英語が広く国際語として用いられたのは最初は植民地政策によるものでありましたが、その後も強い強制を伴わず用いられたのは、やはり、英語にある価値があったからと考えます。では、「ある価値」とはなにでしょう？私は、英語は「鏡」と「扉」の役目を果たしてきたといえると思うのです。

英語という鏡：

私達は英語を学び、自己と異なる文化、価値観、考え方にであって初めて自分を見つめ直すことが出来る。自分を知ることが出来ます。ですから、私の英語の異文化理解の授業では、他国の文化や慣習を学んだ後、必ず「では、日本ではどうでしょうか？日本の食生活で

は、そのような工夫はどんな形でなされているでしょうか」などと日本を見つめ直す時間を取っています。そして、自分達の文化に対する誇りを培っていきます。

英語という扉：

英語を学習することによって、海外にいたり、外国の友人とコミュニケーションとはかり、諸外国の現状を知ります。この地球には自分と異なる人間が住んでいて、皆でこの国を **share** して生きていかなければならない。独占してはいけません。共有し、共生していかなければならないことに気づいていきます。3年生の総合英語の時間、ムハマドユヌス氏のグラミンバンクについて学ぶ単位がありますが、生徒の中には自主的に、マイクロクレジットがイスラムの暮らしに及ぼしたプラスの点、そしてマイナス点等も調べたり、ユヌス氏の提唱するソーシャルビジネスに是非自分も挑戦したいという生徒がいて、先日某大学の社会企業学科に見事合格を果たしていました。象と人間社会の共生の問題を扱った単位もあるのですが、ある生徒はさらに勉強したいと、この冬休みにタイ東北部のゾウの村を訪ねるスタディーツアーに参加する生徒もいます。このように世界の様々な問題が、実は自分の問題なんだと気づく生徒がいる、ご飯を食べることの出来ない物乞いするこどもがいて、ああかわいそうに、ではなく、自分の豊かな生活の裏側にこのこどもの貧しい暮らしがあったんだということに生徒が気づく。このことが教師の目標だと考えています。

この様に、英語の持つ鏡と扉の2つの働きが、国際理解教育を大いに深める役割を担っていると実感しております。英語がこのような特別な働きをもっているからこそ、今日に至るまで英語は特別な発展の仕方を遂げてきました。そして、いまや、単に英語は **English** とよばれるのではなく、**World Englishes** とよばれる様になってきたのです。

4. World Englishes

私は **World Englishes** という考え方が、大好きです。**David Crystal** 博士によると、世界で英語を「母語」とする人は3億人、「公用語」とする人は10億人、さらに「外国語」「国際語」とする人は7億人で、英語の話し手は20億人以上。世界の約三人に一人は英語を使っています。

そうすると、英語を母語としない人々のいろいろな種類の英語が存在するわけです。現代英語の有様を三つの同心円に描いたのが、**Kachru**.

中心は英語を母語とする国の人々で、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリアなど。外側の輪には、英語を第二言語とする国の人々で、インド、シンガポール、スウェーデン、バングラデシュ。そして **expanding circle** すなわち拡大しつつある輪には、英語を国際コミュニケーションの言語として使用している国の人々が入ります。中国、フランス、ドイツ、そして日本。

こうなると、英語は **native speaker** の枠を超えています。アジアやアフリカの人達にとって英語は英米文化社会に同化する手段ではなく、自国の統合と発展を図り、世界に自己のアイデンティティを主張する道具となっていくわけです。そして、さらに世界の諸問題を共に解決する際の **communication** の道具となります。ですから、当然、現地の言語と文化の影響を受けた「多様な英語」となります。

ここで、英語を話す条件として、英米人の価値基準が強要されるとしたら、世界の人達は猛反対すると思います。

日本人は幕末の開国にあたっては英語をイギリスの言葉と理解したところがありました。第二次世界大戦後は、アメリカの言葉と考えるようになりました。そして、英語学習者は常にネイティブなみの英語能力の獲得を求められてきたし、欧米文化の規範を学習する事も要求されてきたのです。

日本の英語の教科書も少し前までは、戦後には、「**New Jack & Betty**」という教科書を用い、ジャックとベティという少年少女の明るく親し

げな生活ぶりを紹介する内容で、中学生はアメリカへのあこがれをかき立てられたといえます。15年から10年前でも、中学、高校の教科書に登場するのは、アメリカ人、ヨーロッパ人と限られており、スージーとトムがエッフェル塔の前にたって、ヨーロッパの文化を紹介したり、二人の会話の中で、「自分のお父さんは毎朝の朝食にパンケーキを焼いてくれる」など、家事をする父親が紹介されていました。

現在はどうでしょうか：中学校の Crown を紹介します。ご覧の様に(略)、インド人、中国人、そして3年生ではタンザニア人が登場しています。英語の使用者は、世界各国の人間であるという、前提で書かれています。

では、世界で話されている英語にはどのようなものがあるか見てみましょう。

World Englishes の一例として、
インド英語：

母語であるヒンディー語やタミル語の影響を受けた発音や抑揚で話す。文字どおりの発音なので、dark だるく Wednesday ウェドネスデイ picked ピックド。丁寧な言い方が目立ちます。Your kind information, kind presence とか、"Your good name, please" (お名前は?)

インド人風の英語を話すことは、自分は英語を話していてもイギリス人ではなくインド人であるというアイデンティティの表現だそうです。

マレーシア英語 (マングリッシュ)：

coffeeshop は、喫茶店ではなく食堂のことだそうです。マレーシアでは家族というと核家族ではなく、親族一同を意味するので、同年代のいとは大切です。Cousin brother / cousin sister と男女の区別をして呼び合います。マレー語の用法の転用で、電気をつけたりけしきを turn on/off ではなく open / close the light といいます。

シンガポール英語 (シングリッシュ)：

特徴は何と行っても文末の lah でしょう。日本語の終助詞ね、よ、さ、などにあたり、

非常に打ち解けた雰囲気をつくっています。Relax, lah (リラックスね)、Hurry up, lah (急いでよ)・can/cannot の使い方も面白いです。駐車場でバックできる時、Can, can, can と言って誘導。反覆現象で、everything is cheap-cheap. 日本語の「少々」と同じような用法でしょうか。

この他にも私達の生徒はニュージーランドのキウイ英語の特徴についても良く知っています。それは高校2年生の春に全員ニュージーランド語学研修に参加し、ホームステイで、今まで全く聞いたことのなかった種類の英語と格闘するからです。発音の違いに大いに興味を持ったある生徒はこの四月から大学で音声学を学ぶ予定です。

ニホン英語とは、どのようなもののでしょうか。

- ①発音：日本語は母音をはっきりと発音することから、母音添加 drink[dorinku]、th の発音が無いため、子音置換 think[shinku]
- ②おトイレをおかりできますか等と丁寧な言い方をする文化の影響を受けて、Can I use the bathroom?とは言わず、May I borrow your bath?
- ③断定を避けて、自分はこう思うという控えめに表現する日本人の一般性格から、情感表現基本名詞 want, think, feel などの使用が多くあります。

日本の文化の影響を受けたニホン英語を積極的に使おうという考え方があります。私達日本人は英語に関して少し、完璧主義なようです。

No I dont は0点。U. S. A を USA と書いて×。先生「教科書どおりに書きましょう」といわれ、それ以来英語の授業が嫌いになった、という生徒もいます。“Congratulations”は「苦勞を伴ったおめでとう」だから使っては失礼とか、あなたのお名前は？“What is your name?”も失礼だと言われるネイティブの先生もおられますが、こうなってくると、使う気がなくなってしまいます。That car is lemon. どういう意味でしょうか。フレッシュなレモンを想像すると、カッコいい車のことかと思ってしまいますが、実

は、見た目はいいが中は酸っぱいということで、おんぼろという意味で、難解すぎます。It's a piece of cake は、簡単なこと、朝飯前。でも私はケーキが大好きでどんな少量でもゆっくり味わって食べたいです。ですから “I can do it before breakfast” でも伝わるのではないのでしょうか。

欧米文化の中で作られてきた慣用表現を用いるよりも自分達の国の表現を使って英語で話してみてもはどうでしょうか。

次の記事をご覧ください。昨年度の関西学院大学商学部の入試問題です。アメリカ留学人気下降ということで、米国の活気あふれる競争の国、というイメージに尻込みし、ゆっくりリラックスして過ごしたいと、アジアやオーストラリアを希望する草食系の学生が増えている。外の世界に積極的に飛び出していこうとしない内向き志向の学生が増えているという記事を読みあなたの意見は？という問題です。

私の生徒達の意見はこうでした。:

私達は内向きではない。今や英語は native speaker と話すための英語ではなく、圧倒的多数の non-native speaker と話すための共通語であるから、アメリカだけでなくアジアやオセアニア等に留学し、アメリカ、イギリス英語から解き放たれて、同等の立場で、世界語としての英語を使って、勉強したい。

生徒がいった、「同等の立場で勉強したい」という言葉に胸打たれたのですが、さて、その私達日本人の英語は世界でどのような評価を受けているのでしょうか。

Larry Smith の Intelligibility (理解度:相手に伝わるわかりやすさ)の研究を見てみましょう。国際的伝達手段としての英語がアジア諸国の人々の間で、さらに彼らとアメリカ人との間で互いにどの程度理解し合えるかを探る実証的研究です。それによりますと、なんと、日本人の英語は75%という高い率で理解されていることがわかりました。一方アメリカ人の英語55%なのです。

ですから、私達はニホン英語にもっと自信を持ていいと思います。おそらく drink をドリンクと言っても世界の人々は理解をしてくれます。ですから英語の授業で大切なことは、相手に自分の考えを伝えようとする積極性と自信を育てることだと思います。

ニホン英語を提唱しておられる末延先生が Errorology という研究をしておられます。その実験と調査の結果、エラーをしてもいいというリラックスした状況で一番生徒の英語力が伸びるということがわかりました。

5. Bangladeshi English の紹介

さてその世界で使われている様々な英語の中でも、今日は特にバングラデシュの英語を紹介したいと思います。私はエイセフというバングラデシュの教育を支援する NGO に所属しておりまして、また将来どういうかたちになるかわかりませんが、バングラデシュの英語教育に関わっていききたいという夢を持っています。

①バングラデシュがどこにあるか、ご存知でしょうか。バングラデシュは日本より西に飛行機で8時間、(インドが見えてきました。)インドの右隣にあります。元々はインドだったのですが、西パキスタンと東パキスタンに分かれた時は、ウルドゥー語とベンガル語の両方を使用していました。しかし、だんだんと西パキスタンが東パキスタン(現バングラデシュ)にウルドゥー語の使用を押し付けてきたため、バングラデシュとして独立を果たしました。本日は首都ダッカでの英語の授業を紹介したいと思います。

②バングラデシュはなぜ貧しいのでしょうか。その原因の1つには、毎年おきる洪水があげられます。

元々海面下に位置し、季節外れのサイクロンやモンスーン、そして地球温暖化によりヒマラヤ山脈の氷山がとけて三つの川(ブラマプトラ河、ガンジス川、メグナ河)にながれだし、洪水となり、国土の半分以

上が流されるという大きな被害が続いています。

③1947年にヒンズー国インドよりパキスタンとして独立した時は、パキスタンの言語はウルドゥー語とベンガル語の両方であったのですが、しかし、西パキスタンによるウルドゥー語の押しつけが徐々に強まり、反発した東パキスタン（現バングラデシュ）はベンガル語運動を展開しました。

④教育制度は5-3-2-2-3制で、インドやパキスタンと非常に似ています。ほとんどはベンガル語を使用した教育ですが、10%の裕福な家庭のこどもは英語使用の学校に通います。さらに、何万というホームレスのこども達を救う為のイスラムの学校（まどらさ）がたてられています。

⑤血を流して勝ち取ったベンガル語を母国語とする独立でしたが、それにも関わらずイギリス植民地時代以来普及している英語が大きな役割を果たしています。バングラデシュの経済において、英語は非常に重要です。命の綱である国際援助の受け入れの為には英語能力は欠かせないものであり、英語はバングラデシュを飢えから救う大切な媒体と言えます。テレビにも英語放送があり、英字新聞もよくよまれています。ベンガル語の新聞でも、求人広告のページは英語で書かれています。

⑥英語の授業と教科書の紹介

ダッカのラルクティ小学校5年生の英語の授業です。ベンガル人は昔から演劇好きで、「なとつく」というお芝居があり、独立運動もこのお芝居を通して広がっていきました。英語の授業でもお芝居を良くやります。初めに聴診器の役割を説明し、病気になったら医者に行くことを教えます。医者は聴診器を使って身体の調子を調べることを知ります。この様に聴診器や時計をこども達に見せることによって、さらに算数や保健、衛生といった勉強に展開させます。

⑦新しい単語の勉強ですが、G はヤギの goat

の g であって、grape, gold の g ではありません。H も house, hat ではなく、小屋の hut の h として習います。日本のアルファベット表も、日本の生活に根ざした単語から学んだ方がいいのではないのでしょうか。

⑧英語の教科書は English for Today というもので、バングラデシュとイギリス政府が作っています。登場人物はみなベンガル人です。五年生の教科書では、このような会話があります。実は最近、ulcer になってしまい、病院にいつているんだと。Ulcer とは胃潰瘍です。普通小学生が胃潰瘍になることはまれだと思いますが、こうやって病名や、病院の存在を学んでいきます。

⑨これは自分の国の紹介です。とれる果物や川の名前を英語で学んでいきます。

⑩このお話は、入院しているおばあさんのお見舞いの帰りに、ひとりで夜道をおあるいていると、自分を追いかける物音がして、お化けだと思い家に飛び込んだら、実は自分の足にくっついてた木片が奇妙な音の原因だったという、何とも素朴なお話です。

⑪中学校の教科書（Book6-8）ですが、メインの内容はどのようにして健康を保つかということです。二人の少女が互いのおじいさんの年齢を比べ、一方は42歳で歩けなくなり、もう一方は64歳で健康である。そこで、64歳のおじいさんが、健康である4つの秘密を話すというストーリーです。

（適切な食べ物を食べ、安全な水を飲み、よく働きよく休む。そして病気を予防する）

⑫病気の種類や予防接種、ビタミン等についても英語で学びます。

⑬8年生では、畑を耕すことを学びます。その道具の名前（くわ、すき、くまで）について学びます。

⑭10年生では、ある農家が洪水の被害はまぬがれたが、厳しい寒さの冬が到来しました。そこで、蓄えることを学びます。そして、農夫としてのモラルとして、決して他の畑から盗んでは行けないこと、もし盗んだ場

合、正直であることが最も大切なことである、ということを学びます。

バングラデシュにも英語のコミュニケーション力をあげようと言う考えが広がっており、従来の教師中心、文法や訳読式の授業をやめて、もっと **communicative** なものに変えていこうとする動きがあります。それが **ELTIP** というプロジェクトで、それによって高学年では、内容もリサイクルや酸性雨、公害の問題等地球規模で自分達の暮らしを見直し、ペアワークやディスカッション等がどんどん取り入れられています。

このようにバングラデシュの英語教育の特徴は、昔から行われてきた演劇、詩の朗読等の文化に乗っ取っての教授法を用いています。

教科書は、登場人物はベンガル人、生活向上のため、**identity** を **create** するための英語教育をめざします。英語はまずアジアの人が使うという発想を伝えています。

二人の教育に関わる方にインタビューをして、英語がバングラデシュで果たす役割についてお話ししていただきました。**BDP** という **NGO** で教育の普及に貢献しておられるアルバート氏、英語教員のシュプラ先生です。お二人とも、英語はバングラデシュが貧困から抜け出す大きな鍵を握っているとその可能性をたたえ、英語の授業を通して、生活の向上に挑戦していることを話されました。しかしながら、現実には1つの小学校に100人のこどもがいるとしたら、卒業に至るのは20人に満たないこと。その原因は親の教育に対する無理解と教師不足。今、地域の女性達にトレーニングを受けてもらい、自立して、教師として働くチャンスを作っておられます。そのような血のにじむような努力をされているにもかかわらず、日本がユニクロの様な工場をたて、より良いお給料を提示するため、やっと教師となった女性がそちらに仕事を変わっていくという悲しい現実があると話しておられました。

5. まとめ

最後に私がなぜ英語の教員をやっているのか、というお話をして終わりにしたいと思います。アメリカで5年を過ごした後、私達のこどもはこの群馬県の中学校に転校しましたが、残念ながら日本の学校になじむことが出来ませんでした。子ども達を襲った **Identity Crisis**。上の娘は拒食症となり入院、毎日死にたいと泣き続ける日を過ごしました。下の息子もある日、電車から降りられなくなり、不登校となりました。**self-esteem** の喪失・当時私は自閉症の個別相談を担当し病院で働いていましたが、一体何が学校でおきているのだろう？と病院勤務から転職、現在の共愛学園にうつりました。中学生、高校生であった彼らを救ってくれたのは、英語が持つ **dynamism** と **diversity** でありました。当時、大きな地震と津波がスマトラ沖を襲いました。彼らは必死でインターネットで、海外のボランティアを探し、インドネシアやスマトラ、独立後まだ不安定な東ティモール、またベトナム、マレーシアのワークキャンプに参加していました。その旅をとおして自分の居場所を見つけ、そして英語で繋がる友達を得て、元気を取り戻した。

世界には英語で繋がる友達がいて、そこに自分の居場所があり、必要とされている。彼らは少しずつですが元気を取り戻し、そしてその背中を高校の英語の先生が支え、おしてくれました。

今年、上の娘はロシアで、ストリートチルドレンのお世話をしながら、ロシアの大学院を卒業しました。そして来年から下の息子がアジアの大学院で、姉と同じ国際政治経済、そして環境学を学ぶ予定です。

World Englishes、世界のあらゆるところで使われ、話されている英語は、その国の文化や価値観をおび、多様性を育みながら、どんどん変化し成長しています。それぞれの国の人が、胸を張って、その国の人らしく英語を話すことは何と美しいことでしょうか。私は、自分の生徒にもそのような人になってほしいと願ってい

ます。そして、世界中の人がそのような英語を用いて、互いに理解し合い、共に地球上の問題に取り組む、この姿こそ、英語教育にあたるものが目指す国際理解教育のゴールだと思います。

最後に昨年度に作った「世界がもし100人の

村だったら」のこども篇をご覧ください。昨年度は世界の人口は68億でしたが、今年10月についに70億になりました。授業ではこれを英語で見ますが、今日は日本語でご覧ください。長い時間ご清聴ありがとうございました。

研究発表Ⅱ

「国際理解への取り組み アジアとの出会い —私を変えたもの— 生徒の体験報告」

共愛学園中学高等学校 宗教主任

荒谷 出

新島学園中学校高等学校 宗教部長

小栗 仁志

共愛学園高等学校 国際交流部主任

村上 英之

新島学園中学校高等学校 教頭

小瀧 秀夫

共愛学園高等学校 英語科進学コース 1 年

新井 真莉愛

共愛学園高等学校 英語科進学コース 1 年

佐藤 葉子

共愛学園高等学校 英語科進学コース 1 年

清水 菜央

同志社大学政策学部 1 回生 (新島学園高校60期生)

山田 光瑠

I. 新島学園と共愛学園における国際理解教育 への取り組み—キリスト教主義学校における 国際理解教育の位置づけについて— (荒谷 出 共愛学園中学高等学校宗教主任)



キリスト教主義学校の歩み

一応、研究発表ということになっていますが、私の発表は、これからみなさんにご紹介する、新島学園と共愛学園における国際理解教育に具体的に触れた人々の報告を中心に行っていますの

で、それぞれのピースを一つの大きな国際理解という枠組みの中にとらえていただくためのつなぎの発題という意味で、手短かに行いたいと思います。また、他の先生方のように、パワーポイントを使つての準備ができていませんが、お許しください。

プロテスタントのキリスト教主義学校には、アメリカ、カナダをはじめとする諸外国のキリスト教教派による宣教師活動として、ミッションによって設立、支援された、いわゆるミッションスクールと、日本国内のキリスト者、教会によって設立されたキリスト教学校とが存在しています。

群馬県におきましては、新島学園も共愛学園も、地元のキリスト者によってはじめられていますので、そういう意味ではキリスト教学校という位置づけになります。

日本にあるキリスト教主義の学校の多くは、キリスト教学校教育同盟という組織に参加して

います。そしてこのキリスト教学校教育同盟は、昨年、創立100周年を迎えました。

カトリックの学校はまた別の組織で、キ同盟97法人に合わせてカトリック237法人、300以上のキリスト教主義学校があり、その多くは、戦前からの歴史をもっています。

創立の精神や目的は、関わった人や教派によって様々な建学の精神がうたわれています。そして、初期においてはキリスト教の伝道ということが、やはり大きな課題であったとも言えます。

明治、大正、昭和の時代を経て、多くのキリスト教主義学校は、近代社会の様々な変化に対応し、その時代の要請に応えるべく人材を育ててきました。太平洋戦争が終わるまでの日本の政治状況下にあっても、私学としてのキリスト教主義学校は、それぞれの建学の精神と、国や社会からの思想的圧力、要請との間に大きなチャレンジと葛藤を経験しながら過ごさなければなりませんでした。

戦後の反省も含めて、多くのキリスト教主義学校が課題としていることは、教育を通して、人を育てるということは、その時代の求める人材を養成することのみあるのではなく、いつの時代にあっても、その社会の一員として、人々が共に生き、共に支えあう社会の実現に貢献していける人材を育てることにあると思います。

昨年のキリスト教学校教育同盟の100周年の行事の中でも、現代社会における私学としてのキリスト教主義学校の使命、意義について多くの発題がありました。その基本には、憲法において保障されている信教の自由とその精神の上に成り立つそれぞれの学校の独自性を生かし、一人一人の個を大事に育てる教育を実現していくことでした。

ここであまり宗教的、キリスト教的言葉を使うことは適切でないと思うのですが、今回の国際理解教育ということに関しても、その出発点のところを説明できないと、なかなかお伝えできない部分がありますのでお許してください。

キリスト教教育の基本は、神によって創造され、そして私達に託された子ども達一人一人を、その一人一人の個性を大事にしながら、一人一人の自由な可能性に基づいて、人格形成をなしていくことを助けるということであると思います。

ですから、教育の出発点に、神に望まれる人間を育てるということがあって、それは時代や国家の枠組みを超えて、自由になされるものであると理解しています。

国の要請する人材を養成するのが優先ではなく、神の望まれる人格を育てるわけですから、おのずとそれは国家やある特定の社会、文化の枠組みを超えていくものとも言えます。

そのような出発点をもったキリスト教主義学校において、国際理解教育というものが、ある特定の時代の要請に応えてということではなく、最初から、それぞれの建学の精神の基本となる部分に位置付けられているといってもよいと思います。

多くのキリスト教主義学校で実践されている英語教育も、世界に通用し、国際社会で勝ち抜いていく力を養成するのではなく、世界を理解して、世界と共存していく心を育てることから始まっています。

そうした意味で、グローバル化する社会において、いま世界は、国境、文化、言語の壁をつきぬけて、どのように共存していけるのか、それを模索する時代でもあります。

キリスト教的な視点だけをここでお話ししても参考にならないかもしれませんが。しかしながら、今、私達の暮らす社会は、国内においても、様々な文化、伝統、信仰をもった人々が共存していますし、日本という国が、欧米だけでなくアジア、アフリカを含めたすべての国々との、これまでにない密接なつながりの中で、どのような新しい関係、共存のための関係を見出していけるのかを、新しい枠組みの中にとらえなおす必要にせまられていると思います。文化や言葉の違う人々のことを理解する教育、そしてそうした人々の間に、相互をリスペクトし、共存

する可能性を見出していく力を養うことは、キリスト教主義教育においてはその出発点にある視点でもありますし、同時に、現代社会が、今まさに必要としていることでもあると思うのです。

ここからは、一つの試みとして、新島学園と共愛学園が続けてきた試みのいくつかを具体的な体験談を通して、ご紹介したいと思います。それぞれの学校の国際理解教育へのご参考になれることを願っております。

.....

Ⅱ. アジア学院ワークキャンプの体験—これまでのワークキャンプの概要、成果について— (小栗仁志 新島学園中学校高等学校宗教部長)



今、ご紹介にあずかりました新島学園中学校高等学校で宗教主任をしております小栗仁志と申します。

荒谷先生の発表の中にもありましたが、宗教主任は同時に牧師なのですが、私は日本キリスト教団というプロテスタントの教会の牧師でもあります。

これよりアジア学院ワークキャンプの体験についてお話をさせていただきます。

まず最初に新島学園の紹介をさせていただきます。私が勤めております新島学園は、群馬県安中市に1947年に創立されたプロテスタントのキリスト教主義の中高一貫教育の学校です。同志社の創立者である新島襄の弟子が安中にいたわけですが、その孫が新島襄の教育理念に基づ

いた教育を、新島襄ゆかりの地である安中で行いたいという願いからできた学校です。新島襄は安中藩の武士でした。

新島学園も、いろいろな形で国際理解、国際交流のプログラムを行っております。カナダ、オーストラリア、アメリカのボストン（新島襄の留学先）への2週間から4週間にわたる短期留学をはじめとして、いろいろな形で国際交流のプログラムを持っているのですが、その中で、特に個性的なプログラムである「アジア学院ワークキャンプ」について報告をさせていただきます。

1. アジア学院とは

アジア学院は、大津先生からお話がありましたので、詳しく追加で説明する必要はないと思いますが、アジア、アフリカのいろいろな国々から次世代の農村指導者、草の根の農村指導者を日本に招き、有機農法とコミュニティ形成理論を教える農業の学校です。日本に人を招いて、その人を育てて、自分の国、地元に戻って、そこで学んだことを用いて働いてもらう。それを通じて国際協力をしていこうという、キリスト教主義の団体、学校です。栃木県的那須塩原市にあります。1973年に誕生したのですが、日本で最も古い国際 NGO の一つであると言われて

います。

アジア学院のモットーは、先ほどお話がありました「共に生きるために (that we may live together)」です。

キリスト教は、隣人愛を重視する宗教ですが、この世界において勝ち負けを競う、生き残りのために戦っていくということではなくて、いかに人々がこの世界において共存することができるのか。共に生きることができるのか。アジア学院は農業を通してその道を模索しているところだと思います。

具体的には、有機農法を中心とした持続可能な農業を教えています。アジア、アフリカの国では、農薬や化学肥料、また種を買うのが難しいところが多いわけです。有機農法というと、

どうしても健康にいいというイメージでとらえられがちですが、そうしたことだけではなくて、そのようないろいろな国の環境であっても、十分に持続をしていける。繰り返し繰り返し農業を行っていくことができるような有機農法のあり方を重んじて教えているのです。

それに加えて、農村社会のコミュニティを形成していくリーダーとしてのリーダーシップ・トレーニングを1年間かけて行っています。先ほど大津先生の話にもありましたが、リーダーシップというものを人を支配する方法ということではなくて、人に仕えていく。キリスト教ではよく「仕える」ということを言うのですが、ほかの人にどのような形で仕えていくのかということを、リーダーの資質として教えています。

アジア学院では、校長先生の仕事の一つがトイレ掃除です。カースト意識の強い、インドのような国から来た研修生は、校長がトイレを掃除している姿を見て非常に驚くわけです。〈こういうことがあるのか!〉ということで驚く。そういう意味では、キリスト教のリーダーシップというのは仕えていく。人がしながらない仕事を率先してやっていく中で、そういうリーダーとしての訓練がされていくということです。

アジア学院は世界に広がるネットワークを持っています。現在まで52カ国から1,000名を超える研修生（アジア学院では学生を研修生と呼んでいます）を迎えて、卒業させて、また国に送り出しています。

国際交流の視点からいいますと、日本にいながら世界中のいろいろな国の人々と出会うことができる場所です。群馬県から、北関東自動車道が開通した関係で、2時間から3時間でそこに行くことができますが、そういう身近にいろいろな人が集まる場があることは、国際交流、国際理解の視点からいっても、有意義です。

2. ワークキャンプ開始の経緯

「ワークキャンプ」という言葉ですが、辞書で調べると、「自ら労働を体験しながら、現地の人々と交流する国際交流やボランティアの

形態のこと」です。要するに、今、私達が行っているアジア学院のワークキャンプは、2泊3日の予定で行っていますが、集まったメンバーが寝食を共にしながら、また一緒に働きながら学んだり、労働奉仕をするプログラムです。

2. ワークキャンプ開始の経緯

ワークキャンプとは・・・？

「自ら労働を体験しながら現地の人々と交流する国際交流やボランティアの形態」

アジア学院は創立当初からワークキャンプを広く受け入れてきている

アジア学院は、創立当初から幅広く日本中の若者を、ワークキャンパー（ワークキャンプに参加する人をワークキャンパーと言います）として受け入れてくださっています。有機農法をしますと、雑草がたくさん生えます。除草の仕事は非常に大変で、手間がかかる仕事ですが、多くのワークキャンパーが除草の仕事を手伝いながら、みんなで一緒にアジア学院の働きに参加し、アジア学院さんはそれを受け入れ続けてくださっています。

2. ワークキャンプ開始の経緯

きっかけは・・・

“学生キリスト教友愛会(SCF)”での経験から

学生キリスト教友愛会(Student Christian Fellowship)

日本キリスト教団の持つ学生青年センター

SCFでは、毎年春と夏にアジア学院にてワークキャンプを実施

荒谷先生(共愛)と小栗はSCFの主宰であった

→ SCFの経験から 是非、共愛と新島でもと
2007年の夏より開始(年一回)

ワークキャンプを共愛学園さんと共同で行うようになったきっかけですが、学生キリスト教友愛会の経験が大きいです。学生キリスト教友愛会、英語で Student Christian Fellowship、略称で SCF と申しますが、私が所属します日本キリスト教団の学生青年センターです。若い人向

けのいろいろなプログラムを行います。その SCF の活動で、毎年、春と夏にアジア学院でワークキャンプを実施しています。共愛学園の宗教主任の荒谷先生と私は、共に SCF のディレクターとして働いた経験があります。アジア学院の経験が非常に良かったことを覚えておりましたので、たまたま共愛と新島の宗教主任として働くことになったのですが、ぜひ共同でやろうということで、2007年の夏よりこのプログラムを行うようになりました。

3. ワークキャンプの開催

3. ワークキャンプの開催

毎年8月、2泊3日の日程で実施(希望者)
共愛学園高校、新島学園高校 合同にて

実施状況

年度	日程	新島			共愛			生徒数(希望者)	教員数
		H1	H2	H3	H1	H2	H3		
2007年	8/25-28	4			2	2	1	9	2
2008年	8/22-24	6	4	2			5	17	3
2009年	8/24-26	4	6	7	2	5	2	26	4
2010年	8/29-31			8	3	6	7	24	7

今までの開催の実績ですが、2007年から4回行わせていただきました。最初のときは9名です。教員2人、参加生徒9名ということで細々と開始をしたのですが、2010年には24名集まることができました。大体20人規模で行われるようなプログラムに成長をしております。

毎年8月に2泊3日の日程で行います。アジア学院には隣接する那須セミナーハウスという、ワークキャンパーを宿泊させる施設があるのですが、そこに寝泊まりしながら共同で行います。

4. プログラム

実際のプログラムの様子を写真をまじえながらご紹介させていただきます。

まず、2泊3日の日程ですが、一番最初のプログラムは、キャンパスツアーです。アジア学院のスタッフの方に、アジア学院の概要説明を受けながら、キャンパスを見て回ります。そこからこのワークキャンプはスタートします。



アジア学院では、朝と夕方には定例の農作業があります。これは休みなく毎日行われます。アジア学院の研修生やスタッフと共に、毎日農作業を行います。お互いに第一言語ではない英語（英語を母語として育ってきた人は意外とアジア学院には少なく、みんな第二言語として習得している人がほとんどです）、片言の英語を使ってコミュニケーションをとりながら、共に作業に汗を流していきます。



今映っているのは、ちょうど野菜の作業をしているところです。収穫した葉っぱをより分けています。



これも収穫のシーンです。手前にいるのが生徒で、奥が研修生です。野菜の収穫の場面です。

これが家畜の世話です。豚の世話をしているところです。

画像省略

豚舎の掃除をしています。糞尿をスコップですくって、豚舎の中から外に出して、掃除をしています。糞尿は生ごみなどとともにコンポストに移して、堆肥にされ、アジア学院の農業の肥料として使われます。

画像省略

例年、アジア学院のワークキャンプの参加者は、女性のほうが多いのです。写真に写っているのも、女の子の参加者です。糞尿の掃除は、臭いもきついですし、女の子にとって抵抗がある作業かなと思い、第1回目のときは心配したのですが、結構喜んで、みんな抵抗なく、よく頑張ってくれています。

これも豚のワークのシーンの続きです。

年によっては、生まれてすぐのかわいい子豚に会える年もあります。この豚は、基本的には食肉用の豚です。食肉用の豚として飼育をされています。

アジア学院のスタッフの方に聞くと、豚には名前をつけないそうです。なぜかという、名前をつけてしまうと愛着が生じてしまうので、食肉にするのがつらくなるらしくて、名前をつけずに飼育をしているということです。



これが鳥小屋、鶏のワークです。アジア学院の卵は全部有精卵ですが、有精卵をとるために飼育をしています。鶏の鳥小屋の様子です。



これは鳥小屋の中に、うちの生徒が入っていくシーンです。



頑張ってえさをあげています。バーッと一瞬、

鶏が寄ってくるので、生徒がびびっていたりすることもあるのですが、頑張ってやってくれています。



これは、その日の朝に、鶏が産んだ卵を集めているところです。産みたてなので、握るとすごく温かいのです。そういうところに命のぬくもりを生徒達は感じてくれます。



このシーンは、集めた卵を大きさごとに分けて、磨いているシーンです。アジア学院のスタッフ、研修生の方々と一緒に作業をします。この卵は外部にも売りますので、きれいにして、Mとか S とか、サイズごとに分けます。その作業を卵をとった後にみんなでやっている場面です。

このときは、アジア学院の人達としゃべりながら作業をする、とてもいい時間です。作業をしながらだと、不思議と会話が弾みます。実際にやっていると、これはどうしたらいいのか、これは M なのか S なのか、この汚れ方では製品にしていのかどうかということで、悩んだりする場面が出てきます。そういうときは声を

かけて聞かないと話が進まないなので、無理にでも英語で生徒達は（英語が苦手な生徒もいるのですが）、何とか頑張って話しかけて、そこからいろいろなコミュニケーションが生まれていきます。一緒に仕事をするのはすごくいい体験です。

画像省略

お互いに英語が第一言語ではないので、結構下手だったりするのですが、一緒に労働をする中で、研修生やスタッフの方々、また参加する生徒同士の中でも心の交流が生まれてくるのではないかと思います。

これは鶏糞からつくった肥料を袋詰めをしているところです。研修生やスタッフの人と話をしながら、作業をしています。私も一緒です。

画像省略

この写真は、ちょっとくもっています。なぜかといいますと、この肥料が熱を発していて、かなり暑いのです。ビニールハウスの中で作業していることも原因なのですが、非常に暑くて、水蒸気がたって、写真が湯気でぼやけています。土は生きているのだと思いました。

写真にはあまり写っていなかったのですが、

この作業をリードしてくださったのは、アフリカのガーナから来られたティモシーさんという方です。ティモシーさんは2000年度の卒業生の方で、ガーナにクマシという町があるそうですが、その町でバプテスト教会の牧師をされています。

私が、ガーナの方と話したのは、アジア学院が最初でした。ガーナの方と出会い、一緒に働き、話をする機会というのは、日本の中ではそうたくさんないのではないのでしょうか。生徒にとっても非常に貴重な経験であったと思っています。ティモシーさんはこのとき、アジア学院のスタッフとして奉仕をしておられました。

働くだけではなくて、ワークキャンプの1日目の夜には、研修生やスタッフの方をお招きして、いろいろな話を聞く時間を設けています。働くだけではなくて、学びも行います。

このシーンは、那須セミナーハウスという宿泊所で、ティモシーさんのお話を聞いている場面です。



これは別の年の講演の写真です。このときは、ミャンマーから来られたミャーさんという方のお話を聞いている。中央の女性がミャーさんです。ミャーさんは1998年の卒業生で、研究科生として再来日されていたようです。このときは、ミャーさんの活動について聞きました。ミャンマーでは貧しさ故に、女の子が人身売買で売られ、売春を強要されるということがあった。ミャーさんはそうした女性を救出し、助け出した後、売春に頼らずに生きていけるように職業訓練をします。そのお話を聞いて、生徒達は自

分達の日常からはなかなか想像ができない世界があるのだなということを知っていきます。今の日本の日常、ある意味で売春を強制されないような日本の状況のありがたさも感じることができます。

画像省略

アジア学院で経験する出会いは、外国の方と出会うということだけではなくて、自分自身や自分の住む世界との新しい出会いでもあると思っています。

アジア学院は、アジア、アフリカの人々と出会う国際理解、国際交流の場だけではなくて、農業、貧富の差、食べるということ、そういうことについて考えを深めてくれる場でもあります。国際交流とはちょっと文脈が違うのかもしれませんが、食について考えさせられた出来事を紹介させていただきます。

画像省略

アジア学院は、先ほど大津先生の話にもありましたが、近くの学校の学校給食の残飯をもらって、それを動物の飼料としています。青い樽の中に詰まっているのが、学校給食の残りの御飯です。これを樽に詰めて乳酸発酵させて、動

物の飼料として、豚に食べさせます。

研修生の中には、非常に貧しい村から来た方もおられるのですが、この光景を見て、自分達の村で食べているものよりも、贅沢な食べ物が日本では捨てられて、豚が食べている。その現実には強いショックを受けたことがあると聞きました。

これはちょっとショックの大きい映像ですが、鶏の屠殺体験をしているところです。最初の2回、鶏の屠殺体験というのをプログラムの中に入れました。鶏を殺して、食肉としてさばいて、実際に夕食で調理して、いただきました。



鶏が殺される場面、これは生徒が実際に首を切って、絞めているシーンですが、強いショックを受けていました。しかし同時に、私達が食べるということは、ほかの命をいただいて生きていることだということを強く感じてくれました。

アジア学院のプログラムでは、最後のときに感想文をそれぞれ参加者に書いてもらうのですが、「いただきます」という言葉の本当の意味がよくわかりましたと感想を書いてくれる子がいます。食べるということがどういうことなのかを学ぶ場でもあります。

これも、屠殺のときの写真です。

鶏の鳥小屋に入りますと、生徒達は鶏が迫ってくるのにびっくりして、キャアキャア騒ぎます。一方で、例えばケンタッキーフライドチキンに行ったら、「おいしそうだ」と言って食べるわけです。生きている鶏にはキャアキャア言って、食べるときには平然と食べる。そこにギャップがあります。

ギャップがあります。

画像省略

一体そのギャップは、どういう形で生じてくるのかとを常々考えていました。実際に私自身も鶏の屠殺の作業に参加してみて、生きていた鶏が食べ物に、私達の心の中で変わる瞬間というのがありました。それがこの瞬間です。羽をむしり取って、食肉の形にしたときに、〈おいしそうだな〉と思うわけです。さっきまで命があって、〈悲しいな。命を食べて生きるというのはこういうことだな〉と思っていた私が、その同じ心で〈おいしそうだな〉と感じるようになるのです。これは実際にやってみないとわからないことだと思いますが、生徒達も同じ経験をしてくれました。

これは絞めた鶏の中で、できかけていた卵です。これが成長して卵になるはずだったものです。私達は他の命をいただいて生きているのだなと感じるシーンです。

5. 私たちが得たもの

5. 私たちが得たもの

- 出会い
アジア・アフリカの方々との交流
共に働く中で
- 考える
貧富の差、社会の矛盾
英語・コミュニケーションの大切さ
食の大切さ「いただきます」
- 変えられる
感謝の気持ち「何気ない日常への感謝」
隣人愛 → 「共に生きる」
「国際交流」から「国際理解」へ

アジア学院でワークキャンプをすることで、私達が得たものはたくさんあります。それを以

下の三つにまとめてみたいと思います。また後ほど、この時間の終わりのほうに、このキャンプに参加してもらい、またアジア学院が高校生対象に行っているフィリピン訪問ツアー、その二つのプログラムに参加してくれた新島学園の卒業生の山田さんに、またそのときの具体的な感想を語ってもらいます。参加者の感想も聞いていただきたいと思います。

第1は、「出会い」です。アジア、アフリカのいろいろな国の人々と、日本にしながら出会い、そして語り合うことができる。群馬県から3時間ほどの移動で、そうした場所に行けることは非常にありがたいことだと思います。

また、共に農作業をし、汗を流す中で、より打ち解けられるというのでしょうか、よりコミュニケーションがしやすい状況ができるのかなと思います。何か同じことをやろうとしている中で、心の壁とか、言葉の壁を乗り越えることがあるのではないかと思います。お互いに英語が第一言語ではない、非常にたどたどしい英語だったりすることもあるのですが、農作業や食事、共通のことにかかわる中で、自然とコミュニケーションが発生していく、そういう豊かさを持っていると思います。

第2は、出会った後、「考える」であります。アジア、アフリカの方々と出会うことで、自分達が今まで感じてこなかった世界があることを生徒達は知りました。自分達の生活を別の視点から見直すことができるのだと思います。例えば、世界の貧富の差、その不公平さです。食べ物が捨てられる場所もあれば、食べ物が食べられずに苦しんでいる世界もある。そういう状況を、実際に人の話を通じて知ることができます。私達が暮らす世界をも見直していくことになるわけです。「内なる出会い」と私は呼んでいますが、私達自身の世界の再発見をしていくのです。

実際に研修生やスタッフの方々とコミュニケーションをとる中で、英語やコミュニケーションの力の大切さを感じていきます。これはほかの国際交流のプログラムでも共通すると思いま

すが、やはり英語とか、コミュニケーションをとることは大事だということを感じてくれます。

また、国際交流とは別の話になりますが、食べることについても考えを深める体験を生徒はしました。日本の大量の残飯、そして鶏の屠殺を通して知る、命をいただいている現実など、生徒達の感想文を読むと、特に印象に残ることであったようです。

3番目に、出会い、考え、「気づく」というふうに言い直してもいいかもしれませんが、出会って、考えて、3番目には「変えられる」、です。

アジア学院で、アジア、アフリカの人々と出会い、また食や農業、貧富の差といった現実と出会うことで、生徒達は考え、そして変えられていきます。

まず自分達が食べていける日常、それが当たり前のものではない、ありがたいものなのだ。日常の何気ないことへの感謝を、生徒達は持ってくれるようになります。感想文の中にも「ありがたいと思った」という言葉がたくさん出てきます。何かというと今の生徒は、「先生は私に何してくれるのか」「先生は何を教えてくれるのか」「先生は、私のいいところのどこを引き出してくれるのか」と、口を開けて「何をしてくれるのか」とに待っている生徒が多いと思うのですが、そういう生徒達にとって、感謝することを覚えていくのはとても大切な成長だと思います。アジア、アフリカの方々と共に働き、共に食べる。そして、考えていく中で、自分達を違った角度から見られるようになるのです。

キリスト教は、隣人愛を重んじる宗教ですが、世界の貧富の差の一端をアジア学院で気づかされる中で、隣人と競い合って、蹴落とし合う関係ではなくて、共に生きる関係ですね。先ほどから繰り返し出てきますが、共存する、共に生きる関係を考えてくれるようになります。自分が生き残るための知恵ではなくて、共に生きる、共存するための知恵とは何かということを考え始めてくれるようになっていきます。

また、参加した生徒の中には、アジア学院ワークキャンプで体験した出来事が大きなきっかけとなって、国際協力を本格的に学ぶために進学先を決定した、また変えたという生徒も出てきました。国際理解、国際交流という交流にとどまらずに、それを超えて、国際協力です。我々がお互いに助け合っていくには、どういうことが必要なのかということまで考えていった生徒が、実際に出てきました。

アジア学院に限らず、国際交流の営み自体が、出会い、考え、変えられる出来事であると思うのですが、アジア学院ではアメリカやヨーロッパの学校との交流では得られない、アジア、アフリカからの視点が与えられると考えています。貧富の差や、そこから生じる人権にかかわる問題、食や農業のあり方に気づいて、考えることを通して、共に生きること。その具体的な実現策としての国際協力にまで思いを至らしてくれるようになるのです。

まだ実施回数も少なく、延べの参加人数も少ない中ですから、効果とか成果を統計的な数字で立証することはほぼできないと思いますが、参加者一人一人との対話や、その後の参加者の生き方とか進路、言動を見ていますと、こうした変化はあると言い切っているのではないかと思います。

群馬から数時間でこうした貴重な体験をする場所に行けるということは、非常に恵まれています。国際理解教育は、いろいろな試みがなされていくだろうと思います。こういうワークキャンプがすべてではないと思いますが、こうしたアジア、アフリカに力点を置いたプログラムも、有意義でしょう。まだ新島学園も始めて間もないことなのですが、アジアとの交流なども念頭に置きつつ、いろいろプログラムを展開していきたいと思っています。

.....

Ⅲ. 共愛学園の取り組みについて(活動の歴史、内容の紹介)

(村上英之 共愛学園高等学校国際交流部主任)



共愛学園の留学・短期研修

まずはじめに、本校の国際交流の歴史について簡単に説明させていただきます。

本校は1888年、前橋英和女学校として創立され、今年で123年を迎えました。創立当初から外国人宣教師を積極的に招聘し、キリスト教伝道や質の高い英語教育を通して国際理解教育に力を注ぎました(右側の写真は最初の宣教師であるメアリー先生です)。

歴 史

- 1888年(明治21年) 前橋英和女学校創立
最初の宣教師を迎える
- 1928年(昭和3年) 台湾、朝鮮から留学生
を受入れる
- 1968年(昭和43年) 留学生の受入れを開始
- 1974年(昭和49年) 留学生の派遣を開始
- 1978年(昭和53年) 海外短期研修を開始
- 1995年(平成7年) 海外の学校と姉妹校提携を結ぶ



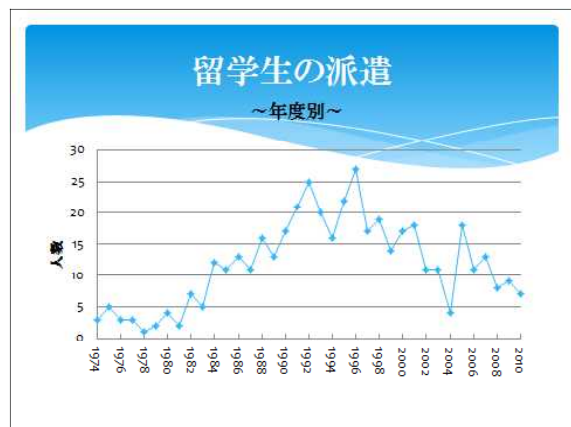
Mary Shed
宣教師

1928年、当時の校長先生の方針で台湾、朝鮮から学校として初めて留学生を受け入れました。この受入れは1947年まで続き、この間に(約20年間ですが)30名ほどの留学生を受け入れたという記録が残っております。そして、1968年、一人のアメリカ人留学生の受入れをきっかけに学校として本格的に留学生の受け入れに取り組み始め、その後1974年に初めて本校から留学生を送り出しました。

その後、グローバル化が進み、留学がますます身近になるにつれ海外に行く生徒、また日本

にやってくる外国人留学生の数が急激に増加していく中で、学校における国際交流の活動もますます重要な位置を占めるようになっていきました。78年には夏休みを利用して海外研修を実施し、95年にはニュージーランドの高校、(そして、スライドには載っていませんが) 2000年にアメリカの4つの高校、さらに2004年にはイングランドにある学校と合計6つの姉妹校提携も結んでおり、現在も交流が続いています。

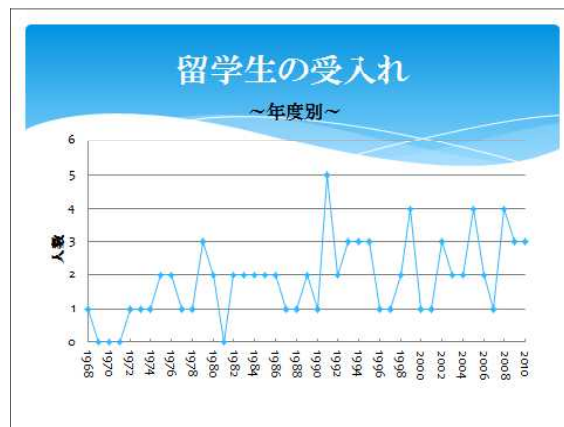
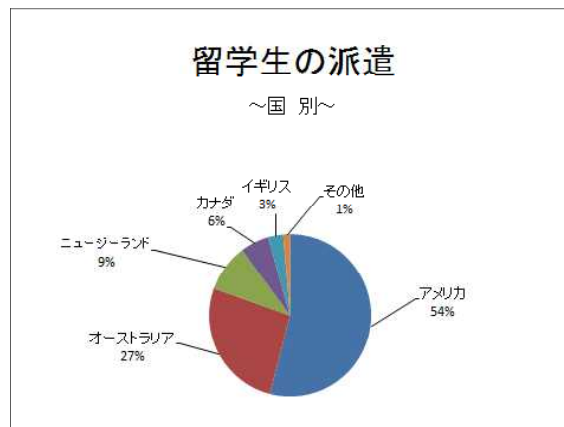
先ほど申し上げましたように、本校は1974年より留学生の派遣を実施しており、昨年度までで436名の留学生を派遣してきました。なお、ここで言う留学生とは1年間(実質的には約10ヶ月間になります)海外でホームステイをしながら現地の学校に通った者を指します。



こちらは(↑)年度別で見た留学派遣者数になります。御覧になると分かるように、80年代半ばから90年代にかけて留学生の数が多くなっています。この背景には、国際化社会の進展に伴い、留学が一般化、大衆化していったこと、また当時の日本の経済状況が今よりも良好で、金銭的に余裕がある家庭が比較的多かったのではないかと思います。

こちら(↓)は国別で見たグラフになります。御覧のようにアメリカが全体の半数以上を占めているのが分かります。派遣の実施を始めた当初は、派遣先はアメリカがほとんどでしたが、ここ20年の間で、比較的物価が安いということや治安の良さなどの点からオーストラリアやニュージーランドなどオセアニア方面に留学する生徒も増え、近年その割合はアメリカへ留学す

る生徒よりも高くなっています。また最近ではハンガリーやドイツ、イングランドなどヨーロッパ方面へ留学する生徒も現れ、留学先は多方面へ広がっておりまして、留学先のグローバル化が進んでいることが感じられます。

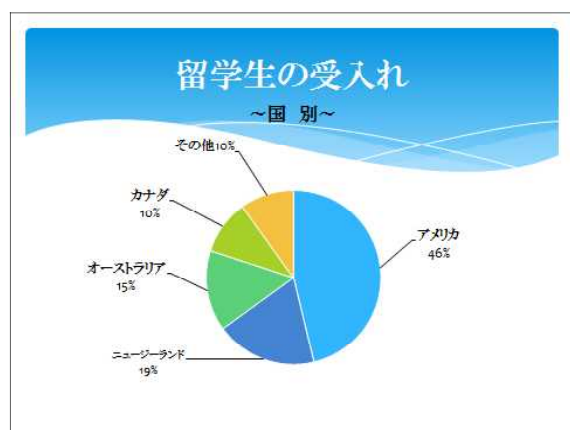


今度は逆に海外からの留学生の受入れについて見てみたいと思います(↑)。本校は、1968年から現在まで81名の留学生を受け入れてきました。1991年度の受入れが5名ということで過去に最も受入れが多かった年であることが分かります。平均すると年間約2名の受け入れをしていることになります。

国別で見ますと(↓)、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、カナダの4か国で90%を占めています。しかし、最近の受入れの特徴としてスウェーデン、チリ、メキシコ、デンマーク、ベトナムなど英語圏以外の国からも留学生を受け入れており、今年アルゼンチンから男子生徒1名を受け入れていました。受け入れに関しても様々な国から受け入れるようになっており、グローバル化が進んでいるように思い

ます。

留学生の学校生活ですが、本校では留学生ということで特別扱いをすることはありません。しかし履修する科目については本人の日本語能力や選択科目の希望に配慮して一部特別カリキュラムに組み替える場合があります。特に、日本の文化を学ばせる機会を多くするため彼らには必ず書道のクラスを取らせることにしています。またネイティブの先生方の英語の授業ではアシスタントとして活躍してもらうこともあり、彼らにとって有意義な時間となるよう授業への参加はなるべく柔軟に対応できるようにしています。



短期海外研修

全生徒参加型

- ・台湾
- ・イングランド
- ・ニュージーランド
- ・アメリカ(中学生対象)

希望者参加型

- ・アメリカ(カンザス、カリフォルニア)
- ・カナダ
- ・フィリピン
- ・バングラディシュ
- ・オーストラリア(中学生対象)

続いて、本校の短期海外研修について簡単にご説明したいと思います。現在本校では中高合わせて9つの海外研修を実施しております。左側は生徒全員が参加する研修になっており、右側は春休みや夏休みなど長期休暇を利用して、希望者を募って実施している研修です。今回は高校生を対象としたアメリカ カンザス研修とカリフォルニア研修についてご説明したいと思います。

います。

本校では毎年春休みを利用してアメリカカンザス州で2週間のホームステイ研修を実施しています。今、御覧になっている写真はカンザス州の州都であるカンザスシティの郊外にあるオレイサという町にある公立高校の写真になります。

春季アメリカ研修(カンザス)



オレイサ南高校



オレイサ東高校

オレイサにはこの南高校と東高校のほかに北高校と北西高校の4つの高校があり、本校はこれら4つの高校と2000年から姉妹校交流をしています。向こうの学校からも2年に1度本校を訪問しており、お互い有意義な交流をしています。

研修の内容ですが、生徒達は基本的に自分がホームステイをしている家庭の子どもが通っている学校に行き、そこで授業を見学したり、また実際に参加したりします。先ほど申し上げたオレイサの4つの高校には選択科目として日本語のクラスがあり、右上と下の写真はちょうど日本語のクラスで本校の生徒達が現地の高校生に日本語を教えているところです。

画像省略

こちらの写真は生徒達が数人のグループに分かれてそれぞれのクラスや部活見学をしているところです。

画像省略

この研修の特徴は現地の高校生と直接ふれあい、その生徒達と一緒に授業を体験できる点にあります。こちらで春休みにあたる期間は向こうでは普通に授業をやっている期間になっているので、実際に普段やっている授業に入り、彼らがどういう学校生活を送っているのか、なまで見ることができます。まさに、その学校に留学しているような経験ができることがこの研修の大きな魅力になっています。したがってこのような交流を通して、国境を超えた友情を育む絶好の機会にもなっており、帰国後もお互いメールなどを通じて、個人的に交流していることもめずらしくありません。

さて、来年春に新しく実施するもう一つのアメリカ研修について説明させていただきます。

春季アメリカ研修(カリフォルニア)

- ・サンノゼにある日系人教会への訪問
- ・サンフランシスコにある教会奉仕活動を体験
- ・UCB、スタンフォード大学見学
- ・グーグル、アップルなどの企業見学

この研修はキリスト教主義の学校である本校が現地にある教会との交流を通して、様々な角度からアメリカを見てみようということで、教

会関係者の協力を得て本校が独自に企画した研修になっています。英語学習を中心とする研修とはまた違った、フィールドトリップ（社会科見学）的なプログラムになっているのがこの研修の特徴です。また、研修地がサンフランシスコ近郊ということで、御覧のように教会訪問のほかにシリコンバレーにある企業や全米でトップクラスに入る大学の見学も予定しています。

まず、研修ではこちらの左上の写真になりますが、サンフランシスコから南へ車で1時間ほどいったサンノゼという町にある「ウェスレー合同メソジスト教会」という日系人の教会を訪問します。日系教会といっても今は4世、5世といった世代に入っていて、しかもその方々は様々な人種の方と結婚をしている場合が多いので、純粋な日系人といわれる人はほとんどいないようです。したがって日系人教会を考える場合はアジア系教会、しかしそこには日本の文化、伝統を大切にする教会というとらえ方をした方が正確かもしれません。



話が横にそれましたが、生徒達はここで約1週間、それぞれ教会員のお宅にホームステイをします。滞在中は教会の行事に参加したり、日系人博物館（右下の写真、教会の向かい側）を訪問したりして、ここで日系人の歴史や文化を学ぶ予定です。

左下の写真はノーマンミネタさんという日系2世の方の写真です。ミネタさんはこのウェスレー教会のメンバーで、ブッシュ政権の時に運輸長官を務めた政治家でもあります。第二次世界大戦の時に日系人の人々が差別を受け、強制

収容所に入れられた、苦しい経験が彼の政治活動の原動力になっており、アメリカに住む日系人の地位向上に長年取り組んできた方です。研修ではミネタさんに面会できるよう今スケジュールを調整しているところですが実現できるかどうか今の段階ではまだ分かりません。

私達はアメリカに住む日系人の歴史をあまり知りません。この研修では教会に集っている日系人の人達との交流を通し、戦争中の日系人に対する差別について学んだり、初めて太平洋を越えてアメリカの地にやってきたいわゆる一世と呼ばれる人達が異国の地でどのような生活をしてきたのか、また現在ではその子孫である4世、5世と呼ばれる若者達が日系人としてどんなアイデンティティをもってアメリカで過ごし、また彼らのルーツである日本という国をどのように見ているのか、彼らとの交流を通して学んできたいと考えています。

さて、研修の後半私達はサンフランシスコに場所を移し、グライドメモリアル教会というもう一つの教会を訪れる予定です（左側の写真になります）。この教会は貧しい人々に対しての教育、学童保育、カウンセリング、職業訓練さらに麻薬・アルコール中毒回復プログラムなど様々な活動が無償で提供している教会で、市内でいま最も活動的な教会の1つです。またこの教会では食事の配給も行われており、その数は1日3000食にのぼると言われています。



キリスト教学校の特徴の一つにイエスキリストを土台とした奉仕教育がありますが、私達はこの教会で食糧配給の奉仕活動をさせていただ

く予定でいます。実際の奉仕活動を通して、活動の理念である「共生、共に生きる」という体験を生徒達に感じてほしいと願っています。また、こういった教会の助けを必要としている人々との姿を通して今アメリカだけではなく世界各地で問題になっている格差社会について考える機会も持ちたいと考えています。

右側の写真は全米でも指折りの大学であるカリフォルニア大学バークレー校とスタンフォード大学の写真です。リベラル色が強い、庶民派州立大学であるカリフォルニア大学 UCB と、それとは対照的な高級感が漂う、エリート名門私立大学であるスタンフォード。両者全くカラーが違う2つの大学を見学するのもなかなか面白いものがあるなと思ひまして研修のプログラムに入れてみました。サンフランシスコにはこの他にも多くの優秀な大学が点在していますが、本校の生徒達がぜひこういった大学で学んで、将来国際社会で活躍できる人材に育ってほしいと願っています。

このほか、写真はありませんが、ちょうどシリコンバレーにも近いということでグーグル、アップルなど世界の IT 産業のトップをいく企業の見学も計画しています。実は今回の研修では女子生徒のみならず、男子生徒にも積極的に参加してもらいたいと考えています。というのも本校だけではなく、一般的な傾向として海外研修や留学に興味があるのは、男子よりも女子の方が圧倒的に多いです。本校では男子生徒、特に理系の男子生徒にもっと海外に興味を持ってもらうために IT 関連の企業訪問もプログラムに入れました。

最後に、先ほど話をさせていただいたノーマンミネタさんの言葉を紹介して発表を終えたいと思います。ミネタさんは今からちょうど10年前に起きたアメリカ同時多発テロ事件の後、多くの罪のないイスラム系アメリカ人が差別されるのを見ました。アメリカ政府や社会全体がイスラムに対して偏見を持っていく中で、当時その政府の中枢にいた彼はそんな中でも冷静公平に、正義をもって自分の職務を全うしました。

テロリストを擁護しているのではないかと政府関係者やマスコミから非難されることも多々あったようです。彼がそこまでして貫いた正義とは一体なんだったのでしょうか。それはイスラム系アメリカ人の人達がちょうど自分達日系アメリカ人達が第2次世界大戦の時に受けた差別を二度と繰り返してはならないという強い信念があったからではないでしょうか。

この言葉はそのミネタさんが NHK のある番組で出演した時に語った言葉です。日系アメリカ人、そしてイスラム系アメリカ人について無知というと多少語弊がありますが、彼らのことについて何も知らないということが恐怖を生み出し、それが強制収容所の出来事やイスラムの人々に対する迫害へとつながっていったのだとミネタさんは言いたかったのではないのでしょうか。

では、そういったことをなくすためにはどうしたらいいのでしょうか。それは、このミネタさんの言葉のようにお互い、相手のことを「知る」ということが大切なことではないかと思えます。グローバル社会とか国際化社会という言葉が頻繁に語られるようになってずいぶん久しいですが、その中でよく言われる異文化交流とか国際交流とはどんな意味を持つのか。それは私達はもっと世界のことに関心を持ち、相手を知り、最終的に私達人類が差別や偏見のない平和な社会を築いていく機会にしていかなければならないことを意味していると思えます。

留学・短期研修の意義

It is very very important that we get to know each other. When you think about fear — fear gets driven by the unknown. So the more you get to know about something or somebody, those fears are erased.

互いを知ることが必要です。恐怖感とは「未知」から生まれるのです。何かについて、誰かについて知れば知るほど恐怖感は消えていきます。

ここでは2つのアメリカ研修について紹介させていただきました。それぞれ場所や中身に違

いがありますが、実は「相手のことを知る」ということがこの二つの研修の重要なテーマになっています。現地の高校生と直接ふれあい、身ぶり、手振りを交えながらなんとか相手とコミュニケーションを取ろうという気持ちを持つこと。また、教会では年代も違う、身分も違う人達といっしょになって食事をしたり、奉仕をすることによって相手と喜びを共有できる機会をたくさん得ること。これらのことができて初めて本当の異文化交流、国際交流というものの意味が出てくるのではないのでしょうか。

そして本校ではこういった研修の経験をきっかけにさらに留学にも積極的にチャレンジしていつてもらいたいと考えています。最近の日本の若者は内向き志向で海外へ出たいと思う若者が減っていると言われていています。しかし一方ではグローバル化はどんどん進んでおり、最近東京大学が秋入学の実施を検討しているというニュースがありましたが、まさに大学の国際化を意味しており、もう国際社会を無視して生きていくことはできない、そんな状況になっています。

本校の教育実践に「国際社会に有用な人材を養成」するということが謳われています。そこには戦時中敵国の文化として禁じられた英語教育やキリスト教教育を命がけで守り、国際理解の重要性を訴えた共愛の先人の方々の熱い思いが込められています。本校はこれからもその伝統をしっかりと受け継ぎ、国際化社会、グローバル社会にきちんと対応できる国際人をひとりでも多く育成していくことができればと願っています。

.....

IV. バングラデシュの村々を訪ねて

アジアキリスト教教育基金(ACEF)の スタディーツアー (概要)

(小瀧秀夫 新島学園中学校高等学校教頭)

ACEF スタディーツアーに参加して
～ BDP と ACEF の共働事業から学ぶもの～

みなさまこんにちは、私は新島学園中学校・高等学校の小瀧と申します。私の勤務する新島学園は、京都に現在の同志社大学の前身である同志社英学校を創立した明治時代のキリスト教宗教家であり、教育者であった新島襄ゆかりの地、群馬県安中市に新島襄の教育理念を継承して昭和22年に設立されたプロテスタントキリスト教主義の中高一貫校です。
今年で創立64周年目となります。



私は国際理解教育において「アジアとの出会い」ということでお話をさせていただきます。

私の「アジアとの出会い」はここに書きましたように、ACEF スタディーツアーに参加させて頂いたことによって実現しました。わずか2週間のスタディーツアーでしたが、大げさでなく私のこれまでの人生においてももっとも影響力を与えてくれた出会いの一つと言えます。これまで学校の短期留学の引率で欧米の英語圏へは何度か行ったことがありますが、アジアの国は初めてであり、欧米英語圏での体験に比べて、より強烈なインパクトを与えてくれました。

始めに、このスタディーツアーの目的からご説明致します。まずこのツアーを企画・運営している二つの NGO 団体をご紹介します。一つは BDP (Basic Development Partners) というバングラデシュの団体です。公教育の行き届かないバングラデシュの農山村を中心に、貧しい子ども達に教育の機会を与えるために寺子屋学校（小規模小学校）を建設し、運営している組織です。もう一つが ACEF（アジアキリスト教教育基金の略）で、日本各地の学校、幼稚園、教

会、団体、有志などの協力により、BDP と共働してバングラデシュに寺子屋学校の開設を支援している特定非営利活動 NGO 法人です。

BDP (Basic Development Partners)

☆バングラデシュの貧しい子どもたちに教育の機会を与えたいと、各地に寺子屋学校(小規模小学校)を開設している NGO
(現在6地域に75の小学校と、2校の職業訓練校を展開 2010年度現在)



エッセイ ※ACEFのホームページより

ACEF (Asia Christian Education Fund)

☆アジアキリスト教教育基金の略で、日本各地の学校、幼稚園、教会、団体、有志などの協力により、バングラデシュに寺子屋学校を贈る運動をしている特定非営利活動法人(NGO法人)通称エッセイ

私達はこの二つの団体の企画・運営の下、バングラデシュの寺子屋学校を訪問し、そこで学ぶ子ども達や教える先生方、また学校建設に協力した現地の村人達との交流、そして直接私達のツアーのお世話をして下さい BDP のスタッフの方々との共同生活から様々な体験や学びの機会を得ることが主な目的でした。

私達が訪問したバングラデシュについてちょっと触れておきたいと思います。

バングラデシュ人民共和国について

★国土(面積)は日本の約4割、人口は1億5000万人以上(世界第7位)

バングラデシュの経済事情(日本の約60分の1) ※ACEFモニターより

- ☆10円で、寺子屋小学校の生徒一人が1日勉強できます。
- ☆500円で、子ども一人の2年分の教科書が贈れます。
- ☆5000円で一人の子どもが2年間学校に通えます。
- ☆7000円で、寺子屋小学校1クラス(30名)を1ヶ月間維持できます。
- ☆100万円で、小学校1校(レンガ造りの校舎:4教室と職員室、井戸、トイレ等)を建設できます。

バングラデシュの人々の1日当たりの収入(1日当り)
例)リキシャワラー(リキシャ運転手)、バングラデシュ最下層の人たちで、1日当たり平均で200タカ(Tk)ほど、1タカ=1.3~1.4円なので、1日は日本円で260円~280円ということになります。

バングラデシュは東パキスタンからバングラデシュ人民共和国となって今年で40周年となります。インドの東に位置し、ガンジス川の河口に広がる国で、面積は日本の約4割、人口は1億5千万超(世界第8位)の国です。

バングラデシュの経済はおおざっぱに比較すると、日本の約60分の1程だそうです。

ACEF によれば、「ここに書かれてあるお金」で、これだけのことが可能であり、「賃金もこ

こにあるように」、失礼ですが、アジアでも最貧国の部類に入る国の一つと言えるかと思います。

わずか2週間の滞在でしたが、生涯忘れることのないであろう貴重な体験をさせてもらいました。次の写真は、バングラデシュでは数少ないキリスト教徒の方々が住むバシャニア地区に建てられた BDP の学校です。(バングラデシュでは90%がイスラム教徒、残り10%がヒンドゥー教徒とキリスト教徒、キリスト教徒は3%程度) 生徒や先生、村の関係者の方々が総出で、私達を歓迎してくれました。この学校は村の役場のような施設も隣接しており、マイクロクレジットで有名になったグラミン銀行よりも早く、そのシステムを取り入れて、村人の生活向上を図って来た、と村の長老の方が仰っていました。

ACEFのスタディーツアーに参加して

☆スタディーツアーの目的は、寺子屋学校を訪問し、現地の子どもたちや村人、BDPスタッフと交流することで、そこで私たちは貴重な体験と学びの機会を与えられました。

☆掘っ立て小屋のような寺子屋学校で、はだしの子供たちが目をキラキラさせて真剣に学んでいます。



バシャニアスクールの子どもたちの歓迎会



ジャマルプールの村で最初に訪問した寺子屋学校



東洋英和女学院の寄付によって建設されたレンガづくりの学校のお披露目式



レンガ校舎の内部と両学年の生徒たち

バングラデシュを訪問して第一に感じた事は、最大級のもてなしのこころで来訪者を迎えてくれることです。確かに私達は BDP の学校を支援している団体のツアーで来ているということもありましょう。しかし、そのもてなし方はそんな利害関係を越えた、真に心のこもったおもてなしでありました。何度か BDP の学校の先生宅やスタッフ宅に招待された際には、マンゴーやお菓子、飲み物等をそれこそ食べきれないほど出してくれました。家の様子から、失礼ながらそれほど裕福ではないように感じられ、明日からどうやって暮らすのだろうか、と心苦しく思ったりすることもしばしばでした。

その下の写真は BDP の寺子屋学校の様子で

す。一番左はジャマルプールで最初に訪問した学校です。失礼ながら、ご覧のように学校の側面は藁やトタン板囲っただけの文字通り掘っ立て小屋のような小学校でした。そんな学校で、はだしの子ども達が目をキラキラさせて真剣に勉強していました。

真ん中の写真は、東洋英和女学院の寄付によって建てられたレンガ造りの立派な学校です。今回東洋英和の高校生が参加していましたので、彼女がお披露目のテープカットに招かれた際のものです。右の写真はこのレンガ校舎の内部で黑板や時計、図表等が設置され、左の学校に比べると設備も整っていました。BDP の学校間にも地域によって大部格差があるようです。

次に、今回のツアーで心に残ったお話を二つさせて頂きたいと思います。

リキシャワラー・アリさんのお話(与えることの喜び)

JICAスタッフによる「ヒロシマイベント」が行われたBDPチャムッタダスクール。この学校は40年間リキシャをこぎ続けたアリさんが寄付した土地に建てられました。

アリさんは子どもたちの教育のために、全ての財産を献げました。
与える(みんなが幸せになる)ことの喜びをアリさんは教えてくれました。



原爆の惨状を紙芝居で説明する際にアリさん



なりし日のアリさんと奥様



アリさんの家の前で



水戸人となったアリさんの奥様もヒロシマイベントに参加していました。

その一つがリキシャワラー(リキシャの運転手)アリさんのお話です。このお話は JICA のスタッフによる「ヒロシマイベント」が行われた BDP チャムッタダスクールを訪問した際に伺ったお話です。上の写真は JICA スタッフが子ども達にヒロシマの原爆の惨状を紙芝居で説明している様子ですが、実はこの学校が出来るとき、土地を寄付したのがリキシャワラーのアリさんです。アリさんは学校に行ったことがなかったので字の読み書きが出来ません。(バングラデシュの識字率は50%) そんなアリさんの住む村に BDP が学校を建てるための土地をさがしている、という話を聞き、アリさんは子ども達の教育のために自分の土地(アリさんの全財産)

を寄付することにしました。字が読めないつらさを子ども達にさせたくない、という思いがあったようです。学校が出来てから、村の子ども達は生き生きとして学校に通い、村人達も学校が出来たことを誇りに思い、村の雰囲気明るくなった、というお話です。

40年間リキシャをこぎ続け、自分の持てるものを惜しげもなく全て献げたアリさんから、求めることの多い現代社会において、与えること（みんなが幸せになる）の喜び、そしてその行いの尊さを教えられました。

もう一つは、このスタディーツアーに参加する前に開催された準備会で、ACEF の理事長である牧師の船戸良隆先生がされたお話です。（船戸先生は BDP と ACEF の共働事業を中心となって立ち上げられたお一人です。）

船戸良隆先生のお話（「受ける」と「与える」）

2009年、3年半ぶりにバングラデシュを訪れた際、大変ショッキングな事があった。BDP側から、「BDPは援助される側であることを痛感させられている」。続いて「それはACEFがそうさせているのだ」と。

私は驚き、涙を流しながら次のように話しました。

私がBDPとACEFは「共働者」であって「与える側」「受ける側」という関係ではない。Dr.マラカール（BDPの前身SEPの創始者）と私は、この運動の設立当初から両者が「共に働く」ということを最も重要な要素として確認し合ってきた。」

以上、ACEF コミュニケーション第30号
「アミモネ コリ」（ベンガル語で「私は思う」という意味です。）より抜粋



※BDPの専門学校開けられた
Myosinの文字は Myosinの誤り



敬Dr.マラカール



電気科で間風機を修理する学生たち



船戸良隆（ACEF理事長・牧師）

同じ内容のお話が ACEF の機関誌『ACEF コミュニケーション』第38号の巻頭言「アミ モネ コリ」（ベンガル語で「私は思う」という意味）にも書いておられましたので、その抜粋を読ませて頂きます。

2009年、3年半ぶりにバングラデシュを訪れた際、大変ショッキングな事があった。

BDP 側から、「BDP は援助される側であることを痛感させられている」と。続いて「それは ACEF がそうさせているのだ」と。

私は驚き、涙を流しながら次のように話しました。

私が BDP と ACEF は「共働者」であって「与える側」・「受ける側」という関係ではない。Dr. マラカール（女医で BDP の前身 SEP の創始者）

と私はこの運動の設立当初から両者が「共に働く」ということを最も重要な要素として確認しあってきた。」と。

船戸先生は私達に、「バングラデシュに行ったら日本の、或いはあなたの価値観を押しつけてはいけません。ましてや私達が BDP を支援してあげている「与える側」であるような言動は決してとってはいけません。Dr. マラカールは日本に来た時、講演会で、『私達は乞食ではない、』と絶叫されたことがありました。与える側・受ける側といった関係が見透かされた時、BDP と ACEF は先ほどのようなつらく悲しい関係をくり返すことになってしまう。」といった内容のお話をされました。

まとめに「国際理解(共生)と国際協力(共働)」について

☆「国際理解とは共に生きること。」
お互いがお互いの国や地域の風習や考え方を尊重し、共に暮らすこと。

☆「国際協力とは共に働くこと。」
受ける側と与える側の関係ではなく、「両者が共通の目標に向かって、役割を分担し、共に働くことにより、みんなが幸せになれること。」

★「自国や自己の価値観のおしつけ」
や「与える側>受ける側の関係」
は「国際理解と国際協力の関係を支配する者と支配される者の関係」にしてしまう。

☆「謙虚であること。」



まとめとして、「国際理解とは共に生きること」（お互いの国や地域の風習や考え方を尊重し、共に暮らすことによって理解し合える）そして「国際協力とは共に働くこと」（受ける側と与える側の関係ではなく、両者が共通の目標に向かって、役割を分担し、共に働くことにより、みんなが幸せになれること）、リキシャワラーのアリさんが、BDP の学校建設のために、惜しげもなく自分の全財産を献げたように。

そして気をつけなければならないことは、「自国や自己の価値観のおしつけ」や「与える側>受ける側の関係」が生じると、「国際理解と国際協力の関係を支配するものと支配されるものの関係にしてしまうこと。そうならないためにはまず第一に「謙虚」であること。以上を今回のスタディーツアーを通して学ばせていただきました。

バングラデシュでの2週間を振り返って、プーバイルやジャマルプール、ボクシガンジといった農山村で訪問した寺子屋小学校で出会った子ども達は皆生き生きとしており、失礼ながら、掘っ立て小屋のような小学校で裸足の子ども達が、目をキラキラさせて真剣にベンガル語や算数の勉強に取り組む姿には言葉にならない感動を覚えました。不十分な教材や彼らの置かれている生活環境（仕事の合間に学校に来る子ども達もいます。）のことを思うと、もっと良い校舎を、広い運動場や新しい教材を、と思わずにはいられません。また私のそのような浅はかな思いと同時に、これまでの ACEF と BDP の20年余に及ぶ、地道な協働事業の重さと尊さに感激しました。あらためまして関係者の皆様に敬意を表し、感動と感激を与えて頂いたことに心より感謝申し上げます。

バングラデシュでの生活には驚きや新発見が満ち満ちていました。トイレや食事、水浴びにしても、普段の日本での生活に比べれば不便なはずなのに、不便とは感じず、むしろ新鮮な感覚で受け入れることが出来ました。やはり、その土地に合った作法や暮らし方があってしかるべきで、日本での快適な暮らしが決して当たり前でなく、それらが良い作法や暮らし方なのかどうか、あらためて考えさせられました。そんな気持ちにさせてくれたのは、バングラデシュの美しい自然と最大級のおもてなしの心で私達を迎え入れてくれた素朴で純粋な BDP のスタッフやバングラデシュの人々のお陰と思っています。

私はジャマルプールの村で約一週間過ごさせて頂きました。ジャマルプールの景色は、50年前の私の故郷（群馬県の農山村）の景色に似ていました。ジャマルの BDP 事務所前の道のある日の夕方、私は忘れられない光景に出会いました。夕飯のおかずと思われる一匹のイリッシュ（バングラデシュの国民魚）とジャックフルーツ（国民的果物）をぶら下げてトボトボと家路に向かうかわいいう少年の姿を見かけました。おそらくバザールまで買い物に行かされた

帰り道だったのでしょう。私の幼少期の原風景を見ているようでした。

寺子屋小学校の十分とは言えない教育環境の中で、目をキラキラさせて勉強している子ども達、また決して裕福とは言えない境遇でありながら、私達を精一杯もてなして下さった BDP スタッフや村の人々、喧騒と混沌のバザールで逞しく生きるバングラデシュの人々に、日本がこの50年間で豊かさと引き替えに忘れてしまった大切なものを見たような気がしました。

ご静聴ドンノバット（※ベンガル語でありがとうの意）



END

最後に、このような貴重な体験の機会を与えてくださった ACEF の関係者の皆様、現地の BDP スタッフ全ての皆様、最大級のおもてなしの心で迎え入れてくれた寺子屋小学校の子ども達や先生方、関係者の皆様、そしてご一緒した第41回 ACEF スタディーツアー参加メンバー全ての皆様に、最大級の感謝の気持ちを込めて、ドンノバット（ベンガル語で、ありがとうの意味）の言葉を献げます。これで私の発表を終わりにさせていただきます。ご静聴、「ドンノバット」ありがとうございました。

.....

IV. バングラデシュの村々を訪ねてーバングラデシュの人々との出会いを通して学んだことー

今年の夏、アジアキリスト教教育基金主催のバングラデシュ・スタディーツアーに、共愛学園からも3人の高校生達が参加してきました。今回の体験の中で学んだことを、それぞれで発表してもらいたいと思います。（荒谷）

画像省略

(新井真莉愛さん 共愛学園高等学校英語科進学コース1年)

共愛学園高校英語科1年の新井真莉愛です。バングラデシュから帰ってきた今、一番強く感じることは、「本当の幸せ」とは何かについて考えるようになったことです。

このスタディツアーに参加した一番の理由は、知らない世界を見ることによって、広い視野をもつようになりたいと感じたからです。これまで、私は、当たり前のように日本で生まれ、生活してきました。海外にも行ったことのなかった私は、物が豊かに溢れかえり、何一つ不自由することのない日本での生活を、何の疑問もなしに当たり前のこととして受け取ってきました。

しかし、ある時、「発展途上国」という言葉を耳にし、そうした国々のことを学びました。そして、「先進国」と言われている日本の生活との違いは何なのだろうと考えるようになり、実際に「発展途上国」を訪れてみたいと思うようになりました。そうしたきっかけで、今回の旅に参加したのですが、そこで、印象深かった体験を紹介させていただきたいと思います。

スタディツアーの最初、バングラデシュの首都ダッカの近郊にたどりついて、すぐにオリエンテーションがありました。そこで、現地で学校にいけない子ども達のための寺子屋を開いている NGO のディレクターをしているアルバート・マラカルさんから、参加者への問いかけがありました。その時に、アルバートさんは、「日

本人はバングラデシュの人々の52倍の幸せを生きている」と言われ、その言葉をどのように受け取り、理解したらいいのかと戸惑いました。確かに、日本には物が溢れ、物質的に豊かではあるのですが、私達が普段どれだけ幸せと感じているだろうか。そして、物質的に貧しいからといって、バングラデシュの人々は幸せと感ずることなく生活しているのだろうかと感じたからです。

それからの2週間の旅で、子ども達をはじめ、多くの人々に出会いました。電気や水道のない不便な生活を送りながらも、出会った子ども達は、みな目をキラキラと輝かせながら、楽しそうにしていました。教育を通して、この国の未来を築こうという思いをもって働いている BDP の人々も、私達のために、本当に様々な工夫をして、日本からの一行が良い学びの時を持てるようにしてくださいました。私達がお腹をこわすことなく、おいしく食事ができるように、いつも脇にいてお世話をしてくださいましたし、雨季の季節、地方はそこら中が水につかっていて、船を利用しなければならないことも多かったのですが、そんな時も、自分達が水の中にはいって泥だらけになりながら、私達を船に乗せてくださいました。

そんな体験の中で、私は、「何故、この人達は、彼らよりもっともっと物質的に恵まれた国からやってきた私達に、ここまで一生懸命にお世話をくださるのだろうか?」と思いました。そしてその疑問をいだきながら、旅を続け、振り返るうちに、アルバートさんから投げかけられた問いとも合わせて、「しあわせ」について気づいたことがあります。

一つは、「幸せ」は物の豊かさなどできるのではないということです。物質的な欲求を満たす満足が、必ずしも精神的な意味での「幸せ」と比例しているわけではないということでした。不便なことだらけのバングラデシュで、人々はいつもお互いに協力して生活しています。水を汲んでくるのも、家事をするのも、人々はいつもお互いの力を合わせて生活していまし

た。人と人々が共に生きるということ、そして何かを一緒に目指しているという思いが、人の幸せと大きくかかわっているのだと思います。

BDP のスタッフの方々が、あんなにも一生懸命に私達のお世話をしてくださったのも、バングラデシュの人々の暮らしを豊かにするために、共に働いている一員として、私達を受け入れてくださっていたからだということに気づかされました。

アルバートさんが、旅の最初に私達に投げかけた言葉は、物質的な豊かさで、人の幸せを考えている私達に、貧しさや不便さがあっても、人と人々が共に生きている時、そして共通の目的をもって共に努力している時に、人間の生きがいや幸せの理由があるのだということ、そしてそのような努力に日本からの私達がパートナーとして加わることで、一緒に幸せを作り出していけるのだということ、伝えたかったように思いました。

.....

(佐藤葉子さん 共愛学園高等学校英語科進学コース1年)

私は、ダッカから車で約10時間かけて、ボクシガンジという場所に行き、1週間を過ごしました。ボクシガンジはバングラデシュの北部の丘陵地帯、インドとの国境近くの町です。ダッカからの旅は、雨季のためにそこら中が冠水していたり、道に溢れた泥のために車が立ち往生したりしたため、普段は5時間ほどの距離なのだそうですが、今回は10時間以上かかりました。おまけに、いっさい身動きできないほど人と荷物でいっぱいになった車に冷房もなしのまま、窓も一つしか開かないような状態で車に揺られての旅でしたので、残念ながら体調を崩してしまい、現地でのスタディツアー一行が予定していた学校訪問には参加できない時がほとんどになってしまいました。

それでも、今回の旅行は、私にとって本当にいろんなことを考えさせてくれましたし、人々

との出会いを通して、かけがえのない体験をすることができました。

私も、日本とバングラデシュの違いに触れる中で、「しあわせ」ということについて考えさせられました。そのことを、特に考えるきっかけとなったのは、一人の人との出会いです。ダッカからの私達を案内してくださった、ディコさんという BDP スタッフとの出会いです。

彼は現在は、ダッカにあるボケーショナルスクールで、BDP の小学校を卒業した後、生活のために手に職を持つ必要のある青年達に、車の修理の技術や、コンピューターの知識を教えるための学校のコーディネーターをしています。ディコさんは BDP では2004年から仕事をしています。最初はパートタイムのスタッフとして働いていましたが、このボケーショナルスクールのディレクターをしていたステファンさんが2年前に突然病気で亡くなったために、その後を引き継いでディレクターの仕事をしている方です。いつも元気で、この仕事を本当に愛している方のように感じました。

そんなディコさんや、他のスタッフの方々ともしろんな話をする機会がありましたが、そうした会話の中で、彼らの BDP の活動への思いや、バングラデシュで働くということの意味を考えさせられました。

ディコさんは、実はかなり裕福な家の出身だそうです。世界最貧国の一つといわれるバングラデシュの、貧しい村々を訪問したのですが、やはり、バングラデシュにも格差の問題があり、裕福な人々の生活は、私達が見たものとはかなり違っているようです。ダッカの近郊の町々でも、考えられないほど貧しい家々や、人々の生活を目にしましたが、そんな中にピカピカの新車を乗り回している人がいたり、大きな家を見たりもしました。

おそらく、そんなバングラデシュでも恵まれた環境に育ったディコさんが、決して給料も十分でない BDP で仕事をするようになった理由は何なのか知りたくなり、帰国してからインターネットなどで彼に様々な質問をしてみました

た。

彼には、大学を卒業した後に、いくつかの選択肢があったそうです。BDP 以外にも、オーストラリアへ留学して、さらに勉強し、さらに良い仕事を見つけること、すでに入社を許されていた Akell という通信会社に入り、コンピュータの仕事につくことなどです。そうした仕事や留学には、彼の将来の生活や収入にとって非常に大きな意義と、可能性が秘められていたんだろうと思います。

そんな選択肢があるにもかかわらず、ディコさんが BDP の仕事をするに決めた理由は、アルバートさんとの出会いがあったからだと話してくれました。アルバートさんや他のスタッフの方々の、貧しい子ども達へ教育を提供していくことで、バングラデシュの未来を築いていきたいという思いが、ディコさんが BDP に加わった大きな理由であったそうです。貧しい国にあっても、「生きがい」をもって仕事をしていくことを選んだディコさんに、本当の幸せは、そうした目的をもった生き方の中にこそあるのだということを学ばされました。

幸せ薄いだろうと勝手に決め込んでいた私に、本当の幸せは物質的な豊かさの中には見つからないことを教えられた今回の旅を本当に感謝しています。今度は元気に、もう一度バングラデシュを訪問したいなあと思っています。

.....

(清水菜央 共愛学園高等学校英語科進学コース1年)

私は、ジャマルプールという村で1週間を過ごしました。農村地帯の村で、広々とした水田の広がる場所で、夜にはたくさんの蛍が見られます。雨が降っていなければ、空には数えきれないほどの星が輝く美しい場所でした。

ラマダーンというイスラム教の断食の期間であったにもかかわらず、スタッフの方々は、私達といっしょに船で歌ったり、踊ったり、夜にもまた歌とダンスで盛り上げてくれたりと、本

当に素敵な方々で愛すべき人々だなあと感じました。

昼間は、村々の小学校を訪問し、そこで目を輝かせながら楽しく勉強している子ども達に会いました。午後の時間も、村の子ども達が私達のところに集まってきて、ゲームをしたり、折り紙をしたりと、言葉が通じなくても、本当に仲良くなり楽しい時間が過ごせました。毎晩、訪問した小学校のことや、出会った人々のことについて語り合い、教育の大切さについていろいろと考え学ぶことができました。

学校に行くことのできないほどの貧しさや、女性や子どもには教育は必要じゃないという保守的な考え方の支配的な地域で、教育が、子ども達や、また社会の未来をどれほど大きく変えていくことができるかということを感じました。字を読めなかった子ども達が、知識を得ることで、彼らの生活が向上するだけではなく、その子ども達と暮らす大人の生活も豊かにしていけること、BDP の活動を通して、貧しさから抜け出すことのできなかった人々が、未来の社会に希望を持ち始めることができたことなども知りました。

バングラデシュでは社会の底辺の仕事とも言えるリキシャワラの仕事を40年間続けた男性が、自分がこつこつと貯めたお金を、子ども達の小学校を作るために全額寄付したことを伺った時には、人々が教育の可能性に気づきはじめていることを学ばされ、そのような活動を続けてきた BDP の存在に心を打たれました。

また、あれだけ貧しい国で、学校にも行けない子ども達が、今回の東北地方の大地震のことを聞き、みんなで少しずつお金を集めて、BDP を通して、日本の人々のために献金をしてくれたことを聞きました。日本の物価にしたらほんとうにわずかな金額ですが、そこにこめられたバングラデシュの子ども達、そして村の人々の思いは、本当に、私達が共に生き、支えあうことを大切にしていかなければいけないことを教えてくれました。

私の訪れたジャマルプールにはバジェットさ

んというスタッフの方が働いておられます。バシエットさんも大学を卒業し、英語も話せる、いわゆる高学歴の方です。そんな学歴を持っていれば、普通はダッカのような大都市に行き、高収入の仕事につくこともできるのですが、「子ども達のために働きたい」という熱い思いをもって働いておられます。

貧しい家庭に育ち、家族も養っているバシエットさんは、生活のためにもっと収入の多い仕事に変わろうかと何度も迷ったそうです。BDPの給料では、自分の娘を大学に行かせられるかどうかもおぼつかない状況で、実際にダッカの友人からも今より何倍もの収入を得られる仕事のオファーがあったそうです。それでも、「教育こそが一番大切であると考え、この国の未来を築いていくために、この仕事を続けよう」と決意されたそうです。

そんな人々との出会いが、私達の今回の旅の大きな収穫でした。彼らが、自分の生き方を選んでいく時に、収入の多さや、物質的な豊かさだけではなく、この国の未来のために自分が何をできるか、また自分だけではなく、一緒に暮らす人々が豊かになっていくための仕事をしたいという思いが、日本から訪れた一人一人の胸を打ちました。

貧しい国には、貧しさにあえぐ人々の苦しい生活だけがあるように感じていた私達は、そんな中でも希望を作り出す仕事に自分の人生をささげて、生きがいと希望をもって生活をしている人々がいることを知り、これから大人になっていく私達自身が大切にしなければならないことを教えていただいたように思い、感謝しています。

.....

V. 私の国際理解教育体験（アジア学院とネグロス島でのワークキャンプから）

（山田光瑠さん 同志社大学政策学部1回生—新島学園高校60期生）

私は、高校1年次にフィリピンネグロスワー

クキャンプに、高校2年次にアジア学院ワークキャンプに参加しました。一瞬一瞬が、心に刻み込まれ、忘れられないものとなりました。今日は、この経験を通して、私が感じたこと、得たことをお話ししたいと思います。

画像省略

フィリピンネグロスワークキャンプでは、栃木県のアジア学院で2日間、フィリピンネグロス島のサンタリータ研修センターで現地の高校生10名、日本人学生10名と共に10日間を過ごしました。内容としては、ワークキャンプやオリエンテーション、観光やホームステイなどを行いました。

ネグロスワークキャンプ

2008年 8月16日～8月27日 11泊12日

<活動>

- ・アジア学院にて1泊2日の事前研修
- ・フィリピンネグロス島・サンタリータ研修所にて10泊11日

<内容>

ネグロス島の高校生と共に活動する。ファームワークやホームステイ、観光など。

まず、最初の印象です。フィリピンという土地に初めて足をつけた瞬間、日本とは全く違う雰囲気に驚き、圧倒されました。目の前には見たこともないような美しい夕日が広がり、周りを見れば、顔も言語も服も何もかも違う人達で溢れ、私はまるで異空間にいる心地でした。

生活面の違いとしては、（パワーポイントで説明）。

生活面での違い

- トイレの様式
- シャワールーム
- 食事の方法
- 道

心理的な隔たり

しかし、私の中に大きくあったものは、心理的な隔たりでした。同じ人間であるはずなのに、互いの間に日本とフィリピンという大きな壁を、私自身は感じていました。数日間は、ずっとその気持ちを抱きながら過ごしていました。

- ファームワーク
- 食事
- 自由時間
- オリエンテーション
- 礼拝、お祈り → 一体感

次第に心理的距離がなくなっていった

しかし、共に過ごす時間が自然と互いの距離を埋めていき、私自身の中の国境も徐々になくなっていきました。特に、全員で感謝をし、お祈りをする静かなひとときは、国同士の隔たりを超えた一体感がありました。

We are JAPAPINO !

国境を越えた瞬間

フィリピンという空間にいることに違和感を

次第に持たなくなったあるとき、一人のフィリピンの学生に、we are japapino! と言われました。Japanino とは、japan と Philippines をかけあわせたもので、私達は、フィリピン人でも日本人でもない、たった一つの新しい人種、ジャパピーノなのだと教えてくれたのです。私は、その瞬間、私の中に少なからず存在していた国境というのがフッと消えていくのを感じました。日本とフィリピンという国の境がなくなった瞬間というのが、確かにありました。互いの距離は増々縮まり、ジャパピーノと共に笑い合い、過ごす時間は本当に楽しく、充実したものでした。まるで人種も国も関係のない新たな一つの空間にいるような、何ともいえない心地の良さがありました。フィリピンを発つとき、出会った方々と離れることがとても苦しく辛く、もっと共に過ごしていたいという思いでいっぱいでした。ジャパピーノは、日本という小さな世界にとどまっていたら絶対に手に入らない、かけがえのない存在であることは間違いありません。

私はネグロスワークキャンプに参加するまで、それぞれの国が抱える問題はその国の問題であり、日本とはそれほど関係のないものだと考えていました。日本人なら自国の問題と向き合い、改善を目指すことが最優先であり、他の国の問題は日本と全く別次元ではないか、と。

他の国の問題は日本と全く別次元



国境を越えて協力し合い
助け合わなければならない

確かに、国境というのは必ず存在し、文化も言語も異なります。しかし、この経験を通してそのように、国と国を分けて考えることに疑問をいだくようになりました。日本という小さな

枠組みの中で物事を捉えず、視野を広くもつべきではないか、私達は国境を越えて協力し合い、助け合わなければならないのではないかと強く思ったのです。それぞれの国にそれぞれの良さがあり、それぞれが抱える問題もあります。しかしそれは全く交差しないというわけではないでしょう。国境を越えた視野を持つことは、今現在の全世界で、必ず求められることは明らかです。ネグロスワークキャンプで私が得た多くのことは、私にとって非常に価値あるものとなりました。

また、この経験で、多くのことを学ぶことができた一方で、ずっと答えを見いだせず、自問自答を繰り返していたこともありました。それは自分の使命とは何なのだろうか、ということです。フィリピンに発つ前に2日間研修を受けたアジア院で「あなたの使命とは？」という問いをかけられました。私にとってその問いは非常に難しいもので、答えることができませんでした。いくら考えても、その答えを見いだせず、その問いかけをされたアジア学院に、もう一度関わってみたいという思いがありました。

この経験を通して、
自分に残された課題

「自分の使命とは何なのか」

アジア学院ワークキャンプ

2009年 8月24日～8月26日 2泊3日

<活動内容>

- ・キャンパスツアー
- ・ファームワーク
- ・朝の集い
- ・コーヒーワークショップ



そこで、高校2年次の時にアジア院で行われる2泊3日のワークキャンプに参加しようと思ったのです。

活動内容は～(パワーポイントで説明)

ネグロスのサンタリータ研修センターと同じように、アジア学院は国境というのをあまり感じない空間でした。アジア学院というたった一つの世界がそこにありました。人種も言語も文化も違う人々が、共に作業をし、礼拝をし、賛美歌を唄い、笑い合う。私はそのような空間が日本にも存在することに希望を持ちました。この経験を振り返って、印象的だったのが、コーヒーワークショップです。日本では誰もが知っているガーナという安価な板チョコがありますが、その背景には、低賃金でその板チョコの原料となるカカオの生産をしているガーナの人々がいると伺いました。また、私も大好きな、スターバックスの背景にも、低賃金で過酷な労働を強いられた人々が存在しているそうです。この写真のように、実際にワークショップで、コーヒー豆の選別作業の体験をしましたが、気が遠くなるような、果てしない作業でした。何気なく飲んでいるスターバックスのコーヒーの背景には、この作業を低賃金で一日中に行っている人々がいるということを、身を持って知り非常にショックを受けました。

コーヒーワークショップ



何気なく過ごしている日々の中

↓
他国との密接な関わり

世界的視野

日本の国民は、そのことを知ることもなく、需要を増やし続けるのでしょうか。そして日本の企業のみが金儲けをするのでしょうか。百元ショップなども同様であり、そのような仕組みが日本には溢れています。私は、その時、「無知」

というのがいかに罪深いかを痛感しました。このような背景をどれだけの人が知っているでしょうか。この経験がなかったら、私も、何も感じずに過ごしていたに違いありません。

そして改めて、他の国の問題は日本とは関係ない、日本は自国の問題のみを考えるべきという、以前の私の浅はかな考えは大きな間違いであると痛感しました。他国が抱える問題が自国と無関係とは限らないのです。いや、むしろすべての問題は、世界的視野をもって考え、改善へと導いていかなければならないのでしょう。

1年前の、「あなたの使命とは」という問いを胸に刻み、考え続けていた私はこのワークキャンプでも自分の使命について模索していました。そしてその問いの答えに近づけた瞬間がこの2泊3日には多く存在しました。大津校長先生の話をついた時には、なぜ、あのような問いかけをされたのかがはっきりとわかった瞬間がありました。アジア学院は、農村指導者の養成と訓練を行い、困難を強いられる人々の生活をよりよくするための指導者を育成するという目的を持っていることを知りました。「共に生きるために」それをモットーとしたアジア学院という存在自体が、使命をもったものなのです。

また、自国の生活を向上させるという使命感を持ってアジア学院に学びに来ている方のお話を伺う機会もありました。自分の生まれ育った場所の貧困を改善するという希望を背負い、また自分もその使命を固く持ち、アジア学院に来ているのです。

使命

- ・ 大津健一校長先生による講義
アジア学院の使命

「農村指導者の養成と訓練を行い、困難を強いられる人々の生活をよりよくするための指導者を育成する」

使命感で溢れた多くの方々が集まり、
それぞれの使命を果たすために、
国境を越え、共に高め合い支え合っている場所

様々な国の力になりたいという強い思いを持った日本の学生の方にも多く出会いました。アジア学院には使命感で溢れた多くの方々が集まった場所であり、国境を越えて、それぞれの使命を果たすために、共に高め合い支え合っている場所であると分かったのです。

各国々が各々の深刻な問題を抱えている今この瞬間、私達は国境を越え支え合わなければなりません。私は、サンタリータ研修センターやアジア学院のあり方こそが、国際理解の基盤になるものだと思います。それぞれが何らかの使命感を持ち、目的に向かって、国境を越え、互いに支え合い、高め合う。そして、ひとつの問題を考える時、世界的な視野を持つ。その姿は、現代に強く求められているものではないでしょうか。この経験を通して、私自身の使命について考える機会を与えられました。そして今、自分自身の使命と向き合っています。多くの学びえたことを忘れず、胸に刻み、今後歩んでいきます。ネグロスワークキャンプ、アジア学院ワークキャンプに参加することができたことは、私にとってかけがえのない、価値のある経験となりました。そのような機会を与えてくれた先生方、ワークキャンプで出会った方々に感謝します。

国際理解

それぞれが使命感を持ち、目的に向かう。

その中で、国境を越えて、利点を共有し合い、
互いに支え合い、高め合う。

世界的視野で物事を考える。

共に生きる

総 括

共愛学園中学高等学校 校長 大 川 義

国際理解教育の部会では「グローバルな視点を養う教育をめざして」というタイトルのもとに部会を進めて参りました。この企画につきましては、共愛学園と新島学園の二つの学校が携わったわけですが、両校ともにキリスト教主義の学校です。キリスト教主義の学校には共通の課題があります。それは「愛する」ということをどう具現化するかということです。しかし、このことは宗教を基盤とする学校ということに限らず、どの学校においても共通する人間としての大切な内容を含んでいます。それで、この企画は国際理解教育の目的をより一層具体化することに焦点を絞ろうということにいたしました。生徒達が自国以外の国を体験したり、その国の人々と触れ合うなかで、世界を考え、自分のためだけに生きているのではない、他者に関わりの中で自分の生き方を真剣に考えるようになる。そのようなことを学校という枠の中で可能な限り若い魂に働きかけたいと考えました。そのためにアジアを中心に考えました。

「共に生きる」というテーマで大津健一先生に基調講演を頂きました。この講演は、アジア学院に來ているアジア諸地域、アフリカの諸国の人々の現状を考え、世界的広がりを持つ諸問題を私達がどのように担っていけるのか、というお話でした。先生はアジアの国々の様々な村や都会に入って実際に人々の様子を見、その方々との交わりの経験を通しての講演内容でした。その中の問題はどれも深刻です。食糧が投機対象となることから、貧困が生まれ、さらには世界的な気候変動による大干ばつで圧倒的な食糧難があり、また、難民問題、あるいは内戦、問題は限りなくあります。そのような人々とど

う日本の若者が関われるかは大きな問題です。日本の現状としては、若者の内向きな状況にあることも問題です。これらの状態を変えるのに、国際理解教育の果たす役割は大きいと言えます。そして、国際理解教育の目的として「共に生きるために」を掲げることの大切さを私達は益々確信させられました。

研究発表Ⅰでは「語学教育と国際理解との可能性」という発表をしていただきました。アメリカでの体験、バングラデシュでの体験、これらを通じての隣人理解に繋がる語学教育とは何かについて学ぶことができました。

研究発表Ⅱでは「アジアとの出会い 生徒の体験発表」でありました。新島学園 共愛学園の両校が実施している具体的内容とねらいを発表させていただきました。生徒の体験発表も「本当に生きるとは」と自分自身に問いかける姿は聞いておられた先生方の感動を呼びました。若者の魂を揺さぶることによって、生徒がこれほど真剣に考えさせられるのだ、と改めて思われました。

世界の人口は70億人を突破しました。この世界の人口増がもたらす大きな問題の前に、私達は戦争をしている場合ではありません。富を集めることに夢中になる場合でもありません。世界が平和であるように、他を思いやることができるように、愛に溢れた世界になること、共に生きること、これこそが私達地球上の全ての人が願うことです。その希望をいつも見失わないことも大切です。そのための国際理解教育をこれからも続けていきたいと思います。参加なされた全ての皆様に心より感謝いたします。

特色教育部会

1 研究目標 建学の精神 原点に立ち返る

2 会場 ホテルメトロポリタン高崎「6階白鷺」

3 日程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
10月28日	受付 部会開会式	基調講演	研究発表 I	昼食	研究発表Ⅱ・Ⅲ		閉 会 式	

4 内容

部会開会式 運営委員長挨拶 学校法人白根開善学校 理事長・学園長 佐々木 克典

基調講演 演題 『建学の精神』 原点に立ち返る
講師 学校法人白根開善学校 理事長・学園長 佐々木 克典

研究発表Ⅰ テーマ 「山の小さな学校の取り組み」
発表者 学校法人白根開善学校 理事長・学園長 佐々木 克典

研究発表Ⅱ テーマ 「アスリートコースの指導について」
発表者 高崎健康福祉大学高崎高等学校 教頭 加藤 陽彦
発表者 高崎健康福祉大学高崎高等学校 教諭 黒田 水生

研究発表Ⅲ テーマ 「夢は大きく 根は深く【無学年制 医療倫理・医系小論文講座】」
発表者 樹徳中学高等学校（一貫校） 中学校校長 野口 秀樹
発表者 樹徳中学高等学校（一貫校） 教諭 福田 肇

部会閉会式 総括 学校法人白根開善学校 理事長・学園長 佐々木 克典
閉会のことば 高崎健康福祉大学高崎高等学校 副校長 市川 賢太郎

5 運営委員

委員長	佐々木 克 典（学校法人白根開善学校 理事長・学園長）
副委員長	市 川 賢太郎（高崎健康福祉大学高崎高等学校 副校長）
委 員	加 藤 陽 彦（高崎健康福祉大学高崎高等学校 教頭）
	金 沢 秀 二（高崎健康福祉大学高崎高等学校 教諭）
	黒 田 水 生（高崎健康福祉大学高崎高等学校 教諭）
	神 山 誠 一（白根開善学校高等部 部長）
	高 橋 洋 二（学校法人白根開善学校 事務部長）
	吉 川 潔（学校法人白根開善学校 事務）

特色教育部会

基 調 講 演

『建学の精神』 原点に立ち返る

学校法人白根開善学校 理事長・学園長 佐々木 克 典



私は昨年、長崎大会に群馬大会の準備として参加させていただきました。今秋、長崎県の1校に教員4名を研修に行かせていただきました。普通課程の学校で看護のコースもお持ちの学校です。その学校は軽度発達障害の子ども達を受け入れて、コースを設定して一生懸命取り組んでおられます。その発表された先生のお話をうかがって、その先生の熱い思いを感じました。

私達の学校にも軽度発達障害の子ども達があります。ですから積極的に取り組まれている学校で見学・勉強させていただけることによって、私も勉強になりますし、逆に「先生、ちょっと違うんじゃないですか」という部分もあるのではないかと思います。これからも交流を深めて、お互いの問題点を共有して、お互いに高められたらと思っている次第です。他校の取り組みを知るということは重要で大切なことだと思っています。私達の学校では、年1回、全国の学校に直接お伺いして、勉

強させていただいております。今年は2グループに分かれ、1つは長崎県、もう1つは山形県の学校、やはり寮制の学校ですが、勉強に行かせていただきました。今までに北海道、九州、四国いろいろな学校で勉強させていただいております。

これはマネができないなとか、ここまでやるんだとか、もしくはそれはちょっと違うんじゃないかというものもございました。ただ私学ですから、それぞれの学校の取り組みがありますから、違うところがあって当たり前ですし、それはそれでいいのであらうと思います。

今回、特色教育部会の委員長を仰せつかって、基調講演をどうしようと考えたのですが、私は私学に携わって33年、その中での経験や、いい意味においても悪い意味においても私の心の中にあります思いを、皆様に正直にお話しして、進めていくのがいいだろうと思い、本日午前中いっぱい私がお話しして皆様におつきあいしてもらおうと考えました。

特色教育部会では、それぞれの学校がその特色ある取り組みを紹介するだけではなく、お集まりいただいた先生方がそれぞれご自分の学校の教育理念とか教育の精神というものに思いを馳せていただいて、原点を再確認していただく機会にしていただければという思いで準備をしました。

白根開善学校は、昭和53年の創立で今年33

周年を迎えました。創立の前年の昭和52年、私は、創立者である本吉修二先生に大学で巡り会いまして、卒業と同時に山の学校に勤め、途中、私立の看護短期大学設立に関わり離れた時期もありましたが、教育現場の人間として長年やってまいりました。

2年前から理事長職に就いております。理事長といえば組織上、最高責任者であり一番偉い人になるのですが、授業もなくなり子ども達との距離が広がってしまい寂しい思いをしています。仕事といえはいつもお金のことが頭から離れず、裁判沙汰になりそうとか新聞記事になりそうなどちょっとまずいことになると出番が回ってきます。

出来れば他の人に代わってもらい先生に戻りたいと思っているのですが、他の人よりも「肝が据わっている」振りが上手いので、やらされているのだと思っています。

何かあれば、お前が責任を取れ、ということなのだと思います。

今日は理事長としてではなく、教育現場に携わってきた人間として皆様と共に私学に対する思いを深められたらと思っています。

私の長所は正直であることと思っています。時々、相手が誰であろうと正直に話すものですから、怒られることがあります。県の方であったり、教育委員会の方であったり所構わずやってしまいます。

以前、いじめの調査があり、把握している事例を全て正直に報告したら「白根開善学校はいじめが多いですね。ちゃんと指導、対応してください。」とわざわざ電話をしてくださった方がおりました。その日すぐに2時間かけて県庁まで行き、担当課長がちょうどおりましたので、「どういことでしょうか。本校は、問題を抱えている子ども達を積極的に受入れ、24時間全寮制で面倒を見ているのだから、他

の学校では見えてこないいじめも把握し、正直に報告している。いじめへの対応も当事者、保護者、父母の会に対してもきめ細かくやっている。それに対して『ちゃんとやれ』とはどういう意味ですか。これからはどこかの学校みたいに『いじめの認識はなかった。』と報告をさせてもらいます。」と言わせていただきました。

それくらい言わなければ、現場で日々苦勞している先生方に申し訳が立ちません。

先生方は寮で生活して、子ども達の人間関係も分かっている。子ども達の人間関係や元気がない、顔つきが暗い、口数が少ない等小さな変化も見え、寮を担当する先生方は毎日、そのことを寮日誌に書いています。生活指導担当の先生方は全ての日誌に眼を通し、必要があればその都度、会議が開かれ、毎朝の教職員のミーティングや職員会議で報告されます。そして、その場で子ども達への対応が検討され、全体で対処することになります。これだけやって「ちゃんとやれ。」と言われたわけですから、「私としてはこれ以上できません。」と。先生方も一生懸命、夜遅くまで子ども達と話をしたり会議をしたりしているわけです。

県の方々は3・4年で移動され大変だとは思っています。急に他の部署から私学担当の部署に來られなかなか内情が分からないという部分があるのだと思います。とはいえ、私学を担当していただく以上勉強していただくなければ困ります。そうしないで、数字だけを見て、「白根開善学校は何をしているんだと。」と言われれば、言わせていただくしかありません。私は言われ放しで黙っている必要は全然ないと思います。

私学助成では群馬県は全国で第3位です。その中でも私達の学校は生徒1人当たりの単価か

らいけば、他の学校よりたくさん頂いております。しかし補助金を沢山もらっているから黙っているという話ではないと思いますので、できるだけそういうことはちゃんとさせていただこうと思っています。

以前、県の担当者が、「白根開善学校は、県からの補助金を沢山貰っている割には群馬県の生徒が少ないですね。」と言われたことがあります。調べてみますと、群馬県出身者が25%から30%しかおりません。そのとき、当時の事務局長が『「子どもを育てるなら群馬県』という群馬県のキャッチフレーズは偽りか、群馬で育った子ども達が将来、日本のどこかで立派に生きて行くことができたならそれで十分ではないか。そういう尻の穴が小さいことを言っではいけません。』と言ったことがあります。最後は余計だと思いましたが、言うべきことは言う、大事なことだと思います。

私どもの学校は1年を3学期ではなく、5学期にしております。昭和53年当時は現在とは違い、ほとんどの学校は3学期制でありました。申請を担当しておりました当時の課長は、とんでもない話だとのことであり、それは認められないとのことでありました。しかし、3学期でなければならないという規定はどこにもないのです。当時の文部省に確認いたしました。4月1日から3月31日までを年度とすると書かれていますが、年度を3学期に分けるという規定がない以上、法律違反をしていないのですから譲る必要はないのです。

当時の県の担当者が文部省まで出向き確認し、3学期という規定がないことを確認してくださいました。課長は最後まで「それはおかしい。」と言い続けていたようですが5学期を理由に申請書の変更を求めたり、受理を拒否できないのです。

今では前期、後期の2学期制の学校もできて

います。

前例がないから駄目ということではなく、最初の例にすれば良いのだと思います。特に私立学校はいろいろな取り組みをしていいわけですから、法律違反をしない限り、網の目をかいくぐるつもりで新しいことに取り組んで、どんどん私学らしさ、その学校らしさを作っていけばいいと思っています。

5学期にした理由は私共の学校の在り方を考えると必要なことでありました。

3学期制とすると3ヶ月以上も何もない山の中で寮生活するのは子ども達も教員も限界を超えてしまいます。約2ヶ月近く頑張っ、2週間程度鋭気を養うために休む必要がありますし、都会の空気を吸いたくもなります。それが5学期が適当だろうということで5学期にしております。

今、私立学校の先生方は「教員免許更新制度」で頭を悩ませていると思います。私どもの学校でも昨年2人、今年3人が該当してしまいました。

これは先生方の資質向上を唱っていますが、公立学校の問題を抱えた先生方への対策だろうと私は思っています。

学校に車で出勤して、駐車場に止めて、授業に行きたくなくて車から降りられない先生がいます。これは先生に向いていないのだと思います。

公立学校の場合、どこかの県は、何億円もかけて研修センターをつくって、再教育をして復職をするまで面倒を見る。公立学校の先生方は公務員ですから身分保障がされておりますが、私学であれば当然解雇になっても仕方がない、それでも公立学校はお辞めいただくわけにはいかないのだらうと思います。そのような方のために、10年に1回きちっと教育を受けさせる。政権が交代して免許更新講習

が継続するか廃止になるかも見えてこない。

ある県の学校の校長先生が私達の学校に来た時、その話をしたら、それはおかしい、と仰っていました。なんでそんなにお金を使うんだと。先生を復職させるために、多くのお金を使って再教育して、でも一番大事なのは先生ではなく子どものはずなのです。先生に向いていない人が先生になると子どもが迷惑をします。

公立学校では、指導主事の先生は講習を免除されていると聞いておりましたので、対象者の2人のうち、1人が校長で、もう1人が勤続20年のベテランの先生でありましたので、教育委員会に校長が1人ともう1人は「指導主事相当」で免除するというふうに提出しました。すると教育委員会から連絡があり、「白根開善学校には指導主事という役職があるのか。確認するから組織表を出せ」と言われたと、担当の教員が困り果てて私のところにやってきました。私はすぐに教育委員会に連絡をして、「指導主事とは言っていない。指導主事相当である。勤続20年のベテランで学校で中心的な役割を担っていて、若い先生をリードしているから、構わないのではないかと。」「そもそも公立学校を主管する教育委員会に私立学校の組織表に関して、とやかく言う権限があるのか」と聞いたら黙ってしまいました。公立学校の役職の名前と違うからといって、上から目線でものを言われるのが私は我慢ができません。役職の名前が違うだけで組織表を出せとか認めないというのはおかしい。現実には私達の学校ではきちっとした役職に就いていますし、それなりの仕事をきちっとしている先生で、理事長・校長として出なくていいと判断している訳ですから、その判断に教育委員会が口を挟むのはおかしいだろうと思います。

私の大学の後輩が東京の私学で先生をしておりましたが、校長先生に呼び出され「君、辞めてもらえないか。」と言われ、彼は「私が一体、何をしたというのですか。」と気色ばんだところ、校長先生から一言「何もしないからだ。」と言われ、次の言葉が出てこなかったようです。結局やめて、私達の学校にやってきましたけれど、何年か勤めて、いろいろな才能を持った方だったのですが、授業は、「なるほど ザ・ワールド」というテレビ番組を録画し、再生するだけであり、何よりも寮で子ども達に向き合うことが出来ないのです。やはり先生には向いていないし、私達の学校の先生には向いていなかったのかなと思います。今は違う仕事をしています。

私学の場合は、向いていない先生は「何もしないからやめてくれ」と言われて、やめざるを得ない場面もあるでしょうし、何年か前に私のところでも先生におやめいただいた事もあります。

私も平成5年、詳しくはお話できませんが山の学校を降りていた時期がございます。決して悪いことをした訳ではありません。そして平成7年よりある学校の設立を手伝い、3年かけて認可をいただき、そのまま事務部長として勤めておりました。完成年度を迎える3年目、理事長の大学運営の中で学生の顔が見えて来ないのです。学長や先生方は一生懸命に取り組まれているのですが、理事長は経営優先であり、教育の中身に目を向けていないと思えました。命を懸けたと言えば大袈裟ですが、心筋梗塞になり、怖い思いもいたしましたし、ストレス性糖尿病にもなる程でありました。金儲けや学校設立資金の回収、学校を大きくすることに一生懸命になるのではなく、今いる子どもの教育に専念すべきであり、学校の基礎をしっかりと作るべきであると意見しま

したが、無理でした。結果として「あなたが辞めるか、私がやめるか。」となり、当然私が辞めることになります。納得がいけないことを続けるわけにはいきませんので、その場でやめると言ったのですが、「今やめられたら困る。このような辞表は受理できない」と言われましたが、辞表ではなくて退職届けです。「人事の権限は理事長が持っているが、やめるやめないは私の判断で、私の判断が優先するから、私は明日から来ない」といってその場でやめました。

そうしましたら、創立者の本吉先生より学校に戻って来いと言われたのですが、一度辞めた人間は採用してはならないと教えられておりましたので固辞したのですが、そのことを教えた人間がお前は別であると言われ、戻ることになりました。

戻ってみると学校内で派閥のようなものが出来てしまい、校長派と反校長派に分かれておりました。職員会議で校長・理事長が発言するとあからさまに反対意見を言い始める教員が何名かおりました。出戻りでしたから最初は大人しく聞いていたのですが、目に余るものがありましたので、「学校で校長、理事長が方針を決めたらそれに対して意見を言うのがいいが、その方針に従う中での意見であり、方針そのものに従えないというのであれば、辞めて自分の学校を作りなさい、世の中では“業務命令違反”だし、一教育職員が理事長に真っ向から対立するのであれば、辞職を前提に物申すのが普通、その覚悟がないのなら止めておきなさい。」という、何名かの先生はお辞めになり、何名かの先生は大人しくなり、今も頑張っている先生もいらっしゃいます。戻された理由がこれをやれと言うことだったのであろうと、後々、なんとなく判りました。

個々の先生のご意見は尊重されるべきだとは思いますが、理事長・校長が学校の方針を打ち出したならば、それが優先されるべきであり、先生方も個人のご意見は引っ込めていただくことが筋であると思います。

今、私は理事長になっておりますが、私はあまり教育に関しては意見を言わず、決定もしません。中等部・高等部の校長先生が考えてご判断されて、決めていただきたいと考えています。少し違うなと思えば意見は言わせていただきますが、校長が決めたことを上から覆すことはしたくないということです。逆に言うと、ご自分で判断しなくてはいけませんから、少し負担になるのかもしれませんが、しかし、そのような部分は私学では大事なであろうと思います。校長は学校の理念をきちんと理解して、その教育方法をきちんと実践する責務があると思います。私は理事長ですから、お金の心配をして、面倒な話に対応することであると理解しております。

ある全寮制の私立高校の校長先生から相談を受けたことがあります。設立準備の段階で私どもの学校に視察に来られたのですが、計画では当初、1学年80名程度の高校を考えていたが、その県には1学年の定員を200名以上とするとの内規があるのと指導を受け、240名の小規模学校を計画していたが600名の学校でないと認可をしないとされたそうです。実際に、600名分の寮をつくって、600名分の教員を採用しなければならない。その先生に定員を満たしたことあるのですかと聞いたら、「ない」と現在は600名の定員に対して160名だそうです。160名でも600名分の寮を管理しなくてはいけないし、教職員も採用したままにしなければいけない。学校の中で一番大きな経費は人件費なのです。恐らく、どこの学校でも経営状態が良ければ、70%くらい、本校の

ように、なかなか厳しいところは80%弱くらいまで人件費率がいつております。

その高校はどうなったかという、数年前から給料を減額して、賞与を支給してないそうです。校長先生に、「それじゃあ、先生は給料いくら貰っているの」と聞くと、我々の学校の30弱の若手の先生と同じくらいでした。一律ではないということでしたから、若い先生はもっと低い給料なのだと思います。

先生方にも家庭があって子どもがいて、子どもの教育がある。教育に対する情熱だけで生活が維持できないような状況の中で、先生方に頑張っていただくというのは私は無理だと思います。現在のように少子化が進む中で、600名まで生徒を回復するというのは難しいと思います。今回の全国集会の部会の中で私学経営部会は多くの先生方が参加されている。恐らく各学校で少子化のために生徒が集まらないということで苦勞されている証拠なんだと思います。私の学校でもそうですし、皆様の学校でも少なからずあると思います。

ですから私はその校長先生に、そういう法律の規定がないのにもかかわらず、県の内規を受け入れて、認可を貰ったことが間違いだと、私達の学校は1学年の定員が25名ですから、国の法律の中に200名なんて規定があるはずがございません。大学に確か80名という数はあったと思いますが、高校では1学年何名以上という規定はないはずです。折角、全寮制で教育理念を立ち上げて、志高く学校をつくったにもかかわらず、県の一方的な指導（県には指導していないと怒られるのですが）を受けて600名定員の学校をつくる、これはおかしい話なのです。県に対してきちんと意見を言わずに、先生方が経済的にご苦勞されるというのは、校長であり、理事長の責任であると思います。その校長先生には、よその学校であ

り、あまり突っ込んだことは言えないと思ったのですが、とにかく文科省に行って、その県は定員200名という内規を持っているのはおかしくないかと相談しなさいと。文科省はそんな法律はないと言ってくれるはずですから。そうしたら県に行って、文科省はそんなこと言っていないと。それでがたがた言ってくれば裁判をすればいいのです。裁判で戦えばいいのだと思います。そうでなければ折角、学校を信頼して子どもを預けてくれている両親、もしくはその学校に夢を持ってきた子ども達、もしくはその学校で頑張っている先生方に対して責任が果たせていません。

それを単純に「白根開善学校はどのくらい補助金を貰っているのですか。」「そんなに貰っているのですか。」「どうすればそんなに貰えるんですか。」と聞いてきます。それは日々努力をしているからです。そのような努力をしないで、あまり言う失礼と思ったのですが、「先生の責任ですよ。相談に来る前に、文科省に行ってくるべきです。私なら徹底的に戦いますよ、裁判でも何でもやって、自分の責任を果たしますよ。それをしなかったら、本来あるべき学校の形が守れないわけですから。その形を守らなければ、子ども達、両親、学校で一生懸命働いている先生達に責任が果たせない。そういうところをしっかりと考えるべきですよ。」と言いました。

私立学校というのは公立学校と異なって、独自の建学の精神、教育理念があって、それにのっとって教育方針、教育方法が成り立っているわけですね。ですからいろいろな特色のある学校があると思います。なかには進学校で東大に何人も進学させている。私はそれでいいんだと思っています。進学を売りにしている学校でいいんだと思います。また宗教教育。私も中高とミッション系の学校行き、

洗礼も受けております。神父さんの代わりに洗礼を授けてもいい資格も持っている。学校の中ではそのようなことは言いませんし、自分で隠れキリシタンというふうに思っていますので、宗教色は私の学校の中では出さないと決めています。しかし、仏教があったりカトリックがあったりプロテスタントがあったり、私はそれでいいと思います。女子教育に専念する、国際教育を行う、それぞれ最初から特色教育に取り組んでおられるのだらうと思っています。

ですから、私立学校というのは、歴史を遡れば、日本の教育の公立の学校が担えなかった部分を私立学校が引っ張ってきたというのは事実だと思います。そして、公立学校は文科省が決めたこと、教育委員会が決めたこと以外はできないんだらうと思います。

以前、ある県の校長先生とお話をした時、その県は教育県として有名なのですが、そのことをその校長先生に話したら、「今はそんなことはないよ。高校3年生のために放課後補習をしてくれないかと、職員室で声をかけたら、『それは講師で対応してください』という返事が返ってきました。」と言いました。自分のコマ数はやっているからそれ以上のことはしないということらしいです。本校で家庭の事情でお辞めになって、公立の先生になった人がいますが、赴任してしばらくしてから校長先生に呼ばれて、「あまり動き回らないでくれ」と言われたそうです。一生懸命子ども達のためにいろいろなことを考えてやろうとしているのに一人だけ目立つと困るから動き回らないでくれと釘を刺されたそうです。

私は、公立学校や教育委員会を批判するつもりはないんですが、いろいろな日本の教育の状況の中で、日本の私立学校にはそれぞれいろいろな大きな役割があるのだと思います。

私達の学校は100名に満たない小さな学校ですが、私達の学校を必要とする子ども達がたくさんいるわけですから、その役割を果たすために、私は言うべきことは言う、私達の学校の有り様を守るためには戦う、物を言う、その覚悟を持たなければならないと思っています。お上や県から言われたことを言われればなしということは避けたいと私は思っています。

私は教育の現場が長くて、皆様と同じような経験をしてきて、日々いろんな問題が起きて、その対応に走り回るわけですが、子ども達が一人一人違う、起きる問題が違う、一律の対応ではできないはずなんです。私達の学校の中で一時期、ルールが決まっていって、煙草を1回吸って注意され、2回目になると親を呼び出す。3回目に家に帰す。どんな子がやっても同じ対応をするのです。逆に言えば、1回すただけで家に帰すぐらいのきつい指導しなければいけない子もいるし、また、学校に入る前から1箱2箱もすっている子はきつく叱って終わりにする、いろいろな対応があっという間と思います。ただルールを決めてしまおうとそのルールにのっとって対応すればいいわけですから我々は楽なんだと思います。ですからルールも大事だとは思いますが、その一人一人の子ども、もしくはその問題についてしっかり吟味して、その都度必要な対応をするべきだらうと思っています。ですから学校の中でのルールはやめようと。それから問題を起こした子をなんでもかんでも家に帰すな、学校で問題を起こしたのなら学校で解決させなさいと。悪いことをした子が入らなければいけない寮がありまして、小さな部屋でおつかない先生が2人いて、1週間くらいそこで缶詰になって、夜は勉強、昼間は薪割りなどのペナルティーがあるわけですが、家に帰

してはならないよと。規則やルールを決めてやるのが一番楽なのでしょうが、そういうのはダメだろうと思う。

私達の学校の教育理念は、「人は皆善くなろうとしている」ということが大前提にあります。ぱっと聞くとすごく素直に心の中に入ってくるんです。子ども達はみんな良くなろうとして。だからその子ども達を信じて、頑張ろうよと素直に思えるのです。ただ現実問題、いろいろな子どもが来て、その子と対峙すると、無理じゃないかとか、本当によくなるのかとか、どうよくなるんだとか、最悪なのはこいつがいなければと思ってしまうのです。人はみんな良くなろうとしている、という学校なのに。私も実際にそういうふう思ったことがあります、「こいつ、いなければいいのに」。逆に1人の悪さをした子どもを何とか学校に残そうとしたら、その子どもから被害を受けた子どもが2人学校をやめてしまった。これはジレンマです。その2人の子どもも守らなければいけない。悪さをした子どもも必ずよくなるんだから、学校で面倒見続けなければいけない。両方がいっぺんにと言うわけにはいかないのです。寮で暴行事件がございました。我々としては、被害を与えた子どもを反省させ、保護者にも話をしてきっちりとした対応をするから、被害者とその親に何とか許してもらえないだろうかと話をしたが、なかなか受け入れてもらえず、警察に被害届を出して、現場検証や教員が警察に行って調書を取られたりしました。被害者の親から被害を与えた子どもを退学にしなければ子どもは学校に戻さないと強硬な態度に出られてしまって、我々としては、人は善くなろうとしているという前提があるのに、学校側からお前はダメだ退学だというのは基本的にないと考えておりますから、何とかご理解いただきたい

といったのですが結局ダメでした。被害を受けた子どもは、被害を与えた子どもがいると、そのときの不安感が戻ってしまって学校を続ける自信が無いと申しておりました。やはり最優先するのは被害を受けた子どもですから、被害を与えた子どもに対しては、「1年間諦める覚悟をしなさい。被害を受けた子が卒業したら、また学校に戻って、なんとか卒業しようね」と本人とも親とも話をしました。

ただ、親の方から「退学にしなければ」ということを言われて、それを受け入れてしまうと、私達の学校のあり様が否定されてしまうわけです。ですから私は、先生方、職員、厨房の職員にも、「これはお願いではなく、業務命令です。春休み、夏休みに加害者の生徒を学校に呼びなさい。そして食事を出して、担任の先生、寮の先生、厨房の職員、管理の職員、校長、私、とにかく学校にいて、子ども達の面倒を見よう。来年学校に戻れるように何とか切らないで続けていこう。そして何とかしてその生徒と卒業までつきあっていこうよ」といって学校に出てもらいました。これは個人の思いとしてやるのではなく、学校として取り組まなければいけない。決して学校から退学だとは言わない。私はこれは戦いだと思っています。先生方、もしくは親の中には、そこまでやる必要な無いんじゃないかという意見もあったと思います。しかし私は、そこまでやらなければ、先代の本吉理事長のつくった学校ではなくなってしまう、白根開善学校ではなくなってしまうという危機感がありましたので、これは絶対にやると。ですから先生方には休み中に大変ご迷惑をかけてしまいました。休みが減るわけですから。しかし、それは譲れないと、それをしなければ、本校は本校でなくなってしまうということでやり続けました。

私は30年間、「人はみな良くなろうとしている」ということをあまり深く考えずに過ごしたわけですが、やはり長い経験の中で“こいつがいなければ”とか“こいつは良くならない”という子どもに巡り会ってしまっているわけですから、私が至らないんだとは思いますが。私どもの学校の名前をつけていただいた村井実先生に、慶応大学名誉教授で教育哲学の先生ですが、創立30周年の時に来られたので、「先生、善くなるというのはどういうことなのですか」と聞いてみました。すると、「ちょっと変えた方がいいかもしれないね。漢字の『善く』は使わないほうがいいかもしれない。善という漢字を使うと対極に悪を連想してしまう。子ども達を善悪で捉えるのは間違いだと思う。子ども達は生まれながらにして悪として存在はしていない。生育環境や社会環境、友人関係の中で一般的に悪と言われているものに染まってしまっていくだけであり、子ども達を善悪で捉えるのは教育的ではないと思う。漢字ではなくひらがなで『よく』とした方がいいし、『よくなろうとしている』よりも『よりよく生きようとしている』の方が分かりやすいね。」との答えでした。学校の校門脇に「人は皆 良くなろうとしている。」と書かれた看板がございます。今更、変えることも出来ませんが、私は、漢字を使わずに「よりよく生きようとしている」ということを村井先生に聞いた時に、少し楽になりました。よくなろうとしている云々ではなくて、一人一人がよりよく生きようとしている。だから白根開善学校がその子ども達に対して、できるだけの手助けをする、そういう思いで取り組めばいいんだと思い、少し肩の荷がおりたことがあります。

以前、問題を抱えた子どもが入学してきました。授業に出てこない。出てくると大騒ぎ、

それですぐ殴り合いの喧嘩をして、大人のいうことは一切聞かない。それで、職員会議で「こんなひどいのは見たことがない、退学だ」ということがやはり出てしまう。私は、「人はみなよくなろうとしている」とはどういうことかをずっと悩んで考えて、少し答えのようなものを教わってきてのですが、よくなろうとしているという理念を持っていながら、学校側から「お前はだめだからやめろ」なんて、口が裂けても言えないはずなんです。しかし、職員室の中で“退学”という言葉が飛び交っていく。私は短気ですから、「なんでもかんでもうまくいかないのを子どものせいにするな。俺の授業はちゃんと聞くし、騒がないよ。うまくいかないのを子どものせいにして、退学という、あなたが退学だ」と言ったことがあります。校長先生からお前言い過ぎだと怒られました。今、職員会議では本校では退学という言葉は出なくなっている。どうしても経済的な理由などで、途中でやめていく子ども達もいますが、学校側から「お前は退学だ」といって、やめていただいた子どもは33年半経ちますが、一人もおりません。最後までつきあっていきたいと思っています。

そもそも退学処分の議論の前に学校とか先生がその子に対して、本当にギリギリまでやるべきことをやったのかという議論が先になればいけないはずです。問題を起こした子どもに話を聞くと、「あの子は正直に話をしてくれない」という先生がいます。私はその先生に言ってやるんです、「正直に話してくれないんじゃないんだよ」「あなたは正直に話す相手じゃないんだよ」「それだけまだ信頼がないんだよ」と。だから正直に話さない子どもを問題にするのではなくて、正直に話してもらえない先生を、まず問題にしなければいけない。それから、その子に対してどういう対応

をするかということを考えなければ、何となく、先生というのは偉くて、子どもは教わる立場、上から目線で子どもを見ている、そのような感じがしてなりません。

ですから正直に話してもらえない先生の問題をまず考える。そしてそこまでに至った中で、学校として先生として、私も含めてです、最善のことを最後までやり通したのか。その反省がなければ、退学という議論は本来はあるべきではないし、そこまで考えなければ本当の意味で子どもに向き合えないと、そのように思っています。

看護短期大学設立でいろいろな苦労した話ですが、端折って話しますが、3ヶ月でできるからと言われて、行ってみると、薄っぺらい申請書を持って文部科学省に行くから一緒に来てくれと言われ、それを見て、私は絶対無理だからやめた方がいいと、その理事長に言いましたが、聞いてもらえず、仕方なしについていったら、最初は私学行政課、次が医学教育課、次が専門教育課そして次にまた私学行政課とたらい回しにされて、4回目にやっと「出直せ」と言っていた。絶対受理してくれるわけがない。それで3年かかって申請書をつくって受理していただいた。大学名も考えたし、カリキュラムも作りました。

今、成人看護学というものがいくつかに分かれて、成人看護、慢性期と急性期、あと老年看護学とか精神看護学というふうに分かれてますが、当時はまだ分かれていませんでした。それを私は分けていろいろ考えて、とにかく教科書を何ヶ月もかけて読み込んで、新しいカリキュラムをつくりました。そして、申請書類の設立趣意書もつくり、看護短大をつくるべきだ懸命にやってきました。

カリキュラムをつくっていった、大学名を考えた時に、看護の人材を育成するという教

育目標の他に、国際医療福祉に貢献するということをつけてしまった。そして、カリキュラムをつくっていく中で、医療と福祉という科目を設定して、恐らく教育理念からして国際をつけた方がいいと思い、安易に「国際医療と福祉」という科目をつくってしまった。それで東京の大学で助教授をされていた、今はもう教授でジェンダー論で男女参画問題で頑張っている先生なのですが、日本の医療・福祉に関しては業績を持っていたのですが、世界の医療・福祉というのは全然持っていないということで、専門委員の先生から不可を頂いてしまった。それで文科省の役人さんが、「国際を取ればこの先生で合格しますよ」と、これは悪魔の囁きみたいなものです。それに思わず「はい」などと言ったりすると、大変な目に遭ってしまいます。この段階で「国際」を取ってしまえば、大学の名前が、教育理念、教育信念とどういう整合性がとれるんだ、整合性が崩れるだろうと間違いなく言われます。「とります」なんていうと大変なことになります。2年9ヶ月もかかっていますから、今さら教育理念まで遡って変更はできません。ですから仕方ないので、それでは業績のある先生を探しますと返事をしたら、そのあとに、「日本にはそのような先生はいませんよ」と教えていただきました。

探すと返事をして、群馬大学の先生に誰か知らないかとお聞きすると、埼玉県の某大学の学長なら知っているかもしれないと聞き、そしてその先生を追いかけ回しました。ようやくその学長に電話に出ていただきましたが、「お前は何者だ、なんでこんなにしつこいんだ」と言われました。それで、事情を話し、何とか助けていただきたいと言いましたところ、それならば、S先生というのがいるから訪ねてみるということで、大学を教えていた

だいた。今度はその S 先生を追いかけ回しました。当時74歳でご高齢だったのですが、経緯を話すと講師を受けてくださいました。そのとき、その S 先生は「よく踏みとどまった。大学としての理念を守らない大学であれば私は受けなかったと思うよ」と言っていたき、そのときの安堵感は今でも覚えています。

逆に、国際平和に貢献するとか、国際医療福祉とか頭にひっつけたために、いまだにトラウマになっていて、何かあると、原点に戻って考えないと痛い目をみるぞ、ということが頭の中にこびりついているのです。

そして、その S 先生に業績をくださいと言うと、S 先生は本1冊出して、これだけでよいと言われ、文科省に持って行ったら、担当者に、「あの S 先生か」と言われ、私は何も知らなかったの、S 先生です。業績を出してくれとお願いしたところ本1冊しか出していただけなかった」と言う、担当者が「よく受けてくれましたね。大学で教えていいかを判定する専門委員のほとんどが S 先生の教え子である」と言われました。私はそんなにすごい先生とは全然知らず、金沢大学、東京大学、日本女子大学の教授を歴任されて、大変ご高名な先生でした。最後は新潟の方の大学で学長をされました。数年前に亡くなられたのですが、そのようなえらい先生とは知らずに追いかけ回してしまいました。しかし、その先生から「よく踏みとどまった」と言っていたいて、私は文科省に対して、「国際をとります」と言わないでよかったと、今でも思っています。

あまり理念について深く考えずに、安易に国際平和なんてつけたものだから、国際医療福祉というのは格好いいかなという程度で、素人ですから、科目を設定して、痛い目を見ただと思います。

その当時、教授、助教授、学長探しから、いろいろなことをやっておりましたので、理念があって、方針が決まって、教育方法なりカリキュラムが決まっていくという下からの積み重ねということに、忙しさにかまけて安易に考えていたのだと思います。

白根開善学校の教育理念というのは「人はみなよくなろうとしている」ということでもあります。これが原点になります。そうするとこの原点をもとに白根開善学校のあり方というのが必然的に決まってしまうわけです。

まず、「人はみなよくなろうとしている」ということであれば、誰でも入学できなくてはならないということなのです。ですから学力とか入学前の素行で判断してはならない。ですから学力による入学試験は行わないということです。面談と1週間の体験入学を通して本人に判断をしてもらう。本人が頑張りたいと言ったら、基本的には不合格はありません。ただし、専門の医師の治療を優先しなければならない子どももいます。そういうときは、まず治療を受けてもらい、その治療が終わったら、もう一度体験入学してもらい、学校に来るか来ないか決めてもらいます。そういうふうには不合格ではなくてお詫びの手紙を渡すというのが私達のスタンスです。

いろいろな子ども達が来ます。中には、化粧がすごい女の子で、面接室に入ってきた途端に名刺をくれるのです。クラブの名刺です。高校生です。いい生徒でしたよ。ただ地元の暴力団の一人につきまとわれて地元にいられなくなり、私達の学校に来ました。最初の頃は休みの度に帰っていたのですが、そうするとその子の家の周りを暴力団の方々が見張っているのです。ですからもう帰せないということで、何とか他の所で休み中も生活させるということで親と相談したこともございます。

また、18歳になっても中学校を卒業したことになっていない子どもがおりまして、18歳から中1を始めたのです。中学生で車の免許を持っていたから。もう一度やり直したいと言って、18歳なのに13歳の子ども達と生活をして卒業していった子もいます。少年院を退院した翌日に入学してきた子もいます。特別支援学校から入学してくる子どももいます。そうしますと、積み重ねが必要な、英語とか数学とか国語というのは同じ学年で授業ができないのです。ですから中等部は5つとか6つ、高等部も5つとか6つ、そういうクラスに分けて、学年の進度にそった勉強をするクラスと英語であればA・B・C…から始めるクラスというものもつくらなければならない。ですから全体の生徒数も少ないですが、クラスの生徒数も10人以上のクラスというものは本校にはありません。少ないクラスは2・3人です。私も10人以上のクラスというものはほとんど経験したことはありません。大体5・6名で、一人一人に声をかけながら授業をする、そういう形になってしまいます。ですから教員がたくさんいないとできないわけです。本校の場合、専任教諭1人当たりの生徒数は4人程度です。17人の専任教諭がおります。恐らくものすごく贅沢なのだと思います。なぜそのようなことができるかという、やはり群馬県から多くの補助金をいただいているからです。そうでなければ経営は成り立たないと思っています。

寮の方についても、子ども達の自主性に任せられればいいのですが、そうではないケースがほとんどです。幾つかの学校が寮をつくりたいと言って本校に視察に来ましたが、ほとんどの学校は1つの寮に50人60人入れて、宿直の先生が1人ずつ交代で泊まるという形をとっています。我々の学校の場合、教員が舎監

として、寮に住み込みます。先生が授業もやって寮もみる。そして先生方一人一人がみる子どもの数は5・6名です。5・6名先生1人が担当しています。子ども達の生活スペースの脇に先生の部屋があります。ですから夕食後とか、9時に点呼の黙想があるのですが、その後は大体、生徒は先生の部屋でテレビを視たり、お茶を飲んだり、先生の話の聞いたりしています。大変関係が密になりますし、子ども達との信頼関係は、1人の先生に60人の生徒がいるような寮とは違って、大変密になります。

それで生徒達が悪いことをすると、薪割りのペナルティがあるわけです。斧を使うわけですから、子ども達だけでは危ないので、担当している生徒指導の先生達が毎日、放課後になるとヘルメットをかぶって薪割りをします。その中で、先生と子ども達との関係は非常に深くなっていく。そういうことが大事なのだと思います。このように考えていくと、1学年に200人も300人もいるとできる話ではないのです。ですから私達の学校はどんなに多くなっても100人くらい、それ以上生徒が集まることはないと思いますが、それ以上になれば、もう一つ学校をつくれと言われていきます。子ども達に目の行く届かないような、学校にしてはならないよと。だから100人を上限にした小さな学校で何とかこれからもやっていきたいと思っています。

それから、誰でもが入学できる学校で、特別支援学校から軽度発達障害の子どもとか知的にハンディキャップを持った子どもが入学して来ます。そうした時に、彼らの卒業後の進路は大変厳しいものがあります。進学は難しいですし、就職もなかなか難しい。知り合いの自動車の下請け会社の社長にお願いして就職をお願いしたことがあります。給料が月に5万円もらえます。障害者手帳を持っている

と月に5万から7万円いただける。そこで働いているパートの人達は、月に10万円いかない。そうするとどういふことが起きるかという、パートの人達が、どうして仕事も何もできない子が自分達より給料がいいのかということになる。それで何をするかという、仕事の邪魔をする、作業着を隠す、弁当を捨ててしまう。人とのつきあいは苦手な子ですが、言われたことはこつこつやる、でも居たたまれなくなって会社を辞めてしまう。

障害者手帳を持っていると、就職の時に企業は一定の割合で採用しなければならない。それで、ダスキンに勤めて、本人は喜んで働いていたのですが、担当のダスキンの正社員の方が一生懸命面倒を見てくれました。それで、給料日に歌舞伎町の風俗まで面倒見てくれてしまったのです。そうするとその子は、給料日になると歌舞伎町に行ってしまうのです。そこに長く勤めていくわけにはいかないということで、辞めざるを得なくなりました。

やはり、ハンディキャップを持っている子ども達が、作業所、授産施設で、朝の9時頃から15時、16時頃まで働いて、彼らの場合は給料という表現は使いません、工賃と言いますが、それが全国平均で月額1万円、1万円しかくれないのです。その施設には子ども1人当たり10数万円の補助がおりているはずなんです、その補助金は子ども達の給料、工賃には反映させていないのです。平成14年、障害者自立支援法なるものが制定されました。最近、世にも稀な悪法ということで改正されたので良かったと思っています。

子ども達が授産施設、作業所に行くと今までとはとられなかったのに、施設利用料、バス送迎費、昼食代をとられる。そういうのをとられると、月額3000円にしかならない。そうす

るとその3000円で子ども達は、親が生活しているうちはいいですが、生きていけるのでしょうか。到底難しい話です。

誰でも入学できると言いながら卒業したら後のことは知らないでは余りに無責任です。

ですから、本吉先生と相談して、NPO 法人の自尊共生舎というものを作りました。

なぜかという、在学中にハンディキャップを持った子ども達を教育するのは、これは教育だからいいんですね。ただ、卒業した後に、子ども達の面倒を見ると、これは教育ではなくて福祉になってしまうのです。学校は福祉に関わってはならないのです。学校法人は収益事業をしても良くて、ホテルでも印刷でも何でもいいわけです、法律で決まっています。ただ福祉が入っていないのです。卒業した子ども達を学校が預かれない。それであればワンクッション置いて、NPO 法人を立ち上げてそこでやろうと言うことになったのです。しかし、今少子化が進む中で、学校経営が難しい時に、NPO に対してあまり大きな支援ができない。私は今、NPO のままでいいのか大変悩んでいます。もしくは何とか理由を考えて学校の収益事業として、彼らを補助職員として採用して、1万円ではなくて、2万円でも3万円でも5万円でも払って、何とかそういう基盤を作ってあげなければいけない。そこまで考えないと、私達の学校の「人はみなよくなろうとしている」「誰でも入れる学校」ということを考えた時に、誰でも入れたけど、出た後のことは知らないでは、学校の基本的な考え方にたどり着けていません。ですから私はもう、58歳になって、そう長く、先代の理事長は79歳、先代の常務理事は87歳までいましたが、そこまでやりたいとは思っていませんし、何とか法人の役員に定年制をつくって、歳が来たら、すぐに横浜に帰りたいとい

う思いが強いものですから、恐らく残された時間は10年程度だろうと思います。

私の大きなテーマであって、最終的な目標は、そういうハンディキャップを持った子ども達が、ある程度自尊心を持って、自分でお金が稼げて、仲間と厳しくても辛くても、その中で楽しく生きていける、そういう場所を作らなければいけない。それができなければ私達の学校の教育理念が嘘になってしまうと思っております。ですからあと10年の間にその方向付け、できれば経済的な地盤を作って、何とか次の世代に引き継ぎたい、これが私が抱えている一番お大きなテーマです。そうでなければ本吉先生が作られた学校が本物にならないのです。ですから私はなんとしてもそこまでもっていきたい。それが私の役割です。そうでなければ開善学校は嘘つきになってしまうし、中途半端な学校になってしまう。何とか学校の理念を完結させたい、そういう思いで頭の中を悩ませています。

ちなみに学校で鶏を飼っていて卵を産ませているのですが、今年の夏、天皇、皇后両陛下が草津に泊まれたとき、私の学校の卵が提供されています。ホテルの調理長が開善学校の卵がおいしいことを知っていて、「ください。」と言われたので、すぐに届けて食べて頂きました。皇室御用達の卵であります。

とにかく、問題を抱えた子ども達が、社会の中で阻害されて、家にこもって、辛い思いをして、親が不安になって、一緒に死んでしまいたいという親も中にはいるのです。何とかお手伝いをしたい、そういうふうにあります。

私立学校は公教育では担えない部分を担っているのです。文科省というのは、日本の教育の方針を決める。教育評論家といわれる人もいっぱいいる。日本の教育について考える

ことは必要です。ただ私は日本の教育を語るつもりはありません。正直申しあげて、私は自分の学校だけで精一杯です。

ですから皆様も、上から、文科省が言って、日本の教育を変えるのではなくて、皆様が自分の学校で精一杯いい教育をすれば、文科省が何をしようが、日本の教育なんてすぐ変わるものだと思っています。

ただ公立学校というのはそれがなかなかできない。ですから日本の教育をリードするのは私学だということは当たり前だと私は考えます。今までも私学が日本の教育を引っ張ってきたと思っています。

是非、皆さん、学校の中で、ご自分達の学校の理念とか方針をきっちり考えられて、子ども達一人一人はかけがえのない存在でありますから、その子ども達のためにできるだけの支援を頑張ってください。

最後に私が大切にしている白根開善学校の創設者である本吉修二先生の言葉をご紹介します。終わらせていただきます。

「みんなが、誰でもが、いつからでも、いつまでも創立者としての自覚を持たねばならぬ、誇りを持たねばならぬ。

山の学校に関わる人は、ひたすら善く生きることが可能となる学校を常に求めて活動することが期待されるのであり、父母会、後援会、同窓会とか、その表現は成員の学校への関わり方によって違おうとしても、学校をしっかりと見つめ吟味して、より善い学校と教育の理想の灯を掲げて生きる集団なのだ、人間なのだと考えなければならない。このような自覚なくして、この山の学校の明るい未来はない。もしあれば立派に生き続けるだろう。そう考えると、それぞれ何をなすべきかが明らかになるはずである。」

常に私達の学校の有りようを吟味しなければならない。ですから、先ほどお話しした「退学にさせなければ学校に戻さない」、これを受けてしまったら、私の学校は終わってしまうのだと思います。本吉先生から言われております。「子ども達にとってよりよい学校でなくなるのであれば、その場で潔く門を閉めなさい」と。私の代で潰したくはありませんが、万が一子ども達にとってよりよい学校でなくなるのであれば、私は本吉先生の言ったことは守らなければならないと考えております。

ただ、私が理事長であるから私が正しいということにはならないということは私は分かっています。意見があれば先生方は言えいいのです。親の方にも私の方からそのように言うております。「言いたいことがあったら、我慢せずに言いなさい」と。ただし「言う以上は自分も言われることは覚悟しなさいよ」と。子どもを真ん中において、親と先生が、子どものために議論するのであれば、必ず良い結果が出てくるであろうと思っております。

ですから、是非先生方には、本来あるべき学校を守るために、覚悟を持たねばならない。私自身はそうに思っておりますし、戦う

べき時は戦うべきだと。

あとは絶えず、自分の学校について吟味をしなければならない。それが正しいんだ。子どもにとってですよ。学校の経営者とか先生にとってではないですよ。子どもにとって正しいのかということを吟味したい。そういう思いを皆様方と共有して、私が先ほど言いました、文科省が日本の教育を変えるとはこれっぽっちも思っておりません。我々を変えるんだと。それぞれの学校がそれぞれの良さを発揮すれば必ず日本の教育はよくなる。東日本大震災で日本の社会、価値観というものは変わろうとしているのだと私は思います。日本の教育は変わらなければいけないし、社会も変わらなければいけない。恐らく変わらないのは政治だけだと思います。あまり期待してもいけないんだと思います。そうであれば、我々が私学としてできることを精一杯やって、それが恐らく次の世代に繋がっていくことだろうと思います。私は今の自分がこういう立場になってそういうふうに考えておりますし、そのことを先生方に理解してもらって、子どものために頑張ってもらいたい。そのように思っております。



研究発表Ⅰ

「山の小さな学校の取り組み」

学校法人白根開善学校 理事長・学園長

佐々木 克 典

白根開善学校はどういう学校なのか、私自身はどう関わってきたのか、そして、今まで山の学校で耐えて生き抜いて卒業していった子ども達、もしくは我々の力及ばず途中で山を下りていった子ども達、いろいろなことを思い出してまいりました。こういう機会を与えて頂かないとこういう思いに至らないので、今回は有り難いことだと思っています。



最初に学校の設立の経緯、そして学校の概要についてお話します。

昭和52年、今から34年前、受験戦争の最中、一人ひとりの子ども達の能力や個性を生かした教育を目指した新しい学校創りの計画が具体的に動きだしました。創立者である本吉修二先生、当時、東邦大学で教授をされ、慶應大学で講師をされておりました。先生の仲間である数名の先生方と既に構想は出来上がっておりました。設立資金の確保、学校用地の選定、校舎の設計、設立申請の準備等具体的に動きだしたところ、昭和52年11月の新聞記事に「落ちこぼれ、集まれ。」と書かれてしまいました。反響にはすごいものがあり、全国から問い合わせが殺到いた

しました。大人達の敷いたレールから外れた子ども達を「落ちこぼれ」と決め付けて平気でいられる社会に違和感を覚えたことを記憶しています。

学校創りに共感した親達、先生方、私のような学生が集まってまいりました。しかし、設立事務の素人集団でしたから県の担当者お二人には大変なご迷惑をおかけしました。ご苦勞された分、気にしていただき定年後の今でもお付き合いがございます。時々、お電話をいただき、本等を送ってくださいます。

学校法人認可と中等部設置認可が昭和53年7月1日と書いてございますが、4月設立を目指しておりましたが資金不足、200万円だったと記憶していますが、県に申請書を受理していただけず、認可前にも関わらず、4月28日に校舎と寮一棟しかない山の学校に子ども達と共に登りました。

高等部の設立も4月ではなく6月、やはり資金不足からでありました。

創立時の学校は想像出来ないほどの苦勞がございました。あまりの山奥、教員も調理師も逃げてしまうのです。勤務時間は朝の6時に始まり、翌日の授業準備が終わるのが夜中の2時、3時でありました。一番滞在時間が短い先生は夕方に着かれて、翌早朝にはおられませんでした。調理師がいなくなるわけですから、朝は当番制で4時に起き、朝食の準備。昼食にホットケーキを200枚焼いたこともあります。勉強どころではなく、生活するのに精一杯でした。

特別、学校の教育内容とは関係ないのですが、お話することがございます。

最近、もったいない精神という言葉は耳にしますが、白根開善学校は何でもいただきます。

設立前は生徒用の机を東京まで貰いに行き、教職員の机は慶應幼稚舎からお古をいただきました。体育道具は今は無きソニー学園のお古をいただきました。東急建設の独身寮を閉鎖するときには立派なシングルベッドを80ヶ近く、トラック2台で運んでいただきました。県内の養護学校が校舎を建て直すと聞くと、トラックに乗って駆けつけ、ロッカー、石油ファンヒーターを貰ってきました。コンピュータは最初は25台ほど購入しましたが、今は県内の大学とか高校から3年落ちのものを貰ってきて50台ほどあります。トラックは2台あるが2台とも卒業生の親からいただいたものです。

現在、図書館の蔵書は40,000冊近くあります。

毎年、数十万円は購入していますが、寄贈図書が多くあります。どこへでもいただきにまいります。

3年前、図書室拡張工事をいたしました。それに併せて本棚を検討いたしましたが見積りが4,700,000円であります。とてもではありませんが本棚にそんなにかけられません。そんな時に近くの小学校が校舎の建て替えを行なうとの情報が入りましたので、出入りの建設業者の現場監督に調べてもらおうと県内にある家具屋に特別に注文されているとのことでした。今までの本棚は校舎取り壊しと同時に壊されてしまう予定でした。町の教育委員会に「壊すなら、ください。」とお願いすると、「2日以内に取りに来られるのならいいですよ。」との返事をいただき、大工さん3人と私と教職員3人で壁から本棚を剥がし、トラックで運び、今は私どもの図書館の壁にあります。若干痛んでいるところは直せばいいのです。大工さんの日当と補修の材料費だけで15万円くらいで済みました。教育委員会には完成後の写真と草津の温泉饅頭ですませてしまいました。

群馬県の地方新聞社ですが、本社屋を建て直すので会議用机が大量に出るがどうですかという連絡がございました。2トントラック2台で貰

いにいきました。似たような人達がいるようです。行ってみたら先を越されていました。

白根開善学校は何でも貰うとの評判で、個人の方からお声がかかるようになってしまいました。先日も個人の方から引越しをするのだが、新しい家が小さいので全部持っていけない、殆ど使っていない来客用布団等はいりませんかというお話をいただきました。当然、いただきにまいりました。

今までで一番の大物は200号の絵であります。調べてみましたら号15万円もいたしました。少し痛んでおりますが、それなりの値段だろうと思います。創立者本吉修二の故郷、鹿児島島の桜島の絵ですから売るつもりはないのですが、困ったときは売ってもいいですかと確認はいたしました。

物だけでなく、金は出すが口は出さないことを条件にお金もいただけるのであればいただきます。

寮が老朽化してまいりましたので、新しい寮を検討しているとき、日本財団が福祉関係だけでなく、私立学校への助成金も考えているとの情報があつたものですから、虎ノ門の本部を尋ね、寮建設資金への補助をいただけないかと相談したところ、前向きに検討してみましようとのことでありました。設計図も完成し、最終的な金額が出てきたときに、寮に住む先生方の部屋が大きすぎるのではとのクレームがついてしまいました。その場で資料を閉じて、「学校の寮のあり方、教育方法に口を挟むのであればお金は結構です。」と席を立ったことがあります。結果は、引き止めていただいてホッとしたのですが、助成金を建設費の半分をいただきました。小さな日本財団の看板を玄関につけるだけが条件です。それ以外に一切日本財団からものを言われたことはないです。ただ助成をしたことをホームページに載せていいですかといわれたので、いいですよと答えました。それだけです。それで6千万近いお金をいただけたのは有り難いことでした。

設立の経緯ということで、お金がなくて認可

がずれ込んで、設立後もお金がない学校ということをお話しさせていただきました。何でもいただくことも。私は今でも一緒に貰いにいきます。大工さんがやめると言えば、必ず、木だとか鉋だとか釘だとか、年賀状の書き損じをいるかと言われれば50枚でもいただきます。5円出せば代えていただけるわけですから。このように節約をする。

何年か前に、陶芸の授業で希望者が7名いるが電動ロクロが5台しかないので、2名を第2希望に回すと担当教員が言っておりました。大きな勘違いです。生徒の希望が最優先されるべきなのです。2名を第2希望に回すのではなく、電動ロクロを2台買えばいい話です。私は大変けちではありますが、お金の使い道は知っているつもりです。その場ですぐに業者に連絡して、1代15万円位しますが、手配しなさい、希望した子どもが陶芸をできるようにしなさい、と。けちはけちでいろいろ節約しますが、子どもの教育に関しては先生方から言われたことで一度もダメと言ったことはありません。逆に子どものためになることであれば、1千万でも1億でも持ってくればいいと思います。それくらいのことは何でもしてやるから、いろいろな楽しい企画なり何なり考えて持ってきてなさいといっています。

設立の経緯の話でした。設立前も設立後もお金のない学校であります。

教育理念については講演でお話いたしましたので、学校の具体的な内容についてお話をいたします。

(1) 立地、自然環境

最初に学校の立地、自然環境についてお話をいたします。

特色教育には関係なさそうですが、学校のある場所が私達の学校の特色の一つになっています。

写真は上空からの写真であります。敷地面積は70,000㎡、周囲は別荘地であります。完売されていますが別荘は一軒だけであります。水がありません。学校は写真の左上から自前で湧水

を4km引いています。これまでに3000万円以上はかけていると思います。



航空写真（標高1,160メートル）

草津温泉まで車で20分程度、夏は気温は30℃を越えることはなく、季候のよい場所です。白樺林の中に校舎、生徒寮が点在しております。自然が豊かであり野性動物が多くいます。写真は図鑑からのものではなく、実際の写真であります。



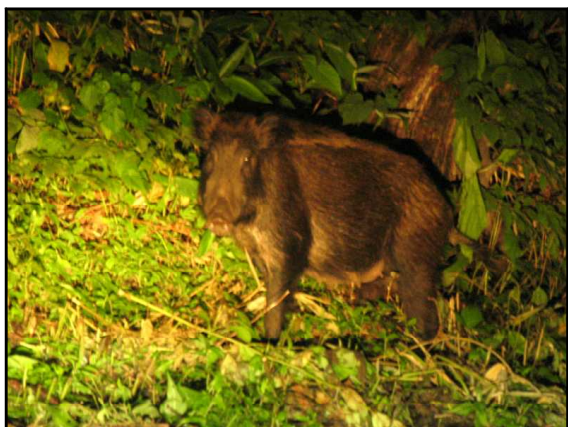
天然記念物 日本カモシカ

熊の写真は巡り会うとおっかないので撮れていません。

日本カモシカは天然記念物で捕獲してはいけなないので余り人を怖がりません】、キツネ、タヌキ、少し離れたところにハブもいるようです。毎年、群馬県の北部で、山菜採りの季節になると、熊に襲われて大怪我をするというのは本校の近くです。子ども達が外出する時、その季節は熊ベルというものをつけて歩かないと危ないです。そのくらいの山奥です。

猟友会の皆さんが熊を仕留めており、解体ま

で見せていただいたことがあります。



イノシシ

写真は桜です。5月に梅と桜が同時に咲きます。



5月に咲く桜

冬は氷点下18℃まで下がる厳しい環境にあります。お風呂は独立した建物になっており、入浴後、寮まで1、2分なのですが、走って帰っても髪の毛が凍ってしまいます。



北海道より寒い冬

見学者や親達は季節の良い時に来て、素晴ら

しい環境だ、心洗われるなどといいます。とんでもないことです。親には「よい時にばかり来ないで2月の一番寒い時に来て下さい。朝、吹雪の中目も開けられないのに、体育館に行って氷点下10℃のところで黙って5分座って下さい。それを経験しなければ、子どもがどれだけ頑張って我慢して、どれだけ子どもが偉いのか分かりませんよ。」と言いました。今は3分の2くらいの親御さんが2月に来てくれます。本当に厳しい中で生活をしている。親御さんにもそのことは分かっていたかと思いますが、と思っています。

教室は薪ストーブです。先生方は除雪車で雪かきをします。雪かきをしないと薪を取りに行けなくなってしまいます。また、雪下ろしをしないと鉄骨の屋根も歪んでしまいます。天気予報を見ておりますと北海道の札幌よりも寒いようです。

一番近い集落まで2km、一番近いバス停「花敷温泉」まで7km、自動販売機も公衆電話もありません。携帯電話は学内にいるときは預かることにしています。ですから、親や友達とのやり取りは手紙が原則となっております。手紙が苦手な子ども達のために手紙塾なるものが週1回あり、長い間続けています。ですから郵便屋さんは結構人気があります。

教育よりも厳しい自然環境や寮生活という煩雑な人間関係の中で、子ども達は鍛えられているのかも知れません。

(2) 全寮制中学・高等学校

全寮制の学校ということで、これは中等部の校舎です(写真略)。一番最初に、昭和52年の冬に建てた建物で、違法建築っぽいのですが、業者に騙されて、本来は鉄骨が45cmのものが入ってなければいけないのが25cmのものしか入っていない。耐震補強しなければいけないので、中に鉄骨を入れたり鋸を入れたりして全部で4000万円くらいかかってしまいました。構造計算上危なくなくなるまではやり直しておりますが、業者の方に手抜きをされたのですが、それが分かったのも建ってから20年くらいでした。

次に図書館ですが(写真略)、私はこの建物は

好きではないのですが、校長先生の趣味でこのようになっております。図書館には先ほどお話ししたしました貰った本棚やその他にも壁一面に頂いたものが並んでいます。本当に助かったと思っています。

食堂は一度に150名くらい食事ができます。鯉のぼりのポールと、クリスマスツリー用のモミのみが置いてあります。中学生もおりますので季節のものはやってやりたいと思っています。

体育館は昭和57年くらいにできました。1億円くらいかかっておりますが、当時私達はかなりの薄給で、どうして1億円もあるのか不思議でしたが、とにかく、冬場雪で生徒達が動けないので、体育館は最優先で建てるということで創立4年目で体育館を建てました。

生産技術センターというものを持っておりまして、ハンディキャップを持った子ども達の就業支援のためにニワトリを飼っております。在校生がお手伝いで卵を洗ったり、専任の職員もおります。私のテーマとしてももう少しこの辺を充実・発展させたいと思っている建物です。



寮外観（観智寮）

これ（写真）は寮です。先生のスペースは家族で住める広さです。生徒は6人ずつ2部屋12人くらいが生活し、2人の先生あるいは家族が入って生徒達と生活をしています。今は少し変えて、担任の先生が入って寮になじめない生徒達をお預かりするような形になっておりますが、大体他の寮は、5・6人の子どもと先生が近いスペースで生活を共にしています。先生と生徒は

一緒ですから、朝6時40分に起きて体育館に黙想に行って、朝食を一緒に食べて、学校に来て、昼食を一緒に食べる、夕飯も一緒に食べる、そういう環境の中で子ども達と一緒に生活をするので、子ども達との距離は近づいているなと思います。寮の1階、2階の両サイドに先生が入って、その左右に子ども達のスペースがあります。

自立寮という悪さをした子どもが入る寮があります。小さい建物ですが、ここで厳しく、勉強、反省ということで、家には帰さずに学校で解決しようということ、そのような寮になっています。

鉄筋コンクリート3階建ての、日本財団から助成金をいただいて建てた寮があります。玄関に財団のマークを付けることだけが条件であります。

子ども達の独立している大きなお風呂もあります。一度に20～30人入れます。



寮室内（プライベートスペース）

これ（写真）は生徒のプライベートのスペースです。かなり余裕を持たせています。完全に個室にするとあまりよくないので、半個室のような形、壁を途中で切ってしまって、完全な個室にしないで、できるだけ子ども達のプライベートを守るようにということで、工夫をしています。

【寮生活】

寮生活では担当教職員1人当たり5名から8名程度の生徒を受け持ち、「生活班」を構成しています。

画像省略

子ども達の生活スペースの隣に教職員の部屋がございます。夕食後や夜9時の黙想「点呼」後は子ども達が先生方の部屋で過ごしています。各寮に2人から4人の教職員が子ども達と一緒に生活しています。

自立寮といいます。学校で悪さをした子ども達が反省のため、入る寮であります。問題を起こしたからといって家に帰すのではなく、学校に留まり、放課後は薪割り、夜は勉強の毎日です。担当教員はベテランの先生2名、厳しく指導しています。

日課表(略)には、6時半に起きて、学校に行く時間、昼食の時間、夕食の時間、黙想は何時ということなどが書いてあります。基本的には先生達もこれと同じ形で動きます。ですから先生方は授業もしなくてはいけないし、寮も見なくてはならない。

画像省略

これは（上の写真）食堂で、メニューは300gのメンチカツだと思います。本校は冷凍食品はほとんど使いません。調理師が手作りで作ってくれます。

片付けも自分達でやります。草津の板前の調理長は子ども達に絶大の信頼があります。我々教師が聞いても答えないことがあります。彼が聞くと、子ども達は正直言ってしまいます。以前体育館の窓ガラスが割れて、誰が割ったか分からない。私が「責めもしないし、弁償もなくていい。ただ正直に言ってください。」と話しても誰も言うてこない。丁度その調理長がいるところで誰も出てこないんだよと愚痴ってしまったところ、30分後に生徒2人がやってきて、「僕達がやりました。」と。私が「どうしたの」と聞くと、「調理長から、『お前ら男じゃない』と怒られました」と。

「食堂部」といいまして、毎日、調理はしません。配膳、食器洗い、後片付けを手伝っています。先生だけではなく、職員も教育に携わるという環境になっています。

(3) 入学試験

入学試験は、面接と体験入学だけ。無理に入学は押しつけない。子どもが嫌がっているのであれば、親がいくら希望しても我々はお受けできない。体験入学をさせないで入学させることは、過去に一度痛い目をしましたので、体験入学は必ずしてもらおう。本人に1週間の経験を通して判断をしてもらうという形にしています。

(4) 少人数教育 教職員体制

少人数教育、教職員体制ということで、専任教員が17名、事務職員5名、厨房職員3名が営繕が3名、計28名。そして非常勤が3名。専任教員の1人当たりの生徒数が今は4.1名、大変恵まれた環境と思っています。以前、選択授業で木工という授業があるのですが、私はそれを担当していましたが、営繕の職員に手伝ってもらっていました。

以前、大工さんになりたいという子どもがおりました。本吉は中古の製材機械を大量に購入し、それに併せて木工校舎を建設してしまいました。

また選択授業の音楽でドラムをやりたいという子どもがおりましたが、ドラムセットを購入し、体育館で音楽の教員1人、生徒1人の授

業がございました。

子どもが前向きに、やりたいんだということがあれば、できるだけのことをして、お金がかかっても用意してあげたいというつもりでやっております。

(5) 開善塾

山の中なので、塾に行くとかできませんので、授業や自主学習以外に、先生方が自分の担当科目の中で塾という形で（費用を取っているわけではありませんが）週一回、子ども達の勉強の場として「開善塾」が夕食後に開かれています。

画像省略

「とにかく手紙を書こう」（必要以外の電話は禁止、手紙の遣り取り：神山先生）＝一番長く続いている塾です。

「小論文道場」（大学受験対策として高等部3年生主体：山口先生）＝場所は事務室になります。教員は5時から9時まで日直として事務室で電話番等を行います。塾と日直が重なった時はこのようなことになります。

「中国語塾」（中国人講師の本場の発音、中国旅行も計画：劉先生）＝月曜日から水曜日まで泊りがけで来ていただいております。

「柔道塾」（礼儀、動と静、裏と表 相手を知り自分の力を知る：小杉先生）図書館の2階、視聴覚教室に畳を敷き詰めて利用しています。

「漢字塾」（漢字検定受験が目標：近見先生）級を目指して漢字検定を受けて、合格すると学校から1000円分の図書券がもらえます。

「高校数学演習」（興味のある生徒が来る塾：麻野先生）休みに入った日に朝から夜中まで

数学勉強する合宿もあります。不登校の子どもが群馬県の数学コンクールで銀賞を取ったことがあります。

「英検ゲッター養成所」（英語検定受験が目標：阿部先生）目標にしていた級に合格すると図書券がもらえます。

(6) 学習指導

1クラスの人数は多くても10名程度、少ないクラスは2、3名になります。お話しした5学期になっています。休みは「自由活動期間」という名前になっています。学期中の休日は日曜日だけであり、祝祭日も授業をしています。

画像省略

ゴールデン・シルバーウィークなるものは関係なく、授業日数を確保しています。授業日数が足りないと教育委員会から文句を言われますし、カリキュラムの問題も指導要領にのっとった時間数を設定しなければ、そのことに関しては教育委員会は私学に関しては文句が言えますので、その辺はつつかれないように十分に注意して授業日数や時間数を確保しています。以前群馬県の私立学校が情報授業の件で叩かれたことがあります。公立学校もやっていたのにそれは記事にならないのです。私立学校ばかりやり玉に挙げられる。公立の小学校で女の子が自殺をした。教育委員会はいじめの認識はなかったと言い張って今裁判になっています。あのような議論を聞いていると亡くなった子がかわいそうだし、あといじめていた子どものことが全然出てこない。学校の責任はないの一点張り。もし、いじめたことが原因ならば、いじめた子ども達は生涯そのことを抱えていかなければなら

らない。我々は大人だし、教育者であるし、死んでしまった子は本当にかわいそうだと思うし、親御さんも気の毒だと思うけれども、何かいい折り合いを探して、知恵を出して、何とか子ども達の傷にならないような形の、やはりいじめたら責任は取らなければいけないではないかなと思います。でも出てくるのは裁判になって教育委員会は一切認めない。親御さんの方は認めるまで裁判を続ける。そのような記事だけは出て来るような気がします。

時間割ですが、英語、数学、国語は中等部、高等部をそれぞれ5クラス程度に分け、習熟度別のクラス編成になっています。あとの教科、体育、労作などは学年でやっています。

学期が変則ですが、基本的には時間数としては指導要領にのっとってやっています。違反はしていません。

クラスが多いと授業をやって違うクラスで同じ授業を行います、本校は生徒数が少ないので、行う授業は1回きりです。それで20コマくらい持っていますと、同じ授業がなくて20コマというのは結構たいへんな準備が必要で、先生方の負担は大きいかなと思います。私自身もそうでした。同じ授業をもう一度行うという場面がなく、たえず新しい授業をしなければいけない。授業に追われていることがありました。

(7) 学校行事

続いて学校行事についてお話いたします。

なぜ学校行事かと言いますと、他の学校にはない特徴的なものがありますのでお話ししたいと思います。

まず、4月の始業式で30年近く、曹洞宗の住職を招き、2時間の座禅を組んでいます。私共の学校は宗教とは関係ないのですが、年度の始まりに静かに座ること（曹洞宗ですから「只管打坐（しかんたざ）」であります）です。この日だけは、夕食は精進料理になります。

5月の中旬、山菜の季節になりますとハイキング、山菜取りに出かけます。タラの芽をとり、家に送る子ども達もいます。土曜日のお昼はバ

ーベキューになったりします。

高等部の修学旅行は韓国の板門店、韓国の高校と交流を深めます。こちら30年続いています。中部は沖縄になります。

夏休み前に東京に遊びに行きます。

今年はミュージカルを観に行きました。今までは、野球観戦、秋葉原、宮崎監督の何とか館、歌舞伎、横浜、渋谷に先生方と一緒に遊んでいます。

画像省略

9月には職場実習があり（高等部2年生）、はに出かけます。

造林で椎茸栽培を手伝ったり、養豚場で1週間豚の世話をしたり、老人施設にまいます。



100km強歩10月【スタート午前4時】

私共の学校で一番大きな行事は「100km強歩」になります。今年は10月15日に行い、60人くらい歩いて、19人が100km歩いて帰ってきました。午前4時にスタートして、夜中の2時半頃100km歩いて帰ってきました。

「きょうほ」というのは、よくオリンピックで「競って歩く」というのがありますが、そうではなくて「強く歩く」と書くのです。

ルールはほとんどありません。朝4時にスタートして歩けるだけ歩きなさいと。安全面でのルールはありますが、いつやめても構わないし、頑張れるのであれば何時間かけても構わないよということでやっています。

画像省略

100km歩いても賞品は出ない。1位2位も関係ありません。自分自身のチャレンジとしてやってみろと。ですから完歩証明書1枚しか出ません。73kmでやめた子どもには73km歩いたという強歩証明書を渡します。証明書には距離が書かれていますが、教員や親達がポイントでチェックしており、距離はある程度正確なものです。

スキーは寒いから嫌、水泳は水着になるのが嫌と言う子ども達も強歩だけは誰も文句を言いません。完歩できなければ、来年こそは歩きたいと。スポーツが得意な子とか、勉強が得意な子、いろいろいるでしょうが、歩くことは人間の中で一番基本的な動作、その歩くということで自分の限界に挑戦できるということが子ども達の中では大きな意味があるのだと思います。

以前、ある県の県立高校の生徒指導の先生方が見学に来られました。ちょうど100km強歩の直後で、新聞にも載っておりました。その写真を見た先生が金髪でピアスをしている生徒を見て、「金髪でピアスなんかしている生徒は歩かないんでしょ。」とか言うわけです。これは地雷を踏んだも同然です。その子は83kmくらいのところまで歩いて四つん這いになって歩いていました。もう限界だから「やめろ」と言って、靴を脱がして足の裏を見たら皮がむけて真っ赤でした。30分説得してやめさせました。そこま

で頑張ったのです。それに対して、外見で歩かないんじゃないですかというのは、子どもに対して甚だ失礼です。私は、その先生には「来年強歩に来なさい。子ども達がどれだけの力を持っているのか考えを改めた方がいいよ、そうでなければあなたがいる学校の生徒達が迷惑する。」

来ませんでしたけどね。しかし、帰り際、引率してきた生徒部会の校長先生が「よく、言ってくれました。」と言うのですが、そんなことあなたが言いなさいよと言いたかったのですが、我慢しました。

実際子ども達と接してみれば、強歩を通して子ども達を見ると、彼らはこんなにすごいんだと、こんなに力があるんだと、子ども達を信じられるし、感動すら覚えます。思い出すと彼らの頑張りに涙が出てきます。

残り2kmを4時間かけて歩くんですね。あまりにも足が疲れて膝が痛んで曲がらなくなってしまつて。それも、最後の2kmは登りなのです。前に膝を曲げて歩けないのです。それでも蟹のように横に10cm20cmずつ動かしながら、朝の4時過ぎに帰ってきた子もいました。

これはすごいと思います。我々にできるかなと思います。だから私は、親御さんが参加して手伝いをしてこれを見て、考えを改めるべきだと思います。

万が一事故があれば、中学1年生に100km歩かせるわけですから無謀なんですけど、二度とできないという思いでやっておりますので、先生方も細かいところまで配慮して、危ないところは全部対応して、このために1年かけます。資料も全部手作りです。ポイントでどこが危ないから親が立って、夜になると発行するものを持たなければならぬとか。誰が何時から何時までどこのポイントを担当するかが1枚の資料に書かれている。これは30年の間に積み重ねて、改善をして辿り着いたものです。

「強歩」というものは本当に子ども達を強くするし、なぜ「強歩」を始めたかということ、本吉前理事長が旧制中学、鹿児島県川内で、100

kmの強歩があり、一度100kmを歩き切ったことがあるのだそうです。私は九州まで行って、そのコースを車ですが、見てきました。学校をつくる時、お金がなくて毎晩うなされて、お金を返せと訴えられて裁判になって、本当に大変な時に本吉先生は毎晩のように自宅のソファでうなされているのを見ておりました。しかしそのとき本吉先生は言うておられました、「100km歩き切ったことがある。あの辛い経験を自分は乗り越えた。だから今回もこの学校づくりは絶対にできるんだと自分に言い聞かせているんだ」と。「学校がいろいろな問題を乗り越えて立ち上げられたのは、中学時代に100km歩き切ったおかげだ」本吉先生はそのように言うておられました。ですから子ども達に100km挑戦させたいと。100km歩き切ることが大事なのではなくて、子ども自身がもう歩けないと思ってから一歩先に歩く勇気を持ってもらいたい。だからそれが90kmで終わっても構わない。ただ90kmで終わりにしないで、90kmからもう1m 頑張りなさいというのが本校のあり方だと思っています。

ですから、今、県内でも桐生第一中学校で、30kmの強歩をやっているのです。昨日校長先生とお会いして、「30kmではすぐ歩いてしまうでしょ。これから1年2年準備して、来年でも再来年でもいいから本校と一緒にやろうよ。中学生でもやりたいのであれば、50kmでも60kmでも本校と一緒にやれば、ノウハウがありますから、やれると思うよ、だからいっしょにやってみたら。」という話をしました。

子ども達は何かにチャレンジしたいのですね。自分の力の限りの中で、だからそれが例えばスポーツであったり、勉強であったり、何でもいいのだと思います。子ども達は必ず何かに取り組んでみたいし、試してみたいと思っているわけですから、そういうものを提供する学校でありつづけたいと思っています。

(8) 様々な理由、問題を抱えて山の学校にやって来た子ども達。

本当に単純に、山の中で林間学校のような学

校で、楽しそうだから入りたいという子どもも中にはいます。あとは、不登校による子どももいます。あと、反社会的問題を起こした子ども達、赤城の青少年交流の家というところに講師で呼ばれて二度ほど話をしているのですが、2回目のテーマが「反社会的行動を起こした子ども達への支援について」で勉強会をやりました。私はこのテーマを見た時から腹が立っていたものですから、行った途端に「このテーマ考えたのは誰ですか」と聞いたら、関西の方の大学の教授ということでした。

反社会的行動を起こしてしまう前に、学校なり大人なり、社会が考えることがあるはずなんです。中学2年生で埼玉から来た子どもがおります。教室のストーブの部品が曲がっていたので直したら、それを見た担任の先生が「お前が壊した」と言い始めて怒られたわけです。クラスの子も「そんなことない。」と言っているのに。「勘違いだったね」と一言言うてくればいいのに、そこの学校の担任の先生も校長先生も生徒に謝ってはいけならしいです。ですから結局誤ってくれない。その子は担任の先生、学校、校長先生に反発して、反抗的な態度を取る。そうすると、校長先生、生活指導の先生は「こいつは問題児である」という。その子どもは反発をして万引きや喝上げ、いろんなことをしてしまうわけです。それで最後には警察です。それで、少年院に入るか、白根開善学校に行くかという選択になって、本校に来たのですが、そのときにその子どもの通っていた中学校の校長先生が警察に上申書を提出していました。私はそれを読みました。「こんな悪い子はいないから少年院へ入れてくれ」と中学校の校長先生が書いているのです。私は呆れました。彼が本校に入学してきた時に、彼に「俺も上申書を読んだぞ、お前も読んだか」と聞くと、「読んだ」と行ったので、「これからお前の行っていた中学校に乗り込んでいこう、勘弁ならないぞ」と言ったら、「先生がそんなことやったらだめだよ」と子どもが言うてくれました。「殴ったりしない。ただ文句を言いに行こう」

と言ったら、彼は「いい、いい、先生そんなことやめてくれ」って。彼は多分、自分のことを信じてもらいたかっただけなんです。それを信じてもらえなくて悪者扱いされて、どんどんおかしくなる。彼のどこが悪いのだろうと私は思います。彼は反社会的問題行動を起こしてますよ。だけど原因つくったの先生でしょ、校長先生や学校でしょ。それなのに上から目線で「反社会的問題行動を起こした子ども達への支援について」なんて大学の先生が言い始めるものだから、「話が違うんじゃないですか」と言って、その勉強会は荒れに荒れました。続きがあって、彼のお母さんは保母さん、お父さんは名古屋の方に単身赴任、夫婦仲がうまくいかないものだから離婚。最後に彼はどこかに行ってしまうって行方が分からなくなってしまった。最近ようやく分かりました。現在お父さんと仲がよくなって、通信の学校で勉強して大学を目指すと言いました。

最初の学校の先生が、意地を張らずに「勘違いだったね」と言ってくれれば、校長先生がそんなひどいことをしなかったら、お父さんお母さんがもっと話し合って離婚しなければ、彼はそんなに回り道をしなくて済んだのです。我々の力が足りなかった、そこまで踏み込めなかったという反省はありますが、それを彼の問題だと責めるわけにはいかないと私は思います。そういう子ども達はいっぱいいます。中学2年生で入学してきた子ども、知らないうちにお母さんが離婚、知らないうちに再婚、知らないうちに弟ができる、夏休みになったら知らない住所に帰ってこい、帰って見たら知らないお爺ちゃんとお婆ちゃんがいる。これは彼女の居場所はないですよ。それで夜間徘徊、お金がなくなるとオヤジ狩り。だから言いました、「お金がなくなったら、僕もオヤジだから電話くれ」と。でも電話はくれませんでした。「なんで電話くれなかったの」と聞くと、彼女は「先生はきっ

と私のことを本気で思ってくれている。そんな人からお金はもらえない」って。だから私はオヤジ狩りはしないって。それで私は「新しいお父さんいい人だよ、だから努力はしなさいよ」って。今はお父さんとの関係もよくなって、ケーキ職人になりたいと言ってケーキの学校に行っています。しかし、彼女がオヤジ狩りをするようにまでなったのは、恐らく、母親を代表する親に、大人に対する反抗だったのだと思います。それを子どもの責任にしてはいけないと私は思います。

いろいろな子ども達が私達の学校にやってきます。ハンディキャップを持った子ども達、私は最後の仕事として彼らに何か形を作りたいと思っています。

それ以外の子ども達もたくさん入ってきます。先生が子ども達が来る度に、「よく来たね。そんなに慌てなくてもいいよ。じっくり頑張ろうね。一緒に頑張ろう」と声をかけるんですね。子ども達は初めての学校で校長先生にびくびくしているけれども、その本吉先生の言葉で思わず頷いてしまうのです。「頑張ってみよう」って。だから、こういうことをやった子はだめだ、ではなくて、いつまでも子どもを信じてあげて、一緒に頑張ろうっていう言葉をかけ続けたい、そんな学校であり続けたいと私はいつも思っていますし、先生方もそういうふうに思ってくださいていると考えています。

本当に長閑ではありますけれども、厳しい中で環境によって子ども達が鍛えられる、我々ができることは限られているという自責の念もありますけれども、子ども達には、「頑張ろう、一緒に頑張ろう」という言葉をかけ続ける学校でありたい。特色教育の話になったかどうか分かりませんが、白根開善学校はそういう思いで子ども達と向き合っております。以上でございます。

【年間行事計画】

平成23年度
2011～2012

白根開善学校 中・高等部

第1学期		第2学期		第3学期		第4学期		第5学期	
月/日	行事内容	月/日	行事内容	月/日	行事内容	月/日	行事内容	月/日	行事内容
4/6	水	6/9	木	8/28	日	11/6	日	1/11	水
4/7	木	6/10	金	8/29	月	11/7	月	1/12	木
4/8	金	6/11	土	8/30	火	11/8	火	1/13	金
4/9	土	6/12	日	8/31	水	11/9	水	1/14	土
4/10	日	6/13	月	9/1	木	11/10	木	1/15	日
4/11	月	6/14	火	9/2	金	11/11	金	1/16	月
4/12	火	6/15	水	9/3	土	11/12	土	1/17	火
4/13	水	6/16	木	9/4	日	11/13	日	1/18	水
4/14	木	6/17	金	9/5	月	11/14	月	1/19	木
4/15	金	6/18	土	9/6	火	11/15	火	1/20	金
4/16	土	6/19	日	9/7	水	11/16	水	1/21	土
4/17	日	6/20	月	9/8	木	11/17	木	1/22	日
4/18	月	6/21	火	9/9	金	11/18	金	1/23	月
4/19	火	6/22	水	9/10	土	11/19	土	1/24	火
4/20	水	6/23	木	9/11	日	11/20	日	1/25	水
4/21	木	6/24	金	9/12	月	11/21	月	1/26	木
4/22	金	6/25	土	9/13	火	11/22	火	1/27	金
4/23	土	6/26	日	9/14	水	11/23	水	1/28	土
4/24	日	6/27	月	9/15	木	11/24	木	1/29	日
4/25	月	6/28	火	9/16	金	11/25	金	1/30	月
4/26	火	6/29	水	9/17	土	11/26	土	1/31	火
4/27	水	6/30	木	9/18	日	11/27	日	2/1	水
4/28	木	7/1	金	9/19	月	11/28	月	2/2	木
4/29	金	7/2	土	9/20	火	11/29	火	2/3	金
4/30	土	7/3	日	9/21	水	11/30	水	2/4	土
5/1	日	7/4	月	9/22	木	12/1	木	2/5	日
5/2	月	7/5	火	9/23	金	12/2	金	2/6	月
5/3	火	7/6	水	9/24	土	12/3	土	2/7	火
5/4	水	7/7	木	9/25	日	12/4	日	2/8	水
5/5	木	7/8	金	9/26	月	12/5	月	2/9	木
5/6	土	7/9	土	9/27	火	12/6	火	2/10	金
5/7	日	7/10	日	9/28	水	12/7	水	2/11	土
5/8	月	7/11	月	9/29	木	12/8	木	2/12	日
5/9	火	7/12	火	9/30	金	12/9	金	2/13	月
5/10	水	7/13	水	10/1	土	12/10	土	2/14	火
5/11	木	7/14	木	10/2	日	12/11	日	2/15	水
5/12	金	7/15	金	10/3	月	12/12	月	2/16	木
5/13	土	7/16	土	10/4	火	12/13	火	2/17	金
5/14	日	7/17	日	10/5	水	12/14	水	2/18	土
5/15	月	7/18	月	10/6	木	12/15	木	2/19	日
5/16	火	7/19	火	10/7	金	12/16	金	2/20	月
5/17	水	7/20	水	10/8	土	12/17	土	2/21	火
5/18	木	7/21	木	10/9	日	12/18	日	2/22	水
5/19	金	7/22	金	10/10	月	12/19	月	2/23	木
5/20	土	7/23	土	10/11	火	12/20	火	2/24	金
5/21	日	7/24	日	10/12	水	12/21	水	2/25	土
5/22	月	7/25	月	10/13	木	12/22	木	2/26	日
5/23	火	7/26	火	10/14	金	12/23	金	2/27	月
5/24	水	7/27	水	10/15	土	12/24	土	2/28	火
5/25	木	7/28	木	10/16	日	12/25	日	2/29	水
5/26	金	7/29	金	10/17	月	12/26	月	2/30	木
5/27	土	7/30	土	10/18	火	12/27	火	3/1	金
5/28	日	7/31	日	10/19	水	12/28	水	3/2	土
5/29	月	8/1	月	10/20	木	12/29	木	3/3	日
5/30	火	8/2	火	10/21	金	12/30	金	3/4	月
5/31	水	8/3	水	10/22	土	1/1	土	3/5	火
6/1	木	8/4	木	10/23	日	1/2	日	3/6	水
6/2	金	8/5	金	10/24	月	1/3	月	3/7	木
6/3	土	8/6	土	10/25	火	1/4	火	3/8	金
6/4	日	8/7	日	10/26	水	1/5	水	3/9	土
6/5	月	8/8	月	10/27	木	1/6	木	3/10	日
6/6	火	8/9	火	10/28	金	1/7	金	3/11	月
6/7	水	8/10	水	10/29	土	1/8	土	3/12	火
6/8	木	8/11	木	10/30	日	1/9	日	3/13	水
6/9	金	8/12	金	10/31	月	1/10	月	3/14	木
6/10	土	8/13	土	11/1	火	1/11	火	3/15	金
6/11	日	8/14	日	11/2	水	1/12	水	3/16	土
6/12	月	8/15	月	11/3	木	1/13	木	3/17	日
6/13	火	8/16	火	11/4	金	1/14	金	3/18	月
6/14	水	8/17	水	11/5	土	1/15	土	3/19	火
6/15	木	8/18	木	11/6	日	1/16	日	3/20	水
6/16	金	8/19	金	11/7	月	1/17	月	3/21	木
6/17	土	8/20	土	11/8	火	1/18	火	3/22	金
6/18	日	8/21	日	11/9	水	1/19	水	3/23	土
6/19	月	8/22	月	11/10	木	1/20	木	3/24	日
6/20	火	8/23	火	11/11	金	1/21	金	3/25	月
6/21	水	8/24	水	11/12	土	1/22	土	3/26	火
6/22	木	8/25	木	11/13	日	1/23	日	3/27	水
6/23	金	8/26	金	11/14	月	1/24	月	3/28	木
6/24	土	8/27	土	11/15	火	1/25	火	3/29	金
6/25	日	8/28	日	11/16	水	1/26	水	3/30	土
6/26	月	8/29	月	11/17	木	1/27	木	3/31	日
6/27	火	8/30	火	11/18	金	1/28	金	4/1	月
6/28	水	8/31	水	11/19	土	1/29	土	4/2	火
6/29	木		木	11/20	日	1/30	日	4/3	水
6/30	金		金	11/21	月	1/31	月	4/4	木
7/1	土		土	11/22	火			4/5	金
7/2	日		日	11/23	水			4/6	土
7/3	月		月	11/24	木			4/7	日
7/4	火		火	11/25	金			4/8	月
7/5	水		水	11/26	土			4/9	火
7/6	木		木	11/27	日			4/10	水
7/7	金		金	11/28	月			4/11	木
7/8	土		土	11/29	火			4/12	金
7/9	日		日	11/30	水			4/13	土
7/10	月		月					4/14	日
7/11	火		火					4/15	月
7/12	水		水					4/16	火
7/13	木		木					4/17	水
7/14	金		金					4/18	木
7/15	土		土					4/19	金
7/16	日		日					4/20	土
7/17	月		月					4/21	日
7/18	火		火					4/22	月
7/19	水		水					4/23	火
7/20	木		木					4/24	水
7/21	金		金					4/25	木
7/22	土		土					4/26	金
7/23	日		日					4/27	土
7/24	月		月					4/28	日
7/25	火		火					4/29	月
7/26	水		水					4/30	火
7/27	木		木					5/1	水
7/28	金		金					5/2	木
7/29	土		土					5/3	金
7/30	日		日					5/4	土
7/31	月		月					5/5	日
8/1	火		火					5/6	月
8/2	水		水					5/7	火
8/3	木		木					5/8	水
8/4	金		金					5/9	木
8/5	土		土					5/10	金
8/6	日		日					5/11	土
8/7	月		月					5/12	日
8/8	火		火					5/13	月
8/9	水		水					5/14	火
8/10	木		木					5/15	水
8/11	金		金					5/16	木
8/12	土		土					5/17	金
8/13	日		日					5/18	土
8/14	月		月					5/19	日
8/15	火		火					5/20	月
8/16	水		水					5/21	火
8/17	木		木					5/22	水
8/18	金		金					5/23	木
8/19	土		土					5/24	金
8/20	日		日					5/25	土
8/21	月		月					5/26	日
8/22	火		火					5/27	月
8/23	水		水					5/28	火
8/24	木		木					5/29	水
8/25	金		金					5/30	木
8/26	土		土					5/31	金
8/27	日		日					6/1	土
8/28	月		月					6/2	日
8/29	火		火					6/3	月
8/30	水		水					6/4	火
8/31	木		木					6/5	水
9/1	金		金					6/6	木
9/2	土		土					6/7	金
9/3	日		日					6/8	土
9/4	月		月					6/9	日
9/5	火		火					6/10	月
9/6	水		水					6/11	火
9/7	木		木					6/12	水
9/8	金		金					6/13	木
9/9	土		土					6/14	金
9/10	日		日					6/15	土
9/11	月		月					6/16	日
9/12	火		火					6/17	月
9/13	水		水					6/18	火
9/14	木		木					6/19	水
9/15	金		金					6/20	木
9/16	土		土					6/21	金
9/17	日		日					6/22	土
9/18	月		月					6/23	日
9/19	火		火					6/24	月
9/20	水		水					6/25	火
9/21	木		木					6/26	水
9/22	金		金					6/27	木
9/23	土		土					6/28	金
9/24	日		日					6/29	土
9/25	月		月					6/30	日
9/26	火		火					7/1	月
9/27	水		水					7/2	火
9/28	木		木					7/3	水
9/29	金		金					7	

研究発表Ⅱ

「アスリートコースの指導について」

高崎健康福祉大学高崎高等学校 教頭 加藤 陽彦
高崎健康福祉大学高崎高等学校 教諭 黒田 水生

みなさん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました高崎健康福祉大学高崎高等学校の加藤と申します。よろしくお願いします。同じく高崎健康福祉大学高崎高等学校の黒田と申します。よろしくお願いいたします。



高崎健康福祉大学高崎高等学校

教頭 加藤 陽彦

私は長い間、ソフトテニスのクラブの顧問に関わっておりまして、全国のたくさんの先生方にお世話になり、いろいろ勉強させていただき、育てていただきました。練習試合等行っていた方や本番の試合であたった方もいらっしゃるわけですが、そういった方々のおかげで今までやってることができました。大変お世話になりました。また今回、昨年、本校の校長から全国大会が群馬であると聞いていたのですが、その特色教育部会の中で、アスリートコースの指導について発表しろということを言われまして、正直、全国から先生方が集まる非常に大きな会ですし、自分のようなものがその

ような会で何が出来るとかということで非常に不安に思ったのですが、せっかくそういう機会を与えていただいたということで大変光栄なことと思い、今回、黒田と共に、本校のアスリートコースのやってきたことをありのままのことを先生方にお話しさせていただきたいと思えます。その中で色々なご指導ご鞭撻をいただけると有り難いと思えますのでよろしくお願いいたします。

黒田は長い間、私と一緒にソフトテニスをやっております。現在は男子の顧問をやっておりますけれども、女子の方を6年彼のお世話になって、一緒にやってきた仲間です。そのようなことで、途中黒田の方からアスリートの現状等について説明させていただきますのでよろしくお願いいたします。

まず、本校の簡単な内容を説明させていただきます。本校は高崎駅から東の方向に約4km、車で10分程度の高崎市中大類町というところにございます。大学、高校、附属幼稚園を持っております。

簡単に高等学校の説明をさせていただきます。コースが4つございます。本校は全日制の普通科なのですが、生徒の適正にあわせて4つのコースを用意しています。特進コース、大進コース、普通コース、アスリートコース。特進コースについては、30人の少人数制で、難関大学の進学を目指しています。大進コースは、基礎的なことをしっかり学んで、やはり大学進学を目指すのですが、基礎的なことからしっかり

学んで、大学進学を目指すということでもあります。普通コースですが、1年次においては共通科目を設定し、2年次になる時に将来の進路を考えながら、類型の選択ということで、現在3つの類型がありますが、進学類型、情報類型、福祉類型というような形で、幅広い進路になりますので、専門分野を学習していただいて、できるだけ多くの資格を取得して進学につなげようというようなコースです。本日、お話しさせていただこうと思っているのが、アスリートコースです。アスリートコースには、部活動指定、本校の特色の1つであります選択実技、それからスポーツ環境、これについては学校の理解もあり、環境面においては非常に整ってまいりました。生徒が思いきって、それぞれの部活動ができるということで、環境面においては充実期にあると思っている。それから専門の先生方、30歳代中心の先生方が頑張っておられます。

創立者は、須藤いま子先生という女性の方ですが、昭和43年、群馬女子短期大学附属高等学校という名称で開校いたしました。昭和58年に赤城国体が群馬であった関係もあると思いますが、昭和56年体育コースという物を設置いたしました。スタートの段階は女子校でしたので、女子の4部でスタートいたしました。指定部という形で本校の場合は、アスリートもそうなのですが、クラブを限って、4つのクラブ、現在はさらに増えているのですが、指定クラブという形でスタートしております。ハンドボール、ソフトボール、バレーボール、ソフトテニス、これはもちろん、専門の指導者がいるということや、専用の練習会場・施設を持っているということでこの4つでスタートいたしました。ここから色々な形で学校の環境整備が始まり、昭和58年に高校としてはかなり大きいと思うのですが、高校体育館を作りました。そして昭和62年に第二運動場ということで、全天候型の250mのトラック、テニスコート6面が完成しました。特にテニスコートについては全国どこにも負けないくらい的高等学校としては非常に素晴らしいテニスコートを作っていただきました。

そして平成4年、高校の体操場が完成いたしました。平成13年、校名変更と男女共学化という思い切ったことを行いました。創立者の須藤いま子先生という方が、平成2年にお亡くなりになりまして、理事長がかわり、それまでは女子教育のみでやってきていたのですが、これからは男女共学ということで男子もいれようということになり、平成13年に非常に大きな転機がありました。もう一つ、平成元年に特進コースをスタートさせました。そして平成15年、男子も入りましたので、健武館(武道場)をつくり、平成17年に男子の数もだんだん増えてきまして、部活動も多くなってきたということで、男子の部室棟を作りました。そして平成19年、野球場が完成しました。野球場については、雨天練習場とか、すぐ近くに合宿所や寮などを持った、高校では非常に整いすぎている素晴らしい健大スタジアムという野球場が完成しました。平成21年、男子の合宿所をつくり、この年にアスリートコースという形で、名称を変更して男子の募集も開始し、男子が4部、硬式野球、ソフトテニス、サッカー、陸上・駅伝、女子が、バレーボール、ソフトボール、ソフトテニス、剣道、器械体操、陸上・駅伝、サッカーという7部のアスリートコースになりました。当初は女子のみの1クラスであったが、平成21年からは男女のアスリートを募集するという形になりました。男子を入れる時には、大体、多くの学校は、すべてのコースでいきなり始めるのではなく、本校も同じく、特進コースに限って男子の募集をしたのですが、ちょうどこの頃から、すべてのコースで、男子の出口・進路あるいは生徒指導の面、部活動というものがある程度整って、男子を受け入れても大丈夫であろうと、6回7回8回と男子の卒業生を送り出して、保護者や地域の方、中学校の先生方からの信頼も得られたということで、この平成21年からすべてのコースで男子を募集となりました。現在、新校舎の建設が始まっており、来年3月までに完成し、来年の新入生からは新しい校舎で授業を始めることになっています。

アスリートコースですが、体育科の教員が9名、専任が6名、常勤が2名、非常勤が1名おまして、内訳は男性が7名、女性が2名で、この体育科の職員を中心にやっております。生徒数ですが、3年生についてはまだ体育コースという形で女子のみの38名1クラスです。現在の2年生からアスリートコースとして募集いたしました、女子が31名、男子が59名入学しました。2年生については男女別クラスにしており、女子が1クラス、男子が2クラスの学年3クラスです。1年生については女子が45名、男子が61名で共学にしようということで、1年生については、男女共学、学年3クラスとなっています。来年度の募集については100名と考えております。

現在の男子のアスリート、女子のアスリートの担当顧問、担当教科、性別というものを簡単にお話いたします。陸上・駅伝については男女は同じ顧問が担当しています。年齢については一番若い人が23歳、一番年配が53歳ということですが、その他はみんな30歳代の先生方が多くて、その先生方が今、しっかりとまとまって、53歳の先生に保健体育科主任をやっているのですが、その先生が上手にまとめて、若い先生がいて経験豊かな先生がいてそして、30歳代のバリバリの先生方が頑張っていて、いい方向に進んでいます。

創立者の須藤いま子先生の言葉ですが、本当に簡単な言葉なのですが、「やればできる、できないことはやらないことなんだ。」ということを我々、今50歳代くらいの先生方は、教えを受けました。もちろん先生が生徒を愛し、学校を愛し、職員を愛し、試合で勝った時などは自分のことのように喜んで、本当に褒めていただきましたし、また、負けたということを報告に行くと、本気で叱られ、強い指導を受けました。しかし今の高崎健康福祉大学高崎高等学校は創立者の須藤いま子先生の教えがしっかりと引き継がれて、我々、特にその年代に教わった先生方が強い気持ちで指導を続けておりますし、私もこの「やればできる」という先生から教わったことが長い間の指導の基本になりやってまい

りました。先生が掲げた目標は、簡単に言うのですが、「高校総体20年連続優勝しなさい。」「総合優勝しなさい。」という目標や、「体育の部活動は全部インターハイ出なさい。」というこのような大きな事を、やればできるということで、「日本一」という言葉がとにかく好きで、私も何回、「日本一」という言葉を言われたか分かりませんが、とにかく「日本一」、どうせやるなら「日本一」目指しなさいと言われました。中途半端ではダメだ、できるんだと、常日頃言われておりました。

校訓は「感謝 奉仕 友愛」です。もちろん校訓になっていますので、基本的なことなのですが、毎日ホームルームで唱和をし、アスリートの育成にも教育にも校訓・日訓が基本になっています。

校歌。今年甲子園に行きまして、有名になってしまったのですが、皆様もどこかで聞いたことがあるのではないかと思います。現在の校長先生は、最初正直なところ、校歌を変えた方がいいんじゃないかというようなことを言われてたのですが、甲子園に行って何回か聞くと、「なかなか良い校歌だ」と言って、今では気に入っていらっしゃるようです。珍しい校歌ですが、甲子園を通して、全校生徒達も今まで以上に校歌を好きになって歌ってくれているように思います。

アスリートの入試ですが、簡単に説明します。もちろん推薦です。単願です、併願はございません。中学校の校長先生から推薦をいただける生徒に限って入学試験を受ける資格があります。入試の科目については、特進、大進、普通すべて同じです。国語・数学・英語の学科試験、マークシート形式です。特待生制度がございます。これは前年度の記録実績とか進路の状況を総合的に判断し、1年ごとに見直して、頑張っているクラブについてはその評価を認め、校長先生が最終的に数の方を決めて示しています。本校を第一志望、合格した場合は必ず入学する者、そして、もちろん3年間の評定平均、欠席日数、遅刻早退を含めて本校の基準を満たして

いる者、そして、強化指定部、先ほどの4部、7部に入り、全国大会優勝を目指して3年間部活動を継続し、かつ進学を志望する者というよう
なことが受験の資格になっています。受験する
場合には必ず、中学校の顧問の先生から、本校
の顧問へ事前の連絡を取り、本校の顧問におい
ては、事前に保護者や生徒に会って、本校に適
しているかを見て、その上で、受験するという
ふうになっています。

体育アスリートコースの実績ですが、平成元
年から、全国大会3位以上のものをあげさせて
いただいております。

体育・アスリートコースの実績

・平成元年～（全国大会3位以上）

群馬県高等学校総合体育大会女子総合15年連続優
勝（現在まで18回総合優勝）

平成23年 男子総合13位（昨年53位）／女子総合2
位（昨年2位）

入場行進優秀校 26年連続入場行進優秀校

◎陸上部

平成2年12月23日

第2回全国高等学校女子駅伝競走大会優勝（1時間
8分51秒一高校日本最高記録）

◎ソフトテニス部(女子)

平成元年全国高等学校選手権大会個人 優勝・準
優勝

平成2年全国高等学校選抜大会団体 準優勝

平成4年全国高等学校選手権大会団体 優勝

平成8年全国高等学校選抜大会団体 第3位

平成9年全国高等学校選手権大会 団体3位

平成9年ハイスクールジャパンカップ 第3位

平成10年全国高等学校選抜大会団体 第3位

平成11年全国高等学校選抜大会団体 第3位

平成13年ハイスクールジャパンカップ 準優勝

平成15年ハイスクールジャパンカップ 優勝

平成16年全国高等学校選手権大会団体 優勝

平成18年全国高等学校選手権大会個人 第3位

平成18年全国高等学校選抜大会団体 準優勝

平成19年ハイスクールジャパンカップ 優勝

平成19年全国高等学校選手権大会団体 第3位

平成22年全国高等学校選手権大会団体・個人 第
3位

平成23年（創部5年目 インターハイ男子団体初
出場）

平成23年全国高校総合体育大会男女団体出場

◎体操部(女子)

平成4年全国高等学校総合体育大会種目別平均台
優勝

◎ソフトボール部(女子)

平成2年全国高等学校総合体育大会 第3位

平成6年全国高等学校総合体育大会 第3位

平成16年全国高等学校選抜大会 第3位

◎剣道部(女子)

平成3年全国高等学校総合体育大会 第3位

平成6年全国高等学校総合体育大会 第3位

平成9年全国高等学校選抜大会団体 第3位

平成17年全国高等学校総合体育大会群馬県予選男
女団体個人完全制覇

平成18年全国高等学校総合体育大会群馬県予選男
女団体個人完全制覇

◎硬式野球部

平成18年関東大会出場（創部5年目の快挙）

第59回秋季関東地区高等学校野球大会群馬県予選
準優勝

第59回秋季関東地区高等学校野球大会初出場

平成23年甲子園初出場（創部10年の節目の年）

第93回全国高等学校野球選手権大会群馬県予選優
勝

第93回全国高等学校野球選手権大会出場

その他（本校の卒業生の実績）オリンピック・国
際大会出場

◎カヌー部(女子)

昭和60年・63年・平成元年

全国高校選手権大会 優勝（文部科学大臣賞受賞）

ソウルオリンピック（昭和63年）出場

バルセロナオリンピック（平成3年）出場

◎スケート(ショートトラック)(女子)

バンクーバーオリンピック（平成22年）出場

◎ソフトテニス部(女子)

第11回世界ソフトテニス選手権大会 優勝

◎平成23年度の実績

関東大会（ソフトボール 優勝、ソフトテニス女子団体・個人 準優勝）
 全国高校総体（団体出場：ソフトテニス男女・ソフトボール・剣道・バレーボール、個人出場：ソフトテニス男子・カヌー男子・弓道女子・柔道女子、
 国体（ソフトテニス男子・カヌー男女 出場）

どうせやるんだったら、高校総体でも連続20年（優勝）を目指なさいというようなことでやってまいりまして、女子の総合なんですけど、15年連続優勝というふうになっております。途中残念ながら何回か2位ということもあったのですが、現在まで18回、総合優勝をしております。今年の成績ですが、男子については、アスリートの生徒達を中心になって、昨年度までは総合53位という成績だったのですが、今年は13位、女子については昨年に続き2位という成績でした。

入場行進というのがあるのですけれども、高校総体の時に入場行進をいたします。入場行進が優秀であると優秀校という形で表彰されます。本校は26年連続優秀校です。高校総体の前3日間くらい、2時間ほど授業をカットして入場行進の練習をします。このように高校総体についても学校をあげて取り組んでいます。

日本一については3クラブが達成しております。陸上部については全国高校女子駅伝、体操部については、インターハイ種目別平均台、そして、ソフトテニスについては団体、個人で1位になっております。剣道部については全国大会3位。ソフトボールについても全国大会で3位入賞が3回。硬式野球部ですが、平成18年に創部5年目の快挙ということで、この当時は専用球場もなく、練習場を確保するのが大変な状況だったのですが、創部5年目で群馬県大会で決勝まで進出しまして、初めて秋の関東大会に出場いたしました。今年は11年目なのですが、創部10年で初の甲子園出場。明日開会式があるのですが、選抜を目指した関東高校野球大会に出場することになっております。

その他、オリンピック、国際大会にも出場しております。アスリートではないのですが、カヌーという特殊な競技なのですが、練習場はありません。波のあるところではなく、湖で、波のないところでやる競技なのですが、そちらの方を本校はやっておりますが、昭和60年、63年、平成元年の3回、全国高校選手権で優勝しております。カヌー部の卒業生は、ソウル、バルセロナのオリンピック代表にもなっている。スケートではショートトラックでバンクーバーオリンピックに出場しております。ソフトテニスでは、世界選手権大会個人優勝という選手も出ております。

引き続き黒田の方からアスリートコースの現状について報告いたします。



高崎健康福祉大学高崎高等学校

教諭 黒田 水 生

先ほども話がありましたが、本年度の大会実績のご説明をさせていただきます。まず関東大会なのですが、ソフトボールは優勝、ソフトテニス女子は団体・個人でともに準優勝ということでした。インターハイの方は、総勢67名が出場いたしております。また、出場団体チームが5団体ということで、過去最多の選手達がインターハイに出場したということになります。国体の方にはソフトテニス男子、カヌー男女が出場しています。

アスリートコースの特徴について説明させていただきます。

部活動の指定、強化指定部というものがござ

います。男子4部活、女子7部活でおこなっています。

選択実技の導入のということです、今年度は毎週火曜日、木曜日になります。5時間目と6時間目を使ってそれぞれの部活動の時間にあてております。単位数にも入っており、評価の方も出しています。選択実技の時間ですが、4時間目が終わりましたらまず昼食をとらせ、そのあと掃除、ホームルームを済ませて5時間目の授業の方に臨んでおります。6限終了後部活動が継続してできるようになっております。

2年生、3年生で毎週1時間、体育理論を行っております。2年時は、トレーニング、ストレッチのやりかた、効果・重要性などを教えたり、栄養の取り方、疲労回復の仕方などを授業の中で説明して、実際に生徒に実践させております。3年生では、大切な大会の時期に重なってきますので、それに対するメンタルトレーニングの仕方とか、引退した後にこれまでの部活動を活かして、社会体育とか、指導者を目指す生徒もいますので、そのような生徒達にどういう取り組みをしていくのかを指導しております。

各部活の専用スペースの確保についてですが、こちらは映像で説明させていただきます。

各部の過去10年の部員数の変遷とかも併せて説明します。

まず、野球部になります。今年創部10年目で甲子園に出場したのですが、平成14年に創部いたしました。今野球部は監督・部長1名ずつ、コーチが2名、トレーナーが1名総勢5名のスタッフでやっております。現在の部員数は76名。グラウンドは先ほど紹介しました、健大スタジアムが完成いたしました。こちらの方は夜でもナイター照明をつけて試合ができるくらいの明るさで夜練習試合を行ったりしています。野球部専用の室内練習場はネットで区切ってバッティング練習とかストレッチをおこなっています。

男子のソフトテニス部は今年で創部5年目になります。今年、団体戦でインターハイ出場を決めましたが、3年前までは部員数4名でなかなか部員が集まらない状況だったのですが、昨年

度アスリートコースを男子の方で募集し始めて少しずつ部員を確保しております。監督は私でコーチが1名います。男子はクレートコート3面、照明設備も完備しております。

女子のソフトテニス部は、昨年度からアスリートコースとコース名が変わったのですが、それ以前から体育コースとして生徒を募集しておりましたので、平均して募集がうまくいっていると思います。女子の方は全天候型テニスコート、照明完備で3面あります。監督1名、外部指導者を含めたコーチが2名います。

男子サッカー部は監督1名、外部指導者を含めたコーチ2名、部員数は90名となっています。土のグラウンドですが、照明を完備して夜間でも練習ができるようになっています。

女子サッカー部は本年度からアスリートコースに入り、今年から生徒を募集しました。監督1名で部員数は27名。土のグラウンドと全天候型のフットサルのコートで練習をしています。

男子陸上部、女子と合わせてですが、昨年度からアスリートコースを募集しました。ただ競技の種目上、特徴ともいえますが、あまり生徒数をとるのではなく、どちらかというと一般生徒の方も入ってきておりまして、練習時間も短い時間で済むということもあり、一般生徒も増えてきております。

女子陸上部も男子と同じように一般の生徒も入っております。監督1名で指導しております。全天候型のトラックで照明も完備しております。

ソフトボール部は、今年関東大会で初優勝したのですが、監督1名、外部指導者コーチと2名で指導しています。部員は32名。ソフトボール専用グラウンドがあり、照明も完備している。手作りではありますが、ビニールハウスの室内練習場を作ってやっています。

バレーボールは監督1名、外部指導者コーチの2名で、体育館に専用スペースが2面分ある状況でやっています。部員数は41名。今年、新人戦を含めすべてのタイトルをとっている、今一番元気の部活です。

剣道部は、監督1名、コーチ1名、部員は7名でやっています。一般生徒も入部している現状です。専用の武道場があり、その半面を使って練習しています。

体操部は特殊な種目になりますので、一般生徒はいません。毎年2名から5名くらいの生徒が入部しています。プレハブなんですけど、専用のスペースがあり、練習しています。

アスリートコースの進路ですが、毎年8割の生徒が進学しています。大体希望どおりのところへ進学できるように進路指導部を含め対応させていただいております。平成22年度・23年度・24年度に関しては、希望ということで、まだ決定はしておりませんので、23年度・24年度は男子も含まれておりますので、4年生大学への進学希望が増えています。就職に関してはそれぞれの専門の種目により実業団のほうへ入社したり、一般企業へ就職する生徒もいます。主な進路先として、国立大学をはじめ、有名私立大学にも進学しています。ほとんどの生徒が推薦で進学している状況ですが、アスリートコースでも他の進路先へ進む可能性もあるということで、進路指導の方も最後まで責任を持ってやらせていただいている状態です。

私からの報告は以上になります。

続きまして、アスリートの具体的な指導について報告いたします。ただ今の報告のとおり、環境面、施設設備については非常に整っています。たくさんの部活動がありますけれども、それぞれ専用のグラウンドがあって、専門のスタッフがいて、生徒達が十分な部活動ができる、そういった環境を学校のほうで整えていただいております。

アスリートコースは人数も多くなってきて、現在234名いるわけですが、これはアスリートコースが色々な意味でやっていくには、言わなくても先生方はおわかりだと思いますが、本当にたくさんの先生方、アスリートの担当の先生はもちろんですが、教職員、本校の場合は寮も、男子寮、女子寮、男子合宿所、また、遠征に行

くとか大会に行くとかいうときに運行部の方々に非常に大きな協力をさせていただいておりますし、寮の先生あるいは寮指導委員の先生方が5名いらっしゃいますが、そのような先生方が、生徒のために大変な力を出していただいて成り立っていると言うことで、本当にたくさんの方に、お世話になって成り立っているという状況にあります。

そのような中で、生徒達あるいはアスリートコースの先生方はもちろんですが、そういう人達に学校をあげて応援していくような体制にならないとなかなか難しいです。まだまだ足りない点や問題点がたくさんありますが、このような形で具体的な指導をしようと言うことで考えてやっております。

これは私が考えていることですが、以上のようなわけで、多くの人に理解・納得されること、誰からも応援される、信頼される部活動を作らないと成り立っていきません。

メインはなんといっても生徒を育てること。高校生としての基本的な生活習慣とういうものをしっかりと身につけさせて、高校生としてどこに出しても恥ずかしくない、高崎健康福祉大学高崎高校のアスリートの生徒はどこの生徒にも負けないというようなしっかりとした自覚を持たせて、基本的な生活習慣を身につけさせることが必要であると思います。具体的には挨拶、返事、服装、身だしなみ、こういうものを徹底して指導していくということだと考えております。お陰様でほとんどの生徒については、生徒指導上問題も無く、アスリートの自覚と自身とプライドがでてきているのではないかと思います。

本校では生徒会が中心になりまして、先生方、各クラブの部長、各委員会の部長が毎朝交代で通学路に立って、「挨拶運動」というものを実施しております。帰りも下校指導等、スクールバスもありますので、高崎駅、前橋駅に、学校の乗り場に先生に出させていただいて、毎日指導しております。

それから、ソフトボール部の生徒達が毎朝、

職員室、事務所それから地域のゴミ拾い校舎の清掃を監督と一緒に、中心的にやっています。アスリートコースそして体育の教員が学校を引っ張っていくような学校になればより良い学校になると思います。

そして、各競技を通じて社会に役立つ人間形成、これが大きなポイントになると思います。勝った負けただけではなく、勝利第一主義に走ってそのためには何でも許されるという考え方ではうまくいきません。やはり野球なら野球を通じて、野球の教えの中で社会に役立つ人間形成、テニスであればテニスの競技を通じて、社会に役立つ人間形成というものを具体的な目標としてやっております。

「無欠席」。これは本校では非常に力を入れてやっております。アスリートコースはほとんど休む生徒はおりません。基本的なことです、学校を休まない、できるだけ早退遅刻をしない、健康管理をしっかりする、ということです。無欠席を目指そうということで、本校では朝礼が毎月1回あるのですが、校長先生の方から月間無欠席として、クラスに賞状を出したり、記念のボールペンなどを出したりしています。また、休む場合には必ず保護者から連絡する。生徒が来ていなければ、担任がすぐ連絡を取る。3日間休めば家庭訪問するというように、早め早めに対応をしています。

文武両道。学校長の考え方で、運動だけでなく勉強も一生懸命頑張るということで、文武両道を唱っております。

それから、授業第一。当然ですが、部活動だけ一生懸命やっている、部活動になると元気になるということではなくて、高校生である以上は授業最優先、本校は、1科目でも赤点があると進級できません。これをやるには教員も、出張とか多く大変ですが、基本的には自習は0ということで、できるだけ授業の振り替えをし、自習の時間を最小限にするという形で取り組んでいます。

1年生は4月、5月が第1ハードルということですが、非常に難しいです。しっかり目標を持っ

て入学してきたはずなのですが、中学3年生で引退しますと、生活面も練習面もいいかげんになる。急に高等学校の生活が始まりますので、残念なのですが、4月に始まっていきなり辞めたいとか、もう嫌だ、という生徒が出ます。5月もゴールデンウィークを挟んで、そのような生徒が必ず何人か出ます。初めての高校の試験とか、高校総体の終わった後、そういったことが大きなハードルになります。私が個人的に考えているのですが、1年生にはやはり無理をさせない方がいいということで、怪我也含めて、結構戦力になる1年生が入ってきますと、春休みから遠征に連れて行って試合をさせたり、期待をしているが為に顧問は使うのですが、まだ身体ができていけませんので、そこで怪我をしたりして、多くのクラブがこういうことが分かってきて、今は1年生はバランス良くトレーニングをさせたり、体育理論を通じてメンタルトレーニングをやったりして、以前のような怪我はないのですが、特に1年生には無理をさせないでやった方がいいのではないかなと思っております。色々な意味での無理はさせない方がいいと思います。それから9月、10月、これが意外と難しく、私は第二ハードルという言い方をしていますが、これが結構大きなハードルになりまして、夏休みが終わった直後は結構緊張感があって頑張るのですが、今頃(10月中～下旬)、恥ずかしい話なのですが、最近になっても、1年生がいろいろなことを、例えば先輩達がいなくなって自分達の番だとか、またこの頃になると進級問題で、赤点科目が結構多くあるとか、いろいろなことがあると思うのですが、この10月あたりがかなり難しいところがあります。この辺も要注意のポイントです。

それからできるだけ退学者を出さない、できれば絶対出さないという形で、顧問は自分が預かった生徒については、とにかく面倒を見る、何があっても面倒を見るというような強い気持ちを持って、仮にそういう生徒が出て、すぐに結論を出すのではなくて、なるべく時間をかけて、結論を遅くする。やはり非常にイメージ

が悪くなります。退学よりもできれば転学、進路変更をしたほうが良いと思いますし、この件に関しては最善の努力をしないとイケないかなと。預かった生徒については最後まで責任を持つということですね。

アスリートですから、実は学力差も非常に大きいのです。低学力の生徒もいますし、非常に高い生徒もいます。そういう中で同じクラスにいるわけですが、いろいろな生徒がいるわけですが、このことを考えていかないと、1人が出るとつられてしまうと言うか、どうしても難しい状況になります。ですから、退学者を出さない努力は絶対にしなければいけないと思っています。

本校の場合、選択実技という教科がありまして、評価もいたしますし、授業の時間になっています。実際に、「部活が嫌になった、もう練習には出られない、選択実技にもでられない」ということになりますと、即辞めなければならないということはないのですが、どうしても部活が嫌になると最終的には学校にはいられなくなってしまふのですね、続けられなくなってしまふのですね。進級問題にも引っかかって来ますし。ですからこの辺が大きなポイントになってきます。是非先生方にどうすれば良いか教えていただきたい点なのですが、アスリートを持っている学校の大きな永遠の課題かなと思っています。

健大ニュースというものですが、本校では入試広報室というものがあまして、入試広報の先生方が、ホームルームや各中学校に配ったり、校舎内に貼ったりするのですが、目的は生徒の頑張っている姿、アスリートだけでなく文化部も、勝った負けたではなく、頑張った生徒の成果をとにかく多くの人に知らせて、生徒の頑張りに対して評価をしたいということがねらいです。

そして週間報告。これは私がずっと作っていますが、先生方からできるだけ水曜日くらいまでに土日の試合や大会を教えてもらって、全職員に掲示板という形で知らせる。情報を知って

いただかないと、見に行きたくても見に行けないとか、興味や関心を持っていただくためにも、できるだけ詳しく試合の日程、時間、対戦相手、場所を全部知らせるようにしています。もちろん文武両道ですので、アスリートだけでなくアスリート以外のクラブ、文化部・吹奏楽部・書道部、ダンスやチアリーダー等すべてこのように出させていただいています。

本校の先生方は、休みの日なのですが、会場に来ていただいたりして、特にアスリート関係は本当に応援していただいております。そのような状況もアスリートの生徒が頑張れる一つの大きな力になっていると思います。そのためには職場の環境作りというか、先生方が協力的にアスリートに強いバックアップをしていただいておりますので、アスリート関係の先生方もそのような先生方に大変お世話になっているということで感謝をしておりますし、アスリートの先生方も生徒も協力的で、別名「行事屋軍団」といって、入学式、卒業式、入試、学校見学会、朝礼とか学校行事がたくさんあります。そういう行事の椅子並べ、掃除、片付けをアスリートの先生方が率先して、部員に指示をしてとにかくやってもらっています。非常に早く、上手で、きれいです。

文化部の発表会。これは今年初めて試みたのですが、学校長の強い考え方もあまして、文化部の方も、運動部というのは比較的すぐに結果が出て成果がすぐ分かるのですが、文化部の生徒達もたくさん頑張っているということで、工事の関係で1・2年は文化祭もできないという関係もあるのですが、半日使って体育館で文化部の発表会と言うことで、ステージ発表が8クラブ、展示発表が8クラブとあったのですが、もちろん全校生徒が体育館に集まって、文化部の発表会に対してみんなで応援したということです。我々も普段見ていないのですが、文化部の中にもこんなに素晴らしい知性と感性を持った、いろいろな力を持った生徒達がいるのだなというのをお互いに確認でき、非常に大きなことであったと思っています。

吹奏楽部ですが、野球部など、夏の暑い中を応援にたくさん来ているということで、監督の考え方なのでしょうが、200名、部員はもちろんですが、保護者、後援会の人達にも全部声をかけて、吹奏楽部の定期演奏会に野球部関係だけで200人くらい、それ以外に普段アスリートを応援してくださっている人達のために、運動部の生徒達もかなり行っています。学校をあげて、運動部だけでなく、文化部の人達も非常に協力してくれているということで、一体感と言いますかそういうものが出てきてるなあという感じがします。

進路生徒募集ですが、アスリートを成功させる、強化する、継続させる、そのためには保護者や中学校の先生方から、「この学校に預ければ大丈夫だ、最後の進路まで面倒見てくれる。」「この先生に預ければ大丈夫だ」という信頼を得ないと続けることが難しいです。いい選手が来れば勝つというのは、当たり前ではないですが結構勝ちますが、アスリートを続けるためには3年4年で1サイクル、6年9年で2サイクルというような形で継続してやっていかないと、なかなか毎年集めるということは大変だと思います。そういう意味でアスリートのポイントは入口と出口だと思っています。

群馬県の先生方はご存知なのですが、全国の先生方は吃驚するかも知れませんが、群馬県には解禁日というのがありまして、生徒募集の解禁日ということで10月15日にならないと、実際に顧問が中学校に行って勧誘活動というのはできません。これはきちとした決まりがあって、必ず管理職間で、できれば校長間で連絡を取った上で募集をする。アスリートの方はご存知と思いますが、みんな早い子は小学校の頃から、中学校1年生の頃から練習に来たり、いろいろなきっかけを作って、この顧問の先生なら、この学校ならということで、中学校や保護者の方に理解していただいた上で入っている子ども達がほとんどなものですから、今はうまくいっていると思います。そういうことで、やはり進路、部活だけ朝から晩まで一生懸命やっていて、成

績が悪いから「お前は決まらなかったよ」では絶対ダメなのです。やはりやっただけの頑張りで、それぞれの第1希望の進路に、その生徒の適正に合った一大学だけではないと思います。その子の向いている、その子の狙っている進路決定に全力をかけるということが大事だと思います。

もう一つ、補足ですが、本校の先生方は非常に協力的といいましたが、今、自己推薦とかAO入試とかありますが、志望理由書とかいろいろ書かなければいけないものがありますが、そういうものの添削とかを国語の先生にお願いしたり、アスリートの部員達が職員室で朝早くから夜遅くまで先生方に受験の対策を見ていただいているという姿をたくさん見ます。ほとんど、その先生方のおかげ進路が開けているというようなことであります。そういう意味でたくさんの先生方に協力していただいて生徒の進路が開けていると思います。

それから同じようなことですが、預かった生徒を丁寧育てるということが募集につながっていると思います。

個人戦から団体戦へということですが、少しこのことから外れますが、生徒指導上の問題とかいろいろなことがあります。若い先生は自分で預かった生徒は自分で何とかしなければならぬと1人で抱え込んで悩んでしまうのですが、3クラスあるので、例えば横のつながりで、1年生であれば1年生のアスリートの先生方で知恵を出し合って、一人の生徒に対して協力し合う。そして1・2・3年の縦のつながりもしっかりとした上で、一人の生徒に対して、一人の生徒が辞めたいと言った時にはみんなで協力して、「続けた方がいいよ」、「辞めちゃダメだ」と取り組んでいく必要があるかなと思いますし、そのように努力していると思いますし、学校として対応する時はできるだけ多くの先生で対応していくということで、個人戦から団体戦へ言うことで、進路指導も生徒指導も団体戦で戦っていないとアスリートの指導は難しいというようなことです。

それから固定観念を持たない、柔軟に対応する。これも非常に大切なことだと思います。自分のやってきたことばかり、自分の常識とか、自分の感覚とかいう形で、「これが常識なんだ」といったところで通用しないことがいっぱいありますので、これからの生徒には柔軟に対応するということが必要だと思います。特に言葉の力の影響力、これが非常に大きくて、例えば伝ええない方がいい言葉、これが私はあると思うのです。「体育館から出て行け」とか「二度と来るな」とか「帰れ」「辞めてしまえ」とか、こういう部類の言葉は絶対辞めた方がいいと思います。今までであれば、自分の固定観念で、自分であれば、「辞めてしまえ」と言われれば「もう一度やらせてください」、「来なくていいよ」と言われれば「もう一回お願いします」と自分の常識からするとと言うと思うのですね。先生方が一生懸命、「帰れと言えれば帰るのか」、「辞めてしまえと言えれば辞めるのか」、「帰れと言えればもう一度やらせてくれと言うのが常識だろ」と言っても今の子どもにはダメです。ですからその辺を柔軟に対応するということです。いろいろ厄介になる問題があります。この結果、生徒が結果的に嫌になってしまった時に、「先生が出て行けって言ったから出て行ったんだ」「先生が帰れって言ったから帰った」「先生が辞めてしまえと言ったから辞めるんだ」と、必ずそうなるのです。こうなったらどうにもなりません。こういう言葉というのは指導の中で絶対に使わない方がいいと思います。

逆にどんどん使っている言葉というのがあります。「お前ならきっとできる」とか「お前なら日本一になれる」とかですね。どういう言葉でもいいと思いますが、その子にあった言葉というのは毎日見てたらわかると思うので、その子に適した言葉をいいタイミングで言ってあげるとするのが大事だと思います。この辺のポイントを押さえておけば、辞めたいといったことはほとんど無くなってくると思います。どんなに厳しい練習をしても、その日の帰る時に一言でいいから、「今日こういうことを言ったのは、

先生はこういう意味で言ったのだよ。明日も頑張ろう」という言葉で、また頑張れるのですが、若い人達というのはなかなかその言葉が言えないですし、それを言うとかんがえてしまうという考え方を持っていると思いますが、それは絶対にやらないとダメだと思います。このことはアスリートでも一般の生徒でもみんなそうだと思います。私は、言ってから家に帰って冷静になって、「ああ言っちゃった」とかなり経験したものですから、絶対に感情的になってその場限りのことがないように、普段からもしそのような場面になったら想定しておいて、当然頭に来たりするとそういう場面になりますので、そういう時にはこういう言葉を使うと実は普段から考えています。そのようなことが大事なかなと思います。

生徒達の希望を聞いていますと、将来教員になりたいとか指導者になりたいという生徒もたくさんいます。やはりいい先生というのは生徒に良い影響を与えるような、生徒の今後、将来教員になりたいとか、指導者になりたいといった時に手助けになるようなことが望ましいのではないかと思います。そのようなことをいつも頭に置いてやっていく必要があるかなと思います。

これからの課題は山積みです。いいことばかり話してきましたが、アスリートはそんな簡単なことではないです。アスリートの先生方を見ていますと、毎日が真剣勝負です。毎日朝から晩まで、何もない日がないというくらい先生方は苦勞されています。

最後に甲子園のことをお話しします。本校は今年甲子園に行かせていただいて、自分のやっていた競技で全国大会とか行っていますが、甲子園というのは素晴らしいところですし、すごいところだと思いました。校長の目標なんです、甲子園に行くか東大の合格者を出そうというようなことを言っていたのですが、結果的には甲子園が先になったのですが、とにかくやればできるということの中から、夢や目標を持ち続け諦めずに努力すれば夢は必ず実現するんだ

ということを生徒達が今年教えてくれました。これは本当に計り知れない、今まで私が経験した中でこれだけ盛り上がったことがないくらい学校全体を盛り上げてくださいました。生徒が今までよりも元気になって明るくなって、教職員にも夢と希望を与えてくれたかなというふうに思っています。ただ甲子園というのは何もかも初めての体験で、決まってから帰ってくるまでの2週間というのは、学校はもうそれが優先になってしまうような、何も手に付かないような、マスコミからの連絡も信じられないくらい多くて、大変なんだなという経験をさせてもらいました。なお、開会直後8月6日の試合だけは引かないでくれと言ったのですが、一番くじを引いてしまい、これもまた大変な経験をしまして、今回の関東の大会もまた一番くじを引きまして、また開会式直後の第1試合ということになりました。

その甲子園効果だとおもいますが、他のクラブも野球に負けないように、野球部を目指して、また野球部も他のクラブに負けないように、運動部も文化部も、そして進学の方も頑張ろうという形で、今、学校の方が盛り上がっているよ

うな気がします。今年は過去最高の、全国高校総体、監督を含めて75名8クラブが出場しました。大学実績も、東北大学に2年連続で合格したり、医学部医学科にも現役の合格者が出たり、ここ2・3年で大きく学校が変わってきております。

しかしながら、教育の一環としての部活動でするので、あくまでも勝利第一主義ではなくて、学校の教育の一環としての部活をとということをアスリートの先生方も忘れてはいけないというふうに思っています。

選手が一生懸命頑張ってくれたことに対して心の底から有り難うという感じに学校がなっております。

以上、大急ぎで話をさせていただきましたが、参考になったかどうか分かりませんが、先生方からまたいろいろな形でご指導いただければと思っております。本校のアスリートもいろいろな部分でまだ課題がたくさんありますし、勉強していかなければならない点がたくさんありますが、今後ともご指導いただければ有り難いと思います。本日は本当に有り難うございました。

研究発表Ⅲ

「夢は大きく 根は深く

【無学年制 医療倫理・医系小論文講座】」

樹徳中学高等学校(一貫校) 中学校校長 野 口 秀 樹

樹徳中学高等学校(一貫校) 教諭 福 田 肇



樹徳中学高等学校(一貫校)中学校校長

野 口 秀 樹

樹徳中学高等学校の紹介

最後のプログラムになりましたが、もう少しおつきあいをお願いします。

私の方からは、中学校の紹介をさせていただきます。

群馬県の桐生市という場所にあります。ここから車で30分から40分くらいです。地域的には少子高齢化が進んでいる町です。織物が産業の町です。今はその産業が衰えてきており、町としてはあまり元気がありません。そのようなところに所在しております。

明照学園という学園なのですが、私はその理事長をしており、もう33年経つのですが、高等学校は大正3年ですから、97年まもなく100年です。

高校の規模は現在1200名くらいです。かつての急増期の頃は1学年1000名以上のときもあり

ましたが、今は1学年450名程度です。

中学校は2001年、平成13年につくりました。これは私の念願でありました。中高一貫が教育改革で出ていたのが平成12年と思いますが、その動きを受け、平成13年に併設型の学校をつくりました。中高一貫教育というのは3種類ありまして、中等学校、併設型の中高一貫校、そして連携型の一貫校というものです。本校は併設型で、中学校から募集して、中学校から高校へは無試験です。高校は高校でまた生徒を募集します。そういうのを併設型の中高一貫校といいます。

しかし、本校は高校があり、中学校と高等学校は別の所在地なのです。歩いて2、3分くらいです。ですから中学校から高校に上がる生徒は本校とは別の校舎ですずっと6年間という形をとっています。高校は高校で募集をして、高校は別の場所にありますから、そこは3年間。

中学校から入った生徒は6年間ということですから、4年生から6年生については高校の所属になります。樹徳高等学校の中高一貫コースという名称にしています。

その子ども達が高校になってから接触するのは、例えば、朝礼ですとか、学校行事だけ。あとはずっと同一敷地にある一貫校の高校棟で授業をしています。

特徴のもう一つは仏教系の学校ということですから。色が仏教色です。後から発表する先生はクリスチャンなんですけれども、私達の方針の中

で彼は一生懸命やっています。

定員は60名の学校です。

当初、私が始めた時は、とにかく日本一の学校にしたいということで、先生達のコンセンサスを得て、対外的にも言い回りました、公式の場所で日本一の学校にすると。それで始めますと、だんだんトーンダウンしてきていますが、未だにそのような思いで取り組んでおります。

これから発表します小論文講座は、実は私からトップダウンで、ということではなく、本校は、教育理念に関わる場所は私は譲らないのですが、大体、3つくらいは私の方からおりていって、7つくらいあがってくるのです。

「それをやろうよ」。私はすぐ返事をしてしまっていてやってしまいます。ですから勇み足も多くて失敗も多いです。すぐにやってしまいます。そういう試みをやった中の1つで、これは定着をしています。

私は朝は5時40分に出勤をして、中学校と高等学校を開けて、仏様がいますから、お経をあげて、そして書類を見ます。8時15分から8時30分まで職員の朝礼があります。それが終わるともう中学にいないのです。ですからほとんどいない校長です。朝だけはいます。例えば昨日みたいな大会の時も、朝は5時40分には学校に行って仕事をして出掛けるといったところです。そのようなことで本校の職員はやりたいことをやっています。そしていいことを一杯やっています。そのような特徴が樹徳中学高等学校、一貫校の形であります。

それでは、これから発表をお聞きいただきますが、先生方のご参考になればいいなと思っております。

樹徳中学高等学校(一貫校) 教諭

福 田 肇

はじめに

お待たせいたしました。福田肇と申します。教科は国語ですが、縁あって、「医療倫理・医系小論文講座」を担当させていただいております。医療倫理・医系小論文講座というのは、読

んで字の如しで、医学部・医学科へ進学する生徒を中心に、医療倫理の基礎的なこと、医学部の受験に必要な小論文の技術とか考えることを教えることが中心なのですが、技術の習得とかだけではなく、ここにはいろいろ深い事情がございます。そのあたりの説明をさせていただきたいと思います。

1. 医療倫理・医系小論文講座の目的

(1) 筋道をたてて考え、その考えたことを形式にもとづいて表現する

まず、講座の目的ですが、詳しくどうやっていくかという話は、後ほどさせていただいたしまして、一つは、筋道を立てて考え、その考えたことを形式に基づいて表現するということです。この力は恐らく日本の中高生が一番弱いところではないかと、国語を教えていると痛感いたします。いろいろな事情があると思いますが、日本はあまりにもテクノロジーが進みすぎて、例えば中高生のほとんどが携帯電話を持っていますよね。それで携帯メールを手放さないで何だかんだとメールを打つ。そのメールというのは単語で済むわけですし、その携帯メールの相手はお友達、親ですから、一言二言で通じてしまうわけです。そこには筋道も何もあったものではなくて、結局、単語を1つ2つ並べれば通じてしまうという関係が築かれることになるわけです。しかし、実はそれは他者との直面ではないわけですね。他者というのは、基本的に他者との遭遇というのは自分が考えているように考えてくれないし、自分が何かを説明しても分かってくれない経験です。それが他者です。他者はある時は自分に対し、意地悪になるかも知れません。

しかし、今の中学生や高校生は、小学生はよく知らないが、恐らくそういう経験はあまりしていないのではないかと思います。ではこのような経験は一生しなくて済むのかというところではなく、他者に対して自分のことを説明したり、あるいは他者に対して自分の考えを示して説得しなければならないようなことは大人にな

ってから往々にしてあるわけですね。

技術的な面だけではなくて、論理的に、つまり筋道を立てて考えるということが、その子の人間的な成長に繋がるということになります。人間と動物何が一番違うかという言葉を持っているということですね。私が生徒に教える時は、言葉とか筋道ということをデジタルカメラの画素に例えます。最初の頃のデジタルカメラは画素が非常に少なかった。そのため写真を撮っても粗い写真というのか、ドットの浮き出たようなものしか撮れなかった。それが初期のデジカメだった。そのドットを細かくしていくと非常に鮮明で、写し取られた現実をそのまま再現できるわけです。私は言語とか論理はこういう画素のようなものだと考えています。つまり、筋道を立てて物事を考えるということが、結局、人間として精密にそして冷静に物事を考えることができるということに繋がるのではないかと、そういう配慮があります。

使われている先生もいらっしゃるかも知れませんが、「論理エンジン」というテキストがあります。論理エンジンは出口汪先生が開発された、画期的な教材なんです。出口先生のお話をうかがった時に、出口先生は今は東進ハイスクールという予備校の先生なんです。かつて大阪の方の高校の先生をなさっていたことがあったようです。その時に、荒れている生徒がいた。その生徒に話を聞く時に、筋道を立てて話すように促した。その子は、荒れていたというかキレていたのですが、それが嘘のように、こうやって整理して話せば何でもないんだねっていうことを経験したそうです。

やはり、筋道を立てて考えるということは大変大事なことだと思いますし、考えたことを形式に基づいて表現する。ということは、他者に対して私を示すということで、大変重要なことだと思います。

実は医系小論文の講座というのは、もちろん私立学校の使命としまして、難関学部、医学部は非常に難しいですが、そこへの実績を上げなければいけない。後で申しますが、樹徳中学校

は、近隣の医師の子女が大変多く入学します。そのようなことで医学部志望が多いということで、この講座を始めたこともあります。

(2) 医学部医学科・医療系学部学科への生徒の進学を実現する

この点については後でどのようなことをやっているかお話ししますが、テクニカルなこともやります。

(3) プレゼンテーション能力をたかめる

プレゼンテーション能力を高める。これは非常に特色がある教育としてご紹介できると思います。

樹徳中学校の生徒は1年生からコンピュータの勉強を始めます。そこでワード・エクセル・パワーポイントを勉強して、中学2年生で AED 講習とか福祉体験学習を行い、中学3年生からこの講座を受講できるということで連動しています。

実際に、生徒は、例えば授業で受動的に先生の話の聞いているだけでは、全然面白くない、面白い授業もありますが。それでは生徒は育たないと思います。自分で調査研究して、そしてそれをパワーポイントを使って、目の前で聞いてくれている友達に分かるように説明する。私はよく生徒に話しているが、理解するということは説明できるということだ、と。ですから、授業で、ちゃんと説明できないで単語だけで話すような子は、「君、ちょっと分かってないね」というふうに言います。

このプレゼンテーションというのは、中学3年生から受講できると申しましたが、実はこの10月の初めに、2人が「脳死」について、3人が「臓器移植」について発表いたしました。これは非常に素晴らしい発表でした。中学3年生でここまでできるんだと。5年生6年生（高校2・3年生）も食われていましたよね。しかもその後、質疑応答があったのですが、その質疑応答の時も中学3年生は、5・6年生の突っ込んだ質問に答えるわけです。単にネットの説明を貼り付け

たわけではなく自分で勉強したわけです。そのようなことをやらせています。

(4)少人数制中高一貫校の特色を活用する

まず、「筋道を立てて考え、その考え方を形式に基づいて表現する」ということですが、これは医師にとって不可欠な能力です。なぜかという、医師というのは、臨床医ですが、患者が目の前にいます。その患者に対しての説明の仕方によってその病気が治ったり治らなかったりするわけです。これは医師の方なら皆さん仰ることで、正確に考え（正確に考えないと治療の結果に関わります）、その考えたことを表現するというのは、やはり患者に表現するわけです。これは医師にとって不可欠なことです。

そして2番目に、この能力の獲得を徹底的に阻む日本の社会環境に対する挑戦、という大げさな言い方ですが、私は進路指導副主事もやっております、今は6年生の進学指導等もやっておりますが、例えば日本の私立大学の試験、センター試験、悪いとは申しませんが、所謂、4択のうちから1つ5択のうちから1つというような試験が主流になっています（国公立の二次試験は記述が主ですが）。その方が採点が楽です。例えば私立大学であると、1年に4回5回、A日程、B日程、C日程、あるいはF日程くらいまであったりして、いちいち記述で採点していたら大変ですので、コンピュータで採点できるようになっているわけですが、これは外国人などが聞くと驚きます。「そういう試験をして大学に入るんだ」と言います。生徒もクジを引くように、この中からこれを引けばいいんだ、正解を抜き出せばいいんだということですから、何か正解があるものだというふうに考えてしまう、そういう錯覚を持つてしまう生徒が多い。日常生活においても何か一つ正解があると。ところが、この医療倫理の問題ほど、所謂、一つの正解がないという世界はないです。例えば、臓器移植一つとるにしても、臓器移植というのは臓器を必要としている患者がいて、その患者は臓器を提供してもらえないと亡くなってしまう

うから、どんどん臓器移植を増やすべきだというふうに考えることが果たして正解でしょうか。そうではないですね。今度は提供する側、ドナーの問題が他方にはあるわけです。例えば脳死という所で死の線引きをした時に、子どもの場合だと、脳死と診断されても実は長期にわたって生きていたり、あるいは奇跡的に意識を回復することがあります。それを死んだと言われて治療を打ち切られたら、子ども達はどうなるのか。これはどちらかに賛成とか反対とはできないのです。ジレンマの中で徹底的に考え尽くすということが必要です。今の中学生高校生はこういう思考が全然できていない。ですから現代文もできないのです。

このことをやるのです。これができるようになるということが、私の挑戦であり、夢なのです。

先ほど申しあげましたように、医学部医学科、医療系学部への生徒の進学を実現するという。これはもちろん喫緊の課題で、タイトルにもなっていますが、「夢は大きく、根は深く」というのは、樹徳中学校の校歌の一節です。生徒は本当に大きな夢を持って入ってきます。その夢は単なる夢として終わってしまったただの妄想です。その夢に根を与えるということが大事なことです。その根を与えた上でないと夢というものは実現できません。そのプロセスの一翼をこの講座が担っているのかなと私は考えています。

それではどのような夢かと申しますと、先ほど申しあげましたように、本校の大きな特色だと思いますが、近隣地域の開業医、勤務医、医療関係者の子女が非常に多く入学します。彼らの多くは自分の親の仕事をするということを希望しています。ですから医学部医学科（看護系もありますが）への進学を多くの生徒が希望しているというのが私達の学校の大きな特色の一つではないかと思えます。医師の子女ではないが医師を目指す生徒もいます。この大きな夢を叶えさせてあげることは学校の使命です。それを叶えて（叶えるのは生徒が叶えるのですが）、

その大きな夢を彼らが叶えることを支援することが、学校の使命です。それによって、生徒達はこの学校に来てよかったというふうに思って卒業していくわけです。

2. 講座の内容

医学部医学科で出題される小論文の課題というのはどのようなものか。

2009年の群馬大学の医学部の推薦試験の問題です。「下線部 D について、医学研究の臓器提供の類似点および相違点を具体的にあげて120字以内で記入しなさい。」実はこれは英語で書いてあります。これを指導するには、英語の問題だから英語の先生に任せようというわけにはいかないのです。なぜかと申しますと、この問題に答えるためには、英語を理解するための英語力が必要です。群馬大学の医学部医学科の小論文は日本語で課題文が書かれたものと、英語で課題文が書かれたものと2種類あり、どちらも1時間半ですが、英語の課題文というのはA4版の紙にぎっしりと書いて4・5ページあって、さらにそれに対して、問題が問 A から問 F まで6問あって、それぞれの設問に対して、150字から200字で答えなければいけないのです。それだけでも相当な英語力を持っていなければいけない。週刊誌のごとく英語を読めるスピードがないと、問題を解いている時間がありません。英語力が必要なのはもちろんなのですが、実はこの問題は、アメリカの臓器移植について書かれた文章の1部ですが、そこに書かれている内容は何かというと、アメリカでは臓器移植のコーディネーターが脳死患者の家族に対して、暗示的・誘惑的な方法で臓器を手に入れようとするわけです。例えば、本文に書いてありますが、子どもが脳死患者としますと、「お宅のお子さんはこのままであればただ亡くなるだけです、臓器を提供すれば、あなたのお子さんは人助けのヒーローになるのですよ」と迫るわけです。それによって何が危うくされるかというと、**informed consent** です。そのような内容ですが、この問題に答えるのに、**informed consent** とか

臓器移植、それから知見の話も出てきますし、このようなことに対する基礎知識が必要です。それでは実際に、その知識があり英語が読めても、解答欄に150字から200字で解答を書くのですが、その書く時に形式に基づいて書くという力が必要なわけです。そうするとこの問題1つ解くのに、まず英語の力、倫理社会あるいは生物の知識、それから現代文の知識、この3つが必要です。非常に学際的な内容です。別の問題では、生物Ⅱの問題が必要です。つまり従来の授業の枠では扱えないのです。とするとこのような講座の存在意義が出てくるわけです。

実際教師の方も、このような問題を扱うとなると勉強しなければなりません。ですから、私ともう1人、北爪という社会科の教諭の2人で基本的にはやっておりますが、他の先生方の力を借りたり、他の先生方と相談しながら、それぞれの専門知識を持ち寄って生徒に教えることとなります。いずれにしても、教師のレベルアップというものがなくて、もちろんその中で生徒のレベルアップも必要です。

プレゼンテーション能力を高めるというのもこの講座の目的です。プレゼンテーション能力の育成というのはこの講座の売りかも知れません。学会発表と同じ形式をとります。つまり生徒達が調査研究したものをパワーポイントで映写しながらマイクを持って説明し、そして最後、残りの時間は、大体35名くらい中学3年生から6年生くらいが受講していますが、そこからいろいろな質問が飛び出すわけです。それに対して議論しなくてはならないわけです。説明した後引っ込むとは限りません。それに対して「それはおかしい」といって議論になってくる。これは学会発表とほとんど同じ形式です。実際に医師になると、科学系でも同じですが、そのようなところで発表する機会が多々あるわけですので、いい準備になるかなと思います。

実は同一テーマで2回やっています。第1回目は受講生のグループによる課せられたテーマについてのプレゼンテーションです。脳死・臓器移植もありますし、安楽死・尊厳死というのもの

ありますし、それから健康食品の歴史についてとかいろいろあります。最初の回は生徒が調査研究をしたのをプレゼンテーションします。次の週は同一テーマに関連した小論文入試の過去問題とかあるいはそのような文書を探してきてこちらの方で作問して小論文の課題にする。そのような形でやっています。

次に、少人数制の中高一貫教育の特色を活用するということです。私達の学校は1クラスが約30名くらいで2クラスで1学年です。学年によって違って1クラス20名で1学年40名ということもありましたが、大体1クラス20から30名で2クラスで1学年です。非常に人数が少ないわけです。ここで考えているのは、まず無学年制講座をとるというのはどういう意味があるかということです。これは縦割りするのですが、3年生にとってあるいは4年生にとっては実質的な飛び級です。例えばその中で自分でどんどん勉強を進めて、もっと先輩がやっているような勉強をしたいという子もいるわけです。その子はレベルの高い勉強はしていますが、それ以上のこともやりたいという子もいるわけです。そういう子はここに入ってくれると、6年生や5年生と一緒にかなり高いレベルのことをやるわけです。すると満足してくれるわけです。

少人数制の学校における難点というのがあります。それは何かというと、例えば人数が何百人もいるような高校ですと、難関大学、例えば東大行きたいとか一橋大学、早稲田大学、慶応大学に行きたいとかというような子ども達は何十人もいるわけです。そうすると難関校に行きたいという子ども達はお互い切磋琢磨、励まし合うということが出来ますが、1クラスが20名とか30名だと、難関校、難関学部に行きたいという子どもが相対的に少なくなるわけです。そうするとやはり孤独感というものを味わってしまうわけです。私はいつも、受験は団体戦だと言っています。孤立してしまうと良くないです。お互いに励まし合う子ども達がいないということになりますから。それを救うという意味もあります。無学年制講座によって志を同じくする

もの達が集う場所を提供するのがこの医系小論文講座だと思っています。6年生から3年生までみんな医学部医学科あるいは医療関係を目指すわけですね。お互い顔見知りになります。そうすると、先輩が後輩に教えたり、逆に後輩がすごい発表をして先輩を脅かしたり、そのようなことになります。先輩も医学部医学科に行くと、結構遊びに戻ってきてくれます（今年は7名入りました。人数が1学年60人程度ですから、もちろん浪人もいますけれども、結構画期的な数字かなと思っています。）。そしてこの講座に来ていろいろ教えてくれたり、ゲストコメンテーターをやってくれたりするわけです。そういうことで卒業後も先輩後輩で同じ志を持つものが集まって励まし合うという場が提供できるというところがいいかなと思っています。

講座の内容ですが、4月から12月の9ヶ月間が実施期間です。1月に約2回のペースです。2回ワンセットですからこのような形でやっています。時間は少し遅くて、17時50分から18時50分です。なぜかというと、実は私達の学校は7時限目までが通常授業で、そのあとホームルームをして掃除をして、そのあとに8時限目に補習があります。この補習というのが16時40分から17時40分までです。この講座は後からできたものですから8時限目には入れなくて、その後ということになりました。しかし、4年生から6年生まではせつせと出ています。3年生は18時30分には帰らないといけないので、出てきても途中で返すということになってしまっていて、やっといいいところになってきて帰すのは可哀想なんです。が、まだ年も若いのでそのような形にしています。

次頁の表が年間計画表です。

「肥満のメカニズム」とか。これは毎年少しずつ変わっています。毎年、informed consent を一番最初に持ってきていたのですが、何年も続けて受講してくれている子が多いので、毎年最初に informed consent ということになりますし、informed consent もいろいろ問題があり、医学の領域というのは日進月歩ですので、

informed consent 問題も年によって変わってきますし、発表者が違うという切り口も違うのですが、今年は informed consent はもう常識だよねということで、最初は「肥満のメカニ

ズム」から始まって、「医療倫理」とか「終末期医療」とか「社会保障論」というふうにやっています。第20回で終了というふうになっています。

医系小論文年間計画表				
回数	日にち	時間	担当者	内容
第1回	4/19 (火)	17:50～18:50	福田	「肥満のメカニズム」(データ解説) (群馬大学医学部医学科入試問題)
第2回	4/26 (火)	17:50～18:50	福田	演習・解説
第3回	5/ 9 (火)	17:50～18:50	北爪	「医療倫理」
第4回	5/16 (月)	17:50～18:50	北爪	演習・解説
第5回	6/ 6 (月)	17:50～18:50	福田	「終末期医療」(英文) (秋田大学医学部医学科入試問題)
第6回	6/13 (月)	17:50～18:50	福田	演習・解説
第7回	6/27 (月)	17:50～18:50	北爪	「社会保障論」>(医師不足の現況)
第8回	7/11 (月)	17:50～18:50	北爪	演習・解説
第9回	8/ 1 (月)	13:00～14:00	福田	「放射線についての認識の歴史」(英文) (東京医科歯科大学入試問題)
第10回	8/17 (水)	13:00～14:00	福田	演習・解説
第11回	9/ 5 (月)	17:50～18:50	北爪	「自由とは？」
第12回	9/12 (月)	17:50～18:50	北爪	演習・解説
第13回	10/ 3 (月)	17:50～18:50	福田	「脳死・臓器移植」
第14回	10/11 (月)	17:50～18:50	福田	演習・解説
第15回	10/17 (月)	17:50～18:50	北爪	「共同体とは？」
第16回	10/24 (月)	17:50～18:50	北爪	演習・解説
第17回	11/ 7 (月)	17:50～18:50	福田	「免疫系のしくみ」(日本語文) (群馬大学医学部医学科入試問題)
第18回	11/21 (月)	17:50～18:50	福田	演習・解説
第19回	12/ 5 (月)	17:50～18:50	北爪	「正義論・道徳論」
第20回	12/19 (月)	17:50～18:50	北爪	演習・解説

次に、どのように生徒に発表させるかという手順についてです。受講生は3年生から6年生で無学年制授業なんですけど、まず年度の初回に受講生でグループを組んでもらいます。少なすぎ多すぎずというところで、大体2・3名から多くても4・5名。それで、それぞれのテーマを担当してもらいます。テーマはこちらで決めることもありますし、生徒の方では是非これをやりたいということであれば、生徒の方のテーマでや

ってごらんということもあります。今年の中学3年生のグループは是非、「脳死・臓器移植」をやりたいということで任せました。非常にいい発表をしてくれました。担当グループのメンバーは大体1ヶ月くらい前から準備を始め、私か、北爪先生かの担当と相談しながら調査研究してパワーポイント資料を作る。それから配付資料も作ります。研究発表の当日は、受講生の前でパワーポイント資料を映写しながらプレゼンテ

ーションを行います。その後で先ほど申しましたように質疑応答に答えなければいけないので、今はネットから貼り付けたりしてパワーポイントはできますが、それでは全然だめで、先輩にこてんぱんにやっつけられてしまいますから、彼らも一生懸命考えるわけです。それで同じテーマで行われる第2回目の授業ではそのテーマに関連する小論文なり演習をするということです。この講座は8月1日、夏休みの登校日にも入れました。午後に行いましたが、5年生の生徒が「放射線についての認識の歴史」というテーマで発表しました。3.11以降、放射線の問題がマスコミ等に取り沙汰されていて懸念の材料になっていますが、たまたま東京医科歯科大学の英語の入試問題が、逆説的なタイトルですが、「健康のために放射線を飲もう」というテキストでした。実はこれは健康食品、100年前の健康食品と今の健康食品のありようについて比べた問題文ですが、100年前に放射性物質を含んだ水とか、あるいは放射線を発する器具が、健康食品や健康器具としてもはやされていた事実が書いてある英文です。それで、放射線は人間に対してどれくらいの、どのような影響を与えるのかとか、健康食品は今までどのように論じられてきたのか、あるいはどのような事故があったのか、そういう問題系を広げて生徒に振り分けて調べてもらったわけです。「100年前は、『天然素材』というキャッチコピーで、ラドンやラジウム入りのミネラルウォーターやラディエンドクリネーターという商品名の放射性健康器具が公然と売られ、人々は競って買っていたが、実は、『天然素材』というコピーであるやしい健康食品や健康器具を売る状況は、今でもたいして変わらないのではないか、」という内容です。プレゼンターは、5年生女子3人のグループです。発表の1月前くらいから彼女達は準備を始めました。まず英語の問題文ですから、手分けして訳して、最後に私が添削、手直しし、訳文の配布資料をつくりました。担当の3人は「健康食品の歴史を調べる人」、「放射線の人体に対する影響を調べる人」、「英語課題

文を要約して解説する人」に分かれ、それぞれパワーポイント資料を作成して映写しました。このときは夏休みということもあって（これはよくやるのですが、生徒達だけではなくて、外側からゲストコメンテーターというのを呼びます。これが結構いい刺激になります。私達の学校から医学部医学科に行っている生徒は結構多いものですから、連絡して、その日手が空いている人を呼んでくるわけです。）、本講座出身者で、群馬大学医学部医学科へ進学した卒業生と、東京農工大学大学院博士課程で環境倫理学を専攻する研究者、そして、法政大学文学部哲学科4年生で、卒業後は来年医学部医学科への進学を考えている大学生の3人を招待し、ゲストコメンテーターとして、それぞれの立場からのコメントをしてもらいました。結構いい刺激になります。

3 特別講演会・シンポジウム

また、私達の講座の大きな特徴としまして、1年に1回、2回の時もありますが、大きいのは1回ですが、特別講演会シンポジウムというものを行います。これは外部から現役の医師をお呼びしてレクチャーをしていただきますが、ただレクチャーをしていただくのではなくて、生徒が2から3人、シンポジストとして、本格的なシンポジウムを行います。シンポジストは、卒業生の医学生、在校生の受講生、大体2・3人につとめていただきます。医学部医学科に進学した卒業生、中学生、高校生を含めて行います。この講座が始まったのが2008年4月からで、今年で4年目になりますが、最初の年は準備不足でできなかったのですが、2009年からこのような形でやっています。最初の年は磯村大先生という精神科医で、この人は中学生の時に先生とうまくいなくて内申書を書いてやらないと言われて、だったらいよと言って高校に行かず、大検を受けて、模試も何も受けず、東京大学の医学部を1回で受かってドラマにもなった人です。去年は萩原優騎先生で、社会学者ですが医療倫理とか技術者倫理というのが専攻なので呼びま

した。タイトルは難しいですが、生徒達には、非常に良く分かる話をしていただきました。今年は自治医科大学の松本卓也先生、この先生も精神科医ですが、非常に興味深い話でした。3人とも生徒達の今までの先入観とか常識を完全に覆すような話です。それが面白くて仕方ないのですが。医師というのは常識とか先入観でものを見てはダメですよ。その場で柔軟に症状と取り組みあって、もしかしてこれは今までの常識ではこうだけれどもこうかもしれない、こうやったら治るかもしれないとか、実はこれはこれが原因じゃないかとか、そういう柔軟性が必要です。わざわざそういう話をしてくれる人を選んで呼んでいます。

時間が少ししかありませんが、少し映像の方を見ていただきます。

—ビデオ上映—

(2011年度シンポジウム)

このような感じで、シンポジウムが非常に活発に今年も行われたわけです。

特別講演会シンポジウムの意義ですが、先ほども申しあげましたように、良く言えば、素朴な無垢な信念を生徒は持っています。人の命を助けたいから医師になるとか。それはそれで立派なのですが、悪く言えば、若くて経験が無いこともあるのですが、しばしば先入観、偏見というものを持ってしまう。それを揺るがすことがこの講座の使命です。松本先生は講演中で、そもそも治すとか治るといふことの見方というか、治すといふことの概念が時代や民族や社会によって全然違うという話をしてくださいました。それは生徒は非常にびっくりしていました。ですから医師になるものは、既成の価値や常識的な世界観の中に安住してはいけないということで、私は医療倫理をこう考えています。これを生徒にも教えるというよりも、一緒に考えていくという姿勢をとります。これは正解がありませんから、先ほど申しあげたように、5択の中から1つを選んで正解だというよう

な、今の日本の試験制度に対する、過激な言い方をすれば挑戦です。つまり、何か正解があるよ、例えば、脳死・臓器移植とか安楽死はこう考えたらいいいんだよ、ではないのです。そういうことは教えていません。

4 今後の課題

今後の課題ということでお話しいたします。

これも実験的な授業ですので、いろいろな課題があります。1つは、この講座には名前が、医療倫理・医系小論文講座となっていますから、主に医師を目指す生徒達が入ってきています。医師を目指す生徒が多いのでいいのですが、しかし、医師を目指さない生徒にもどんどん入ってきて欲しいと思っています。つまり、中高一貫校を有効に活用できるかなと思いますが、中学生から高校生をまたいで登録できるのです。やはり生徒は自分で調べて、それをパワーポイントにして、友達の前で発表するという経験はとても貴重だと思っています。単に黒板の方を見て、先生の話を受動的に聞いているというのは、あまり面白くないのだろうと、特に中学生はパワーポイントとかを教えると面白がるのです。写真を貼り付けたり音を出せたりします。しかもそれを映写して、友達からいろいろな意見が聞けます。これを中学校の時から、もっと体系的にみんなができるようにしたら、もっといい結果が出るのではないかと思います。

第二ですが、この講座は時間が大変遅いです。部活動がありますし、なかなか出たり出られなかったりということがあります。特に中学生。しかし、4年生になれば登録して毎回毎回来てくれますが、やはり中学生にたくさん聞いて欲しいのです。そうするとこの講座を第8時限目の補習、16時40分から17時40分の正規の補習の中に取り込むとか、あるいは土曜日の補習の中に組み込むという形で、他の補習も全部体系化した形で、もう一度この位置付けを考え直すというのが課題です。

第三に、私達の学校ではメディアセンターと

呼んでいます、いわゆる図書室です。その図書室に医学コーナーというのを作りたいのです。医師になりたいという生徒も多いし、医療系に行きたいという生徒も多いですから、その書架の中にいろいろな医学系の中高生向けの本とか、「ブラックジャックによろしく」という医学系のシリアスな漫画もありますので、そういうものを置きたいです。それは学校の方に買っていただきましたけれども。

第四ですが、本講座は今まで医師や医学生、研究者をお呼びして貴重なお話をさせていただきました。本当に貴重な話です。それをそこだけの話で終わらせたくないと感じています。他の中学生や高校生にも是非その話を聞いて欲しかったし、それを何らかの形で出版したいなと思っています。

それから、中学3年生とかは、やる気、informed consent にしても何にしても議論したい、そして自分達の学校の中だけではなくて、他の学校で議論したいと言っている生徒もたくさんいます。ですから、他校の生徒を呼んだり、あるいは他校に出掛けて行って、もっと大々的な学校間のシンポジウムを開いて、例えば、脳死・臓器移植でもいいですし、安楽死・尊厳死でもいいですから、そういうのをやってみたい、来年やってみようかなという気もいたしております。

結局、私はこう考えています。

私学はやはり、公立学校と違って、経営という面でデリケートなところがありますから、近隣、地域の目とか、地域からの評価というものを第一に考えます。勿論そうなのですが、しかし、それは少し受動的過ぎはしないかと、生意気なことを申しあげるようですけど、そのような気がします。むしろ、私は、地域の文化創出体となっていきたいと、つまり、ここではないとやっていない、文化的なこと、これはスポーツでもそうなのですが、私はこの医療倫理・医系小論文というのは、その一つの試みとして自分の中では考えています。桐生というのは、最初、校長が申しましたとおり、過疎化が進んでいる田舎という語弊がありますが、その中で生徒達が informed consent や脳死・臓器移植のプレゼンテーション、東京でやっている学会のようなものを子どもながらですが、やっているわけです。そういうことで、逆にこちらから地域に刺激を与えていきたい。そして、是非、樹徳中学校のホームページをご覧になっていただきたいのですが、そこには生徒達が行ったプレゼンテーションの内容が書いてあります。是非ご覧になって生徒達がどんなことをやって、そんなふうに考えているのかということを知っていただけたなと思います。

長い時間どうもありがとうございました。



特色教育部会

総 括

学校法人白根開善学校 理事長・学園長 佐々木 克 典

昨日の全体集会に引き続き、特色教育部会と長時間にわたって研修にご参加いただきお疲れ様でした。心配しておりましたが、途中でお帰りになる先生方も少なく最後までお付き合いいただけましたこと、心から感謝申しあげます。

基調講演の「建学の精神」(原点に立ち返る。)では、ただ、漠然と教育の現場で子供達に向き合うのではなく、先生方の心の中でそれぞれの学校の「建学の精神」、「教育理念」を絶えず吟味すること、そして教育現場において実践すること、その思いが学校全体で共有されることが私学としての「特色ある教育」にとって大切なこと、日本の教育をリードしてきた一つひとつの私立学校が特色ある教育に取り組むことが文部科学省主導ではなく日本の教育を変えていく大きな原動力になるものとの私の思いを述べさせていただきました。

研究発表では白根開善学校の「山の小さな学校の取り組み」、高崎健康福祉大学高崎高等学校の「アスリートコースの指導について」、樹徳中学高等学校「夢は大きく根は深く【無学年制医療倫理・医系小論文講座】」とそれぞれ特色ある学校づくりの具体的な取り組みについて発表させていただきました。それぞれの学校には共通する学科等が設置されているわけではありませんが、取り組みの方向性や指導方針の根本には「一人ひとりの子供達」の夢や希望、目標に向かって積極的に関わろうとする学校の「意志」を感じることができました。

二日間にわたって開催された大会はこれで終わりになりますが、今回の群馬大会が先生方のそれぞれの学校での特色ある教育に、又、日々

の教育活動の一助になれば幸いです。

最後に全国からお集まりいただいた先生方、研究発表を担当してくださった先生方、そして裏方として部会の運営に携わってくださった多くの先生方に心よりの感謝を申しあげます。準備等に不十分な点もあったかと思えます。運営委員長としての力不足を感じておりますが、私学研修福祉会及び私学教育研究所の皆様、全国の私学関係者の皆様のご協力で群馬大会が無事終了いたしましたことに感謝申し上げ、閉会のご挨拶といたします。

来年度は「東北大震災」で大きな被害を受けた岩手県で開催されます。厳しい状況の中でも「私立学校」として子供達への熱い思いを感じるご挨拶がございました。同じ私学人としてお見舞いを申し上げると共に心からのエールを送らせていただきます。

岩手大会には是非、参加させていただきたいと思っております。大会での研修はもちろんですが、逆境の中で奮闘されている先生方のお姿・思いに触れ、お力を分けていただきに参ります。

参加者数

総 参 加 者 数	437名

部 会 別 参 加 者 数	私 学 経 営 部 会	162名
	教 育 課 程 部 会	73名
	生 徒 指 導 部 会	54名
	進 路 指 導 部 会	37名
	国 際 理 解 教 育 部 会	32名
	特 色 教 育 部 会	35名
	全 体 集 会 の み 他	42名

都道府県別参加者数

都道府県名	参加申込数	都道府県名	参加申込数	都道府県名	参加申込数
北海道	13名	石 川	—	岡 山	2名
青 森	1名	福 井	—	広 島	12名
岩 手	21名	山 梨	2名	山 口	2名
宮 城	2名	長 野	1名	徳 島	—
秋 田	2名	岐 阜	4名	香 川	1名
山 形	4名	静 岡	9名	愛 媛	1名
福 島	10名	愛 知	15名	高 知	2名
新 潟	6名	三 重	3名	福 岡	8名
茨 城	16名	滋 賀	2名	佐 賀	2名
栃 木	25名	京 都	8名	長 崎	10名
群 馬	71名	大 阪	18名	熊 本	3名
埼 玉	18名	兵 庫	9名	大 分	2名
千 葉	25名	奈 良	7名	宮 崎	4名
神奈川	26名	和歌山	3名	鹿児島	1名
東 京	50名	鳥 取	5名	沖 縄	1名
富 山	—	島 根	10名		
地 区 内 (関 東 地 区)					181名
地 区 外 (上 記 以 外 の 地 区)					256名

開催地・研究目標一覧

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
1	東京都	宝女学園中	昭和27年4月27日	185
2	東京都	仙聖学院中	昭和28年11月20日	235
3	東京都	学聖稲洋	昭和29年11月20日	283
4	東京都	早立明	昭和30年11月11日	402
5	東京都	命治女学	昭和31年11月9日	995
6	東京都	山治女学	昭和32年11月22日	679
7	東京都	相法北日	昭和33年10月3日	857
8	東京都	海海道本	昭和34年11月20日	846
9	東京都	北日神進	昭和35年8月20日	958
10	東京都	神進学	昭和36年11月22日	954
11	東京都	奈女学	昭和37年11月22日	841
12	東京都	徳女子高	昭和38年11月12日	993
13	東京都	習学	昭和39年11月20日	612
14	東京都	村学大	昭和40年11月21日	1100
15	東京都	明星学	昭和41年11月3日	750
16	東京都	北女学	昭和42年11月5日	1172
17	東京都	化女学	昭和43年11月22日	1074
18	東京都	愛新学	昭和44年11月15日	2294
19	東京都	武庫川学	昭和45年11月11日	382
20	東京都	昭和女学	昭和46年11月11日	2513
21	東京都	和岡女学	昭和47年11月23日	764
22	東京都	静帆市	昭和49年11月7日	926
23	東京都	帆島市	昭和50年10月2日	978
24	東京都	代田女学	昭和51年10月26日	1216
25	東京都	千福岡	昭和52年11月16日	1054
26	東京都	福玉市	昭和53年11月7日	1714
27	東京都	埼白石	昭和54年11月20日	1043
28	東京都	台百合学	昭和55年10月22日	1533
29	東京都	KBS京	昭和56年11月12日	1923
30	東京都	学習院	昭和57年11月17日	1370
31	東京都	金井市	昭和58年10月26日	992
32	東京都	帆口市	昭和59年9月26日	1040
33	東京都	山口市	昭和60年10月31日	1210
34	東京都	福岡市	昭和61年11月12日	1696
35	東京都	千葉県	昭和62年11月11日	1867
36	東京都	新大津	昭和63年10月19日	1651
37	東京都	阪国交	平成元年10月25日	2530
38	東京都	習知院	平成2年10月24日	1773
39	東京都	愛知勤	平成3年10月23日	1473
40	東京都	帆ガ一	平成4年9月30日	1123
41	東京都	岡シフ	平成5年10月27日	1306
42	東京都	熊本市	平成6年10月26日	1170
43	東京都	国立横	平成7年10月25日	2134
44	東京都	米沢女	平成8年10月16日	829
45	東京都	京都会	平成9年11月12日	1222
46	東京都	東国第	平成10年11月4日	1422
47	東京都	静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)	平成11年11月10日	1042
48	東京都	札幌ガ一	平成12年10月4日	862
49	東京都	徳島文理	平成13年11月15日	827
50	東京都	宮崎観光	平成14年11月6日	928
51	東京都	水戸市・土浦市	平成15年10月29日	1590
52	東京都	福山ホテル	平成16年10月28日	774
53	東京都	神戸ポートピアホテル	平成17年11月10日	1383
54	東京都	新高輪プリンスホテル	平成18年11月9日	1354
55	東京都	石川立音楽堂	平成19年10月25日	791
56	東京都	札幌ガ一	平成20年10月9日	722
57	東京都	島根県民	平成21年10月22日	505
58	東京都	ウインズ佐世保	平成22年10月14日	621
59	東京都	群馬音楽	平成23年10月27日	437

回数	研 究 目 標
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討
9	私学教育の将来と教育課程改訂
10	中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議
11	日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて―
12	私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう
13	中等教育革新のために
14	私学における教育はいかにしたらその実効を上げることが出来るか
15	私学教育の自由とその限界
16	私学教育の特性を発揮し、その内容の質的転換を図る
17	魅力ある私学中高教育の推進のために
18	教育の現代化に適応する私学のあり方
19	新教育課程の私学教育における展開
20	1970年代の私学教育の展開を如何にすべきか
21	1970年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践―
22	激動期における私学教育の原点を求めて
23	昭和50年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる―
24	創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために―
25	教育の転換期に立つて私学教育を考える―新教育課程をめぐる今日の課題―
26	新教育課程への移行と実践―私学教育の独自性と充実をはかる―
27	新教育課程実践の道―建学の精神と教師の役割―
28	私学の使命と特色教育―新教育課程の展開―
29	今日の中等教育における私学の役割
30	より豊かな私学教育の創造を
31	次代を担う私学教育の独自性と公共性
32	次代を担う私学教育の充実と発展
33	明日をひらく私学教育―私学の原点に立つて―
34	豊かな私学教育の展開
35	国際化と近代化を志向する私学教育の発展
36	時代に対応する魅力ある私学教育を求めて
37	21世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて
38	社会の期待に応える私学教育の推進
39	豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進
40	新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして
41	たしかな私学教育をめざして
42	活力ある私学のあり方を探る
43	21世紀に向かって躍進する私学教育
44	教育改造への試み
45	新しい時代を拓く私学教育の創造と発展
46	民間活力としての私学教育を
47	21世紀の私学教育の充実を目指して
48	生徒と教師のロマンを実現する私学教育
49	新時代の私学教育―中国・四国からの発信―
50	感性豊かな人間を育てる私学教育
51	明日の私学教育を求めて―伝統と創造―
52	特色ある私学教育を求めて―建学の精神と国際化―
53	魅力ある私学教育の創造を目指して
54	未来を担う人材育成を私学教育
55	特色ある私学教育の創造
56	時代を見すえ、未来を拓く私学教育
57	これからの人材育成をめざして―悠久の地から私学教育の未来を考える
58	時代を創造する人材の育成をめざして ―私学教育の挑戦―
58	日本の未来を拓く私学教育

編 集 後 記

第59回全国私学教育研究集会群馬大会が無事にそして成功裡に終了し、安堵いたしておりましたところ、研究集録の編集という大事が残っておりました。「熱し易く冷めやすい」と言う群馬県人気質（特に私は強い性行）を自戒しながら、10月27日全体集会、28日の各部会を思い出しております。

群馬担当の話を伺ったのが平成21年末でありました。群馬の私学12校で全国大会の開催ができるのだろうか心配しながら、過去の大会記録を繙くと、本県は受けたことがない。すべて初めての経験でした。大会メインテーマを「日本の未来を拓く私学教育」と定め、前年の長崎大会には30名近い関係者を送り込み、実地見聞。そのスケールの大きさに驚き、不安がよぎりました。しかし皆で知恵を絞りました。足らざることから群馬の実情に先ず目を向けよう…着眼点を換えるといろいろ見えてきました。

群馬県の特性を全国の先生方に積極的に発信し、知っていただきたく機会としたい。戦後の荒廃期、県民に音楽の香りを届けた先人の活動。「ここに泉あり」の映画で紹介された群馬交響楽団の生演奏と高崎音楽センターホールの使用もそうした考えからでした。

群馬の私学12校、普段はあまり意識しませんでした。改めて各校を眺めると、それぞれが建学の精神を体して、特色ある教育と個性的な校風を持っております。歴史の風雪に耐え、大地に根を張った私立学校。各部会もテーマに沿った素晴らしい実践発表ができたのではと思っております。

いずれにしても、ご参加いただきました全国の先生方のご協力の賜と感謝いたしております。

また大会運営を通じて思いがけない収穫も多々ありました。それは県内はもとより全国の先生方とも和気藹々の交流ができ、良き刺激となり、互いに研鑽を深める事ができたことです。

この研究集録をまとめるにあたりまして、各部会担当の先生方には誠にお世話になりました。心より御礼申し上げます。

結びに、この「群馬大会」の成功にお力添えを戴きました関係各位に深甚なる感謝の意を表し、御礼申し上げます。ありがとうございました。

第59回全国私学教育研究集会群馬大会

全体集会運営委員長 野 口 秀 樹

（樹徳中学校 理事長・校長）

**平成23年度
第59回 全国私学教育研究集会 群馬大会
研究集録**

印 刷 平成24年3月

発 行 平成24年3月

発行人 財団法人日本私学教育研究所

所 長 中 川 武 夫

発行所 財団法人日本私学教育研究所

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目3番地8 市ヶ谷UNビル6階

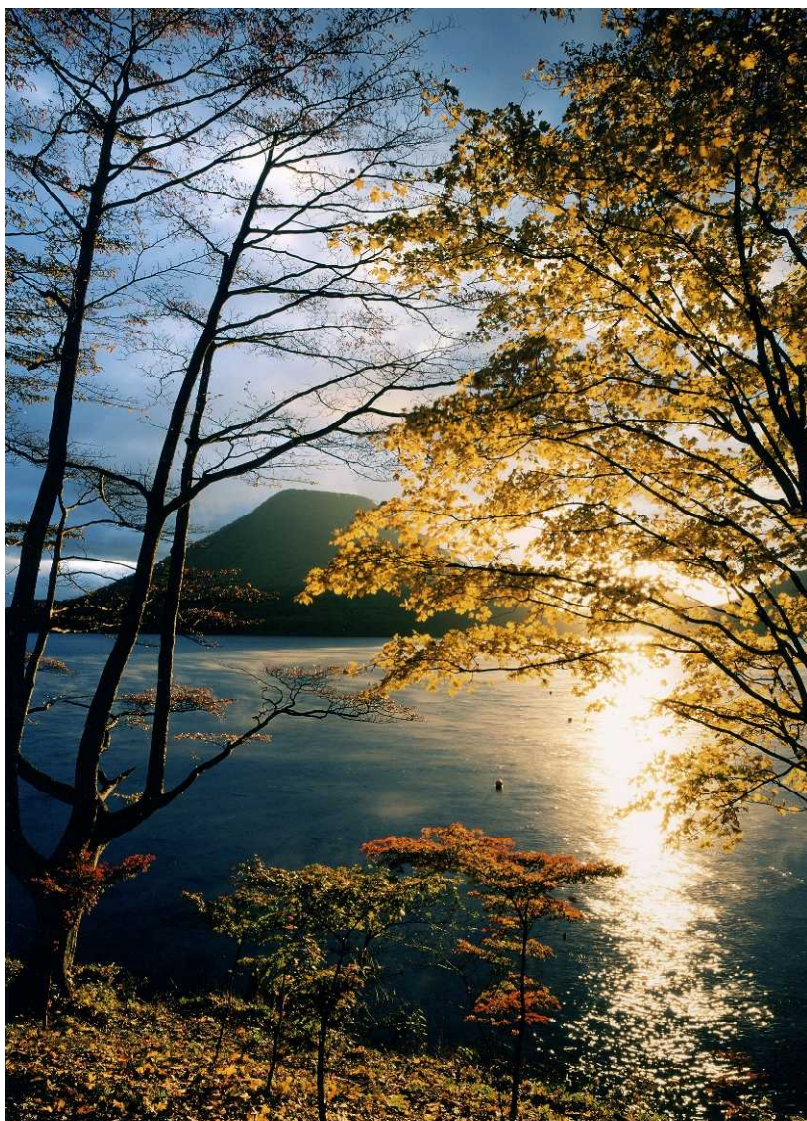
電話 (03)3222-1621

編 集 財団法人日本私学教育研究所

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目3番地8 市ヶ谷UNビル6階

電話 (03)3222-1621

この報告の経費の一部は、日本私立学校振興・共済事業団
からの助成金でまかなわれています。



主 催	財団法人私学研修福祉会
実 施	関東地区私立中学高等学校協議会
	群馬県私立中学高等学校協会
後 援	群馬県
	高崎市
	日本私立中学高等学校連合会
協 力	財団法人日本私学教育研究所

